

---

# 越後の虎

立道智之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

越後の虎

### 【Nコード】

N3413I

### 【作者名】

立道智之

### 【あらすじ】

戦国時代最強と謳われ、恐れられながらも、私欲からの領土欲を持たず、節目を重んじ、正義を貫き、妻帯すらせず、生涯独身を貫いた希有の武将、上杉謙信。しかし残された手紙は気遣いの利いた美しい文筆で書かれ、恋記物や恋歌を詠み、色艶やかな着物を残し、徳川家の歴史史料に大虫（婦人病）で死すと記されるなど謎多き武将でもあります。この作品は史実を基本に女性説のある謙信公を女性化して書いてみた作品です。

## 序章

永禄4年（1561年）9月9日 信濃国、深夜

甲斐軍別働隊1万2000が高坂弾正 馬場信春に率いられて海津城を密かに出発していた。

彼らが目指すは長尾景虎（後の上杉謙信）率いる越後軍が立て籠もる妻女山である。

啄木鳥がくちばしで虫の潜む木を叩き、音に驚いて出てきた獲物を捕らえるように

別働隊で妻女山から越後軍を八幡平に誘き出し 待ち構える本隊と挟撃する作戦である。

軍師、山本勘助と馬場信春によって提案されたと言われる啄木鳥戦法である。

弾正たちを見送ってから間もなく 武田信玄自らも甲斐軍本隊8000を率いて八幡平に布陣すべく海津城を密かに出発していった。

一方の景虎率いる越後軍は濃霧に紛れて物音を立てないよう千曲川を密かに渡っていた。

江戸時代の学者 頼山陽の「鞭声肅々夜河を渡る」（べんせいしゅくしゅく、よるかわをわたる）で有名な場面である。

景虎は海津城の炊煙がいつになく多いことから信玄の甲斐軍の動きを事前に察知し 妻女山を密かに降りて千曲川を渡り対岸の八幡原を目指していた。

妻女山には布陣を偽装するため火炊きが少数残り 武田の別働隊の足止めに甘粕景持隊1000を渡川地点に配置し 自ら率いる残り1万2000で八幡平に向かった。

翌朝午前8時頃 八幡平の濃霧がゆっくりと流れ出したとき 甲斐

軍本隊は度肝を抜かれた。  
妻女山にいるはずの越後軍が目の前に突如現れたからである。  
越後軍は猛将 柿崎景家を先陣に車懸かりの布陣で甲斐軍に猛然と襲い掛かってきた。  
両軍膨大な犠牲を払って戦われた 歴史上まれに見る死闘 第4次川中島合戦の火蓋が切られようとしていた。  
越後と甲斐の猛虎のぶつかり合いである。

甲斐軍も鶴翼の陣で必死に応戦するが信玄の弟、信繁 軍師、山本勘助 諸角虎定 など諸将が相次ぎ討たれ戦況は混乱していた。

大乱戦の最中 武田の本陣に一騎の騎馬武者が単騎で猛然と突っ込んできた。

行人包みをまとった強靱な武者であった。  
なんと長尾景虎自ら名馬 放生月毛ほうせいづきげに跨ぎ 名刀小豆長光を光らせ武田信玄目指して突っ込んだのである。

景虎は総髪獅子噛前立兜をかぶり 悠然と構える信玄に 電光石火の如く近づくと 小豆長光を渾身の力を込めて信玄に振り下ろした。

「信玄！覚悟！」  
「むっ！」

信玄の軍配団扇が長尾景虎の小豆長光をがっしりと受け止めた・・世に名高い 川中島合戦の景虎・信玄の一騎討ちである・・

しかし この長尾景虎 後の上杉謙信公は実は女性であったという説が伝承などで数々語り継がれている。

この作品は彼が実は女性だった・・ という説で彼の史実に合わせて書かれた作品である旨は皆様のご了承願いたい。

慶長6年（1601年）の冬

会津若松の澄み切った青空の下で作業は順調に進んでいた。

「気をつけてな・・・ゆっくりゆっくり・・・丁重にな・・・」

使用人たちは慎重に地中から甕を掘り出す作業をしていた。

会津藩士たちが遠巻きに興味深く作業を眺める中

足腰のしつかりした目つきの鋭い老人が作業を黙って見つめている。

甕は地中からゆっくり引き上げられた後、仮置きの上の台の上に丁寧に下ろされた。

すぐに使用人たちは付着した土を刷毛で落とし始めた。

遠巻きに眺めていた会津藩士たちの会話が老人の耳にも聞こえてきた。

「謙信公も大変じゃのう・・・」

「墓に入ってもゆっくりできんとは・・・」

「2年ほど前に越後からここに改葬されたばかりじゃろ？」

「何でも越後の堀殿が謙信公が傍らにおられては恐れ多いって持ってきたのに・・・」

「それが今度は米沢行きだと・・・」

「米沢？上杉家の新しい転封先か・・・」

「まあ、お取り潰しにならんかっただけでも・・・」

「しっ！」

「・・・」

老人は黙って聞こえぬ振りをしていた。

目を閉じて黙って昔日の日々を思い出していたようであった。

しばらくして

「千坂様・・・」

千坂景親はゆつくりと目を開いた。

「準備が出来やした・・・」

使用人が遠慮がちに千坂に声をかけた。

甕は2年前改葬したばかりとあって 大して汚れておらず すぐに綺麗になった。

「うむ・・・」

甕はゆつくりと丁重に籠に載せられた。

使用人が紅い花を持ってきた。

甕の側には紅い椿の花がそつと景親の手によって置かれた。

景親と使用人たちは甕を中心として籠の周りに膝まずいた。

「お屋形さま・・・」

「景勝様 兼続様 仙桃院様がお待ちしております、お休みのところを至極恐縮ではありますが、この景親が新しい越後までご案内いたします・・・」

一行は会津若松を静かに出発した。

天文13年（1544）は戦国時代も真最中であつた、種子島に火縄銃が日本に始めて伝来した頃である。

そんな中 越後の守護代 長尾家の居城の春日山城のふもとにある林泉寺は外界の不穏な空気とは切り離されていた。

決して広くはないが長尾家の菩提寺だけあつて手入れが行き届き鮮やかな椿などの花々が咲く小綺麗な寺院であつた。長尾虎千代は7歳の時にこの寺で預けられ、以来平凡ではあるが騒がしい外界とは切り離され静かな日々を送っていた。

本堂の境内内で初老の僧侶と40代手前くらいの侍が話をしていた。僧侶は林泉寺住職 天室光育である、虎千代の教育係である。虎千代には文字や作法などを主に教え虎千代の生き方 考え方に大きな影響を与えた人物である。

侍は金津新兵衛 虎千代の後見人である。虎千代の父 長尾為景の代から仕えた忠臣で、新兵衛は虎千代幼少の頃から様々な身の回りの世話をしてきた人物である。  
虎千代にとってもまさに育ての親で心が許せる人物であった。

新兵衛は世間話の後しばらくして言い出しにくそうに話を始めた。

「和尚・・・ 実は ついに 虎千代様の嫁入りの話が晴景様より参りまして・・・」

新兵衛は少し困った顔のような表情を浮かべながら寂しそうに言った。

「さようでございますか・・・」  
和尚も残念そうに言った。

嫁入りの話といっても近世の結婚と違って本人達の意味などは尊重されない、単なる道具としての結婚、政略結婚で、戦などで断交する場合は捨て駒にされ否応なしに辞世の句を読まされることもあった。

「・・・坊主が政治に口を挟むのは不愉快かもしれんが・・・何か決まったのかな？」

天室光育はにこやかに しかし威厳をもって新兵衛に尋ねた

「いや・・・めっそうもない・・・それどころか相手はつきりしてないのです・・・」

「・・・相手が決まっていけないのに・・・？・・・失礼な言い回しじやろうが・・・守護代様らしい・・・」

「・・・晴景様の御命令ですので仕方がないのですが・・・全く・・・」  
新兵衛も苦々しく答えた。

長尾晴景は越後の守護代で虎千代の兄である。越後の権力者ということに一応はなっていたが越後の政情はお世辞にも安定しているとは言いがたい状況であった。それが彼の越後国人衆からの下された評価であった。

新兵衛は虎千代の春日山城行きにかねてから反対していた。

越後の政情は相変わらず不安定で何が起こってもおかしくない状況であった、また新兵衛にも虎千代は自分が守ってここまで育ててきたという自負があった。

「不穏な動きの噂があり、今 嫁に出すのは非常に危険だと思いついて・・・で、無理を言って恐縮ですが 私と虎千代様と一緒に和尚にも春日山城の晴景様に事情を話して考え直してもらおうかと思いついて・・・」

新兵衛は本音を語った。

「なるほど・・・」

天室光育は静かにうなずいた。

このような物言いは守護代の晴景の癪に触る可能性があったが虎千代をなんとかしたい一心と 新兵衛にも自分は晴景 虎千代の実父の長尾為景依頼の長尾家の古参の重臣としての自負があり今回は黙っているつもりはなかった。

「ところで虎千代様にはお話はされたのかな・・・？」

「これからです・・・出来れば和尚にも一緒に・・・」

「分かりました・・・」

天室光育と 新兵衛は虎千代のいる小さな離れ間に向かった。

障子越しの暖かな日差しを浴びながら虎千代は絵巻物を読んでいた。虎千代は源氏物語や平家物語など鎌倉平安時代の書物が好みだった。琵琶が隅にそつと置かれ お香が静かに焚かれ空気を和ませていた、

「失礼いたします・・・」



新兵衛と天室光育がゆつくりと入ってきた、

「ご立派になられましたな・・・為景様をご覧になられればさぞかし喜ばれましたでしょうに・・・」

新兵衛のいつもの決まり言であった。

虎千代はにこりと笑った。

虎千代は15歳になっていた、少し華奢だがすらりとした越後美人に成長した。

新兵衛は世間話を少しした後 本題に入ることにした。

「実は・・・晴景様からのご命令で・・・お城に戻ってほしいとのことでございます・・・」

虎千代にとっては いつかは来る話と覚悟はしていたことではあったが いざ実際に言われるとなんととも言えない感じがした。

「御相手は・・・？」

「お城にて晴景様自らお答えすることとまだ何も聞いていないのですが・・・」

新兵衛が困ったような顔で答えた。

「噂では揚北衆やら甲斐の武田やらが出ているようです・・・」

揚北衆は越後の北部に勢力基盤を持ち 元々独立の気運が強く為景時代から揉め事が絶えなかったが 晴景の代になってからはますます勝手に振舞うようになっていた。また越後の南に位置する甲斐の武田は戦上手で近年急激に力を増し、信濃を脅かし続けていた。越後の安全のためにも同盟は重要であった。

「・・・」

虎千代は黙っていた。

新兵衛は続けた。

「揚北衆に嫁ぎに行くとしてもその件で連中は、以前守護の上杉家の跡継ぎ問題のときにももめたように、また互いの縄張り争いを兼ねて戦ごを始めるかもしれませんが、揚北に行く場合も我々に反抗的な黒田秀忠の領土を通らないといけません、甲斐に行くにして

も紛争中の信濃を通る必要がありこれでは命がいくつあっても足りません。そこで春日山城で晴景様に面会したときこの旨お話して晴景様にも考えを改めてもらおうかと・・・」

「そこでなんじゃが・・・」

天室光育が割り込むように言った。

「3人で晴景様に掛け合ってみようと思うのじゃが・・・」

虎千代は黙って聞いていた。

「あの方は気弱なところがあるので3人がかりで言えば考えが変わりますでしょう・・・」

新兵衛も続いた。

虎千代はしばらく黙っていた。

本音では嫁に行くのは嫌だった。

本物の武者など父親の葬儀の時ぐらいしか見たことがなかったがあの猛々しい雰囲気自体が苦手だった。

しかし断る理由が難しいのも分かっていた。虎千代の2歳年上の実姉 仙桃院が10歳の時に上田の長尾政景に嫁ぎ その結果上田長尾はそれ以降 晴景に服従するようになったという大きな実績もあった。

虎千代は黙ってお茶を入れて 新兵衛と天室光育差し出した後

「新兵衛 和尚・・・」

虎千代は静かに言った。

「越後が静かになるのであれば喜んで行きましょう・・・」  
普段の表情のまま 少し寂しげな顔で答えた。

新兵衛と天室光育はしばらく押し黙ってしまった。

実は新兵衛も天室光育も虎千代がなんと答えるか予想できてはいなかったが

本人が了承してしまった以上何も言えなくなってしまった。

「これで越後が静かに収まるようになればたやすいことです・・・」  
「・・・」

新兵衛と天室光育は押し黙ったままだった。

黙ってお茶を静かにすすった。

少し時間がたつてから天室光育が

「わかりました・・・人の定めには逆らわず人の為に我が身をふりかえらず己の運命を受け入れる・・・立派になりましたな・・・参りました・・・」

荒れた世の中ではありませんがそのような高貴なお考えを持たれることは立派でございますな・・・今更ながらうれいすな・・・」

天室光育は立ち上がり寺の奥に行くとしばらくして木彫りの仏像らしき物を持ってきた。

「これをお持ちくださいな・・・虎千代様を守ってくださいさるじやろう・・・」

手彫りで荒っぽいづくりの仏像であった、だが素朴で魂が籠もっているようであった。

「私の亡き師匠が彫ったものであります・・・ちょっと分り難いですが毘沙門天様だと聞いております、昔私の師匠も侍をしておりましてな、戦乱の世を無事に生き残り仏門に入ることも出来たのも毘沙門天様のおかげだと・・・あと戦で死んでいった者への弔いも兼ねてでしょうな、この御仏様が虎千代様を必ずや守ってくださいさるでしょうぞ・・・」

「大事な物ではありませんか・・・」

「おやおや・・・人様のご好意を断られるのは良くありませんぞ・・・」

天室光育が笑いながら言った。

「・・・ありがとう・・・」

虎千代も笑いながら手彫りの毘沙門天像を受け取った。

3人は縁側に出た、虎千代は急に昔のことを思い出し立ち止まり縁

側を眺めていた。虎千代は亡父為景のことをふと思い出していた。

虎千代は越後の守護代 長尾為景の末っ子として生まれた。

名前の由縁は寅年生まれからとも母親の名前が虎御前だったからとも言われている。

為景は終生100回以上戦ったという。まさに戦いに明け暮れた人生であった。

が、ついに戦に敗れ隠居させられ 偶然虎千代と触れ合う時間が出来たに過ぎなかった。

為景が隠居させられた時 景虎は7歳だった。

虎千代の父の記憶はごく僅かである。実際に一緒にいた期間も短かったが。

記憶は曖昧だが 父は隠居後 家の縁側で酒を笑いながらしかし寂しげに飲み その傍らに自分がちょこんと座っていた。虎千代は為景晩年の子であったため為景は虎千代が可愛かったのであるう、為景は横に座った幼い虎千代に自分の戦の話を酒を飲みながら いつまで飽きることなくしゃべり続けていた。

もちろんそのときの会話など虎千代の記憶に残ってなどいない、しかし心の片隅のどこかに残っていたものが虎千代の後の、長尾景虎、上杉謙信の時代の神懸かり的な采配に繋がっていったのかもしれない。

為景は半年ほどして間のなく帰らぬ人になった。

長年の戦の疲れが一気に噴き出たのであるうか、静かに息を引き取った。

しかしその葬儀は物々しいものであった。

為景の死を聞きつけた国人衆が兵を動かしているとの情報が入ったため幼い虎千代たちも鎧を着込み護衛の武者に囲まれながら葬儀を行った。

虎千代は母 虎午前にも挨拶をして、春日山城に向かった。新兵衛  
にとつてはこれが残された最後の奉公になるはずであった。

## 下克上の世

春日山城に入った景虎には女中二人と南三の丸の隅の小さな屋敷を仮住まいにあてがわれた。世話役の女中二人はお春と花と言いお世辞にも美人とは言えなかったが越後女らしく芯が強く仕事が丁寧でまじめで虎千代はすぐに二人と打ち解けた。

嫁ぎ先は相変わらずはつきりしないままであった、不安定な越後の政情のため、嫁ぎ先が決まるまでの仮住まいのはずであったが思わぬ長居の雰囲気であった。

虎千代は晴景と初めて面会をして嫁ぎ先の話是直接する予定であったが晴景は体が元来弱く体調不良で寝込んでいることが多く、春日山城に来てから例の事件が起きるまで結局、虎千代は兄、晴景の顔を拝むことはなかった。

体調不良以外にも宴会のせいで寝込んでいるとの悪い噂も無きにあらずであったが・

しかし平穏な日々は突如終止符を打つことになる。突然見ず知らずの土豪が率いる部隊がある日の夜半に春日山城に突然侵攻してきたのだ。土豪の兵にしては兵力が半端ではなく誰かが後ろで糸を引いているのは明らかであった。

守護代の兄晴景は完全に不意をつかれ反撃らしい反撃も出来ずにあつという間に春日山城に侵入を許してしまった。典型的な夜襲であった。

虎千代は寝ぼけ眼で夜中にたたき起こされた。

世間知らずの箱庭育ちの虎千代には今何が起こっているのかわからなかった、が、暗闇のどこかで時々ざらりと光る刀、鎧の武者がどこかで雄叫びをあげながら斬り合うにぶい金属の音、馬のいななきがこだまして何かただならぬ事態がおこっているのだけははっきり

わかった。

しばらくして金津新兵衛たちが屋敷に飛び込んできた。

「姫！ご無事でしたか！」

虎千代は少し引いてしまった、

太刀を振り回している新兵衛の姿を見たことがなかったからだ、ただそれだけ事態が切羽詰っているのは充分察することができた。

「間に合わんか・・・」

新兵衛がうなづいた。

新兵衛の部下たちも相次いでやってきたが壁の向こうで既に戦いが始まっているようで叫び声やら刀がぶつかりあう音やらが絶え間なく聞こえてきた。

敵に完全に包囲されているようで脱出は至極困難のようだった。

「姫・・・ここに」

案内されたのは奥の倉の床下だった。

「ここに隠れて 絶対に物音は立てないで・・・必ず迎えに来ます・・・！」

虎千代は床下に押し込められた。

床下は薄暗くカビ臭かったが耐え忍ぶしかなかった。

虎千代が潜り込んでからしばらくして 頭の上では人が走り回る大きな音や刀のぶつかり合う鋭い金属音 雄叫びが聞こえはじめた。

竹千代は耳を塞ぎ天室光育から頂戴した毘沙門天を震えながら握り締め祈るしかなかった。

（毘沙門天様 ご加護を・・・）

虎千代はひたすら祈った。

どれくらい時間が経っただろう、静かになってからしばらくして再度 忍び足の足音がこちらに近づいてくるのが分かった。

（賊兵だったらどうしよう・・・）

いやな思いが頭をよぎった、

急に光が差し込んで来た、

「姫……ご無事で……」

助けに来てくれたのは新兵衛の部隊の腕利きの秋山源蔵と言った。虎千代はようやくカビ臭い床下から解放された。

「……残念ながらお城は落ちたようで……連中は春日山城で祝宴をあげているようです……連中が油断している今のうちに脱出しましょう……」

辺りは徐々に明るくなりかけていた。

壁には飛び散った血や 庭や部屋の奥に人が人形のように倒れて動かなくなっているのが見えたが目をそらし見ないようにした。用意された馬の背中に飛び乗ると馬は全速力で疾走を開始した。

どれくらい走っただろうか いつの間にか夜は明けて朝の太陽がまぶしかった。

今まで朝日は何度も見てきたが今日の朝日ほど生きていることを実感させてくれる朝日は初めてであった。

出るときには気が付かなかったが部隊は虎千代を含めて3人だけと言う小規模なものだった。

3人しか脱出できなかったというのが正直なところだろうが……もう一人の男は戸倉与八郎と言った。

新兵衛とは途中まで一緒だったが 戦の最中に離れてしまい安否は不明という。

「新兵衛が……」

虎千代は肩を落とした。

生き残った者は守護代晴景に以前より協力的な 栃尾城の本庄実乃の元に、別個向かうよう指示が出ているとのことだった。

春日山城だけでなく林泉寺や母の虎午前の住む屋敷にも賊軍が侵入



しているとのことだった。天室光育和尚や虎午前の安否は不明と言  
う。虎千代は言葉が出なかった。  
戦に負けること いや巻き込まれることの惨めさと悲しさを身にし  
みて感じた。

しばらくすると前方に小さな集落が見えてきた。

戸倉が提案した。

「馬を休めましょう。我々も少し休みましょう。」

馬を止めると戸倉が物見に集落に一人で入っていった、しばらくし  
て合図があり3人は集落に入った。

どの家も固く扉が閉ざされていたが人の気配はした。

みな家の奥に隠れて成り行きを息を殺して見ているようであった。  
人の姿は見えないが視線を感じた。

一行は井戸の側に移動して馬も人もしばらく休憩した。

(ぐーっ)

虎千代はこんなときであったが お腹を鳴らせてしまった。

「・・・」

恥ずかしかつたが昨晚より何もたべていないのでこればかりは仕方  
が無い。

しかも寝間着で逃げていたので日があたっていると見え少し寒い、  
恐怖が残っているのもあったが寒さで少し手が震えてきた。

「・・・何か取ってきてみましょうか？」

気を利かせて戸倉が言った。

「・・・店など無いが・・・」

虎千代は返事をした。

戸倉は一瞬あつけに取られていたがすぐに源蔵が説明してくれた。

「ちよつとだけの狼藉でございます。生きるためであります。  
ご理解を・・・」

「・・・私は大丈夫だ。狼藉などしなくて良い・・・」

虎千代はしつかり言った。

この時代の兵士にとって狼藉は生きることのため誰もがやっていることであつた。有名大名の記録にもその旨が残っている、この時代には兵隊としては至極当然の行為であつたが育ちの良い虎千代は現実の世間を知らなかつただけである。

戸倉は少し不満そうであつたがそれ以上は何も言わなかつた。

逆に源蔵は少し驚いたような感心しているような複雑な表情を見せた。

井戸の近くに腰掛 人馬共に喉の渴きを癒した。

15分ほどの休憩だつたがあつという間に感じた。

疲れているせいか誰も一言も発しなかつた。

一行は再度出発するために黙つて立ち上がった。

そのとき 突然音がして集落の一軒の扉が開いて老人がこちらを伺うと、手に何かを持ってこちらに向かつてきた。

源蔵 戸倉 は一瞬身構えたがすぐに落ち着いた。

老人の手には握り飯があつた。

他の集落の家の扉もいつのまにか順番にゆつくり開いて中からそつと顔を出し みな覗き込むようにこちらの成り行きを見守つていた。一行が狼狽を働かなかつたので安心したのだらう。

老人は村長の五郎兵衛と名乗つた。

そして虎千代たちに 握り飯を差し出した。

腹が鳴つたのを聞かれたのかと思ひ 少々気恥ずかしかつたが素直に受け取つた。

「ありがとう・・・」

虎千代は答えた。

老人は言つた。

「・・・驚いた・・・姫君を連れていたので追い剥ぎでは無いかと思つてはいたが・・・何があつたんじゃ・・・？」

「戦じゃ・・・春日山城が落城した・・・」

源蔵がため息交じりに答えた。

老人も深くため息をついた。

「また戦か・・・こんな世の中じゃから仕方ないが・・・迷惑被るのはいつもワシらじゃ・・・全く 越後はいつまでたつても争いばかりしておるのう・・・」

虎千代は黙っていた。

父親は生涯100回戦をしたのが自慢だったという、

でもその裏で何が起こっているのかは考えたことがなかった。

見たことも考えたことのない現実を突きつけられている感じだった。虎千代はこんなときであったが思わず考え込んでしまった。

そんな想いを遮るように源蔵が言った。

「彼らに礼を言って・・・そろそろ行きましょつか・・・」

「食事の件はありがとう・・・ 礼を申す。 守護代から褒美をとらせる・・・」

お決まりの回答ではあるが虎千代は本気で言っていた、もっとも守護代の兄の情景がどうなっているかは分からないのだが・・・

「これはこれは・・・ ありがたきお言葉・・・」

感情のない返答にも聞こえたが彼らの本心のようにも聞こえた、上に立つものが誰でもよいがとにかく静かに平和に暮らしたいと・・・

その後 別の家から若い女が出てきて 寝間着姿では忍びないと淡い紅い羽織を虎千代に渡してくれた、決して高級ではなかったが 暖を保つには充分であった。

虎千代は見ず知らずの自分に親切にしてくれた村民たちに感動を覚えた。

虎千代は育ちが良く 母親の虎午前や姉の仙桃院が信心深かったのもあろう このような親切行為は好きで自分でも大事にしていた。

もちろん自分も人から頼まれたら断れない性格の持ち主でもあった。そしてこの性格が後の虎千代の人生に良くも悪くも大きく影響してくるのであるが・・・

しかしこのような体験があったからこそ 後の虎千代が越後の守護として国を大事にし 豊かにするために いろいろな形で一生懸命頭を絞るようになったのも事実であろう。

彼らに再度礼を言って別れを告げ 3人は集落を出発した。

出発間際の村民のひそひそ声が少し虎千代の心に残った。

「春日山城が落ちたつてよ・・・」

「あの守護代たちだったら仕方がないかな・・・」

最後の一言が虎千代の胸にひっかかった。

馬の背中に揺られ、もらった握り飯をかじりながら一同は栃尾城に向かっていた。

栃尾は守護代に忠節を誓う本庄実乃が守っており 虎千代一行を心待ちにしているという。

握り飯はかなり固く麦、ヒエやアワがかなり混じっていたが白米のご飯しか知らない虎千代には逆に新鮮であった。

新しい種類か珍しい種類か何かの感覚だったからだ。

まずはなかったが 不思議な顔をして食べていたのが源蔵の視界に入ったのだろう、

しばらくして源蔵が声をかけてきた。

「姫・・・」

「なにか？」

「お味はどうですか？」

源蔵が少し笑いながら聞いてきた。

「変わった味だがおいしい」

正直に答えた。

急に源蔵が真剣な顔になった。

「彼らは米を作っていますが自分の口に入れることは滅多にござい  
ません・・年貢や略奪やらで満足に食べられる量が残らないのです・  
この乱世で人々は日々の貧しい生活を送っているのです・・なの  
で貴重な差し入れでありますので心して頂戴するよう・・いや  
米どころか草を食べている人のほうが多いのです・・それが天下の  
米所越後の現状でございます・・」

白飯しか食べたことがない虎千代は何も言えなかった。  
米所の越後で白米だけの飯を食べている人間の方が少ないことを・  
・。  
再び現実を突きつけられた気がした。

源蔵はしばらくしてから少し真面目な顔で言った。

「ところで姫は人様を惹きつける何かがあるようで・・」

「・・・・？」

虎千代は黙っていた。

「貧しい村民からこのような差し入れを受けるなど何らかのご加護  
があったのでしょうか・・いやいや おそらく姫様になんらかの  
期待をされているのかもしれない・・」

虎千代はこのときは源蔵が何を言っているのか良く分からなかった  
があまり気に留めなかった。

握り飯をほおばりながら ふと 昨日のことが徐々に思い出されて  
きた。

「母上や新兵衛や和尚 あのふたりは大丈夫だろうか・・ 兄上  
たちも・・」

不安で涙が出そうになるのを必死に止める虎千代であった。

すっかり日も傾きかけた頃であった、しばらくして前方より砂埃が  
あがり、何かが向かってくるのが見えた。

「むー!」

源蔵 戸倉 が構える。

前方から数機の騎馬武者の姿が見えた。

「姫様は後ろへ！」

虎千代は最後尾に隠れた。

「おーい！」

前方の武者から声が聞こえた。

「おお！」

源蔵 戸倉 が沸き立った。

「栃尾城からの迎えです。」

戸倉がうれしそうに言った。

迎えの武者が言った。

「栃尾城城代 本庄実乃から遣わされてお迎えに参りました、栃尾城までご案内いたします。」

一行はようやく脱出劇に終止符を打つことができたのであった。

初陣（前書き）

2011/7/10 若干修正しました

## 初陣

栃尾城は険しい山城である。守るに適した堅い山城であったが城自体はお世辞にも綺麗でも立派な城でもなく、むしろ結構くたびれている城であった。

虎千代たちが到着すると城代の本庄実乃が丁寧に出迎えてくれた。実乃は年齢が40前で金津新兵衛と近い年齢のようであった。温和な雰囲気紳士の虎千代は安心した。

実乃が虎千代達を受け入れたのは今後のことを考えての決断であった。

本庄実乃は為景の代まではうまく越後の政治の中枢に関わっていたが、為景が隠居させられて晴景の代になると、為景の娘、晴景の妹を妻に持つ上田長尾が台頭し、越後の政治の中枢から遠ざかっていった。

越後国内の権力闘争にもう一度参加したい、いつかは一旗上げたいとのちよつとした下心から今回状況がよくわからなかったが真つ先に手助けに参加したのである。このような下心を隠しての、一世一代の博打的な行動であったが実乃にとつて予想外だったのは脱出できたのが為景の末子の姫君だけだった点であった。

本音では実乃は少しがつかりしていたがそれを一切顔に出さず、虎千代を丁寧にもてなしたのである。

もし守護代の晴景や虎千代の兄たちが不幸にも討たれてしまえば順番だけで言えば虎千代も立派な後継者であった。うまく立ち回ればそれを手助けした実乃たちも恩恵を被ることが出来るのは間違いないからである。また、若い虎千代は実乃から見れば絶好の飾り雛であった。虎千代を飾雛にして自分が実権をとることも夢では無いようにその時は実乃も一瞬思ったのである。

ただ実乃は源蔵たちの報告を聞いて、下心の考えを少し改め、様子



を見ることにしたのである。

実乃自身も長年の経験からか人を見る目や勘は他人より優れている自信があった。

虎千代を一目見たときから、何だか良くは分からなかったがその勘が働いたような気がしたのである。実乃が虎千代の父、為景に持っていた印象が強すぎたせいもあつたかもしれないが虎千代は小娘ながら不思議な資質、魅力を持ち合わせているようになぜか一瞬感じたのである。

しばらくして新兵衛たちも辛くもなんとか春日山城を脱出し、栃尾城に落ち延びてきた。

虎千代にとっては何よりも一安心であつた。

しかし新兵衛によると母の虎御前や天室光育和尚は無事が確認されたが虎千代の二人の兄の景康、景房は討ち死に、守護代晴景たちの様子も依然分かっていないとのことと素直に喜べる状況ではなかった。

しかも春日山城を襲った部隊が、春日山城の関係者が逃げおちたと言う栃尾城目指して進撃しているとのことであつた。

春日山城を襲つたのは伊勢三郎と言う、誰も聞いたこともない土豪であつたが下克上の時代では無名の者が大名を倒すなど珍しい話ではなかった。

実乃は予想以上に大事、面倒な事になつたとも内心思ったが、ここまできてはもう下がれず、また自分にも、再度越後の政治に関わる絶好の好機と言ひ聞かせ奮い立たせ、大急ぎで城の改修工事を命じたのである。

栃尾城では大急ぎで籠城の準備が開始された。栃尾城下の住人が家財道具を抱え順次城内に入ってきた。城下の牛や馬も一緒である。

虎千代は籠城戦の時は住人ごと立て籠もる事をこの時初めて知つた。

その理由は後で知ることになる。

虎千代も実乃の配慮で大鎧一式を借りることになった。名目だけではあるが一応今回の総大将であった。大鎧も大将にふさわしい本庄家の家宝だという。

本庄家の家宝と言う大鎧は黒と紺を基調にした重厚な物で格好は良かった。

虎千代は濃紺色の鎧直垂に着替えた後、生まれて初めて大鎧を着込んだ。ずしりとかなり重くて立っているのがやつとで、しかもこの大鎧はかなりの年代物のようだが臭い代物で虎千代にとってはその匂いの方が気になって仕方がなかった。しかもこの大鎧も虎千代よりも大柄でぶかぶかであった。景虎は薙刀を少し習得していたので薙刀も一緒に手渡されたがこの薙刀もこの時代では見たことない大きな物であった。兜にいたっては被ると前が全然見えなかったのかぶるのをやめて振分髪のままに烏帽子をかぶった。この癖のある大鎧は後で聞くと平安時代末期から鎌倉時代初頭の源平合戦時の生き残りの骨董品とのことであった。

今回虎千代は初めての戦、初陣でいきなり総大将になったが別に感動はなかった。

虎千代の本音からすれば戦などしたくないし勝手に大将に祭り上げられてはた迷惑というのが本音であった。

栃尾城は決して狭くはなかったが兵士や城下町の住人などで城内はかなり賑やかになった。

物見の報告から栃尾城に向かっている部隊は3000人程度でそれ程多くはなかったがそれに比べても栃尾城側の戦力は明らかに不足していた。

栃尾城直属の兵士は2000名足らずで一緒に籠城して戦う城下町の住民は1000名足らず。

住民は戦闘経験もほとんど無く老若男女混合の部隊で正直それほど戦力になるようには見えなかった。栃尾城城代、本庄実乃直属の部隊は士気は高かったが、甲冑はぼろぼろでお世辞にも見た目は強そうではなかった。

不用意にも虎千代は思わず本音を漏らしてしまった。

「心細いな・・・」

「心配無用！」

実乃がすぐに答えた。

「ここにいる部隊は噂の鬼小島にも勝るとも劣らぬ名士揃い。物事を外見で判断するのはよくありませんぞ！」

実乃がにこやかに力強く虎千代を励ますように言った。

虎千代も自分の失言にすぐに気づき侘びを入れた。

鬼小島とは越後に伝わる勇猛な武将の伝説である。もちろん伝説であって実在する人物かどうかは誰も知らない。このような伝説が出てきたのは越後には小島姓が多かったからとされている。

もちろん噂の鬼小島のような兵士はここにおらず誰もが分かりきった嘘であった。

しかし栃尾城の兵士や住民の不安を少しでも打ち消す必要があったので実乃はそのように言ったのである。

栃尾城に対する援軍の要請は実乃の手により各地の国人衆へ既に行われていたが結果は芳しくなかった。

守護代晴景や守護の上杉定実の実力や評判の所いもあつたが、彼らの動向が分からない状態では他の国人衆が動く気配がなかった。越後国内では国人衆が互いに争っていたため様子見の者がたくさんいた。当然であるが常に有利な方に付こうとしていたためこのような現状では実乃の呼びかけに応じる者もいなかったのである。

それでも栃尾側にとっては虎千代の祖父に当たる栖吉の長尾房景、景信親子が味方につくことを宣言してくれたおかげで栃尾城の士気

を吹鼓するのには成功した。

また栖吉の長尾が栃尾城側に付くため三郎の部隊は春日山城にも万が一の時の防衛部隊を残さざるをえず栃尾城攻略に回せる部隊が限られたのが不幸中の幸いであった。

しばらくして、三郎軍は栃尾城下に到着すると、布陣次第、栃尾側の予想以上に早く先手を打ってきたのである。

栃尾側の準備が整わないうちに出鼻をくじき戦意を削ぐ作戦であった。

栃尾城の城下町の家に侵入して略奪行為や田畑の刈り取りなどを派手に行い、城下町に火を点けたのである。

城下町の住民が籠城戦時は城に入るのそのような狼狽行為から逃げるためであった。

動揺が納まらないうちに三郎軍は住民の立て籠もる栃尾城内に突然矢の一斉射撃を浴びせてきた。

不意を突かれて城内には何名かの死傷者を出した。

虎千代にとっても生きている人間が死体に変わり転がる光景は衝撃であった。

城内の混乱が収まらないうちに開城を促す矢文も打ち込まれた。

虎千代を引渡して開城すれば住民や兵士を助けるといった内容だった。

住民側が激しく動揺し、肝心な虎千代までもが降伏開城に傾き始めていた。

要は住民の安全を最優先したいとの虎千代の優しさからの意向であった。

しかし実乃と新兵衛は強硬に反対した。

特に実乃にとつては今回危険を承知で虎千代たちを受け入れた以上、安々とは譲れない部分でもあったが、実乃自身も実戦経験豊富な武将である。今回のようなこの輩か分からない土豪相手だと最初か

ら狼藉が目的で約束など最初から反古にするつもりだと虎千代や住民たちを必死に説き伏せた。実乃が言うにはこのような土豪のような相手の場合、何をするか分からず、降伏開城しても戦って落城しても結局は狼藉に遭い、地獄を見ると実乃は主張したのであった。だが虎千代や住民たちにはその意味がなかなか理解できなかったのである。

さらに実乃や新兵衛らにとって最も心配だったのは住民たちが伊勢三郎に内応して虎千代に危害を加えることであった。虎千代が倒されてしまうと戦いの意義が無くなってしまい、すべてが水の泡と化すからである。

また栃尾城を捨てて栖吉に落ち延びる方法もあったが戦わずに逃げるのと戦って逃げるのではその後の国人衆たちとの関係に大きく影響するので虎千代たちはまずは一戦交えるしか道は残されていないかったのである。

この城内の動揺はしばらく続いたが、予想外な結末を見ることになった。

矢文の呼びかけに応じて住民30人ほどが家財道具を持って城を無断でいつの間にか抜け出したのである。

報告を受けて虎千代たちはその様子を城壁から遠巻きに見守っていた。

もちろん他の住民もしきりである。うまく脱出できれば自分たちも続こうと考えたのである。

栃尾城は山城であり下まで距離があるので下のほうの景色は見えにくい。

抜け出した住民はそのまま栃尾城のふもとまでたどり着き、最初は蟻が列を組んで歩くように整然と歩いていたが、突然列が崩れ、蜘蛛の子を散らすようにならばらになった。

三郎軍の方から何かがばらばらと飛び出してきてそれから必死に逃

れているように見えた。しかし蜘蛛の子は次々と捕らえられているようだった。

しばらくしてかすかに女性や男性かわからない悲鳴とも何とも言えぬ声がかすかに聞こえてきた。

虎千代や住民たちは思わず目をそむけた。

「耳も塞いどいたほうがいいぞ……」

近くにいた60手前の老人は静かに言った。

「狼藉を行う連中は最後まで徹底的にやる……それが連中の生きるすべだからさ……狙いは食い物とアンタら……女子供ははべらかし 男は売って金に換えて喜んでいる連中なのさ……」

と表情を変えずに言ったのである。

「……よく平気な顔してられんな……弥太郎さんよ……」

住民の一人が声を震わせながら言った。

「へん……オレも昔そういう連中と一緒にだったからさ……」

「……」

みな悲痛な顔で沈黙した。

「姫様なんか連中大歓迎だろうな……ガハハハ……」

弥太郎老人はいやらしい目つきで虎千代を見ながら言った。

「……この……無礼者……!」

珍しく新兵衛が声を荒げた。

「……私が大將だったらそんなことは絶対させない……!狼藉も許さない……!」

虎千代は弥太郎を睨み付けると無意識に声を怒りで震わせながら言った。

虎千代も何でそのようなことを言ったのか誰に向かって言っているのかは自分でも分からなかったが怒りの感情が湧き上がり自然と言葉が口から出てきたのである。

「……!」

老人はちらりと虎千代をみた。

一瞬老人の目つきがさつきと変わったように虎千代は感じたが、老人はすぐにまた元の人を小ばかにしたような目つきに戻っていた。

「・・・ハハハ 気に入っただぜ 大将・・・」

老人の気の無い笑いがなぜか虎千代の耳から離れなかった。

いやなもの皆の胸に残ったが逆にこの一件で城内の気持ちはひとつに固まったのである。

全員三郎軍に徹底抗戦することみんなの気持ちが一つになったのである。

新兵衛や実乃は城内がまとまったことにひとまず安堵していたが実乃はそれ以外に虎千代に対して別の見方をもしていた。

(・・・この娘はもしや・・・)

実乃は初めて虎千代を見た時の自分の勘が当たったような気がしたのである。

老兵（前書き）

2011/7/10

若干修正しました



## 老兵

徹底抗戦が決まり栃尾城の本格的な防御工事が総動員で早急に行われた。

伊勢三郎へは降伏するように見せかけて城の工事の時間を稼ぐことにした。

兵糧は収獲の刈り取り後だったので問題はなかった。

槍や刀の使い方など住民への簡単な訓練も行われた。

あの弥太郎老人は一切訓練には参加しなかったが、逆になぜか時々自分勝手に城内の恰幅の良い若者を捕まえては個別に槍の指導などをしていたが、他の住人は

「あの爺さんは昔から変わり者だったからな・・・」  
と誰も気にも留めていなかった。

弥太郎老人はなぜか虎千代にも付きつきりであった。微妙な間を取って虎千代の傍にいた。

虎千代は城の防御工事の指揮を取り、あちらこちらで工事の指示を飛ばすため城内を走り回っていた。

「（林泉寺の天室光育）和尚がこんなこと教えていたとは思えないが・・・」

金津新兵衛は虎千代が城の防御工事をてきぱきと指示しているのを遠巻きに不思議と思いい様子を見ていたがその謎はすぐに解けた。

例の弥太郎老人が虎千代に入れ知恵していたのである。

弥太郎老人は若い頃は足軽をやっていたとの噂は新兵衛も聞いていたが、斜に構え、ちよつと人を小馬鹿にするようなところから栃尾の住民からは相手にされておらず、彼のあまり詳しいことはそれ以上は分からなかった。

虎千代が弥太郎の指図を素直に受け入れていたのは虎千代のお人好

しな性格からであろうと新兵衛も最初は思っていたが、弥太郎の指図は素人離れしていた。武具の選択や防御用の仕掛けの配置は新兵衛から見ても的確で、実戦に即した籠城に関する術であったからである。

弥太郎は虎千代に密かに丁寧に教え込み、お人好しで、昔、足輕をやっていたと言う弥太郎の言葉を信じた虎千代はそれを全て吸収しているようであった。

虎千代は元来頭が切れ、自分が興味がある物はすぐに紙が水を吸い取るように覚えた。今回も色々と学んでいるようで、よって新兵衛も弥太郎老人の件でとやかく虎千代に言うのはやめたのである。むしろ新兵衛も何気に弥太郎の事を住人たちとは違う視線で気になっていた。

栃尾城は防御の為、城の畳や雨戸の板、外板床板などが弓矢の防御板として次々に引き剥がされた。城壁や屋根瓦も投石用に破壊された。またその他の仕掛けが数多く用意された。

これもあの弥太郎老人の入れ知恵であった。

防御のため栃尾城の設備がほぼ破壊され、虎千代は実乃にその旨は謝ったが逆に実乃はそのような心構えはうれしく大事にと逆に虎千代を褒めてくれた。

実乃にとっては勝てば安い投資であった。実乃にも根拠はあまりなかったが虎千代のおかげで勝てそうな気がしていたのである。

やがて部隊の配置も完了した。

籠城は天守ではなく千人溜りという場所が選ばれた。住民を収容出来る十分な広さと井戸があり水の確保が可能なためであった。広い場所に籠ることによって侵入してくる敵を分散させる狙いもあった。また先ほどの防御工事の際に建物を殆ど壊してしまい天守に残る価値がないのも理由であった。

東門、東側一帯が三郎軍の陣地に最短で土地が少し開けているため、

ここが激戦の可能性が高く集中的に強化された。北側の城壁も山肌沿いで攻めてには険しい地形であったが梯子や弓手や投石などの搦め手の部隊の侵入や牽制のため弓手中心に配備、三郎軍の陣地と反対の尾根伝いの西門と空堀がある南側の城壁は物理的に部隊の侵入が難しいので賭けではあつたが割り切つて少数配備にとどめた。

防衛準備がほぼ整つたところで実乃から酒が振るわれた。

士気の向上のためだが別れの挨拶の意味も暗に込められていた。

虎千代は準備で動き回り疲れていたせいもあつたが浮かない顔で枀一杯に汲んでもらい 顔色変えずに飲み干した。

(なんで自分がこんな目に逢うのか・・・)

と思つていたので酒の味なんか虎千代の意識にはなかった。

「姫様・・・」

実乃がゆっくりと少し驚いた顔で近づいてきた。

「お酒の強さは父上譲りですか・・・」

「・・・え！」

虎千代は周りを見渡すとみんな驚いた表情でこつちを見ていた。

虎千代は顔を赤らめた。

初めての酒だつたがもちろんいい酒であろうがあつさり飲めた。

しかし確かにこの酒の強さは父譲りであろう。

例の弥太郎老人も

「いい酒だな・・・ 別れ酒には最高だな・・・」

ひとり上機嫌だつた。

準備は全て整い後は三郎軍の襲撃を待ちかまえるばかりとなつた。城内は緊張に包まれていた。一人落ち着いていたのは弥太郎だけだつた。

「今日は来ないな・・・明日の明け方から早朝が一番危ないな・・・」  
弥太郎は独り言のように言った。

老人の言う通りその日は何事もなく終わった。しかしその日の早朝も何も起きなかった。

村民たちは老人の意見など聞くに値せぬと冷淡だったが新兵衛や実乃たちも少し妙な感じを持ち合わせていた。

「妙だな・・・」

実乃が思わずつぶやいた。

「戦力差が大きいので東門の真正面突破で堂々と来るのでは？」

秋山源蔵が答えた。

「・・・かもな・・・」

実乃は黙ってうなずいた。

しばらくたつてからである、

「敵が来た！」

物見の大声が響いた。

「！！！」

予想外に日が昇ってからの来襲になったが理由など考えている暇はなかった。

全員すぐに迎撃体制に入った。

全員緊張が極限に達しようとしていた。

虎千代は武者震いではなく本当に怖さで体の震えが止まらなくなっていた。

「まったく・・・しつかりせんかい、おぬし大将だろう・・・」

弥太郎が呆れ顔で声をかけてきた。そしていつの間にか持つてきてくれた升いっぱい酒を虎千代に渡して、飲んで落ち着くように言った。

虎千代はぐいっと何も考えず目をつぶって一気に飲み干した。

予想通り北側と東門に三郎軍の足軽が押し寄せてきた。

北側は梯子での強行突入組のようで数は少なく枳尾側の戦力分散を狙った罠のようだった。

東門を破壊し侵入しようとする東側の部隊を主に追い払う作戦に枳

尾城内の守備隊は出た。  
まずは以前の仕返しばかりと栃尾軍が先攻した。

第一弾は東門外に撃いでいた牛20頭の角に火が点いた松明をつけて、東門目指し栃尾山の尾根道伝いに向かってくる三郎軍真正面に突っ込ませた。東門へ向かう尾根道は細い。牛が突然突っ込んできたので三郎軍は混乱し牛に押しだされて山裾を転げ落ちる者が続出した。

源平合戦の俱利伽羅峠の戦いの真似で虎千代の提案だった。

これをなんとか退け再度突進してきた部隊には第二段として東門の前に大きな落とし穴を作っておいた。三郎軍は落とし穴が邪魔でなかなか東門前に進めず、東門前であたふたしているうちに栃尾軍の城壁上の弓手の攻撃をまともに受け苦戦していた。

城の防衛は一見うまく言っているようだったが、しかし

「妙だな・・・遅いな」

実乃が三郎軍の動きを怪訝そうな目で見ていた。

「手の内を見ようとしているのか・・・俺たちが疲れるのを待ってるのか・・・」

源蔵も警戒していた。

栃尾軍はよく守っていたが敵の押しがゆるいような気がしたのである。

三郎軍の本隊はなぜかまだ栃尾城の山腹で待機しているように遅々としており、本気で攻めに動いている気配がなかった。

「やはり変だ・・・何かあるな・・・」

弥太郎もいぶかっていた。

栃尾側がいぶかっている時、突然北側の山肌から大量の矢の打ち込みが始まった。栃尾城の外板や仕切り戸で作った防御板のおかげで、城内の東門の城壁の弓手隊や門の守備隊、城内の部隊も防御板の内

側に隠れば良かったので問題なかったが、矢の雨がやむまでみんな動けず、持ち場を離れられなくなった。

その時だった。突然西門が何かに叩かれているすごい音がしてきたのである。馬のいななぎも聞こえてきた。

「・・・何・・・！」

実乃が予想外と言わんばかりの驚きにも似た声をあげた。

「しまった・・・！」

新兵衛もうなり声を上げた。

栃尾城側の守備隊は東門と北側の部隊に備え、南側や西側の守りを薄くしていた。

南側は地形の形状で三郎軍陣地から移動するのは難しく、西側も三郎軍本陣とは逆の尾根伝いで徒歩では時間がかかり補給や退路の關係から通常の城攻めでは考えにくかったので、割り切って少数配備にしたのであった。しかし三郎軍は西側の尾根伝いを少数の騎馬隊を使って遊撃を仕掛けてきたのである。

そこを思わず突かれたのである。

栃尾城側の守備部隊は戦に不慣れもあって、東門や北側からの襲撃で浮き足立ち、三郎軍の来襲に慌てて東門の援護に移動してしまい、西側の西門や南側は栃尾城側から言わせれば偶然、三郎軍にしては狙い通り無人状態になっていた。

攻撃時間が遅くなったのも西門経由の部隊の侵攻に合わせて遅らせたのである。

ドカンドカんと西門を叩く音が10秒近く続いた。

「弓手！誰か早く！西門の外の連中を討ち取れ！」

源蔵が大声を出したが迎撃の弓手が北からの矢の雨のために思うように移動ができない。

そのとき、突然矢の雨がやみ、ようやく動けるようになった。虎千代も急いで西門の押さえに走り出したが大鎧が重くてよたよたと力ない走りであった。

しかしであった。

矢が止むと同時に西門を叩く音にまぎれて、門の木材が割れる大きな音がして西門の破れた穴から大きな木槌が城内に転がり込んでくると同時に西門は完全に蹴り破られ、三郎軍の別働隊と思われる騎馬隊が栃尾城内に乱入してきたのである。

数は30騎程度だが騎馬隊の破壊力、雰囲気は恐ろしく、相当の熟練精鋭の槍の使い手でなければ騎馬を防ぐのは難しかった。

「・・・やられた！」

実乃は固まった、しかし

「・・・姫！逃げて！」

新兵衛の絶叫で実乃は我に帰った。

侵入してきた騎馬武者2騎が虎千代を素早く見つけると猛然と突進してきたのだ。

西門に向かっていた虎千代は恐怖でその場に座り込んでしまい動けないようだった。

騎馬が猛然と突進してくる様子は戦場に慣れている兵士でも恐怖だった。

今まで突進してくる騎馬を見たことがない虎千代にとってはなおさらであった。

虎千代は呆然として声も出なければ動けないようであった。

騎馬武者たちはあつという間に虎千代の目の前までもすごい勢いで駆けつけると右の騎馬武者が大太刀をぎらりと光らせて

「大将討ち取つたり！」

と叫びながら虎千代の首めがけて大太刀を振り落とした。

「姫様！」

「きゃあ！」

周りにいた住民や兵士の悲鳴と叫び声が一瞬こだました。新兵衛までも思わず目をそらしてしまった。

次の瞬間金属が激しくぶつかる音がこだました。

同時に左の騎馬武者が叫び声を上げながら地面に叩き落ち、無人の馬が虎千代の左横を駆け抜けていった。

みな一瞬何が起こったのか分からなかった。

だが次の瞬間みな目を疑った。

あの弥太郎老人の槍が間一髪で大太刀を防ぎ、そのまま振り返り様、左の騎馬武者を討ち取ったのである。

しかしさっきの討ち損した右の騎馬武者は

「生意気！」

と怒号すると再度騎馬をすぐに反転させ虎千代と弥太郎に猛然と突っ込んできた。

反対側からも別の騎馬武者が

「挟み込めえ！」

と再度突撃をかけてきた。

「危ない！」

「逃げろ！」

周りの叫びを無視するかのように弥太郎は一人落ち着き払って構えていた。

虎千代は相変わらず座り込んだままであったが。

弥太郎の動きは老人とは思えない身のこなしであった。

すばやく振り返ると弥太郎は槍を渾身の勢いで最初に切りかかってきた騎馬武者に投げつけた。

弥太郎に投げつけられた槍を腹に突き立てられた騎馬武者は叫び声を上げて馬上でのけぞりかえり、腹に槍を突き立てのけぞりかえったまま、黙って二人の横を駆け抜けて行った。

「丸腰だろっが！」



挟み撃とうと向かってきた騎馬武者は弥太郎が槍を投げつけたため丸腰と思ひ真正面から槍で弥太郎を一突きにしようとした。しかし弥太郎は虎千代の薙刀を取り上げるとどっしり待ち構えて、騎馬武者の槍を一瞬の差で避け交わしたかと思うとこの騎馬武者も弥太郎の薙刀の餌食となり、叫びながら馬からもんどりと落ちてきた。馬は無人のまま二人の側を駆け抜けていった。

一瞬で一人の老人の手によつて3騎の騎馬武者が討ち取られたのである。

そして弥太郎は静かに、しかしはつきりとした声で言った。

「足軽隊長、小島弥太郎、鬼小島只今参上・・・！」

三郎軍の騎馬隊は動揺していた。

「鬼小島だつて・・・？」

「あ、あんなの伝説じゃ・・・！」

実乃、新兵衛、源蔵、与八郎たちも驚きを隠せなかった。

鬼小島の噂話は越後の人間であれば、みんな聞いたことはあつたが単なる作り話に過ぎないと思つていたからである。

しかし本物が目の前にいるのである。しかもあのお世辞にも強そうには見えない弥太郎老人が鬼小島弥太郎本人だという。

戦場が一瞬止まったようであつた。

しかし次の叫び声でみなふと現実に引き戻された。

「弓手！ 討て！ 敵の足は止まつてる！ 早く！」

虎千代の高い声だつた。

三郎軍の騎馬隊はふと我に歸つた。

驚きで完全に足が止まつてしまつていた。

騎馬隊長らしい男が叫んだ。

「い、いかん！ 馬を動かせ！ 手の空いているものは東門の押さえの連中を斬り捨て・・・ぐあ！」

栃尾軍の城兵の弓手の方が一瞬早かつた。

壁上から至近距離で弓を次々と打ち込まれ、あっという間に5騎程の騎馬武者が落馬していった。

「東門の守備隊は防御板の内側からから反撃を！」  
虎千代の声が引き続き響き渡った。

東門の裏には門を押さえるための部隊がいた。南や北からの弓の雨を防ぐため分厚い防御の板の壁で彼らは守られていた。東門が外から破られた場合は城内側に移動して2列目の防御板、防護壁も兼ねて頑丈に作った物である。三郎軍の騎馬隊は東門の後ろで門を押さえるこの部隊を殲滅すべく侵入したのに、思わず存在した防御板が邪魔で彼らを排除するどころか防御板の内側から反撃され、突破、移動すらままならず、また城壁からの矢の雨も容赦なく襲い掛かり、三郎軍の騎馬武者は次々と討たれて落馬していった。乗り手を失い無人になった馬だけ城内をさまよっていた。

「馬を奪い取れ！新兵衛！源蔵！」  
虎千代は高い声で続けさまどん指示を飛ばす。

新兵衛と源蔵たち栃尾軍側は三郎軍側だった無人の馬にまたがると防御板の前で右往左往する三郎軍の残った騎馬武者を次々と挟み撃ちにしていった。

「くそ・・・！生意気な小娘が・・・！」  
混乱の中、一騎で抜け出してた三郎軍の騎馬が座り込んだままの虎千代に突撃をしかけようとしたがほどなく虎千代の側で待ち構えていた弥太郎の薙刀の餌食となった。

「て、撤退しろ！」  
生き残った数騎の騎馬が侵入してきた西門に向かって逃げだした。逃げる途中も次々と槍や弓手の餌食となっていた。逃げ出したのはわずかに3騎ほどだけであった。

「西門封鎖しろ！」  
彼らが出て行くのを確認すると実乃の命令で大八車や板、兵糧や瓦礫等の資材で西門は再度固く封鎖された。  
まずは栃尾城側は最初の危機を脱することに成功したのである。

弥太郎が座り込んだままの虎千代の元に寄ってきた。

「・・・ありがとう・・・」

虎千代は呆然としながら言った。

「なかなかいい指図じゃな・・・さすが為景殿の秘蔵っ子じゃな・・・」  
弥太郎が虎千代を褒めた。

あの斜に構えた弥太郎老人ではなく、足輕隊長の弥太郎の顔であった。

虎千代はまだ顔がこわばっていたままだったが、にこりと笑って返した。

弥太郎もにこりと笑いながら

「まったく・・・大将じゃろう。しっかりせんかい。いつまで座ってるんじゃ・・・」

「・・・腰が抜けた・・・」

虎千代は正直に言うところ弥太郎は苦笑いしながら片手で虎千代を引っ張り起こした。

「まだ戦は終わっておらんぞ　しっかりせい！」

「・・・ウン」

虎千代は立ち上がるのがやっとだった。

ポンと弥太郎は虎千代のお尻を叩いた。

虎千代は我に帰った。

「な・・・！どこ触ってる・・・！」

「まだまだじゃのう・・・ガハハ」

二人は戦いが続く東門に急いで向かったのである。

東門には三郎軍の部隊がなだれをうって押し寄せてきた。彼らも今度は栃尾城の守備隊の矢を防ぐ防御用の板や畳などを持ってきていた。落とし穴を埋めるための資材も持ってきていた。  
遅々としていた本隊が城内の混乱の隙を見て押しかけてきたのである。

「火矢を！」

虎千代が命令した。

壁の上の枋尾軍の火矢が三郎軍に放たれた。

東門に侵入しようとして押しかけてくる三郎軍の防御板や防御用の畳に火矢が次々と打ち込まれる。

「菜種油なたねあぶらでも蒔いてやれ！」

弥太郎が命令を下した。

菜種油が掛かると火の勢いは増した。

「アチチ・・・！」

三郎軍の足軽は熱さにたまらず火のついた防御板や畳を放り出すと無防備になり枋尾軍の弓手の放つ弓矢の餌食になっていった。

しかし三郎軍も今回は引かなかった。西門では一杯食わされたが

「こちらでも火矢を放て！」

北側から城内に火矢が打ち込まれた。

「消化しろ！」

新兵衛も負けじと命令を続ける。

女子供が井戸の水を次々と汲み水を桶に満たしてそれを防御板を背負いながら動きまわる消化班に回す。消化班は着地した火矢に桶の水をかけて手際よく順番に消化していった。

もつとも枋尾城内の建物は防御工事に大半が破壊され逆に火矢を討つても燃えるものがろくに残ってもいかなかったが。

「石を！」

虎千代が命令した。

「こんにやる！」

「どっか行け！」

北側の三郎軍の部隊に城内の女、子供、老人が石や屋根瓦を次々と投げつけた。

「あたた・・・引け！引け！」

石の直撃を受けてはたまらないと三郎軍の北側の部隊は順次後退を始めた。

伊勢三郎は本陣内で不機嫌な表情を隠さずにはいらなかった。

西門への遊撃騎馬隊が反撃を受け壊滅したのと、虎千代の本性の件、味方の苦戦の知らせに本陣で齒軋りを立てていた。

「おのれ・・・！小娘相手に・・・」

三郎の不機嫌はもはや爆発寸前だった。

春日山城に比べると貧弱な田舎山城であるにもかかわらず大苦戦であつた。

おまけに為景の末子の件は噂では聞いていたが、その真相を確認させられ

「小娘に負けたなど噂が立てばワシの今までが・・・」

三郎は齒軋りを立てていた。

状況は良くなかったがもはや引くに引けなかった。

三郎は遂に決断した。

「総攻撃！突破しろ！全軍向かえ！ワシも越後を継ぐ権利はあるんじゃない・・・！」

三郎は腹をくくると総攻撃命令を下したのである。

城の見張りからふもとの三郎軍の本陣の守備隊もまでも大挙してこちらに向かっているという情報が入った。

本陣を殆ど空にしてまで全戦力こちらに向かっているとのことであつた。

「太刀打ち用意！」

実乃が叫んだ。

「予備の防御板を！」

新兵衛も叫んだ。

予備の防御板を柵の様に展開し城内でもさらにもう一枚壁を創る戦術だった。

住民など戦鬪に不慣れなものをここから槍で反撃させ、虎千代たちを最後まで守るためでもある。

「来たぞ！」

見張りが叫んだ！

三郎の残存している本隊が我先にと押しかけてきた。東門だけではなく東側の壁全体に兵が群がるように三郎軍が張り付き梯子を次々とかけていく。何人かが城内に侵入を開始し、城内は混戦修羅場になっていた。そろそろ落城の時期を考え脱出の頃の見計らいも考える段階にもなっていた。

三郎軍と戦った実績を作って緊急時には西側の門の外に密かに隠し、潜ませていた馬で栖吉へ脱出する案がひそかに実乃、新兵衛らで練られていた。戦わず逃げるのと戦って逃げるのでは越後国内での今後に大きな違いが出るからである。栃尾城に残される者は代々栃尾の英雄として祭ると言うことだった。

「姫・・奥に来てください・・」

新兵衛が虎千代に声をかけた。そして脱出用の馬のことを密かに話した。

しかし意外な答えが返ってきたのである。

「・・みんなが必死に戦っているではないか・・いやだ・・ここに残る・・」

虎千代は普段と同じ表情で答えた。

新兵衛は心底驚いた。

虎千代は女子おんなこであつたが彼女の表目に出ない武士の子の魂の一面に感心しきりではあつたが虎千代を守るのも彼の責務であつた。

「・・大将のあなたがやられたらすべて終わりなんですよ・・」

と言おうとしたとき 様子を見ていた弥太郎がすかさず口を挟んだ。

「さすが大将！覚悟が違うな！」

「皆の者！姫がここで奮戦されている！恐れるな！」  
続けて源蔵が大声を上げた。

「おお！」

栃尾軍が沸きかえった。

新兵衛や実乃の予定とは全く違った展開になつてしまつていたが栃

尾側の士気は高まり三郎側の圧迫が緩んだようだった。

しかし栃尾城の守り手も必死に防戦していたが多勢に無勢で数ヶ所から始まった侵入で城内でも至る所で太刀打ちが始まっていた。

栃尾軍兵は侵入してきた三郎軍と直接太刀打ちに入り兵士住民問わず男手はすべて不慣れ

にも関わらず必死で戦っていた。東門を押さえる防御板の奥は実は女子供、老人が主であつ

たがみんな必死に城門を押さえていた。流れ矢を受けている者もいたが誰も退かなかつた。

脱出が不可能になったためみんな死に物狂いになっていたのである。

栃尾軍側の足軽や住民兵の抵抗は激烈だった。

戦闘中であつたが三郎軍の中からも驚きの声が漏れていた。

虎千代は正直、このような混乱の最中であつたが新兵衛が意外と槍の名人であることを初めて知つた。新兵衛には矢礼だが年甲斐もなく槍を振り回し大暴れしていたのは以外であつた。

もちろん新兵衛は虎千代を守るといふ責務で奮戦しているのであつたが虎千代も勇気付けられ薙刀を必死で分けもなく振り回していた。

しかしやはり一番目立ったのは弥太郎老人であつた。鬼神そのものだった。

三郎軍は苦勞して城内に侵入しても彼の前に立ちはだかつた瞬間次々になぎ倒され動揺しているのが傍目でもわかつた。

状況は栃尾側が次第に持ち直してきていた。

「何をやっておる・・・」

三郎は一向に攻め落とせない状況に本陣内で齒軋りを立てていた。少数の兵のしかも初陣の15歳の姫大將が立て籠もる城を落とせなかつたなど噂がたつたら笑いもので、ここまで苦勞してのし上がつ

て来たのがすべて水の泡であった。

そのとき遠方で騎馬隊と思われる砂煙があがりこちらに向かってくるのが見えた。

三郎は喜んだ。

「黒田殿か！増援だ！今度こそ落としてくれる！」

栃尾城の外でもこの情報がすぐに伝わった！

「援軍だ！一気にこじ開ける！」

三郎軍が勢いづいた。

「援軍だと・・・？」

「まだ来るのか！？」

栃尾城内に動揺が広まった。

栃尾城の守備隊はよく戦っていた。

しかし既にみな疲労が限界に来ていた。

絶望にも近い空気が漂い栃尾側の力が抜けて行くのがわかった。

(これまでか・・・)

新兵衛は思った。密かに虎千代に近づこうとしたどこに行ったのか見当たらない。

虎千代に近づこうとしたのは敵の無名の兵の手にかげられるより自分の手で・・・と言う

最後の奉公の気持ちからであった。

逆に東門を押し三郎軍の圧力は急に増し東門は不気味なきしみ音を発し始めた。

城壁にへばりつき進入してくる三郎軍の勢いが明らかに増し始めた。戦の流れが変わろうとしていた。

そのときであった。

城内のどこかでどよめきと同時に

「ひるむな！」

大きな高い声が突如割って入ってきた。



みんな振り返った。

虎千代本人だった。

いつの間にか馬にまたがり太刀を振り上げていた。

虎千代は馬に乗り慣れていないせいもあって馬が暴れ気味だったがそのおかげで周りには三郎側の足軽が誰も近づいてこなかった。

普段の女々しい虎千代と違い落ち着き払いまるで別人だった。

はつきり言って美しいというか神々しい雰囲気さえ放っていた。

「我は毘沙門天の化身！勝利は我らにあり！恐れるな！」

虎千代が大声で叫んだ。

振り上げた太刀がざらりと陽光を浴びて光った。

新兵衛、実乃は正直に驚きを隠せなかった。

（この娘は実はとんでもない器に・・・）

二人は顔を見合わせた。

弥太郎だけは全てをお見通しのように、にやりと笑った。そして

「・・・そうじゃあ・・・！」

老人とは思えない雄叫びをあげた。

「まだまだじゃあ・・・！」

源蔵、与八郎も声を張り上げた。

栃尾軍の戦意は一気に立ち直った。

再度栃尾城内の戦力は野残った力で猛反撃を開始した。

しかし、しばらくして城の外でもなぜか戦闘が始まったのである。

「・・・なんだ？ 仲間割れか？」

与八郎が驚いた。

「・・・いや！・・・味方だ！」

源蔵が声を上げた。

三郎が味方と思っていた部隊は実は黒田軍ではなく栃尾側の栖吉長尾の軍勢だった。

「遅ればせながらじじいが助太刀に参ったぞ！」

虎千代の祖父の長尾房景の部隊が老体に鞭打ち、騎馬で背後から攻撃を仕掛けていたのである。

「どけどけ！」

勇猛と噂の息子の景信の部隊も突撃してきた。

三郎軍は逆に挟まれてしまい混乱に陥っていた。

城内に侵入した部隊も本体に合流すべく慌てて城外に逃げ出した。

勝負はあったのである。

栃尾城内の兵士は沸きたった。

突然 弥太郎が虎千代に近づいてきた。

「虎千代 ワシの言うとおりにしてみる・・・」

「え・・・？」

「初めて戦う相手には相手が怖いと植え付けると次の戦が楽になるからな・・・」

ワシの言うとおり号令をかける・・・」

虎千代はうなずいた。

虎千代は相手にも聞こえる大声で号令をかけた。

「足軽隊！東門前に集合！槍を持って！」

栃尾城兵は突然の号令に一瞬あつげにとられたが

「はっ！」

弥太郎がすばやく返答し、槍を持って東門前に移動すると弥太郎に習い他の者も慌てて槍を持って東門前に移動した。

なぜか実乃、新兵衛、源蔵、与八郎までもが入っていた。

源蔵が悪戯っぽく弥太郎に尋ねた。

「鬼小島隊長殿！何をされるのか？」

「見てのお楽しみじゃ・・・！」

弥太郎も悪戯っぽく答えた。

「東門守備隊は後方退去！東門開放用意！防壁板撤去！」

栃尾軍の兵士は何がなんだか分からなかったが、虎千代の命令には

従っていた。

しかし外の三郎軍は違っていた。彼らは恐怖におののいていた。

「・・・反撃に・・・出て来るのか？」

三郎軍はざわめきだしていた。東門を押す勢いは完全に無くなっていた。

虎千代の声は壁越しに三郎軍にも響き渡っていた。

「槍を構え！」

弥太郎が小さな声で周囲に指示を出した。

「ワシのマネをすればよいさ・・・あまり深追いするなよ・・・自分たちで掘った落とし穴に入りたくないだろうに・・・」

弥太郎は悪戯つ子のように言った。

周りは皆笑いながらうなずいた。

「城門！ 開け！」

虎千代は太刀を上には振り上げた。

今まで散々三郎軍が開けるのに苦勞をしていた東門が静かに開いた。三郎軍の兵士は凍った。

開いた城門の向こうで無数の槍がこちらを鋭く睨んでいたからである。

しかも隊長は噂の鬼小島である。

虎千代が太刀を振り下ろすと同時に命令を発した。

「鬼小島隊！ 突撃せよ！」

弥太郎が叫んだ。

「鬼小島隊！ 突貫せよ！」

「うおお！」

雄叫びと同時に栃尾城内から槍隊が三郎軍に突進してきた。

三郎軍はあつという間に前線を放棄した。大慌てでみな逃げるように退散を始めた。

栃尾軍の勝利が確定した。

城内いたるところ勝利の歓喜の声が上がりお互いみんな抱き合って喜んでいた。

弓手は栖吉軍の援護のため弓を打ち続けていた。虎千代は馬を降りると壁上に登り弓手の側に寄って様子を見た。三郎軍は総崩れだった。

栖吉軍にも追い散らかされているようだった。

「味方に当てるな！」

虎千代が笑いながら普段の口調で弓手に言った。

「わかってますよ！」

弓手も笑いながら返した。

いつの間にか弥太郎もすぐ側に来ていた。

弥太郎は静かに話し出した。

「勝てる軍の秘訣を最後に教えてやろう。まず主君は兵士に安心できる報酬を払い十分な装備を与え戦に専念できる環境を作り戦術を練る。兵士はそれに答えるべく良く鍛錬し主君の指示に迅速に従い全力をつくす。それだけじゃ。兵士の数なんて次の問題なんじゃ。簡単じゃろう。？」

虎千代は笑いながらうなずいた。

弥太郎もそれを見て笑顔で返した。

弥太郎の心からの笑顔を始めて虎千代は見た気がした。

「ほれ。栖吉の連中も雄叫びを上げてるぞ。」

三郎軍の姿はもうなかった。栖吉軍に虎千代は手を振って答えた。

弥太郎の方を見るとさっきの笑顔のままだった。

「。弥太郎。？」

虎千代は声をかけたが2度と返事は返ってこなかった。

背中には矢が2本刺さったままだった。

戦の終わった城内では片付けが開始された。

両軍の兵士の遺体が集められ埋葬の準備が始まっていた。三郎軍の打撃は相当なものであったが栃尾軍も被害が大きかった。虎千代はいつも懐にしまっている毘沙門天を取り出し亡き兵士たちに念仏を

唱えた。

虎千代は最後に弥太郎老人の遺体の側に膝まずいた。

新兵衛、実乃、源蔵、与八郎、栃尾の住民らが既に周りに集まっていた。

虎千代は涙が止まらなかった。

住人たちも

「じい様・・・あんたを見直したよ・・・」

「見るよ　いい笑顔だ・・・こんな笑顔見たことなかったよ・・・」  
みな涙を流していた。

源蔵も

「小島殿・・・もつと早くあなたと知り合えていれば・・・」  
と　悔し涙を流していた。

虎千代は言った。

「この人がいなければ私はとつくに死んでいた・・・この人とはこの前に会ったばかりなのになんで見ず知らずの私にこんなに尽くしてくれたんだろう・・・」

実乃が答えた。

「真の侍は自分の主君には全力全霊をかけて尽くします・・・弥太郎殿は虎千代様にその資格があると思われたのしょう・・・」

「・・・私が・・・？」

実乃、新兵衛はうなずいた。二人は本気であった。二人は虎千代の力を確信していた。

でも虎千代は何も言えなかった。なぜなら虎千代は自分をただの小娘だと思っていたからである。

虎千代は弥太郎老人が自分の隊の隊長として先陣を切って行進している姿を思い浮かべていた。しかしその叶わぬ姿に余計に涙が止まらなかった。

## 姫若子

伊勢三郎軍は栃尾城の近くで残存兵力を集め再度布陣したが援軍を受けられなかつたようではらくして春日山城の方に退散していった。三郎軍だが裏で黒田秀忠が糸を引いているとの噂が絶えなかつた。

一方決して華々しい勝利ではなかつたが初陣を飾ることが出来た虎千代の噂はすぐに越後国内に流れ出した。

栖吉の長尾房景 景信親子は本庄実乃や 秋山源蔵たちから聞いた虎千代の活躍や采配についてはにわかには信じていなかったが 母親の血縁者だけあって 孫のりっぱな成長と素直に喜んでくれた。しかし問題は一向に解決しなかつた。

晴景たちも噂ばかりが先行し様子が相変わらず状況が分からず 国人衆も様子見のままだった。

虎千代たちも相変わらず栃尾に貼り付いたままであった。

はつきりしない状況の打破のため実乃は今回の勝利を手土産に国人衆に再度呼びかけを行うことにした。

このとき栖吉の長尾房信、景信親子からある提案があった。

再度 国人衆に呼びかけを行うときの名前を虎千代ではなく元服名に変更してみたらどうかとのことであった。子供の名前より大人の名前の方が良いのではとのことである。

虎千代は越後では無名だった、為景の末子らしい、程度の認識しか国人衆に持たれていなかった。女子であることもあまり知られてはいないはずであった。今回虎千代たちを襲撃した三郎も城内に侵入した兵士の報告で虎千代が女子であることを初めて聞いていた。虎千代を女子と知って欺かれる事態を避けるためにも元服名にして男子のようにした方が良いのではということであった。

女子の虎千代の前では言い難かつたがやはり 女子供の部下になれ

と言うよりは成人男子の部下になれと言った方が集まりやすいのではないかとの判断であった。

実乃は大いに賛成していたが新兵衛、虎千代は正直乗り気ではなかった、女子だからと云々に対する気持ちよりもっと現実的な判断で、守護代に断りも入れないで勝手に元服する点とこのまま妙な展開になり事態の収拾が付かなくなってしまふ事を懸念していた。

この件に関しては下記のように段取りで取り急ぎ対応することで乗り切ることにした。

- 1・晴景ら守護代が無事だった場合 栖吉長尾も含め全員で弁解事後説明し元服を取り消し虎千代に戻す
- 2・晴景ら守護代が無事で景虎から虎千代に戻したあと栃尾、春日山に帰参した者に対しては書状の名前は誤記（景虎 晴景）であったとごまかす
- 3・虎景が守護代を継承する場合、帰参者が直接栃尾に来た場合はまずは男装して対応 本人の性格や状況など判断熟考して本当のことを話すかそのまま通すか判断する

（・・・書状を間違えるはずないであろうに・・・しかも男装までして・無茶苦茶過ぎる・・・）

虎千代は本音では呆れていたが栃尾側が逼迫していたのは事実であった。

虎千代も一言 言いたがったが既に実乃や栖吉長尾に散々世話をかけている以上言い難いのも事実であった。  
また虎千代は育ちが良かったせいか頼まれると断りにくい性分があった、

自分よりさらに年上の大男に頼まれるとなおさら断れなかった。

そのとき虎千代の頭にふと天室光育との言葉が思い出された。

・ ・ 人の定めには逆らわず人の為に我が身をふりかえらず己の運命を受け入れる ・ ・

虎千代は決心し元服する件を 渋々であったが了承した。

元服後の名前をどうするかはあっさり決まった。もちろん虎千代本人が本気で元服するわけではなかったし、兄晴景が出てきた場合に再度の変更も有り得るのでそれほど真剣に考える問題ではなかったのも事実であった。

兄晴景から一字を変魏して景虎に決定した。  
ここに長尾景虎が誕生したのである。

早速 各地の国人衆に呼びかけを開始してみた。  
書状には 為景末子 晴景血縁者 景虎と はぐらかした書き方の段取りだったが実乃の方が一枚上手だった。もちろん実乃が実務担当のせいもあるが、書状は勝手に晴景弟景虎と無断で修正され呼びかけは行われた。もちろん実乃の独断である。

送られた書状が各地の国人衆に届けられた。  
為景にはあとは娘しかいなかったはずだったが ・ ・ といぶかる声もあつたがやはり元服名、守護代の弟の方が効果があり事情を良く知らないと思われた揚北衆の色部勝長や刈場の斉藤朝信が栃尾へ馳せ参じてきた。

早速武士の普段着の衣装に着替え彼らに対応することになった。  
蔵から出て来た大きさが丁度良さそうな交織綾地の金茶事の直垂に着替え髪は普段は振分髪だが無理やり侍烏帽子の中に束ねて押し込んだ。



景虎は女性としても元が良かったので男装してもりっぱな麗人だった。ただ直垂の色が赤系なので逆に余計に女性らしく見えなこともなかったが・・

着替えた虎千代は本物の男子向けの表現だが姫若子そのものだった。しかし景虎は自分の姿を鏡で見て嫌気を覚えた。他人を馬鹿にしているような気がしたのである。

景虎は育ちのよかったせいであろうが生真面目なところがあり謀略とか嘘が嫌いであった。

女が男です　と言ったら相手はどんな気がするであろう・・  
しかも真剣な政治　外交の場面である。

自分がもし逆の立場であれば間違いなく腹が立ったに違いなかった。景虎は元服の件は了承していたが男装の件はいやがり始めた。

実乃や栖吉長尾親子は必死になって景虎を説得した。

乱世を生き残るためやら　謀略ではなく一時的なことであると真面目な説得からとてもよく似合っている　服が気に入らないのであればもっと好みの物を用意するなど　まるで子供をあやすような説得まで　とにかくあの手この手で景虎をなんとかだめた。

説得が功を奏したのか景虎は男装の格好で面会に渋々であるが応じる気になってくれた。

色部や斉藤に会うに先じて新兵衛や源蔵　戸倉ら周りの者にも男装の景虎を実際に見てもらい最終確認をした。

新兵衛は一言も発しなかった、立派な淑女になるようにと今まで育ててきたのに男装させられたので気分を害して知らぬそぶりであった、もつとも栃尾には恩もあるし栃尾の困窮は分かっているのも言えないのも事実であったが。

源蔵は

「わしが女だつたら一目惚れです」

という源蔵らしい冗談とも何とも言い難い返答で景虎は正直気恥ずかしかった。

「白拍子のようですね・・・」

という 戸倉の言葉には・・・彼は褒め言葉で使つたつもりだったが・・・には少し声を荒げてしまったが・・・

ともあれ、他の者もこれであれば絶対に大丈夫とのことで 真つ先に馳せ参じた色部や斉藤にそのまま面会した。

色部は40前後 斉藤は景虎より3歳年上、二人とも武勇で名のあつた武者であつた。景虎に面会した二人は特に顔色を変えず

「麗しき景虎様に侍のまこと光栄であります」

と少し含みのある 言い方をして景虎に忠節を誓つた。

こうして景虎は越後に正式にその名を轟かすようになったのである。

しかし後日 二人からなぜあのような下手な芝居をされたのかと聞かれたとき景虎は返事に窮した。

そのころ三郎軍の裏に黒田秀忠が付いているという確実な情報が入つてきた。三郎軍の主力はやはり黒田軍本体であり、その黒田も各地の国人衆に自分たちへの帰参の呼びかけを行つていたという。

しかし守護代晴景 守護の上杉定実の擁立に失敗したため誰も呼びかけに応じず三郎軍は春日山城の維持にも腐心するようになり 黒田の居城の黒滝城方向に引き上げていったという。

黒田秀忠が伊勢三郎のような無名な者を使ったのは下克上の世を印象付け 作戦が成功したときの世間の注目度を高めるための一種の演出のためであつた。失敗したときは彼らに全てを押し付けるつもりだったのであろう。

しかし 春日山城は落としたが守護代晴景たちを取り逃がす、守護代側の栃尾城を攻めるも返り討ちに遭うなど、何もかも中途半端に

進んだため結局全てが露呈してしまった。それだけであった。同じ頃 行方知れずになっていた守護代晴景 守護の上杉定実たちだが 上田の長尾房長政景親子にかくまわれており春日山城が空き家になったことにより戻ってきたとの情報が入ってきた。こうして栃尾城にいた景虎たちもようやく春日山城に戻るようになったのである。

春日山に戻る途中 栃尾に行く途中に世話になった五郎兵衛の集落に寄りたいと景虎が言い出したので立ち寄ることになった。しかし景虎は言葉を失った。集落は帰路の三郎軍に襲われ焼け焦げた家の柱と住人の屍だけが無残にも残されただけであった。景虎は私怨での戦は良くないとは分かっていたが三郎の成敗を心に誓った。

## 兄と弟

景虎は久しぶりに春日山城に帰ってきた、

天室光育や虎午前 女中のお春と花と生きて再度出会えたことを喜んで。

しかし喜びにひたる間も無く景虎は兄晴景に呼び出された。

例の一連の書状の件の話であった。

実は春日山城へ来て初めての兄との会見だった。

兄は虎千代より20歳上 兄弟ではあるが年の差の離れた腹違いの兄弟であった。

酒ばかり飲んで政治を怠っているという良くない噂も聞かなくはなかった。

末っ子の景虎は少し甘やかされて育ったこともあり初めて会う長兄からの言葉に根拠はないが 淡い期待をしていた。

もしこのとき晴景が何か意味のない一言二言でも景虎にかけていれば景虎の晴景に対する心象も大きく変わっていたであろう。

しかし形式ばかりの挨拶が終わり次第 本題に無駄話をするわけもなく入ったため景虎はこの時点で晴景に対して少しがっかりしていた。

景虎は普段着、女装で晴景に面会した。

本庄実乃と金津新兵衛 栖吉長尾房景 景信親子が今までの経緯説明も兼ねて同伴していた。

晴景は噂どおり病弱とのことで顔色が悪かったが顔は端整でどことなく貴族のような感じもあったが終始 景虎の前では終始険しい表情を崩すことがなかった。兄とは言え20年の年の差のせいであるろう、威厳があった。なんか圧力を受けているようで景虎が苦手な雰囲気であった。晴景の後ろには守護の上杉定実が人形のように座っていた。本来は彼が越後の最高権力者であるが父為景の代以降は

ただの傀儡で、そのせいもあって正直、彼の印象は全くと言っているほど残らなかった。

晴景と面会しての結果は、嫁入りの件は保留、守護代である兄の許しを得ることなく勝手に元服し、景虎と名乗ったことについてもお咎めなし、その代わり今まで通り景虎として前線に立ってほしいとのことだった。また次回より面会する場合は「景虎らしく」男装で来るようにとの指示も出た。

新兵衛と景虎には大いに不満な内容だった。嫁入りの件が流れたのは逆に言えば男装するので当然であったが・・・、何よりも・・・男装してはいるが、妹にそのまま戦に行けと平然と言う晴景の神経は理解できなかつた。景虎にしても正直こんな野蛮な世界に足を突っ込んでいるのが不憫であった。

一度は強く断ろうと思った景虎であったが晴景の「景房兄たちの仇、越後の民の幸せのために尽力してほしい」の一言で何も言えなくなってしまった。

栃尾城の兵士や住民、途中の五郎兵衛の村の村民たちが自分のために身を挺してくれたとの念と彼らに伝えてあげたいとの景虎の気持ちのためだった。

景房兄たちの件もあった。しかし実は景虎は兄弟とはいえ腹違いの景房兄たちのことは殆んど知らなかつた。しかし奮戦し討ち死にした彼らの武士としての心構えを充分に感じ、好意を持っていた。そのため無名の土豪に討ち取られたことに対する名誉回復こそが景房兄たちに対するお返しになると思い、伊勢三郎の打倒は当然のこと、ついでに可能であれば越後では名のある黒田秀忠も打倒すれば景房兄たちの名誉回復も可能であろうと考えた。

晴景の求めも暗に黒田打倒まで奮戦せよとのことであった。

もつとも無名の土豪に攻められ真つ先に逃げ出したのは晴景たちであつたが・・

晴景との面会の帰り

「晴景様自ら前線に出ればよいのに・・まったく・・」

新兵衛が思わず本音を漏らした。

景虎は黙っていた。

「姫君に戦わせるなんて・・ まともではござらん・・」

秋山源蔵も言った。戸倉与八郎もうなずいていた。

「噂どおりの方だな・・」

栖吉の長尾親子も呆れ返っていた。

新兵衛は晴景たちが雲隠れのあげく空き家になつたら のこの春日山城に戻つてきて何食わぬ顔をしていることに不満だった。

「妹君に戦わせて自分は雲隠れなど兄以上に守護代 人としてあるまじき行為・・」

と露骨に憤激していた。

嫁入りの件が解決したのには安堵していたが、虎千代を男装させてまで戦わせている現状に終止符打つべくいろいろ思案を練っていたのが適わなかつたこともあつて余計に荒れていた。

実乃は黙っていた、が内心は安心していた。

実乃も新兵衛の不满には同調していた。ただ違いはあつた。

（そのまま永遠に引つ込んで景虎様に禅譲してくればよかつたもの・・人の邪魔をして・・）これが実乃の本音であつた。

危険を冒してここまでやってきたのだから、今更のこのこ出てきてもらつてははた迷惑だと。実乃の一番の希望は新兵衛 景虎とは正反対であるが・・現状維持であつた。

再度以前の通常の状態に戻ることが一番の懸念であつたため、そういう意味では実乃にとって多少邪魔はあるが、最も都合の良い形、

景虎が今まで通り活躍するという形での希望が叶ったのである。

景虎は実乃が黙っていたのが少し気にかかった。実乃がなんか少し嬉しそうな顔をしていたように感じたからだ。景虎は実乃を信用してはいたが心が読めないところがあると思っていた。

この面会の時であるが 実乃にとっては新しい懸案事項が追加でひとつ出来ていた。

上田長尾の長尾房長 政景 親子である。彼らは今回晴景たちを助けたと言う大きな実績を持っていた。彼らの狙いもおそらく実乃と同じであろう。

実乃は今回は表向きは黙っていたが彼らの動向にも目が離せなくなっていた。

こうして 景虎の春日山城の新しい生活が始まったわけであったが、後日 新兵衛と景虎だけで密かに晴景に面会した。

景虎は男装してまで戦に出されることに強い不満を持っていた。景房兄たちや栃尾の兵士 住民 五郎兵衛の村民の仇を討つことは了承していたが、そのため景虎を奮発させるための褒賞を晴景に密かに新兵衛 景虎は要求していた。そして伊勢三郎 黒田秀忠を打倒し 越後が平穏になった折には 景虎の希望であった 都行き約束を取り付けることに密かに成功したのであった。嫁入りも含めての片道切符で まだ晴景に子供はいなかったが 晴景の後継者争いにも一切干渉しないとの約束で 両者に利益のあるものであった。この書面は 晴景 景虎 新兵衛の間で密かに交わされ 実乃には知らされなかった。

## 衝撃

いつの間にか半年以上の月日が経っていた。

景虎は戦好きでなかったが晴景があまりに動かないため味方の中からもしびれをきらす声が出始め放っておけなくなっていた。

房景兄たちや栃尾の兵士 住民 五郎兵衛の村民の仇 伊勢三郎を討ち できればその後ろにいる黒田秀忠を討ち 実乃には内緒だが 都行き褒美を得ることが今の景虎の責務でもあるがなかなか肝心の晴景の腰が上がらなかった。

実は以前より晴景の重臣の直江景綱が守護代の出陣を散々求めていた。

しかし晴景は多忙と騒ぎを起こしたくない あと自分が出陣したくない これが最大の理由であろうが出兵を許さなかった。

景虎を担ぎ出してまで 晴景の出陣を促すと 逆になぜ景虎のような子供を担ぎ出してまでことをややこしくするのかと罵られる始末であった。

直江は腹が立つのを通り越しあきれ果てていたが 守護代の命令なしで勝手に軍を動かすことは三郎 黒田の討伐であつても私戦と見なされ 移り気な国人衆の離反を招く可能性があるので 軍を動かすこともできなかった。

弟 扱いの景虎にしても立場は同じであつた、兄である守護代 晴景の命令がないと何もできなかった。

景虎は自分の無力さと同時に権威や名分というものの大事さを思い知る次第であつた。

しかし結局は軍を動かすことになった。

再度 伊勢三郎が軍を動かしているとの情報が入ったためである。急遽動員令が発令された。



景虎は今回は男装の麗人として出発した。景虎専用の当世具足が今回は用意された。専用の当世具足は景虎の好みで作られたのだが、後の上杉軍の色を思い起こすような黒を基調とした重厚な色合いで、自慢の黒い振分髪は引立烏帽子の中に束ねた。

晴景の主力は直属の旗本 守護代の上杉定実から編入された千坂景長 上田長尾房長 政景親子 晴景重臣直江景綱  
景虎は本庄実乃 金津新兵衛 栖吉長尾景房 景信親子 色部勝長 齊藤朝信

合計1500人弱であった。

対する三郎軍は2000人強と前回の敗走兵をまとめ上げ、予想外に大軍を集めており蒲原郡の近くの砦に兵を集めているとのことであった、蒲原郡は黒田の黒滝城のすぐ側であった。

黒田の居城 黒滝城にも援軍の兵士が更にいるとの情報もあった。また黒滝城には越後一の武勇の柿崎景家の部隊も混じっているとの噂もあった。

数の上では春日山城側が完全に劣勢であった。敵の数に驚いたのか大将の晴景は病気との理由で突如出陣できなくなり代わりの景虎に軍の指揮という大役が回りこんでいた。

実乃や新兵衛たちだけでなく晴景直属の重臣の直江もこんな晴景を苦々しく思っていたが、兄は病弱だから・・・と単に思っていた景虎はあまり気にも留めていないようだった。

ちなみに年功で行けば大将は上田長尾房長が妥当であったが守護代の弟君とのことで景虎が指揮をすることになった。上田長尾が不平を言うてくるかと思われたが思いのほか何も反応が無かった。後で聞いたことだが上田長尾は負け戦になると読んでおり泥を被る

のを恐れたため無関心を決め込んでいたという。

早速景虎中心に作戦が練られることになった。

国人衆で大きな力を持つ揚北衆の中条藤資 枇杷島の宇佐美定満は態度を保留したままであった。そのため景虎は同じ揚北衆の色部を自城の平林城に 枇杷島の近くの刈羽の斉藤も自城の赤田城に貼り付かせて中条と宇佐美を牽制し動かせないようにした。 また晴景の重臣直江景綱が景虎に積極的に協力してくれた。景虎は直江がどのような人物か知らなかったが智将と名高い通り 財政奉行の大熊朝秀を景虎に通して、景虎が希望していた 装備などの調達に便宜を図ってくれた。大熊も景虎に好意的だったようで春日山城の南方の不動山城の山本寺定長にかけあってくれて信州 甲斐方面を固めてくれた、直江にはそのまま春日山城の護衛に入ってもらい 直江の居城の与板城は 黒滝城の近くだったのでそこを春日山城側の拠点として借り受けることにした。ちなみに直江の隠れた任務は晴景のお守りでもあった。こうして体制は一気に整った、

後で聞いたところ晴景は景虎が味方部隊を細かく分けていることに不満を漏らしていたという、しかし直江の説得で渋々ながら下がったと言う。直江も景虎に密かに注目していたのであった。兵力を分散したため 実際に三郎勢と戦う部隊は1000人程度になっていたが

準備が整い早速景虎率いる春日山城側は 城を出発した。

数の上ではかなり不利ではあったが初めての相手でないので景虎は思ったよりも悠然としていた。

景虎は戦局が三郎軍が黒田やその他の態度保留中の勢力と合流する前に決めなければいけないと考えていた、そのため速攻で黒田軍を叩く決心をしていた。また部隊が空きになっている 味方の居城、上田長尾や栖吉 栃尾などの越後南部への三郎軍の侵攻を防ぐ

ためにも必須であった。春日山軍は 三郎軍が居座るといふ黒滝城近辺方面に一気に移動を開始した、三郎も前回の栃尾城で子娘相手に苦戦したという噂が立っていたのが我慢できず また戦力差に自信があつたのだから、自ら出陣してこちらに真正面から向かつてきた。

兵を分散して少なくしたのは 実際に他勢力への牽制もあつたが景虎の相手を油断 おびき出す作戦のうちの一環でもあつた。

上田長尾や晴景直属の旗本からは倍数の敵にまともにぶつかると無謀と反対意見も多かったが景虎は構わず進撃することにした。景虎は必ず勝てる 必ず勝ると部隊に吹鼓した。理由は答えなかつたが。

進軍を開始して数日 間もなく三郎軍と接触するとの連絡が物見より入った。

2000人の大軍が前方で蠢いているのが視界に入ってきた。

三郎軍は待ち構えていたようで既に布陣しているようだった。

春日山軍は当初はもう少し離れて布陣する予定だったが景虎の指示で三郎軍から1kmほど比較的手前に布陣した。

今 噂の景虎公のこと、軍議でどのような奇策が出てくるのだろうかかと期待する声が多かったが意外にも正面から直接当たるといふ何も変哲の無い作戦だった。

上田長尾や晴景直属の旗本は反対意見を唱えたが負け戦の軍議で騒ぐこともないと思つたのであろうか しばらくして黙って出ていった。

攻撃時刻は夜半10時頃 夜襲をかける段取りであつた。

実乃や新兵衛 栖吉長尾親子は景虎のことだから何か奇策を隠しているのだからと信用していたが倍数の敵に直接当たるのはやはり少々心配ではあつた。

作戦は予定通り実施された。予想に反し特に景虎から追加の話は出なかった。

先陣の功もあるのでこれは上田長尾に譲り午後10時より交戦が始まった、

三郎軍も先読みしていたとばかりに反撃を開始した。

予想通りというか数の力で徐々に上田長尾軍が押された。

上田長尾以外の味方の軍も同様に苦戦しているようだった。

実乃や新兵衛たちも心配を始めた、

軍議の前に景虎が酒を飲んでいるとの報国があり、酔っているのではないかとの噂があった。大将が酔っているなど噂は前代未聞だった。

しばらくして実乃 新兵衛らが呼ばれた。

景虎のそばに一見農夫とおぼしき目つきの鋭い男が一人いた。

「？」

実乃と新兵衛は見たことのない顔であった。

しかし しばらくして直ぐにわかった。

(忍びの者か・・・)

景虎から 至急腕利きの騎馬武者を30騎ほど 貸してほしいとのことだった。

この農夫の後についていき到着場所で待機するようにとのことだった。

すぐに 30騎の屈強な騎馬武者が呼び集められた。

栃尾城で活躍した 秋山源蔵 戸倉与八郎も入っている。

実乃はようやく意味が分かった。

実乃は栃尾城の戦いのときを思い出した。

三郎は栃尾城から遠くに本陣を構えていた。確かにあの時は本陣はから空きであった。

「作戦は良く分かりますが・・・妙案かと・・・しかしそのように事は

運ぶとは思えませんぞ」

実乃は景虎の自尊心を傷つけないよう 遠まわしに 諭すように言った。

「大丈夫・・・あの男は前もそうでしたから・・・」

景虎は静かに言った。

通常の戦で本陣が空になることなどまずない、必ず護衛が付くはずである、前回は単なる偶然の可能性の方が高かった。

実乃たちの心配をよそに別働隊は出発した。作戦が失敗すれば敗戦確実であった。

出発前 実乃は景虎が源蔵に何か耳打ちしたあと 馬ぐつわ を各騎に渡していたのが少し気になったが。

別働隊が出発して間もなく春日山軍が三郎軍に押されっぱなしで、こちらの景虎本陣に敵本隊が迫っているとの情報が入ってきた。

しかし景虎は微動だにしない。

「殿・・・少し危なくなってきたかと・・・」

本陣を直接 護衛する上杉軍千坂隊からも動揺が出始めていた。

春日山軍は数の差のせいでやはり終始押されっぱなしで既に後退につぐ後退で間も無く本陣が前線に出ようかとしていた。

「殿！ 撤退を！」

前線の兵士が飛び込んできた。

先ほどの別働隊からは何の連絡もなく、枋尾城のときに乱入してきた三郎軍の騎馬隊のように返り討ちにあつた可能性もあつた。

実乃もさすがに

「危険です！ 撤収を！」

と進言したが

「もうすぐだ もうすぐ・・・」

景虎は落ち着いた様子で目を閉じたまま足を組み少し笑みを浮かべみながら悠然と答えた。

外では今回 景虎を守るべく親衛隊として守護の上杉定実から借り

受けた上杉軍千坂隊と三郎軍の接触が始まったらしく刀がぶつかる音がすぐ側まで聞こえるようになった。

ひとときわ大声で指揮する声が本陣にもはっきり聞こえるようになった。

「撤退するな！耐えろ！耐えろ！」

弥太郎は上杉軍千坂隊でも武名の誉れが高い男である。

聞き覚えのある名前であるがああ弥太郎とは当然別人である。

景虎はこの弥太郎ともこの後長い付き合いになるとはこの時点では思わなかっただろうが。

弥太郎率いる上杉軍千坂隊は必死になって防戦しているようだったがずるずる押され敵の殺気がすぐ側まで感じられる事態になっていた。

「殿！ 撤退を！」

みな焦りの色を隠せなかった。

今まで黙っていた新兵衛も

「姫……！」

「……辞世の句か……うむ……」

景虎は目を閉じたまま涼しい顔をして何か独り言を言っているようだった。

「……！？」

（まさかと思うが……このようなときに悪酔いしているのであるのか……）

新兵衛は酒の件を少し甘やかしていたことを今更ながら少し後悔した。

聞こえた者は一堂あつけにとられていたがこんな大将にはついていけないと堂々と本陣から逃げ出すものまで出だした。

新兵衛は最悪 虎千代を担いで脱出することを覚悟した。

そつと景虎の後ろに回り担ごうとしたそのときである、

急に三郎軍の圧力が緩んだ と思うと三郎軍内で動揺の入ったざわ

めきが起こり出した。

そしてすごい勢いで撤退を開始したのである。

撤退というより逃げ帰る 崩壊に近い感じであった。

「・・・何事か起きたんじゃ・・・??」

弥太郎たち上杉軍千坂隊の兵士は安堵と同時に何が起きたのかさっぱりわからず あっけにとられていた。

ほどなくして戦闘は終了して 騎馬別働隊が戻ってきた、

「敵將討ち取ったり!」

源蔵が興奮しながらこちらにむかってきた。

「・・・??」

事情を知らされていない弥太郎たちはますます何が起こったのかわからない。

一方 新兵衛は ほっ と胸を撫で下ろした。

(やれやれ・・・よくわからんが・・・うまくいったか・・・)

そして

「景虎様は運がついてる・・・しかしこれも 実力の内であろう・・・  
実乃も一安心したようだった。

二人はお互いに顔を合わせると少々困った主君の方を苦笑いしながら見た。

景虎は相変わらず目を閉じたまま足を組み少し笑みを浮かべながら  
穏やかな表情であった。

しかしよくみると目元は涙を浮かべ ひざは震えていた。

景虎は首検分は実乃と新兵衛らに任せた。

これだけはこの後も景虎は一生他人任せだったという。

討ち取った源蔵には 感状を送った。

景虎は感状を良く出しており第4回川中島の血染めの感状など現在も残存しているものがあるという。

首級は伊勢三郎の物だった。

後で聞くと三郎側の本陣は前回同様本体より離れて展開しており山を背面に布陣し 護衛もすっかりつけていたという、しかし本体が前進しすぎたことにより本陣との間が伸び過ぎ、本陣も本隊を追うように移動を開始した、その一瞬の隙を狙い、山中に潜ませていた別働隊を一気に駆け降ろして攻撃したとのことだった。馬ぐつわは潜伏中に馬が鳴かないように用意したものであった。一緒にいた農夫は忍びの者で常に三郎軍の動きを見張って別働隊の隠匿場所や進路を確保していたという。景虎は源平合戦時の一の谷の合戦をイメージして、別働隊を攻撃本隊 自らを囮隊としてうまく使ったのであった。

ちなみに景虎であるが後で聞いたところ恐怖を紛らわすために途中から少し飲みすぎてやはりよく状況を覚えていないとのことであった。もちろんこの旨は内緒であったが。

しかし今回の戦で 先陣とは言え無断で囮に使われた上田長尾からは不満の声が出ていた、

そのため景虎は実乃と新兵衛と一緒に、上田長尾の房長 政景親子へのお礼、今後の協調を兼ねて挨拶に行くことになった。

景虎ではなく守護代晴景の重臣であったが 守護代の弟だからよいであろうと直江が気を利かせて同伴してくれた。

長尾房長は景虎たちと軽く挨拶した後 体調が優れないとすぐに引っ込んでしまい、政景が

その後を対応した。政景は姉の仙桃院の夫であったので景虎は親近感を持っていたが 政景は遠慮しているのか終始へりくだった態度であった。

上田長尾は越後の勢力では南部の大勢力であった。

実乃の居城 栃尾にも近く気が抜けない存在であった。

政景の妻の仙桃院とその妹の景虎の母は同じ虎午前 兄の晴景は違



うので その縁のよしみで 実乃は上田長尾を景虎寄りに持つて行きたかったのだが 政景は律儀にも守護代 晴景寄りの姿勢を崩さなかつた。

実乃や景虎は政景の態度にちよつとがっかりしていたが 直江によると政景は父房長への気兼ねがあるので仕方が無いのではと言つていた。

事実 房長は晴景の有力な後見人でもあつた。

結局 上田長尾との協調は不調に終わつたが房長 政景親子の頑なな忠義心は見上げたものでもあつた。

## 距離

伊勢三郎軍との合戦で景虎は越後では時の人となっていた。

日和見の多い国人衆の中も帰参するものが相次いだ。

北条の北条高広きたしよつや三條の山吉豊守も帰参してきて春日山城の軍の層が厚くなってきた。

守護代は晴景なので形式的には晴景に帰参するのであるが 景虎の方が人気があつたので景虎に帰参してから晴景に帰参する者が後を絶たず 晴景側は面白くなかつた。

実乃などは

「守護代様は合戦にでないのだから至極当然のこと・・・」

と気にもとめていないようだったが景虎も兄にねたまれているという噂はあまり気分の良いものではなかつた。

また自分の噂も気になっていた、面会時は男装で行っていたのだがそのため越後の景虎姫は男装の趣味があるとの妙な噂が国内で流れ 当初景虎が懸念した事態以上に複雑な展開になりつつあつた。もちろんこのまま 男装の麗人に祭り上げられ 武士になる気など景虎はさらさらなかつたが。

新兵衛も同じであつた。この異常事態を早く終わらせたいと考えていた。

晴景にとつても景虎の人気はねたましいところであつたが越後を束ねるには絶好の目印であつたので最大限働いてもらうつもりであつた。景虎も元に戻ることに關しては例の約束もあり 越後を統一してからと譲っていた、栃尾の籠城時の件や途中の集落で犠牲になつた兵士 住民 房景兄たちのためでもあつた。

黒田の打倒において一番の難題は 態度をはつきりしてない宇佐美定満と三郎の乱の時は参加していないようであつたが柿崎景家の件

だった、地理的な問題以上に宇佐美は智将として名高く計算高い策士として有名だった、父為景も宇佐美のおかげで苦酸をなめさせられたと聞いたことがあった。

またもう一人の柿崎も越後一の猛将と有名な男であった。情報によると柿崎は景虎への帰参を希望しているとのことであったが彼の妻が今回の騒動の首謀者 黒田秀忠の娘とのことであった。そのため柿崎は黒田に出兵を求められて板ばさみになっているとのことであった。

景虎はこの二人を可能であれば味方に引き入れたいと考えていた、そのためこの二人とは直接出向いてでも会うことにした。

まずは宇佐美から交渉に入ることにした。

実は実乃や直江は難色を示した。理由は智将として有名な宇佐美だけあって 何を考えているか分からないうえ 宇佐美は景虎の父為景に実父房忠を殺された経緯もあり春日山城側を恨んでいるという情報があったからである。直接会うのは危険すぎると。

しかし景虎の気持ちは逆であった。そのような人間であればますます会ってみたいと。敵にするくらいならなんとしても味方にしたいと。

結局景虎の熱意に負けてこちらか出向くことになった。護衛の部隊も景虎の宇佐美にこちらの誠意を見せるためとの理由で 少数で行くことになった。

本庄実乃 金津新兵衛の景虎の重臣以外に今回は晴景の重臣であるが直江景綱や千坂景長までもが同伴してくれることになった。直江や千坂は口では出さなかったが景虎を重視していたので晴景に無理やり断りを入れて 来てくれたのであった。こちらの本気度を見せるため以外にも 宇佐美に対して 景虎に手出しすることは守護代晴景にも逆らうことになるとの暗黙の脅しであった。

面会場所は本成寺に決定した。三条長尾の居城に近いので景虎にと

って安全との理由だった。何かあれば三条長尾の駐在軍に即応可能でもあった。宇佐美の居城 琵琶島にも近い。宇佐美も特に何も言って来なかった。宇佐美からすれば戦う気などはないと言いたげであった。

景虎は早めに出発して宇佐美がどのように来るのか様子を見ようと考えていた、しかし予想に反し宇佐美は景虎の到着する更に前に到着していた。

「噂どおりの策士ですな・・・」  
直江が感心していた。

宇佐美は年齢50前後と言う。策士であるが物腰は意外と柔らかくそのように見えないのが特徴だと直江が言った。

景虎一行はゆっくりと本成寺に向かっていた。

景虎は実乃や新兵衛 直江や干坂の気持ちを知っているのか知らないのか察しがつかなかったが、普段どおりの涼しい顔をしていた。

が もちろん景虎以外の一行はみな緊張していた。もし宇佐美が襲ってきたらこんな少数の護衛では一巻の終わりであったからである。

一方の宇佐美は寺に先回りして景虎の様子を密かに本成寺の通用門の隙間から眺めていた。

景虎は薄い黄金色の直垂に侍烏帽子をかぶり髪は烏帽子内に束ねているようだった。

宇佐美は景虎のことを色々と事前に調べていた。男装しているが女子であると。

それは景虎たちを見てすぐに確信した。下手な男装だと。女子として見た目が良いのであろうが男装しにくいのであろうと・・・

景虎を見ると率直な感想を付き添いの者に漏らした。

「男装の麗人とは噂通りだが・・・しかし思ったよりも少数で来たな・・・

」

「誠意を見せているんでしょうか・・・？」

「フム・・・それともあんな少数で来るのは腕に自信があるのかな・・・？」

「戦では負け知らずとのことですが・・・」

「とてもそんな風に見えんが・・・」

「戦になると豹変するとか・・・」

宇佐美は苦笑した。

付き添いは本状実乃 金津新兵衛 直江景綱 千坂景長 と言う。

景虎 晴景陣営 春日山側の重鎮が勢揃いに違いなかった。それだけ向こうも本気とのことであろうと またその意味も宇佐美もすぐに理解した。

宇佐美は50騎程の騎馬隊を密かに引き連れてきていた。景虎たちの動きが読めないので念入れである。景虎たちが思わぬ少数で来た以上その気になれば葬ることも可能でもあった。彼らを討ち取れば宇佐美が最後の権力を手に入れることも不可能でもなかった。

しかしその気にならなかった。守護代たちに盾突く気持ちも毛頭なかったが子女に不意打ちなど自分の噂にもかかわるし、なによりも景虎が涼しい顔をしていたので何か妙なことをたくらんでいるのではないかと・・・と疑ったのである。

宇佐美は本心では晴景に帰参するつもりはなかったが時の人、景虎は気にはなっていた。

人物によっては帰参しても良いと考えていた。為景の件も水に流そうと考えていた。為景の子供の代まで父房忠の件でこだわるのは大気ない。

それにしても女伊達らに戦場を駆け回っていると聞いたので もつとがっしりした勇猛果敢な人物と予想していたのだが華奢な普通の子女だったのが意外だった。影武者で本物が近くに潜んでいるのではと疑ったほどであった。

しかしそのまま寺に入ってきたのでやはり本人たちのようであった。

やがて面会時間になった。

宇佐美は

（影武者かどうか どのように判断するかのう・・・いや その前に男装しているから若君と呼べばよいかのう・・・）  
など いろいろ考えながら 面会の間に向かった。

「失礼いたしまする・・・」

宇佐美はゆつくり襖を開けて中に入った。

そして景虎を見て仰天した。

さっきの男装の麗人とは違い姫君の格好で待ち構えていたのである。もちろん景虎にとっては普段着でお気に入りである紅地雪持柳繡襟辻ヶ花染胴服をさらりと着込なしていた。

しかも太刀持ちなどの護衛も無く単身であった。

「・・・！」

予想外の展開で宇佐美は言葉を失った。

景虎が先に宇佐美に声をかけた。

「宇佐美殿 お忙しい中お呼び出しいたしました すみませんでしたが、今日は本音でお話したいと思ひまして普段着のままでお邪魔させていただきました」

「・・・は はあ」

宇佐美は言葉を失ったままであった。

景虎は先に深々とお辞儀をし。

宇佐美も慌てて返した。

「宇佐美殿 父の代からあなたのごことは色々聞いております・・・」  
宇佐美は為景の件を先に言われると思わなかった。

（急に面倒なところをうまく突いてきおるわ・・・狙って喋ってるんかのう・・・？）

宇佐美は一瞬返答に戸惑ったが宇佐美が返答する間もなく景虎は続

けた。

「どうぞもう少し前に来ていただけませんかでしょうか 越後の将来についてゆっくりお話ししましょう お茶をご用意いたしますので・・・」

景虎が続けた。

「あ・・・ はっ・・・！すみません！」

宇佐美は年甲斐も無く慌てて前に移動した。このように慌てるなど久々であった。

(やられた・・・一本とられた・・・)

宇佐美は感心した。人は見かけに拠らず とはこのことだった。

その後景虎からの頼みで為景時代の話など なぜか色々長々と昔の話を景虎にした。

景虎がなぜこんな話を聞きたがっているのか宇佐美も良くはわからなかったが、年の差のせいか 宇佐美もそれほど違和感なく彼女とは話が出来た。

景虎も実は深くは考えていなかった。父を手こずらせた策士である彼に興味があったのはもちろんだが、実際に彼の武勇伝 智恵話を単に聞きたいだけであった。

景虎も宇佐美を引き込む決定的な物は全く持っていなかった。俗な言い方であるが宇佐美が自分を気に入ってくれて これで味方になれば運が良い 程度にしか考えていなかった。

結局 宇佐美も自分もなんだかよく分からないうちに景虎たちへの帰参を約束していた。

また柿崎の取り込みも約束した。

「宇佐美殿 本日はありがとうございます ございました しかし若年者の私にそのような気遣いは結構です 普段どおりに今後は接していただいで結構です」

「は はあ」

「では今後とも宜しくお願いいたします」

「はい じじいにお任せを・・・」

景虎は宇佐美にお辞儀をして無事会談を終わらせた。

そしてまた男装に戻ったかと思うとさっさと春日山城に帰っていった。

面談が終わった後 宇佐美は真剣に考えていた。

（ようやく越後も統一されるのか・・・しかもあのような小娘に・・・驚いた・・・）

宇佐美が帰参するとの話はすぐに帰りの道中で伝えられた。正直即答が得られると思わなかったのでみんな驚いていた。

直江が景虎に聞いてきた。

直江はあの宇佐美がこうも簡単に帰参するとは思っていなかった。どのようにして彼を説得したのかと興味深く聞いてきた。

景虎はあっさり答えた。

「宇佐美の昔話を一杯聞きたいから教えてほしいとお願いしただけ」と答えた。

「・・・??？」

みんな良く分からなかったがそれ以上は聞かなかった。

翌日 春日山城に戻った景虎は早速晴景に報告した。しかし晴景の返事は意外なものであった。

帰参するならなぜ自分からこちらに赴かないのか、信用できないとのことであった。

景虎は基本的におとなしい性格であったが男世界に入ったせいかわれない環境で鬱憤がたまっているのか最近若干癩癪持ち気味になっていた。

景虎は晴景の言い草に思わずむっとして噛み付こうとした。

「本人がそう言いましたからそれでいいじゃないですか・・・兄上は・・・」



景虎の、これは元々であつたが ぶしつけで物怖じしない 言い方は晴景の癪にも触つていた。最近ささいなことで晴景 景虎の口論が始まるが多かつた。

景虎がすべてを言い切らないうちにすかさずに割つて入つたのは実乃 直江だつた。

「・・・殿！宇佐美は近いうちに必ず来ます！柿崎を取り込もうと動いてもらつていたので帰参が遅れているだけです！しばしお待ちを！」

実乃が景虎の裾を見えないよう引つ張りながらまくしたてた。

裾を引つ張つてゐるのは馬を止めるのと同じこれ以上しゃべるなとの合図であつた。

「景虎様も宇佐美を晴景様に帰参させようと必死に話し合い ようやく宇佐美を丸めこんだ次第です、ご理解を・・・」

直江も続いた。

景虎は口を閉ざした。

晴景はしばらく黙つていたが一言

「ご苦労であつた」

と言ひ残し 不機嫌そうな顔のまま奥に引つ込んでしまった。

(ふう・・・やれやれ・・・)

実乃 直江 千坂は安堵した。

安堵したのもつかの間景虎をちらりとみると目を閉じて黙つていたが顔は険しい表情だつた。

新兵衛も目を閉じたまま黙つたまま何も言わなかつた。

晴景と景虎の仲違いの件は春日山城内では密かに噂になつていた。

いつか衝突するのではないかとの危惧は家臣団の中からも出ていた。

その日の夕方景虎は縁側で静かに酒を飲んでた。毎日飲むのはこの頃には日課になつていたが日ごろの憂さ晴らしもあつた。深酒は滅多にしなかつたが気分が悪い日などは酒の量が多くなつてしまひ

次の日に残ることもしばしあった。

## 勅旨

宇佐美定満と面会してから一ヶ月ほどたったある日 朝廷の勅旨が越後に来るとの情報が入った。朝廷は戦国時代に入ってから金銭に困窮し 現代風に言えば勅旨なる部隊が官位などの押し売りで全国を回っていた。公家は武士によってその生活基盤を蝕まれていったのだがそれでも朝廷の権威は一応健在であった。

大名によっては歓迎しない者もいたが越後のように権威に敏感な地域は勅旨を歓迎して受け入れた。普段は怠惰な晴景もこの日はかりは珍しく色々細かく指図して彼らを接待すべく動き回っていた。

景虎も都に憧れを抱いていたのでこの日は珍しく兄の言うことを良く効き あれやこれやと動き回っていた。

景虎はそれを見て兄が公家に生まれていればどんなに良かっただろうと思った。

いや、自分も武家の家に生まれず公家の家に生まれていればもっと違っていたかもしれない、兄との軋轢もなく大好きな書物などに囲まれてもっと幸せだったかもしれないなどあらぬ想像などしていた。

しかしこの勅旨の来場は景虎にたちに思わぬ副産物をもたらした。

勅旨が来ているというので今まで帰参しなかった国人衆が挨拶がてらに春日山城にやってきたのである。

しかしすぐに全面的に喜べない問題が起きた。

最後までこの立場をはつきりさせていなかった揚北衆の大物 中条藤資が勅旨の挨拶のついでに帰参に来たのである。中条は 父為景の代ではいろいろあったようだが最後は為景に尽くしてくれたという。しかし晴景への帰参は拒否した。景虎に帰参しに来たのだから当然何を言うかと。中条は50近く 年の割には元気で快活 物事をはつきり言う男であった。もちろん景虎にも遠慮なしに物をずけずけ

と言う。はたから見れば単なる無礼者であつたが景虎は自分も物の言い方がなつていない人間と認識していたのでそれは気に留めなかつた。晴景への帰参拒否の件は閉口したが頑として聞いてくれなかつたので景虎もそれ以上はあきらめることにした。

宇佐美もほどなくやつて来た、しかも柿崎景家を連れてきていた。柿崎は噂どおりの体の大きいかにも武勇に優れた大男であつた。宇佐美から少し時間をとつてもらえないかとのことで柿崎と話をすることにした。

景虎の南三の丸の小さな屋敷で話は始められた。

柿崎は挨拶の後 深々と頭を下げて話を切り出した。

「実は・・私の妻が黒田の娘でして・・」

大男らしからぬ 話し方であつたが気持ちは景虎には痛いほど分かつた。

宇佐美の取り計らいが功をなし 柿崎帰参の件は既に晴景に報告されていた。

処遇については晴景はすでに決めており景虎にも指示を出していた。晴景は柿崎の帰参は許したが妻とは離別して黒田家に戻すように指示を出していた、

柿崎は愛妻家と有名だつた。別離するのが忍びないのは当然ながら黒滝城に戻したら今回の戦に巻き込まれて危険でもあつた、もちろん自分は景虎陣営なので

出兵命令がでたら出兵するが自分の手で妻の実家 もしくは妻に傷をつけるのがどうしても出来ないとのことだつた。

そこで厚かましい代案ではあつたが妻は黒田家に戻すが自分の出兵は今回は見逃してもらえないかとのことだつた。

黒田陣営にも絶対に参加しないとのことであつた。

景虎は兄の晴景の判断が必要なので即答は避けた。

しかし宇佐美と柿崎は

「我々は景虎様に帰参したので景虎様がお許し頂けませんでしょうか」

とこちらも一歩も引かなかった。

要は宇佐美も柿崎も中条と同じく景虎に帰参したのであって晴景に帰参したつもりはない。点を強調していた。守護代に帰参しないで守護代の弟にのみ帰参する、彼らは一種の含みの意味を持たせていたのであったが景虎は意識してそれを見ない振りをした。自分にはその気はないし、晴景からすれば翻意を持ってしていると疑われても仕方が無かったからである。しかし宇佐美と柿崎ももちろん中条も今後を考えてどうしても味方にしておきたかった。

晴景に帰参しない点は難点であったが、自分に帰参するのであれば後はどうにかなるであろうと、景虎の甘さでもあるが、そのように判断し、結局景虎は了承した。しかも景虎の優しさから来る私情が入ってしまった、晴景が命令していた柿崎の妻の離別も必要なし、今まで通り仲良く暮らすが良いと答えてしまった。

晴景には事後でこれらの件の報告しようと思ったが景虎も負い目を少し感じていたようで気は重かった。

結局景虎はこの2件の報告を晴景になかなかあげることが出来なかったため景虎は後で大問題を起こすことになる。

## 外敵内敵

黒田軍であるが今回は春日山城から先手を打つことにした。時間が経つことによつて戦力が回復することを防ぐためである。忍者を使い黒田の居城 黒滝城下に噂を流すことにした。姫若子に黒田が怯えあがっていると。

景虎の方針は籠城させることなく外におびき出し戦うことであつた。籠城する側に立つたことのある景虎にとつて籠城戦の攻め手は面倒なのは重々承知していたからだ、またその一方 降伏の勧告も引き続き行われた。

黒田も城下町で噂が立っているのは知っていた、しかし今回は籠城を決めていた、ようやく相手が只者ではないと分かつたからである。

黒田軍の攻略のため 軍が集められた。

数の上では完全に今回は春日山側が上回っていた。おそらく2500人 黒田の倍以上の戦力を集めることが出来た、黒田勢は敗戦に次ぐ敗戦で兵力が落ち1000人以下まで戦力が落ちていた。これはもちろん 晴景ではなく景虎たちの努力の賜物である。

越後の国人衆は黒田以外はほぼすべて春日山陣営の味方についていた、黒田を破れば大物国人衆の抵抗は皆無になり 越後の統一は目前であつた、今回は圧倒的優勢を受けて守護代晴景自ら出陣のとことだつた。

軍議が開かれ攻略方法が検討されたが圧倒的優勢をうけて 景虎軍を先頭にして立て籠もる黒田勢に集中攻撃をかけての撃破が提案された。晴景も乗り気であつた。数字の理屈の上では突破も可能ではあつたが むやみやたらに突撃していたずらに犠牲を出すような戦法は景虎の意に沿わなかつた。栃尾城での三郎軍のようになりたく

なかった。

景虎は真つ先に例のぶしつけな口調で反対した。

「敵より数が多いから突つ込めなど馬鹿げています、三郎軍の二の舞になるのはごめんです・・・」

晴景の顔色はみるみる悪化して行つた。

そこに思わぬ助け船が入つた。

「いやはや 景虎様に先陣の功を与えてくださった晴景様の心遣いに我らは感謝感激しております、でも例え鼠でも追い込まれた鼠は恐いですな、それに今回は晴景様の勝利は確実ですので大将はどっしり構えていただいて、あとはわしらにお任せ願えませんでしょうかのう・・・」

宇佐美が例の柔らかい口調で語つた。

「何か妙案でもあるのか？」

厳しい口調で質問が入つた。

質問したのは上田の長尾政景であつた。

「いやはや ワシのような老人は山登りはキツイからのう・・・ホレワシの城は平地なんで登り慣れてないんじゃない・・・下に来るまでゆっくり待とうかと・・・」

軽い笑いが漏れた、晴景の機嫌も幾分か直つたようであつた。

政景は黙つたままであつたが。

晴景はまだ何か言いたそうだったが多少機嫌が直つたようでそれ以上は何も言わなかつた。

結局今回は兵糧攻めでゆっくり行くことになつた。しかし後で聞いたところ景虎の人気をねたみ一番危険な本体中央突破を誰かが仕向けたと噂がどこからとも流れてきて 景虎は越後統一前にもかかわらず越後国人衆の足の引っ張り合いに辟易するのであつた。噂の元については気にしないことにした。景虎は一生武人であるつもりが無かつたからである。

景虎は今回は宇佐美に礼を言った、宇佐美も大人の言い回しなら気が済むまで教えて差し上げますと笑って答えてくれた。

このような経緯もあり 直江の判断であったが 春日山側軍内部での いざこざを防ぐため晴景が大将の本軍と 景虎が率いる副軍に部隊を分けることになった。

編成であったが当初は

景虎の副軍は 本庄実乃 金津新兵衛 栖吉長尾景房 景信親子  
色部勝長 斉藤朝信 北条高広 山吉豊守 宇佐美定満

晴景の本軍は直属の旗本 上田長尾房長 政景親子 上条定憲 直江景綱 守護代の上杉定実から編入された千坂景長

であったが実は兵力配分ではどうしても景虎側の方の人数が多くなり 本軍と副軍の数が入れ替わってしまうとういうあまり格好が付かない事態が起こったので無理を言っ

て色部勝長 斉藤朝信 宇佐美定満は晴景の方の本軍に廻ってもらったことになった。

しかし宇佐美は頑として受け入れず結局 山吉豊守と交代してもらうことになった。

宇佐美が頑として受け入れなかった理由は 帰参の件と景虎は思っていたが 別の理由を景虎が知るのもう少し先のことであった。

ひとまず黒滝城を包囲すべく春日山城側は守護代自ら出陣、出発した。



ところがこの時ちよつとした事件が起きた。

景虎が体調不調を訴えたため景虎本人の春日山城の出発を一週間ほど遅らせることになってしまった。景虎が出ないのであればと副軍も出陣を見合わせてしまった。そのため晴景の本軍だけ先行して出発したのだが 同時に中条藤資が 新発田綱貞ら揚北衆を率いて 1000人強が進軍を始めたとの情報が急遽入ってきた。景虎に中条は帰参の意思を示していたのだが景虎が晴景に報告していなかったために動揺した晴景が春日山城に戻ってきてしまったのであった。当然本軍も一緒についてくるように戻ってきた。

中条軍はそのまま黒滝城を通り過ぎて春日山城に向かっていったようだった。

寢床に籠っていた景虎にもすぐに報告が入った、

(しまった・・・兄に報告を・・・)

後の祭りであった。

しかし何も知らない黒田軍は中条軍が春日山城に向かっていているとの報告を受けて 中条軍が春日山城を攻撃するのかもしれないと思つたよつで本隊を城の外に出し中条軍を追いかけはじめたとの報告も同時に入ってきた。

春日山城に戻ってきた本軍は大騒ぎであった、大将自ら逃げ出したと・・・

また本軍は外に出て中条軍を迎え撃てやの籠城だの混乱していた。

景虎は戻ってきた宇佐美 直江をつかまえると 事情を説明した、そして晴景に経緯の説明を依頼した、口下手な自分より二人の方がうまく説明してくれると考えたからであった。景虎も大急ぎで出発の準備を始めた。

景虎は全快ではなかったが、不甲斐無い兄に変わりすぐに軍を指揮することになった。

大急ぎで自分専用の黒い当世具足を着込むと防寒と緊張の震えを見られないよう純白の越後上布を肩の周りにスカーフのようにぐるりと巻いた。怖さを紛らわす酒は体調が悪いので控えることにした。

本軍が混乱しているので手持ちの副軍だけで動かすことにした。ただ特に武勇に秀でた色部と斉藤は呼び戻した。

景虎も正直、中条藤資が何を考えているのか分からなかったが、あの時の中条の言葉を信じて伝令を中条軍に飛ばした。伝令は

（そのまま春日山まで向かえ、背後に黒田軍を追いつかせるようにゆっくり進め）であつた。

一方副軍の騎馬隊を至急集めた。晴景に事情を知らせていなかったのも景虎側の手持ちのみで数は200騎程と少数であつた。

景虎は深追いしないように厳命した、脅かすだけで充分であると、追い込まれた部隊が恐ろしい力を発揮することは分かつていた、宇佐美が言っていた窮鼠猫を噛むである。要は黒田軍が壊走すればよかつたのであつた。

命令は、すぐに出発し、夜陰に紛れて黒田軍の背後に密かに回ることであつた。

騎馬隊の指揮は色部、斉藤に任せた。源蔵、戸倉たちも愛馬にまたがり一緒に大急ぎで出発していった。

景虎たちも中条軍と合流すべく残りの足軽中心の部隊で先陣に北条を立て、急いで城を出発した。

中条軍からは返答は来なかった。

もし中条藤資が約束を守らなかつたら戦局は流動的になるところか、戦力を分散しているこちらの不利は否めなかつた。

中条軍に再度伝令を飛ばし景虎軍と合流次第、急反転することを命じた。

別働の騎馬隊と黒田軍を挟み撃ちにする作戦であった。

しかしまたも返事はなかった。

いやな空気が流れ出していた。

(中条に一杯食わされたか・・・)

景虎は一瞬思った。

部隊は北条高広を先頭に通常の縦長の進軍形を取っていた。

「部隊を横一列に展開して迎撃の態勢に切り替えますか？」  
実乃が万が一に備えて提案してきた。

景虎は一瞬迷ったそぶりを見せたが

「そのまま・・・」

と現状維持を命令した。

先頭を進む北条軍は緊張していた。

中条は年齢50前後の老武者だが策士と有名だった。

腹の中が読めない上腕も立つ男だった。

景虎からそのまま進むよう指示が入っていたが現在の縦一直線の進行状態のまま中条軍が襲ってきたら一巻の終わりであった。

そのとき後方から騎馬が単独で一騎追いかけてきたかと思うと北条高広の真横に並んだ。

景虎その人だった。

「何をやってるんです！」

北条は思わず怒鳴ってしまった。

大将自ら最前線に出るとはあまりにも軽率と思ったからである。

しばらくして実乃 新兵衛までもが慌ててやって来た。もちろん景虎を最前線から後方へ引き戻すためである。

北条が啖呵を切った。北条高広は 越後でも 無双の勇士と評判の将であった。しかし言動に軽はずみな点があり 景虎自らも心配するほどであった。

「邪魔になる！お下がりを！」

北条は声を荒げた。

景虎は一瞬北条を睨みつけると

「手招きされている・・・下がれない・・・」  
と返した。

「はあ？」

北条は真顔で聞き返してしまった。

「中条め・・・私を試してる・・・絶対に下がらない・・・」

景虎はいつもと違う少し怖さが混じった真剣な顔で中条軍を睨みつけながら言った。

(・・・姫はすぐに熱くなるというが なるほど・・・)

北条は景虎の普段とは違う表情に一瞬驚いたが 内心は少し呆れていた。

実乃と 新兵衛は何か言おうとしたが黙りこんでしまった。

こうなったら景虎は 頑として聞かないのを分かっているからだ。

中条軍からは相変わらず連絡がなかった、

しかし やがて彼らの姿がはつきり 視界に入ってきた。

景虎軍との合流直前地点に横に部隊を展開して停止していた。槍をこちらに向け歓迎しているようには見えなかった。

中条軍の背後には黒田軍の姿も見えてきた。

黒田軍は到着したばかりで隊列を展開している最中であった。

「今なら間に合います！横展開 許可を！」

北条がたまりかねて景虎に声をかけた。

「・・・無用・・・」

景虎は静かに答えた。

（・・・チツ！）

北条は思わず舌打ちしそうになったが抑えた。

しかし部隊の中でも動揺が起き始め黙っているわけにいかなくなっていた。

北条がまくしたてた。

「相手の腹の中が解らないのに進むなど無謀！今ここで展開しないと奴らに襲われたら迎撃も出来ずに犬死にですぞ！」

「無用！」

景虎は普通の声量だが強い口調で再度答えた。

（小娘が！）

北条はかっとなつて口を開こうとしたとき 誰かが裾を引っ張った。実乃であった。

黙って首を静かに横に振っていた。

景虎が静かに話し出した。

「父為景と中条藤資はいろいろあったそうだが中条は最後まで父に尽くしてくれたそうだ・・・信じたい・・・」

「・・・分かりました！ご命令であれば・・・！」

北条は渋々であったが ようやく引き下がった。

景虎は引き続き前進を命じた。

何とも言えぬ重い沈黙と緊張が流れていた。

間もなく中条軍と景虎軍が接触しようとしたときであった。

「反転！」

中条軍の中から大きな声が突然響きつた。

中条藤資本人の声であった。50前後の声とは思えない快活な通る声であった。

中条軍が景虎たちの目の前で振り返り反転し 背中を景虎たちに見せた、

中条の号令が続いてこだました。

「やってまえ！」

やがて中条軍が反転を終了するかと思うと さっきまでは自分たちの背後にいた黒田軍を襲い始めた。

景虎もすぐに号令をかけた。

「中条に遅れをとるな！続け！」

「部隊横展開！さっさとせんか！」

北条も大声を出した。

中条軍を追いかけるように景虎勢も部隊を展開して攻撃に入った。

返答の使者が来なかったので一時はどうなるか分からなかったが中条は約束を守ってくれた。

「ふう・・・やれやれ・・・まったく・・・中条の奴 驚かせやがって・・・」

新兵衛がため息混じりで声をあげた。

景虎 北条も思わずため息を漏らしてしまった。

一安心であった。

「高くついたかもしれませんが・・・ やむをえませんな・・・」

実乃が言った。景虎もうなずいた。

中条軍は黒田軍からも盛んに声をかけられており中条もそれに応じる振りをして軍を動かしていた、黒田軍を欺くために景虎軍の伝令には意図的に返事をしていなかったのである。黒田軍は中条軍の策にまんまと引つかかってしまったのであった。景虎があまり好きではない騙し討ちであったが中条藤資のような老将であったからこそ

出来た技でもあった。

戦の方はあっけなく終わった。

黒田軍は中条軍 景虎軍が雪崩を打って向かってくるのに気が付き大急ぎで黒滝城に戻るべく反転したが 今度は目の前に突如現れた景虎軍の別働隊の騎馬隊にも襲撃されたため 挟まれて大混乱に陥った。

景虎が逃げ道を残すように厳命していたこともあり、黒田軍はろくに抵抗もせず必死にばらばらになりながら黒滝城に壊走していった。

春日山城側 景虎軍 中条軍 勝利の報告は晴景の耳にも入った。  
景虎軍は別働隊と中条軍と合流次第 そのまま黒滝城に進撃した。

間もなく黒田の使者が春日山城側にやってきた、全面降伏することであった。

この戦いは景虎の名を更に高めた。

しかし一番得をしたのは中条藤資その人であった。  
彼は実は守護の上杉定実の跡継ぎを巡る騒ぎ伊達時宗丸入嗣問題のとき、結局定実の跡継ぎを擁立できず一時勢力を後退させていたのだが 今回の活躍で名誉を回復し 揚北衆の実力者として返り咲いた。さらにはこの騒動時に晴景と対立していたこともあり 晴景の後継者としての景虎の擁立に景虎の気持ちを無視してではあったが 精を出すことになる。後年景虎が越後を統一し守護になったとき彼は重臣として一門に次ぐ待遇を受けるようになるのである。彼はその後も奮戦し続け享年は80近くまで戦い続けたと言われている。

一方一番損をしたのは黒田でもなく晴景であった。

晴景は国人衆の信頼をますます失いつつあった。

でも景虎は既に別のことを考えていた。

晴景に対する弁解と自分のその後である。



## 不穩

春日山城に戻った景虎であったがやはり 報告漏れの件で晴景から  
厳しい叱責を受けた。

今回は自分の手違いもあつたので素直にそこは詫びた。

特に中条藤資の帰参の件であつた。中条藤資 新発田綱貞は戦が終  
わると景虎に挨拶、再度帰参の約束をしたあと、晴景を無視するよ  
うに 露骨にさつさと居城に帰ってしまったのであつた。中条は以  
前守護上杉定実の後継者を巡って争つた伊達時宗丸入嗣問題のとき  
失墜した自分の力を今回 回復できたので充分満足していた。それ  
以上 晴景を含めて他には興味がなかつたのでさつさと帰つたので  
ある。これにはさすがの晴景も怒り心頭であつた。

柿崎景家の件も景虎が晴景の命令どおりに動かず勝手に動いたので  
問題になっていた。

最終的にはこれも本庄実乃 宇佐美定満 直江景綱 千坂景長が  
どんな形であれ、中条と柿崎を味方することの大切さを必死に説い  
て晴景をなだめ 何とか収まった。

形式的な処分ではあつたが景虎は今回の件でしばらく謹慎になつた、  
ただ景虎は謹慎については実はなんとも思つていなかった。

景虎は 中条 柿崎の件がとりあえず解決し、 黒田が降伏したこ  
とにより 今までの 景房兄 栃尾の住民 兵士 五郎兵衛の村民  
の仇はすべて討ち 取り急ぎ自分の仕事が無事果たされたことに安  
堵していた。後は約束通り元に戻り 晴景との密約の準備をするの  
に頭がいっぱいであつた。

越後も黒田が帰参表明で春日山城に来ればほぼ統一目前であつた。

新兵衛は早速動いていた。

都に駐留している越後の京都駐在家臣の神余親綱に連絡を取り 嫁ぎ先の調査を行わせていた。

ただ正直こっちは難航していた。

景虎は都の権威者に嫁ぐことによりその権威で越後に貢献できると考えていた。

武田の側室に嫁いだ三条の方を意識していたようだった。ただ都の権威は既に形骸化が著しく 多くの公家は貧しい生活を送っていた。実際自分の屋敷に賊に侵入され命を落とす者もいたという。

身分の高い公家は越後の地方守護代など目にもくれていなかった。

また為景が守護殺しの異名を持っていたためその娘を嫁入りなど不可能に近かった。

事実 戦国時代ならではの出来事ではあるが 景虎の父 為景は自分の勢力拡大のため 主君である越後守護 上杉房能と その弔い合戦に来た関東管領 上杉顕定を敗死させており 天下に例の無い奸雄かんゆうと評されていた。景虎も後年 自ら上杉氏を継いでいるのは父の汚名をそそぐためであった。

新兵衛は神余からこのような報告は受け取っていたが景虎には伝えていなかった。

神余の情報をそのまま伝えれば 景虎がとまどって越後に長居するだけである。

新兵衛にしてみれば晴景の越後に長居などすればまた政情が不安定化して戦に巻き込まれるだけと考え 何はともあれ さっさと越後を出て行きたかっただけであった。

実は景虎より新兵衛の方が懲りていた。

嫁ぎ先が見つからない場合はそのまま都に入ってから相手を捜すか 神余と役職交代で都で越後に奉公する奇策まで真剣に考えていた。

しかし晴景は景虎を甲斐の武田家に嫁がせることに密かに決めていた。景虎が元に戻るこの約束は覚えていたが都には送るつもりは

なかった。甲斐の武田晴信の猛攻で信濃の半分が既に甲斐の手中にあり信濃は混乱していた。越後の安全の確保のためには同盟は必至であった。景虎と 新兵衛との約束は覚えていたが彼らの私情を挟む余地などなかった。

一方 実乃たちも動き出していた。既に 直江 宇佐美 千坂ら重臣には話を付けていた。

守護代の交代の動きを本格化させようとしていた。

晴景では越後はまた分裂して取り返しがつかなくなる・・・その前にとの危機感からであった。

問題は新兵衛と景虎本人であった。

実乃たちが一番頭を悩ませていたのがどのようにして説得するかである、

景虎の本心にはおそらく守護代に自分になるなど夢にも思っていないことは実乃から見ても明らかであった。いかにして景虎と新兵衛をうまく担ぎ出せるかどうかに全てが懸かっていた。

一応目処は付けていた、晴景と景虎が仲違いした瞬間である、しかしこのときはまだ実乃も晴景と景虎 新兵衛の密約の件は知らなかった。

国人衆の動きも目を追う毎に不安定になっていた、戦に出ないのに大きな顔をしている晴景への非難が公然と聞かれるようになっていた。

恩賞の遅れの件も火種の元になっていた、越後は統一を前にして分裂状態に再度陥ろうとしていた。

晴景はそんな越後国内に気づいてか気づかずか戦勝祝いに浮かれていた。

黒田が降伏したことによる越後統一・・・厳密には晴景に帰参してい

ない者もいたのだが・・・の祝い酒である。

晴景は病弱であつたが大酒飲みで春日山城下では有名だつた、酒を飲んでいゝのではなく酒に吞まれていると。

景虎も実は祝いの席に呼ばれていたのだが静かに飲むのが好きな景虎は断つていた。

自分の用事に忙しくてそれどころではないこともあつたが。

そんな中 景虎は晴景に呼ばれた、黒田秀忠本人が降伏と服従を示すため挨拶に来たためであつた。

敵の顔を見ておけということである。

女子に戻るつもりは景虎にとってはどうでも良いことであつたが最後ぐらい兄の機嫌取りをしておこうと思ひ 顔を出すことにした。

広間で待つていゝと、今回の謀反の張本人黒田秀忠が入つてきた。

年齢は50歳くらいであろうか、眼光鋭い 景虎の感じた風に言えば野心を秘めた男であつた。

景虎は普段の男装 黄金色の直垂に侍烏帽子の中に髪を束ねたいつもの姿だつたが幸か不幸か男にはやはり見えなかつた。

秀忠は一瞬 男装の景虎を見て驚いたようなそぶりを見せたがその後目は逸らした。

秀忠は心なしか不愉快そうに見えた。

間もなく晴景も入つて来た。晴景は酔つていたらしく酒臭く顔色は相変わらず悪かつた、しかも少し赤くなり 目もうつろで酩酊気味であつた。晴景の後ろには守護の上杉定実が人形のように座つていた。

直江が渋い顔をしているのが目に入った。千坂も呆れ顔であつた。

景虎も正直これが自分の兄かと思つたと悲しかつた。

もちろん自分も酒好きなので大きくは言えなかつたが・・・

黒田も驚いた様子だつたがすぐに平伏してそれ以上顔を伺うことは出来なかつた。

黒田から見れば 人形のような守護 酔った守護代 男装の守護代  
の妹・・・  
しかも男装の妹率いる部隊に大敗など 悪夢を見ているような気分  
に違いなかったが。  
定実 晴景 景虎にはそのような黒田の気持ち分かるはずもな  
った。

黒田の処分は寛大であった、もちろん 宇佐美 柿崎を引き入れる  
ための景虎たちの工作のおかげではあるが 一族全員の越後からの  
退去だけであった。

晴景は むにゃむにゃと るれつの回っていない口で命令した。

黒田は寛大な処分に礼を言って空き家になるはずの黒滝上に黙って  
引き上げていった。

景虎は黒田より兄の醜態の方が記憶に残った。

## 後遺症

景虎は17歳になっていた、

この年 天文15年（1546）は景虎にとっては記憶に残る年になった。

戦続きの生活にもようやく終止符が見え 越後もようやく 表面上は 統一の兆しが見えてきたときに思わぬ報告が入って来た。

あの黒田秀忠が再度謀反との連絡が入ったのである。

黒田は昨年の反乱のとき助命と引き換えに越後から出ることを命じられていた。

宇佐美定満 柿崎景家を味方に入りたい景虎たちの必死の工作でかなり寛大な処分になっていたのだがそれにも関わらず黒田が再度謀反を起こした。

理由は誰にも分からなかったが

黒田が晴景の醜態を見て気が変わったのではないかとか  
人形のような守護 泥酔の守護代と男装趣味の娘大将に降伏した己に自責の念が耐えられなかったなど 景虎にとっては あまり気分が良くないが でも現実味のある噂が囁かれていた。

とにかく勝ち目のない戦であるのは誰の目にも明白であった。

しかし守護代の面子にかかわる問題でもあった。

黒田征伐のため晴景の命令で景虎は黒滝城のふもとで再度陣取ることにした。

晴景は今回も来なかった、このような少数の軍相手の戦に出る必要はないと。

大将は景虎が再度指名された。

これに関してはもはや異義は出なかった。  
今までの実績が物を言う。

今回は相手の反乱が小規模でもあったので前回の副軍の面々主体で急遽部隊が編成され出陣していった。

黒滝城に籠るのは300以下と極少数の兵士と避難した城下町の住民がとの報告が入っていた。

春日山城側からは

本庄実乃 金津新兵衛 栖吉長尾景房 景信親子 色部勝長 斉藤

朝信 北条高広 山吉豊守 宇佐美定満 直江景綱 守護代の上杉

定実から編入された千坂景長

3000近くの大軍が派遣された。

そして到着次第 黒滝城を包囲した。

しかし今回も事件が起こった。

景虎が再度体調不調を訴え一時的に本陣を離脱 近くの寺に籠ってしまったのである。

敵陣前に布陣して大将が帰ってしまうという異常事態が発生したのである、

様々な憶測が流れた。

晴景との不仲で帰ってしまった、戦がいやになって逃げてしまった、あげくのはてには

。 毎月10日頃は定期的ななんらかの病気のせいで動けないのだ・・・。

もっとも景虎の帰陣でこの件は解決するが特に説明は無く偶然の体調不良の一言で片付けられた。

何事も無かったように作戦会議が行われ、一言

「これより黒田秀忠に対する作戦を開始する」と

放火 狼藉は厳しく禁止し 立て籠もる住民を安心させ城の後方の門は住民の脱出用ながら空きにした。もちろん黒田もそこから逃げようと思えば簡単に逃げられる。

3日ほどして中から住人と思しき集団が出てきた。

景虎が狼藉を厳しく禁じていたので安心したのか2日ほどで住民の方は大方退避が終了したようだった。

中にこもっていた住民からも次第に情報がもたらされ 中には極めて少数の兵士しかおらず 先ほどの後方の門からも甲冑を脱ぎ捨てて住民に紛れて一般の兵士は殆ど脱出しているとの情報も入ってきた。

長期化の様相が出だしたのでいらだつ国人衆たちにせかされて 軍を城に向けることにした。

栃尾城で自分たちが激しい抵抗をした記憶があったので最悪の事態も覚悟したが城はあっけなく陥落した。

むしろほとんど無血開城であった。

「どうなってるんだ・・・？」

みな一同に理解不能であった。

「黒田秀忠はできれば生け捕らえよ」

景虎は命令を出した、

理由を聞きたいだけであってそれ以上のもの 黒田本人の処遇を含めて何も考えていなかった。

ほどなく城を完全に掌握したとの連絡が入り景虎も城内に入っていた。

屍などまったく静かなものであった。

現在籠城戦が行われている城とは思えなかった。

しかし悪夢のような景色を景虎は見ることになる。



天守の近くの黒田の居住していた辺りで味方の兵たちが騒いでいた。

「なんの騒ぎでしょうかね・・・」

先に色部が覗き込みに入った。しかし 覗いた瞬間

「・・・！」

色部が珍しくのけぞった。

色部は40手前 反発心の強い揚北衆の中では温和な性格で枳尾時代から帰参し また武将としているんな戦場を渡り歩いた経験豊富な男である、

その色部が珍しく足を止めていた。

「見ますか・・・？」

色部が景虎に聞いてきた。

いやな景色が広まっているという。

「・・・」

景虎は迷ったが何も言わずにうなずいた。

そして中を覗き込んでみた。

中では黒田家の一族の者と思われる者 女中 老人 子供が折り重なるように血だらけで死んでいた。

もちろん戦闘員ではない。

最初は味方の分捕りの仕業かと思ったが全員意識して白装飾を着ており 自決か城内の者の仕業のようだとのことだった。

凄惨な景色に景虎は思わず後ずさりした。

しばらくの不気味な沈黙の後 程なくして修羅場の奥の間の襖が開き、中から誰かがこちらに向かってきた。黒田秀忠本人だった。

ものすごい形相でまさに邪鬼のような顔だった。

両手に血のりをついた太刀を持ち 着ていた白装飾は返り血を浴び真っ赤だった。

目は殺気立ち意味不明な笑みを浮かべていた。

景虎は思わず後ずさりした。

自軍の兵士も驚きで腰が引けてしまっている。

「何がしあつての翻意・・・」

景虎は恐怖とあまりの光景に声が震えていた。

「貴様らに平伏して生き恥をさらすくらいなら・・・!!!」

秀忠は絶叫すると突然であった、

秀忠は自分の腹に太刀を突き刺しうずくまった。

「介錯を！」

色部が叫んだ。

うずくまった秀忠に 斉藤があわてて駆け寄り彼の首に刀を振り下ろした。

景虎は目をそらす暇がなかった。

景虎は武士の道に関わったことを ひどい吐き気を抑えながら後悔した。

戦が終わってしばらくしてから景虎は自分なりに黒田の気持ちを考えてみた。

男装の件であるがこの事件で景虎はいろんな意味で少し真面目に考えるようになった。

人形のような守護 酔った守護代 男装の守護代の妹・・・しかも男装の妹率いる部隊に大敗など・・・

景虎は女に戻るつもりだったので忘れようとしたが しかしなぜか今後は 男装の件はどうしようと 矛盾したことを考えていた。

黒滝城の件は越後で話題になっていた、

景虎に逆らうと恐ろしい目に会うつ・・・

噂が噂を呼び どこで話が入れ替わったのか 黒田一族は景虎に全員自害させられたと・・・

景虎は事実無根の噂が広まり腹立たしかったがこの噂で越後の国人衆がまた静かになりつつあったのも事実であった。

そんなおり 柿崎景家が妻を連れて景虎をわざわざ訪れて来た、柿崎夫婦は今回の景虎のおかげで命拾いしたことに対するお礼と自分たちが原因で景虎と晴景が揉めているとの噂を聞きやってきたとのことだった。

しかし景虎は真っ先に自分から 柿崎の妻に頭を下げた。

「このたびは私の無能のせいで・すみません・」  
涙が思わずこぼれていた。

自分や兄の無能のせいで黒田一族に悲劇的な結末をもたらした

黒田一族を死なせ 柿崎妻一人のみにしてしまったことについてであつた。

黒田秀忠は憎き敵でもあつたが景虎自信も考えさせられたことは否めなかつた。

また城内で起こつたことも全て正直に話した。

柿崎妻は助けてもらったのは自分なのに・

景虎様から逆にそのようなお言葉などもつたいたい

感動の涙と しかしやはり一族を失つた悲しみの涙で平伏していた。

しかし柿崎夫婦はそんな純粋な景虎に非常に好意を抱き この後も

景虎を終生支えていく。

柿崎の戦場での活躍はもちろん 息子の晴家も北条氏への人質になり北条家の情報収集等に活躍した。

景虎も柿崎夫婦のような仲むずまじい、夫婦愛に憧れと尊敬の念を持っていた。

柿崎夫婦は何かあつたらすぐに馳せ参じますと言ひ残し居城の猿毛城に帰っていった、

この言葉どおり 後日 景虎はすぐに柿崎夫婦と奇妙な再会をすることになる。



## 対決

黒田一族が滅んだことで景虎 新兵衛は晴景に例の約束の履行を迫っていた。

しかし 晴景は表向きは多忙を理由に面会に応じなかった。時間ばかりがむなしく過ぎていったがしばらくして ついに半年以上たった初冬のある日景虎と新兵衛が我慢の限界が来たのか春日山城を出ると騒いでいると言う情報が晴景の耳にも入って来た。

景虎と晴景の不仲は決定的であった。城下でも有名になっていた。同じ城内に住んでいるのに半年以上顔を合わせていないという異常事態であった。

晴景は約束の不履行になるが越後のためと割り切っていた。甲斐の武田と景虎の嫁入りの交渉自体は進捗していなかったが景虎に逃げられては元も子もないので二人を 春日山城近くの 浄興寺に密かに軟禁することにした。

軟禁理由は浄興寺で天室光育と虎午前に話させることにした。彼らに説明させたほうが説得も楽であろうとの判断である。

まず新兵衛が春日山城内で晴景に面会を口実に呼ばれたときに捕らえられた。

同じ日の夕刻には密かに晴景直属の旗本集が景虎の住む 南三の丸に向かい 景虎を捕らえた。

ここで晴景の旗本衆は景虎の女中のお春と花を捕らえ損ねた、がこのことが後々大きく響いてくることになる。

景虎は新兵衛と浄興寺で予期せぬ再開を果たした。

晴景に反抗的ではあったのは事実だが何で捕らえられたのかはよく

分からなかった。

しばらくして 天室光育や虎午前がやってきた。

（何故 和尚と母上が・・・）

景虎は思わず声を出しそうになったが二人の暗い表情を見て声を出すのはやめた。

二人は事情をすべて話した。

都行きは中止 甲斐の武田に嫁に行けとの晴景兄の命令であると。

景虎と新兵衛は晴景には心底 失望した。

晴景兄は約束も守ってくれない以上に そのやり口が許せなかった。自分の口から言えば良い物をわざわざ景虎が好きな天室光育や母の虎午前を使って説明させていることが不憫だった。

天室光育や虎午前はなんと言葉をかけて 良いのか戸惑っているようだった。

景虎と新兵衛もむなしそうに晴景との約束状を見つめていた。

しかも身動きできないよう囚われの身扱いである。何も出来なかった。

何もかもが最初に戻ってしまった気がした。

林泉寺での時の状態である。

「今まではなんだったのだろう・・・」

思わず景虎は声を出した。

景虎は悔し涙を抑えようとした、

天室光育の言っていた

「・・・人の定めに逆らわず人の為に我が身をふりかえらず己の運命を受け入れる・・・」

を声に出して必死に自分に言い聞かせようとしたが

行き場のない感情は涙になって出てくるだけであった。

新兵衛も黙っていた。

慰めの言葉が出なかったからだ。  
堪りかねた虎午前が景虎をそつと抱擁してくれたが余計に涙が止まらなかつた。

数日後 花嫁衣裳やら嫁入り道具が浄興寺に送り込まれてきた、美しい花嫁衣裳や道具を眺め 気を紛らわすために試し着をしたりなどしてしばらく景虎は今までのことすべて忘れるように努めた。  
・人の定めに逆らわず人の為に我が身をふりかえず己の運命を受け入れる・  
と自分に言い聞かせていた。

これが越後のためである・武家の血筋の女なら人質として嫁に出されて 生きて 死んでいくことを・

一方 お春と花は実乃の屋敷に飛び込んでいた。

二人は晴景の旗本が景虎を捕らえに来たとき屋根裏や床下に隠れ難を逃れていた。

そこから景虎が 浄興寺に軟禁され 嫁入りの用意をさせられているという情報が

実乃にすぐにもたらされた。

実は 実乃は守護交代の絶好の機会の訪れを再三狙っていたのだが晴景と景虎が仲違いをして 半年以上全くお互いに顔を合わせない異常事態になつてから 逆に行き詰っていた。  
晴景と景虎の口論の際に・・・と思っていたのが口論する機会さえないという

予想外の展開になつていたのである。

景虎や新兵衛が晴景に捕らえられ またその理由も実乃にとっては初耳であつた。

景虎たちが都に行くにしろ甲斐に行くにしろ 実乃に取っては容認しがたい事態であった。

すぐに直江 宇佐美にも情報がまわされた。

直江のほうも晴景にどことなく景虎の話をして事実を確認した。

宇佐美も柿崎 斉藤 揚北衆の色部や中条など信頼できる国人衆に連絡を取って拳兵の準備を進めさせた。

晴景も自分の周りが微妙に騒がしくなっているように薄々感じていた、

景虎がいなくなってから家臣の動きが変わったようにも感じていた、念のため旗本衆や 上田長尾房長 政景 親子や上条憲定など信頼がおける国人衆に密かに出兵の準備をさせていた。

武田との交渉は千坂景長が担当していた、

千坂は 意図的だったが ろくに交渉を進めずに 晴景に今回の嫁入りは成功の見込みが薄いと報告をあげてきていた、理由は

・ 信濃の諏訪頼重の娘が甲斐の武田晴信の側室だったにもかかわらず殺され領土を奪われている

・ 甲斐は海がないので海の出口を探している 南は今川と東は北条と同盟済みで進めない 西は遠すぎるが北の春日山の府内（直江津）なら甲斐に近い

・ 武將経験のある人間を側室に置くのは危険 側室にするはずがない

との判断であった。

千坂は

信濃が落ちればすぐに甲斐から最短の港町 府内 春日山城に武田は来る 景虎を軸に戦うべし



と報告をした。

「千坂め・・・」

晴景には容認しがたい報告であった。

報告の内容ではなく千坂の文面である。

千坂がどのような気持ちで書いたのか晴景はこのときは読めなかったが

晴景を軸に ではなく 景虎を軸に 戦うべし の文面が癪に障ったのである。

もともと千坂の心はとうの昔に決まっていたが。

しかもこの資料は意図的に千坂により 実乃、直江や宇佐美など各地の国人衆に流されていた。越後の国人衆を 景虎 中心にまとめるためである。

越後の国人は常に分裂気味であったが信濃と関東からの圧力は薄々感じ始めていた。

そのため国人衆の間でも弱気な晴景ではなく景虎に期待する声が高まっていたが それに答えるためのような文であった。

実乃 直江 宇佐美たちは越後が信濃の二の舞になるのを心底恐れていた。

信濃は結局地方の豪族同士の争いから終始抜け出せず国として一つにまとまることが出来なかった。そのために武田晴信の侵入をゆるし既存の勢力は晴信に駆逐された。

晴信は名君と 実乃や直江、宇佐美ら越後人たちも認めていた。

占領した土地を家臣たちに再度分けてよく治めていた、しかし占領される方は殺されたり追い出されたりと悲惨であった。

越後は今は一つに何とかまとまっている。しかし晴景のままでは再度分解するのは時間の問題であった。そのため とにかく越後をし

っかり一つにしてくれる人材が必要だった、それに適ったのが景虎であった。

景虎と新兵衛はそのような慌ただしい外の空気と完全に切り離されていた。

景虎もすっかり気が治まり 元の林泉寺時代と同じ生活習慣に戻るうとしていた。

新兵衛も今までのことは忘れようとしていた。

そして寺に着てから1ヶ月程経ったある早朝だった。

虎午前が慌てて 景虎を起こしにきた。

「境内に・・・お侍がいっぱい・・・」

景虎は虎午前が何を言っているのか分からなかった。

寝ぼけ眼で寝間着のまま あくびをしながら境内の前の障子を開けると

境内の中庭の中は甲冑に身を固めた侍たちでびっしり埋められていた。

見覚えのある顔がずらりと並んでいた。

本庄実乃 直江景綱 宇佐美定満 中条藤資 栖吉長尾景房 景信

親子 千坂景長

色部勝長 斉藤朝信 北条高広 山吉豊守 柿崎景家 秋山源蔵

戸倉与八郎 弥太郎 . . .

お春と花も着物の上に胴丸をつけ鉢巻を巻き 薙刀を携えていた。

「・・・」

景虎は声が出なかった、何がなんだか理解できなかったのである。

新兵衛も天室光育も驚いて起きてきた。

「・・・なんの騒ぎじゃ・・・」

そして中庭を埋め尽くした武者を見て啞然としていた。

実乃が静かに言った、

「我が主君は景虎様なり・・・」

「御意！」

「御意！」

大きな声が続いた。

「姫様 お手伝いさせていただきます」

柿崎の隣にいた 柿崎妻も着物の上に鎧を着込み薙刀を持ち込み平伏していた。

## 父と子と

景虎はようやく事態が飲み込めた。

直江が

「守護代には ふさわしい方がなられた方が越後のためでございます  
す．．．」  
と静かに言った。

中条がずけずけと

「何をためらってらっしゃる お声をかけなされ」  
と大声を出した。

景虎は戸惑っていた。

憎たらしい兄ではあるが兄と戦うなど考えたことがなかった。

「私には．．できない．．」

景虎が声を漏らした。

「．．え．．？」

若干脱力気味の声が漏れた。

宇佐美がすかさず入った。

「姫！晴景兄と戦う訳ではなく 晴景兄に禅譲してもらったため我々は集まっているだけでありませす！手荒な真似をするわけではございません．．ご安心を！ご理解も！」

「．．．」

景虎は黙ったままだった。

「越後のために！」

「姫様！」

声が続き出した。

越後が再度危機に瀕しているのは景虎にもよく分かっていた。

越後を守るために人質に行くつもりでもあった。

しかし諏訪頼重の件などの噂は聞いていた。

不安が無きにもあらずであった。

自分が越後を守るなど大それたことは考えていなかったが

自分の家である越後に土足で入って来る者には容赦するつもりはなかった。

越後が危ない 越後のために の一言で心は決まりつつあった。

しかも頼まれたら断れない景虎だった。

しばらく考えていたが 小さな声で

「・・・わかった・・・出陣・・・」

景虎は声を絞り出した。

「オー！」

掛け声がようやく上がった。

こうして景虎は晴景に叛旗を翻すことになった。

景虎の叛旗は晴景の耳にもすぐに届いた。

しかし春日山城の周辺は景虎勢にあつという間に囲まれていた。

晴景の誤算は上杉軍守備隊の千坂までもが景虎側についたことだった。

脱出が出来なくなってしまうた。

一方 晴景側の 上田長尾房長 政景親子 上条定憲 黒川清美軍

が春日山城に晴景の救援に向かっているとの情報が入り 中条が自ら

「気に入らん上条らを討ち滅ぼしてくれるわ」

と息巻き迎撃許可を求めたが以外に景虎は許可をしなかった。

今は越後人同士が争っている場合でなくまとまる方が大事とのことで降伏すれば許す方針である旨を伝えた。

結局上条軍 黒川軍は春日山城近くまで来たあと 上条定憲 黒川清美 自ら本陣までやってきて降伏 帰参を約束した。上田長尾は数の差で完全に不利を悟ったのであろう 居城の坂戸城に引き上げてしまった。

晴景は完全に孤立無援になってしまった。

逆にこうなると攻め手の景虎側も手が出し難くなってしまった、一気に落とすのは たやすかったが兄の晴景に傷をつけることは出来なかった。使者を送って降伏を進めたが晴景の自尊心がそれを許さなかった。

しかし思わぬ展開が起こった。

守護の上杉定実が一人で春日山城から出てきたのである。

実は景虎たちも彼のことをすっかり忘れていたのであったが 彼も今回の包囲に巻き込まれていたのであった。

今まで問題ばかり起こし 殆ど良いとこなく古ぼけた飾り雛人形のように生きていた彼であったが 彼の思わぬ提案で事態は一気に解決に向かうことになった。またこの提案で彼は歴史に名を残すといっても大げさではなかった。

定実は 晴景と景虎を父と子の契りを結んで晴景が禅譲することを提案したのだった。

兄から弟（妹）ではなく 父から子であれば箔が付くのである。

父 晴景は隠居し 子 景虎に禅譲する である。

早速晴景に定実から直接この案は提案された、晴景も渋々であったが守護からの依頼でもあったため断ることが出来ず受け入れた。こうして戦火を交えることなく景虎は正式に越後の守護代になったのである。

晴景はしばらくして春日山城から退出した。

籠に載せられて春日山を降りていった。

城下の空き屋敷があてがわれ、そこに何もいわずに移動していった。籠の窓は閉じきられ中の様子は伺いしれなかった。

晴景と景虎は最後までお互いに顔を合わすことはなかった。

複雑な感情が景虎の胸に残った。

このように晴景から景虎への守護代の実質的な権威委譲はあつけないく終わったのだが、この後の守護の上杉定実と景虎のその他の交渉が難航したため書面上の権力委譲は予想外に時間がかかり、締結されるのは天文17年、19歳の時までかかることになる。

景虎は春日山城に入場した。

今まで晴景が住んでいた本丸に登り外の景色を眺めた。

「・・・きれいな景色だな・・・」

春日山城から眺める景色は絶景であった。

緑の田畑が眼下に広がり、濃紺の日本海が水平線の果てまでどこまでも続く。

青空では白い雲と鳶が悠々と風に流されている・・・

城下町の向こうの府内の港には、停泊する船舟・・・

しばらくすると今までのことが急にいろいろ思い出されてきた。

嫁入りのはずが三郎軍に追われ、必死に生きるために戦った・・・

怖さを酒で紛らわしながら戦い続け

そして気が付いたら女だてらに守護代になって 今ここにいます。

「・・・私がここにいて良いのだろうか・・・」

不思議な気分であった。

「・・・それともこれは夢だろうか・・・」

思わず独り言が漏れた。

「姫様・・・」

女中の声で我に返った。

お春と花の声であった。

彼女らも今日から春日山城の住人になったのだった。

「これからもよろしくお願いいたします」

景虎もにっこりと笑って答えた、

「こちらこそよろしくお願いします」

お春と花はこの後も景虎の最期まで春日山城で付き添った。

景虎は広間に移動した。

今までは晴景のいた上座に初めて座った、なんか不思議な気分であった。

服装も基本的に今後は守護代の景虎の自由とのことで普段着の子女のままであった。

もう男装の麗人の必要はなくなった。

家臣団も同じ不思議な気分であった。

自分たちが推挙したのだが 失礼ながら 殿方ではなく自分たちの娘と同じ年頃くらいの若い姫君が上座に座っている。

下座にはいい年をした強面の男たちがずらりと並んでいる。

不思議な構図であった。

みんなお互いなぜか顔を見合わせ落ち着かなかった。



お互いよく知っている顔であるのに

「なんだかな・・よくわからんが・・恥ずかしいな・・」  
中条が年甲斐もなく照れながら漏らした。

「すぐに慣れるじやろうって・・」

宇佐美もいつものひょうひょうとした口調で言った。

よくわからなかったが景虎も他の者も同じことを考えたのであろう、  
お互い顔を合わせると可笑しくなったのかくすりと少し笑ってしまった。

## 秘密

18歳になった景虎にとって天文16年（1547）も思い出深い年となった。

景虎が守護代になっておめでたい年明けになるはずであったが厳しい現実が待ち構えていた。

景虎は今まで18年間生きてきたが お金のことなどあまり考えたことがなかった、自分は無欲とまでは思っていなかったが常に生活するには充分の金銭が身の回りにあつた。

そこに突然お金の問題が割って入って来たのである。

越後は父為景の代から戦続きであった。晴景の代るときも然りである。

伊勢三郎 黒田秀忠の乱・・

越後の財政は危機的状況であった。

長年の戦続きで財政は破綻していた。

景虎に果たされた第一の問題はこの越後の財政再建であった。

勘定奉行の大熊朝秀から提出された越後の財政の資料は衝撃だった。国庫は空で商人から金を借りているような状況だった。

「まいったな・・・お金がない・・」

この一言につきた。

越後の外では信濃は武田に圧迫され 関東も関東管領の上杉一門が北条の圧迫に悲鳴をあげ、越後国内では南部に上田長尾房長 政景親子がどっしり構えていた。

しかし今の越後にはそれに対応する余裕はまったくなかった。

景虎は初めての評定を行った。

金津新兵衛 本庄実乃 直江景綱 宇佐美定満 中条藤資 栖吉長  
尾景房、景信親子 千坂景長 大熊朝秀 色部勝長 斉藤朝信 北  
条高広 山吉豊守 柿崎景家 と景虎を支える一同勢揃いであった。  
守護代になって初めての顔見世も兼ねたおめでたい評定のはずであ  
ったが 挨拶もそこそこに景虎は正直に越後の財政の状況を説明し  
た。

実は滞っていた恩賞の件を少し待ってもらったためである。

また 各人の財政状況も可能であれば正直に教えてもらうことにし  
た。

内容は予想以上であった。

武器を借金のかたにされ丸腰で戦っている兵士の話や 土地を差し  
押さえられている侍が多数いるなど さらに頭を抱えるような話ば  
かりであった。

実は景虎は国人衆から金を少し借りるか、一時的に彼らの土地の少  
しを守護代領に戻してもらおうとも考えていたのだがそれも到底無  
理な話であった。

恩賞が出せないのであれば徳政令を出してほしいとのことだった。  
景虎も徳政令を考えていたが一度 徳政令を出すと商人から追加の  
借り入れが出来なくなり余計に生活が困窮することとで徳政令す  
らも出せなかった。

翌日 景虎は重臣のみとこの件で再度打ち合わせをした。

本庄実乃 金津新兵衛 直江景綱 宇佐美定満 千坂景長 重臣で  
はないが財政奉行の大熊朝秀 にも参加してもらった。

早速 直江 千坂から歳入を増やすために越後の改革案が提案され  
た。

おそらく晴景時代から既に用意されたよう綿密に練られていた。

守護の上杉定実と越後商人たちとの交渉が必須であった。

まず守護代上杉定実との交渉であるが現在分かれている 守護代守護の歳入関係の統一を嘆願することにした。越後の財政の管理を景虎に集中させるためである。

守護の上杉定実からすれば迷惑な話であるが、これには為景末期晴景時代に一時的に回復した守護の力を削ぎ 守護代の景虎に再度力を集めて越後の求心力を高める狙いもあった。

早速守護の上杉定実と交渉を始めたが定実もこれには大いに難色を示し交渉は難航した、今までの定実の収入源である 守護領土の禅譲と京都の三條西家に対する青苧あおぞの利権の委譲を要求していたからである、定実からすれば身包みはがされてしまう。

景虎側の落としどころは定実の跡継ぎの件であった。定実は既に年も80近くになり跡継ぎがない老人であった。また今回の越後の混乱 晴景の弱体化の遠因を作ったのも実は定身の跡継ぎ騒動の件であった。世で言う伊達時宗丸入嗣問題である。伊達から後継者を迎え入れようとして失敗し 伊達家に内乱と越後に大騒動を起こしたのである。そのため定実にも負い目があった。

景虎は定実の生活の補償はもちろん、越後の守護の後継に関しても自分が引き継ぐ意思があることを伝え、もしくは上杉氏そのものを継ぎ 更には現在関東で悲鳴を上げている同じ上杉一族の関東管領の上杉憲政を北条氏政から助けることも口頭であるが約束した。

上杉継承の件は結局 関東管領の上杉憲政の意向確認も必要であるのでこの時は話は流れたが 景虎にとっては父為景の守護殺しの汚名をそそぐことが出来、更に長尾家の家の格上げにもなり、また上杉定実にとつても後継者問題の解決、お家の継続とお互いに利益に値する話ではあった。定実は女である景虎が守護を継ぐことに少し難色を示していたが女でも男でも権威には関係なく、いずれ景虎が婿を迎え跡継ぎ作る予定があることを伝え定実を納得させた。

それにしても定実本人の実力の証しにもなるがこのような決断には彼は元来時間がかかる人であった。我慢強く辛抱強く時間のかかる交渉を続けて、ようやく話がまとまった次第であった。

そのため 晴景の景虎への守護代の権威委譲の書面上のやり取りが大幅に遅れ 天文17年（1548）の19歳の時によりやく名実共に越後の守護代になったのであった。

この定実との約束であったが景虎は一点を除いて後に約束通り履行した。

履行できなかったのは婿の迎え入れの件だけであった。

続いては越後商人との交渉に先立ちこちらも直江や宇佐美から提案が出された。

越後の経済を牛耳っていた御用商人、青芋の元締めである蔵田五郎左衛門との交渉のための事前準備である。

ちなみに蔵田五郎左衛門は代々同名世襲の戦国期、越後守護・上杉氏のもとで越後青芋座を統轄した一族である。青芋は越後を代表する産物であり、芋かむしという野生植物の繊維を取り出し、乾燥させて束とした中間製品で木綿が普及していなかった戦国時代、一般庶民の衣料として重用されていた。大量の青芋が柏崎や直江津から「芋船」や「越後船」によつて若狭の小浜などに運ばれており、そこから織布の先進地である京都や奈良に材料として供給され庶民の衣服などとして加工され製品化されていった。

蔵田五郎左衛門に会うに先立って景虎と重臣との間で下記の案が決定された。

景虎たちは越後の財源の強化を「青芋」と「船」に的を絞っていた。「青芋」と「船」に重点的に徹底して税金を課けることである。すでに為景時代より「青芋」と「船」の課税は部分的に行われていた

が越後全土で徹底的に行うのである。そのため越後国内の主要な都市 港を全て景虎の直轄に一方的にすることにした。ついでに金山 銀山も同様にすべて国人衆から取り上げ直轄にすることにした。また商人の武士に対する貸付は禁止し、全の貸し借りはすべて守護代からのみの貸付にした。これは武士の困窮を防ぐためと国で金融業を行い利ざやを稼ぐこと以外に武士の管理も兼ねていた。払えない武士はどんどん返済の変わりに働いてもらうためである。また徳政令を出した場合のつなぎ先も密かに兼ねていた。このため商人や国人衆の一部で激しい反発も予想されたがそこは力で押さえつることにした。景虎も越後のためと割り切って推し進めることにしていた。

ただ商人や住民の懐柔も同時に行うことにした。今まで越後国内での移動のためにかかっていた通行税を廃止 主に城下町の住人や商人に課けられている細かい税金の減免である。また橋の架け直しや道路 港湾の設備改修 投資も積極的に行うことにした。これは通商面だけでなく軍事面の強化も兼ねていた。上記の案がすべて五郎左衛門との交渉で解決できれば全て良しであったが 商人に厳しい案も多く交渉の難航が予想された。

しかしここでちょっとした 意見の相違があった。大熊は城下町の住人や商人に課せられていた税金の減免に反対したのであった。

景虎は「青芋」と「船」に課税強化するにあたり その代替案で現在商人や住民に課している様々な税金を減らし、行政の簡素化も考えていたが大熊はそれに反対したのであった。

「青芋」と「船」の税金の見込みがはつきりしないのに他の税金を減らすなど自分で自分の首を絞めていると主張したのであった。大熊が得意とする行政部門の介入も彼にとって不愉快だったのである。

確かに一理はあつたが押し通すことにした。景虎は黙っていたが対案を考えていたからである。

景虎は大熊の実直な財務管理能力は高く評価していたが柔軟性が無い面は少し気にかけていた。

大熊も景虎の意外な強権的なやりかたに内心反発していた。大熊と景虎の間にこの頃から施政を巡って微妙な隙間が出始めていた。

そのため今回予定されていた五郎左衛門との会談に財政奉行の大熊は結局呼ばなかった。

蔵田五郎左衛門は春日山城に呼ばれた。

いかにも商人といった高級な着物を着て 恰幅のよい落ち着いた風情だったが笑顔の奥の眼鏡に隠れた目線は鋭かった。年は40過ぎくらいであろうか。

今回は実乃以外に宇佐美 直江 千坂 新兵衛ら重臣にも同伴してもらった。

宇佐美は五郎左衛門は油断ならないので男装で会談した方が良いのではと提案したが

景虎の腹を割って話をしたいとの思いと越後衆の前では隠し事をしたくないとの景虎の強い希望で普段のまま話を行うことにした。

五郎左衛門は商人らしく丁寧な態度であつた。景虎を見ても微動だにしなかつた。

知つていると言わんばかりであつた。

景虎は越後の財政の困窮について率直に話したが五郎左衛門は黙つて聞いているだけであつた。

そして一言

「姫様・・・商人は施政者が誰かどうかはそれほど気にはしません。その施政者が我々に良いか悪いかだけで判断します、良い施政者にならるのであれば我々は喜んでご協力いたします・・・」  
厳しい一言を早速浴びせてきた。

「武田晴信でも気にしないとのことか・・・」

景虎も遠慮なく返した。

五郎左衛門も動じることなく返した。

「姫様が我々の気持ちを少しばかり汲んでいただければ喜んで協力いたします」

要は彼らの要求を呑んでほしいとのことであった。

まずは景虎から口火を切った。

税制を今後は「青芋」と「船」の売上に課すことすると。しかも越後全土で適用する。

越後の港から出荷する青芋の売上税と運搬船の出港時の船税である。これに関しては彼らも予想していたのであろう、あっさり容認した。

これに対する五郎左衛門からの要求は

「船」に関しては当時太平洋側は江戸幕府が出来るまで航路がなく物流は日本海海運の土壇場であった。越後は良港に恵まれていたこともありその交易の中心地になっていたが 越後の国としての設備の管理を要求された。景虎はそれらの設備の直轄化も決めていたのでこれも了承した、ただし直轄時の抵抗勢力の懐柔の手伝いは要求しておいた。

「青芋」に対する要求は現在商人や町人に課している通行税の免除だった。これも最初から予定していたので要求を認めた。

ただ大熊が言っていた心配事も事実であった、税金の項目を減らせば「青芋」と「船」の歳入が予想を下回った場合歳入が大幅に落ちる可能性も考えられた。

そのため景虎の独自の要求であったが「青芋」に関しては販売量の目標を作り見込み分を歳入として入金するよう要求した、また本年度だけ少し前倒しを要求した。「青芋」の生産量が増えれば自動的



にそれを運ぶ「船」の数が増え「船」の税金も増える。また空の国庫に少しでも入金しておくためでもあった。かなり厳しい要求であったが五郎左衛門は意外にも景虎側の要求を呑んだ。

ただそれに対する条件も再度提示された。

まず「青芋」の生産量確保のため守護代の関与を要求された、聞けば年間最大6回 原料になる芋かいらせの刈り取りが可能であるが時期によっては人手が集めにくいこともあるとのことであった、これを解決するために守護代の名目、命令、もしくは奉行などを動員させよとのことであった。安定して売るには安定して生産しなければいけないとのことである。景虎はこれも了承した。

それ以外に「青芋」の更なる販売の促進を朝廷や貴族、大名に直接お願いしたい、またその他の交渉を兼ねて近い将来景虎自ら京都と堺に五郎左衛門と一緒に赴く約束も要求してきた。

実乃が口を開いた。

「越後の京都留守役の神余がいるだろうに・・奴にやらせれば・・」しかし景虎が実乃を止めた。

景虎には思わぬ形で憧れの都入りの権利であった。

しかも大きな名文である。

自分から行くと言い出した、可能であれば將軍にも謁見したいと。

これには宇佐美や直江が渋い顔をしていた。

他の家臣団の反対も目に見えていたが背に腹は変えられない現実もあった。

宇佐美と直江の不服そうな横顔を尻目にこれも応じることにした。話は穏便に進み丸く収まるかと思っただそのときであった。

しかし突然宇佐美が口を挟んできた。

「その他の交渉とは何か・・・」

と・・・直江も

「越後の名誉を汚すような行為は認めんと続けた。」

（さすが・・・老練な方は違うな・・・）

五郎左衛門は少しにやりと笑い、静かに口を開いた。

「極めて簡単なことであります・・・現在堺の天王寺芋座と越後座芋は為景様の頃からちよつとだけもめております。そこに越後国守護代として介入して欲しいのです・・・」

直江がつばやいた。

「商人の争いに守護代が絡むなんて・・・」

宇佐美も心配気に言った。

「摂津の守護代の三好だったか？連中と争えと言つのか？」

五郎左衛門は静かに言った。

「争うつもりは無いのですが天王寺側がこちらに相当苛立っているようなので助けてほしいのです・・・」  
しばらく沈黙が流れた。

直江や宇佐美は察しがついた。

本当の目的はここにあるかと・・・

実は為景時代にもこのような話があったと直江は千坂から聞いていたが、為景が隠居してからは疎遠になっていたという。ただ為景は意外にも熱心に介入していたという。

しかも天王寺側が頼っているとされる摂津守護代の三好長慶も下克上を地で行く奸雄かんゆうと有名であった。織田信長以前の戦国時代初期の覇者といわれる男である。

今や足利將軍家や管領の細川家をも傀儡として近畿で威勢を奮っており、今の越後国では到底かなう相手ではなかった。

どうしたらよいか・・・とさすがの直江 宇佐美も返答に窮してしま  
った。

今度は突然景虎が口を開いた。

「ひとつ忘れていた・・・今 我が国や軍の兵士は商人からの借金に  
苦しんでいる・・・ひるがえって5年 徳政令を出したい・・・また武  
士に対する金の貸付も禁止したい・・・それが出来れば・・・」  
最後の要求をぶつけてみた。  
宇佐美と直江はぎよっとしていた、なぜこの場で急に無茶な要求を  
言うのか理解できなかったからである。

五郎左衛門の眼鏡の奥の細い目が一瞬光ったように見えた。

「・・・いざと言う時に軍を動かして頂けるのであればよろしいでし  
よう・・・」

これが五郎兵衛の狙いであった。

以前は青芋は越後で半原料として生産された後 堺の天王寺芋座が  
越後まで船で買い付けに来て 京都の三条西家に年間150貫に及  
ぶ芋課役・通行税を払い 生産工場である京都の坂本芋座・京中芋  
座に独占的に販売していた。越後での権益は守護の上杉家が仕切っ  
ていたが 景虎の父為景の代に守護の上杉家を傀儡化した後は こ  
れに為景が介入してきたのであった。今までの天王寺芋座に変わり  
越後芋座が直接販売をするようにしたのである。三条西家に年間1  
50貫に及ぶ芋課役・通行税を50貫まで減額させたとえ京都まで  
越後の船を使い直接搬入を認めさせたのである。このため今まで天  
王寺芋座の船が独占していた日本海航路にも越後芋座の船が為景の  
強権を盾に割って入ってきたので天王寺芋座は著しく勢力を剥ぎ取  
られ越後芋座は恨みを買っており、この天王寺芋座との争いの用心  
棒を担いでほしいとのことであった。

天王寺芋座の恨み節は摂津国の守護代の三好長慶の耳にも入ってい

た。

景虎にとっては父為景が途中まで作ってくれた実績であったが、父がそのような手順で密かに軍資金を調達していることを実は景虎は守護代になるまで知らなかった。

景虎は商売については良く解らなかったが越後の利益になる点はずぐに察しがつき、また父為景が熱心に行っていたようなのでそれを引き継ぐのは問題ないと判断した。

景虎の政治の仕組みも実は意外と父為景の遺構をそのまま継承したものが多かったという。

景虎にとっては越後の財政は一気に回復し金策に頭を抱えず恩賞も払え越後軍の再強化が可能ながなによりも魅力に感じた。商売人と行動することは景虎は武家の世界に疎いところもあってそれほど気に留めていなかった。

越後芋座も為景亡き後守護の上杉定実や守護代の兄の晴景の時に政治の世界と疎遠になってしまったため天王寺芋座の巻き返しに遭っていた。景虎との交渉を多少妥協させても景虎を引き込むのは必須であった。

五郎左衛門にしても越後の守護代の景虎のお墨付きを得れば越後・畿内間の青芋流通の完全支配だけでなく日本海航路の独占による様々な海運物 流通の独占による莫大な利益が期待できた。

沈黙が少し流れた後

「・・・年間ののくらは入りそうか？」

景虎がいつものぶしつけない口調で聞いてみた。

「うまくいけば船だけで3万 いや4万貫（12万石相当？）春日山城の蔵に入られますな・・・青芋の販売が軌道に乗ればそれはもう・・・越後がもう一つ増えるようなものであります・・・」

五郎左衛門は笑顔で語った、あとは隠すことなく商売人として話す

だけである。

景虎は興味深そうに身を乗り出して聞いていた。

（越後一国以上？・・・そんなに入るわけなかるう・・・）

宇佐美 直江はいぶかっていた。

景虎を騙そうとしているのではないかと・・・

ちなみに越後の当時の石高は 後の豊臣秀吉の太閤検地によれば約40万石である。

しかし景虎は続けた。

「今日は良い話を聞いた・・・すぐにでも協力しよう。しかし今我々は国と軍の再建中なのを理解して欲しい・・・今すぐは無理だ・・・しかも近いうちに越後にやって来るであろう武田か北条を追い返さないといけない・・・」

五郎左衛門が口を挟んだ。  
「今すぐではなくてもいずれば・・・と解釈してよろしいでしょうか？」

景虎はうなずいた。

「・・・いつごろでしょうか・・・？」

商売人になった五郎左衛門はさすがに遠慮がなかった。

景虎は少し黙って考えたが、

「3年待つて欲しい。それから一緒に都に行こう。」

と言ってしまった。

しかし最後にもう一言付け加えた。

「ただし・・・陸路で都に行くのは危険すぎる・・・加賀に横たわる本願寺と一戦交えることはできない・・・兵士を積む船を用意できるのであれば良いのだが越後商人にそこまで迷惑はかけられないからな・・・」

景虎は遠回しに都へは軍は連れて行けないと答えつつもりであった。

しかし五郎左衛門の答えは意外であった。

「船が用意できれば可能と解釈してよろしいのですかな？」

景虎は答えに窮したが答えてしまった。

「・・・そうだ・・・」

「わかりました！」

五郎左衛門が満面の笑顔で答えた。

「守護代様のお墨付き頂きましてありがとうございます。天王寺芋座の恫喝にもこれで我々も屈することなく商売に励めます。本日は有意義なお時間ありがとうございます。今日のお約束はこちらはすべて実行いたしますので姫様もよろしくお願いいたします。越後商人は姫様に服従を誓います」

景虎は何も言わずににこりと笑って答えたが内心とんでもない約束をしてしまったかと少し後悔していた。

宇佐美 直江は五郎左衛門の話を鼻から信用していない感じで白けた顔をしていた。

何はともあれ交渉は無事円満に解決し景虎は一安心であった。

しかしこの後景虎は天文22年（1553）と永禄2年（1559）2度にわたって都と堺に赴くことになる。永禄2年の上洛の際は実際に5000人もの大軍を率いて上洛するのである。

一方蔵田五郎左衛門も最初は景虎本人の力よりも越後は日本海航路の港の要衝を押さえる国であり、例え天王寺芋座に巻き返されても越後守護代に逆らうことは結局は商売に支障をきたす点を天王寺側に強調したかったのだが、五郎左衛門はとって嬉しい誤算だったのは後年 景虎が武田晴信との神懸りのな戦いを展開するとその景虎自身の軍事力を誇示できるようになり今回の争いを有利に展開でき

るようになった点であった。

またこの後越後芋座は越後 - 畿内間の青芋流通の完全支配を確立し景虎の重要な資金源にもなり青芋は当時の庶民の衣料の現原材料として重宝され日本国内に流通する8割から9割を越後産の青芋が占めたという。

最後に五郎左衛門からお近づきの印にと献上したいものがあるという話が出た。

太刀が一本景虎に献上された。

聞けば姫鶴一文字と言ひ

鶴という名の姫が夢の中で刀工の前に出て磨り上げをしないように願ひ出たから付いた名前やら、瀬戸内海の伊予国の大三島にいた武勇に優れた鶴姫の名にちなんでつけられたなど色々噂がある太刀だという。

景虎も鶴姫の噂は聞いていた。

自分同様 女武者として周防の大名 大内氏と3度に渡って激戦を繰り広げ これを打ち破ったものの 討ち死にした兄や恋人の後を追うように自害した姫のことである。

備前国の福岡一文字派の名刀で短いが軽量で機動性に優れ腕力が劣る景虎にも充分な太刀であった。

姫鶴一文字は景虎は非常に気に入りに常に帯用したといわれ 現在も米沢市の上杉博物館でその輝きを見ることが出来る。

## 越後統一

天文19年（1550）景虎は21歳になっていた。

この年の2月末 守護の上杉定実が亡くなった。

越後では騒乱の元になったりと雛人形のように担ぎ出されたりと散々であったが、景虎にとっては兄晴景との調停に奔走し、越後の再建の件で協力してもらい、また上杉謙信への道筋を陰ながら用意してくれた功勞者であった。

景虎は約束通り彼の後を継ぐことになった。

間もなく足利將軍家からも守護の証でもある しろかさぶくろ 白傘袋と もうせんくろおおい 毛氈鞍覆の使用許可もおりた。

守護 長尾景虎の誕生である。

名実ともに越後の最高権力者になったのであった。

お屋形様になったのである。

最も若い景虎はこのような年寄り染みた呼ばれ方は嫌いであったが。

135

しかし景虎が名実ともに越後の最高権力者になったにもかかわらず  
上田の長尾房長 政景親子は景虎に帰参しなかった。

上田長尾房長 政景親子の件は景虎には目の上のたんこぶであった。  
しかしそろそろ放置して置く訳には行かなくなっていた。

守護代になってから今日までの間 景虎は越後国内に籠り 政治  
経済 軍隊の再建に尽力を尽くした。次に備えるのである。

いつ越後が襲われても相手を粉碎し戦い追い返すためである。

信濃は武田晴信に圧迫され信濃国守護の小笠原長時が林城に立て籠  
もり

関東でも北条氏政の猛攻で関東管領上杉憲政は上野国の平井城で最  
後の抵抗を続けていた。

上杉憲政からは父為景の旧怨も捨ててまでの救援依頼が入っていた。



父為景の関東管領殺しの汚名をそそげるので景虎はこの依頼に手放  
しで喜んでいただけのだが関東に行くには上田長尾の領土を通らなけれ  
ば行けなかった。

関東に出たくても その途中にある上田長尾が間にいるのでと行く  
に行けないのであった。時代の流れで放置しておけなくなったので  
あった。

結局上田長尾はこの年の年末になっても景虎の元に来なかった。

上杉憲政救援の出陣命令も出したがこれも音沙汰がなかった。

翌年天文20年（1551）の正月の挨拶にも来なかった。

そこで景虎はついに決心し 上田長尾の坂戸城に討伐軍を差し向け  
ることにした。

ただ 上田長尾との本格的な衝突は避けなかった。

彼らのここまで粘る根性には一種の尊敬もあつたが実力も決して低  
くはなかった。

晴景時代 上田長尾軍は常に晴景側の主力軍であり、かなりの人数  
を集めていた。

景虎も武田や北条との戦に備え 損耗を防ぐためには実力衝突はな  
んとしても避けたかった。

また姉の仙桃院が政景に嫁いでいることもあつた。

姉の仙桃院は 景虎が晴景から家督を継いだとき怒っていたという  
噂を聞いていた。

姉を差し置いて妹が継ぐとはなんたることと・・

景虎は姉に可愛がられてきたので姉との関係を悪くするのはいやで  
あつた。

このような様々な事情があり景虎としては穏便に解決したかった。

景虎は出陣前に毘沙門堂に籠った。景虎らしくない依頼であつたが  
戦なき勝利を毘沙門天に嘆願した。

そして守護命令の関東管領上杉憲政の手助けのためという大義名分で出陣した。

関東管領の手助けという守護命令であれば上田長尾も変な言い方ではあるが安心して降伏できるであろうと景虎は思ったのである。

上田長尾にもすぐに景虎の征伐軍の情報は伝えられた。

しかし上田長尾も実は事情は同じであった。

今まで支援してきた守護代の晴景が隠居し守護の上杉定実が死去したと思つたら 景虎が正式な守護代になり気が付いたら守護になっていた。

本来の守護代であつた晴景に逆らう景虎打倒でこぶしを振り上げて叫んでいたが 景虎が守護代どころか守護になつてしまい 振りあげたこぶしを降ろせなくなつてしまつた。

いつまでも上げているわけにはいかないが下ろす名分が欲しかつた。

上田長尾内でも確執があつた。房長 政景 父子の対立であつた。

房長は景虎父 為景と常に争つていた、景虎の母方の実家の栖吉長尾とも争つていた。

なんとか為景 栖吉長尾をねじ伏せ晴景を擁立し傀儡にしようとした矢先にこの様である。

引くに引けなかつた。

政景は違つていた。今回の景虎の出陣を好機と見ていた。

振り上げたこぶしを下ろすためである。政景は妻、仙桃院のこともあつたが景虎の実力は認めていた。

以前面会したときの態度はそのためである。

景虎は3000人以上の兵力を率いて上田長尾の居城坂戸城に向かつていた。

秋の収穫前を狙つて出撃していた。

坂戸城内の籠城時の兵糧を増やさせないためである。刈り取りの前

を狙って出陣した。  
兵糧攻めも可能ではなかったが姉がいる手前手荒な真似は避けたかった。

ただこの時期に出兵するのは景虎側にも危険性があった。

当時の兵士は半分農民である。秋の収穫時期は忙しい。兵士をやっている場合ではなかった。

自軍の兵士の中にも国に帰って米の収穫、刈り取りをしたいので早く帰りたいと何度も陳情してくる者が相次いだ。

上田長尾も事情は同じだった。

籠城時に城下町の住民と一緒に立て籠もるのは景虎が栃尾城に籠城したときと同じである。

上田長尾も急いで籠城したので収穫前に関わらず農民は刈り取りを行っていなかった。

兵糧が無い以上に目のも前に米がたわわに実っているのに外に出れないために刈り取れないので坂戸城内には不満が鬱積していた。

そのため外に出て一戦交えるべしとの声の上田城内でもあったが政景が激しく反対したため結局ひたすら閉じ籠るしかなかった。

政景は戦の時の景虎の豹変振りは良く知っていた。

出て行ってもたちまち返り討ちにあうのは分かっていた。数も坂戸城は1000人弱と不利であった。

政景にしてはいかにして父房長の気持ちを変えることが出来るかが一番の問題になっていた。

景虎は坂戸城近くに着陣するとまずは狼狽・稲の刈り取り 放火は厳禁した。

坂戸城 坂戸城下は将来の関東への越後国内の前線基地として利用したかった。

狼藉・稲の刈り取りに関しては兵士からこのまま放っておいて腐ら

すのかと不満がかなり出たが 上田長尾にこちらの気持ち 誠意を見せるためであった。

今回景虎は旗本衆 千坂景長 本庄実乃 金津新兵衛ら腹心の部隊中心に3000人の兵士を連れてきていたが、主だった武将の兵士は農業の繁盛期であったため本来の兵力を集められなかった。そのため意識的に連れてこなかった。政景と本気で戦うつもりがなかったのもあるが農村の繁盛記に部隊を動かすことに家臣団から不満が集中したのである。景虎は越後の守護ではあったが越後人独特の気質なのか家臣との付き合いは他の戦国武将と違い緩やかであったがそのためにも今後も苦労することになる。

ちなみに今回集めた兵士のうち2000人近くは手の空いている町の住人や途中の村民のなどに金を払って偽装で集めた兵隊であった、戦はしないからとりあえず来るだけでよいと。そのため金目当ての高齢者 女や子供も意外と混じっており とてもまとまと戦える部隊ではなかった。水増し 張りぼての軍だったのである。

陣を張り終えると景虎は急いで政景 仙桃院に手紙を書き始めた。景虎の残されている文章は平仮名主体の依頼系でしかも情緒的な文章が多いが今回もいつものその調子でひたすら政景 仙桃院に降伏勧告の手紙を書いた。

越後のために一緒に戦いましょう 姉妹が戦って何になるのでしよう おじに刀を向けるなど私に出来ませんなど 関東管領の手助けをしましょう・・・とにかく頼み続けた。

とにかくいろいろあの手この手でなだめる手紙を景虎は何通か送った。

手紙の伝令は親衛隊の小島弥太郎が主に担当し 何度も坂戸城と本

陣の間を往復したが  
最後には

「またですかい？」

と思わず漏らしてしまい景虎に怒られる始末であった。

房長は微動だにしなかったが政景は仙桃院のこともあり既に腹は決  
めていた。

景虎からの手紙の最後のあの一文を待っていた。我慢比べであった。  
景虎も分かっていた。政景の要求している最後の一文を。

房長と仙桃院に挟まれて四苦八苦している政景には景虎も同情を若  
干覚えていた。

政景も房長に内緒で仙桃院に返書を代筆してもらい全てを語ってい  
た。

結局折れたのは景虎であった。景虎が折れたのではなく景虎軍の兵  
士が折れたのであった。

兵が田んぼの心配をして勝手に軍を抜け出して国に帰りだしたとの  
報告が入り始めた。

景虎は最後の一文を書いた。

政景殿には我が重臣になつて頂けませんでしょうか・・・今までのこ  
とは無かつたことにします・・・

上田長尾の継続と血縁による重臣引き立て、今までのことを水に流  
すという条件を政景は取り付けたのである。

坂戸城は開城した。守護命令にはそむけない、従うとの名分である。  
房長 政景と仙桃院の3人はそのまますぐに景虎の陣地に直行し帰  
参を誓った。

房長は老齢を理由にしていたが 実質責任をとって隠居するのこ  
とであった。

いろいろあつたが景虎 政景 仙桃院 房長にとってはお互いに利益のある形で事は終結した。

景虎はこれによつて軍を損耗することなく越後を統一、政景も上田長尾の正式な後継者として坂戸城を引き継ぎ長尾家でも景虎の血縁者の重臣としての地位を得て、仙桃院も景虎との仲違いはなかつたことにして守護代の姉として君臨できたのである。房長も本人はともかく跡継ぎの政景が越後の守護の重臣として納まることが出来たので一応は納得できたのであつた。

政景はこの後 実際に越後の政治で手腕を発揮し景虎の重臣として活躍するのである。

しかし実は政景の件は一筋縄ではなかつた。

宇佐美が激しく反発していた。

宇佐美と政景の不仲は有名であつた。

何が原因かは周りの者も良くは分かつていながつたが彼らの感情的なしこりと家臣の領土争い 過去の問題も絡み余計にややこしくなつていた。

宇佐美は景虎から見れば年長者でありこのような個人的な件とはいへ いくら守護とはいへ聞けるものではなかつた。

とりあえず景虎は宇佐美をなんとかだめた。いつもの逆である。着座を宇佐美と政景を同じ位置にするなどあの手この手で気を使つた。

ただこの件はその後も解決せず終始景虎を悩ませ 将来のあの事件を引き起こすのであつた。

ともあれ景虎は越後をようやく統一した。

天文20年(1551)景虎22歳 父為景や兄晴景が成し得なかつた越後統一を果たしたのである。

## 来客者

武田の軍師 山本勘助は密かに春日山城に向かっていた。

彼は既に50を過ぎた老人であったが40半ば過ぎまで浪人生活をしていたので腰が軽く危険な任務など積極的に自分でひょうひょうと行っていた。

山本勘助は異色の軍師と有名であった。実力もさることながら他国出身でありながら武田晴信の信用を得て彼の重臣になったことである。

晴信が注目していたのは越後であった。

武田にとってようやく信濃の平定にようやく目処が付き次の目標を越後の春日山に決めていた。そのため、の事前偵察であった。

特に春日山に注目したのは海のない甲斐にとっての海の出口 府内の港であった。

景虎が府内での貿易で得ていると噂される資金も魅力であった。

勘助は商人に変装して少数の護衛と共に堂々と春日山城下に入ってきた。

春日山城下や府内は噂通り賑やかな町であった。

景虎の代になって戦から遠ざかり町は平和そのものであった。

勘助は町の地形図を歩きながら頭に叩き込んでいた。

府内に関しても歳入の金額などを知りたかったがこれはやはり政治中枢まで調べないと分からなかったが来客している船や商売人はかなりの数であった。

人や商品が溢れ賑わっていたので金額はかなり大きいようなのは間違いない。

聞くところによると 青苧や米 魚類 各種農産品など 越後の特産品を畿内に出荷し

帰りの便で 完成品の衣類 嗜好品 武器 砂鉄を持ち帰り さらに陸奥などの東北方  
面と中継貿易も盛んで 明や西日本の毛利家の商品の荷動きまでもあるとのことだった。

春日山城自体は下から見た限りは険しい山城で攻めるのに少々難儀なのが気にかかった。

景虎に関しては甲斐での噂通り女守護とのことだったが、屈強なイメージと違い地元では色白の華奢な綺麗な姫様との評判が以外ではあった。

ただ勘助が気になったのは 景虎は武器の購入や兵士の訓練に熱心とのことで 兵士もわざわざ他国から腕利きを高額報酬で集めていると噂であった。

府内の港や日本海で越後の商人が大きい顔しているのも景虎の直属の水軍が存在し越後商人の用心棒を担いでいると他国の商人のひそひそ話も耳に入ってきた。

また景虎は意外と強権的な面もあり越後国内の港 金山銀山は武力を使って強制的に制圧したとの不平の声も耳に入ってきた。

ただ景虎に気に入られるとお城に晩酌に誘ってもらえるという妙な噂は信じ難かったが・

・(この町であれば晴信様もお気に入り、喜びになられるであろうな)

勘助はそう思いながら街中をぶらぶらと歩いていた。

景虎は軒猿けんえんという忍を使っていた、為景時代からの長い付き合いの関係であった。

血生臭い話であるが汚れ仕事を進んで請け負っていたのが彼らである、忍びの者の本来の活動以外に他国の忍者狩を得意とし 武田の



透破 北条の風魔を幾度となく殺害したと言われている。

山本勘助自ら春日山に乗り込んできたのも実は軒猿に甲斐の透破が襲われ情報収集が円滑に進んでいないという事情もあった。

甲斐側からしてみればもし軒猿が勘助らに危害を加えれば言い掛かりをつけて越後に出兵する腹積もりもあった。

そんなある日 加藤弾蔵なるもの忍が突然越後にやって来た。聞けば士官を希望していると言う。やってくるなり手土産といわんばかりに武田の山本勘助が春日山城に來ているとの情報を提供してきた。重臣たちは一同驚いていた。

春日山城下や府内は自由貿易港であったので人の出入りが多く監視はかなり緩やかで警備の者を咎めるつもりは景虎なかった。

むしろそれよりもおそらく武田がここを狙って偵察している方が不気味であった。

しかも勘助自ら乗り込んできていることが余計に驚きであった。

加藤に景虎は報償を支払い早速勘助の身柄確保を命令した。

勘助を捕らえることに關しては武田から言い掛かりを受け、誤認逮捕であれば商人の反発を受けると直江景綱や宇佐美定満らが反対したが丁重に扱うことで問題無しとした。

勘助は右目がつぶれ肢体が不満足であまり良い容姿ではないという割と目立つタイプであったのですぐに早速翌日勘助らしき人物が捕らえられたとの情報が景虎の耳に入って来た。

しかし案の定 名前も身分証も別人であるとのことであった。

景虎は城まで丁重に招待するよう命令した。不審者としてではなく客人としてもてなすよう厳命した。

広間に招待し 家臣にも來れる者は來るよう伝達した。

景虎も山本勘助の名前を知っていた。武田の異色の名軍師であると。

勘助や晴信は越後の長尾景虎に興味を持っていた。若くして一国の主になり、戦では負け知らずの女武将らしいのとこのことであつた。

勘助は当然景虎に会えるなど考えていなかった。単に春日山や府内の町の様子や地形の情報を自分の目で仕入れ、戦の時の予備知識として収穫できれば良いであろう程度の気軽な偵察旅行のはずであつた。

それがまさかの形ではあるが適つたのであつた。

勘助は一応客人として無理矢理招待された、客人などで縄はないがその場の雰囲気は張り詰め歓迎は明らかにされていなかった。

勘助は 名は三河道安 武田の御用商人で珍しい食料品や産物を甲斐武田家に納めていると名乗つた。

通された広間の上座中央には若い小娘 左右に屈強な男が並ぶ余り見かけない構図であつた。

小娘の側にいた老人が声をかけた。

「どうぞ前におかけなされ・・・」

彼らは自分たちは一切名乗らず勘助に突然話しかけてきた、しかし勘助はすぐに分かつた、何かたくらんでいると。自分も疑われている。素直にやり過ぎるのが一番良いと。

景虎側は宇佐美定満 直江景綱 本庄実乃 金津新兵衛 千坂景長と新たに配下になつた 息子の景親 春日山に所用で来ていた北条高広 色部勝長 齊藤朝信 山吉豊守が勘助見たさにやって来た。

「どのようなご用件でお城に呼ばれたのかな？」

道安 ではなく勘助はぶしつけに聞いた。

「いや そなたが ホレ 武田の有名な軍師 山本勘助に似ていると聞いたので思わず 城の警備の者がそなたを勘違いして捕らえて

しまつてのう・・・すまなかつた・・・ま お茶でも飲んで行つて気でも直してくればのう・・・ほほほ

宇佐美が対応した。宇佐美も名乗りはわざとあげなかったが。

勘助は甲斐商人に対するこのような無礼 武田晴信公が黙つてはおりませんぞと 言おうと思つていたが意外に素直に謝つてきたのでひとまずは矛を納めてみた。

勘助は経験豊富なだけあつて名前通り 勘が良い。

(こやつが重臣の宇佐美か直江であろうな・・・)  
すぐに察しがついた。

「道安殿 すまなかつた・・・」

小娘がお茶入れて差し出した。

勘助は御礼をした。

「このような機会もめつたにない・・・なんかの縁かもしれない・・・せつかくいらつしやつたので甲斐のことをいろいろ教えてもらいたと思つて・・・甲斐の商人とは今後も仲良くやりたいのでな・・・越後の塩商人が世話になつていたのでな・・・」

上座の小娘が話し始めた。

年齢は20ぐらいか 色白の華奢な美女であつた。

桜色の間着の上に少々派手ではあるが豪勢な牡丹の刺繍が入つた赤い打掛うちかけを着て涼しい顔をしていた。

(・・・これが景虎だろつな・・・なるほど・・・驚いた・・・)

勘助は情報収集にいそしんでいた。絶好の機会であつた。

「何も私じゃなくても・・・甲斐の商人はここにたくさん来ていますぞ・・・」

勘助は不愉快そうに言つてみた。

「そなた 御用商人であろう？御用商人は珍しいと思つぞ。武田晴信殿とは親しいのか？」

景虎はいかにもな言い回しで遠慮なく続けた。

「・・・もちろんですとも・・・」

勘助は正直に答えた。

「どんな男か？興味がある・・・教えてほしい・・・」

「・・・容姿のことですか？・・・性格のことですか？」

勘助はわざといやらしい答えをした。

「・・・両方だ・・・」

景虎はにこりと笑うと答えた。

「年は30少し超えています、性格は家臣想いで優しいお方です。

しかし逆らうものには容赦はしませぬ。容姿は私より遙かに美男子であります」

少し自嘲気味な冗談を言ってみた。

左右の猛者共はにこりともしなかつたが小娘はくすりと笑った。

「優しいのか・・・しかし逆らうものには容赦しないか・・・」

勘助はうなずいた。しかしこれは本当であつた。

晴信は新たに占領した土地を家臣たちに分け与え良く収めた。家臣たちもそれがあるから晴信についていくのである。

しかし晴信へ逆らうものへの仕打ちは戦慄そのものあつた。

勘助は志賀城で攻防戦の話をした。

晴信は信濃国守護の小笠原長時の臣下で志賀城に立て籠もる笠原清繁を攻めたとき、志賀城の救援に来た関東管領の上杉憲政軍を小田井原の戦いで打ち負かし、生け捕った敵兵3000の首を全てはねた。そしてはねた首を志賀城の兵士の前にかざし戦意を喪失させた。絶望した志賀城の兵士は全員全滅するまで戦い、生き残った子女は高額で売り払つたという。

勘助がこの話をしたのは脅しも兼ねてもあるが小娘の反応を見たかつたからである。

しかし意外な反応が返ってきた。

「いやな男だな・・・守護のくせに人殺しと追い剥ぎをして喜んでいいのか・・・最低最悪だな・・・」

さつきと違い険しい顔で正直に遠慮なく言ってきた。

「私が成敗して毘沙門天の前にその首をかざしたいくらいだ・・天下の悪人と・・」

勘助は内心少し驚いた。

小娘 景虎だつて自分が勘助と薄々分かつているはずであった、武田の将校である自分とわかつて物を言っているのかと。度胸があるのか単に遠慮がないのか阿呆かと・・

ただ甲斐の本当の商人であっても自分の国の領主をこのように言われれば気分を害するであろうが。

勘助は逆に聞き返してみた。

「もし 本当に勘助を捕らえたらどうしますかな？」

景虎は即答した、

「気にしない・・興味があるのは晴信殿の首だけだ・・放っておく」

勘助は一瞬不愉快になったが続けた。

「名軍師とのことですので捕らえて首をはねれば甲斐にとっては打撃になりますぞ・・」

しかし意外な答えがまた返ってきた

「私には毘沙門天がついている。そのような者 恐れるに足らない・・」

勘助は黙ってしまった。

勘助は人の心を読むのは得意であった。

しかし今回は全く読めない。

本気なのかただの阿呆なのかもわからなかった。

しかし一つ確信した。

これは武田にとって面倒な相手だと・・

「ところで 道安殿・富士山は府中（甲府）から良く見えるか・  
」  
景虎が話を切り替えてきた。

「もちろんでございます・雄大で冬の澄み切った青空の下の雪化粧の富士山は本当に美しいです・姫様が甲府にお出でになられた際は 甲府の名所と一緒にご案内いたしましょう・晴信様にお通しもいたしますぞ・晴信様も姫様ならば歓迎でしょう」

勘助はこの辺で今日は話を打とうと思った。

見た目に反してこの小娘は話しくいと心底思った。

少し自分の気を害しているのも分かった。

「気に入ってもらうのはありがたいが・晴信殿は側室も両手ほどもいて さらに衆道もたしなんでおられるのに・まだ不足しているのか・？」

（・・・！）

なんたる無礼な回答と思った。

衆道は（当時は）高貴な武士に許された たしなみ である。守護である晴信がとやかく言われる問題ではない。男色や女色とは違うのと同じ扱いで物を言ってきた。

景虎は女性だからであろうからのように言ったのかもしれないが 勘助は気分を害し不覚にも少し顔に出してしまった。

景虎は続けた。

「私が晴信殿に逢ったら 癩癩を起こして首をはねてしまうかもしれないからな・晴信殿が居る間は府中に残念ながら行けそうもないな・」

景虎は涼しげに言った。

「・・・側室で・・・ではなく 甲斐と越後の友好を思って言った次第ですが・・・」

勘助も切り返した。

「晴信の側室に行くつもりなど微塵もない・昔断った・今日の話を聴いてその判断が正しかったと思つた・・・」

景虎は平然と答えた。

「・・・戦だけでなく政略で平和を保つのも守護のりっぱな仕事・・・  
聡明な景虎様がそのようなことを自らおっしゃるとは・・・」

勘助も黙ってはいられなかった、言ってしまった。

「私は目の前の一戦を大事にしている・・・晴信のような他国を取って降伏した兵士の首をはねて女子供を売って喜んでる輩とは交渉などしても無駄だ・・・どうせ約束すら守らないであろう・・・」

さすがの勘助も苛立ち始めた。  
今までの無礼な物言いだけでは飽きたらず今度は主君の晴信を呼び捨て扱いである。

小娘の分際で。

「・・・ところで道安殿はなぜ私を景虎と判った？」

(・・・!)

そういえば景虎は名乗りを上げていなかった。

勘助にしては迂闊だった。相手の口車に乗せられてしまった。

「・・・越後の領主様はうら若き乙女と聞いておりましたので・・・  
正直に勘助は答えた。

「さすが 勘 助だな」

景虎はにこりと笑った。

勘助は黙っていた。もう身分を隠すのはやめようかとまで思った。  
少し気が治まらなかった。

「今日は良い話を聞かせてもらった・・・楽しかった。道安殿に土産を・・・」

景虎からさっさと話を打ち切ってきた。

不快感と同時に少し安堵した。

勘助はお辞儀をして

「では 失礼・・・」

勘助は立ち上がって部屋を出ようとしたそのときであった。

最後に景虎は大きな声で言った

「山本勘助！」

勘助はゆっくり 鋭い目付きで振り返った。

「長尾景虎は逃げも隠れもせぬと武田晴信に伝えよ！」

景虎は大きな声で続けた。

「・・・では 戦場で心待ちにしておりますぞ・・・！」

勘助が静かに言うと会釈をして出て行った。

「あれが山本勘助か・・・さすがだな」

北条が良いものを見させてもらったといった感じで言った。

「武田と一戦交える気ですな・・・」

色部が言った。

景虎がうなずいた。

一同覚悟はしていたが妙な緊張を感じた。

景虎は再度加藤段蔵に会った。

勘助の件は再度礼を言った。

しかし仕官の件は軒猿との付き合いがあったので断ろうと思っ  
たが

どのように断れれば良いか頭を抱えていた。

そこである事を思いついた。

直江の入れ知恵もあった。

越中の城にある名刀 長光をとってくるように命令したのである。

(無理であろう・・・)

と思い命令したのであった。

しかし予想に反して段蔵はなんなく名刀を取ってきてしまった。

しかもその城の7歳程度の幼女までも連れてきてしまった。



これには景虎一同も驚いた、でも景虎は真剣に思った。

(この男は危険すぎる・・・)

景虎は言った。

「・・・加藤段蔵・・・そなたは素晴らしい忍びだと思うが・・・怖い・・・  
実力は認めるが・・・私では無理だ・・・使いこなせない・・・すまない」  
段蔵は予想外の返事で驚いた。

「・・・左様でございますか・・・」

「私のような者よりも 武田や北条の方がよいのではないかと・・・」

「・・・わかりました・・・では ごめん・・・」

「・・・すまぬ・・・」

景虎は謝った。

段蔵には手切れ金も含めて褒美を再度出した。

段蔵は思った、

(怖いか・・・やはりただの姫様だったか・・・)

段蔵は呆れながら城を去っていった。

「・・・良いのですか？あれで？」

宇佐美が聞いた。

「腕は立ちますので使い道があると思いますが・・・」

直江も続けた。

「・・・武田に行ったら すぐに晴信にしゃべくりませぬ あの男」

北条が言った。

景虎はうなずいた。

「・・・それでいい・・・晴信が油断してくれれば安いもの・・・」

「・・・なるほど・・・」

一同は感心した。

景虎も最後に一枚仕掛けてみたのだった。

景虎が手をポンポンと叩くと軒猿の者が入って来た。

「加藤段蔵を監視せよ、気をつけてな．．． 越後から出るのを確認すれば良い」

「はっ．．．」

忍びの者は出て行った。

「ううう．．．」

加藤段蔵が連れてきた少女が泣き出した。

「！」

しばらくみんなすっかり忘れていた。

景虎が慌てて駆け寄った。

色部が縄を解いた。

「泣かないでね」

景虎があやすがしくしくと泣き止まない。

「母上．．．」

と景虎に寄り添ってきた、

「わ、私 母上ではないが．．．」

少しあせっていた、

周りの大男が必死になだめた。

「泣かない 泣かない」

「ばあ」

「しかし どうしましょう．．．」

結局軒猿に命じて密かにこの少女は越中の城に戻させたがこの余計な一件のせいかはともかく越中ともこの後もめることになる。

## 世継ぎ

いよいよ世間は騒がしくなっていた。

信濃の守護 小笠原長時は葛尾城の村上義清を頼り武田晴信に徹底抗戦しているとの情報が入って来た。

関東も北条氏康の猛攻で関東管領の上杉憲政の林城が落ち、景虎ではなく常陸の佐竹義昭 を頼っているという情報が入って来た。

一方越後は統一後のしばらくの平穏な時を楽しんでいた。

越後経済はようやく立ち直り領民もしばらくの平和を謳歌していた。景虎もこの時期が人生で一番ゆっくり出来た時期かもしれない。

基本的には城内で書物を読んだり 施政を行ったりすることが多かったが景虎は守護であると同時に武将でもあったので男並みの腕節は無理としても最低限は鍛錬した。

剣術ははつきり言って苦手で上達しなかった、一応訓練したのだが基礎の違いがありすぎて練習にすらならなかったので景虎も周囲の者もこれは諦めていた。

乗馬は好きであった。自由にどこでもいけるからという理由ではあったが、暇があるときは領内見学を兼ねて馬に乗っていた。おかげで乗馬はかなり上達した。

ひよんなことから親衛隊の弥太郎と話す機会があった。

実は弥太郎や景虎直属の千坂親衛隊が普段使っている装備が貧弱だったのもつと良い物にしようという話をしていたのだが景虎が栃尾の弥太郎のことを急に思い出し、同じ名前の人を知っていると景虎が切り出したためである。

弥太郎の父も同姓同名であるが小島弥太郎といい彼も兵隊をやっていたという。

戦場をいたるところ駆け巡り幼いころに別れたきりであるという。母親がそんな馬鹿な主人の名前を忘れないように子供である自分にも父親と同じ名前を彼につけたという。

景虎は失礼かもしれないが思わず笑ってしまった。

弥太郎の母親の機智にである。

景虎は思わずその人に世話になったと言ってしまった、弥太郎は喜んでいた。

偶然にしてすごいと・・何かの縁かもしれないな・・と。

そして今はどうなっているか　と聞かれたとき景虎は思わず答えに窮してしまった。

嘘が苦手な景虎は栃尾城の弥太郎を思い出し、悲しい顔をしてしまった。

しかしすぐに新兵衛が助け船を出してくれた。

「元気に栃尾にいる・・」

しばらくの沈黙の後

「そうかあ」

弥太郎は明るく振舞った。

新兵衛は弥太郎の武勇伝を話し息子の弥太郎もうれしそうに聞いていた。

しかし景虎の表情で彼は全てを察したようでそれ以上その話は景虎にはしなかった。

後で新兵衛になぜ嘘をいったのかと聞くと本当のことを知らない方が幸せなこともありますと静かに答えた。

景虎は終生　嘘は苦手であった。政略が何とか一人前に使えるよう

になったのは人生も晩年の頃であった。  
弥太郎も終生親衛隊として活躍し彼もいつの間にか世間から鬼小島と恐れられる猛者に成長していった。

その後なんか落ち込んでいる景虎をみかねてか逆に弥太郎から近所の家にかわいい仔犬が産まれたので今度城内に連れて来るとい話があった。

景虎は元氣付けられた気がした。

景虎は軍の再建に熱心であった。

貿易や青芋の販売のおかげで越後の財政は順調に増え、余裕も出来るようになってはいたが南の武田や北条への脅威は相変わらずだった、そのため備えとして万全の体制を整えていたのであった。

一般兵の兵装は景虎で全て商人から一括で買い上げて各部隊に振り分け装備の差が部隊によってでないようにしていた。

兵士は優秀な者は景虎直属の千坂隊や希望部署に配備するようにした。そのため春日山城内で景虎自ら閲覧の公開訓練を行った。屈強な男子が訓練に励むのである。

特に車懸けの陣の兵法は重視していた。

部隊を交互に素早く動かし 甲隊が攻撃中は乙隊が休み 乙隊が攻撃中は甲隊が休む。

これを時間差無く素早く入れ替え絶え間なく攻撃しているように見せ相手を疲れさせる戦法である。

実はこの訓練の件が春日山城内や城下町でちょっとした話題になっていた。

訓練は武勇に優れる柿崎景家や甘粕景持が主に担当していたが訓練終了後 景虎が気に入った兵士 景虎は面食いであったので要は美

男子であるが、を城に招待して晩酌を楽しんでいるとの噂であった。もちろんあの勘助も聞いている噂である。城下町では選ばれた者は名誉なことと悪い評判ではなかったが家臣団は別の心配をしていた。

景虎も23歳になり守護とはいえ女性であり異性に興味があるのは当然なことであった。

優秀な兵士で美男子と晩酌をするのは守護と親睦を深めるという面で悪くはなかったが彼女は独身であった。年頃の女性と男性が食事だけで済んでいるであろうかとの余計なお世話ではあったがそこが心配の種であった。

しかも春日山城の景虎の住む本丸は夜間は男子禁制で干坂や新兵衛ですら入れないとのことだった。

家臣団も景虎が結婚して跡継ぎが生まれるのは全く問題なく大歓迎であった。

しかし誰の子供かわからない状態で生まれるのには反対であった。必ず跡継ぎを巡って騒動が起こるからである。

景虎の婿の件は以前よりいろいろ検討されていたが守護代の女性に婿入りというだけで渋る者が多くそのまま結局おざなりになっていた。それ以上に景虎自身も結構好みがうるさかったのも事実であるが。

しかしそろそろこの件の話をしないといけないと家臣団では話題になっていた。

家臣団の間でも誰が進言するかもめていたがこういう問題はぶしつけで最年長者に言ってもらった方が良い、ということ渋る本人を無視して中条藤資が任されることになった。

景虎は毎月、月の頭に家臣たちを集め一週間ほどを評定の期間に定めていた。

この期間に重要な会議をしたり兵士の訓練会や家臣との親睦を深めたりしていた。

この機会に今回の話をすることにしたのである。

ところがこの日は評定の時間になっても景虎は姿を現さなかった。

これに関してはみな心当たりがあったので諦めていた。

またか・・・と。

このようなことは初めてではなく今までも何度かあった。

実は前の日 景虎自ら視察、指示もする城内での兵士の訓練披露があった。

もちろんみな鍛え抜かれた屈強の兵士ではあるが景虎はいつもここで お気に入り を見つけた場合夜の晩酌に誘っていたのであった。景虎の平常時の性格は分かりやすく 気に入った者には5秒ほどじっと見つめるクセがあった。

前日も それ をやっていたのであった。

訓練披露会が終わるとまずは訓練責任者の柿崎景家や甘粕景継が推薦した本当に武勲に優れた者を5名ほど表彰して 続いて景虎が密かに指示して引抜 といっても直接声をかけるだけであるが をしていた。

武勲に優れた5名の表彰が終わると 景虎が引き抜いた者以外は退去したあと景虎が直接晩酌への誘いの声をかけていた。

この引き抜き役は干坂景親がやらされていた。つい最近老齢で引退した上杉定実の重臣だった干坂景長の息子である。彼は景虎より6つ下でこの頃の家臣団の中では景虎から見ると唯一の年下であったのでこのような損な役をやらされていたのである。彼の肩書きは一応親衛隊兵の隊長で長尾家の重臣ではあるが。

前日も若手の美男子が3人ほど引き抜きにあっていたのはみな目撃

していた。

この日は揚北衆の3人 荒川長実（垂水源二郎）と大川忠秀 新発田長敦が声をかけられていたのをみんな見ていた。

荒川長実の色部勝長の部下で腕利きとして有名であった。この3人は景虎に誘ってもらえる自信があったのだろうか、わざわざこの日のために揚北の地から出て来たとのことだった。このように景虎に晩酌を誘ってもらえるという噂はこの頃には城内だけでなく越後国内に広まっていた。

最初の頃は家臣団が最後まで残って暗にそのような行為に関しての圧力をかけていたのだが最近では家臣団が見ている前でもお構いなしであった。

晩酌をすると決まって呑みすぎて翌日の評定を二日酔いで休むことが多かった。

今日もまさに それ であった。

みな諦めていたが一応広間に集まり景虎を待っていると案の定 お花とお春がやってきて

今日は姫様調子悪いのでお休みしますとだけ伝えにやって来た。

みんなが やれやれ・・と 引き上げようとした矢先であった。

今日はひよっこり顔をしかめながら景虎がやって来た。

「あれ 姫様今日休まれるんじゃないやありませんか？」

お春が声をかけると

「う・・そうだったけ？頭痛い・・」

完全な二日酔い状態で景虎が答えた。しかも酒臭い。服もだらしく髪の毛も荒れ放題である。

上座に座るとお花とお春が服の乱れを取り急ぎ直し髪もくしでとかしてくれた。

景虎は化粧はしない。戦場に赴くようになってからやめたのであつ



た。半分男社会に足を入れていたので仕方のない一面でもあった。

みんな呆れかえっていたが

「姫・・・お酒は ほどほどに・・・」

宇佐美定満が言った。

（・・・そんなんでは婿はいつまでたつても来ませんぞ・・・）  
と続けそうになったのを慌てて抑えた。

「う・・・ん・・・ん・・・」

目が覚めてない。

景虎は上座に座ったままあくびをしていた。

「・・・今日評定するんですか・・・？」

色部勝長が一応聞いてみたが

「え・・・？」

目が覚めていないのか酔いが覚めていないのかお手上げの状態であった。

中条藤資が見かねたのか切り出した。

「姫・・・今後ですが晩酌するのは構わないが 新兵衛なり千坂なりを傍に置いてもらえないか？」

「・・・なんで？」

「安全上の問題です！」

「・・・城内は安全ではないか・・・」

「念入れです！千坂と新兵衛と一緒に飲んでも良いではありませんか！」

「・・・二人とも下戸だから・・・」

「・・・え！」

事実であった。そう言われてみれば・・・中条も思い当たる節があった。

金津新兵衛と千坂景親が少し赤くなっていた。

千坂はまだ１７歳で呑み慣れていない、新兵衛は・・・確かに中条が

一緒に呑んだときもすぐに赤くなっていた・  
(あなたが異常に強いんじゃないか・・！)

と危うく言いそうになったのを何とか抑えた。

中条も下がらなかった

「城下で噂がたつていますぞ！」

「いいじゃないか・みんな喜んでいるし・・」

(酔い覚めしておらんに減らず口とは・・まったく・・)

中条は少し呆れながらいろいろ言葉を搜しているようだったがうまく見つけることが出来なかったようであった。

しかしついに決心したのか ずばり を言ってきた。

「晩酌は結構ですが・身どころの分からない後取りはむしろ家臣一同許しませんぞ！」

景虎は相変わらず聞いているのか聞いていないのか ぼーっとしていた。

しばらくして 頭痛のせいであろうが頭を抱えながら言った。

「・・そのようなことはない・心配・無用だ・」

・危うく私は子供が出来ないようだ・と言いつうになったがそこは抑えた。

家臣一同顔を見合わせた。

「婿入りの件はどうします・・？」

直江景綱が念のため聞いてみた。

景虎はしばらく黙っていたが真剣な顔になっていた。

「・・来ても来なくても養子が必要かもしれない・」

みなそれ以上この話しをするにはやめた。

しばらく黙っていたが急に景虎が明るく振舞いお春とお花に声をかけた。

「・・・そうだ 弥太郎のこの仔犬を見に起きてきたんだっただお春とお花 一緒に見にいこうか？」

「姫様 行きましょ 行きましょ」

3人は広間を出て行った。

家臣たちはしばらくみな黙ったままであった。

景虎の毎月の10日前後に起こる腹痛は重症だった。

戦の最中でも引き籠もることが多かったと松平記にも残されている。10日戦後で戦ったのはあの有名な第4次川中島と越中の七尾城攻防戦の時の2度だけである。

謙信 後の景虎が倒れたのも3月9日 死去したのが3月13日と言われている。

景虎は結局終生結婚することはなかった。

戦国大名で結婚していないのは戦国時代を通して管領の細川政元と景虎の二人だけである。

景虎が男子であれ女子であれ結婚しなかった理由は分からない。

もちろん実子もないことになっている。

景虎の跡継ぎになった上杉景勝も養子で長尾政景と景虎の姉の仙桃院との間の子供である。

## 訪問者

平和を謳歌していた越後であったが南から相次いで訪問者がやって来た。

関東と信濃は風雲急を告げていた。

まずは関東からは上杉憲政がやってきた。

冬の雪の三国峠を越えて数名の従者だけを従えてやってきた。

体中に雪を積もらせ ぶるぶる震えながらわざわざ春日山城までやって来たのである。

関東管領の威厳はどこにもなかった。

常陸の佐竹義昭を頼っていると聞いていたので突然の訪問に景虎は驚いたが急いで丁寧に招き入れた。

聞けば8歳の幼子の龍若丸は北条に捕らえられそのまま手討ちにされたという。

「なんとというひどいことを・・・」

景虎はこのような話になると他人事ではいられなかった。

上杉憲政は続けた。

「ワシはもう終わりじゃ・・・関東管領の職は貴殿に譲りたい・・・」

景虎は一瞬憲政の頭がおかしくなったのかと思った。

そのようなことは迂闊にも言うものでないと思った。

しかし彼は本気であった。

「越後の守護を継ぎうまくやっていると定実殿から聞いておった。

上杉家の宝物はそなたに渡したい、息子が死んだ以上そなたに上杉をついでもらいた・・・」

実際に上杉家重代の太刀 朝廷より授かった錦旗 関東管領の綸旨 藤原鎌足以来の上杉家の系図 竹に飛雀の上杉家の家紋の入った陣幕などを持ってきていた。

上杉の継承に関しては景虎にとっては願った条件であった。父為景の守護代殺し 関東管領殺しの汚名を完全にそぐことができる。

上杉定実の越後守護を継ぎ 上杉憲政の関東管領をも継ぐ。長尾家の家の格上げにつながり名誉なことであった。

景虎は了承した。

憲政の屋敷を春日山城に急いで造営させた。

長尾家は実は元は関東に血筋がある家であった。関東の豪族で桓武天皇の血筋 平氏の系統のいずれかと言われているが詳しくは分かっていない。鎌倉時代は三浦一族に仕えていた。3代目の將軍源実朝を暗殺した公暁を討った実行役と言われているが時の執権の北条義時に三浦氏が滅ぼされると流浪の身になりその後上杉氏に仕えるようになったのであった。上杉氏も元は京都の藤原氏の一族で源氏の血筋を継ぐ將軍家が実朝暗殺事件で断絶すると 京都 朝廷から派遣されてきた九条家の後に入った皇族將軍、宮將軍の付き添いで関東に下向したのが始まりと言われている。上杉氏は源氏系の足利氏と血縁関係を持ち 後の室町時代には足利氏の鎌倉公方の執事としての関東管領として活躍し上杉氏の発展と共に長尾氏も発展していくのである。上杉氏は関東で守護も務めるが分家も同時に行われ越後に行った上杉氏に付き添って来たのが景虎たちの祖先の長尾氏である（揚北衆など地場の土豪から見ればよそ者になる）。そのため関東は本来は自分たちのものであるとの意識も強く関東管領となった以上は大義名分もあり打倒北条を叫ぶことも可能であった。

家臣団も関東出兵はおおむね賛成であった。みな関東に憧れを持っておりどこの馬の骨とも分からぬ北条氏康に大きい顔をされている

には快く思っていないかった。

ただ子供を見捨てて逃げてきた憲政に対する評価は芳しくなかったが。

景虎もその点は同じだったが助けを求めに来た者には応じるのが彼女の考えだった。

しかも今回は関東管領からの頼みであり自分がそれを引きつぐ権利も手に入れた。大義名分は充分であった。

ただ上杉憲政が佐竹にも同じ行動をして断られ景虎のもとに二番煎じで来たのはちょっと苦笑いしたが。

もっとも景虎のこの旧権威へのこだわりようは独特であったが関東への憧れの念で家臣はまとまってくれた。一方これによって泥沼の関東戦線に巻き込まれていくとは当時は夢にも思ってもいなかっただろうが。

ほどなく信濃からも来客があった。

高梨政頼 村上義清 信濃守護 小笠原長時たちである。

高梨政頼は景虎に面会する予定だった。

実は高梨たちに会うのにひと悶着あった。

高梨は景虎の甥にあたったので彼を助けることに異義はなかった。

彼の居城中野城や飯山城が信濃の最北端にあり春日山城の防衛上も重要な拠点だからである。

小笠原長時を手助けすることにも異義はなかった。

守護代である彼を助けるという名分は充分であった。

問題は村上義清だった。

実は村上と高梨は今回武田に敗れるまではお互いに敵対していた。

大熊朝秀や北条高広は 高梨と小笠原を助けに信濃に出向くことは

納得したが村上の件に関しては終始反対であった。

今まで敵だった人間を助けるなどおかしいと。地理的にも村上の居城の葛尾城は信濃の中央に位置し越後の脅威にはなんら関係なかった。

ただ景虎は彼が武田晴信に激しく抵抗してくれたおかげで越後はその間、国力を復活させられたと認め、村上義清を実は景虎は高く買っていた。

今日の話聞く以前に既に彼へのお返しをかねて手助けをする気持ちには出来ていた。

また彼の武勇の噂は有名で越後にもその武勇伝はいろいろもたらされてきた。

大熊 北条もその武勇の件は認めていた。その確認次第であった。

もちろん大熊 北条の今まで敵だった人間を助けるなどおかしいとの言い分も一理あった。

そのため今日高梨と一緒に村上も来ているというので一度会って最終的な判断をしようと考えていた。

やがて高梨が姿を現した。

高梨は60手前の老武者だった。

憔悴しきった感じでぼそぼそ話し出した。

「わしらも武田に恥ずかしながら打ち負かされこのありさまじゃ・

」

「武田は強い・小田井原（天文16年 1546）では信濃の

笠原清繁の志賀城の救援に来た関東管領上杉憲政軍を打ち破り 板

垣信方 甘利虎泰 を先陣に 関東管領軍の大將14人を打ち取り

兵士3000人を生け捕りにした・・・」

「・・・」

景虎の耳にもこの凄惨な事件の話は武田の軍師の山本勘助から既に聞いていた。

「武田は生け捕りにした兵士3000人の首をすべてはねて立て籠もる志賀城兵の前にさらし戦意を喪失させ、攻め落とし志賀城兵を皆殺しにしたあと 捕まえた女子供を信じられん高額で売り飛ばし喜んでいたそうじゃ・・・笠原清繁の未亡人は小山田有信に格安で与えられたそうじゃ・・・」

「・・・格安で与えられた・・・？ご婦人をそのように扱うなど なんとひどいことを・・・」

景虎はこの話を聞いて晴信を心底侮蔑していた。残虐な下等だと。

もつともこの晴信の作戦は武田の中でも評判が悪かった。

逆に信濃国人衆の激しい抵抗にあい 其の後の信濃攻略に大いに手間取ることになったためである。後にこれをうまく懐柔したのが晴信の腹心で弟の信繁である。

「で 今日逢わせたい男がいるんじゃ・・・」

景虎は一瞬躊躇した。

今日は春日山城内の普段着 女装であつたからだ。

景虎は越後国人衆以外に会うときは実は男装を今でも続けていた。相手によつてはやはり女子供と侮つてこられるのがいやだつたためである。

しかし高梨よりすべて話しているので大丈夫とのことそのまま会うことにした。

「村上義清殿じゃ」

「失礼いたします・・・」

背丈は柿崎ほどではないが大男で体格も屈強な40代半ばくらいの険しい表情の武者が入ってきた。多分昔は美男子であつたらう。

村上義清は景虎を見て一瞬驚いていたようだったがすぐに元の表情



に戻った。

村上は深々とひれ伏せると悔しさと無念の念をこめて話し出した。

「このたびは武田に苦酸の飲まされてこのような有様。是非奴に一泡吹かせたいと思ひ景虎様に馳せ参じた次第です。是非お力添えを。」

村上義清は噂通り、剛勇な武者であったが源氏の血筋を引いているとのことで高貴な雰囲気を出しているように景虎は感じた。

景虎は今回は大熊 北条の意見もあつたので慎重に考えていたつもりだったが以前より頼まれたら断れない性格であつた。村上の言い方や態度が景虎の琴線になぜか触れたため気持ちはほぼ固まりつつあつた。

景虎は以前より好みのはじつと5秒ほど見つめるクセがあつた。今回もそれを思わず出してしまった。

北条 大熊も下座の方からそれに気が付いたが

(またか・・・全く・・・)

といった表情のままことの成り行きをみていた。

高梨が続けた。

「晴信は戦上手じゃが村上殿は2回やつを破つておる・・・」

上田原の戦い 天文17年(1548年)と砥石城攻防時の 砥石

崩れ 天文19年(1550)である。

村上義清は事実 晴信 武田信玄の戦績に唯一の負け戦をつけた人物であつた。

「噂は聞いておるかもしれんがこの男は上田原で自軍に多大な犠牲を払つて奮戦し先ほどの板垣信方 甘利虎泰をその後討ち取つたんじゃない・・・」

「へええ・・・!」

めつたに声を出さない柿崎景家が驚きの声を上げた。

景虎も驚いた。噂は本当のようだった。

板垣と甘利は晴信の追放した父信虎以来の武田家の重臣で信虎時代の武田四天王の二人である。その重臣二人を激戦の末に葬ったという。

「武田晴信を二度も打ち破ったとは・・・」

「それでは飽き足らず武田の重臣を二人も葬るとは・・・」

宇佐美定満や直江景綱も感心していた。

景虎ももちろん感心仕切りであった。

高梨は続ける。

「砥石城では2500の兵力で7000の武田軍を破り武田軍1000人近くを討ち取り 晴信にも手傷を負わせたんじゃ・・・」  
齊藤朝信や山吉豊守も食い入るように聞いていた。

「そういえばもう一人討ち取っておった、 砥石城でも小山田有信も討ち取り笠原殿のご夫人の怨念も払ったとのことじゃ・・・」

小山田有信も武田家の重臣で彼の葬儀には一万人が訪れたという程の人物である。

義清は終始黙つたままであったが余計にすごさを感じさせていた。

「・・・そりゃ・・・すごい・・・」

めつたに驚かない中条藤資や色部勝長も驚きの表情を隠さなかった。北条高広や大熊朝秀も態度を改めていた、これは只者ではないと。

義清は再度深々と頭を下げた。

「姫様 勝手なお願いで恐縮ですが是非我々にお力添えを頂けます様よろしくお願いいたします」

景虎は迷わず答えた。

「あなたほどの勇者が我が軍に来ていただけるなどこちらも光栄です。こちらこそよろしくお願いいたします」

景虎が命令した。

「北信濃を取られると越後が危ない。世を乱す武田晴信に毘沙門天の鉄槌を加える！全軍出兵準備を！」

こうしてまず北信濃への出兵が決まった。

しかしその後 景虎は村上の武勇伝を聞いて思っていた。

武田晴信の別の顔をである。これほど村上に痛い目に遭いながら勢力をいつの間にか盛り返し気が付いたら村上たちを信濃から追い出していた晴信のやり方にある。

事実村上はこれほど善戦したにもかかわらずその後 晴信に家臣団の切り崩しに会い 晴信の重臣 真田幸隆らにたった一日で砥石城を奪われ 景虎の元に頼って来たのであった。

晴信の戦の能力だけではなく謀略の能力は驚くべきものであった。

## 出陣

武田の陣営は慌ただしかった。

信濃の最終攻略作戦が発動されていたからである。

兵士たちは沸きかえっていた。分捕りが出来ると。

うるさい村上義清や高梨政頼が逃げ出して武田軍の有利は揺るがな  
いはずであった。

気になっていたのは越後軍が動き出した点であった。

晴景は今回は善光寺周辺の北信濃の征圧による信濃の完全統一を目  
標にしていたがさしたる障害がなければそのまま越後に侵入するこ  
とも考えていた。

甲斐では越後の噂は見下したものであった。

長尾景虎は越後を統一してから国外に戦に出たことがない。籠った  
ままである。

商売にうつつを抜かしている女々しい女大将らしいと。

最近武田の家臣になった加藤段蔵からも同じような報告が入ってい  
た。

そのため晴信もそれほど強い相手ではないのではないかと考えてい  
た。

善光寺から一直線に春日山 府内の港までを落とせば景虎が得てい  
ると噂される莫大な現金収入を得られ海の出口も手に入ると甲斐に  
とっては良いこと尽くしであった。

そのため重臣で武田四天王の飯富虎昌 山県昌景たちに密かに作戦  
も立案させていた。

唯一慎重だったのは山本勘助だった。越後で危うく捕らえられそう

になった経験もあり景虎を高く買っていた。

確かに景虎は最近戦をしてないとは言え何よりもこの数年間越後に引き籠もり国を立て直し、会った時の自分に対する不敵な態度も勘助は逆に評価していた。

采配と判断の速さは特筆に値し、部下も武勇に優れ優秀な者が多く、兵士を育て発奮させるのもうまいとの噂も越後国内で聞いていた。只者ではないであろうと考えていた。

勘助は晴信に越後軍あなどるべからずと進言していたが、晴信は実戦経験のない軍隊など 恐れるに足らずとあまり気に留めていない感じであった。

武田軍は沸きかえっていた。赤い具足に身を固めた男たちが慌ただしく準備に追われていた。

晴信が彼らの前に姿を現した。

「親方様のお言葉である！」

飯富虎昌が太い声をあげた。

赤備えの武者たちは一瞬で静まり返り彼らの父を見るような親しげな視線が晴信に注がれていた。

晴信は悠然と兵士たちの前に立った。

晴信は痩せ身で下がり眉毛の一見気弱な風貌だが目の奥には力が籠っていた。

しかし彼の目はそのような野心を隠すかのような優しい目であった。事実彼は部下に対しては豪放で優しくかつが敵には熾烈な男であった。

晴信の着ていた当世具足は濃紺で地味ではあったが大兜には黄金の武田菱が刻まれ輝きを放っていた。

晴信の落ち着き払った年齢不相応の独特の貫禄とそれに相反する少し気弱な雰囲気や部下思いな優しげな目は兵士を惹きつけるのに充分であった。

「者ども・・・ワシは欲しいものは何でも手に入れるぞ・・・今回は信濃全土 あわよくば越後の春日山・・・！」

お前たちも欲しいものは何でも手にいれる・・・武田の怖さを知らしめてやれ！出陣！」

「オー！」

雄叫びが城内にこだましていた。

春日山城内も緊張に包まれていた。

景虎は声には出さなかったが今まで膨大な投資をしてきた、最強の部隊を作るためである。

予算の使い過ぎで大熊朝秀などはおかげですっかり景虎と疎遠になりつつあった。

景虎は今回の留守役は山本寺定長と大熊朝秀にお願いした。越中方面からの守りのためである。

大熊とは奉行の件で少し疎遠になっていた点もあり連れて行きにくかった。

黒川清美 上条政繁も自城に入り羽越方面からの侵入に備えさせた。関東方面の守りには上田の長尾政景を坂戸城に守らせた、

上田の長尾政景は大軍を動員できたので景虎は参加をしてもらおうとも思ったのだが宇佐美定満との兼ね合いもあったので今回は見送った。

久々の戦であった。何年振りであろうか。随分と長い間平和な日々を享受してきた。

平和な自由な日々は景虎は楽しかった。このまま永遠に続いてほし

かったが世の流れがそうはさせてくれなかった。景虎にとって今回が本当に自分の力。今までの準備の結果を試すときと分かっていて、特にこの武田との一戦は負けられなかった。

弥太郎老人の言葉が思い出された、  
「最初に戦う相手にはいやな思いを植え付ける」  
である。

景虎は毘沙門堂に籠っていた。今までの平和な日々感謝して今回の武勲を依頼した。

城内に戻ると将兵たちは久々の戦とのことで息巻いていた。  
みんな準備に追われていた。

「それにしてもよく化け物ばかり集めたな」  
中条藤資が例の言い回しで感心していた。  
兵士は越後国内だけでなく屈強な男たちをいたるところから公募していた。

装備も新調して末端の兵まで行き届かせその充実ぶりは目を見張るばかりであった。

弥太郎老人の言葉を実行しただけであった。

「いい槍ですな」

槍の名手と評判の村上義清も感心仕切りだった。

槍部隊は兵力の5割を占める重要部隊である。

槍も上杉軍用の特注品 春日槍 を大量に用意した。  
通常の物より長めに作られている。

村上は実は槍の名手としても有名で美濃国の斉藤道三と共に名を馳せていた。

槍による槍衾戦法を得意としていた。

景虎はこの話も事前に聞いていた。彼女の好みも多少あったが武田

が彼を苦手としていると聞いていたので武田軍対策に村上は絶対必要であった。

景虎の村上に対する評価は高く、村上の自城の葛尾城が奪回できない場合は代わりに根知城を彼に与え自軍の武将として招待するつもりであった。

村上義清に同伴して来た信濃国人衆も武田への恨みから士気がすくぶる高かった。

高梨政頼や小笠原長時、彼らの残存兵もすべて村上隊に統合し彼らは一種独自の雰囲気を持っていた。

「新しい具足は良いのう・・・」

色部勝長は今日に備え当世具足を新調したとのことだった。

各少将への支度金も多めに入れておいた。

景虎は良くも悪くも意外と外見にうるさい。もちろん理由もある。しっかりと格好の部隊は強そうに見えるからである。

景虎も余念がなかった。

自分専用の統制具足は3着も用意していた。

古風な平安時代風な物　今までの戦で使った既存の物　畿内で流行という洋風な物・・・

自分では何を着たらよいか決めかねたので

「どれがよいかと思う？」

と　みなに聞いてみた。

（・・・お洒落も結構じゃが・・・なんでそんなにたくさん具足が必要なんじゃ・・・）

と北条や大熊は呆れていたが・・・とにかく景虎は外見にうるさいところがあった。

ただ大将の外見は実際大事ではあった。それで兵が奮い立つのである。

戦国武將の当世具足がみな派手なのはそのためである。



金津新兵衛や本庄実乃たちの推薦で初戦忘れるべからずとのことで平安時代風の古風な感じの物を今回は使用することにした。

栃尾城の攻防戦の時のような気持ちでと。かび臭い大きな重いあの甲冑が思いだされた。

宇佐美定満や直江景綱も巴御前のようで格好が良いと言った。

（巴御前 源平合戦時代の有名な女武将）

景虎も源氏物語や平家物語が好きだった影響もあって古風な具足が好きであった。

前線にすぐに出たがるのも もちろん 部隊の吹鼓もあるが実は彼女が好きだった源平合戦時代の武将 源義経公を意識しての行動であった。味方の将兵からすれば少し迷惑な話でもなかったが・・早速着替えようとしたが人目の中では景虎とはいえ着替えられないので まずは大声をあげてみなを大急ぎで外に追い出した。

越後軍の軍備 資金を支えたのは青苧と交易船からの莫大な税収があったことである。

これは年貢収入、金山銀山の収入とは別である。

一般に景虎 後の上杉謙信は無欲で他の領地に関心がない武将といわれている。

これは関心がなかったのではなく他人の領地を取らなくても充分にやっていける莫大な収入があったからと考えられている。

謙信は一般に質素な印象を持たれている方が多いと思うが残された遺品はなかなか豪華でお洒落な高級品が多いという。謙信が死去した際も春日山城の金庫には約2万両の金貨が残されていたという。

景虎は着替えが終わったついでに城内に集まっていた兵士たちの様子も少し覗いてみた。

今まで越後黒人衆は越後の中で戦うことには慣れていたが他国の者と戦うことは初めてであった。しかもその相手が最強と名高い武田

晴信軍であったのだから尚更である。訓練は充分につんできたがしばらく実戦を経験していないのも心配の種であった。明らかに緊張の張り詰めた気配が感じられた。

「みな大分緊張していますな・・・」  
斉藤朝信が心配そうに眺めた。

景虎もうなずいた。正直景虎も今までになく緊張していた。武田軍の強さは越後でも響いていた。赤い具足を実にまとい赤備えと呼ばれ無敵の軍と名高かった。

今までの越後内での合戦の経験を踏まえ自分なりに部隊を訓練してきたつもりであったがうまく機能するかどうかは分からなかった。

しばらくして柿崎景家 甘粕景持から兵を少し落ち着かせるため声をかけてもらえないかとの提案があった。

柿崎 甘粕は武勇に優れた人当たりが良いので兵の訓練を主に担当していた。

(自分がこういう状態なのに・・・)

景虎は断ろうとおもったが越後軍の立役者の二人からの要望を断ることが出来なかった。

真っ黒い具足や胴丸 濃紺の直垂と統一された装備で身を固めた大男たちがたむろする二の丸に下りることにした。

初陣の栃尾城の頼りなげな兵士たちに比べるとその違いは一目瞭然だった、

真っ黒の胴丸や具足に身を固め 越後名産の青芋から作られた濃紺の直垂を統一して着せていて色だけでも強そうな感じであった。

ちなみにこの色はこれは武田の赤色の具足 赤備えに対抗するためこのように決定したのであった。

旗も今回初めて毘の旗を使った。毘沙門天の毘である。

自分で作った軍隊であったが自分があまりの迫力に圧されているの

が感じわかった。

景虎自身が言うのもなんであったが怖かった。

ものすごい怒号がどこからか突然聞こえた、局所的な喧嘩か何かのようだったが景虎は思わず足がすくんでしまった、それだけ兵も緊張していたのだが・・柿崎が見兼ねたのか小声で

「姫様 落ち着いて・・堂々と・・」

景虎はうなずいた。

御披露目壇までゆっくり堂々と歩いた。

景虎は元来見た目が良かったので具足を着るととても良く似合った。兵士は単純な物で自分たちの大将が格好が良いとそれだけで奮い立つものであった。

先にも述べたが戦国時代の大将たちの当世具足がみな派手なもののためである。

景虎に気づいた兵士たちがざわめき出し近寄ってきた。

「オイ！景虎様だ・・！」

「オオ・・麗しい・・」

「かつこいい・・！」

失礼ながら景虎は飼いならされた猛獣が近づいてくるように感じた。何か言っているようだったが景虎の耳には入っていない。

右足と右手が同じ動きであった。顔では笑っていたが明らかに緊張してこわばっていた。

土下座する者まで現れるが当然視界に入っていない。30メートルにもない距離だが長く感じた。

ようやく壇中央に付くと

「お言葉である！」

柿崎の野太い声が響きあまりの声の大きさに一瞬肩を縮ませてしまった。

騒がしかった場は一瞬で静まり返った。

鋭い強豪な猛者どもの視線が一斉に景虎に向けられる。

（・・・怖い・・・）

頭の中が真っ白になっていた。

（一杯呑んでおけばよかった・・・）

と 思ったものの後の祭りであった。

「・・・え・え・・・」

ようやく声を振り絞るが声あまり出なかった。

実はこのようなことは今までもやったことがないので何も考えていなかった。

普通に出陣 とだけで済ますことももちろん出来たが生真面目な景虎は自分の理屈を延々とこの場で話始めてしまった。

「・・・今まで越後衆は国人同士ばかりで争いお互いに疲れてきた・・  
ようやく一つにまとまったと思ったら南からは武田 北条に我らは  
狙われ越後は危機に瀕している・・

武田晴信は実の父を追放し、生け捕った兵士3000人の首をはね  
捕らえた子女を売り飛ばし喜んでいる天下の悪人である。このよ  
うな狼狽行為を行う悪党には我々が鉄槌を下さなければならぬ。

毘沙門天の使いである我らの力を奴等に見せつけよう。奴等を越後  
に近づけてはならぬ。

さらには神聖な善光寺がある信濃も武田の手に落ちようとしている。

信濃や善光寺の人々は我々に助けを求めている。人々から助けの  
依頼を受けたら我々は行かなければならない。

信濃のため 善光寺のため 我らの愛する越後を守るため 信濃に  
向けて出陣する。

義は我々にある・・ 勝利は我々のためにある・・ 越後のために  
戦おう 美毘沙門の化身であるこの景虎にみなを貸したまえ！」

「・・・え・・・??？」

妙な静けさが当たりを覆っていた。

こんな変わった前振り聞いたことが無いからである。

普通は乱暴に言えば 武田晴信の言葉ではないが 分捕りにいくぞ  
といわんばかりなのだが回りくどく理屈っぽい女々しい・・景虎  
は女であるが・・前振りだったからだ。

しかも分捕りどころか人助けのために戦うと言う。

「何を・・おっしゃってるんだ・・？」

疑問を問う声で兵たちがざわめきだした。

要は分捕り禁止をここで景虎が公言してしまったこともあったが自  
分たちに神の軍になれと真面目な顔で言われることに対しての戸惑  
いでもあった。

分捕りは当時の兵士や戦ではごく当然の行為であった。それを禁止  
すると。

戦もそんなに現実には生易しく美しい世界ではない。血生臭い世界で  
ある。

でも大將はいたって真剣に言ってる・・

兵士たちの本音もどうしたら良いのか分からなかった。

柿崎 北条 中条は啞然としていた。

甘粕 色部 も戸惑っていた。

宇佐美 直江 実乃 新兵衛 千坂たちも手助けの言葉を必死で探  
しているようだった。

ただ村上 高梨 小笠原たちは感じるものがあつたのか縮こまっ  
ていた。

しかししばらくして手前のほうから

「そうだ！」

「いいぞ！」

「景虎様万歳！」

大声がこだました。

聞き覚えのある声だった。

親衛隊の弥太郎 秋山源蔵 戸倉与八郎たちであった。  
助け船をだしてくれたのだ。

しばらくしていたるところで掛け声が出だした。

そして景虎の手前の強面の兵たちが言った。

「分捕りのためではなく・・・人様のために戦えますかい・・・」

「いやな時代ですが そのようなお考え・・・こんな顔ですが嫌いじやありませんぜ」

「ご立派ですな・・・お供いたしますぞ 姫様」

「・・・」

景虎は目頭が熱くなり涙がこぼれるのを抑えるのに必死だった。

甘粕が声をかけた。

「殿 掛け声を」

「出陣」

弱々しい掛け声ではあったが充分であった

「オー！」

太い掛けが春日山城にこだました。

城門が開き柿崎隊 村上隊を先頭に5000人の部隊は春日山城を出発した。

城下では見物人やら見送りやらで人が溢れていた。

越後の衆にとつても初めての他国出征とのことで思い入れも違ったのかもしれない。

今更ながら景虎は人の多さに驚き越後国民の期待の大きさに驚いた。  
景虎本人が城外に姿を現すと歓声はさらに大きくなった。

兵たちは皆誇らしげだった。

今までの 越後の兵士と違い皆鍛えあげられ 足軽隊は長い特注の

春日槍を持ち 装備も乱れがなく 荷駄の荷物も豊富で溢れていた。兵士に花を配っている少女がいた。誰かを見送りに来たのかどうかは分からない。

花を配ることは晴れ舞台祝いの意味と別れの意味がある。

花を持った少女は景虎の近くに寄ってきた。表向きは彼女は笑顔であった。

景虎は思わず立ち止まった。

少女は一厘の紅い花を差し出してきた。

景虎は受け取ってよいものか迷い振り返って見たが

「いいんじゃないですかい」

高広が答えた。

「お似合いかと・・・」

宇佐美も同意した。

他の家臣もうなずいていた。

「これなんという花？」

景虎は聞いてみた。

「柝姫という椿です」

「柝姫か・・・ありがとう」

景虎はしばし花に見とれていた。

(もし自分が・・・姫のままだったら・・・)

景虎は受け取った柝姫じっくり眺め 本当の姫だった昔を一瞬思い出していた。

そして花の向こうの景色に現実に戻るのだった。

我が子であろう 若い兵士を抱いて送る老夫婦・・・

兵士の幼子と妻であろうか 別れを必死に惜しむ 人々の姿が目に飛び込んできた。

景虎は今更ながら自分の背負っている物の重さに改めて打ちひしが

れた。

「・・・国を背負うとは重いものだな・・・」

戦が美しい物でもなんでもなく理想や理屈だけではないことも景虎は充分承知していた。

おそらく2度と越後に戻れない兵がたくさん出ることは分かっていた。

それで悲しむ人たちがいっぱいであることも分かっていた。

しかし生真面目な景虎は本気で越後や自分の職務を守ることを考えていた。

そのために行かなければいけないと自分を納得させなければいけなかった。

自分を納得させ奮い立たせるため そのためにありえない美しい理想や理屈を並べて自分を言い聞かせていた。

景虎は子供であった。しかし景虎や越後にとって幸いだったのはその子供じみた理屈を分かってくれる大人が多かったことであった。だから彼らはそんな景虎についていったのであった。

「・・・越後は守って見せる 絶対・・・」

景虎は誓い花を胸元にそつと刺した。

天文22年（1553）春 景虎は武田晴信との因縁の地になる

川中島に初めて向かったのであった。

景虎24歳の時である。



## 武田菱

武田晴信率いる甲斐軍は川中島の南方の更科八幡に悠然と布陣して越後軍の到着を待ち構えていた。

晴信は越後軍のことはあまり気に留めていなかった。

初めての国外での戦で約5年近くまともな実戦経験が無いと。

更科八幡までおびき寄せ一網打尽にしてやろうと考えていた。

そして機会あれば春日山 府内に一気に押しかけてやろうぐらいに考えていた。

軍師の山本勘助は慎重だった。

忍びの報告では久々の戦にもかかわらず武装は末端まで行き届き士気も高いとの情報が入っていたからだ。

武田の天敵である村上義清や戦い慣れている信濃国人衆が先陣を買って出陣しているとの情報も気がかりだった。

しかし一番分らないのは越後軍の出兵理由だった。

越後に近い北信濃の高梨雅頼や信濃の守護の小笠原長時を助けるのは分かったが高梨と敵対していた村上義清を助けるのが分からなかった。

しかも村上上の城は中部信濃の葛尾城で地理的には越後側が助ける理由がそれほど高くはなかった。

村上の武勇を買ったのだらうと勘助は言い聞かせたが。

景虎が無条件で兵を出しているという噂も信じ難かった。

「兄上・・・」

武田信繁が晴信に声をかけた。

「・・・もしかしたら側室になっていたかもしれない大将で・・・」  
信繁が悪戯っ子のように言った。

信繁は晴信と同じ母の実の弟のせいもあるが晴信に可愛がられ、また忠臣として彼を支えた。

晴信が一度失敗しかけた信濃の運営を立て直したのが信繁で晴信の信頼も厚かった。

家臣団にもその気さくな人柄で人望があり晴信の実父の信虎も彼に後を継がせようとしたほどである。しかし晴信も彼をねたむことなく彼の実力を認め重宝していた。

「・・・運命だな　ハハハ・・・」

晴信が笑った。

「捕らえたら　もしや側室にいたしますか？」

滅多に悪乗りしない内藤昌豊まで話に乗って来た。

「好みだったらな・・・ハハハ・・・」

晴信が豪快に再度笑った。

「なかなかの美女との噂ですが酒好きで若衆好きで癪癪持ちらしいですよ」

馬場信春が続いた。

「ならば　なおさら兄上におあつらえだ・・・」

また信繁が悪戯っ子のように言った。

「まったくだ・・・ワハハ・・・」

晴信は笑いが止まらなかった。

「それにしても・・・越後は敵ながら大変ですな・・・女子を大将に担ぎあげるとは・・・」

飯富虎昌は呆れたように言った。

「しかし・・・それで国がうまくいっているようですし・・・一度も負け知らずの戦上手とのことですよ・・・」

高坂弾正は慎重に言った。

「・・・ふむ・・・」

晴信は少し笑うのをやめた。

「勘助・・・おぬしはどうだ？」

晴信は勘助に聞いてみた。

「小笠原 高梨 村上たちを助けるために出陣したとの噂ですが・・何も要求していないとのことですが・・何か他に狙いがあるのか・・？読めませんか・・まことに景虎とは変わった大将ですな・・」  
勘助だけは視点が違った。

自国の領土を広げるために大名は戦をする。他国の領土を奪い取って部下に与える。

それが普通であった。他国のために出兵する、でも領土はいらぬ、これが理解できないのであった。

先程からずっと考え続けていたことではあるが北信濃の高梨を助ける理由は越後の地理的な安全の理由で分かったが中信濃の村上を助ける理由がやはり分からなかった。今回は村上の武功を買ったのだからと考え勘助は自分を納得させてはいたが。

越後軍は信濃の白坂峠に差し迫った。峠から神代坂を下れば間もなく善光寺平に入る。

5月目前の信濃は風が爽やかだった。信濃と越後は思ったより近いと景虎は思った。

神代坂にさしかかると善光寺平が悠然と広まっていた。善光寺は子供のころ母親の虎御前に連れられて来たことがあった。女人にも解放されている古刹である。武田の手に落ちるのは越後の安全以外にも信心深い景虎はいやであった。

「行くか・・」

景虎はつぶやいた。

軒猿を中心とする先行偵察部隊に続き本体も神代坂を下りだした。しかし意外な情報が入ってきた。

途中の支城はすべてもぬけの殻という。敵部隊がどこにもいないという。

まもなく甲斐軍は善光寺平最南方の更科八幡に大軍を集合させ待ち

構えているとの情報が入って来た。

8000近い軍という。

こちらは5000、数の上では劣勢だったが景虎は進撃命令を出した。

初戦は絶対に落とせないとの信念だった。

今回は珍しく反対意見が出なかった。

越後軍と行動をともししている信濃国人衆の闘志が極めて高かったのもあるがみな覚悟を決めていたからである。

最初の一戦は負けられないと。

越後軍は北国街道を南に進んでいった。

善光寺を通り過ぎかなり南に下ったところ

川中島の南端の千曲川の支流の湿地帯を挟んだ向こう側に甲斐軍は布陣していた。

8000の真つ赤な武田軍の具足を着た武者がずらりと待ち構えていた。

本陣を最後方にその前に壁のように部隊を展開して越後軍を待ち構えていた。

三列ほどで壁を作っていた。

武田菱が風に泳ぎ、風林火山の旗が無数になびいていた。

中国の軍法という 風のように速く攻め 林のように静かに潜み 火の如く激しく攻め 山のように動かない・・・

今まで村上義清相手の二戦以外は負け知らずとの噂通り強そうに感じたが引けなかった。

景虎は怖さをすぐに断ち切る必要があった。

部隊を停止させると

「酒を・・・」

景虎は酒を持ってこさせる枅一杯に注ぎ一気に飲んだ。

越後の上級米で作った酒で甘口の呑みやすい酒である。

「ワシらも今回はもらおうか・・・」

珍しく他の者からも願いが出た、景虎はうなずいた。

金津新兵衛 本庄実乃 斉藤朝信 甘粕景持 千坂景親も緊張しているのだから、一気に飲んで気を紛らわしているようだった。宇佐美定満や直江景綱 中条藤資 色部勝長ら40半ば以上の戦に慣れた連中は飲まなかったが表情を一切変えず悠然としていた。

他の足軽兵にも今回は酒を許可した。みな緊張しているようで意外と飲む者の方が多かった。

しばらくすると先陣の村上義清 柿崎景家の伝令の使者が飛んできた、

何を休んでらっしゃる 早く進撃 攻撃命令を 兵が興奮して騒いでいると。

景虎は思わず苦笑いしてしまった。

飲まなくても平気な者は平気なのだ。

再び前進命令を出した。

甲斐軍の陣取る更科八幡付近の名前の分からない小川の湿地帯を挟んで彼らの正面300m手前まで前進し再度停止した。

武田晴信は本陣の外に出て対岸にいる越後軍をじっくり見ていた。

初めて見る越後軍である。村上をはじめとする信濃国人衆が混じっているとはいえ久々の戦というのに高い士気が感じられた。装備も驚くほどしっかりしていた。

越後名産の青芋から出来た濃紺の直垂の上にみな真っ黒な当世具足や胴丸を着込んでいる。

末端の兵士を含め全軍装備はしっかり行き渡っているようだった。

越後軍は展開することなく春日山城出てきた状態で一直線の隊列でやって来ていた。

兵士は弱そうな相手にはみな挑発するが今日の甲斐軍は普段よりおとなしかった。

晴信は珍しくいやな予感がしていた。

しかも越後軍の先陣には武田の厄病神の村上義清がいた、もう一人は初めて見るが柿崎景家という越後では有名な武者とのことであった。背丈は村上より大きく熊のような恐ろしさがあった。

一方勘助の懸念は確信に変わっていた。これは面倒な相手だと・

景虎は甲斐軍の配置を見てから空きの後方本陣の遊撃による攪乱も考えたが今回は敵の胸を借りる気持ちで正攻法で思い切って真正面から進撃することにした。

晴信も名将として名高い、変に仕掛けると逆に仕掛けられる可能性も考えられたからである。

「荷駄行けるか？」

景虎が確認した。

荷駄隊は食料や炊事、武器修理補充を専門の補給部隊で戦闘では離れたところで移動基地として置いて行く事が多いが今回は敵の数が多いので危険を承知で同伴させることにした。

荷駄の責任者は直江だった。手助けもらえればこの程度の小川の湿地帯は渡川可能との回答であった。

荷駄隊は牛が食料 補充武器 その他荷物を大八車で牽引し、兵士も調理の女性や武器修理の高齢者が中心の部隊で戦闘に不慣れで足が遅いので殿しんがりの甘粕隊に手伝わせた。間もなく先行偵察部隊から前方の進路確認、着岸先も状況確認の連絡が入った。

「行きますか・・・」

宇佐美が聞いてきた。

景虎はうなずいた。

戦では川や湿地 荒地を敵前で渡っている最中と渡り終え配列に着くときが一番危険であった。

しかも今回は敵の本陣の真正面に出る非常に危険な作戦をあえて取った。

甲斐軍に越後軍が一步も引かないところを見せるためである。

「渡河開始！」

景虎が大声で命令を出した。

先陣の村上隊 柿崎隊が同時に並ぶようにして小川や湿地帯をずっとと渡り始めた。あとの部隊も続く。

陣形は特に意識していなかったが実は越後軍は村上隊と柿崎隊だけで三分の一を今回占める鋒矢のような形になっていた。先陣で無理やり突破させる戦法である。逆に言えば彼らに全てを託していた。

本陣に戻った武田晴信の元に報告が入った。

越後軍が甲斐軍本陣手前に横渡る小川の湿地帯を渡りだしたと。

「・・・荷駄を奪いますか？」

飯富虎昌が晴信に聞いてきた。

晴信もうなずいた。荷駄隊は置いていくだろうと思ったのである。

遊撃の騎馬隊で荷駄隊を密かに襲撃し越後軍がひるんだ隙に越後軍本隊に甲斐軍本隊で攻撃をかける手はずであった。

渡河中であるので動きも鈍い。

しかし次の瞬間甲斐軍は目を疑った。

荷駄隊まで越後軍本隊と一緒に湿地帯を渡り始めた。大きな大八車を牛が大変そうに引き荷駄の女老人兵が後方の殿部隊の手助けを受けながら必死で渡っているという。

「信じられんことをする・・・」

飯富虎昌が思わず漏らした。

晴信が冷静に言った。

「連中は上陸後部隊を再編成するだろう・・・その時を一気に襲え・・・  
渡り切らせるなよ」

先頭の村上隊 柿崎隊は川を渡り終わり武田軍真正面の岸边に上がり始めた。

甲斐軍の最前列部隊も機会を見計らい攻撃準備を始めているようであった。

しかし甲斐軍にとっては予想外なことが起こった。

岸边に上がった村上隊 柿崎隊の先陣部隊は渡河中の仲間の部隊を待つことなくそのまま 一直線に突然甲斐軍に襲い掛かってきたのである。

襲われたのは最前列 中央に陣取っていた真田幸隆 信綱親子の部隊であった。

勇猛果敢と評判であったが不意打ちのうえに二つの部隊に一気に襲われたらさすがにひとたまりもない。

村上軍にとって真田は仇だったのもあるが凄まじい攻撃で真田隊はあっさり打ち破られた、村上隊 柿崎隊はあっという間に二列目の原虎胤と横田康景親子の部隊にも襲い掛かった。原も老将ではあるが武勇の誉れが高い男であったがこちらも苦戦していた。

真田隊の両翼に展開していた秋山信友隊と小幡昌盛隊が慌てて村上隊 柿崎隊を左右から取り囲もうと前進を開始するが景虎の命令が先に立て続けに発令された。

「北条 左！色部 右！敵を展開させるな！足を止めよ！」

北条隊 色部隊が岸に上がるとそのまま一気に秋山隊 小幡隊に突撃して行った。

最前列の秋山隊と小幡隊ら左右の展開部隊も岸に上がった北条隊



色部隊に抑えられてなすすべもなく援護できず 二列目の原隊も村上隊 柿崎隊に中央突破されつつあった。二列目中央の原隊が崩れだすとの左右の両翼の山県昌景隊と馬場信房隊が中央の原隊の援軍に向かおうとしたが 越後軍の予想外の早い動きで情報伝達がうまくいかず自軍内で混乱し始めた。

「何をやっておるか・・・！」

珍しく勘助が苛立っていた。

「勘助 怒るな・・・」

晴信が逆になだめに入った。

こちらの方が兵力は上である。大丈夫と落ちついていた。

景虎の命令は続く、

二列目中央の原隊が崩れだしたのを確認すると

「中条隊 斉藤隊 本庄隊 前進！ 村上隊 柿崎隊と交代準備！」  
車懸けの陣で疲労してきた先陣の村上隊 柿崎隊と素早く入れ替わり 休ませたあと再度交代する戦術である。敵に休めさる隙を与えず連続して攻撃する方法で上杉軍の得意技であった。

甲斐軍も忙しい。

「三列両翼の内藤 山本の騎馬隊は 一列両翼秋山と小幡の騎馬隊と一緒に越後軍の本隊真横を突け！ 槍隊は引き続き越後の両翼の相手をしる！ 二列両翼の山県と馬場は中央の原隊を援護しろ！ もっと中央厚くしろ！」

勘助が命令を出した。

一列の両翼秋山隊 小幡隊 三列の内藤隊 山本隊の槍部隊は越後軍の北条隊 色部隊を釘付けにして、手薄になった景虎本体親衛隊を 両翼の 一列三列の合同騎馬隊で遊撃することにした。  
大回りになるが軍を遊ばすわけには行かなかった。

しかし一列の騎馬隊は思いの他 北条隊 色部隊を抜くのに難儀して越後軍景虎親衛隊まで届く部隊は少なかつた。

越後軍では荷駄隊がようやく岸に上がり甘粕隊が自由になった。

「荷駄は親衛隊真後ろに固定 甘粕隊は荷駄防衛をかねてしばし休憩せよ・・・」

景虎は命令を出す。

越後軍の北条隊 色部隊を抜いてきた武田の赤い騎馬武者が景虎親衛隊目掛けて突撃してきた。

「親衛隊 近づけるなよ・・・」

親衛隊長の千坂が命令を出した。千坂は実は今日が初陣だが落ち着き払っていた。

「荷駄守備隊は遠慮なく射よ」

直江が荷駄隊に命令を出す。荷駄隊の老齢な弓手や弓を使える女子兵が接近してくる赤備えの武者たちに次々と弓を射る。

親衛隊の槍隊長の弥太郎が許可を求めてきた。

「踏ん張りを効かすため部隊の一時停止許可を！」

「許可する・・・」

甲斐軍の二列目の両翼の秋山隊 小幡隊の遊撃隊は思ったより少数しか突破できなかった。

接近してくる甲斐軍の赤い騎馬武者に荷駄隊の弓が浴びせられるがさすがに噂だけあって巧みに潜り抜けてすぐに景虎の親衛隊まで接近してきた。

「槍 構え！」

弥太郎が大声を出すとかんざしのように槍が騎馬武者を迎え入れた。がしゃがしゃと不気味な音を立て甲斐軍を迎え入れる。

「ち・・・長いか！」

春日槍の方が武田の槍より若干長い、武田の騎馬武者はすぐにそれに気づき無理な接近をあきらめた。

「もつと回せ！もつとだ！」

後方に下がった武田の騎馬武者が兵が足りないと怒号を上げている。

甲斐軍も積極的に動いていた。

三列の両翼内藤隊 山本隊の騎馬隊の部隊は一気に景虎親衛隊攻撃に回っていた。

北条隊 色部隊を避けるよう大回りで行かせたので到着に時間がかかっていた。

中央では村上隊 柿崎隊に代わり 中条隊 斉藤隊 本庄隊が武田本陣直前の飯富虎昌隊 武田信繁隊 晴信本隊に迫ろうとしていた。ただ甲斐軍の最終防衛隊だけで猛将ぞろいとあって守りが厚く二列目の山県隊 馬場隊の横やりもあってかなり苦戦しているようだった。

「北条 色部は離れすぎないように 間に気をつけるように・・・」  
景虎は念入れした。

景虎の親衛隊近くまで接近した甲斐軍の二列目の秋山隊 小幡隊両翼騎馬部隊は増援を待っている間も越後軍の荷駄の弓で接近できず苦戦していたがようやく増援の三列の両翼の内藤隊 山本隊が到着すると両側から挟みこむように景虎の親衛隊に襲い掛かってきた。

赤備えの騎馬武者が恐ろしい形相で槍を持ち 景虎親衛隊を両側からすごい勢いで挟むように押しかけてきたが景虎の親衛隊は微動だにしない。

槍同士の激しい戦闘になった。

「クソ・・・越後の槍は長いのか・・・」

景虎親衛隊本体の周りに群がっていた甲斐軍は親衛隊の春日槍に阻まれて四苦八苦していた。

しかも景虎を見て甲斐軍の武者の中から驚きの声があがっていた。  
「・・・大将が最前線にいるなんて・・・」

景虎の耳にも届いたが景虎は平然とし微動だにしなかった。  
充分に彼らが接近したのを見て景虎が命令をまた出した。

「甘粕は左！宇佐美は右！こいつらの背に回れ！」

「何！」

甲斐軍の本隊襲撃隊は驚いた、まだ展開していない部隊がいて後ろに回られたら逆に挟まれてしまう、

「退却！」

甲斐軍の隊長が叫ぶと潮が引くように退却を始めた。

「さすがに早い・・・！」

これには景虎も感心した。

「北条 色部と甘粕 宇佐美は交代！親衛隊前進！中条 斉藤 本庄援護！」

景虎直属の親衛隊も激戦になっていた3列目中央に押しかけてきた。武田本陣前中央が激戦になりつつあった。

甲斐軍も反撃の準備に追われていた。

「真田親子 原親子は本陣後方で合流編隊直せ！再突撃準備！」

勘助が指示を飛ばす。

突破され後退してきた元中央一列真田隊 元中央二列原隊が再度編成のため集まり その動きで晴信本陣後方で大量の埃が舞った。

「越後本隊を襲撃した騎馬隊は左右に大きく円状に展開困んで待機してる。いつでも飛び出せるように。命令があるまで動くな」

繁信も指示を飛ばした。

真田隊 原隊合同部隊を本陣手前の飯富隊 繁信隊 晴信本隊と合流させて越後軍を押し返し、現在戦場を中心とした周りで囲むように待機している先ほど景虎の親衛隊を襲撃し損ね撤退してきた秋山隊 小幡隊 内藤隊 山本隊の騎馬隊で越後軍に再度押しかけ止めを刺す案である。

「兄上！突撃許可を！」  
準備が整ったようので信繁が晴信に許可を求めた。

晴信は許可を出そうかどうかと迷っていた、

越後軍の中央攻撃隊がそろそろまた村上と柿崎と交代するのも目に見えていた。

向こうも総力戦で来ている、勝てるかもしれないが味方の被害も大きい。

「・・・待て・・・待機だ・・・」

晴信は命令した。越後軍との初戦で兵を消耗しなくなかったのである。

晴信の意匠を組んだのか越後軍でも動きがあった。

「やめ！全軍一旦停止！」

突然景虎が停止指示を大声で出した。

晴信の本陣のすぐ後ろに砂煙が上がってそれを見ての判断だった。

景虎もさすがに総力で甲斐軍が当たって来られると危険と判断したのである。

「迎撃に切り替え！隊列替え！荷駄隊近く軸！後退！」

越後軍も潮が引くように荷駄隊を軸に後退し 魚鱗を描くように隊列を変えて迎撃の準備に切り替えた。

甲斐軍の陣地は驚きの声が洩れていた。

「やりおるわ・・・小娘が・・・」

勘助がうなっていた。

以前会った時は大口を叩いているのかと思ったが予想以上であった。

「信じられんわ・・・」

越後軍の予想外の戦慣れした動きに信繁 飯富も同じであった。

晴信はしばらく黙っていたが一言

「撤収」

とだけ命令した。

相手が予想以上に面倒なのがよくわかった。

「・・・小娘の軍がなかなかやりおるわ・・・しかし戦うだけが戦でないことを教えてやるわ・・・」

先の村上との戦で兵を若干消耗していたので甲斐本国の補充部隊と合流編成後 万全を期そうと考えたのである。

甲斐軍はそのまま再度陣を整えると距離を取りながらじわじわ後退し一気に府内まで引き上げていった。

甲斐軍の思わぬ後退を確認すると景虎は懐の毘沙門天を取り出し静かになった戦場で横たわったまま残され二度と目覚めることの無い両軍の兵士に念仏を唱え丁寧に埋葬するよう指示を出した。

その後 越後軍は一気に村上義清の居城だった葛尾城まで押し寄せ奪取に成功したのであった。

「思ったよりもたいしたこと無いな・・・」

北条がうれしそうに言った。

ただ景虎はそうは思っていないかった。

村上の言葉を思い出していた。

勝ったと思ったら負けていて取られていたと・・・

晴信は三步迫って二歩後退しながら来ると・・・  
引き際の良さにいやな感じを覚えていた。

村上の居城葛尾城を取り返したことに安堵し景虎は越後に帰ってい

った。

しかし晴信のすごさをこの後景虎はすぐに知ることになる。  
いやな予感の中したのであった。

## 甲斐の虎

8月の春日山城下や府内は夏の暑さと商売人の熱気で蒸れていた。しかし春日山城は高台のため 冬の厳しさに比べ 夏は海風で涼しく爽やかであった。

そんなおり信濃から再度使者が飛んできた。

武田晴信が再度大軍を率いて村上らの葛尾城を襲い落城させ一気に善光寺平に進軍しているとの情報だった。

(・・・さすがに早い・・・)

景虎は思わずつぶやいた。

あまりの引き際の良さにいやな感じはしていたが残念ながら予感は的中した。

景虎はすぐに動員令を出すと再度自ら信濃に出陣した。

今度は8000の兵を用意した。

越後軍は前回同様一気に南下し白坂峠から神代坂を一気に下った。

8月末とはいえ信濃の夏は暑い。景虎は実はこの暑さに一番辟易していた。

湿度と日焼けがとにかく苦手であった。

顔に行人包みのように純白の越後上布を巻き日焼けと汗を防いでいた。

3ヶ月前に戦ったばかりなのにすぐにやってくる晴信の凶太さに少し苛立っていた。

善光寺近辺まで後退 待機していた村上軍と合流するとすぐに隊列を整えた。

犀川を渡り前進を続けると 前方布施あたりに堂々と構える甲斐軍が見えてきた。



今回は1万という大軍であった。

実は苛立っていたのは景虎だけではなかった。

越後の国人衆にもまだ更科八幡での戦いの恩賞が行き渡っていないかった、

景虎は戦や内政では驚異的な能力を発揮するが国人衆相手の裁定やなどは本人がやる気が沸かないのか苦手なのかわからないが遅々として進まない傾向があった。

越後軍兵士も普段は農民である。米の収穫直前に兵隊に駆りだされ苛立っていた。

そのため越後軍はみな早く越後に帰りたい、早く終わらせたい一心であった。

いつもどおり怖さを紛らわせるため一杯飲んだが、今日は苛立ちのせいもあり、かなり多めに吞んでしまった。部隊の配置が終わると「水増しの軍など恐れるに足りぬ！ 行けえ！」

甲斐軍に越後軍は襲い掛かってきた。

越後軍は隊列を整えると見たこともないかなり密集した集団で低い腰で春日槍を前に並べてじりじりとゆっくり接近してきたあと、甲斐軍に一気に襲い掛かってきた。

密集し低く構えるのは弓や投石から身を守るためである。

甲斐軍の弓手と小山田弥三郎隊自慢の投石を受けながら猛然と突っ込んできたのである。

甲斐軍は前回と違い二列配列であったが兵数が多い分一隊の厚みがあった。

また前回の件があったので中央も重点的に厚くした。

越後軍は前回同様村上義清隊 柿崎景家隊を軸による武田本陣めがけての集中攻撃を始めた。

(・・・能が無い攻撃よ・・・)

と晴信は思ったが越後軍は今回も前回同様激しい闘志を丸出しでやってきた。

越後軍から言わせれば闘志というよりは苛立ちによる怒りだったのだが。

景虎は再度 前回事様 村上義清率いる信濃国人衆を中心に兵力を固めてきた。

一列目は村上義清隊には高梨政頼隊 小笠原長時隊連合の1500の大部隊、

柿崎景家隊は今回初めて上田の長尾政景隊を編入して兵力を厚くしこちらで2000近くと村上隊以上に強化した。鋒状の配置も同じである。左翼は北条高広 右翼は色部勝長でこちらも同じである。

二列目の中央は中条藤資隊 斉藤朝信隊 本庄実乃隊 千坂親衛隊  
前回武田本陣前での

苦戦を踏まえて新たに山吉豊守隊も追加した。 左翼 甘粕景持隊

右翼 宇佐美定満隊

荷駄は相変わらず直江景綱隊だが親衛隊にべったりつけて一緒に行動させた。兵力が多いよ  
うに欺く意味もあった。

甲斐軍も前回の雪辱をはらすと最前列の中央隊に真田幸隆 信綱  
隊親子 原虎胤 横田康景原親子の合同部隊を配置していた。

二列目両翼は山県昌景隊と馬場信房隊と前回同様だが中央は飯富虎  
昌隊 内藤昌豊隊 山本勘助隊 武田信繁隊 武田晴信直属部隊  
更には小山田弥三郎隊とかなり分厚い布陣をひいていた。

数では甲斐軍は越後軍を上回っていた。しかも今回の武田の部隊は  
景虎の言っていた水増しの軍ではなかった。前もって準備していた  
正規兵であった。

武田の將校たちも今回は力で押し切る自信があった。しかし越後兵の苛立ちの感情の方が上回っていたようで信じ難かったが武田軍は今回もじりじり押された。越後軍の戦法は前回同様で読めていたがどうにも分が悪かった。

今回越後軍は前回と違い最前列両翼の秋山信友隊 小幡昌盛隊にも北条高広隊 色部勝長隊が中央隊攻撃と同時に時間差なく甲斐軍両翼にも攻撃をかけてきた。

甲斐軍は中央部隊重視の布陣のため左右の秋山隊 小幡隊に戦力の余裕がなく、越後軍の北条隊の色部隊の対応に追われ前回のように遊撃による中央の真田隊 原隊の手助けが出来なかった。甲斐軍は部隊を厚くしてきてはいたが攻撃の自由度が今回は失われていた。怒れる越後軍の前には真田親子 原親子の部隊は善戦していたが次第に押され始めた。

越後軍の中央は村上義清隊 柿崎景家隊 長尾政景隊 左翼 北条高広隊 右翼 色部勝長隊 景虎得意の車懸の陣でどんどん押していた。

いつの間にか

中央は中条藤資隊 斉藤朝信隊 本庄実乃隊 山吉豊守隊 千坂親衛隊 左翼 甘粕景持隊 右翼 宇佐美定満隊 に切り替わっていた。

甲斐軍は必死で防衛していたがついに一列目の中央の真田親子 原親子の部隊は押し込まれ ついに中央二列目の飯富隊 内藤隊 山本隊 信繁隊 晴信直属部隊 小山田隊と越後軍は交戦に入った。両翼の部隊は越後軍 甲斐軍共に両軍の二列の部隊が混戦になっっているようであった。越後軍両翼は甲斐軍の山形隊 馬場隊の猛攻で車懸かり戦法が失敗したようであった。

一方越後軍の中央の攻撃隊に千坂率いる親衛隊に景虎は今回も一緒

に入ってきているという情報が入った。

前回同様であるが大将自ら最前線に出てきているという。

「まともな大将のやることじゃないな・・・」

思わず信繁がつぶやいた。

勘助は後退してきた真田 原の部隊を再編成して本陣のすぐ側に待機させた。

越後の中央部隊が本陣の近くまで来たら前回同様一気に押し返す戦略である。

越後軍も再度動いているようで 一列目の村上隊 柿崎隊を予想よりも短い休憩期間で 戻そうとしているようで一列 二列の合同軍で強行を予定しているようであった。両軍の両翼の混乱も見越して動くようだった。

晴信は少し迷っていた。

ここで無理やり突破をかければ勝てるかもしれないが味方の犠牲が増えるとの判断であった。晴信は戦に負けるのは嫌いだが無駄な消耗はもつと嫌いであった。以前の敗戦経験から兵の消耗が一番割に合わないことを熟知していた。晴信にしては今回の戦が前回と全く同じ展開で面白くもなかったので無理をしたくもなかった。

まもなく勘助からいつで真田隊 原隊が出せるとの連絡も間もなく入ってきた。

越後軍は晴信の本陣前で飯富隊 内藤隊 勘助隊 晴信本隊 信繁隊 小山田隊と交戦していた。

越後軍も全力で向かってきているがさすがに苦戦しているようであった。

越後軍背後の休憩中の村上軍 柿崎軍が動き出した。

晴信は決意した。

「真田と原の馬を騒がせい・・・」

晴信が落ち着いて命令した、本陣裏で待機している真田隊と原隊の馬を騒がせいななきや砂煙で相手を威嚇するのである。

晴信はまずは越後軍を止めることを考えていた。

正直言つて越後軍は予想以上で損害を増やしたくなかった。

景虎たちの視界にも武田の本陣が見えてきた。

しかし本陣前はさすがに強固であった。なかなか抜けない。両翼も混戦になって動けないでいるとの情報も入っていた。

村上と柿崎も再度投入して一気に押し切る準備をしていたが武田の本陣真後ろで砂煙が激しく舞っているのが見えた。

(くっ・・・前と全く同じか・・・)

景虎は迷ったが結局進撃を一旦止めることにした。

「止まれ！戻れ！」

景虎の命令で進撃はようやく止まった。

越後軍は少し後退して素早く隊列を整えると両軍の間に100m程の短い緩衝帯が出来た。

甲斐軍も深追いせず再度隊列を整えた。

しばし睨み合いの静かな空気が、両軍の間を流れていた。

突然であった、景虎は緩衝帯に入り 武田の本陣の前に単騎で立ち塞がった。

今日は若干飲酒運転気味であるが今日は酒の勢いよりも苛立ちの方が上回っていた。

武田が3ヶ月でまた舞い戻ってきた上この暑さと同じ戦法にである。行人包みのように顔に巻いていた日焼けを防ぐ純白の越後上布をほどくと肩に巻き直し

素顔で

「御大将の晴信殿 顔を出されよ！」

と大声で武田の本陣に呼びかけた。

越後軍も甲斐軍も仰天であった。何を突然するのかと。しかも大将自ら。

越後軍も慌てて村上 柿崎などが景虎の護衛に近づこうとするが私には毘沙門天がついている、矢など当たらない、大丈夫という理解不能な理屈で無理に下げられてしまった。

ただ いつでも飛び出せる位置で待機はしたが・

(狙撃されたら終わりだ・何を考えているんだが・)

越後家臣団の心配をよそに本人はお構いなし。今日は酒の分量間違いと機嫌が悪いようで険しい顔であった。

甲斐軍も騒ぎ出した、敵の大将が単騎で本陣前に出て騒いでいると・

しかも噂通り本当に女だ・と

晴信の元のもすぐに情報が知らされた

「景虎が顔を見せると騒いでる？」

さすがの晴信も驚いた。

(まともな大将と思えん・)

しかし興味は深々であった。

俗な言い方であるが美女との噂でもしかしたら側室に来ていたかもしれない人間である。

話だけは聞いてやろうかと。今回の一戦で決着が付かないのも分かってもいた。

「本陣の囲いを解け」

晴信が命令した。

武田の家臣団も仰天した。

相手の誘い水に乗るなど迂闊であると飯富 内藤が反対したが

「小娘を見るくらい目の保養でいいだろう・・・」

と軽い言い回しで押し切った。本陣を守っていた飯富 内藤 勘助

信繁 晴信直属部隊ら中央本隊が左右に別れ武田菱が映える白  
本陣が丸見えになると困いが解かれ本陣の中の様子があらわになっ  
た。

景虎は初めて晴信を見た。

年齢は30前半くらいだが年齢不相応な威厳があった。  
落ち着き払いどっしり構えていた。

豪放と効いていたので肥えた人間かと思ったが意外に痩せ身で赤い  
色の少し入った濃紺主体の地味な当世具足に身を包み黄金の武田菱  
の紋が目立つが地味な普通の大兜を小姓が持っていた。

薄く口髭を生やし眉毛も険しくなく少し下がり気味で若くして守護  
になった苦勞を刻ませていた。むしろ見た感じは弱気な感じもした。  
眼光は鋭くはなくむしろ優しさを感じた。

残虐無慈悲と聞いていたので景虎はちよつと以外に感じた。  
予想外だったので思わず不思議そうな顔をしてしまった。

周りにはこの前見た山本勘助や晴信の重臣たちがいた。

晴信の左隣いた30手前の若い爽やかな人当たりの良さそうな、し  
かし切れ者の雰囲気醸し出す武将が晴信寵臣の弟の信繁であろう  
と思った。

あの山本勘助も信繁に続き居座り噂通り晴信の信用を得ているよう  
であった。

晴信の右に居た真つ赤な大鎧を着込んだ大男が飯富虎昌、その側に  
いた厳しい顔の中高年が副将の内藤昌豊であろうか・・・

若い少年少女と思しき武者も数名いた。

晴信は衆道をたしなみ好色と有名だったのでその小姓であろうとす  
ぐに分かった。

少女がいたのは以外だったが一番若い妻を戦場に連れ歩いていると  
聞いたことがあったのでそれではないかと思った。

晴信も景虎を見て思った。顔には出さなかったが正直驚いた。

本当にただの小娘じゃないかと、勘助の報告どおりであった。

もつとがっしりした薙刀を振り回しているような勇猛な女武者を想  
像していたが色白の細身の背は女子としては少し高いが華奢な小娘  
であった。

麗しい姫様と言われたらそれで終わりで武者にはとても見えなかつ  
た。

独特の薄茶色というか薄い金色の馬にまたがり平安時代風の古風な  
赤基調の派手な具足に身を包み絵巻物の巴御前さながらであった。

純白の越後上布を肩に巻き黒い髪を風にさらさらとなびかせて威風  
堂々であった。

敵ながら天晴れで晴信の好みには充分適っていた。

しかし険しい顔でこちらに睨みを聞かせていた。

（やれやれ・・・あんなのに嫁入りされていたら命がいくらあっても  
足りんわ・・・）

晴信は内心苦笑した。

しかし他の者も同じ様に思っていたようで武田兵の騒ぎは収まらず  
正直に驚きの声や表情を浮かべていたが晴信の直近の小姓にいたっ  
てはしばらくして

「・・・ねえねえ・・・かつこいいね・・・あのお姫様・・・」

「・・・うんうん・・・」

と なぜか好意的なひそひそ話を始めた。

晴信が顔を覗き込むと驚いて無駄話をやめたが・・・

飯富や内藤も正直に信じられんわと口を開けていた・・・



勘助はともかく信繁は平静を装いむしろ後方の越後軍の武者の方を気にしている様子であった。さすがに二人は好機とばかりに情報収集にいそしんでいた。

景虎のすぐ左後方に武田の天敵村上義清 右後方にいた黒い大鎧に身を包んだ熊のような恐ろしい形相の大男が越後一の猛者と名高い柿崎景家であろう。

景虎を囲むように少し離れたところに居る 悠然と構える武者たちが中条 北条 千坂 長尾政景 色部 斉藤 山吉と軍旗から判断していた。

景虎の真後ろに待機する中高年が越後の二人の智将 宇佐美定満と直江景綱であろうと・・

景虎の真後ろに控える甲斐軍より長い槍を構える親衛隊の槍部隊も大柄で屈強そうな強面の面々ばかりであった。

甲斐軍にとっては麗しき姫君に引きつけられた獰猛な部隊・・今まで見たことがない相手だった。

しばらくのにらみ合いのあと 突然弓矢が武田陣営から一本放たれた。

誰かが狙撃したようだった。弓矢は景虎の肩の防具に軽く当たったが景虎は平然としていた。

「やめんか！ みつともない！」

珍しく晴信が大声で叫んだ。武田の弓手は驚いて後退した。

景虎側からも狙撃手が出てきて弓を構えた。晴信を明らかに狙っていた。

騒ぎが静まり緊張間が両軍を覆っていた。

「弾正・・」

晴信は高坂弾正に声をかけた。高坂弾正は元々は晴信の衆道の相手の一番のお気に入りであったが武人政治家としての実力も十分に備え、甲斐の将来を背負う若者として晴信も期待する年齢は25歳の美男子である。

「はっ！」

快活な返事とともに素早く弾正がやってきた。

「・・・姫君にあのぶっそうな物を下げるように言ってきてくれ・・・」  
景虎側の弓手を下げることであった。

「はっ！」

弾正は景虎の元に向けよった。

しかし弾正はここで若さゆえの間違いを犯してしまった。こう言うてしまった。

「姫様 わが殿がその物騒なものを下げるようにと・・・」

景虎は黙っていた。

一瞬弾正をにらみつけたあと無視してしまった。何か機嫌を損ねたようであった。

会話が聞こえたのであろう。

晴信が少しに嬉しそうににやけていたのが景虎と弾正の目にも見えた。

ただ弾正はなんで景虎が機嫌を損ねたのか分からず少し焦ってはいたが・・・

後方にいた宇佐美が馬を弾正にそっと接近させ小声で弾正に声をかけた。

「ホレ・・・おぬし・・・姫様じゃなくて景虎様であろうが・・・まったく・・・」

(・・・しまった！)

思わず弾正は本音で言ってしまった。

「も 申し訳ありません・・姫様・・ではなくて景虎様・・我が殿がその・・物騒なものを・・」

弾正が言い終わらないうちに景虎が手を上げた。

越後の弓手は全員下がった。

「・・・すみません・・」

さすがに弾正も少し気恥ずかしかったのか敵の感覚ではなく素直に景虎に謝った。

晴信がにやにやしているのが目に入った。

「ところで・・」

突然景虎が話し出した。

「？」

そして少し馬から身を乗り出すように弾正をじっと見つめて聞いてきた。

「そなた・・名前は・・なんと申す・・？」

「え・・？」

弾正は驚いた。予定外だったからである。

「わ 私の名前ですか・・？」

弾正はもう一度確認を取った。

景虎はうなずいた。

「そう そなたのお名前・・」

景虎は弾正をじっと見つめていた。お気に入りの時の行動である。

(こんなときに・・また始まった・・)

景虎の家臣一同や越後兵は渋い顔だが今日は酒のせいか本人はお構いなしである。

晴信や武田の家臣団や甲斐兵はみな口をぼかんと開けてあっけにとられていたが・・

景虎は元が良い。いつのまにか普段の涼しげなにこやかな顔で弾正を見ていた。

見つめられて弾正の方が気恥ずかしくなってしまうた。

「た 高坂 弾正 です・・・」

不覚ながら少し顔が赤くなつた気がして目を合わせないようにして答えた。

「高坂 弾正か・・・」

「・・・ハイ・・・」

「高坂弾正・・・ウン・・・覚えておこう・・・」

「・・・で・・・では 失礼！」

弾正は慌てて武田の陣地に戻った。

陣地で晴信が待ち構えていたが今度は少し不愉快そうな顔で少し口を尖らせていた。

「弾正・・・ワシを焼かすなよ・・・」

「・・・すみません・・・」

突然大きな声が入って来た。

「晴信殿は人の物を取るのがお好きなようで・・・！」

景虎が元の厳しい表情で啖呵を切ってきた。

晴信はゆっくりと威厳を持って返事をした。

「信濃のことか・・・？」

景虎はうなずいた。

「すぐに出ていってもらわねば毘沙門天の天罰が下りますぞ！」

景虎は続けた。

晴信は黙っていたがすぐに返した。

「甲斐の国のためにやっている・・・何が悪い・・・おぬしこそ何しに来た」

晴信はずばり聞いてきた。

景虎の本心を聞きたかった。

「助けを求められたから来たまで！」

晴信は景虎が何を言っているのか理解できなかった。

晴信は一瞬冗談かと思ったが真剣に言っているようだった。

飯富虎昌が思わず本音を漏らした。

「あやつ 大丈夫か・・・？」

「酒でも呑んでるんじゃないかなろうか・・・まったく・・・」

信繁は呆れていた。甲斐軍は知らないが飲酒は事実でもあるが。

晴信も同じであった。浮世な人間かどうかしてるかと思った。

「姫様のおっしゃること・・・よくわかった・・・」

晴信は嫌味満点で言った。

「人の物を取るのとは良くないわな・・・が、ワシにはワシのやり方がある・・・」

力の世の中じゃ・・・取り戻したかったら自分の力で取り返すことじやな・・・」

そして弾正をちらりと見て

「しかし・・・おぬしも人のこと言えんだろうに・・・」

武田軍から笑いが起きた。

弾正は顔を赤らめ下を向いてしまった。

景虎は一瞬むっとした表情をしたがすぐに切り替えた。

そして笑顔で髪をさらりと掻き分けると

「わかりました・・・ならこちらも遠慮はしません・・・晴信殿も・・・取られない様 お気をつけてくださいませ・・・」

と返した。

(・・・口の減らない小娘が・・・)

さすがの晴信も少しむっとした。

(・・・しかし面倒な奴・・・)

とも思った。

しばらく黙ったあと景虎にも聞こえるように大声で命令を出した。

「・・・撤退するぞ！ 塩田城へ！」

甲斐軍は編隊を整えると恣意的に背中を越後軍に見せてさっと塩田城へ撤退して行った。

越後軍はその後、荒砥城を落としたあと荒砥城に籠るが甲斐軍の反撃を受け城を放火される。越後軍も再度甲斐軍を追い返した後、晴信の立て籠もる塩田城に押しかけてみたが大軍に立て籠もられてはお手上げであった、9月末には兵糧や兵の田んぼの関係もあり軍を大急ぎで越後に引き上げていった。

晴信も越後軍を見送ると同じ事情で甲斐に大急ぎで引きあげていった。結局越後軍は村上の居城葛尾城を取り返すことが出来なかった。村上はしばらく高梨政頼と共に北信濃に駐屯し守りを固めてもらうことにした。

こうして第一次川中島の合戦は慌ただしく幕を閉じたのであるがこの後も五回 12年に渡って両者は戦いを繰り返して行くのである。

## 上洛

春日山城は大騒ぎであった。

川中島からようやく帰ってきて一週間 具足の埃も落とさきつていないのに景虎が今から上洛すると言い出したからである。

未っ子で少々わがままに育ってきた嫌いはあったが家臣団も景虎が女子で娘ほど年が離れていたこともあるあまり厳しい事が言い難かったのも事実であった。

が さすがに今回はみな黙って居なかった。

評定ではみな猛反対した。

特に直接の脅威にさらされている高梨政頼は猛反対だった。中野城に3000近くを駐留させているとはいえやはり不安であった。あの晴信のことだから景虎が居ないと聞くや攻めて来るに違いないと恐れていたのである。

他にも理由があった。上洛するにしろ陸路で行けば為景時代から敵対する一向宗本願寺領土の加賀を通らざるをえずに襲われる可能性もあった。

また海路で行くにしろ冬の日本海は不機嫌で遭難する危険性があった。

今ここで景虎を失ったら越後は終わりであると。熟慮をとみな訴えた。

景虎にも言い分はあった。この時期は雪で越後国内は軍が動かせない、要は晴信も越後まで兵を進められない、北信濃も雪で軍を動かせないはずである、大丈夫と。

さらにこのような時代である、秩序を守り重んじることは大事である。

事実景虎は従五位・弾正少弼だんじょうしゅうに任じられその叙位任官の御礼としての上洛の目的もあつた。將軍に謁見するのは大事な仕事であると。この辺に景虎の悪く言えば古い考え方 中世的な權威にすぎる構造や志向が見てとれてしまうのであるが・・

大事な商人たちとの約束もあつた。延び延びになっていた蔵田五郎左衛門との約束であつた。商人たちのおかげで越後経済 越後軍は回復した。彼らの税金で越後は成り立っていた。こちらもいろいろ要求したが商人も約束をよく守ってくれていた。景虎も約束を守る必要があつた。

冬で軍が動かせない今が絶好の機会であつた。

陸路ではなく海路で行く予定だつた。越後水軍と商船の部隊は航海に手馴れている、大丈夫心配無用と説得した。

とにかく景虎は都になんとしても行きたかつた。もちろん趣味的な面からも行つてみたいという本音もあつたが。

しかし家臣団も今回は引き下がってくれなかつた。

治まらない家臣団の意見を景虎は黙つてしゆくしゆく聞いていた。みな言っていることが正しいのは充分に認めていた。

しかしみなが一通り意見を述べたあと一言言つた。

將軍に謁見するのは守護の勤めであると 絶対行く と・・

家臣団は弱りきつていた・・どうしてこう頑ななんだと・・みないろいろな考えていたそのときであつた。

「ガハハハハ・・」

豪放な笑いが突如響いた。

一瞬みなあつけにとられた。大声を出して笑つていたのは北条高広であつた。



「・・・いやはや 片腹痛いわ・・・全く・・・」

高広がわざとらしく笑っていた。

景虎は少しむっとした。北条は西国の毛利の出身である。西国独特の遠慮のない口の利き方、それ以上に彼が粗相なのは充分承知していたので普段は彼の物の言い方にもあまり気に留めていなかったのだが今日の彼はあまりにも意図的だったので思わず反応してしまった。

「・・・そんな可笑しいこと言っただつてもりはないが・・・」

景虎は口を尖らせて北条に言った。

「・・・可笑しくない？可笑しすぎますぞ・・・」

北条はうそ笑いをやめると景虎をぎろりと睨んだ。

そして厳しい口調で言い放った。

「褒賞の件が終わっていないのに商人と一緒に遊山に行くなど・・・

笑止千万！」

景虎は一瞬ひるんでしまった。北条は武勇の男である。言い方に迫力がある。

景虎から見ても年長者でもある。しかも彼の言っている事は正しかった。

しかし景虎も切り返した。

「商人からの税金で越後は成り立っている・・・無視できない・・・遊山ではない！」

將軍に謁見するのだから大事な仕事であろう！」

景虎も思わず声を荒げてしまった。

「女々しい・・・たわけた屁理屈を・・・」

北条がふてくされて言った。

「・・・！」

景虎は思わず立ち上がって肩を震わせていた。こぶしを握り締め、険しい顔で少し涙目になっていた。

景虎はあまり激情しないが怒りが頂点に達すると肩が震え険しい顔の中に少し涙目にいつもなった。

「も・・・もう一度・・・言ってみる・・・！！！」

景虎が声を震わせて言った。完全に怒り心頭だった。

みな血の気が引いた。ただならぬことになってしまったと。

「北条殿！言い過ぎじゃ！」

金津新兵衛が声を荒げた。

「ふ 二人とも落ち着きなされ・・・」

宇佐美定満も飛び込んだ。

「・・・言い過ぎ？本当のことを言って何が悪い！言い過ぎも何もないわ！」

北条も全く引かない。

そして

「我らは命を懸けてあなた様に忠誠を誓っている、それなのにその返事もしないで都に行くと言っていることにワシがひとこと言ったまでじゃ！ごめん！」

北条は立ち上がると怒ってそのまま評定を放り出して出て行ってしまった。

みなが啞然としていた。

「・・・う・・・」

景虎は一番痛いところを突かれてしまった。北条の言い方はともかく言っていることは正論だった。景虎は何も反論できなかった。

景虎はしばらくして力が抜けたようにへなへたと座り込んでしまった。

結局その日の評定で上洛の件は何も結論がでなかった。

しかし結局景虎は行動した。

このような時代秩序を重んじることが大事と判断したのである。それを大儀名分としたのであった。みなも分かってくれるであろうと。

翌日景虎一行は早朝夜も明けきらない内に春日山城を出発して府内

の港に向かっていた。

実は既に蔵田五郎左衛門たちとは連絡を取り合っていたのであった。本庄実乃 金津新兵衛 千坂景親の腹心たちと親衛隊の弥太郎 秋山源蔵 戸倉与八郎の腕利きたちに同伴してもらった。

お春とお花も世話役で同伴してもらった。本人たちも行きたいと騒いでいたが。

府内の港では北国船が一隻出港準備に追われていた。

船には蔵田五郎左衛門一行と越後水軍衆が待っていた。

景虎一行は荷物をさっさと積み込むと船は日の出前に府内の港を静かに出港した。

景虎は生まれて初めて船に乗ったが今日の日本海は静かそのものであった。

海から見る府内や春日山城は新鮮だった。

みなには悪いなとは思っていたが都に行く嬉しさの方が上回っていたのか昨日のことはすっかり忘れ上機嫌で年甲斐もなくはしゃいでいた。

船は快適に一路西に向かった。

景虎一行が出発した日の春日山城の評定も大騒ぎであった。景虎の置き手紙にである。

都へ行ってくる。宇佐美 直江 政景筆頭に留守役よろしくと・

北国船は快適に航海を続けていた。

水軍衆によると今日は風向きが良く明日には敦賀の港に入ることが出来るという。

船の左岸には能登半島が広まっていた。父為景の代から因縁の一向宗本願寺の領土である。

実は当時の日本の船は洋船と違い横風では航海できなかつた。そのため実は水軍衆や蔵田五郎左衛門が一番心配していたのは天候であつた。

彼らは能登半島の港に天候が悪いときは緊急時に避難してはいたが今日は景虎が乗っていたのでそのような事態は避けたかつた。ひとまず天候 風向きともに良く一安心であつた。

景虎も海路の速さに驚いていた。今日は特別に条件が良いとのことであつたが陸路よりも断然快適であつた。景虎は都と越後の間にある一向宗を屈服できたらどんなに楽だろうと一瞬思つたがそれ以上考えるのはやめた。

他人の領土を取つて喜んでゐる武田晴信の顔を思い出したからである。

景虎が越中や能登半島を支配下に置くのは今から更に後年の48歳の時である。

船はやがて翌日の昼に朝倉の支配下の敦賀の港に入った。

敦賀の港は都や機内への玄関口ということで繁盛していた。

上陸すると朝倉家に挨拶した。朝倉家は父為景時代以来の友好関係である。朝倉にとつても越後は日本海海運の船税金の大事な客であつたので景虎一行を歓迎してくれた。朝倉は近江の浅井 山城の六角にも連絡を取つてくれており旅路の安全を約束してくれた。

実は今回の衣装の件も景虎の問題の件であつた。

朝倉家と面会したときはやはり男装の麗人として直垂を着て髪は烏帽子内に束ねて面会した。

もちろん ばれるのは承知ではあつたが。

越後国内ではともかく他国では景虎は男として通っていた。

越後国内では景虎が女子であることは周知の事実であつたが越後兵の中から大將が女子と思われると敵に侮られるとの声があり、結局

他国向けでは男子と宣伝されていたのである。

これには越後商人からも同様の指摘があった。とくに堺の商人と揉め事を起こしている間は守護が侮られる様なことがあってはならないと男装を商人からも要求されていた。

そのため実は前回の川中島の景虎の行動は春日山城内でも問題になった。

一応今後はそのような行為は慎むとは景虎が折れて収まったが。

敦賀から都までの旅は安全快適そのものであった。馬に揺られ琵琶湖や伊吹山を眺めながら一行は10月には都に到着した。

しかし都に到着した景虎はがっかりした。都の華やかな面ばかり思い浮かべていたのに都は応仁の乱(1467)以来の混乱から回復しておらず、一般町人の建物はおろか公家の屋敷の荒廃は散々たるものであった。盗人に襲われて落命する公家がいるという噂話は本当と思った。しかしそれでも刹那や古寺が古の雰<sup>いしえ</sup>囲気をいたるところで醸し出すところに景虎は少し安心を覚えた。

景虎は生真面目であった。悪い言い方をすれば古来の習慣、権威から頭が離れられなかつたのである。もし自分に実力があれば将軍を補佐し荒れた世の中を立て直せばなどあれこれ真剣に考えていた。

間もなく護衛がしつかり付いた大きな綺麗な屋敷が見えてきた。京都の越後屋敷であった。

景虎は越後の京都屋敷の方が都の公家より立派なことにもある意味衝撃を覚えていた。

京都留守役の神余親綱が景虎一行を出迎えてくれた。

## 権力者

到着してしばらくして早速將軍に謁見することになった。土産になるお礼の品々、もちろん越後名産品の紹介も兼ねているが、をたずさえて將軍の住む室町殿へ向かった。

かつては花の御所と呼ばれ広大な屋敷の中に四季折々の花や木に溢れていたとのことだが応仁の乱で焼け落ちて再建されてからは小さな屋敷になってしまい將軍家の権威を表現しているような屋敷であった。

景虎は服装は將軍面会用の薄い萌黄色の直衣のうしを着ていたが髪の毛は烏帽子に隠さず普段どおり垂髪にした。女であることを將軍に隠すのは良くないと思ったからである。

將軍は13代目足利義輝、19歳の若者、青年將軍である。

景虎には本庄実乃、金津新兵衛が同伴した。

將軍の横には管領の細川晴元、そして噂の三好長慶がいた。

足利將軍家は生き長らえていたが下克上の世界そのもので実権はこの三好長慶にすべて握られていた。將軍と管領を傀儡として権力を振るっていたのである。

義輝は景虎がわざわざ越後から来た事に大歓迎であった。

しかも景虎が噂通り女性と聞いていたが事実であったので余計に驚いていた。

管領の細川晴元もしかりであった。

しかも景虎が守護や將軍の忠誠に男女は関係ないとさらりと言ったのでますます義輝たちを感心させた。

ただそれによって守護の仕事に少し苦労しているのであまり口外してほしくはないとも正直に告げてはおいた。

それでも義輝は景虎に感心しきりいろいろな声を掛けてくれて景虎

が戸惑うほどであった。

三好長慶は一人冷静にことの成り行きを黙ってみていた。

ただ景虎らは緊張で細川や肝心の長慶の印象はこのときはあまりなかったが。

義輝は早速義輝印判の御内書（將軍の公文書）ならびに備前国宗の太刀を賜ってくれた。

これにより景虎は正式に越後の守護として越後及び隣国にて敵対する者に対する討伐の権利を手に入れたのであった。

甲斐の晴信と信濃で戦う名分を手に入れたのである。

さらには後奈良天皇への謁見、朝廷からの綸旨の手続きもとってくれた。

義輝は景虎を気に入ったようで後日、景虎を祝宴に誘ってくれた。

一方黙っていた三好長慶からも突然話があり翌週、都の三好邸にて個別に面会することになった。

後日、景虎は義輝招待の祝宴のため室町御所へ再度向かった。

今日は管領の細川晴元や三好長慶はいなかった。

義輝は気さくに景虎に話しかけてきてくれた。景虎は当時25歳だったので將軍と年が近く親近感を覚えたのである。義輝は都育ちの將軍ではあったが剣術に長け代々公家のような將軍が多い中では異色な將軍であった。

景虎は自分が武芸が得意ではなかったのもあるがこのような將軍らしい義輝を尊敬していた。都まではるばる来た甲斐があったと素直に思いますます將軍家への忠節を誓った。

いろいろと酒や食事をしながら世間話などをしたあと義輝はある話しになると少し声を小さくした。そして少し回りに気を使っているようであった。

義輝は言った。

「景虎殿・お気づきの通りだが私はこのようにただの飾り雛だ・御所の中とはいえ長慶の息の係った者が大勢居る・將軍職だけではなく管領職も今や完全に長慶の傀儡だ。私に挨拶に来るものはいないならかの下心を持って来ている・景虎殿のように何も求めず忠節のためにわざわざ遠路はるばる来てくれて嬉しく思う、そなたは大事にしたい・三好と今度会うらしいが気をつけるように・危なくなったらなんなり申してくれ・全力を尽くす・」  
景虎は將軍からこのような言葉をもらって率直にうれしかったが都の現状に少し気持ちが沈んだ。

義輝とは色々な話をした、景虎が和歌や絵巻物が好きとのことで次回上洛時に公家衆を呼んで歌会を催してくれることなども約束してくれた。

間接的もう一度上洛することを約束してしまったのであったが・

このときの面白い話ではつい最近尾張の織田信長という者も謁見に来たという。

景虎はこのとき初めて聞いた名前であった。

まだ尾張の半分しか治めていない弱小大名であったが景虎同様下心なく都まで挨拶に来たという。

尾張の織田信長に景虎は関心を持った。自分のような將軍への忠節を誓う人間が戦国の世にまだいたことを嬉しく思い、景虎は信長に一度会ってみたいとも真剣に考えていた。

この後この織田信長とは因縁の関係になるとは当時の景虎は夢にも思わなかったであろうが。

翌週景虎は今度は三好長慶の京屋敷に向かった。

実は景虎も今回は久々に緊張した。景虎一行も同じであった。

蔵田五郎左衛門からも長慶に会うときは用心するようとの助言があ



った。

下克上の世とは陰湿で暗殺などもよくあった。それを一番恐れたのである。

長慶は都の実力者である。彼の勢力圏にいる以上何が出てくるかわからないからである。

今回は景虎も口の利き方になるべく気をつけることにした。

景虎は將軍に面会した時と同じ格好であった。

長慶に誠意を見せるためである。また彼を実力者として將軍並みに認めていることを暗に示すためである。

長慶の屋敷に入ると長慶の方から提案があり茶の間で一对一で話をしないかとのことであった。景虎一行もこれには困ったが断れないので運を天に任せ受け入れるしかなかった。

景虎は茶の間に通された。

枯山水の庭が目の前に広まる禅宗模様の小洒落た茶の間であった。

緊張していたが景虎は思わず見入ってしまった。最後にこのような庭はない、さすが都であると・・・また改めて彼の権力を垣間見た気がした。

緊張を忘れしばらく庭を眺めていると。

「失礼・・・」

三好長慶が突然入ってきた。水色の直垂を優雅に着ていて高貴な雰囲気があった。

景虎は將軍に謁見したときは長慶の顔をよく見てみなかったの今日改めてじっくり見たのだが正直景虎は彼がそれほど悪人には見えなかった。

策略智謀を張り巡らせてというようには見えなかった。まあ武田晴信もそうであるが。

年もあの晴信より少し上程度の細身の30半ばの優しそうな男だった。

景虎は深々と礼をした。

長慶が切り出した。どこかで景虎の様子を見ていたのであろうか。

「庭とか茶道に興味があるのかな・・・？」

景虎に聞いてきた。景虎はうなずいた。

長慶は自ら茶を立てて景虎に手渡した。景虎は正直なんか予想外で拍子抜けした。

長慶を抜け目の無い油断ならない人間と思っていたのだが予想外な文化人ぶりにである。

「まあ・・・ゆっくりしていつてくれ・・・」

長慶は静かに茶をすすっていた。

「女子だてらに越後を治めるなどりっぱだな・・・たいしたものだ・・・」

彼の声もこの前と違い見た目同様優しい話し方であった。

「都はどうか・・・？」

「意外と荒れているな・・・と・・・」

正直に答えた。

長慶は苦笑いしていた。正直な娘だと。

長慶も景虎を初めて見たときは驚いたが景虎と義輝の会話を横で聞いていて景虎の印象が変わったのであった。長慶も最初は見た目に反して勇猛なのだろうと思っていたが自分同様旧来以前の古い考え方を大事にする単に下心がない正直な人物であろうとわかった。景虎自身を田舎の世間知らずな華奢な麗しき姫君であると。

景虎のぶしつけな態度や物言いは相変わらずだったが長慶はそれが分かっていたので気にしてなかった。

そして予想外な質問を景虎にした。

「景虎殿が都に来ること 越後の家臣団がよく了承してくれたな・・・」

長慶は正直な質問をした。

この戦国の世で自分の領土を空けて都に来るなど考え難かった。まして景虎のような遠隔地からだとなおさらである。

景虎は思わず返事に窮してしまった。無理やり来たことを思い出し、みなの顔を思い出してしまった。

嘘が苦手な景虎は苦し紛れに答えた。

「みなを信用しておりますので・・・無理に来ました・・・」

「無理にか・・・信用か・・・」

長慶も静かに言った。

予想通り正直な人物だと長慶は思った、だから家臣団も景虎について来ているのであろうと。

「ワシも似たような物だな・・・信用は大事だ・・・そうか」

景虎は長慶が何を言っているのか良く分からなかった。

長慶は続けた。

「甲斐の武田とやりあったそうだが・・・善戦したそうだな・・・たいしたもんだな」

川中島の件が都でも噂になっていたのは景虎も驚いた。

「引き分けでしたので・・・それほどでもないかと・・・」

今度も正直に返した。

「なぜ景虎殿は武田と戦っているのかな・・・？面倒な奴であるように・・・」

「越後を守るためです・・・あと頼まれたので・・・」

景虎は即答した。

「頼まれた・・・？」

景虎はうなずいた。

信濃守護と信濃国人衆、関東管領に頼まれたから戦う・・・としかも関東管領の上杉憲政も保護しているという。

長慶は黙っていた。そして確信した。

景虎は25歳の若者であるがここまで権威を大事にするとは良く言

えば律儀 悪く言えば旧式な考えだと。  
もちろん自分も旧式な人間であるとわかってはいたが。

景虎もなんで長慶がこんなことを聞いてくるのか分からなかった。  
今日は堺の商人の話かとはばかり景虎は思ったからである。

景虎も思わず妙なことを聞いてしまった。

妙というか本当に聞いてもみたかった。

自分は天下を治めるなど、おおそれた考えなどもっていないが、長慶は既に近畿を支配権に治める天下人である。

彼の本音を聞いてみたかった。

「長慶殿はなぜ天下人を目指してらっしゃるのですか？」

長慶はしばらく考えたあと言った。

「一族に頼まれてな いや一族の繁栄のためだ・・・」

「一族に頼まれて・・・一族繁栄のため？」

景虎は少し考えてしまった。

天下泰平、自分の野心のためぐらいの返事を少し期待していたのだが予想外であった。

自分は自ずからではなかったが兄を蹴落とし一時期は姉とも敵対していた。

血縁で頼れる人間はあまりいない。兄弟が多かったり子供がいるとこのような気持ちになるのだろうか。自分は一族ではなく血縁のない家臣に頼まれて守護になったが長慶は弟たちや一族に頼まれて、そしてそのためにここまで登り詰めたのであるだろうか。

長慶も自分と似たような境遇だったのだろうかとあれこれ考えてしまった。

こんなときであったがふと兄の件を思い出してしまった。

実は景虎はこの年の2月 天文22年（1553）であるが兄の晴景を亡くしていた。

川中島に出陣する1ヶ月前である。

兄の臨終には間に合わず結局兄とは最後まで一度も言葉を交わすことはなかった。

晴景は景虎に隠居させられてから自分を恨み酒に溺れているとは聞いていたが自分にも負い目があったので何もできなかった。無視するしか出来なかった。

晴景の死に顔は予想に反して意外なほど穏やかであった。それが景虎の心に余計に重い形で残っていた。

景虎が一族の話になると急に思いつめたような顔をしているのを見てか見ぬふりか

「・・・結婚されてるのか・・・？」

長慶がまた予想外の質問をしてきた。

景虎は驚いたが素直に首を横に振った。

「・・・家柄を気にされてるのかな・・・」

また首を横に振った。

「・・・足利家に興味があるのなら・・・手助けしても良いぞ・・・」

意外な言葉が出てきた。しかし

「ありがたきお言葉・・・でも私のような田舎者が恐れ多いと・・・」

景虎は自分の体のことを分かっていった。ありがたい話ではあったが將軍に迷惑をかけるわけにはいかないこともわかっていった。

「・・・そうか・・・しかし気が変わったらまた声をかけてくれ・・・」

長慶は一瞬なぜこんな良い話を景虎が断ったのか分からなかったが顔色変えずに答えた。

景虎は深々と礼をした。

景虎もなんで長慶はこんな話を自分にしてきたのか分からなかった。まさか義輝からの依頼など夢にも思ってもいなかった。

もちろん景虎の結婚、跡継ぎ問題は越後でも懸念すべき問題であった。家臣団が心配しているように放っておける問題ではなかったが景虎は自分の体のことをまだ率直に話す勇氣はなかった。家臣団も

薄々景虎の体の不調の件は感じてはいたが、この解決には更に時間がかかるとなる。

ちなみに今日長慶が景虎と会談を希望したのには訳があった。

長慶は実は畿内ではなく四国の阿波（徳島）の出身である。

幼少の頃父親の元長を管領の細川晴元に殺され（叔父の三好政長の謀略といわれる）成人後その復讐のため後に細川を凌ぐほどになるがここで長慶の実力に注目した一族に担がれ天下人への道を歩むようになったのである。

長慶自身も古い既存のしきたりの上での天下人になることを考えていた。

つまり管領や將軍家をや天皇の権威を盾に天下を治めることである。長慶が畿内での力を得たのはもちろん彼の實力もあるがそれ以上に彼の優秀な親族たちによるところが大きかった。彼の實力と親族たちが活躍したことにより彼はここまで登りつめたのであった。

親族のために彼は奮戦したのである。もちろん一族の繁栄もしかりである。

彼は近畿の守護や守護代に彼の兄弟親族や縁者を送り込み急激に力を得たのであった。

そんな順風満帆な長慶であったが、懸念していたのは三好一族と足利將軍家との関係であった。

過去にいろいろあつて微妙な関係で順風ではなかった。

長慶は密かに旧権威や大儀名分を大事にする景虎をうまく使い將軍家の権威回復と三好家の更なる勢力拡大を狙っていた。

義輝を喜ばせ三好家との関係も改善させ、さらには関東管領を助けている景虎を助けるとの名目で関東方面でも失墜した幕府、足利將軍家の権威復権、勢力拡大のきっかけにしようと考えていたのである。もちろん実際に政治を動かすのは三好家であるが。

長慶は商人同士で堺衆と越後衆が揉めているのは重々承知していた

がそのような小さい話ではなく天下人としての政治理論を優先したのである。

長慶は景虎が旧権威を大事にする性格であることを今回の会談で確信し、彼女をうまく利用しよう考えたのである。長慶はみなが納得できるような段取りを用意したつもりであったが景虎が思いの他今回は断つただけであった。

また若い景虎には長慶の裏が理解できなかっただけでもあった。

長慶自身も実は今日は景虎が予想外に話を断つたのが意外だったが急に言って驚いたのである。気がまた変わるであろうと思えばそれ以上深追いしなかった。

堺に行く件は長慶から許可がでた。自由にやれと。

## 堺

景虎一行は蔵田五郎左衛門と一緒に堺に向かっていた。

將軍足利義輝に三好長慶の時の氣遣いにお礼を言った後京都を散策して

比叡山や平安神宮などの名所を巡ったあと都を離れたのである。

長慶が堺の商人ともめている青芋の件で何も言って来なかったのは五郎左衛門たちも正直意外と思っていたようであったが。

堺は京都からすぐであった。一日で到着した。大都會であった。

都より繁栄していたのには正直驚きであった。

しかも会合衆という自治組織で政治が動いているという。

三好長慶はあくまでも守護で余程でないと介入しないという。

摂津にはもうひとつ勢力、本願寺があった。

摂津の守護は三好長慶であるが構わずに大きい顔をしているのとことであった。

実は景虎 父為景が以前より敵対する越中の一向宗などの総本山である。

あの長慶も足利家も彼らには苦慮しているとのことであった。

もちろん景虎もしかり後の織田信長もしかりである。

今回は長慶のお墨付きを得ているとはいえ本願寺勢力から見れば敵である景虎に対して何をしていくか分からないので外を歩くときはなるべく越後守護であることを悟られないように用心するようにとの助言が長慶からあった。

そのため今回は商人の町娘の格好で移動する羽目になってしまった。

景虎はこれはこれで気に入っていたが。

景虎一行は五郎左衛門の越後屋敷に入った。



五郎左衛門の所有物であるが安全のために越後屋敷という名前がついている。

裏に越後守護が付いていることを主張するためである。

天王寺芋座との交渉まではここでやっかいになることになった。

堺は商人の大屋敷が多いがその中でも格別に大きな屋敷であった。

五郎左衛門や越後商人の力を見せつけられた気がした。

屋敷はとにかく広く中で迷子になるほどであった。

景虎は初めて商売をしている風景を見たのだが堺は府内と違って人口が多いだけあって売り場も大きくいろんな商品が良く売れているようだった。

五郎左衛門に聞くと青芋その物も売っているが五郎左衛門が都周辺に所有している工場で加工された青芋で作られた衣料品が一番人気で良く売れるという。越後産の青芋が原料だと特に高く売れるのだという。五郎左衛門たちは忙しそうであったのであまりそれ以上声をかけるのはやめた。さすが商人である。

広い店内ではあったが店員より客の方が多く店子待ちで暇そうに待たされていたり、いろいろ悩んでいる客もたくさんいた。景虎も面白そうだったので見よう見まねで接客してみた。町娘の格好をしているのでまさか誰も景虎を守護とは思わないであろうし。

誰に声をかけようかと様子を見ていたところ 二人の侍と目が合っ  
てしまい向こうから声を掛けてきた。

かわいいお姉ちゃんちよつと・・・と俗的な言い方をされ景虎は正直戸惑ったが・・・

客ではあるが実はこの侍のうちの一人があまりにも変わった格好をしていたので景虎は思わず彼に見入ってしまった。見たこともない変わった格好であった。女物の赤い小袖を着て水色の直垂 大太刀を二本差しぼさぼさのまげ。それで偶然と目が合ってしまった

からでもある。

いつもの好みの物をじつと見る癖ではなく今回は物珍しさからじつと眺めてしまったのであった。

この侍二人は尾張から買出しに来たと言う。以前義輝から話が出た尾張の織田信長の家臣であった。偶然である。織田家の重臣で前田家の者だと言った。前田慶次とか名乗りもう一人は彼の付添い人と言う。慶次は景虎と年が近い若者で着ているものは変だが顔や口調はいたって普通の若者であった。景虎の好みというよりは武者らしい男であった。

景虎は思わずなんでそんな妙な格好をしているのか普段の口調で聞いてしまった。

景虎の馴れ馴れしい口調に一瞬慶次は驚いていたが景虎が化粧をしていなかったたので越後の田舎娘はこんなだろうと思ったのか気にせず答えてくれた。

尾張の織田信長は若い頃 大うつけ と言われ敵を油断させるため若い頃はわざと妙な格好で普段城下を歩いていたと言う。彼の甥の前田利家も信長に従い真似をして一緒に行動していたと言う。

堺にその格好で来たのは相手に油断させるためである。尾張の織田信長は今でも大したことはない。家臣もうつけであると。情報戦である。

「・・・へえ・・・なるほど・・・」

景虎は思わず感嘆の声を出してしまった。織田信長はなかなかの策略が使える人物と。

ただ慶次ははつきり言った。自分はこの格好あまり好きでないと。しかも堺には変な格好の人間がいて目立たないのでかえってこの衣装は面倒だと。なんでも実際に利家が使っていた衣装らしい。

確かに慶次の言うとおりだった。景虎も思っていた。堺は南蛮貿易港だけあった変わった格好の人が多いと。

慶次が意外に正直にぼやきながら話してくれたのが面白かった。  
景虎は思わずくすりと笑ってしまった。

景虎は慶次が安心して喋れそうだったので少し聞いてみた。  
越後をどう思うか。長尾景虎を知っているかと。

意外な返事が返ってきた。

越後はあまり知らない。

景虎っていう人物はあの武田とまともに戦っている戦上手で20代  
半ばの荒武者だろう、

と逆に景虎に聞いてきた。

景虎は返事に窮してしまった。甲斐軍、武田晴信に会ったとき少々  
酔っていたとはいえ、わざわざ出向いて顔見せしてやったのに荒武  
者扱いである。

家臣団から今後はあまりあのような目立つ行為は控えるようにと指  
摘はされていたが実は景虎はあのとときの甲斐軍の反応を馬上から険  
しい顔をしながらも少し面白おかしく見ていた。

そのため姫若子ぐらいを期待していたがあまりに期待外れだったの  
で少しむすつとしてしまった。甲斐軍の連中はどろろという目をしてい  
るのかと。

慶次は景虎が何でふくれているのかさっぱり分からなかったが・

無駄話もほどほどにいよいよ本題に入ることになった。信長から頼  
まれて買出しに来ているということだが、鉄砲隊と槍部隊用の直垂  
の袴を新調するというが色や柄で迷っていると言った。景虎は自軍  
の越後軍で正規採用している紺色の物を提案してみた。話題の越後  
軍同様強そうに見えるし吸汗性や風通しが良く丈夫と進めてみた。  
二人は景虎が越後軍の衣装にやけに詳しかったので少し奇妙な顔を  
して驚いていたが真面目に話し槍部隊はこれで大丈夫とのことだっ  
たが鉄砲隊は火薬の火の粉がかかるので厚手の生地を要求していた。  
鉄砲を景虎は見たことなかったが意外と扱いが面倒のようだと感じ

たが。

鉄砲隊用ではないが冬季の厚めの物を見せるとこれで良いと買ってくれることになった。

ただ景虎が驚いたのは織田軍の鉄砲の数であった。

鉄砲はまだ普及が進んでおらず価格がかなり高く入手困難だったが500人規模既に持っているという。予備や今後の鉄砲の追加を兼ねて1000着以上買って行くと言い出した。

景虎は信長は尾張の半分の弱小大名と聞いていたのにこれほどの大量の最新兵器を持っていることが正直驚きであった。

聞くところによると信長はキシタンを積極的に誘致しそれによりポルトガル商人を呼び寄せ鉄砲を大量に揃えていると言った。景虎は毘沙門天の信者だったので正直キシタンにはあまり関心が無くまた貿易上有利であるが寺社を壊したりポルトガル商人が海外に人身売買しているという噂も聞いていたので迷っていた。府中の港にも金銀取引で来たいとの話も以前あったようだが直接来ることに關しても上記の理由から許可していなかった。

尾張の侍二人は景虎が妙なことを聞いてくるので不思議な顔をしていたが景虎は笑ってごまかした。

ともあれ商談成立で後の事務的な手続きは五郎左衛門に任せた。

景虎にとっては有意義な情報が入って何よりであった。

慶次からは後で茶店にでも行かないかとも誘われたが田舎物でお嬢様育ちの世間知らず景虎は意味が判らなかつたのでその件は無視してしまつたが。

慶次も話が合いそうだったのに思わず相手にされなかつたのでそれ以上はやめたが・・

一方五郎左衛門は景虎が店の先に立っているのを見て腰を抜かしていたが。

景虎はそのあとも調子良く五郎左衛門が目を離した隙にご婦人に自分が愛用している純白の越後上布を売り込んでいた。

越後の景虎公は具足の肩に巻いたり行人包みのように顔に巻いて日よけや防寒 汗対策に使っている。

ご婦人方は景虎公はお洒落な男性ね、見てみたいわと感心され景虎はまた返事に窮していたが。

その後は空き時間に堺市内をいろいろ見学してみた。

堺市内にはいろんな物資が溢れ海外からの南蛮船も出入りしていた。景虎は港で南蛮船を初めて見たが見たこともない変わった形の大きな船であった。

なんでも何カ月もかけてはるばるイスパニアやらポルトガルから海を越えてやってくる高性能な船で北前船と違い向かい風でも走れるという。しかも大きく荷物も大量に積みそうであった。

船には巨大な火縄銃らしき鉄の筒が備えられ武装されているようだった。

景虎は強い興味を持った。

鼻の高い色白の独特の衣装を着た男たちや真っ黒な肌の屈強そうな男が忙しそうに動き回っていた。キリシタンの宣教師バテレンというものも初めて見た。

景虎は船を見ながら五郎左衛門との仕事が終わったら交渉して帰りに火縄銃とかと一緒に買って帰ろうと真剣に考えていた。

## 大騒動

一通り堺市内の見学が終わると早速本題の天王寺芋座と交渉の日程が決まった。

実は三好長慶との話でこの話題が上がらなかったのも景虎は交渉に出るのはやめようかとも思ったがせっかく堺まで来ているので顔を出すことになった。

天王寺芋座と会うのに景虎は自分が堺ではまだ女と思われていなかったようなので前田慶次の織田信長の話ではないが天王寺芋座に侮られないよう千坂景親に景虎役をやってもらって自分は景虎公の姫君 伊勢物語から適当に名付けたのだが 伊勢姫と勝手に名前付けして、横で一緒に様子を見ることにした。五郎左衛門もこれには賛成してくれた。

抜け目の無い連中なので用心するにこしたことはない。早速天王寺芋座一団がやって来て交渉が始まった。

しかしここで驚いたのは天王寺芋座が僧侶や武士を連れてきたことであつた。

景虎一行は察しがついた、天王寺芋座は長慶が乗り気でないので本願寺を引きずり込んだのであろうと。本願寺の手下が来た。

要求は本願寺に冥加金<sup>みよがきん</sup>、営業税を毎年払えと言いつつ出したのである。しかも年間千貫と信じられない額であつた。ちなみに三条家にかつて納めていた額は年間50貫である。飲めなければ堺で商売を認めないという。

実は五郎左衛門は堺の政治自治団体である会合衆に既に冥加金を納めていた。それ以外に本願寺にも追加で納めろという。

また日本海海運での堺商人の船の割合を固定し確実に稼げるようにとも要求してきた。

返事は次回までにほしいと。守護景虎様の良い返事を期待している  
と。

影武者守護の千坂や伊勢姫の景虎も黙って聞いていたが。

天王寺芋座が返ったあと彼らのあまりの無茶な要求で五郎左衛門は  
珍しく声を荒げていた。

正直景虎もあまりの無謀な要求に驚いていた。

実は前日堺市内を散策していたときに長慶と本願寺が摂津の支配を  
巡り不仲になり堺衆が本願寺に頼るようになってから長慶は堺衆と  
距離を置いているとの噂を聞いていた。

噂は事実のようだと景虎は思った。

ただ天王寺芋座のいずれの要求も越後側は飲めるものではなかった。  
本願寺は一向宗は景虎の敵対勢力である。特に加賀や越中の一向宗  
には父為景の代から悩まされ続けてきた。弱みは見せられない。冥  
加金など払うわけにいなかった。

日本海海運には他国の船も来ており強制など出来るものではなかつ  
た。

すべて断ることにした。

天王寺芋座が越後商人に手を出したら越後軍を動員することにした。  
景虎は脅しでなく本気であった。

再度天王寺芋座との交渉の場が再度持たれた。

影武者の守護代の千坂が冷静に返答した。

要求はすべて拒否すると。

一同は妙な緊張に覆われていたが交渉が決裂した以上長居は無用と  
天王寺芋座は越後屋敷を立ち去ろうとした。その間際 本願寺の武  
者らしき男が一言不気味に言った。

「本願寺を敵に回すことの意味 教えてさしあげましょう・・・失礼」  
突然景虎が声を出した。

「越後守護代の景虎公は普段は物静かですが相手が武田であろうと

本願寺であろうと立て付く者には容赦しませんぞ！」

天王寺芋座の商人たちはぎよつと驚いていた。でしゃばりな姫だと

しかし本願寺の関係者は見抜いていた。

この姫が本物でこの男が影武者であろうと。

早速事件は起こった。

堺市内の他の越後商人の店が賊に入られ放火されたのであった。堺は会合衆による自治政府である。夜間は出入り禁止で夜間市内で賊に襲われるなど通常ではありえなかった。

越後に対する恣意的な物を感じた。

しかしこのようなときの景虎は遠慮がなかった。

緊張を解くために軽く一杯飲むと堺の自治政府に早速抗議に行った。今回は越後守護景虎公の姫君の伊勢姫という形で弥太郎 秋山源蔵 戸倉与八郎ら親衛隊に具足に春日槍を持たすという実戦さながらの重武装をさせ自らも具足を着込み騎馬で自治政府に乗りつけた。堺の市民も堺の自治政府も仰天であった。

ここは三好一族の領土でもあるし本願寺の息がかかっている場所でもある。

そんな中を武装した騎馬で練り歩くなどまともではないと。

しかも守護代の姫君が具足をつけてやけに長い春日槍を振るって乗り込んできたと・・・

いくら長慶から勝手にやれと許可ももらっているとは言えそこまでするとは思わなかったのである。

会合衆の集まる自治政府に着くなり本願寺の僧侶や武士の並ぶ前で遠慮なく言い放った。

「罪人に厳正な処罰がなければこちらから成敗しますぞ！」と。

今回の件は自然失火であろうと賊が燃やしたとの証拠がないと会合衆はのらりくらりとかわしたがこの伊勢姫はなかなか治まらない。



「5000の越後兵を堺に連れてきますぞ！」  
と今度は真顔で言ってきたのでさすがに自治政府も少し怖気づき再調査を約束してなんとか景虎一行を返したがそのあと堺の自治政府に信じ難い情報が飛び込んできた。

あの伊勢姫が越後屋敷への帰りの道中で無礼があったという理由で堺市内の天王寺芋座の商人の屋敷を焼き討ちしたという。

この騒ぎで堺の町は大騒ぎになった。越後守護のところの伊勢姫とやらが天王寺芋座の商人の屋敷を真昼間に無礼を口実に焼き討ちしたと。

慶次も偶然この騒ぎを目撃しており唾然としていた。越後屋で対応してもらった売子の子の小娘がなぜか伊勢姫と名乗り、赤い単衣の上に越後軍用の黒い具足を着込み鉢巻を巻いて毘沙門天の旗を立てて長い槍を振り回し騎馬隊を率いて騒いでいるのを。

この天王寺芋座の商人の屋敷焼き討ちの件であるがさすがに会合衆の怒りを買って、会合衆に頼まれた本願寺の兵が早速動いて越後屋敷に向かったが、運良く摂津守護の長慶の耳にもこの騒ぎの情報が入り長慶の取り計らいでようやく両者引き下がったのであった。

一方慶次は尾張に帰国後今回の騒動の件を信長に報告した。

天下人である三好長慶のお膝元で本願寺と堺の会合衆相手に大騒動を巻き起こしたと。

越後衆はどうかしていると。

信長は愉快そうに笑いながら聞いていたとのことである。

ちなみに信長や慶次が景虎の正体を知るのもう少し後である。もちろん慶次がああ時の小娘、伊勢姫が景虎と知ったのもその頃である。

ちなみ前田慶次とは5年後の再上洛時にも景虎は再会することにな

る。

景虎は焼き討ち事件の件もありそのまま堺を離れた。

騒ぎを聞きつけわざわざ摂津に飛んで帰ってきた三好長慶の摂津の芥川城を訪れ今回の件は謝罪した。

景虎も今回は少しやりすぎたと反省していた。

表向きは今回の越後商人と会合衆との騒ぎの件は長慶が取り繕いでくれたおかげで越後側が被害者に弁済することで堺での今後の自由な活動も約束してくれた。なにはともあれ一安心であった。

長慶も景虎との今後の付き合いに期待していたのもあって、この騒ぎの件に関しては若さ故の行動と今回は大目に見てくれたが本願寺とは今後気をつけるようにと再度助言をもらった。

もつともこのとき長慶自ら天王寺芋座が本願寺に近づくようになってから長慶も彼らとは一線を置いていることは景虎に告げておいた。これも長慶の本願寺対策の一環で景虎もそれに巻き込むための長慶のしたたかさである。

しかし実は長慶の父親の元長も管領の細川晴元の命令（長慶の叔父の三好政長の謀略）で一向宗に殺されたと後からどことなく聞いた。本願寺の問題は予想以上に畿内でも大きな問題になっていることを景虎は知った。

長慶も景虎もそして信長も本願寺にはこの後散々苦勞させられることになる。

一方堺での大騒動の件は越後本国にも届いていた。神余が本国に支援を要請したのであった。

本軍が動かせないので留守役の重臣 直江 宇佐美 政景 中条らが相談のうえ 越中、加賀方面に軍を配備し一向宗の領土である加賀に圧力をかけ、また軒猿や奥羽の山伏の部隊に応援を頼み急遽近畿に陸路密かに派遣させた。

景虎一行は危機に見舞われていた。気の収まらない堺や本願寺の追手が景虎一行を追っていたのである。

そうとは知らず景虎はのん気なものであった。

高野山 奈良 都と巡って越後に戻ることを考えていた。

景虎は特に高野山に行きたかった。しかし女人禁制である。そのためわざわざ白拍子の装束に着替えて何食わぬ顔で入山したのである。白拍子は入山可能と聞いていたからである。

本願寺の追っ手も景虎にあと一步まで迫っていたが高野山に入られようと忍び退き得意とする悪名高い越後の軒猿の部隊が向かっているという情報が入ったので深追いを諦め堺に引き上げていった。

越後の軒猿一行が景虎一行によろやく追いつき高野山に入ったときには景虎は今様を白拍子の衣装でよろやくと舞、高野山の僧侶を呆れさせていたが・・

高野山から奈良の東大寺 興福寺 唐招提寺を巡り

再度都に入り大徳寺で宗心の法号をもらった。

その後都の商人から鉄砲を10丁ほど購入していった。本当は堺で購入したかったがあの騒ぎのせいで堺の商人から景虎はすっかり嫌われてしまい遠ざかってしまった。

おかげで以降は景虎は鉄砲の入手は手間取るようになる。

鉄砲は信長をはじめいたるところで引つ張りだこと評判だったので是非購入して試験評価したかった。その他珍しい土産を家臣団に買って帰った。

南蛮船やあの大きな火縄銃（大砲）は入手出来なかった。

行路の逆で雪化粧の伊吹山を眺め朝倉の港から船に乗りこんだ。

12月の日本海はさすがに機嫌が悪く初めて船酔いに苦しめられたが景虎は3ヶ月の畿内滞在を終えよろやく越後に帰ってきた。

## 恐るべし敵

久々に春日山城の広間に景虎は戻ってきた。年も明けて早々新年の祝い事もそこそこに上洛時の報告の評定を行った。

下座にはいつもの面々が渋い顔で座っていた。

みな何か言いたげな不満気な顔であったがこのよくなときの景虎の先手の打ち方は手馴れたものであった。先手を討って反撃させないことである。

広間にさつさと入ると上座にひよいと座るとみなにお辞儀をした。

一言「ただいま」と・・

そして何食わぬ顔ではたはたと扇子で顔をあおった。

機嫌が良いときの最近の行動である。

景虎の行動は読めないことの方が多いので最近は何もあまり驚かない。

もうこれ以上は何を言っても無駄・・と諦め口調で各自ばらばらに

「お帰りなさい・・」

と力なく返した・・

みなのだれ顔をよそ目に全く気にすることなく

「いや・・都は良かったな・・」

終始上機嫌であった。

「そうだ・・いい物を」

ポンポンと手を叩くと若衆が失礼しますと元気良く声を揃えて大きな木箱を持って数人広間に入って来た。

座布団に座ったまま何が起こるのかさっぱりわからずあっけに取られている宇佐美定満や 直江景綱を座ったまま若衆が押して移動させるとその大きな荷物をみなの前にとんと置いた。

「何じゃコレ・・？」

中条が啞然として聞いた。

景虎は澄ました顔で木箱を開けると中から何か長い筒状の物を取り出した。

都で買ってきた鉄砲 火縄銃である。もちろんみな初めて見た。今回大熊朝秀に怒られるのを承知で奮発して相場がよく解らなかつたが10丁買ってきたのである。

大熊は後で景虎から値段を聞いて口を開けていたが・

景虎は実は都で購入時試射したがその凄まじい威力に驚いた。至近距離であつたが胴丸を簡単に貫通させてしまった。

しかし一番驚いたのはその音の大きさであつた。危うく腰を抜かしそうになつたが初めて見る者はやはり音に驚く者が多いとのことであつた。

「これが火縄銃・・すごいでしょう・・重いな・・よいしょ・」他の者にも手渡された。みな珍しそうに見ている。

弓やよりも威力が大きくそれほど鍛錬が必要なくても使えるのが特徴で尾張の織田信長が既に大量に揃えているとみなに話した。

もちろん越後の家臣団はそのころはまだ尾張の織田信長など聞いたこともなかつたが。

鉄砲の欠点は一丁が非常に高価なものと消耗品の火薬がすべて明国頼みで調達しにくい、

連射が聞かない 雨の時は使えない 重い点であつたがその威力と熟練を要しない所は充分に魅力であつた。

家臣団も興味を持ったようだが少人数で多数を相手するとき使えそうだといろいろと意見を述べていた。

突然景虎が

「バーン」と言うと千坂がコロんと（撃たれて）転がる振りをした。こんな風になると言いたかつたようだが・

「・・・話・・・聞いています・・・？」

中条が啞然と聞くと

「・・・え？」

景虎も都のことをふと思いついて出している最中でみな話を全く聞いていなかった・・・

ちなみに景虎はこのすぐあとに思わぬ形で鉄砲の効果的な使い方を  
知ることになる。

しかも因縁のあの男から教わることになるのであった。

その他の荷物は景虎からお礼の気持ちとのことで西陣の織物や絵巻物や南蛮菓子のコМПейトウやカステラがふるまわれた。

正直西陣の織物や絵巻物はみな男なので興味がなかったが景虎も一枚上手で彼らのためではなく彼らの妻や娘に渡すための物であった。景虎は家臣団のとの親睦ももちろん重視してよく懇親を兼ねて一緒に酒を飲んでいたがそれ以上に彼らの妻や娘との付き合いに熱心であった。女同士であれば政治や仕事抜きで楽しめもちろんしゃべり相手としても景虎も気楽で息抜きに必要であった。景虎に年齢が近い柿崎妻や斉藤妻 直江の娘はよく春日山に遊びに来ていた。

越後の家臣団の従属は実は女同士の関係に夫や父親らが引きずり回されている妙な構造に依存していることが多かったのである。

景虎は諸大名本人たちとの面会時間よりも婦人、娘たちとの面会の時間の方が長かったと三戸文書などにも記されている。

景虎はカステラを食べながらさつと上洛の報告を一通りした。

軒猿の援護の件は素直に礼を言い、また堺の商人との青芋の件や三好長慶の件も一通り話し無事解決したことを報告した。

もちろん將軍義輝や天皇に謁見したことも報告した。

また天皇から晴信打倒の綸旨も手に入れたことも伝えた。

晴信は賊であると。

ただ三好長慶からの足利家への誘いの件は報告しなかった。自分の体の心配の件を再度この場でぶり返したくなかったからである。何はともあれ諸問題は無事解決して一安心であると。

宇佐美が一言突然言った。

「・・・姫 お気づきになりませんかのお・・・」

「・・・？」

「・・・北条高広があれ以来 春日山に顔を出していません・・・」  
政景が苦々しく話した。

「・・・」

景虎は黙ってしまった。景虎の都行きに散々反対した北条であるがあの件以来、春日山城に来ていないという・・・

見せしめに討伐軍をあげようかとの話しもあつたが向こうがだんまりを決め込んでいるのでこちらから手を出すつもりはなかった。

北条は口が少々悪すぎると家臣団でも評判が良くなかったが自分もぶしつけな口調であつたので彼を口の件で咎めるつもりはなかった。しばらく様子を見ることにした。

景虎は今年は戦にでるつもりもなかった。もちろん晴信が来たら別であるが。

少し仕事を貯めすぎていたのでそちらを処理する必要があつた。

特に恩賞の仕事である。

結局この年天文23年（1554年）は久々に静かに過ごすことが出来た。

しかし 弘治元年（1555年）は年明け早々忙しい年になった。晴信がまたもや軍を動かしているとの情報が入つたからである。同時に北条高広も景虎に対して挙兵した。晴信にそそのかされて挙兵したのだが雪が溶ける前に事が発覚したので晴信の援軍も期待できないままでの挙兵になつたのである。もっとも晴信が本気で北条を

助けるつもりがあつたのかは疑問であつたが。

これに関して景虎は特に何とも思わなかつた。2月に軍を向かわせるとあつという間に北条を降伏させたが自分からも素直に上洛時の北条との口論の件は謝つた。北条の騒ぎの件が自分にも一理あつたと生真面目な景虎は思ったからである。もちろん北条の武功も認めていたので敵にするくらいなら味方に留めて置いた方が楽との判断であつた。

嚴罰を覚悟していた北条は少々拍子抜けしていたが、ただ今回のこの甘い配慮はこの辺が越後の景虎と家臣団の実は微妙な関係を象徴しているのである。

この後も景虎は終始家臣団の掌握に悩まされることになる。

結局北条はお咎めなしで早速彼はそのまま何事もなかつたように甲斐軍との第二次川中島の要員にそのまま動員された。

4月になると早速川中島に景虎は出兵した。

8000の越後軍に対して 甲斐軍は善光寺周辺に既に展開している先発3000に加え甲斐を出発してこちらに向かつている本隊9000の合計1万2000の大軍を動員しているとの情報が軒猿から入ってきたが景虎は臆することはなかつた。

今回は上洛時に後奈良天皇から授かつた『私的戦乱平定の論旨（りんじ・天皇家の命令書）』をも授かり越後軍は意気揚々のはずであつた。

景虎が官軍、景虎に敵対し戦乱を巻き起こす晴信は朝敵（国家の敵）であり賊軍という形式を立ててきたのである。

しかし景虎はようやく晴信の本当の実力を思い知らされることになつた。



晴信は善光寺の別当の栗田鶴寿をいつの間にか引き入れそのまま善光寺の領民ごと甲斐側に引き込もうとしたのであった。善光寺は女人に解放されている唯一の寺で景虎も以前母の虎御前に連れられて来たことがあったので何としても守り抜きたかった。それを聞いた景虎は甲斐軍の本隊が到着する前に甲斐の先発隊3000と鶴寿が立て籠る旭山城に押しかけてみたがここで思わぬ歓迎を受けたのである。

旭山城に近づくとズドンと言う聞きなれない大音響と共に火薬と煙が当たり一面に立ち昇った。

初めて鉄砲隊の襲撃を受けたのであった。

越後軍はつい昨年景虎が少数を都から持ち帰ったばかりであったが、晴信はさりげなくいつの間にか鉄砲を相当数揃えていたのであった。風の噂だと300丁も揃えているという。

これには景虎も越後軍の重臣たちも正直驚いた。

何時の間にもどこからそんな大量の鉄砲をと・

越後軍には鉄砲が殆どなかったので初めて鉄砲を見る者が多く兵士や馬が音や煙に驚き、まともに動けず思わずの苦戦となってしまうた。

もちろん鉄砲の威力もあるのでうかつには近づけない。

旭山城を封じるために前進拠点の葛山城を急いで作るが結局旭山城の攻略をあきらめ、越後軍は善光寺周辺に釘付けになってしまった。また犀川の対岸にも晴信率いる甲斐軍の本隊が陣取ると旭山城の部隊と犀川対岸の本隊に挟まれて越後軍は身動きがまったくとれなくなってしまうた。

越後軍は7月には犀川を渡り甲斐軍本陣を少し攻めてみるも今回は甲斐軍は守りに徹して小競り合い程度に終わった。甲斐軍も今までの戦で越後軍の強さを認識したのか頑として動かず今回は異常な長期戦に入ることになった。一ヶ月 二ヶ月と時間ばかり何もするこ

となく過ぎていった。

さすがに越後軍も士気ががた落ちになり軍の中で喧嘩や争いが絶えなかった。

そこで景虎はあることを思いついた。

家臣団を陣中に集めると誓紙を提出するように要求した。

家臣一団啞然としていた。

誓紙を出せとはなんぞやと・・・

景虎は涼しい顔で言った。

「一騎でも参戦します」

「命令あればどこにでも馳せ参じます」

このような文章を自分に提出して欲しいとさりりと言った。

(何を突然言うのやら・・・まったく・・・こんな紙切れなんぞ・・・)

家臣団は呆れていたが仕方なく一応誓紙は景虎に提出した。

しかし景虎の行動は越後は実はこのような不安定な従属関係の上になり立ったていることの証明でもあり、この構図は結局は景虎時代は解決することはなかった。

景虎もそれを承知で考えた策であった。

しかし今回のこの長期布陣は景虎の秘密の弱点をさらけ出すことになった。

景虎は女性である理由と野営が苦手なので本陣ではなく近くの善光寺の旅籠に夜間は寝泊りしていたが毎月10日頃から一週間ほど体調不調を訴えて本陣に出てこなかったのである。

以前より続いている例の病気で今まではうまく隠していたつもりであったが今回の長期布陣で完全に明らかになってしまったのである。この半年間の長期布陣中でそれが出てしまい、越後軍内でも密かに噂になっていた。

「・・・毎月10日頃に姫様は腹痛で動けないようにで籠ってしまう・・・戦ができない・・・」と、

景虎が以前黒田秀忠を討伐したときもこのような病気を起こしていたが今回もそれを起こしたので一時的な病気ではなく景虎の持病であると越後兵内で噂された。家臣たちも薄々景虎の病気が意外に重い物でありこれが彼女の結婚しない理由であるかもしれないと密かに噂していた。

甲斐軍にも密かにこの噂は広まっていた。

ただこの噂は越後軍では野放しであったが甲斐軍では意外にもかん口令が敷かれた。

景虎の病気の件だけでなく景虎が女であることもかん口令の対象になっていた。

理由は晴信が女大将相手に苦戦しているという噂が我慢ならないのとそれにより兵士が油断慢心するのを防ぐためであった。

事実甲斐軍の中では景虎を見たあと以前より越後軍を戦いにくい嫌な相手だとの不満が晴信の元にあがりだしていた。

またこのかん口令のおかげで逆に景虎の正体は諸国にはまだ伝わっていないかった。

尾張の織田信長、前田慶次も然りである。

景虎が今回甲斐軍に積極的に攻撃しない理由も密かに囁かれ始めていた。

あのお気に入りの高坂弾正が今回甲斐軍の最前線にいと・・それで躊躇していると。

事実 弾正は越後軍との戦いの最前線に今回より投入されていた。ただこれには晴信の計算も多少はあったが事実弾正の武勇を晴信が買ったからである。

彼は事実後に武田四天王の一人にもなっている。

弾正はこの後も川中島に海津城（松代城）が建設されると城主として常に越後軍と最前線で対峙するようになるのである。

これらのいろんな噂は景虎の耳にも入っていたが知らぬ振りをした。心当たりのある弾正の件はともかく腹痛の件は正直参っていたが・

このように長期の布陣になった今回であったが兵糧までもが不足し始めついには兵が不満を口々に直接景虎に言い始めた。

完全にみな気が抜け始めていた。

もともとこの辺は甲斐軍も事情は同じで補給の面では補給路が長い甲斐軍の方が不利で晴信の元にも同じような悲鳴が上がりだし晴信も困ってはいたが。

また兵士も普段は農民であり9月にもなると収穫時期近いので早く帰りたいと景虎に訴えはじめた。

しかしそれでも両軍はなお頑なに兵を引かなかった。

結局両者なんと6ヶ月ちよつと10月頃まで半年近く2000日近くに渡り両軍睨み合っていたのである。

このような長期の睨み合いは当時としても極めて異例であった。

しかし先に音を上げたのは意外にも晴信であった。

景虎の頑なというか根性は見上げたものであったがいつまでも睨めつこをしては仕方がない。

結局駿河の今川義元に頼み込んで講和の仲介をしてもらったのであるが、それでは晴信も格好がつかないので名目上は見かねた駿河の今川義元の仲介という形で両者ようやく軍を引いたのである。

両者の講和の条件は晴信が旭山城を破却して撤退し、さらに、北信濃の国人衆の旧領を回復するという景虎にとっては犀川以北を固められる有利な内容であった。

その逆で晴信にとつてはいたって不利な内容であった。

善光寺の本尊や仏具も春日山に移すことが決められた。

ちなみにこの時府中に移動した善光寺が今でも直江津に残る浜善光寺である。

しかしさすがは武田晴信、ただでは済まさず景虎が知らない間に別働隊を木曾に派遣し制圧後、木曾義昌をいつの間にか降伏させ南信濃を完全に平定したのであった。まためけずに善光寺から仏像を勝手に持ち帰り甲斐善光寺として現在も甲府市内で健在である。

お互いいろいろと意地を張っていたが、しかし実はこの今川義元の提案に一番安堵していたのは景虎と晴信の両当事者であった。

景虎も晴信も何はともあれ両方一安心で10月15日に和睦が正式に成立すると撤退していった。

第二次川中島の戦い、犀川の戦いはこうして終了したのである。

## 出奔

越後に帰ってきたものの恩賞に再度終われる日である。

恩賞の処理は幾分慣れてきたが恩賞だけでなく家臣同士の領地争いの評定もあつた。

これが景虎は非常に苦手であつた。大の男が猫の額ほどの土地で延々書状を元に言い争うのである。どうしても理解できなかった。景虎がお嬢様育ちだからであると言われればそれまでだが・

今回は特に大きな案件が出ていた。

上野家成と下平吉長の土地争いである。

上野の裏には宇佐美定満、本庄実乃、下平には長尾政景、大熊朝信がついていた。

実はこの件が根深かつたのは上野 下平だけの争いではなく重臣の宇佐美 政景らも巻き込んだの政治的な争いの騒動であつたからである。

政景にはさらには栖吉の長尾景信との領土の境界線争いまでが出てきていた。これも裏で栖吉に宇佐美が付いて、政景との争いに輪をかけていると噂されていた。

この件は譜代の実乃、栖吉長尾と外様の上田長尾の争い、景虎古参の家臣と新規の家臣の争いの匂い、つまりは国内分裂の危機をもちらんでいたので景虎も慎重にいろいろな資料で判断した。

しかしどちらにもそれなりの言い分があり、もっともらしかったのである。

最終的に姉の夫であり、越後の実力者である長尾政景への遠慮がやはり優先し、上野の方に引いてもらう形で解決をもらった。

しかし両方ともすつきりしなかつたのかその後も上野 下平ら本人たちだけでなく、その後ろにいた宇佐美、実乃と政景、大熊との争

いは裏で続くことになりこのことが後々色々響いてくるのであった。

一方揚北衆でも中条資正と黒川実氏も土地の境界線でもめていた。景虎の和解勧告も聞かず一戦交える勢いであった。

さらには自分の噂もしきりであった。

去年の川中島で表の出てしまった例の腹痛の件であるが自分ではどうしようもできない。

さらには南から武田晴信 北条氏政の圧力しきりである。

これも相手をしたくなくても向こうから勝手に来る。

景虎の言い方をすれば他人の土地を取ることに無類の喜びを覚える嫌な連中である。

こんなのに自分の人生を振り回されるのは心底嫌だと思い始めていた。

姉の件もあった。姉が子供を産んだのである。後の景勝である。

おめでたい話ではあったが普通の女には出来ることが自分には出来ないことが余計に嫌になってしまった。姉に対してこのような感情を持つ自分も嫌であった。

このように家臣たちの件で少し気が滅入っていたおりにこんな嫌々尽くしが続いたことあってある日景虎は突然春日山城を出て行ってしまったのである。

弘治3年（1557年）28歳のときである。今で言う家出である。

ある日突然城門の警備兵からの本庄実乃 金津新兵衛に報告がもたらされた。

景虎がさようならと行って城を出ていってしまいどこに行ったか分からないという。

景虎は諸国を巡っている今流行の出雲の巫女の格好をして愛馬の放

生月毛にまたいで一人で出て行ってしまったとこのことのであった。

出雲の巫女の格好をしていたというのですぐに察しがついた。出家するつもりであると。

ほどなく林泉寺の天室光育も慌ててやってきた。

景虎から手紙が着ている・・・と

内容は要約すれば、

「住職殿 各人に言い聞かせてください・・・みなが私の言うことを聞いてまともまらないのもうこれ以上やってられません。今まで越後のためにがんばってきましたがもう諦めます・・・仏の道に入ります・・・信州の味方を助けることは越後を助けることになります・・・信州が滅びれば越後も危ないでしょう・・・それを同意してもらえない限りは戻るつもりはありません・・・」

(困ったお方だ・・・)

家臣一同正直みな呆れ顔であったが景虎の力や実績は彼らも正直に認めてはいた。

戦における豹変ぶりとその独立気質の強い越後衆をなんとかかまとめ上げ越後を立て直した点である。

信濃はそれが出来なくて甲斐の晴信に付込まれたことはみな重々承知していた。

家臣団で話し合った結果、今回の騒ぎの引き金になった領土争いでもめている件は景虎の方の言い分にも一理あるので今回は当事者がとりあえずこれ以上ことを荒げないことで同意した。

ただ信州の件はやはりこの場でも家臣団の態度は煮え切らなかつた。犀川北部一帯の善光寺平の高梨政頼を助けるのは越後の安全上からもみな了承であったが村上義清へ厚遇の件はやはり不満を持ってい



る者が正直多かった。

今回村上本人が飯山城で晴信対策で高梨と一緒に不在であったこともあり、家臣団の中からも本心が出た。

村上の武勇、実力はもちろん越後衆も十分に認めていたが、かつて景虎の甥の高梨政頼と争い、しかも越後の安全上はあまり意味をなさない中信濃の彼の本領の葛尾城を奪還しようとする景虎の心情が理解できぬとの点であった。

しかしそんな彼が今はその高梨と一緒に北信濃で最前線を支えているのも事実ではあった。

それを言い分にして直江や実乃、宇佐美らが他の者をなだめてなんとか抑えたのであった。

景虎の家出の件もとりあえずすぐに春日山城に連れ戻すことになったが景虎が本気かどうかは誰も分からなかった。

ただ景虎は幼少期に林泉寺で勉学を学んだせいか都への憧れのせいか分からなかったが、仏門に興味があったのは事実で昨年の上洛時にも大徳寺の住職から宗心という法号をもらっており自分では長尾宗心とも勝手に名乗っていた。また高野山の高僧の清胤とも親しくしていたようなので今回はかりは本気かもしれないと家臣団も不安を感じ始めた。

とにかく軒猿にすぐに情報収集を命じた。

愛刀の姫鶴一文字を置いていっており丸腰とのことであり事態は最悪であった。

武田の透破 北条の風魔ら敵の忍者衆に襲われたら終わりである。一刻の猶予もなかった。

とにかく残された家臣団にとっては春日山城で情報を待つしかなかったが、なすすべもなくただおるおる、そわそわするばかりであった。

5日ほど経ってようやく第一報が入ってきた。

関山権現にいると言う。灯台下暗しではないが春日山城から30キロほど南の意外と近くにいたので一安心であった。

そういえば関山権現は信濃出兵時によく立ち寄っていたので景虎は僧侶たちと親しくなっていた。

家臣団はともかく大急ぎで景虎の連れ戻しに向かった。

その頃景虎に関山権現の本堂に籠っていた。

静かに念じていたつもりだったが雑念に襲われていた。

心が洗われることを期待していたが後ろ髪を引かれる思いの方が強かった。

家臣団の騒動も嫌ではあったがここにきて自分のわがままさにも最近嫌気を感じ始めていた。

国や家臣団を放ってきた自分に対してである。

感情を調節できない怒りに任せてしまう自分にである。

さらにはもう28歳にもなっているのにいつまでも姫様気取りの自分にでもある。

景虎は若作りであったのでまだ十分に姫で通用したがそれが通用しない日がいずれくるのは承知していた。それがまた嫌でもあった。

宗心との法号までもらって出家すると出てきたのにいざ剃髪となると腰が引けてしまう自分も嫌であった。

籠って雑念を払っているつもりが世俗的な自分がますます嫌になっ  
ていた。

嫌なことを忘れるために城を逃げ出してきたのに結局嫌なことから逃れられなかった。

翌朝景虎は外が騒がしいので目が覚めた。

すぐに察しがついた、引き戻しにきたのであろうと。

景虎は出家が妨げられて悲しいと思うように努めたがやはり本音で

は迎えが来たことが嬉しく安堵の気持ちの方が大きかった。妙な物で自分から出奔したにも関わらずもし迎えが来なかったらどうしようかと自分から帰って城に入れなかったらどうしようなど逆なこととも一生懸命考えていた。頭が冷えてくると感情に任せて出てきたことを少し後悔し自分の軽はずみな行動も反省しきりであった。

しばらく様子を伺うことにした。力づくで無理やり連れ帰されるかと思っただがみな辛抱強く外で待っていた。

昼ごろまで顔を出さずに粘ったがやはり放っておけず自分の甘さに嫌になりながらも思い切って外に出た。

金津新兵衛 本庄実乃 直江景綱 宇佐美定満 中条藤資 栖吉長  
尾景信 山吉豊守 長尾政景 千坂景親 色部勝長 斉藤朝信 北  
条高広 柿崎景家 上条定憲 黒川実氏 山本寺定長・越後の重  
臣が勢揃いであった。

前線の信濃の村上義清、高梨政頼も噂を聞いて駆けつけて来ていた。越後の重臣だけでなく親衛隊の兵士の弥太郎 秋山源蔵 戸倉与八郎までもが、さらには今回の当事者になってしまった上野家成と下平吉長も一緒に揃って来ていた。

女中のお春と花だけでなく直江の娘や柿崎の妻も景虎を心配して来ていた。

みな景虎を見るとやれやれと一安心しているような表情や声を出していた。

景虎は彼らの顔を見ると本音では自分の軽さに申し訳ない気持ちとうれしくて感謝の言葉を出したい気持ちの方が上回っていたのだが

また強がりを書いてしまった。  
この強がりな自分の性格も嫌であったが。

「・・・何をしにきた・・・」

一同静まり返った。そしてみな景虎を困った顔でじっと見つめた。  
景虎も少し緊張してしまっただが・・・

「何をおっしゃいます・・・春日山に戻りましょう・・・」

本庄が珍しく困りきったような彼らしくない口調で言った。

「出家したい・・・世の中が嫌になった・・・自分も嫌になった・・・」  
意外に正直に自分の気持ちを語れた。

家臣団も分かっていた。今回の当事者たちはなおさらであった。

「・・・そのようないことをおっしゃらないでください・・・」  
宇佐美が弱々しく言った。

「・・・すみません」

政景だけでなく同伴して来ていた下平 上野らも頭を下げた。

「・・・ワシらも今回は反省している・・・考え直してくれ・・・」  
中条も黒川も正直にぶつけてきた。

逆にこのように正直に言われると景虎はひるんでしまう。

「・・・出家を妨げると天罰が当たるぞ・・・」

景虎は声を振り絞った。

「・・・越後が滅ぶことを考えればそのような天罰など安いもので」  
ざいます・・・」

直江が言った。

越後が滅ぶ・・・重い一言であった。

「・・・帰れる城があるときは帰るべきであります・・・戦に破れ帰る  
城がないのは本当に惨めなものです・・・帰れる城があることは幸せ  
なことでございます・・・」

村上が続いた。葛尾城を失った彼の一言は重みがあった。帰りましょう という声があったるところから出だした。頼まれたら断れない景虎である。

こんなすぐに情に流される自分にも嫌気を感じたが彼らの期待を裏切ることにはやはり出来なかった。頼まれたら断れない。見返りがなくてもである。自分でもなぜわからなかった。

でも簡単に下がりがりたくなかった。自分の強気が最後の抵抗をしていた。

「今日は決断できない・・・みなも一旦帰ってくれ・・・少し時間をほしい・・・」

景虎は自分の負けを認めざるをえなかった。

これだけ迷惑をかけているのにみな気持ちに素直に正直に答えられない自分が恥ずかしくも情けなく泣きたかったがそれを抑えるのに必死だった。

「・・・ワシはあなたを守るように為景様から言われている・・・今日は外でお待ちします・・・」

新兵衛が言った。

「虎御前様と綾（仙桃院）とあなたを春日山に連れ戻すよう約束している・・・あなたをお連れするまで春日山には絶対帰りませぬ・・・」  
政景も言った。

本当に陣を持ち込んでいた。

「か・・・勝手にするがいい・・・」

景虎は声を振るわせていた。

涙を見られたくなかったので慌てて本堂に入ろうとしたそのときであつた。

使者が大慌てで息を切らして境内に飛び込んできた。

「大熊朝秀が謀反！」

「……！」

景虎は声が出なかった。全く予想していなかった。そういえば彼はここにはいなかった。

使者は緊張気味に続けた

「……軒猿が甲斐の透破が大熊の領土に入ってきて来ていると報告してきています……どうやら晴信が糸をひいているようです……」

「……は……晴信のやつ……！」

景虎は決断した。すぐに出兵準備を命じた。

こうして結局皮肉なことに晴信のおかげで春日山城に戻ることになったのである。

北条高広に続き今度は大蔵奉行の大熊までもが武田晴信にそそのかされて越中で謀反を起こした。景虎は晴信の計略上手に声がでなかった。

とにかく慌てて春日山城に戻り今回はあの上野家成が率先して大熊討伐に向かい鎮圧したのであった。

大熊の乱はすぐに鎮圧されたが彼は越後を一族で出て行ってしまったという。

景虎にしてみれば内心ショックであった。今回の領土の件や景虎と財政の件などを巡り確かに行き違いが多かったが父為景の代から長尾家に仕え自分が栃尾時代から暗に手助けしてもらっていた古参の大熊が自分に対して謀反を起こしたことにである。

いまは甲斐の晴信を頼っているらしいという。

なにはともあれこうして景虎の家出は失敗し連れ戻されたのである。

なおこの出奔騒ぎの後政景が筆頭になって景虎に対し忠節を誓う誓文を再度提出した。

また人質を春日山に提出する者もいたという。

ただ再度このような事態が起こる手間を考えて単に景虎のなだめ役と機嫌取りに景虎に年が近い妻子を春日山に駐屯させていたという表現の方が近いかもしれないが。

一方その後越後を脱出した大熊朝秀は甲斐の武田晴信を頼っていた。晴信は景虎の出奔騒動に興味津々であった。

晴信は大熊の報告を黙って聞いていたが

「信じられんな・・・ 守護が自分の国を放り出して出て行くなんて・  
」

晴信も呆れながらも笑みを浮かべてうれしそうに言った。

「まことの女子供ですな、全く・・・」

飯富虎昌は笑うことなく呆れかえっていた。

「わざとではなかるうか・・雨降って地固まるとやらで・・・」

勘助だけ疑っていた。

弾正は黙っていた。

「ますます景虎が気に入った・・」

晴信の笑顔は止まらない。

「ワシが家出したらどうする？」

晴信が思いがけずに質問した。

勘助が即答した。

「武田家の名譽のために斬り捨てますな・・」

「父上までもが 馬鹿なご冗談を・・」

信義も少し怒ったように言った。信義は晴信の長男である。

晴信が嬉しそうに声を出して笑っていた。

「どうやって収束したのでしょうか？」

信義が大熊に聞いた。

しばらく黙った後 大熊が声を出した。

「それが・・大男が群れを成して侘びを入れて・・戻ってもらった次第で・・」

晴信は笑い転げていた。

他の家臣は呆れかえっていた。

「にわかには信じがたいですな・・・」

「越後はそれで国が成り立っているのか・・・」

真剣に驚く者もいた。

晴信は笑いが止まらない。

しかし晴信は勘助の次の一言で笑うのをやめた。

「しかし・・・普通でない故に・・・まこと面倒な相手ですな・・・そんなのが隣国にいるとは・・・」

「うむ・・・」

晴信も笑うのをやめ 少し真剣な顔でうなずいた・・・

「弾正・・・」

晴信はいとおしい顔で弾正に声をかけた。

「貴殿はどう思う？」

意外な答えで一同は静まり返った。

「何はともあれ・・・芝居か本音かはわかりませんが・・・簡単に家臣をもう一度まとめあげたのであれば・・・甲斐にとっては危険な方ですな・・・」

「・・・うむ・・・」

晴信は少し黙って真面目な表情に戻った。

大熊はこの後晴信に忠節を誓い仕えることになった。

大熊は次の勝頼にも忠臣として仕え武田家滅亡の天目山の戦いの時に討ち死にしたという。

一方その後晴信は密かに勘助を呼んで話をした。

今後の越後及び景虎対策である。そしてある作戦を秘密裏に実行することにした。



## 風林火山

弘治3年（1557年）早々、甲斐軍が再度信濃に侵入してきた。弘治元年（1555年）の時に今川義元の仲介で結ばれた景虎との講和条約を破棄して越後側のものとなっていた葛山城を2月に奪回したのである。

しかし晴信はそれだけではなく昨年、景虎の出奔騒動のときもあの大熊朝秀にも誘いをかけて景虎陣営を混乱させただけではなく、この後に建てられる海津城の近くにあつた尼巖城をも落城させ着々と信濃全土の攻略を進めていたのである。

さすがの景虎もこれには怒り心頭であつた。

今川義元の計らいで結んだ講和条約を何食わぬ顔で破り大熊をそののかし、しかも雪でこちらが動けない時期を狙って攻めてくる晴信の厚顔さにである。

しかし晴信の調略のすごさには正直舌を巻くしかなかった。

葛山城だけでなく戸隠や木島平方面と多方面に一気に甲斐軍を展開させ対応できない飯山城の高梨政頼は悲鳴を上げていた。

戸隠の飯縄権現までもが甲斐軍に落とされ門徒宗が春日山まで逃げてきていた。

戸隠の飯縄権現は景虎の具足の柄にもなつており景虎も信仰していた。景虎は毘沙門天を信仰していたが当時は複数信仰が普通であつたので飯縄権現も信仰していたのである。

戸隠方面まで落とされると春日山のすぐ側まで落とされたことになり一刻も早く信濃に出る必要があつた。

出兵前に景虎は更級八幡に晴信討伐を願う願文を提出した。

晴信という悪人のせいで神社仏閣が破壊され人々は苦しんでいるのは隣国の領主として看過できません、信州からの依頼もあるので決

戦に挑みます。と  
何よりも大義名分を大切にする景虎であった。

早速味方にも出兵命令を出したがさすがに越後軍内でも不平不満が出て景虎自ら参加依頼の催促の書状を出してようやくこぎつける次第であった。

特にあの政景や揚北衆や色部までもがさすがに今回は渋る次第であった。川中島に行くのはもう3度目であると・・・  
景虎も負けじとこの前の出奔騒ぎの時にみなに提出してもらった誓文を盾になんとか引つ張り出した。

天皇から頂戴した私的戦乱平定の綸旨も盾に使ったが実はこれは私的の通り天皇家の公式なものではなかったのでその辺も見透かされていた。

ただ景虎も彼らの不平がわからなくもなかった。

特に村上義清の件が不平の種になっていることは景虎の耳にも届いていた。

優遇し過ぎであると。しかも景虎の独断であったので尚更であった。事実村上の越後軍での序列はなんと景虎の甥の高梨より上であった。最も高梨も負い目があったのを見てみぬ振りか景虎の好みの件での行動を知っていてかこの件に関しては彼は黙っていたが。

でも景虎はこの批判はあまり気にとどめていなかった。

自分の好みで決めてしまった以上引くに引けなかったからである。みな分かってくれるはずであると。

彼の息子の国清を含め村上親子の実力もみなは認めているであろうと。

その時が来るまではひたすら我慢と自分を正当化しておいた。

景虎は腰の重い渋る越後国人衆たちに何度も出兵依頼をかけてようやく彼らを引つ張り出し、越後軍は部隊が整うと雪解けとともに4

月末に春日山城を出発し5月には北信濃の諸城の奪還を開始する。が逆に気味が悪いほど甲斐軍の手ごたえが無くあっさり川中島は南端まで再度越後軍は甲斐軍を押し戻した。ただそんな中、孤立無援で徹底抗戦を続ける葛山城は晴信のしたたかさや企みが垣間見えるようで嫌であったが。

甲斐軍に元気が無い、いや全く戦わない理由はすぐにわかった。晴信は出陣していなかったのである。

怒り心頭で出てきたのにこれであった。

自分の行動をまるで見透かしているような晴信に景虎までもなんか力が抜けてしまった。

それにしても晴信という男は・・・と思わず嘆きが出そうになるのを抑えた。

仕方が無いので越後軍は飯山城まで一旦後退し晴信の到着を待つことにした。

その後越後軍は高井郡の野沢城の甲斐軍を攻めたのだが、突然越後軍の拠点の飯山城にあの山本勘助が使者として晴信より派遣されて来た。

勘助は以前春日山城で会った時の様に相変わらずひょうひょうとしていた。

実は景虎は今回は勘助を捕らえようかと密かに考えていた。

甲斐に越後の本心を伝えるためである。

越後内では晴信の人を馬鹿にしたような作戦に不満が高まっていた。戦う気が無いのにわざわざ越後軍を信濃に呼びだして楽しんでいるのではないかと。

越後をあまり馬鹿にすると痛い目にあうというこちらの意志の提示でもあった。

宇佐美定満からの提案であったが勘助を捕らえることで甲斐軍に言

いがかかりをつけ誘き出すことも同時に考えたのである。

早速勘助が飯山城の広間にやって来た。以前同様堂々と単身でやってきたのである。さすがであった。

しかし景虎は少し不愉快でもあった。

自分の性格を見抜かれているような気がしたからである。

景虎は手荒な真似をしない、大丈夫と・・

勘助は景虎に深々と礼をすると野沢城の攻撃中止を堂々と要求してきた。

「道安殿のご意見、飲めない・・」

景虎は言ってみた。

勘助ではなく以前春日山城で捕らえたときの彼の偽名 道安である。彼の反応を見ようと思ったのである。

「前は急いでいたようだが今回は晴信殿がお迎えに川中島に来るまでゆっくりなされ・・休暇も大事であろう」

と遠まわしに監禁することを伝えた。

しかし勘助の次の答えは意外なものであった。

「・・せつかくの両国のご縁の深まる話を持ってきたのに・・このようなご対応至極残念ですな・・」

と答えて来た。

見返りをもってきているとはつきり返答した。

しかし景虎は無視した。どうせ嘘であろうと。

約束を平然と破る晴信など信用できぬと思ったからである。

前回と同様今回も道安 勘助を捕らえると丁寧に客人としてもてなし、しばらく飯山城で滞在してもらい甲斐軍の返答を待った。

ところが甲斐軍の返事は意外なものであった。

景虎が晴信からの返事を待っている間に甲斐軍は越後側の北安曇郡の糸魚川谷の方の小谷城をいつの間にか落としたからである。

これには景虎も正直仰天した。

小谷城に甲斐軍が向かうなど予想外で守りは手薄であり、そこを突かれたからである。

小谷城が落とされたことにより越中方面から春日山城や越後本国への甲斐軍の進入も気にしなはいけなくなった。

相変わらず善光寺のすぐ側の葛山城が落とせなかったため晴信の本隊が来たら分散作戦を強いられてしまう。

川中島の南方にも甲斐本国から到着した晴信率いる甲斐軍本隊が集結しているとの情報も景虎の元にもたらされていた。

しかもそれだけでなく深志城（松本市）にも甲斐軍が集まり小谷城に向かうのではないかと越後軍内でも情報が錯綜していた。

晴信は再度 野沢城の攻略の断念と勘助の開放を要求してきたがこれらの理由で景虎は渋々飲むことにした。

たださすがに家臣団からもこのまま晴信に振り回されるのは我慢ならないとの声が出て勘助を生かさずに甲斐に返して怒った晴信を誘き寄せる案も再度宇佐美を中心に検討されたがやはりそのようなやり方は好みではないと景虎は許可を降ろさなかった。

それこそ晴信の読めない策略に再度かかりかねないと景虎が判断したのである。

ただ景虎も本音では晴信の真意を読みかねていた。

現状は晴信の方が圧倒的に優位で、小谷城 野沢城 善光寺に部隊を分けざるをえない越後軍の方が断然不利であった。

越後軍としては野沢城攻略は放棄しても越中方面からの春日山城の防衛のために小谷城はすぐにでも軍を向けて取り返す必要があった。

甲斐軍が前回同様1万2000以上の兵力を投入してくれば小谷城

越中から春日山方面、もしくは晴信が欲しがっているといわれる海の出口のある越中に出ることも可能である。

兵力がさらに多ければ堂々とこのまま善光寺から越後軍を突破する、もしくは善光寺・川中島から越後軍を完全に追い払うことも可能かと思われたからである。

もし自分が甲斐軍の大將であればそうするであろうと。それでも晴信はなぜか戦いに持ち込むのを極端に避けていた。

甲斐軍は今回もこちらに向かつてくる気配がなかった。

越後軍を相当に買っているのか何か企んでいるのかさっぱり景虎は読めなかった。

結局勘助はそのまま甲斐に送り返されることになった。

景虎も不愉快であったがここは引き下がり茶の席に勘助を呼び丁寧に迎え甲斐に送り返すことにした。

もう一度勘助と話をしてみても晴信の本心を探ろうと思ったのである。飯山城城下の庭園が美しいと有名な称念寺に早速勘助は呼ばれた。

その場で早速再度勘助からあの話しが出た。

以前彼が言っていた両国の縁の深める話の件である。

景虎は以前は勘助が適当に言ったのであろうと気に留めていなかったたのであるが今回次の勘助の言葉を聞いて景虎は固まってしまった。

「晴信様が景虎様と手を組み、お近づきになりたいと・・・」

何をいまさら妙なこと言うのか・・・同盟を結びたいとは・・・

そのように解釈したのであった。

勘助は正直に話してくれた。晴信公は美濃に行きたがっている・・・

この案を押ししたのは自分だけでなく晴信の弟の信繁や勘助同様甲斐軍の軍師の内藤昌豊も提案している・・・

いつまでもお互い無毛な戦いに明け暮れるべきではないと。

美濃は米所でその真南の尾張や西国の近江も米所である。

しかも都に近く大小の豪族がまとまりなく戦っていた。

信濃と似たような状況で晴信には魅力に感じたのであろう。

晴信は弘治2年（1556年）に駿河（静岡県・東部）の今川義元と、相模（神奈川県）の北条氏康と、それぞれの息子・娘同士の婚姻関係による『甲相駿・三国同盟』を結んでいた。

同盟相手の今川義元が上洛するとの噂も絶えなかった。義元が西進して尾張を取るなら自分も美濃が欲しいと。

しかし問題は景虎側から人質交換で行くとしても親族が極端に少ない景虎には誰も行く者がいなかった。好色な晴信に人質を送る気も実はなかったが・・

「人質は出さない・・」  
と言ってみた。

しかしそれに関しても破格の条件であった。  
越後側からの人質はいらない。

犀川以北の譲渡と甲斐から景虎の希望する者を越後に送るという。勘助は景虎に遠慮して直接名前を言わなかったが弾正のことを指しているのは間違いなかった。

景虎はなんか驚きと同時に自分が酔った勢いで起こした行為とはいえ自分の弾正に対する噂が少し恥ずかしかった。実は本気であったが・・

さすがに村上義清の葛尾城は返却対象に入っていないが彼は越後の根知城を与え客将として活躍してもらおう予定だったのでこちらからも妥協できる範囲であった。

景虎にとっても関東管領を苦しめる北条に専念できる。

しかし北条と武田は同盟を結んでいる。

「氏康殿が黙っていないであろう・・」  
聞いてみた。

勘助は意外な返事をした。

「氏康殿は賢いから二面作戦は取りませぬ・・甲斐と越後を同時に相手しません・・」

もちろん甲斐に対しては不愉快でありましょうが甲斐と越後が同盟を組んでも甲斐と相模の同盟になんら支障はありません・・越後と戦う以上は渋々甲斐と同盟を結び続けるでありましょうな・・」

(そうであるうか・・)

一瞬景虎は勘ぐったがここは深く考えずやり過ぎすことにした。晴信のあざとい性格から妙なことを考えてしまったのであった。

まさか相模、関東も狙っているのではないかと・・以前晴信の父の信虎が関東に興味を持っているとの噂を聞いたことがあったからである。

しかしもしそうであればまた関東で晴信とぶつかってしまう・・考え過ぎかと。

あれこれ考えているうちにむしろ気になったのは尾張の織田信長であった。彼はこの戦国時代自分と同じく將軍に謁見した忠義者である。

尾張や美濃は信濃のようにまだ大小の豪族が争い国は統一されていないなかった。

信長は頭ひとつ出ていたがそれでも尾張の半分程度しかまだ収めていなかった。

信長が晴信と同盟を組む義元に狙われて苦慮しているとの話は聞いていた。

彼を助けることが將軍への忠誠心になると・・どこまでも古い景虎であった。

弾正の件は内心うれしかったがそんな自分を見て家臣団の心が離れてしまうのではないか、越後の運営に支障が出るのではないかと気になり、心残りであったが結局景虎はこの件は勘助に返答しなかった。



この件は越後の家臣団にもこの後は相談せずすべて自分の心の中心にしまいこんだ。  
越後にとつても景虎にとつても良い話であったが晴信に対して妥協するみたいで嫌でもあった。

景虎はこのように色々考え事をしていたのだが勘助が一言最後にと聞いてきた。

「晴信公にはどのように伝えたら良いかな？」

「？」

景虎は勘助の言っていることが理解できなかった。  
思わず不思議そうな顔をしてしまった。

「お近づきの件ですが・・・」

勘助も少し言い難そうであったが

「お近づき・・・？」

景虎は本当に勘助が何を言っているのか分からなかった。  
勘助はうなずいた。

「同盟の件はそう簡単に即決できない・・・待つて欲しい・・・」

景虎は言ったが

「その件ではござらぬ・・・お近づきの件でござる・・・」

（・・・まさか・・・冗談であろうが・・・）

景虎は一瞬固まってしまった。

手を組む、同盟の件が即答出来ないなど分かりきつておる・・・他の件ですぞと勘助の顔に書いてあった。

「もし・・・可能であれば殿は阿虎様あひらと善光寺かどこかで茶会ちあひなり歌でも一緒に詠みみたいなと・・・」

勘助も少々言い難そうであったが真剣に言っていた。

景虎は思わず咳き込んで茶を噴き出しそうになった。  
ようやく意味が分かった。

勘助の言っていた 手を組み、お近づきになりたい とは 同盟を  
組み と 個人的な関係を持ちたいと 二つの案件の話しのようで  
あった。

これとは別に自分の阿虎の名前を晴信が知っていたのにも驚いたが・  
・ 甲斐の透破の情報収集能力も侮れないと。

ちなみに阿虎は景虎の幼少の頃のあだ名で親しみを込めて呼ばれて  
いたのだが、さすがにこの年になってからは滅多に呼ばれず、とく  
に最近は新兵衛や直江、宇佐美、中条といった越後の重臣でも老人  
衆が無礼講の酒の席で酔って景虎を困らすときぐらいしか出てこな  
いのであった。

(晴信と茶会や歌会など・・)

景虎は想像するとなんか良く分からなかったが恥ずかしくなってい  
まいった。

世の中で一番嫌いな相手であるのに・

ただ晴信も意外に文学好きで和歌や詩に熱中しそれを武田四天王の  
板垣信方にとがめられたことがあるとも景虎も聞いたことがあった。  
景虎も晴信を見た後は彼に対する心象が変わりつつあったのは事実  
であった。

残虐無慈悲な印象から下がり眉毛の気弱そうな優男への印象である。  
もちろん戦は抜きで見た目だけの印象である。晴信の裏からこそこ  
そやる謀略好きは苦手であったが。

晴信は好色で若い衆道衆だけでなく側室もたくさん連れていたのは  
事実だったがそれに関する悪い噂は景虎も聞いたことがなかった。  
逆に意外と気が効くマメな男と。

むしろ衆道の相手に自分の不倫を詫びる手紙を送っていると聞いて  
景虎が少々引くほどであった。

(本気で言っているんであるうか・・また何か妙なことを企んでい

るのであるつか・・・)

しかし本気でも妙なことを企んでいるにしても返答に困った。

「お・・・お気持ちはありがたいが・・・それも即答できない・・・また返答する・・・」

嫌いな晴信の誘いなどすぐに断ればよい物をなぜか保留扱いにしておまけに生真面目に答えてしまった。

勘助は了解しました、良い返事を期待しておりますぞと言い甲斐に帰っていった。

ただ晴信公の力をご覧になってから再度検討されても結構と不気味な言葉をも言い残していった。

6月になりようやく晴信本人が出てきたようので甲斐軍もようやく移動を開始した。

結局甲斐軍は川中島に戦力の集中させることにしたようので川中島の南方にいた部隊と深志城からの部隊は合流すると上野原まで移動して布陣した。

しかしその兵力を見てまた景虎は驚いた。勘助の言葉は嘘ではなかったのである。

なんと甲斐軍は2万近くを動員してきたのである。

対する越後軍は1万である。数では圧倒的に不利であった。まともにぶつかれない。

小谷城に兵力を分散展開などもうかつにも出来なくなった。

晴信は北条 今川と『甲相駿・三国同盟』を結んだおかげで後心置きなく全軍あげて景虎と戦う事ができるようになっていた。そのためにこれほどの大軍を導入できたのであった。

正直越後軍でも動揺が起きていた。

取り急ぎ小谷城は後回しにしてこの2万の大軍を相手にすることに

したが戦力差がありすぎてこちらから打って出することは出来ず、手の打ちようがないというのが正直なところであった。

しかもまたも晴信は動く気配がなかった。また頑なに守りに入っているようであった。

また持久戦である。少し安心もしたが。

それにしても景虎も家臣団も心の中でうんざりしていた。3度も川中島に来ているが一番最初は最南端の更科八幡 次は八幡平 犀川 そして今回の上野平。

決定的に負けたこともないのにどんどん晴信の勢力範囲は北上しており気が付いたらすぐそこまで来ている。今回も最北端まで攻められ最南端まで押し戻した気が付いたら犀川を越えて上野平までまた押し戻されている。

晴信もこのじりじり無音で迫って来る感じはとにかくうんざりであった。

「なんであんな嫌なのが隣にいるんだ・・・」  
思わず本音が漏れた。

解決策として勘助との話の件も思い出したがすぐに胸の奥にしまった。

ここまでされて引き下がるのが嫌でもあったが本当にどうしたらよいかも分からなかった。

さらに今回景虎は別の理由で甲斐軍に積極的に攻撃することが出来なくなっていた。

都で事件が起きていたので。

將軍足利義輝が三好長慶とその臣下の松永久秀に都を追われ近江に退却したとの情報が入り義輝から再度の上洛の要請と晴信との和睦の要請が来ていたからである。景虎はあの長慶が義輝を都から追い

だした情報は信じ難かったが。また越中でも一向一揆が起きていた。兵の消耗をなんとしても防ぎたかった。

景虎 晴信双方にもほどなく義輝からの和解勧告と上洛要請もあり、農業の繁盛季の9月には大慌てで何も得ることもなく景虎は軍を越後に引き上げて行ったのであった。晴信も10月には何食わぬ顔で退却して行った。

しかしその後の義輝の行動は景虎に衝撃を与えた。義輝は景虎と晴信の和睦を勧告する御内書（將軍の公文書）を送ったのだがその中に信濃の守護を晴信に認めることになったからである。

これは景虎と晴信が講和、もしくは停戦するのを条件に義輝が晴信からの依頼を渋々受けたのであったが、おかげで景虎は守護小笠原長時の要望を受けて戦っていたのに晴信が信濃の守護になるとその戦う大儀名分がなくなり景虎にとってはこの戦いが無意味なものになってしまったのである。

晴信も実は景虎が前回上洛したとき『私的戦乱平定の論旨（りんじ・天皇家の命令書）』を授かり景虎が官軍、景虎に敵対し戦乱を巻き起こす晴信は朝敵（国家の敵）であり賊軍という形式を立ててきたことを不愉快に感じていた。面白くないので景虎に負けじと手を打ってきたのである。

もちろん義輝からしてみても景虎の面子を潰すので苦渋の決断でもあった。

景虎は義輝が長慶の傀儡と分かっていたので義輝を責める気はなかったが、自分を多少買ってくれていると思っていた長慶がなぜ心変わりしたのかが理解できなかった。

婚姻の話を通じたのが原因としたらますます気が重くなりやはり一度家臣団に相談してから決めれば良かった今更ながら後悔の念に駆られた。

そんな景虎の不満と義輝の苦渋の決断を無視するかのように翌年永禄元年（1558年）晴信は再度北信濃に出兵し信濃全土の支配権をより確実にするのであった。

義輝も停戦、講和前提で出した御内書を無視されたのでさすがに今回は義輝も晴信に非難の声をあげたが晴信は信濃守護の職務を果たしているだけで悪いのは景虎であると悪びれることなく逆に言い返される始末であった。

景虎も今回は越後軍を出せなかった。生真面目な景虎は義輝の講和の御内書があったので軍を出さなかったのもあるが、晴信と義輝の揉め事に口を挟みたくなかったのも事実であった。

晴信ももちろん景虎が上洛準備に追われているとの情報も知っていた動けないことも見込んでの行動であった。

晴信は越後軍の息の懸かる北部の飯山などを避けて越後側を刺激しないように甲斐軍を器用に動かし越後軍に接触しないよう徹底した。

また景虎が勘助から聞いた自分の言葉で悩んでいることも計算づくであった。

しかし晴信は本気であった。越後と無理に戦って消耗するより可能性があるとところに戦力を振り向けどんどん領地を広げるのが戦国大名の義務であると。

また晴信は信濃での実質的な勝利をほぼ確信しており、越後軍と無理に戦うつもりはさらさらなかった。返事待ちであるが景虎と茶会や歌会の件も期待していたので不必要に景虎を刺激するのにもなるべく避けていたのであった。

それにしても晴信も最近景虎に対する心象が変わりつつあった。密かに晴信好みの麗しき姫君なのは今でも違いが無かったが景虎の

その頑なまでに古典的というか忠義にこだわる性格である。特に將軍に対する忠誠である。

晴景は義輝からの上洛依頼は財政難を理由に断っていた。甲斐軍は弱いとは思っていなかったが三好軍と戦う気もさらさらなかった。

景虎は自分との戦いを少し休ませても上洛しようとする。

少々呆れてもいたが最近少しは褒めても良いかと思うようになった。

それにしても晴信は景虎が忙しいのはわかっていたが まあもちろん自分に原因もあるが あの返答をなかなか返さないのは少し不快であったが。

一方景虎もそんな晴信の調略上手にただ感心とともに辟易するといふ複雑な感情を抱いていた。

ちなみに景虎はこの時はまだ風林火山の本当の意味を知らなかった。「風の如く速く攻め 林のように静かに潜み 火のように激しく攻め 山のように動かない・・・」

で意味は正しいのであるが実はこの文の前に重要な一文がある。

「兵は詐まを以つて（も）立ち、利を以つて動き・・・故に・・・」  
と言つ文章があるのだがこれは簡単に言つと

「合戦とは敵を欺くことで、利益を勝ち取ることを目的とし、兵力をそのために自由自在に変化させるもの・・・それ故に風のように迅速に動く・・・」と・・・

晴信の言つ風林火山は不用意に戦をすることなく策略謀略を駆使して相手の領土を取ることが真相である。

ただお姫様育ちで世間知らずで大儀名分を大事にする景虎は世の荒波にもまれることによって風林火山の本当の意味を理解して受け入れるのは人生も晩年の頃である。

## 微妙

景虎は色部勝長と会談していた。

色部より紹介したい者がいるとの話であった。

実は彼は前の第三次川中島の戦いのとき参戦に遅れた。

ただ景虎はそれを攻めるつもりはなかった。

彼は栃尾以来の初期の重臣として認めていたし揚北衆が扱いつらいのはよく分かっていた。

揚北衆の中でも川中島の件は不満が溜まっているとの情報も聞いていたので無理強いはやめたのである。

しかし色部が逆に気を使ってきたようだった。

紹介してきたのは本庄繁長という若者である。

聞けば12歳で父房長を欺き死なせた房長の元重臣の小川長資を討ち取り居住の本庄城を取り戻したと言う猛者ぞろいの揚北衆でも一目置かれた存在と言う。

その後元服後も態度をはつきりさせていなかったがこのたび景虎に帰参したいということで色部が取り繕って連れてきたのであった。

越後守護の上杉定実の跡継ぎで揉めた時宗丸問題のとき色部勝長と繁長の父房長は歩調を合わせて行動しその縁である。奇妙なことだがその時彼らが争ったのはあの中条藤資であった。

景虎は察しが付いた。繁長は中条がいるから帰参をためらっていたのであると。

しかし中条は景虎側の揚北衆一の実力者で序列一位である。色部は第二位である。優先順位は中条である。

取りあえず話をして見ることにした。



12歳で父の仇を討ただけあつて19歳には見えない剛勇な若者であつた。

越後軍で活躍間違いなしであつた。

色部に聞くと率直な若者であるので勘に触るかもしれないがご了承をと前以つて言われた。

早速彼は挨拶もそこそこに不満をぶちまけ始めた。

景虎を見るなり立ち去ろうとしたのである。

やはり女の手下では働けないと・・

色部が慌てて止めに入ったが景虎は一言言つた。

「そなた 母上がいるであろう・・」

繁長は景虎が何を言つているのか分からなかつたがいると答えた。

景虎は続けた。

繁長の母は父房長が死んだあと城を追い出されたうえに追つ手に襲撃されなんと妊娠している女手にも関わらず戦い瀕死の重傷を負いながらも逃げ延び繁長を生んだと言つ。

「そなたの母上様は立派だな・・」

「・・・」

繁長は黙つてしまった。

「・・何をおつしゃいたい・・」

繁長は強い口調で遠慮なく言つた。

「そなたの母のような強い人間に私もなりたいと思つてな・・でも無理だ・・私は太刀打ちが苦手だからな・・だから将兵に頼つた戦をしている・・」

「・・・」

「だから腕利きは好きだから居て欲しいと思うが本人に無理強いはしない・・それだけだ・・帰参の意思がなければ仕方が無い・・残念だが帰つてよろしい・・」

景虎はじつと繁長を見つめていた。

景虎は気に入つた者を見ると5秒ほど見つめるクセがあるが今回も

それをやったただけである。ただ繁長は景虎好みの美男子ではなく勇猛という表現が合う若武者であった。

景虎は繁長のそのような不適な態度が気に入ったのであった。

繁長も少し黙ってしまった。

実は女だから嫌と言ったが繁長はそれ以上に景虎のその武将らしからぬ普段の優しげな雰囲気は苦手だった。

もっと勇猛な女武將を期待したのだが予想外に麗しき姫様だったからである。

決して彼女が嫌いなわけではなかったが年下の自分に対しての母親気取りか姉気取りの態度も苦手であった。

実は繁長は立ち去ると言ったときの景虎の反応も見なかった。

無礼者と烈火の如く怒れば帰参するつもりだったがむしろそれを期待していたのだが

優しい対応に本当に期待外れでもあった。

彼も対応をどうしようか考えていたのであった。

しばらくして繁長は景虎の視線に気が付いた。景虎は相変わらずじつと自分を見つめていた。

不覚にも少し顔を赤らめしまった。

景虎は美人であるが自分より10歳年上である。そのような感情の対象外のはずであったが・

自分の未熟さも少し恥ずかしかった。

「・・・どうした？」

景虎が聞いてきた。

「・・・」

繁長は下を向いて黙ったままだった。

「少し照れたかな？はは・・・」

景虎は意外に軽く涼しい顔でにこりと笑いながら返してきた。

(・・・こやつ!・・・)

顔は赤いままだったが繁長もさすがに少しむっとしてしまった。

「気が向いたらいつでも帰参許可する・・期待している・・」  
景虎はそういうとさっと奥に下がっていらしてしまった。

繁長は自分でも本心が良くわからなかったが結局は帰参することになった。

本庄繁長と景虎の関係はその後いろいろあり微妙な関係が続くことになるのだが。

永禄2年（1559年）春、景虎は一年がかりの準備が整い再度都に上洛することになった。

当初の予定では海路を船で行く予定であったが將軍追放の騒ぎの件で畿内の情勢が不安定になっていたこともあり敵国ではあるが本願寺も加賀の通行許可を出したので急遽陸路で上洛することになった。兵力は5000を連れて行く大掛かりなものであった。

今回は 金津新兵衛 本庄実乃 直江景綱 宇佐美定満 中条藤資  
千坂景親の重臣と護衛に腕利きの 柿崎景家 斉藤朝信 北条高  
広 色部勝長 そして先ほどの本庄繁長、もちろん親衛隊の兵士の  
弥太郎 秋山源蔵 戸倉与八郎、さらには女中のお春と花だけでき  
く直江の娘や柿崎妻、斉藤妻も行きたいと騒いでいたのでついてき  
た。

栖吉長尾景信 山吉豊守 長尾政景 上条定憲 山本寺定長 黒川  
実氏 新発田長敦らには留守役をお願いした。

実は宇佐美にも留守役を頼んだのだが本人が年甲斐も無く都に行きたいと騒いだので連れて行くことになった。本音では相変わらず政景との関係で渋っていたのであろうが。

ところであるの晴信であるが義輝の再三の要請もあって今回は景虎が

留守中は軍を動かさないと約束した。都の権威は東国ではまだまだ健在であった。もっとも晴信に言わせれば信濃は実質的に甲斐が完全に押さえたのでもう軍を出す必要もないというのが本音であろうが。

一行は4月に春日山城を出発、約3週間の日程でようやく都の手前、近江の坂本に到着した。

ここで義輝からの命令で兵士は待機の命令が来た。

都の人に恐怖感を与えないようにとの表向きの理由であったが

「わざわざ將軍様のためはるばる越後から来てるのに將軍様のご命令で都の手前で足止めとは存分な扱いじゃ・・・」

と兵士は口々に不満を言ってきたので景虎は再度彼らに都入りの交渉を約束してひとまずは坂本で待機させた。

恐らくは都の誰かが反対意見を唱えたのであろうと。

兵士は坂本に置いて景虎ら重臣一行は神余親綱が待つ京都の越後屋敷に向かった。

都は前回とあまり変わっていないが都に到着早々宇佐美が景虎が初めて都に来た時と同じことを言った。

「・・・意外と荒れておるのう・・・」

「・・・ほんまじゃのう・・・」

と直江も相槌を打っていた。

「一番まともな屋敷が越後屋敷か・・・笑ってまうな・・・」

中条が都の現状に呆れているようだった。

景虎も思わず苦笑いしてしまった。

初めての上洛からすでに5年がたった都の様子は相変わらずであった。

いつまでも若い気分だったが景虎も30歳になっていた。

今回の上洛は將軍の足利義輝が三好長慶との争いで一時近江に追われて都に戻るための援軍の派遣であったが、実はその後急転直下で義輝と長慶が和解して都に義輝が戻ったので、実は景虎が軍を率いて上洛する意味はそれほどなかった。

ただ生真面目な景虎は最初の要請通り忠実に軍をわざわざ都に派遣しただけであった。

ただ長慶の三好軍と本当に戦かう気は無かったので、今回の件は実は内心一安心であった。

あともうひとつ別の大きな予定もあった。関東管領の件である。その話を円滑に進めるための保険で莫大な金をかけて軍を連れてきたのである。手荒な真似はするつもりは無かったが、万が一である。

都に到着後、早速久々に室町殿に訪れた景虎一行であった。

義輝は新しい居城も作っているようですますます血気盛んであった。

この前会ったときの大人し目な印象とは少し違った。

この城は後に二条御城と呼ばれ、初代の二条城である。

衣装は今回も前回と同じく服装は將軍面会用の薄い萌黄色の直衣のすしを着、髪の毛は義輝たち会うときだけ烏帽子に隠さず、普段どおり垂髪にした。

髪を烏帽子に隠せば、すぐに男装の麗人になるので、京都市内を歩くときはその格好である。

今回は前回の新兵衛、実乃以外に宇佐美 直江 中条 千坂ら重臣意外に色部 齊藤 北条 繁長をも同伴させた。

義輝 細川晴元は相変わらずであった。傀儡のままである。

あの三好長慶も相変わらずで、横で真の権力者の圧力を無言で放っていた。

それにしても、つい昨年將軍追放事件があったように、はとも見えないかった。

三人とも何事も無かったように、平然と5年前と同じように景虎を迎

え入れてくれたので逆に景虎は拍子抜けしてしまった。

義輝は遠路ご苦労 大儀であったと5年前と同じ様に景虎を褒めた。今回は管領の細川晴元からも同じ言葉が出てきた。

義輝と晴元はにこにここと笑顔であったが長慶は相変わらず無表情であった。

せつかくだったので思い切つて義輝に兵士の件をお願いしてみた。

近江の坂本に待機させている越後軍の入京の許可の件である。

義輝はちらりと長慶の顔を見た。

そして答えた。

「・・・景虎殿・・・都に軍を入れるのは許可できない・・・」

景虎も返した。

「狼藉は絶対いたしません・・・上様の護衛のためにみな上京します。ですのでその栄えある任務をやらせて頂けませんでしょうか・・・兵士からも強く要求されています・・・」

義輝は再度長慶の方に一瞬視線をやったが返答に窮しているようであった。

「室町御殿の警護の三好軍では不足ということかな？」

突然長慶が入ってきた。少し不愉快そうであった。

(しまった・・・言い回しがまずかったか・・・)

景虎も自分の今の言い回しが長慶の勘に触つたのに気が付いた。

「じ・・・実は みなせつかくはるばる越後の田舎から来ているので・・・その、一生の思い出にせめて夕日に映える五重塔を見てみたいと懇願されました・・・」

景虎が苦し紛れな答えをした。

「ははは・・・」

思わず義輝と晴元が笑った。

「あはは・・・はは」

景虎や越後の重臣一同も愛想笑いをした。

「あはは・・・はは」

しかし長慶は笑っていなかった。  
義輝はもう一度長慶を見た。長慶が少しうなずいた様に見えた。

「わかった・・・景虎殿・・・」  
義輝が言った。

「入京を許可する・・・しかし狼藉はするなよ・・・室町御殿の警備は三好軍で間に合っている・・・気持ちだけで充分だ・・・越後屋敷から大人しく夕日に映える五重塔を眼に焼き付けて越後兵をねぎらつてくれ・・・」

許可が下りた。

晴元もうんうんとうなずいていた。

「あ・・・ありがとうございます！」

景虎一行は礼をした。

「前回話をしていた夜宴は日程が決まったらまた連絡する・・・あと・・・以前書状でもらった要望の話は来週の昼間にでも今度ゆっくりしよう」

義輝は相変わらず景虎に友好的であった。

しかしその後の一言は景虎をまた緊張させた。

黙っていた長慶がこの前の優しげな眼と違い厳しい眼で景虎を見ていたのである。

そして・・・

「景虎殿・・・来週お時間あれば三好屋敷にまたお邪魔いただけないかな・・・いろいろ話がしたくてな・・・」

景虎は面と向かって長慶を見れなかった。

「は・・・はい・・・」

と縮こまって返事をした。

景虎は確信した。三好長慶と將軍義輝 管領晴元の関係は昔と少し変わっている。微妙な関係になっているのが良くわかった。

越後屋敷に戻って今日は久々に酒宴を開いた。  
旅路のねぎらいである。

このような酒宴の時は大概無礼講である。勝手に無礼講になる。

早速今日の御所の件が話題になった。

「あれが三好長慶か・天下人つてやつか・」

中条が良い物を見せてもらったぞといわんばかりに言った。

「彼が將軍様と管領様を裏から動かしているとはこのう・」

宇佐美も感心していた。

「まだ40前じゃろ？若いのにたいした男じゃ」

直江も感心していた。

「とにかく兵が都に入れて一安心ですな・みんな都に来た甲斐があつたでしょう・都の手前まで来て入れなかつたなんて笑い話ですからな・」

色部も一安心していた。

「しかし5000も越後屋敷に収容できるか？」

中条が聞いた。

「近くの寺に少し泊めてもらいましょう・」

神余が言った。

「僧兵にならないように見張っておけよ！」

北条が悪い冗談を飛ばした。

「おぬしこそ出家して精進した方がよかろうが？」

中条も悪乗りしていた。

「と・と・ところで・」

景虎が声を出した。

「姫は寺に行つてはいけません・出奔は一度限りでお願いします  
る・」

新兵衛が冗談か本音かわからない横槍を入れた。



「・・・その話ではない・・・！」

みんな大笑いであった。

景虎は真面目な話をしようとしていたのに横槍を入れられて少し膨れてしまったが・・・

「寺・・・ではなくて義輝様の件だが・・・」

景虎は長慶から出た足利家との件の話を今日今更であるがしようと思っただのだが・・・

「またお気に入りですかい？確かに若くていい男らしいが」

北条が言った。

「今日はやってなかったぞ・・・じつと5秒見つめるやつ・・・」

中条が景虎の真似をしていた。

酒が入るとみな容赦が無い。

大いに盛り上がって結構であるがこうなるともう景虎の手に負えない・・・

（はぁ・・・今日はみな呑み過ぎている・・・言つのやめようかな・・・）

しかし思わぬ情報が入った。

「そういえば義輝様は最近結婚されたようです・・・相手は近衛植家様の娘・・・前嗣殿の姉上とかと言ってました・・・」

神余が言った。

景虎は内心驚いたが顔に出さないようにした。

「近衛家？関白様一族か・・・」

直江が言った。

「確か植家様は太政大臣、前嗣殿は左大臣だったかのう・・・すごいところから嫁をもらったもんじゃ・・・さすが將軍家じゃ・・・」

宇佐美が関心していた。

「都じゃ昔からよくあることだろう・・・將軍家は代々近衛家と親しいんだらう・・・」

実乃が酒をぐいと飲みながら返した。

「阿虎様もまだ間に合う！都の軟弱な娘よりじゃじゃ馬な越後美人もどうかと！年上だが・・・なあ！新兵衛！將軍様・・・は結婚したつて言ったか・・・なら近衛の前嗣殿に提案してまいれ！ガハハ・・・」  
中条は酔うと北条並みに口が悪くなる。

「前嗣殿つていくつじゃ・・・」

宇佐美が聞いた。

「若いはずぞ・・・24くらいじゃないかと・・・」

神余が答えた。

「・・・そうと決まれば・・・実行あるのみ！ありゃ？新兵衛？聞いておるか？」

中条は相変わらず悪乗りしてる。

「・・・うん？呼んだか・・・ヒック」

新兵衛は下戸であった・・・

「それにしてもいくらなんでも近衛家に越後の（田舎）大名が嫁ぐのは無理じゃろう・・・」

色部が冷静に呆れながら言った。

「長慶の息子はどうか？」

斉藤が冗談を言った。

「年が離れすぎですな・・・いくらなんでも息子さんが可哀想だ・・・」

繁長が答えた。

「・・・お前 阿虎様に怒られるぞ・・・」

色部が冗談交じりに小声で言った。

「・・・え！」

繁長は思わず口をふさいでしまった。

## 天下人

先週三好長慶本人から話があったようにまず挨拶を兼ねて都の実質的な実力者の長慶の屋敷に將軍義輝よりも先に今回は行くことにした。

この前の景虎の失言に対する彼へのご機嫌取りと関東管領の件を義輝に話す前に真の実力者に前もって話をした方が進展が早いであろうとの判断もあった。

衣装は前回と同じく彼に敬意を表すために將軍面会時と同じ薄い萌黄色の直衣を着て行くことと思ったのだが予想に反して長慶の使者より腹を割って話をしたいので普段着で来て欲しいとの連絡があった。逆に言えばそんな大事な話が長慶よりあるのであれば少し不安でもあったが。

衣装は長慶からの要望通り普段着でお気に入りである紅地雪持柳繡襟辻ヶ花染胴服を着て輿に揺られて三好屋敷に向かった。

今回も前回と同じ様に一対一の面会である枯山水のきれいな庭が映える禅宗模様の洒落た茶室に通された。

少し緊張気味に前回同様枯山水の庭を眺めていると

「失礼・・・」

三好長慶が入ってきた。

長慶は今回は萌黄色の鶴菱の柄の入った直垂を優雅に着ていた。相変わらずなかなかお洒落であった。

今日はこの前と違い5年前に会った時の長慶その人だった。

長慶は早速茶の準備をしてくれた。

景虎は茶器にはあまり興味がなかったが珍しい形の茶器であった。都の茶人や一部の武将の間で変わった茶器がもてはやされているとそういえば聞いたことがあった。

この前と違い普段着の景虎を見ると

「普段もその格好か・・・お似合いじゃないか姫君殿・・・」  
長慶が冗談交じりに早速切り出してきた。

「この前は怖い顔をしてすまなかったな・・・」  
越後軍の入京の件を言われるかと思っただが意外であった。

景虎は礼を言った。

「最近忙しくてな・・・少し気が立っておった・・・」  
景虎は黙って聞いていた。

長慶は茶を入れ終わると景虎に差し出した。

「そなたは5年前とあまり変わっておらん・・・」  
長慶が笑った。

褒め言葉であろうと素直に思い景虎は礼を言った。  
しかし次の言葉は重みがあった。

「中身は5年の時を刻んだかな？」

「・・・いいえ・・・まだまだ未熟者です・・・5年前のままです・・・」  
景虎は本気で答えた。

「そうか・・・」

長慶は茶器に手を添えながら言った。

「ワシも義輝も晴元も外見は一見変わっておらん・・・しかし中身は  
実は変わってしまった・・・政情はいつも動いている・・・それで変わ  
ってしまったただけだが・・・勘の良い景虎殿であればこの前すでお  
気づきかと思うが・・・」

景虎は黙っていた。

長慶は本音を言った。

「義輝は將軍家の人間としては良くやっている・・・將軍家の権威を  
高めたい気持ちは良く分かる・・・しかしやり方がある・・・ワシから  
すれば彼のやり方は面白くなってな・・・」  
引き続き景虎は黙って聞いていた。

長慶と將軍義輝 管領細川晴元の対決は実はこの前に始まったこと  
ではなく根深い問題であった。彼らの父の代までさかのぼるのであ

る。

1539年 義輝の父義晴と晴元を近江に追い払い その後和睦  
都に帰還

1549年 長慶の父の元長の仇である三好政長を討ったときも義  
輝と晴元と対立

近江に再度追放 1552年和睦 都に帰還

1553年 義輝と対決 近江に再々度追放 1558年和睦 都  
に帰還

と 実に三度も対決しているのであった。

さすがに長慶も我慢の限界に来ているのであろうと。

「・・・義輝の奴・・・諸大名を使ってワシに戦ばかり起こしおってゆ  
つくり出来ぬわ・・・まったく・・・誰のおかげで都で將軍を出来るの  
かわかっておらぬ・・・」

長慶は近畿の山城、丹波、摂津、和泉、淡路、讃岐、阿波の7カ国  
近くを押さえる実力者であるが彼はこれだけ義輝や晴元ともめなが  
らも將軍家や管領の存続は許していた。一時的に都から追い出して  
いるが結局は許して戻している。追放先も隣国の近江で都の目と鼻  
の先である。彼だって將軍や管領に対する忠臣には違いがなかった。  
ただ義輝や晴元は彼を後ろ盾にして存続していながら彼の力を削ぐ  
ことに力を入れていた。

そこが長慶の癪に触れていたのであった。

景虎も長慶の気持ちは良くわかった。

「この前も越後軍の都入りに反対したのはワシだ・・・実は近く義輝  
の誘いに乗ってワシに叛旗を上げた六角や筒井がいる大和国に軍を  
向かわせる・・・兵力に余裕が無い・・・」

「・・・」

景虎は黙っていた。

「今度義輝と会った時にもしかしたら義輝より越後軍に都の制圧が三好勢力の一掃の依頼が入るかもしれないが・・もちろん断つてくれとは言わぬ、景虎殿が自由に判断してくれ、三好の主力が動けないので今の越後軍なら都の制圧はたやすいであろう・・しかし將軍に忠誠を誓う者同士が争うなど馬鹿げている・・景虎殿だっていつまでも越後を留守に出来るわけではあるまいし・・そなたらが帰国すればまた都は結局ワシが押さえることになるのだから・・義輝や晴元はそこまで考えて行動しているのかワシにはわからんが・・」

景虎は黙って聞いていた・・確かに自分は義輝にうまく使われているかもしれないが將軍の忠臣だから当然であると考えていた。しかし長慶だつてこれほど振り回されているが彼も義輝の忠臣である。

「・・都に来てても三好軍と戦うつもりはありませんでした・・ですので義輝様と長慶殿の件が解決して一安心でした。私は都の権力争いにも興味はありません・・私の興味は別のところなので」  
思い切つて正直に言つてみた。

「越後の隣には厄介な武田 北条がいますので兵の消耗は避けたいので・・」

景虎の本音、越後軍は三好軍と戦うつもりがないのを長慶は確認すると顔には出さなかったが安心した。

長慶は表立つて言わなかったが武田軍と対等に戦っている景虎、および越後軍を買っていた。

だから將軍の指図通り動かれ大和が騒がしい今、都で騒ぎを起こされると都 大和の2方面で作戦展開を強いられることは是非とも避けたかった。

景虎がきつかけで反三好がいたるところで連鎖的に起こるのを恐れたのである。

長慶のお膝元の摂津でも不穏な空気が流れていて本当に余裕がなかったのである。

そのため越後軍が三好軍と戦うつもりがないのを確約した時点で長慶は一安心であった。

ただそれであればなぜ大軍を率いてきたのか知りたかった。

「それにしても5000も兵を連れてきたら金がかかって仕方が無いだろうに・・・」

事実であった。景虎にとつても正直言つて痛い出費であった。

「関東管領の上杉憲政様を今保護しているのですが・・・その権限委譲の話をしようと思つてそのために連れてきたのです・・・どうしてもそのお許しが欲しくて・・・万が一のために連れてきました・・・」  
景虎も続けた。

「関東管領の決定権か・・・それをなんとかとしても欲しいので軍を連れてきたか」

景虎はうなずいた。

長慶は少し考えたが

「結構乱暴じゃな・・・人は見かけによらんな・・・意外と強権的だな・・・」

長慶は思わず苦笑いしていた。

指摘通りだったので景虎も黙ってしまった。

「ワシは反対しないが・・・義輝次第だな」

意外にもすんなり慶長は同意してくれた。

「義輝の悪いところはむやみに打倒三好の工作をするから諸大名同士の争いを忘れて周りが見えなくなつて墓穴を掘つてしまつとこなんだがな・・・武田にも義輝は御内書を出してしまつてそなたその件で信濃の同盟者の防衛の名義を失つて困っているんだろう・・・」  
ずばりであった。

「それもこちらに一任、武田の件は取り消しか口出しさせてもらおうと・・・」

義輝が晴信に出した信濃の御内書の件も今回は交渉予定であった。

「生真面目だな・・・」

長慶は本気で感心していた。

「ただ 腹立たしいが義輝がワシの勢力をある程度削ぐのにもうまく言ったのは事実だな・・・義輝がワシの意向を無視して好き勝手にやっておるからな・・・」

景虎は義輝を武人として尊敬していたが確かに政治力は信濃の御内書の件のときのように良くわからない点があった。

そのため長慶の義輝に対する評価を知りたいのも事実であったがあまりに辛辣なのは少し意外であった。

結果的に義輝の悪口ばかりになってしまったので聞かなければよかつたとも少し思った。

ただ長慶の言っていることは十分に理解できた。

「両方とも義輝と直接交渉して構わない・・・ワシは反対しない・・・関東に興味はない・・・好きにするが良い・・・」

景虎は深々と礼をした。

取り急ぎ長慶の許可を得たのは大きかった。

「義輝が渋つたらワシの名前を出しても構わない・・・5000の兵を敵にまわすことは義輝もしないと思うが・・・まあ義輝はそなたを気に入ってるから呑んでくれるだろうな」

長慶は意外と樂觀的だった。

「ワシは一族の繁栄さえあれば他にはあまり興味がない・・・将軍や管領が大人しく言う事を聞いてくれればゆつくり茶や和歌を楽しめるであろう・・・ワシは足利將軍家を壊すつもりはない・・・しかしどうも連中にはそれが理解できないらしい」

景虎は黙って聞いていた。

「義輝はわかつておらぬ・・・足利家を滅ぼしてまでおのれの欲を満たす奴がこれから先、絶対出てくることを・・・」

長慶の顔が曇っていた。景虎は長慶このような顔を初めて見た。

（足利將軍家を滅ぼす者・・・？そんな大それた考えの人間などいるのでろつか・・・）

景虎は最後の長慶の言葉が残った。

越後という田舎にいる景虎は畿内の下克上の恐ろしさを知らなかつ



ただけである。

「少ししゃべりすぎたかな・・・そういえばワシの部下の松永久秀や息子の義興が一度景虎度殿に会いたいと言っていたので紹介したいが・・・どうする？」

景虎は少し困ってしまった。

今日は女の格好なんで会いたくないと正直に言った。

実は家臣に心配をかけているので女であることはあまり口外してほしくないと言った。

「息子の義興だけならどうか・・・そなたのような忠義者は今の時代少ないから教育のためにも是非紹介したいが・・・久秀には確かにあなたは紹介しない方が良くもしいないな・・・ははは・・・」

後半の久秀の件は何か意味深くて少し気になったが・・・それはすぐ後でわかった。

しかし彼の本当の恐ろしさを景虎及び長慶もこの時は知る由もなかった。

あと危うく忘れそうになったが將軍への配慮の件も再度礼を言った。  
「この前の件はすみませんでした・・・ご期待に添えなくて申し訳ありませんでした」

「いやいや・・・義輝は近衛を取っただけの話だ・・・足利將軍家は代々近衛との付き合いもあるしな・・・仕方が無い・・・気にしないでくれ・・・おそらく義輝もワシや三好家とはあまり付き合いたくないとのことであろう・・・最初から無理な計画であった・・・こちらこそすまなかった・・・悪く思わないでくれ」

長慶は気にするなと言ってくれた。

「ところで不愉快な質問かもしれんが・・・まだ結婚されていないか・・・？」

景虎はうなずいた。少し寂しげな顔を出してしまった。

しかし長慶は意外なことを言った。

「跡継ぎの件は確かに大変であろうな・・特に景虎殿だと婿にする相手を間違えると国が乱れるかもしれん・・慎重にならざるを得ないであろうな・・気持ちにはわかる・・」

意外な一言であった・・なるほど・・自分でもし子供を産める、産んだとしたらその結婚相手により国が乱れる可能性があるかと・・そういえば昔中条藤資も言っていたがそんなものかと・・中条には失礼だが彼が言ったときはあまり気にしなかったが長慶が言うとう重みがあった。

「ワシも男子は息子の義興しかいないからな・・あまり戦に行かせたくないんじゃが・・娘は久秀に嫁いでしまったし・・万が一に備え養子も考えているが・・」

長慶は女受けが良さそうな感じだったが意外にも正室だけで側室はおらず実子も二人だけであった。  
愛妻家だったのだろう。

ただ二人でも不安だから養子の迎え入れを考えているとのことであった。

（養子か・・）

景虎も思わず考えてしまった。

（でも・・まだ早いかな・・）  
考えるのはやめた。

しばらくして誰かが茶の間に入ってきた。

「すみません・・遅くなりました・・」

空色の爽やかな花菱の模様の直垂を着た育ちの良さそうな利口そうな若者であった。

「おお・・来たか・・」

長慶がにこやかな顔になった。子煩悩である。

「紹介しよう・・息子の義興じゃ・・まだ17なんでな・・お手柔

らかなにな・・・」  
景虎も笑いながら挨拶した。

ところが一緒にもう一人誰が入ってきた。

「・・・なんじゃ・・・久秀も結局来たのか・・・」

長慶がなぜか少し都合が悪そうな顔をしていた。

50前後の初老の男である。ただ顔立ちは端正で彼も年齢不相応な派手な桃色の直垂を着たお洒落者であった。

「義興様の後見ですからな・・・どこへでもついていきますぞ・・・今日は特に素敵なお客様がいらつしやると聞いておりますのでな・・・」

口調も冗舌であった。

義興も少し困った顔をしていた。

「・・・お・・・こちらの姫君が景虎様でございますか・・・これはこれは・・・」

景虎は良くわからなかったがぺこりと挨拶をした。

「・・・あ・・・すまん 景虎殿・・・ワシの長い付き合いの部下で当家の重臣の松永久秀だ・・・今は義興の後見人をやってもらっている・・・そなたが女性である件は口外しないように言っているので大丈夫だ・・・」

久秀も頭を下げた。

「越後の麗しき姫様にお会いできて光栄であります」

「い・・・いえ・・・もう姫君なんて言われるような年ではございませんので・・・」

景虎は遠慮気味に返した。

「いやいや、私から見れば十分に麗しき姫様でございます・・・はっはっは・・・」

そしてじろじろと品定めするように景虎を見つめてきた。

なんか景虎は気恥ずかしくなってしまうた。

長慶と義興もなんか気まずそうな顔をしていた。

「景虎殿 もしお時間あれば茶会や歌会など如何がでござろうか？」  
茶会や歌会は興味があつたが直感的に景虎はこの松永久秀が苦手であつた。

真つ直ぐ遠慮なく入ってくる感じと、なんていうか年不相応にぎらぎらしている感じが苦手だつた。

丁寧に断つたが今度は夜の食事でもどうかと引き続き聞いてきた。

景虎の困り切つた表情に長慶も気が付いたようである。

「久秀・景虎殿も忙しいのであまり無理を言わぬよう・・」  
と助け舟を出してくれてようやくいっただんは引き下がってくれた。

しかしそれでもまた久秀は続けてきた。

「景虎殿・いろいろあつてご結婚されていないと聞いておりますが男性の部下はいらっしゃいますかな？」

(何を聞いてくるのやら・・)

景虎も困り切つていたが長慶も義興もなぜか困り切つた顔をしていた。

「私以外は男性ばかりですが・・」

「左様でございますか・・なら渡したいものがありましたな・・男性の家臣の方全員是非一読を推奨して頂きたい。私が書いた本ですが・・非常に為になるかとおもいます。これを読めば寿命が3倍になりますぞ・・私の飼っている鈴虫はこれで3年生きましたぞ・・」  
普通の鈴虫の寿命は1年である。

長慶と義興親子は今度はなぜか下を向いてしまった。

(・・???)

景虎は久秀が何を言いたいのかさっぱり分からなかったが。

久秀は箱に入った書物を景虎に渡した。

「え・・ただ景虎殿は読まないでください・・」

久秀はなぜか念押しした。

「・・・え？」

景虎はきよとんとしてしまった。

自分にくれるのではなくて家臣に渡して自分は読むなどいう・・  
珍しいことをすると・・

長慶も義興は下を向いて恥ずかしそうな顔していた。

「この本の真の素晴らしさは読んで実践することにあります・・私  
はこれで日々の健康を保っております。部下からは是非ほどこきを受  
けもし私に興味があつたら遠慮なくお声をおかけください」

「・・は・・はい・・ありがとうございます」

景虎はさっぱり意味がわからなかったがとりあえず書物を受け取っ  
た。

「では失礼！」

と久秀は年甲斐も無く元気良く退出していった。

長慶も義興親子は苦りきつた表情をしていた。

親子はなんかひそひそと少し相談したが

「景虎殿・・その書物は読まないで捨てられたほうが良いかと・・」

長慶が小声で言ってきた。

「え・・？せつかく頂戴したので・・」

景虎が言ったが

「絶対そなたは読まないように・・悪書だから・・」

と長慶が意味深なことを言った。

「久秀は頭は切れるが自分に正直すぎる男なんで他人様を無視して  
平然と押しつける強圧な面があるんじゃない・・少し不愉快だったかも  
しれんが勘弁してくれ」

長慶もため息をつきながら言った。

挨拶が無事終わり景虎は手土産の越後名産品などを置いて三好屋敷  
をあとにした。

何事も無く無事終了し関東管領の件も長慶のお墨付きを得たのは大  
きかった。

輿に載つて越後屋敷に戻っていったがその途中そういえば・・と思  
い出し久秀からもらった書物の入った箱が気になった。

(長慶殿や久秀とやら私が読むなって言っていたが・・・女が読むな  
つてことか・・・？悪書と言ったが・・・兵法書かな？兵法書なら読み  
たいな・・・)

景虎は時間があったので開けてみることにした。

中から出てきた書物は「性技指南書」と書いてあった。

(・・・なんだろう？)

景虎はぱらぱらとめくり呼んでみたが・・・最初の1項目を読み終わ  
る前に恥ずかしくなって読むのをやめた。顔が本当に赤くなった。  
本当に名前の通りの本だったのである。

(なんでこんなもの私に渡して越後衆に読めって言ったんだろう・・・  
私が結婚していないから余計な勘違いをしてくれたのだろうか・・・  
それとも私に暗に相手をしろと・・・)

気分が悪くなってきたので考えるのをやめた。

越後屋敷に戻ると千坂景親に渡して処分するように言っておいた。  
せっかく三好の重臣からもらったのに良いのですか・・・と千坂が景  
虎に確認したところ怒り気味に焼却するようにと念押しされた。

(何をかんしゃく起こしてるんじゃ・・・)

千坂は戸惑ったがそうは言われたものの遺棄してまた問題になるの  
が嫌であったので一度重臣たちと相談してから決めようと悪気も無  
く箱を開けて中の書物を思わず読んでしまった。

男の千坂からすればあまりの面白さにその後、越後家臣団同士全員  
で景虎に内緒でまわし読みをしてしまった。ただ女の景虎からすれ  
ば不快極まりないのも事実であったが。

松永久秀は後に戦国の三大梟雄さんだいきょうゆうと呼ばれ(梟雄・残忍で強い人 残  
りの二人は斉藤道三と北条早雲)あの織田信長にもこの老人は全く  
油断ができないと言わせしめた男である。彼の三悪事は天下に名を  
轟かせた。

一つ目は三好一族への暗殺と謀略。

二つ目は將軍義輝暗殺。

三つ目は東大寺大仏の焼討である。

しかしその一方美男子で優雅な人物であつたと言われ、連歌や茶湯にも長けた教養人であり、先ほどの性技指南書や日本発のクリスマス休戦、安土城の原型とも言われ天守閣構造を持つ初めての城、多聞山城を建築した先進的な面を持つ人物であつたことも紹介しておきたい。

## 將軍家

続いて別日程で義輝から誘いを受けていたので早速再度室町御殿に向かった。

意外なことに今日は自分しかいないので普段着で気楽にいらっしやれとの連絡が来た。

（長慶殿が手を打ってくれたのな・・・）

と思いつながら室町御殿に入ると義輝が相変わらず友好的に迎えてくれた。

今日は珍しく女中と一緒に迎えてくれたと思つたら義輝の正室と母親がわざわざ景虎を出迎えてくれたのであった。逆に景虎は恐縮してしまつた。

ちなみに義輝の正室は絶姫と言ひ近衛植家の娘で近衛前嗣の姉にあたり、義輝の母親の慶寿院は植家の妹である。

この二人が今日はいたので普段着である女装で来るように依頼があつたのだらうと察しがついた。

実は今回義輝と長慶の訪問が逆になつたのはもうひとつ理由があつた。

神余親綱から義輝が結婚した件を聞き、彼の正室への越後土産を追加で渡すため本国から大急ぎで取り寄せるための時間稼ぎでもあつた。

景虎はまず越後土産を渡すと早速義輝と交渉に入ることにした。

関東管領の件と信濃の件とそれに関する裏書御免、越後国人集や関東国人衆向けの塗輿御免の権利をお願いした。

義輝は諸国の大名に將軍家再興のための手助けを依頼していた。

もちろん暗に打倒長慶なので長慶はそれを不愉快に思つてはいるが、景虎もしきり、そして武田や北条にも依頼を出していた。

「関東管領の件と信濃の件は武田と北条から反発を受けている・・・」



と義輝は言った。予想通りである。

しかし実際に都まで来たのは越後だけなのは義輝も充分に認めていた。

関東管領の上杉憲政を保護しているのも景虎である。

北条は実質的に関東管領を追い出し武田はその同盟者である。

しかも武田は信濃では自分の和平勧告の御内書を無視した。

彼らは將軍家に対して従順とは言い難かった。

景虎もこの件で少し自分の対応に不満を持っていることを義輝も承知していた。

「・・・そなたに任せても良いとは思うのだが・・・」

義輝も困っていた。

景虎も今日この場で即答がもらえるなど考えていなかった。

おそらく長慶に相談してから決めざるをえないであろうと・・・しかし既に長慶の方は手を打っておいた。今回は越後軍も連れてきている。

義輝に手荒な真似をするつもりは毛頭なかったが・・・義輝が断れば朝廷に圧力をかけてでもとにかくこの件は譲りたくなかった。義輝の母方の実家の近衛家にも押しかけようとも真剣に景虎は考えていたのである。

ただすぐに結論が出るような簡単な問題ではないのも承知していたので近く回答がもらえればと再度深々とお願いした。

裏書御免も將軍や管領だけの権限で書状を包む封紙に差出人名を書かなくても良い権限である。

これも関東管領の問題と一緒の扱いであったので義輝も回答を保留して返答を待つことにした。

塗輿御免は少し意味合いが違い漆色の輿に乗る権利を得ることである。

どちらかという越後国人衆向けに景虎が一番上であると暗に伝えるためのようなものであり視覚的なものであるが。今だに暗に景虎を同盟者程度の認識しかもっていない越後国人衆に自分は朝臣であ

り格が違うことを主張したかったのである。

塗輿御免は認められた。ただ景虎は関東管領の権威回復、関東の国人衆にも利用しようともちろん考えていたが。

これらの件は義輝から別日程で誘われている夜宴の時までには回答したいと義輝は言った。

景虎は再度義輝に深々と礼をした。今はひたすら辛抱強く待つのみである。

それとは別に

「・・・実はちよつとお願いがあつてな・・・母上や妻が景虎殿との時間が欲しいと言つてきてな・・・少し時間をもらえるかな？」

景虎は快諾した。母親や妻　娘を通しての懐柔は景虎の得意とするところである。

越後ですでにそれを実践済である。

義輝の妻や母親という権威者との交渉は大きな機会であつた。

関東管領の件が難航した場合の近衛家に行く手間が省けるからである。

偶然ではあつたが義輝正室向けの土産が思わず役に立つことになつた。

さつそく義輝正室絶姫と義輝実母の慶寿院との面会が始まつた。

絶姫は関白近衛植家の娘で景虎と年が近い大人しい色白な姫君らしい姫君であつた。

慶寿院は戦乱の世を生き抜いている女性らしく芯のしっかりした女性であつた。

彼女も近衛家の出身で植家の実の妹であるが失礼な言い方ではあるが公家の出身らしくなく積極的に物怖じしない感じの女性と景虎は思った。

噂では彼女の兄、植家とともに息子の義輝を助けるために積極的に国政に参加しているとのことであつた。

「このたびは遠路ご苦労様です・・・」

慶寿院が景虎にねぎらいの声をかけた。

「義輝から聞いていましたが・・・まさか越後の守護があなたのような麗しき姫様とは・・・正直驚きました・・・」

慶寿院も素直に驚きを表した。

「・・・ありがたきお言葉・・・頼りなき細腕ではありますが足利將軍家に忠節を誓う次第です」

景虎は深々と頭を下げた。

「義輝からの上洛要請で都まで来たのはあなたと尾張の織田だけでした・・・將軍家の権威のためにこれからもよろしくお願いいたします」

「ありがたきお言葉・・・」

景虎は再度深々と礼をした。

(・・・あの織田信長も再度来たのか・・・)

景虎は慶寿院の言葉に感謝しながらも内心信長の件は驚いた。

尾張の半分の小大名にもかかわらずなかなかの忠義者だと。

その後は5月の午後の陽気な陽だまりの中でいろいろな雑談をした。景虎は今日も長慶の京都屋敷訪問時と同じご愛用の紅地雪持柳繡襟辻ヶ花染胴服を着ていたが慶寿院たちはこのような姫様が守護とはなかなか信じられないわと驚きながらも景虎に興味を持ってくれた。景虎は慶寿院と絶姫と親睦を深めることによつて義輝との交渉がうまく進むよう二人に本音で自分のいろいろな話をした。

自分が体の弱い兄に代わつて家臣たちに後押しされて成り行きで越後守護になつてしまつた経緯や具足を着て馬に乗り戦場に出歩いていることを話した。

景虎は外見は華奢なのでそのように見えなかったのか慶寿院と絶姫は再度驚いていたが。

武田軍の前に敵將の顔を見せると勇んで飛び出した時は甲斐軍が自

分を見て仰天してみな口を開けていて面白かったなどおかしく伝えた。

もっとも実はこのときは普段、戦の前に飲む怖さを紛らわすための酒の分量を間違えた上での行為で、しかもこのときは好みの敵將に声をかけるおまけまでしてしまい家臣団から大目玉を受けたこと話した。

慶寿院や絶姫も景虎の見た目に反して勇猛な面に驚かされながらも女性らしい一面の行為にも素直には笑ってくれた。

ただ女性であることは実は越後以外では隠していることは伝えておいた。あまり口外されて欲しくなかったのも事実であった。敵である武田軍の中でも自分のことはおそらく士気低下を防ぐためにかん口令がしかれていることも話した。

場合によっては男装したり親衛隊の重臣に影武者をやってもらったり伊勢姫と偽名を名乗ったりしていることも伝えた。

伊勢姫はちなみに自分の好きな伊勢物語から拝借したとも伝えた。

伊勢物語の件の続きではないが景虎がそれ以上に和歌や書物に興味があることも話しをした。

源氏物語や恋物語の書物類も好んでよく読み、また平安時代の武将の源義経公が好きで具足も彼の愛用品を真似たものを使っていると言った。

それであればと絶姫が景虎の好きな義経を歌った義経記を舞えると言うのでせっかくなのでありがたく見せてもらうことにした。音楽は取り急ぎ景虎が舞いに合わせてそれらしく琵琶を弾いた。

ちなみに景虎は琵琶が得意で愛用の琵琶は朝風と言いつても上杉神社で大切に保管されている。

慶寿院や絶姫も景虎が普通の姫君、女性であることがわかり好感を持ってくれた。

景虎も慶寿院や絶姫が自分を普通の女性として見てくれたようで安

心した。

今日の面会は都での華やかな女中の集いであった。

慶寿院は義輝が景虎に興味を持っているのを知っていたのでどのような人物であるのか興味があつたが今日会ってみて以外に普通の麗しき姫君であつたのは正直驚きであつた。

景虎は見た目は良いので男性にはそれほど苦勞するようには見えなかつたので景虎がいまだに独身だつたのは少し不思議であつたが跡継ぎの問題で越後国が乱れることを判断しての苦渋の選択をしているであろうと理解した。

自分も息子義輝のため女だてらに政治に口を挟み、景虎も細腕で越後を治め、將軍家に忠節を誓い他国と争つていながらも、わざわざ謁見に来ている忠義者である。

そう思うと慶寿院は彼女に何か力添えをしてあげればという感覚が湧いてきたのであつた。

慶寿院が何か力沿いが出来れば・・と声をかけてくれたので景虎は義輝様に関東管領の件の助力を頂ければとお願いした。

慶寿院は快く応じてくれて全力を尽くすと約束してくれた。

また慶寿院からも甥の近衛前嗣が景虎に会いたいと言つており近く紹介したいとも言つてきた。

もちろん慶寿院にも狙いがあつた。

景虎の武力を背景に関東管領の力を再興し將軍家や朝廷の権威を関東で回復させその勢いを中央に反映させることである。

慶寿院は前嗣を今度義輝と予定している夜宴の時にでもお邪魔させると言つた。

近衛前嗣は24歳の若者であるが既に関白で左大臣の経験もあり義輝の甥にあたり朝廷の権力者であつた。また義輝の正室絶姫の実の弟である。

景虎も將軍家だけでなく朝廷の権力者との親睦も図れて一石二鳥と

考えた。

話もようやく一区切り付いたころ義輝が將軍職の時のような堂々とした雰囲気ではなくこっさり何うようにやってきた。

「いやいや・・随分長いこと私の時よりも盛り上がっていたようになにより・・」

全員大笑いした。

この日は景虎にとって得る物が大きい日であった。

慶寿院のような女性は景虎にとっても心の支えになった。

別れ間際にまた上洛する時は遊びに来てくだされと二人からお声を頂戴した。

景虎も約束したがこの約束はこの後起こったある事件のため果たされることはなかった。

その後越後屋敷に前嗣からの書状はすぐに来た。今度の義輝の夜宴に行くのでよろしくと。

景虎殿好みの色小姓も連れて行きますのでと。

自分好みの色小姓を連れて行きますには少し苦笑いしてしまつたが。

数日後早速景虎は義輝から招待された夜宴に出掛けた。

義輝と前嗣が書状通りに景虎に気を使ってくれて本当に色小姓を連れてきてくれていたのにはうれしくも少々閉口したが・・

最も色小姓と言つても彼らだつて若い少年武士の中でも優秀で美貌に優れた武人の達人で口が堅いので景虎の秘密の保持に関しては景虎はあまり気にしなかつたが。

前回義輝にお願いした件であるが慶寿院たちとの話が功を奏したのか裏書御免の件は許可が出た。関東管領、信濃の件も条件付だが許可が出た。

条件とは將軍の関与を明記しない点であつた。景虎の判断で・・と

のことになったのである。

おそらく義輝の武田 北条への配慮であろう。しかしそれでも景虎には充分であった。深々と頭を下げ礼を言った。都までやるばる来た甲斐があったのである。

関東管領の価値は10万の兵力に相当すると信じていた景虎は今回最も欲しかったものが手に入りご満悦であった。うれしさのあまり今晚は久々に思わず深酒をしてしまった。

ついでではないが相伴衆と言う官職も義輝から頂戴した。殿中における宴席や他家訪問の際に將軍に随従・相伴する人々に与えられ本来は管領や有力守護大名に限定されていたがこの頃になる景虎のように在京ではない大名にも与えられ役職としては希薄化して大名の格式を示すようなものにならわってはいしたが。

もともと在京時には將軍の宴会相手が多かった景虎には適職ではあったが。

ちなみにあの長慶も前年の永禄元年（1558年）に任じられているが彼は生真面目にその身分的権威をもって管領の役職を代行して幕政の実権をさらに強固なものにしようとしていた。

義輝との雑談のとき長慶の話が出てきた。長慶は義輝を不快に思っていたが義輝もやはり長慶を目の敵にしていた。

義輝の本音は長慶を亡き者にして三好家の勢力を一気に落とし自分がそれに変わりたいとのことであった。事実、実は義輝は以前何度か長慶に対して刺客を密かに送っていた。

景虎は義輝にこのようなやり方をどう思うか聞かれたとき景虎は義輝に対して返答に窮してしまった。

（あまり良い方法ではないかと・・・）

と危うく本音を言いそうになった。

でも事実そんなに簡単に事が運ぶとは思えなかったのである。

例え長慶を討ったとしても長慶の息子の義興も若くて控えめな風貌

に反して武勇に優れていると景虎も噂を聞いていた。長慶の右腕と言われる重臣のあの松永久秀もいる。長慶の弟たち三好義賢、十河一存、安宅冬康らも豪奢勇猛と有名であった。

ここは無礼を承知で言ってみることにした。

「確かに上様と長慶殿とはいろいろあつたようですが、結局長慶殿は上様を起てておりますので私は彼は忠臣だと思えますが・・・」  
義輝は少し黙ってしまった。

（余計なことをまた言ってしまったか・・・）

景虎は義輝の黙った顔を見て後悔した。酒を飲むと景虎も少し思慮浅くなる。

しかし義輝は意味深に言った。

「そうであったな・・・景虎殿の言うことももつともだな・・・」  
ほつと景虎は胸をなでおろした。

「長慶とはいろいろあつたが・・・確かに奴は私を何度も許しているからな・・・」

義輝も少し考えているようであった。

「義興殿や久秀殿と親しくされて長慶殿の力をうまく使ってみたらどうでしょうか？」

余計なことをまた言ってしまった。

ただこれは景虎の本音であった。関東管領なる以上関東に集中したい。

自分は都に興味がないので都は落ち着いていて欲しかった。

「うむ・・・」

義輝は少し考えていたが意外な一言を言ってきた。

「実は義興殿とは既に親しくしているんじゃないか・・・今日呼べばよかつたかな・・・ただ呼べない理由もあつてな・・・」

義輝と義興が既に親しくしているのは以外だった。

そういえば義興が和歌や茶道にも優れ都の文化人の話題になっていることは景虎も聞いていた。

「久秀殿には会ったか？」



「・・・はい」

思わず顔を赤らめてしまった。

義輝も察したようで大笑いを始めた。

「あの妙な書物をもらったのか・・・ははは・・・」

景虎は年甲斐も無く少し赤面しながらうなずいた。

しかし義輝は笑うのをやめると厳しい顔で言った。

「・・・あの老人な・・・腹黒い・・・何を考えているかわからん・・・」

意外な言葉だった。

景虎は単に久秀をいやらしい色好きな老人かと思っていたのだが。

「奴は口が冗舌で見た目はさわやかで茶人気取りだが・・・油断ならぬ・・・」

義輝は厳しい顔で言った。

実は義輝が長慶と和睦したのは久秀が自分を都に二度と入れないよう画策していると聞いたからであつた。

長慶と久秀が自分の処遇の件で口論になっていると義興から聞いたからである。

二度と入れないように・・・とは久秀は義輝を葬ろうとしているとのことであつた。

久秀は義輝が以前長慶に何度か刺客を送りしかも反三好の態度を改めないのを口実に義輝への厳罰、報復を狙つたのであつた。長慶も久秀の言い分は受け入れたもの將軍の処分、特に暗殺には反対したという。長慶は將軍殺しの汚名を着たくもなかつたし別に將軍家打倒など興味がなかつたからである。三好一族が繁栄していればどうでも良い問題であつた。

久秀は重臣としての立場から彼の安全を口実に主張したとのことであつた。

しかしそのおかげか義輝からの刺客から義興を守るとの名目で、それ以降義興の後見人、護衛に久秀が付くようになり義輝は義興に近づくことが難しくなつたという。

「久秀のやつ私が義興に近づくのを防ぐために義興の後見人になつ

たのであろう・・・私が義興に刺客など送ることなどないのを知っているくせに・・・」

義輝が不愉快そうに言った。

初めて聞いた話であった。

「だから私も今は考えを改めて長慶と歩調をあわせることも考えている・・・義興とも親しくしたいからな・・・しかし久秀は三好の重臣で三好一族内での発言力も大きい・・・長慶も久秀に面と向かって反対し難い時も今後で出てくるかと思う・・・」

景虎は驚きもあつて黙って聞いていた。

「だから万が一に備えやはり他の大名に声をかけ続ける必要はある・・・少し矛盾しているが・・・そのためにそなたには今までどおり世話になりたいと考えている・・・」

都の権力闘争の奥深さに驚きながらもあまり関わりたくないとも景虎は思った。

しかし同時に將軍家の現状にも同情した。義輝も自分の実力の無さは重々承知しているのでこのような方法しか無いのである。

それと同時に長慶の將軍を葬ろうとしている人間が今後出てくるであろうという話しも思い出した。

あの松永久秀がそのような器には正直見えなかった。

ただのやらしい色好きな男にしか景虎は見えなかったのだが・・・  
暗い雰囲気を打ち払うように義輝が話を変えた。

「そう言えば彼は遅いな・・・」

義輝は言った。

「・・・？彼？」

しばらくして間を詠んだように若者が突如入って来た。

「いやはや 盛り上がっていますな・・・遅くなりましたすみません・・・」

「おお・・・前嗣殿・・・今ちようど噂をしてましたぞ・・・」

義輝がうれしそうに声をかけた。

「景虎殿 先日母の慶寿院から話を聞いていると思うが甥の近衛前嗣殿じゃ・・・」

思い出した・・・少し景虎は驚いた。

公家と聞いていたが直小衣ではなく直垂を着て武士のような雰囲気であつたからである。

ただし24歳の若さで関白で元左大臣という朝廷では最高位クラスの人物であつた。

景虎は深々と礼をした。

慶寿院と絶姫の件は礼を言った。

「景虎殿 おば上より話は聞いております・・・お互い酒の席ですし気楽にやりましょう・・・」

前嗣も義輝同様友好的であつた。

「前嗣殿にも將軍家、及び朝廷の権威回復のためにいろいろ動いてもらつていてな・・・今回景虎殿の関東管領の件では朝廷関係には彼にも掛け合つてもらつた・・・今後も色々あると思うのでみなで仲良くやりたい、いや力を借りたい。乾杯しよう」

3人は今後に期待して乾杯した。

前嗣と景虎はこの言葉通りこの後、関東方面で共に行動することになる。

ただこの時景虎は関東管領の件が解決して安堵していたあまりと酒のせいで前嗣の狙いを聞くのを忘れてしまった。

酒宴もたけなわになつた頃

「景虎殿は和歌が好きと聞いているので今度催される和歌会に招待しましょう」

前嗣は朝廷の歌会に誘つてくれた。

「あと何か欲しい歌の資料や巻物があれば前嗣殿に言っておけば手配してくれるので遠慮なく・・・」

景虎も遠慮なく頂戴することにした。

ちなみ織田信長の話題も出た。もつい最近まで都に来ていたが偶然景虎と行き違いで帰ってしまったという。ただ彼は景虎と違い弱小大名ゆえに尾張への帰路で敵対する大名の野武士に襲われて九死に一生を得たらしく義輝も彼をそのような危険を冒してくる忠義者と褒めていた。

弱小大名だと都に来るのも命懸けなのである。

景虎は信長に改めて感心した

酒宴は夜通し続いたと言う。

ちなみにこのときの様子は前嗣の日記にも残されており義輝と景虎は色小姓と徹夜で大騒ぎしていたと書かれている。前嗣は体が持たないので二日目は遠慮したと書き記されている。

ただ景虎も体が丈夫ではなかったのでこれが原因かわからないが体調を崩して寝込んでいたとも記録されている。

## 都の人々

体調を崩したせいもあってしばらく景虎は都で休養した。

関東管領や裏書御免の御内書は幕府内の手続きなどで6月頃までかかるという。

越後国内が心配であったが信濃も関東も今回は大人なしくしいてくれたのが幸いであった。

足利將軍家の實力は既になかったが権威はまだまだ健在であった。もともと武田晴信や北条氏康から見れば若造・景虎の幕府や朝廷への交渉への腕前を拝見しているというのもあったであろうが。

景虎は今回も堺の蔵田五臓左衛門の越後屋敷に遊覧にでも行くこうかと思っていたが体調が優れないのと今回は特に案件がなかったので家臣団のみに行ってもらった。

彼らの親睦や気分転換も兼ねてである。前回同様千坂景親が影武者で景虎役である。

宇佐美定満や直江景綱はせっかく堺に行くのであれば鉄砲の調達を提案してきたので許可を出した。

景虎は実は鉄砲の有効性を認めており義輝から「鉄放棄之方調合次第」という巻物を今回の上洛時に下げ渡されている。これは元々豊後（大分）の大友義鎮から義輝に進上されたものである。

こうして景虎役の影武者千坂を筆頭に宇佐美 直江親子 中条藤資 柿崎景家夫婦 齊藤朝信夫婦 北条高広 色部勝長 本庄繁長、さらには女中のお春と花たちも堺に嬉しそうに出かけていった。

留守は景虎と本庄実乃 金津新兵衛 京都留守役の神余と親衛隊のみと越後屋敷は一気に静かになってしまった。

景虎は静かに休んでいると何か庭先が騒がしい。

何事であろうかと思っていた矢先突然弥太郎が困った顔をしてやっ

て来た。

景虎に来客が来ているという。

尾張の織田信長の使いの者と言っているが妙な格好をしており嘘くさいので追い出そうとしたが親書を手渡ししたいと頑として引かないとのことであった。新兵衛と実乃が景虎本人は堺に出かけていて不在であるに対応にあたっているがどうしても景虎本人が帰ってくるまで帰らないと座り込んでいるという。

弥太郎は力づくでその妙な来客者を追い出しても良いかと景虎に相談に来たのであった。

(妙な格好・・・どこかで会ったような・・・??)

景虎も以前会ったような気がしたが思い出せなかった。

ただ信長が敵を油断させ欺くために妙な格好をしている件はすぐに思い出した。

わざとやっているのであるので弥太郎や親衛隊、新兵衛と実乃にはこの妙な使者を丁重に扱うように伝えた。

ちなみに桶狭間の合戦以前の尾張の信長はそれほど有名ではなかったのである。

景虎は信長には会ったことはなかったが自分と同じく義輝に上洛して謁見している忠義者と認めていたので信長が自分宛に親書を送ってくれたことは嬉しかったが自分が出て受け取るのには躊躇した。

家臣団の心配もあり、あまり自分が女であるとの事実が広まるのは嫌だったのである。

「弱ったな・・・信長殿の親書は受け取りたいから追い返すわけには行かないし・・・」

影武者の千坂がいないときは時期が悪かった。

「千坂を呼び戻しますか？それから出直してもらいますか？」

堺からであれば1日で帰って来れる。

「・・・うん・・・」

そうしてもらおうかと考えたが出直しを要求するなど無礼に思われ

るのもいやであった。

景虎は少し考えた。

「・・・そうだ！」

景虎は妙案を思いついた。

自分が出て対応することにした。

「・・・いいんですかい？」

弥太郎がげんそうな顔をした。

「あの技があるので大丈夫・・・」

と悪戯っぽく言った。

「あの技・・・??」

弥太郎は不思議そうな顔をしていた。

使者は早速広間に通された。

新兵衛や実乃は景虎から信長のやり方の相手を油断、欺くためにわざと妙な格好をさせている件を知らされて一応納得はしたが事前に日程調整もせずいきなり押しかけてくるやり方に不満気だった。

景虎もそれもおそらく信長の自分を試しているのか尾張の小さな礼儀知らずな田舎大名と思つて気にしないことにした。

新兵衛や実乃、弥太郎、秋山源蔵、戸倉与八郎たちが不満気な顔をしている中、信長からの使者は堂々としていた。

景虎は普段着のまま広間に入ってきた。

信長のからの使者は驚きもせず深々と景虎に礼をした。

景虎は今日は景虎本人が不在なので景虎公の姫君の伊勢姫が代わりに信長公からの親書を受け取るのとことでそれで収めようと思つたのであった。

自分は景虎公の姫君の伊勢姫と名乗った。

信長の使者は突然の訪問に侘びを入れたあと

「景虎様宛の信長様からの親書を持ってきました前田慶次と申しま

す

と名乗った。

「麗しく武勇に優れた伊勢姫様にお通しして頂きまして誠に光栄であります」

と言った。

景虎も

（伊勢姫の武勇？・・堺の件を知っているか・・）  
察しがついた。

景虎はお茶を飲みながら思い出そうとしていた・・この男見たことあると・・

慶次は続けた。

「それにしても越後屋で私が声をかけた売り子の可愛い娘が景虎様の姫君とはまこと驚きであります・・」

慶次が不思議そうな顔で言った。

景虎は思わず咳き込んでしまいあやうく茶を噴き出しそうになった。景虎が堺の越後屋で店先に立っていたことなど夢にも思っていない新兵衛や実乃、弥太郎、秋山源蔵、戸倉与八郎たちは

（何をこやつ言ってるんだ・・？）

と不思議そうな顔をしていたが。

景虎は思い出した。前田慶次は景虎が越後屋で売り子に変装していた時に対応した男であった。

（しまった・・裏目に出た・・）

と思ったが景虎はしらを切ることにした。

動揺していたが落ち着いた振りをして

「慶次殿・・景虎殿は堺に出かけており今日は不在だ・・信長様からの親書は私が代わりにありがたく頂戴したい、景虎公も喜ばれるであろう・・信長様へは今後もよろしくお願いしたいとお伝え願いたい・・」

慶次は

「わかりました・・こちらこそ両家の友好のため宜しく願いました



します」

と嬉しそうに言った。

「越後屋の件は人違いであろう・・・」

景虎は落ち着き払って言った。

慶次は失礼いたしましたと詫びを入れた。

内心はそんなはずはないのだが・・・と思っていたのだが。

景虎は後日こちらからも御礼の親書を送る旨を伝えた。

慶次も安心したのか帰って行った。

「それにしてもあの男　越後屋の売り子と姫とを間違えるなんて相当眼が悪いな・・・」

弥太郎が呆れていた。

「今流行の眼鏡とかいうやつを買った方が絶対良いな　あやつ」  
源蔵も笑っていた。

「あのままじゃ間違つて味方を討ちかねないな・・・」

与八郎も笑っていた。

景虎は黙っていたが・・・

一方慶次は旅籠への帰りの道中に伊勢姫はなんで越後屋の売り場にいたのかいろいろ考えていた。

堺で一緒だった連れの者に景虎殿が堺に外出中で会えずにあの伊勢姫、越後屋の売り場の娘に代わりに会つたと伝えると

「ただの物好きなおてんば姫なんじゃないですか？馬上で具足を着て長槍を振り回すのがお好きなのですか・・・」

と気にも留めていなかった。

むしろ両家の友好が深まった、信長様も喜ばれるであろうと素直に喜んでいた。

不思議そうな顔をしている慶次に

「むしろあの時本当にお茶屋に連れて行っていたら外交問題になつていましたぞ」

と笑いながらあまり冗談にならないことを言っていた。

「確かに・・・」

慶次もあの時の事を思い出して思わず苦笑いしてしまった。慶次も忙しい。

とにかく両家の友好という大任を無事果たした以上、来週義輝にせっかく呼んでもらった歌会に尾張の顔として参加するために素晴らしい歌を詠みたいと思いだんな歌を詠もうか・・・と頭を切り替えた。

一週間後 堺からようやく千坂たちが帰って来た。

夜酒宴を開いて報告を聞くことにした。

堺は大都会であったとみな感心しきりであった。

直江娘や斉藤妻、柿崎妻らは南蛮船 南蛮人 キリシタン宣教師を見たのだいに盛り上がり過ぎており良い気分転換にもなったようであった。

宇佐美や直江からの報告によると堺は表向きは落ち着いており、以前堺の商人と散々もめた青芋の件も戦の噂の件ですっかり忘れ去られていると言っていた。

なんでも義輝の誘いによって摂津守護の畠山氏が長慶と仲違いして戦の準備をしていると持ちきりでそのためか鉄砲が入手難になっており思ったよりも少数しか購入できなかったとも言った。

もつとも景虎が伊勢姫の格好で堺で暴れたので越後国の評判が良くなくそれも鉄砲の入手難に環をかけているとも渋い顔で言っていたが。

景虎もその件はやりすぎたと反省していたが覆水盆に返らずである。

「堺では越後の伊勢姫は年甲斐もなくおてんばだと評判ですぞ」

と繁長が遠慮なく言うときさすがに景虎も膨れてしまったが。

年甲斐も無くは余計なお世話であろうと・・・

千坂の影武者演技も板についてきたようである

「千坂の奴わしらに命令しおるんじゃ・・・酒は控えめにしろって」

中条が千坂をからかった。笑いが起きた。

「阿虎様に言ってみろって」

色部が言った。

「・・・最近は何も酒を控えてられるようなので・・・今日はよろしいでしょう・・・」

千坂もうまく返した。笑いが起きた。

「あの町娘の名前を聞いて来いと命令されたときは参りましたが・・・」

繁長が遠慮なく続ける。

「おぬし・・・ばらすなよ・・・」

千坂が少し顔を赤らめていた。

大笑いが起きた。

「阿虎様なら自分から遠慮なく声をかけるって！阿虎様の影武者の修行まだまだ足りんぞ！」

北条が続けた。大笑いがまた起きた。

景虎はまた膨れてしまったが・・・

普段は遠慮しているつもりだって・・・遠慮しないのは酒を飲んでいるときだけだと・・・

なにはともあれ堺の方も越後商人の環境に異変が無いのは何よりであった。

ただ義輝の工作が功を奏しているのは喜べなかったが。

都の留守での報告は信長の使者が親書を持って来たと伝えたが誰も反応しなかった。

桶狭間合戦前の信長はまだまだ無名であった。

その後朝廷の挨拶にも向かった。正親町天皇や公家集への挨拶である。

越後の名前、力を世に示すためでもある。

土産も今回は多めに積んでいった。実はこれには裏があつて蔵田五郎左衛門から朝廷や公家衆に人気がある商品が畿内では人気が出るとの事で越後の各種物産の紹介を兼ねていたのである。

景虎お気に入りの純白の越後白布、信濃川の鮭や日本海の高産物、

うるし、ロウ、砂金はもちろんだが一番大事なのは越後の主力産物  
青苧の紹介だった。越後産の青苧を使った織物の売込みである。

景虎自ら越後産の青苧を原料とした小直衣を着て、その他色々商品  
説明しその効果があつてか越後の青苧を原料とした織物の最高級品  
は越後産に限ると宮廷でも話題になつた。

風通しが良く汗がべたつかないとの理由で評判が良く貴族の礼服は  
越後産の青苧から造られた物に限ると評判になつた。おかげで堺で  
も越後産の青苧は高級品の代名詞として取引されるようになった。  
堺では「越後」だけで高級品の代名詞として通じたという。

今回もご婦人方との交流も怠らなかつた。

個人的な息抜き楽しみ意外にも上記の越後名品の紹介の続きでもあ  
る。

しかし一番の狙いは都の公家集のご婦人は噂好きであつた。

日記にいろいろ書かれるのを防ぐため、自分の正体を書かれないう  
うに接近したのである。

事実いろいろご婦人の日記には書かれていて格好は良いが食べ方が  
下品など書かれた者もいるしあの織田信長も格好は良いが田舎臭い  
と書かれているとのことである。

景虎はこの交流が頂を奏したのかご婦人方の日記には

越後から長尾景虎が来た

としか書かれていないという。

しかしよほどおしゃべり好きだったのか義輝や天皇本人たちよりも  
長く時間をとっていたと記録されているのは以前述べた通りである。

最後に景虎は義輝に呼ばれていた公家衆との歌会に呼ばれた。

今回の上洛で締めを飾り景虎が最も楽しみにしていた行事でもある。

あの義輝以外にも前嗣や彼らと親交が深い都の公家、さらには都の文化人たちがいろいろ呼ばれているので桃色や紅色の小直衣を重ね着して烏帽子の中に髪を束ねて男装の麗人として出かけた。義輝 前嗣に挨拶すると彼らが親しくしている都の公家衆や茶人、文化人、僧侶に景虎を紹介してくれた。

しかしここで思わぬ者と遭遇してしまった。尾張の前田慶次も来ていたのであった。

慶次は景虎が今回来ていると聞きつけ挨拶に来たのである。

景虎は慶次を見て固まってしまった。慶次も景虎を見て口には出さなかったが驚いていた。

景虎は困った顔をしてしまった。言い訳が出来ないからである。

慶次も同様である。伊勢姫そっくりの女性だと思うが・・男装しておりが景虎と名乗っている。どういうことかと。

「どうなされた・・？お知り合いかな？」

義輝が景虎と慶次の思わぬ反応に声をかけた。

「い・・いや・・別に・・よ よろしくお願いします・・慶次殿」

景虎が慶次に挨拶した。

「こちらこそ・・よろしくお願いします・・景虎様」

慶次も挨拶をした。

なんか気まずい空気が流れていた。

義輝も何かを察したのか二人を離して移動しようとしたが

「ちよ・・ちよつとお待ちくだされ・・」

慶次が声をかけてきた。

騒ぎなるのは嫌であった。

景虎は慶次にそつと近づくと外から見えないように袖の中から慶次の手をぎゅつと握った。

慶次は驚いた。か細い女の手であると。

景虎はじつと困った顔のまま それ以上は何も言わないで欲しいと・・言わんばかりに慶次の手を握りしめたまま見つめた。

そして静かに言った。

「・・・慶次殿 後で少しお時間頂ければと・・・」

不覚にもじつと見つめられて少し慶次は恥ずかしくなってしまうた。

「・・・了解しました・・・」

二人は一旦その場を去った。

歌会が始まるまでにまだ時間があつたので約束通り景虎は慶次は二人だけで会うことにした。急遽茶室一室を手配した。景虎は茶を用意して慶次を待った。

「失礼します・・・」

しばらくして慶次がやって来た。

景虎の前に座ると礼をした。景虎も礼をした。景虎は慶次に茶を差し出した。

茶を差し出すと

「騙すつもりはなかったが・・・不愉快な思いをさせてすまなかつた」と景虎は慶次に詫びると烏帽子を脱いで中に束ねていた黒髪をはりどほいた。

慶次は黙っていた。

以前会った伊勢姫が目の前にいた。

「女だてらに守護をやる 国を束ねる 軍を率いるのは大変だからな・・・」

景虎は言った。

「家臣のみなも心配している・・・猛者揃いの他国衆に侮られてはならぬと・・・それに必死に答えているだけだ・・・」

景虎は無表情に言った。

「伊勢姫は私 景虎で 景虎は私 伊勢姫だ・・・」

慶次は黙ったままであった。

「女子の細腕で国を治めること心労察し余ります・・・」  
慶次は言った。

「公家のご婦人方からは信長殿は評判が良いので私の心情も察してくれるであろう」

景虎は言った。

慶次は黙ったままであった。

「信長公は妹想いな素敵な優しい方と聞いているが・・・」

景虎が公家衆のご婦人方から聞いた噂であった。

慶次は少しなんと答えるか迷った。

信長は普段は若干手荒いが部下には優しい。信長の実の妹 お市の方への信長の可愛がりようは尾張でも有名でおかげで彼女の嫁入りは当時としては遅い20歳を過ぎてからであった。

しかし信長は怒ると誰にも止められない。

慶次は信行の事を思い出した。信長の弟である。

信長に反逆し信長の怒りを買って殺された。

信長は身内であれ逆らうものには容赦しない。

(この事を話すかどうか・・・)

景虎を脅すつもりはなく真相を話そうと思ったままである。

少し迷ったが遠まわしに言うことにした。

「信長様は部下思いで妹様に優しい方ですが・・・怒ると怖いほど容赦しませぬ・・・身内であるうと・・・」

景虎は少し意味がわからなかったが好意的に受け取ることにした。

「妹想いか・・・りっぱだな・・・」

慶次は少し後悔した。誤った解釈を送ってしまったかと・・・しかし忘れることにした。

信長も武田晴信同様に自分に慕ってくる人間には優しくだったが逆らう者には熾烈その者であった。

晴信の比ではなかった。

景虎はこの時はまだ知らなかったが信長はこの後歴史に残る様々な事件を起こしている。

「しかし・・・」

慶次は続けた。

「私は信長様に仕える者・・・真実は報告しないとイケませぬ・・・」

「そうであるうな・・・」

景虎もうなずいた。

「しかし尾張では信長公とそなただけの秘密にしておいて欲しいな・・・」

景虎の女らしい頼まれ方に少し躊躇したが慶次は答えた。

「景虎様のご要望にはお答えしかねますな・・・」

景虎は女性ならではの悲しそうな顔で慶次を見つめた。

慶次は少し動揺し考えていたがなんとか返した。

「・・・しかし 伊勢姫様のご要望であれば・・・お受けいたしましたしよ  
う・・・」

慶次はにこりと少し笑いながら言った。

「・・・なら 伊勢姫の願いとのことでよろしく頼む・・・」

景虎も少しにこりと笑いながら返した。

「・・・そろそろ時間だ・・・行きましようか・・・」

いつの間にか時間がだいぶん押したよう慶次が景虎に言った。

景虎は髪を束ねると烏帽子かぶって慶次と会場に向かった。

歌会は豪華に行われた。

以前都を訪れた時も義輝と景虎は歌を詠みその腕前はお手の物だが  
そのときの歌は

義輝 「天地あめつちもただ一かたにおさまれる 君がためしや千代の初  
雪」

（初雪が降って白一色のよい景色になったが、これはあなたが世の  
中を平和にしてくれるというしるしであろう）  
いう歌に対して

景虎も 「昔よりさだめし四方に立ち帰り おさめさかふる千代の  
初雪」

（初雪がすべてをおおって白一色にしたのは、昔から定まっている



通りに、足利將軍の世に戻って、世の中が平和に治まり栄える証拠  
です)

風流の中に將軍を敬い、世の中の秩序を正そうとする景虎の少々古  
い心情が読んで取れる。

今回の上京時に読んだ歌であるが「祈恋」と言い

「つらかりし 人こそあらめ 祈るとて 神にもつくす わかこ  
ころかな」

(つらいと感じた人は祈りの際も恋する人を思うのと同じように神  
につくす、それこそが私のこころのありどころなのです)

と非常に風情のある雅歌(恋歌)を詠んで参加者を驚かせたと言わ  
れている。

景虎は義輝から欲しい和歌の書物があつたら前嗣に頼んでも良いと  
いわれた件は素直に甘えて前嗣の父の近衛植家から詠歌大概(藤原  
定家著 鎌倉時代の歌人)の写しを頂戴し、前嗣には和歌懐紙と三  
智抄という和歌集をお願いした。

前嗣も実は三智抄の事を知らなかったので余計に驚いたと言う。  
結局三智抄は見つからなかったが、和歌懐紙はすぐに景虎に届けら  
れたという。

一方前田慶次も文化人として名を馳せ 後年になるが諸般あつて尾  
張を出奔して自由人になったときの歌、亀岡文殊堂詠んだと言われ  
る5首の和歌を残している。

このようにいろいろあつたが都での生活はあつという間に過ぎ、6  
月頃、義輝からようやく関東管領 裏書御免 信濃の件の御内書が  
届き、こうして都での生活に終止符を打つときが来て越後に帰るこ  
とになった。

そんな時あの前嗣自ら越後屋敷を突然訪れて来た。

景虎は突然の貴賓の来客に驚いたが丁寧に対応した。

前嗣は関白であり朝廷の実質的な最高権威者である。

突然自分を越後に連れて行ってくれと言いだしたのであった。

これにはさすがの景虎も驚きと同時に難儀した。

来年に控えている正親町天皇の即位式で朝廷の最高権威者の関白が不在だと即位式の格好がつかないからである。当然朝廷も幕府も反対であろうと。

下手をしたら関東管領の件も台無しになりかねない。

今回の正親町天皇の即位式は実は非常に訳ありで前の天皇の後奈良天皇は既に3年前の弘治3年（1557年）に亡くなっていたのだが朝廷があまりの財政難で即位式を挙げられなかったのであった。そのため今回は待ちに待った即位式であり朝廷にとっては重要な行事であったのである。景虎ももちろん土産などを持ち込んでいたがこの即位式で莫大な献上金を出したのは西の王者、毛利元就と本願寺であった。両者はこの後戦国の雄として当然名を馳せることになる。

景虎も朝廷や幕府の権威回復のため前嗣が自分の関東管領の件でいろいろ動いてくれたのは認めていたがまさか彼自ら関東に下りたいとは正直予想外であった。

彼の秩序の回復を願う気持ちは痛いほど理解できたが彼は関白である。

結局来年の正親町天皇の即位式が無事終了してからで丁重にお願いした。

朝廷や幕府の反発を景虎が恐れたのである。

前嗣は景虎より6つ下の若い公家であるが公家らしくなく足腰も軽くまた血を少しでも見ると卒倒するといわれる公家衆においても血

書を自ら提出して景虎を驚かせた。

彼の決意はそれほど強かったのである。

血書には与力同然の覚悟やら景虎一筋に頼みたいなどと書かれていたという。

景虎も関白と一緒に関東平定の期待に答え、再度都に上洛し、将軍家の権威を回復したいと当時は真剣に考えていたのである。

都を出発する直前　さらにもう一人別の若者が突然景虎を訪ねて来た。

義輝の使いの者であると言ったが景虎は失礼ながら記憶になかったが・

会ってみると見覚えがある顔であるが・はてと。

ようやく思い出した。義輝や前嗣との宴会の時彼らが用意した色小姓の一人で、景虎が結構お気に入りだった若者であった。

仕官したので越後に連れてつてくれと言って聞かない。

景虎はちらりと家臣団を見回してみた。みなやはり冷たい視線であった。

「・・・どこかの間者（忍び）の可能性もあるのにそのような軽い気持ちで夜宴で会った小姓をつれて帰るなど・・・」

と直江や宇佐美も渋い顔であったが彼の信用できそうな態度、爽やかな容姿や切れ者な雰囲気にかけて結局連れて行くことにした。

どうしてこう情緒的なんだろう・・・と家臣団は呆れ果てていたが・

この若者は近江の国出身で河田長親と名乗り後に彼は越中　能登の戦で大活躍をして景勝時代も重臣として活躍するのである。

## 諸事情

景虎一行は半年振りに越後に帰って来た。

「お帰りなさいませ・・・」

留守役の長尾政景と姉の仙桃院夫婦一家が出迎えてくれた。

夫婦の子供たち、長男の義景、次男の喜平次、長女の華の三兄弟も一緒にあった。

幼い喜平次、華の頭を景虎は撫で回してあげた。

景虎は一家に出迎えと留守の礼を言った。

虎御前や天室光育、その他上洛時の同伴者の一族も出迎えに来ており春日山城は賑やかであった。

上杉憲政も今回は来ていた。やはり関東管領の件が気になるようでそわそわしていた。

甥っ子たちに折り紙や人形などの土産を渡し、留守役の諸将にも土産を渡した後、帰国早々であったが景虎は今回の留守役の者たちと評定を開いた。

まず長期間の留守中にも関わらず少数で越後を守ってくれたことに関して景虎自ら礼を言った。

都での交渉は大成功で自分が関東管領一任の件や信濃の支配に口出しする権利も得、裏書

御免の件や漆塗りの輿に載る権利、更には相伴衆にもなったことを伝えた。

憲政は関東管領の決定の権利に関しては大喜びしていた。

「大儀を得られた・・・北条から関東を取り返せる・・・」と

景虎も留守中も春日山城や越後が平穏だったのがなによりであった。武田晴信も北条氏康も今回は將軍に一応気を使ってか静かにしていたと言う。

「実態はともかくまだ面と向かって朝敵と呼ばれたくないんでしょ

う・・・」

と政景が笑いながら言っていた。

「関東管領の言うことを聞けばそのようには呼びませんよ・・・」  
景虎も笑いながら返した。

「素直に聞くような連中とも思えませんかな」  
栖吉長尾景信も言った。

「そつだな・・・北条はともかく・・・武田は素直には従ってくれない  
だろうな・・・」

景虎も少し沈み気味に言った。

「まあ そのときはワシらの力を存分に發揮させてもらいますがな  
！ハハハ・・・」

黒川実氏 新発田長敦の揚北衆が豪快に言った。

「ウン・・・よろしく頼む」

景虎も返した。

景虎にとっても留守中に晴信や氏康が静かだったのは何よりであったが越後国内も静かだったのが実は一番ほっとした。

今回留守役の選択は家臣団の係を配慮して決めた面もあった。

これを機会に家臣同士今までのわだかまりを捨てて歩調を合わせて  
もらおうと考えたのである。

景虎は最初は今回の留守役は揚北衆は中条藤資と黒川実氏、あとも  
う一人誰か監視を任せようと思っていた。

中条と黒川を選んだのは領土問題で彼らは不仲だからである。

一緒に過ごす時間をわざと作り交流を深めてもらおうと思ったので  
あった。

ただ中条が都に行きたいと騒いだだめ連れていかざるを得なかった  
ので中条と黒川を一緒にすることは出来なくなりこの件は持ち越し  
になったが。

監視は新発田長敦で彼は中条と黒川がもし争った場合に備えての仲  
介役であった。

新発田は後に川中島や関東戦線、越中で活躍し新参の揚北衆では本庄繁長とともに景虎の信頼を大きく得て行く男である。

栖吉長尾景信と上田長尾政景も彼らの父の代から不仲であった。これも領土紛争が絡んでいたからである。ただ両者とも越後国内の実力者で特に兵力の動員数では両者は越後軍の主力を占めていた。そのために自軍内でのいがみ合いはなんとしても避けて欲しかった。そこで揚北衆の中条と黒川のように危険を承知でこの二人も留守役にしたのである。

そのために万が一に備え上杉一門の上条政繁や山本寺定長、三条長尾の山吉豊守、下田長尾藤景までをも置いて監視に付けたのだが今回栖吉長尾と上田長尾は一緒にうまく過ごしてくれたようでも表向きは納まってくれたようであった。

今回の景虎の狙いは今後に対しての備えであった。

今後関東管領として活動する場合、越後を留守にすることが多くなり、越後国内の治安維持や不透明な越中、甲斐、奥羽方面に備えて強力な留守役を置く必要があった。

関東が忙しくなる以上越後国内の家臣同士のいがみ合いは終わりにして欲しかったのであった。それが栖吉長尾と上田長尾との間でなんとか機能した点は収穫であった。

ただ政景と宇佐美はどうしても離さざるを得ないのも今回もわかったが・・

これは中条と黒川の件を含め別の機会に試すことにした。

ちなみに甲斐の件だが景虎は勘助から聞いた晴信との話を忘れた訳ではなかった。

本音では関東に集中したいので和睦をしたかったのであるが関東戦線次第、特に西上野ではまた晴信と争うことになりそうな気がしたのである。そのために回答を保留し続けたのであった。既に来年関

東に下ることに景虎は心を決めていた。

まだ内緒であったが近衛前嗣も都での正親町天皇の即位式が終了次第、前後して一緒に関東に下る予定であった。

関東管領と関白、将軍家と朝廷の権威で北条を屈服させようと思ったのである。

関東管領だけではなく関白の威厳もあれば北条は黙るのではないかと考えたのである。

景虎が管領職（関東管領職）にこだわったのは都の三好長慶と会ってからであった。

長慶は都の実力者として権威を振るっていたが官位的には相伴衆で管領ではなかった。

管領は細川晴元である。しかも長慶が相伴になったのも景虎から遅れること半年後であった。要は長慶は実力で畿内を支配していたのであった。

景虎はその逆を考えたのであった。

実力で関東を支配できれば一番良いのであったが武田を屈服させるのは難しいのは分かっていた。北条は戦ったことがないので分からないが両方を同時に相手するのは難しいのは景虎は重々承知していた。

そこで官位にこだわったのであった。

長慶ですらなれなかった管領職に自ら就任してその権威で支配しようと考えたのである。

関東管領には10万の軍の価値があると景虎は信じていた。

これに前嗣の関白の権威との両方をぶつけければ景虎は北条、もしかしたら武田も下るのではないかと思っていたのである。

もちろんそれが幻想で今後自分の一生に渡って泥沼の戦いを強いられるとはこのときは夢にも思ってもいなかっただろうが。

一通りお互いの報告が終わったあと、来月には関東管領就任の祝賀式も早速始めると旨も伝えた。段取りとしてはまず関東管領の祝賀

式を先行させ、越後守護を継承した時からの懸案でもあるが上杉家継承に関しては戦況や時期を見て追って行うことにしたのである。越後守護上杉家と関東管領上杉の同時後継は景虎の格上げには絶好ではあったがその反動も大きかった。実は景虎は関東管領になるとは言っていたが内心では本当に自分が実権を握るかどうかは迷っていた。近衛前嗣の下向に同意したのもその点があった。前嗣に実際に政治を動かしてもらい自分は副将として前嗣が出来ない軍事のみの立場でも良いと考えたのであった。上杉継承の踏ん切りがつかなかったのも長尾家の継承や自分の後継の件も微妙に絡んでいたからである。

その後景虎は政景と仙桃院の姉夫婦と少し時間をとった。関東管領の祝賀式の件である。

序列の件での相談であった。夫婦で来てもらったのはその方が頼みやすいと思ったからである。姉の機嫌を損ねたくないから正直に言うことにしたのである。

「お願いしづらいのですが・・・」  
景虎は丁寧な話始めた。景虎の政景や姉に対する喋り方は独特であった。はつきり言って気兼ねしていた。

政景も同じで景虎には気兼ねして常に丁寧な口調であった。酒宴の時でもある。

ただ政景は他の家臣に対しては普通の政景らしい威厳のある話し方であった。

実はこれが他の家臣団の不評を買っていた。

政景もこの件で自分が他の家臣団から鼻づまみされていたのは承知していたが彼にも言い分があった。最大の言い分は面と向かつては言わなかったが自分、及び妻の仙桃院、息子たちが景虎の正式な後継者としての自負である。景虎はただ後継者の件に関しては何も言っていなかったが血統の順番で行けば彼らが後継者なのは事実であった。



景虎に何かがあつて後継ぎが必要になつた場合景虎の実の姉の仙桃院かその子供たちが形式上は後を継ぐにしても、実務を主に仕切るのには政景なのは間違いないかつた。

政景の軍事や政治の実務能力は高く軍事では越後軍の主力を担い政治などの実務も地元の坂戸城に田畑や金山の開発も熱心に行い地元では強力な基盤を持ち景虎も越後統一時は政景率いる上田長尾衆との全面的な衝突をためらつたほどであつた。

しかし問題は政景が景虎の越後統一時に敵対的だつただけあつてそれが他の越後衆の警戒を買つていたのも事実であつた。宇佐美定満は政景に警戒する他の越後衆の最先鋒でもあり代弁者でもあつた。

景虎も他の越後衆の警戒心は十分に理解していたが政景の実力を無視できないのもまた事実であつた。

「お話とは・・・？」

政景や仙桃院は不思議そうな顔をしていた。

景虎は正直に伝えた。祝賀式の件の序列の件であつた。

今回の関東管領の祝賀式を揚北衆や他の国人衆対策に使いたいと話した。

要は景虎は守護にはなつたがそれでも同盟者意識を捨てきれない越後国人衆に自分は守護以上の権威と格式を備えたので同僚意識から主従関係へそれなりの対応を自分にするようにと要求したかつたのである。格が違うことをはつきり伝えたかつたのである。

そのために単に権威が上がつたと威張るだけでなく同時に彼らを懐柔、支配下に置きたかつたのである。

揚北衆や遅めに家臣になつた者の中には未だに景虎を同盟者程度の認識しか持つていなかった者もいた。越後のように絶対君主制ではなく緩やかな連合形式の国にとって家臣の掌握は重要かつ慎重な仕事であつた。

景虎にとつても苦渋の判断で言い難かつたが祝賀式では政景には序列を後方にしてもらえないかとの景虎からの依頼であつた。

景虎の話を一通り聞いて仙桃院は少し不服そうな顔であつたが政景

は顔色ひとつ変えなかった。政景は快く了承した。自分が景虎に従うようになったのは遅いのは事実だからである。ただ政景も計算した。顔には出さなかったが今後を思えば安い物と思っただのである。我慢も必要であろう。

ただ仙桃院の顔を見て判断したのか景虎も最大限の配慮はした。揚北衆の後塵ではあるが他の者よりも上位にはつけたのである。政景が苦手な宇佐美よりも上位にしたのである。

後日、景虎は揚北衆以外の諸将、柿崎景家、斉藤朝信、北条高広たちとも序列の件での話をした。柿崎や斉藤は彼らの妻にも念を入れてお願いした。しかし以前の借りがある北条はともかく、北条以外の諸将の反応も景虎の懸念とは裏腹にあっさりしたものであった。彼らは既に奉行として越後の内政を動かし、斉藤や柿崎たちをはじめとする越後国人衆でも景虎の住む越後南部の上郡や中部の中郡の国人衆は景虎の被官としての意識が景虎の思っている以上に強かったのであった。揚北衆以上に信用、重用され政治の中枢にいたので序列などそれほど気にしていなかったのである。待遇的には彼らのほうが優遇されているのも明らかであった。

それとは逆に越後北部の下郡に当たる揚北衆たちは景虎の住む上郡春日山城から地理的に離れていることもあって以前から独立心が旺盛ではあったが同じ家臣団の中でもそれだけ景虎に対する考え方の違いが生まれていたのも事実であった。

この家臣団同士の微妙な距離を縮めるよう景虎もいろいろ手を打ったが景虎の代では結局この家臣団の中での意識の溝は埋めることは出来なかった。

ちなみに揚北衆が景虎に全面的に素直に従わないにはもうひとつ、彼らなりの理由があった。家柄である。その理由は後の関東国人衆からの祝賀式の時に述べたい。

関東管領の祝賀式はこの年の秋10月にまず越後国人衆から始めら

れ、11月には信濃国人衆、そして翌年永禄3年（1560年）3月に関東国人衆と半年がかりで行われた。

この行事自体は各国の国人衆が春日山城まで馳せ参じて太刀を景虎に献上するのであるが

このときの参列者は現在でも侍衆御太刀之次第という資料に記載されている。

序列は政景に話した時と同じ段取りで行われた。

祝賀式は直太刀衆という景虎に直接太刀を送る最も荣誉ある担当は栃尾時代からの重臣で母虎御前方の実家栖吉長尾景信と父為景時代の重臣、桃井義孝と上杉家一門山本寺定長ら3名が行った。

披露太刀衆という次に荣誉のある太刀を披露する役は揚北衆の中条藤資を筆頭に本庄繁長 本庄実乃 石川殿（為景時代の重臣と思われる）色部勝長 千坂景親が続いた。政景はそれより後の7番目であった。それ以降は斉藤朝信 北条高広 長尾資景 柿崎景家 宇佐美定満 新発田長敦 黒川実氏と続いた。

景虎に近い越後衆が後ろに連なり、中条、繁長、色部らを筆頭に揚北衆への配慮がよく見て取れる序列であった。

ちなみに景虎の姉の仙桃院の夫の政景が揚北衆の後の7番目になり栖吉長尾や揚北衆とも歴然とした差をつけられた待遇であったことは上田長尾衆には強い不満として残った。

確かに景虎に従順が遅れたのは事実であったがその後の越後軍の主力を占めて血を流して戦っているのは自分たちであるのになんたる待遇であろうかと・・

ただ政景自身はそれほどこの順位は気にしていなかった。

他の景虎直近の国人衆と比較すれば明らかに上位であるし評定など実務でもすでに上位の扱いであったからである。

栖吉長尾景信と本庄実乃は景虎にとって特別であって今回の序列如きで外様の揚北衆の下になつたなど微塵も思っていなかったのである。いざとなれば実力で巻き返すことも出来ると内心は思っていた。

ひとえに彼の自信でもあった。

自城の坂戸城に帰った政景も彼らの懐柔にあたり一度は成功するがこの数年後に起こった思わぬ事件でこの不満はぶり返され将来の禍根として残り景虎にとって高くつくとは当時は思いもよらなかったが。

なお直江景綱を筆頭に上杉定実時代の古参の幹部や上杉一門扱いの上条政繁や山浦氏など向けにも別日程で祝賀式を行った。

11月に入って信濃国人衆による式典も行われた。

川中島での戦い以来付き合いがある高梨雅政や村上義清を筆頭に彼らの家臣や北信濃の国人衆が春日山城にやって来たがそのなかに意外な顔として武田晴信の家臣の真田幸隆がひよっこりやって来た。幸隆は川中島の戦いで晴信の先陣としていつも越後軍と真つ向から戦ってきた男である。

武田から見れば敵である自分の関東管領就任の祝賀式に彼が来たのには景虎も正直驚いたが村上を筆頭にした信濃国人衆は怒りの感情を剥き出しにしていた。

村上に言わせれば戸石城での戦いは彼の裏切りで信濃は武田に負けた・許せぬ・絶好の機会である・とおめでたい席にも関わらず一太刀合わせんとする勢いであった。

関東管領の祝賀会で太刀打ちされては景虎もたまらなかつたので村上ら信濃国人衆をなだめて幸隆を別室に呼んでなぜ来たのか事情を聞くことにした。

晴信からもしかしたら和睦の件で何か伝言があるかもしれないと思つたのである。

幸隆は春日山城の奥にひっそり佇む小さな茶室に呼ばれた。

幸隆とは川中島で何度か対戦しており彼は常に甲斐軍の最前線に投入され村上ら信濃国人衆の目の敵にされ何度も痛い目にあっている。

戦っている相手の祝賀式に来るなど景虎も初めてであった。晴信からよつぽど何かあるのだろうと景虎は解釈したのであった。

景虎は幸隆と単独で会うことにした。晴信の件をまだ誰にも話をしていなかったからである。

幸隆も50前の落ち着いた感じの男であった。家臣団も彼に単独で会うことには反対しなかった。それには彼の複雑な立場もあった。彼は川中島では常に最前線に投入され越後衆からも常に痛い目にあっていた。彼らが武田軍の危険な最前線に投入され続けるのも彼らが甲斐の国の中では外様扱いで微妙な位置にあるためであった。ただそれでも彼が晴信の信用を得ているのには間違いはなかった。幸隆自身も晴信に認められ前線に投入され、勘助からも実力を買われて推薦をも受けていたのも事実であった。彼は敵であったが智将として越後でも勘助同様 名が知られていたのであった。

幸隆は景虎の前に通されると景虎に深々と挨拶をした。

「・・・命からがらご苦労様であった・・・」

景虎は思わず本音で言ってしまった。

この小さな茶室に呼んだのも実はこの茶室は景虎の隠れ家のような場所で普段は將兵たちは入れないからである。

彼の身の安全と景虎の最大限の配慮を見せたつもりであった。

幸隆は景虎の本音に少し苦笑いしていたが。

「晴信殿の使いでいらつしやったのかな・・・？」

景虎は率直に聞いてみた。

「私の判断でございます・・・」

丁寧な口調で返してきた。

景虎は意外に思った。

幸隆は信濃の小県郡（長野県東御市）の領主であるが武田晴信の父、信虎が攻めてきたときは追い出されて関東管領上杉憲政の家臣の上野国の長野業正の元で世話になり、晴信になってから甲斐軍へ帰参

を許され領土を再度安堵してもらったと言つ。

幸隆は追い出されていた時は関東管領、上杉氏、その家臣の長野氏には世話になったのでそのお礼の挨拶に今回新たに関東管領になった景虎の元に危険を承知で訪れたという。

長野業正は上杉憲政が越後に脱出した後も上野国を頑なに北条と武田から守り続けていた。

景虎も上記の理由から今回の関東遠征で長野氏への援助を約束していた。

景虎は幸隆を律儀な男だとも思ったが晴信が自分が関東管領になるのを快く思っていないのは重々承知していた。

幸隆は自分の判断で来たと言ったが晴信がこのことを黙っていると見えなかった。

「晴信殿は幸隆殿が祝賀式に来ていることを知っているのか？」

景虎は聞いてみた。

「はい、もちろん。式の様子を見て報告するように言われております」

幸隆は答えた。

「そなたは大丈夫なのか？」

余計なお世話の一言であったが言ってしまった。

「はい」

幸隆は表情を変えずに答えた。

「さすが晴信殿は寛大だな・・・」

自分の関東管領就任には反対であろうがこれも晴信の余裕を表しているのだろうかと思つた。それとも和睦の件があるからだろうかとも思つた。

「はい、景虎様にもよろしくとおっしゃられていました・・・」

幸隆は続けた。

むしろ よろしく から一歩踏み込んだ言葉を期待したのだがそれ以上の言葉は出てこなかった。

「よろしくか・・・それだけ・・・か？」

景虎は思わず聞き直してしまった。和睦の件のことを本当に知らされないでわざわざ春日山まで来ているとは思えなかったのである。

幸隆は不思議そうな顔をして

「はい・・・それだけです・・・」

と何を言いたいのかと言いたげな顔で答えた。

「勘助殿も何も言っていないかったか？」

景虎は勘助の名前まで思わず出してしまった。

「はい・・・」

幸隆は引き続き不思議そうな顔をしていた。

本当にそれ以上は何も知らないようであった。

「・・・そうか・・・」

景虎は逆に黙ってしまった。

（晴信・・・気が変わったのかな・・・それともこっちが返答を出さないと動かないってことか・・・）

景虎は少し待たせすぎたかなと思ったが、景虎も晴信の父信虎が幸隆を追い出したように武田が上野国方面から関東進出を狙っていることとの噂は以前から聞いていた。だから晴信も同じことをするであろうと思つて警戒していたのである。晴信との和睦の件で迷つたのは北条を押さえると晴信は上野から関東に入ってくるのではないかと思つたからである。事実晴信は後に何度も上野進出を伺つていたがいずれも長野業正に追い返されている。また上野は越後にとつて関東への出入り口にあたる。景虎もここは譲れなかった。返答が遅れ遅れになつていたのはそのためであった。

もちろんそうであれば今度はこちらからもう一度仕掛けてみようかなという気持ちも湧いてきた。

晴信の自分が関東管領に就任することについての心象をも知りたかったが和睦の話の時にでもはっきりする話であるのでこれ以上は聞くのはやめた。

色々考えていると

「ところで景虎様・晴信様ですが出家いたしましたして今は信玄公と名乗っております」

幸隆は言った。

「出家されたのか？」

景虎は驚いた。晴信が信心深いと思わなかったからである。自分も出家騒ぎを起こしているが晴信は出家しながらも隠居せず国の指揮を執るところが晴信らしいが・

「今後は信玄殿か」

景虎が言くと幸隆はうなずいた。

「甲斐にも善光寺を建立されたそうだが・信心深いんだな・」  
以前川中島で戦ったとき善光寺の秘仏を景虎と信玄は戦災から守るためという名分で実は1体ずつ持ち帰り景虎も府内（直江津）に善光寺を建立している。

「はい・信玄様は飯縄大権現も信仰されております・」

幸隆は続けた。飯縄大権現は景虎も毘沙門天とともに信仰しており景虎の持つ兜には飯縄明神像の使い魔の狐の上に乗るからカラス天狗が取り付けられている。

（妙なところで同じ趣味だ・まったく）

景虎は思わず一人で苦笑いしてしまった。

「ところで・私の今回の参加の件はお許し頂けると思っております  
いでしょうか？」

幸隆は祝賀式に出てもいいか確認してきた。茶室に呼ばれたので追  
い返されるのかと思ったようであった。

「もちろん・村上殿や信濃国人衆には貴殿とは戦場で勝負するよ  
う言っておくので」

景虎は許可を出した。

幸隆は景虎の言い回しに安堵と少し感心したような表情をしてから  
再度深々と礼をした。

「信玄公によるしくと伝えてください」



景虎は最後に言った。自分の気持ちは変わっていないと暗に伝えたいつもりであった。

幸隆は顔色変えずそのまま一言も漏らさずに伝えますと言った。

幸隆は景虎の何の意図を汲み取ってくれたようで景虎もさすが幸隆は智将といわれるだけあると素直に思った。

しかし最後に幸隆は

「真田家を今後ともよろしくお願いいたします」

とも言った。

景虎は一瞬幸隆が何を言っているのかわからなかった。

（・・・武田に既に仕えているであろうに・・・両天秤をかけているのか・・・？）

景虎は思わず不思議そうな顔をしてしまった。

「我々のような小さい者は知恵で生き残るしかありませんので・・・」  
幸隆は顔色変えずに静かに言った。

景虎は黙って聞いていた。

この意味は後の関東前線で身を持って景虎は体感することになる。

ちなみに景虎の代では真田家とのつきあいは敵対関係以上はなかったが次の景勝の代では真田家とは後々大きく絡むことになるのである。

年が明け3月に入ると関東からも使者がやって来た。景虎自ら男装の麗人として対応した。佐竹（常陸）三浦（相模）秩父（武蔵）宇都宮 小山（下野）結城（下総）鹿島大宮司（常陸）太田（武蔵）元上杉家重臣）の使者が太刀を献上した。

彼らは関東八官と呼ばれ後に反北条の先鋒に立ち景虎とも協調姿勢を取っていく。

ちなみに揚北衆であるが彼らも鎌倉、元は関東の出身で彼らは今でこそ関東からの分家ではあるが鎌倉幕府以来の付き合いは続いていたよう中条、黒川の本家の三浦、本庄、色部の本家の秩父が今回参加しているのは祝賀式での序列優遇への謝意の意味もあった。

彼ら以外に佐野、横山、大胡等らも駆けつけていた。

ちなみに坂東（関東）八平氏（千葉 上総 三浦 土肥 秩父 大庭 梶原 長尾）で見るように越後の国人衆、特に揚北衆が景虎をなかなか同盟者以上に見ることができなかったのは八平氏の顔揃いを見ていただければわかると思うが自分たちと景虎の長尾家は同じとしか見ていなかったのである。そのために景虎に対しても独立心旺盛で従順とは言いえない面が多かったのであった。景虎が後に長尾を捨てて上杉になった理由のひとつもそこにある。

なお余談であるが源平合戦で壇の浦で滅んだ平氏であるが関東の頼朝軍、源氏の主力は関東の平氏一族が占めていたのである。

景虎の関東管領就任についてだが景虎と政治や権力的には直接関係はないが越後へ帰路の途中に近江の六角氏も関東管領就任の祝意を示しており世間一般には景虎の関東管領就任は受け入れられたのである。

受け入れなかったのは甲斐の武田信玄と相模の北条氏康である。二人は関東管領どころか後に景虎が受け継いだ上杉姓すら認めることも無かった。

彼らは景虎が後に上杉姓を名乗ってからも長尾と呼んでいたのである。

関東管領の権限は関（関東）八州に伊豆と甲斐を含んでいた。

（関八州 〃 上野国 下野国 常陸国 安房国 上総国 下総国 相模国 武蔵国）

信玄からみれば関東管領の管轄に甲斐本国も入っているし信濃の件もしつこく口を挟んでくる。

氏康からすれば既に上野 相模 武蔵 伊豆を実質支配しているが景虎は上杉、関東管領を名乗ることによりこの4力国を狙ってくる。双方とも認めるわけにはいかなかったのである。

ただ信玄も氏康も景虎のある力は認めざるを得なかった。

意外に外交上手との点である。都の將軍家や朝廷、実質的な支配者の三好にうまく取り入り、足利將軍にしかなかった関東管領の決定権を景虎は勝ち取った点である。

ただ信玄は今回の景虎の義輝との交渉のうまさに関しては感心しながらも別の意味で内々は苦々しくも思っていた。

女性である景虎に関東管領の決定権を与えたことである。

義輝の藁にもすぎる思いが透けて見えたからである。

將軍家には既に実力は無く権威だけで生きながらえていたようなものであったが、義輝の今回の行動がそれを証明してまったからである。

景虎も決して実力が低いと信玄は思っていなかったがもし景虎がどこかですると敗れるようなことがあれば景虎の実力に頼る將軍家の権威も同時に崩壊する可能性が高くなっていた。信玄は川中島で何度か対戦しているので景虎の実力を女性だからという理由で侮ってはいなかったが景虎をよく知らない人間はそうに振舞う可能性もあった。

ただ信玄の懸念を察知してか景虎自身も最近は影武者を立てて女性であることを隠し、男性のように振舞っているという情報も少し気にはなっていたが。

信玄は景虎との和睦には賛成であったが関東管領の就任の件は正直戸惑っていた。

本来に関東管領になるとは思ってもいなかったのもあったが、景虎が関東管領になることによって官位上支配下に入るのも許せなかった。

甲斐本国が関東管領の対象に入っているのも面白くなった。西に眼を向きたい信玄が関東に面と向かって巻き込まれる可能性が高くなっていた。それが悩ましかったのである。

「それにしても・・・権威や官位と言った物が好きな奴だな・・・実力が伴わないと何の意味もないのにな・・・」

と信玄は自分の家臣たちには表向き景虎を蔑視して言ったが將軍家に対する頑なというか古臭い忠誠心は正直見上げたものとも感心していた。

（それにしても景虎の奴・こまめにいろいろと動き回る・氏康にはしばらく景虎の本性の件は黙って景虎のお手並み拝見と行くか・返事もこちらでも先送りじゃな・）

外交での遅れなんぞ実力ですぐに回復できる・信玄の本音であった。

氏康も同様である。むしろ本番はこれからと考えていたのである。なにはともあれ景虎の関東管領祝賀式は無事に終わったのである。

## 子弟

半年に渡る関東管領の祝賀式が終わると永禄3年（1560年）春に景虎は初めて越中に出兵した。

一昨年からの一向一揆の騒ぎの件に便乗して富山城の神保長織が松倉城の椎名康胤を攻めてその椎名より救援依頼が入ったため急遽出兵したのである。椎名康胤は父為景以来の盟友である。田植えが終わると慌しく兵を集めて越中に出陣した。

神保軍は信玄と比べるとはるかに弱小である。今回は本庄実乃や新兵衛、千坂景親の親衛隊以外に斉藤朝信、北条高広と少数の部隊で間に合うほどであった。

肝心の戦のほうだが神保軍は越後軍を見ると武具を捨ててさっさと逃げ出してしまったため大した戦にはならずあっさり終わったため景虎たちはすぐに越後に引き返した。

春日山城への帰り道

「初陣は如何でしたかな？」

斉藤が本庄秀綱に声をかけていた。秀綱は本庄実乃の長男で今回が初陣である。

既に父同様、景虎上洛時に太刀持ちを任されるなど信頼が厚かったが実乃の秘蔵っ子だけあって戦は少し出るのが遅れていた。

景虎も初陣の時、幼い頃の彼に栃尾城で会ったことがあった。もともとあの時は景虎も緊張と怖さで周りを見る余裕がなかったので秀綱の事を良く覚えていなかったが。

「以外にあっさり終わったので安心しました・・・もう少し手応えがあればよかったです・・・」

秀綱が答えた。

「油断はいかんど・・・少数でも強い連中はいっぱいいるぞ・・・」  
実乃が息子を戒めた。

戸倉与八郎が景虎を指差しながら

「すぐそば、ここにいろつて！」  
と笑い飛ばした。

「姫様の初陣は凄まじかったと父に聞いていたのですが・・・」  
秀綱が景虎に聞いてきた。

景虎もふと自分の初陣を思い出した。  
今思っても生き残ったのが奇跡であった。

酒で怖さを必死に紛らわしていたあの時の自分を思い出し景虎も思  
わず少し苦笑いしてしまった。

「あの戦は本当に凄まじかったな・・・」

秋山源蔵が懐かしそうに答えた。

「いやいや・・・みな奮闘のおかげだ・・・」

景虎が謙遜気味に答えた。

「おお その話聞きたいわ！」

弥太郎が声を出した。弥太郎は実父の鬼小島の話が聞きたかったの  
である。

以前景虎と話をしたときは景虎が気を使ってくれてあまり聞けな  
かったからである。

「・・・今でもそうだが・・・怖さを酒で紛らわし必死だったのを覚え  
ているな・・・」

景虎は静かに苦笑いしながら言った。

「まだこの世に未練が多いからな・・・」  
もちろん本心でもある。

実は景虎は越後や甲斐、関東が静かになつたらまた都に上りたいと  
密かに考えていた。

今度は何も考えずにゆっくりと行きたかった。そのための未練であ  
る。もちろん内緒であるが・・・

「酒と・・・この世の未練と言うか・・・死にたくない心が大事でしょ  
うか・・・」

秀綱は生真面目に聞いてきた。秀綱の若者らしいあまりに生真面目  
な回答にみなくすと少し笑ってしまったが。

「酒はともかく・・・死にたくないというか諦めない、最後まで怖れずに戦えと言つ氣構えだな・・・」

実乃が答えた。

「・・・状況を常に冷静に判断し己の恐怖心を殺して必死に戦つことが生き残るコツですな・・・」

秋山源蔵も真面目に答えた。

「部下の忠告にも耳を傾けることも大事だ・・・鬼小島の指示は素晴らしいから・・・」

（・・・最近自分は少しこれが出来ていないかな・・・）  
内心自分にも言い聞かせながら景虎も真面目に答えた。

「いやあ・・・鬼小島殿は凄かったぞ・・・弥太郎」

源蔵は弥太郎に言った。景虎もうなずいた。

弥太郎は黙つてさつきとは違い真剣な顔で聞いていた。

「鬼小島がいなかったら私はここに居なかつた・・・彼には感謝している」

景虎は思い出したのか少しまた悲しそうな顔をしてしまった。

「あの老人はまさに武勇の誉れですな」

新兵衛も言った。実乃も景虎もうなずいた。

「そうかあ・・・あのクソ親父でも最後は一花咲かせたんだな・・・やるなあ・・・誉れなこつた！今度墓に酒でもかけとこかな！ガハハ・・・」

場の少し暗くなつた雰囲気気づいてか弥太郎が笑い飛ばした。

新兵衛と景虎は顔を見合わせた。やはり弥太郎には全て見抜かれていたのである。

「弥太郎・・・」

景虎は静かに言った。

「以前本当の事を言えなくてすまなかつた・・・」

景虎は生真面目に弥太郎に謝つた。

「いやいや。親父が生きていたら今頃お袋にやられていたでしょうよ！お袋にではなくて戦場で死ねたのが何よりも親父にとって誉れ

ですわ！」

弥太郎が笑い飛ばした。

景虎は胸のわだかまりが取れた気がした。

「今後も頼む・・・」

景虎は言った。

「お任せあれ！ついでに源蔵や与八郎の面倒も見たりますわ！」

弥太郎は胸をどんと叩いた。みな笑った。

「全く・・・すぐに調子に乗りおつて・・・」

源蔵が苦笑いした。

「やっぱり親父さん連れてきてもう一度鍛え直してもらわうべきだったな・・・」

与八郎も冗談を続けた。

「親父さんじゃなくて春日山の城下にいるお袋さんを連れてきて鍛え直してもらってもよからうが」

新兵衛が言うと

「いやあ・・・それだけは本当に勘弁願いますわ・・・」

と弥太郎が縮こまると再度笑いが起きた。

「それにしても『我は毘沙門天の使いである！』は格好よかったですぞ」

源蔵が少し冷やかし目に言うと

「味方を勇気付けようと思ったら・・・酒の分量を間違えた勢いで・・・」

「

景虎はまた苦笑いしてしまった。少し笑いが起きた。

「やはり酒も少しは大事ですね・・・」

秀綱が笑顔で言うと

「まあ、呑みすぎないようほどほどにな・・・」

新兵衛がとがめると笑いが起きた。

与八郎が空気を読んだのか話を変えてきた。



「ところで新兵衛殿にもすごい逸話がありますぞ！」

「堅物な新兵衛殿に？おお！聞かせてくれ！」

弥太郎が再度乗ってきた。

「戦の真つ最中に馬の上で催してしまい、小便を撒き散らしなら三人を討ち取ったんじゃ！」

大笑いが起きた。

「馬の上で小便をしながら三人も討ち取るなどさすが新兵衛殿じゃ！」

北条が笑い転げていた。

「馬も迷惑じゃろうがそれにしても討たれた奴はあの世で仰天しとつただろうな！」

弥太郎も大笑いである。

景虎は少し顔を赤らめていたが。

新兵衛も

「与八郎・それを言うなよ・・・」

と顔を赤らめていたが。

「まあ、なにはともあれ今回は初陣には持ってこいの戦だったな」  
斉藤が最後に締めた。

ちなみに初陣だが普通はこのような安全な戦にしか出さないのである。景虎の初陣の栃尾城戦は例外であった。

今回の戦が平穩に終わったことに関して景虎は

「早速関東管領の効果があつたかな・・・」

と思わず漏らしてしまったが実乃は

「北条相手ではこんなのですみませんぞ・・・」  
と言つて景虎を戒めた。実乃の本心であった。

「確かに・・・越中は関東ではないからな・・・」

と景虎も冗談交じりで軽く返したが。

実乃はその後小声で景虎に言った。

軒猿の情報だと神保の裏に武田がついているという噂が流れている

という。

信玄が越中までに糸を引いているのは景虎も正直驚いたが同時に和睦の件をどうするかも再度思い出したのであった。

ちなみに越中方面も今後の景虎の人生に後で大きく関わってくる。

春日山城に戻ってしばらくして6月になると東海地方から衝撃的な情報が入ってきた。

駿河の今川義元があゝの織田信長に討たれたとのことであった。

義元は高々と上洛宣言をして数万の大軍を率いて駿府（静岡市）を出発し破竹の勢いで進軍していたのであったがその途中の桶狭間で千足らずの少数の織田軍に不意を突かれて討たれたという。

景虎も驚いたが自分同様將軍家に忠節を誓う信長が將軍家に反抗的な武田、北条の一角の今川に勝利をすることにうれしく思い彼に勝利祝いの手紙を送っている。

景虎が言うに当然の勝利であると。

またこの戦で織田信長の名前は天下に轟くようになるのである。

景虎は信長と直接会うことは終生なかったがこの後手紙などのやり取りで付き合いが続くことになる。もちろんその関係も徐々に変わっていくのである。

一方景虎も関東遠征の準備を着々と進め先発隊を初めて三國峠を越山させて上野国の厩橋城（群馬県前橋市）に出発させた。上野国は元々は景虎の元に逃げ込んでいる上杉憲政の領土で彼が逃げ出してからは家臣の長野業正が西上野の箕輪城で信玄や氏康から上野国を守ってくれていた。

業正らが粘ってくれたおかげで景虎は関東の拠点となる厩橋城を難なく押さえることができたのである。業正とその息子の業盛は景虎陣営の武将として引き続き短い期間であったが活躍することになる。厩橋城を基点に情報収集や関東諸将への懐柔や取り込みの先発隊の要員は斉藤朝信、北条高広、本庄繁長、長尾藤景らが任された。

斉藤や北条は景虎古参の幹部であるが繁長や藤景は新参であったが二人とも今回大役を任せられることになった。武勇に優れた景虎期待の若手として登用拔擢されたのであった。

景虎も秋には春日山城を出発して初めての関東に向けて出発した。武田対策に春日山城の留守役には直江景綱、柿崎景家、黒川実氏、桃井義孝、景虎の旗本の吉江景資を今回は留守役をお願いした。宇佐美は政景とのからみがあったので留守を希望したが今回は無理に連れて行った。いい加減子供のような仲違いは何とかして欲しかったからである。

景虎は三国峠を越える前に政景の拠点、坂戸城（越後湯沢市）に軍を集めた。越後国内の最前線基地でありここで軍を一度束ねて三国峠を越えるのである。

景虎にとって久々の坂戸城であった。越後統一時の最終戦以来、9年振りであった。

坂戸の城下町は当時よりも栄えていた。坂戸城周辺は山々に囲まれた盆地であるが田畑もよく耕され、周囲の山では金山の開発も行われ上田長尾の重要な資金源になっていた。

城下町も三国峠を往復している商人の休憩、荷物の運搬手伝いなど設備が整えられ彼らをつまき取り込み城下を栄えさせていた。温泉までもが掘削され普段は峠越えの商人の休憩に、戦時は負傷した兵士の療養に使われていた。

坂戸城の城下町が賑やかなのは秘密があった。坂戸城は越後の関東に対する重要防衛拠点であるには違いないので常に屈強な兵士を揃えておく必要があった。そこで政景は兵士、男手を揃えるために面白いことをしていた。

当時外から来た婿養子というのは低く見られ嫌がられる風潮があった。しかし戦国の世では男手は戦に出てそのまま帰らなくなり末亡人なども多かったのであるがそのまま放っておけば町は寂れてしま

う。

そこで政景は婿入りしてきた者たちが地元で馴染み子供を産んで町が繁栄するようにと、この風潮を払拭し城下を発展させるために、その年に自領へ婿にやってきた者を集め、婿殿の体を皆で持ち上げ祝い讃えるように命じたのである。胴上げの風習である。

これが日本最古の胴上げの風習であると現在でも伝えられている。この独特の人口増員策に思わず景虎も感嘆してしまった。

政景は政治上手ではあったがさすがであると。これにはあの宇佐美も素直に感心していた。

景虎は坂戸城に入ると政景、仙桃院の姉夫婦と再度面会して関東管領祝賀式での協力に対して礼を言った。

上田衆が今回の序列の件で不平が出ていると景虎も聞いていたが特に二人とも顔色を変えることは無かった。特に姉は前回と違い普段のまま顔色変えることなかった。

その時政景と仙桃院から会って欲しい人物がいるとの紹介を受けた。栗林政頼と言い上田長尾家の重臣で政景、仙桃院夫婦の長男の義景の後見人とのことである。

景虎はすぐに悟った。後継者の件であろうと・・・栗林は景虎に深々と挨拶をすると景虎に言った。

上田衆は御館様に忠節を誓う次第であると。血縁がある以上序列など関係無いと言った。

景虎も栗林に礼を言ったが結局後継ぎの件はこの時は直接には話せなかった。

義景を後継にすることは景虎は本音では意義は無かったが他の家臣団の本心が分からなかったからである。

この件で家臣団がばらばらになるのはなんとしても避けたかったのであった。

「義景殿の件は十分に了解しています・・・悪いようにはしません。家臣団との調整が必要でありますのでもうしばしお時間を・・・」

景虎なりに最大限の良い返事をした。  
姉夫婦や栗林は安心したようで心なしかほっとしたようであった。

坂戸城は関東遠征への前線基地として越後から軍が集まり賑わっていた。

今回景虎の言葉に機嫌を直したのか政景筆頭の上田衆の大軍も大忙しで、それに負けじと栖吉長尾景信の軍や揚北衆や越後軍国人衆の軍も集まりしだい三国峠越の準備に追われていた。

このとき珍しく政景から少し個人的な相談があった。

義景の初陣の件であろうと思った。景虎も今回は楽で安全な戦になるかと思われたので初陣にはもってこいかと思ったのであったが実は別の話であった。

政景の横に義景ともう一人同じ年くらいの若者がいた。

（喜平次かな・・・？早い初陣だな・・・）

と景虎は思ったのだがもう一人は喜平次ではなかった。

聞くと政景の元側室の生んだ子で時宗と言う男子であった。

元側室は仙桃院が上田長尾に正室に来てから遠慮してかその後出家して産んだ子供と寺でひっそりと過ごしていたがその子が幼子ながら武勇に優れていると坂戸城下で評判になったので呼び戻して今回義景と一緒に連れてきたという。

確かに10代の子供にしては体も大きく目つきも鋭かった。義景に比べても体が大きく大人びている。

景虎は思わず繁長を思い出してしまった。

政景が言うには実は仙桃院と結婚する以前に生まれた子供で義景より年上、実は長男に当たるが今は舎弟分ということで義景や喜平次に任せさせているとのことであった。

少し事情が複雑だが優秀な子で景虎にも忠節を誓いたいとのことで特別な眼で見ないで欲しいとのことであった。

優秀な将校が育つのは良いことと景虎は考えていたので景虎は快く

了承した。

政景の様子を見てか他の者もぞろぞろと自分たちの息子の紹介に景虎の元にやってきた。

実は景虎が初めて見る者が意外と多かった。

中条藤資の息子、景資も今回は来ていた。景虎より2歳年下で立派な青年であったが普段は中条が不仲な黒川実氏対策で自城の鳥坂城で留守役ばかりやらされていた。

今回黒川が春日山城の留守に黒川が入ったので出て来たと言う。

実は中条は内心景虎が景資を気に入ってくれたなら婿入りさせたいと常々考えていたのだが以前彼が上杉定実の後継者問題のとき問題を起こした経緯から黙っていた。

もちろん残念ながらそれ以上に景資が景虎の好みでないことも重々承知していたが。

景虎は中条が言うにはかなりの面食いである。景虎の好みは端正な美男子であった。彼女のお気に入りの河田長親や荒川長実、村上義清、清国親子、敵だが武田の高坂弾正昌信もしかりである。

それにくらべると景資は大柄で屈強でいかにも武將たる男らしい男であったが残念ながら端正ではなく景虎の好みとは明らかに違っていた。

景虎は案の定、景資を藤資が紹介しているときも例の好みの方を見るときは動作を行わなかった。藤資もすぐにわかって諦めたのであった。

景資は景虎に興味があったようだが景虎のつれない反応にがっかりしていたが。

色部勝長も弱冠12歳の弥三郎（顕長）を連れてきていた。

宇佐美定満も弱冠14歳の長男の定勝を連れてきていた。

景虎から言えば少し若すぎて対応に苦慮したが。

それにしても弥三郎も定勝も勝長と定満が50前のときの子供だっ

たので一見孫みたいだったのが景虎も内心は実は驚いていた。まあ自分も父為景が遅いときの子供なので似たようなものかとも思ったが。

今回はみな楽な戦であろうと踏んでおり彼らを連れてきたようであった。

繰り返すが初陣は通常安全な戦にしか連れて行かないのである。

今回の関東遠征は景虎だけでなく越後の国人衆たちもそのように考えていたのであった。

弥太郎、秋山源蔵、戸倉与八郎は具足を整備しながら息子たちを売り込んでいる諸将を遠巻きに見ていた。

「・・・ワシの娘も女騎めきとして連れてくればよかったのう・・・」  
息子のいない源蔵がぼやいた。

「おぬしがその分頑張れば良かるうに・・・」  
弥太郎が横やりをいれた。

「でも娘さんまだ10歳で可愛い盛りだろう・・・やめておけ・・・」  
与八郎も続けた。

「直江殿の娘さんや柿崎殿や斉藤殿のご婦人のように春日山城に姫様のお話し相手に入れればいいじゃないか・・・」

弥太郎が言った。

「ウチの娘おてんばだからな・・・」

源蔵が苦笑いしていた。

「もう馬を乗り回し薙刀を振り回しておる・・・」

源蔵がいやはやという顔で言った。

「そらすごいな・・・」

弥太郎も与八郎も少し驚いた。

「さすが源蔵の娘さんじゃ・・・血は争えん・・・」

「それだったら確かに直江殿の荷駄隊に入った方が良いかもな・・・」  
弥太郎も与八郎も納得していた。

荷駄隊は食糧、弾薬、予備武具などの運搬や遠征中の将校たちへの食料調理など戦闘補佐的な業務の部隊であったが重要な部隊であった。腹が減っては戦が出来ないからである。

越後軍の荷駄隊の構成員は高齢化した兵士が主だったが女性兵士も少数在籍していた。

将校向けの食事の調理は彼女たちが担当していた。戦前においしい食事を取って万全に備えるべきというのが景虎の考え方であったからである。

景虎は細身の通り普段はかなり少食だった。しかし戦の前は普段の倍は食べるので家臣たちはそれで景虎が戦に行くかどうか分かったと伝えられている。

景虎の食に対するこだわりは今でも かちどき飯 と言う名前です。その内容が新潟県では伝承されており今でも食事処で食すことが出来る。

女性兵士ならではの任務もあった。大将の景虎が女性と言う特殊事情もあってだが景虎は毎月10日前後腹痛を起こすことが多かった。が出陣中のその世話の役なども彼女たちの仕事であった。

景虎は温泉も好きだったのでその時の警護も彼女たちが対応に当たった。

越後の買掛温泉や燕温泉、関温泉、上野の猿ヶ京温泉は景虎の隠し湯と伝わっている。

ちなみに戦国時代の女性兵士だが静岡県の沼津市の千本松原の首塚の調査ではかなりの数の女性と見られる兵士の遺骸が確認されているという。

景虎に対する諸将の子弟の紹介が一段落したころ

「それにしてもいやはや・みなさん出世にご熱心で・・・」  
与八郎がいやみっぱく言った。

「阿虎様は小姓みたいな美男子好きだから気に入られれば出世間違



い無しだからな！」

弥太郎も遠慮なく続いた。

「お前の息子も連れてくればよかるう・・・」  
与八郎が弥太郎に言った。

「すぐに気に入られて俺が出世したらお前ら腹立たしいだろう・・・  
だから遠慮してるんだよ・・・がはは・・・」

弥太郎が冗談を言った。

急にみんな黙って知らん顔をしてしまった。

「・・・ん・・・どうした・・・冗談だ冗談・・・がはは・・・」

弥太郎はお構い無しに続けていたら秋山源蔵がそつと弥太郎の後ろを指差していた。

「・・・え？」

弥太郎が指差されたほうを振り向くといつの間にか景虎が膨れて立っていた。

弥太郎が

(やべえ・・・)

と言わんばかりの顔をしていたが景虎は何食わぬ顔で

「・・・え・・・ゴホン・・・弥太郎の外見は私の好みで無いので息子も大丈夫であろう・・・」

と、うまく切り返すと辺りは笑いに囲まれた。

「そりゃあないでしょう・・・」

今度は逆に弥太郎が少し膨れていたが・・・

## 厩橋城

坂戸城には上杉憲政も到着した。今回の大儀名分の人である。

ようやく主役がそろい準備が出来たので雪に閉ざされる前に景虎も意気揚々と上杉憲政を

ともなつて三国峠を越えて初めて関東に入った。

関東遠征の拠点になる厩橋城（群馬県前橋市）に向かったのである。

三国峠から見る関東平野は広大であった。

「久々の関東じゃ・・・」

上杉憲政も懐かしそうに頼りなげな声を出した。

「関東は広いな・・・」

景虎も正直に思った。ここを治めるのが関東管領の仕事である。

（関東を平穏にして將軍家の権威復興に・・・氏康を黙らせ・・・その後は信玄をどうするか・・・）

景虎はこのときは真剣にそう思っていた。泥沼にはまるなど夢にも思っていなかったのである。

越後国人衆たちも同じであった。

「なんか知らんが懐かしいな・・・」

色部勝長の一言が代弁していた。自分たちも本来は関東国人衆でここは自分たちのものである

という意識が強かったのである。

関東前線の基点になる厩橋城では先発隊の北条高広 斉藤朝信 本庄繁長 長尾藤景 上野国人の長野業正たちの活躍で抑えられており彼らが出迎えてくれた。

厩橋城は上杉憲政の領土だった上野の最北端 越後国境沿いの城で憲政の忠臣長野業正が箕輪城を拠点に北条や武田の度重なる攻撃にも頑なに上野国を守って来た。ようやくその苦勞が報われるときが

きたのであった。

ここは景虎にとつても重要な拠点になつていく。

長野は老人であつたが智将と有名で信玄も彼がいる限り上野には入れないと言わしめた男である。彼は息子の業盛と短い期間であるが景虎に仕えることになつた。

昨年からの関東で活動していた先発隊の懐柔、もしくは脅しもあつて関東の諸将は表向きは憲政 景虎に味方するとは返事はよこして  
いた。

しかし北条も軍を動かしているとの連絡があり予断を許さない状況であつた。

秋頃には氏康も自ら軍を率い川越城付近に在るとの情報も入り、越後軍の先発隊と極所で小競り合いをしているとの情報も入つていた。氏康は信玄に比べると景虎はあまりよく知らない男であつたが宇佐美によると信玄に年も近く武勇に優れ彼が参戦指揮した戦は負け知らずのことであつた。彼には向かい傷しかなく（背中に傷がない、背中を見せない、退かない）武勇の誉れの高い男であつた。

政治も上手く領民にも非常に遵われているという。氏康はかつて山内上杉家率いる8万の大軍に攻められた時わずか8千の精鋭で夜襲をかけ、これを打ち破り大将の上杉朝定を敗死させ、扇谷上杉家をそのまま滅亡させるといふ凄まじい戦績を持つていた。世に言う川越夜合戦である。そのため氏康は関東諸将の間では恐れられていた。

宇佐美や実乃、直江と言つた老人たちが関東での戦いの先行きに不安を覚えていたのは彼のそのような実績を知つていたからである。景虎も川越夜合戦の話は知っており彼の實力は認めていた。氏康もやり手というのは充分に分かつていた。

ただ彼は官位のないただの成り上がり大名である。関東管領の名義のほつが効果があると真剣に思つていたからである。

景虎は越後から到着した部隊にしばらく休憩するように命令すると始末までに補給物資を越後から厩橋城に持ち込み万全の準備を整え次第年明け早々北条軍と戦うことを決意した。もし戦う場合越後軍本隊と関東諸將の連合軍で打破できると思ったのである。

来年年明けにしたのは雪解け前までに北条軍と決着をつけてその甲斐の武田軍と戦うか和

睦するか、いずれにしる武田軍の動向に再度備えるためである。

この年の年末は初めて越後を離れて年を明かすことになった。それにしても関東の冬は過ごしやすかった。

雪国の越後と違い関東では滅多に雪が降らなかった。温度も高いので雪国育ちの越後国人衆には快適に思えたのである。

景虎は厩橋城の本丸の縁側から雲ひとつない澄み切った夜空を見ていた。

明るい満月をぼんやりと一人静かに酒を飲みながら眺めていた。別の部屋では酒宴をやっているようでわいわいと賑やかな声が聞こえた。

景虎も酒宴は嫌いではないが一人梅干しを肴に静かに飲む方が好きであった。

「失礼しまする・・・」

本庄実乃が突然やってきた。

「御覧になられていましたか・・・」

実乃も月を眺めながら言った。

「今宵の満月は美しいので景虎様も御覧になられたら・・・と言おうと思ったのですがその必要はありませんでしたな」

景虎はにこりとわらってうなずいた。

「越後では冬にこんな雲の無い澄み切った夜空は珍しいから・・・見入ってしまった・・・」

景虎も本当にそう思っていた。

「関東の人たちは雪が降ると我々とは逆にめでたい、風流だと祝う

そうです・・・」

実乃が言った。

「我々は雪は見飽きているのに・・・」

景虎も思わずくすりと笑ってしまった。

しばらく満月を静かに眺めた後

「関東が片付いたら武田はどうしようか・・・もう風林火山も見飽きたし・・・」

実乃に聞いてみた。

信玄の和睦の話をつつてみようかと思ったのである。反応も見てみたかった。

実乃は少し黙った後

「景虎様はどうされたいのです？」

と多分本心を聞いてきた。

景虎は実乃に酌を注ぐと

「信濃は犀川以北を押さえられれば武田が信濃、甲斐を安堵しても良いかと思う・・・」

景虎は本音を言ってみた。

「あの信玄がそう安々と折れるとは思いませんが・・・」

実乃は信玄からの和睦の話など知らないから信玄を疑っていた。將軍からの御内書だって平然と無視する輩である。信用していなかった。

「・・・」

景虎は黙っていた。

「まあ・・・武田と北条を両方相手するのは難しいですから・・・可能であれば良いかと・・・」

実乃は本音を答えた。

景虎は少し安堵した。

「ところで北条ですが・・・初めての相手ですが・・・手強いと思われるますぞ・・・」

実乃は北条の話 시작했다。

景虎もうなずいた。

もちろん景虎も氏康を過小評価しているつもりはなかったが。

「都から貴人を迎れば氏康も従うだろうと思うが・・・」

景虎は静かに言ってみた。

景虎は近衛前嗣が関東に下向する件はまだ黙っていた。権威を疑わない景虎は彼が来れば間違いないく関東国人衆は従うであろうと思ったのである。当然前嗣の件も実乃は知らない。

「都から貴人・・・？」

実乃は不思議そうな顔をしていたが

「関東管領の私と古河公方の足利藤氏殿・・・そして都からの貴人で関東を治めたい」

景虎は言った。

「・・・」

（都から貴人・・・誰が関東の田舎に下向するだろうか？堀越公方の件ではないが都からの貴族なんぞに北条や関東国人衆が従うとは思えんが・・・）

氏康が現在の古河公方の足利義氏を立てている中、そう安々と藤氏に禅譲するとも考えにくかった。

実乃は思わず口に出しそうになったが一言も言わずに抑えた。

「もしそれで関東が落ち着いたとしたら景虎様はどうされたいのでしょうか・・・」

実乃が相変わらず不思議そうな顔をしていた。

「実務は都の貴人に任せて自分は名目だけの関東管領で良いかとも思う・・・関東が落ちついたら都に再度上洛してゆっくりできれば・・・將軍様からの指示があれば従う」

景虎はもともと少々浮世気味な雰囲気があつたが今日は酔いが回っているのか余計にそのように感じた。景虎は満月を眺めながらぼんやりしていた。

実乃は少し黙ってしまった。景虎の將軍中心主義の古典的な考えは

悪くはないが現状では通じないと思ったのである。実乃は景虎の言っている意味が正直言つてつかみかねていた。かつての源頼朝や足利尊氏のように関東を平定したら都に上るという意味か単に越後の周囲が平和になつたらまた都に行きたいと言っているのか。

景虎や他の越後衆は今回の関東遠征を楽観的に見ていたが実乃はそうは思っていないのであった。

実乃は関東の諸將の素性などの調べなどを密かに行っていた。

ただこれは作戦の立案の為ではなく景虎の素性を話しても良い相手かどうかの吟味判断のための下調べであった。その過程でいろいろなことが解り始めたのであった。

今回の関東騒乱の件は単純な北条の関東制圧のための騒乱ではなく関東管領の本来の補佐相手、古河公方の後継者争いや関東国人衆同士争いが根深く絡んでいるとの情報が入ってきていたからである。北条氏康の実力も信玄並で侮れなかった。

そう簡単に済まないと思つたのである。

関東管領の上杉憲政が追い出されたのも北条との領土問題以外にも実は古河公方の後継者争いや関東管領の上杉家同士の内紛、さらには古河公方と上杉氏の過去の因縁までもが原因らしいとのことであつた。

北条も関東管領の上杉氏の一派 扇谷上杉家当主朝定を戦死させ扇谷上杉家を滅亡させ今回景虎を頼つてきている上杉憲政はその片割れの生き残りの山内上杉家である。

北条のこの関東管領を平然と殺す行為自体が將軍家、もしくは幕府に従順とはとても思えなかつた。当然関東管領の景虎にも従順に従うとは思えなかつたのである。

ちなみに北条の同盟者の武田も既に信濃の和睦の件で一度將軍からの御内書を無視している。素直に事が進むとは思えなかつたのであつた。

実乃は景虎や越後国人衆たちがどれだけ関東管領の意味を理解しているのかも少し疑っていた。

將軍を補佐するのが管領、足利義輝と細川晴元の関係で三好長慶は管領の代行のようなものであつて長慶の官位は単に相伴衆である。

関東も同じで関東における將軍、最高権威は足利藤氏の古河公方、管領が上杉憲政がやっていた関東管領、現在の景虎である。ただ景虎は相伴衆の官位も持つてはいるが。

要は関東管領は国人衆がひれ伏すような地位ではないと実乃は思ったのである。

あくまでも最高権威は古河公方であつて関東管領はその次なのであると。

北条氏康や三好長慶が権威を持つているのは実力で彼らを自由に操れたからである。

長慶は実力で將軍の義輝や管領の晴元を既に操っている。

景虎は関東官営の上杉憲政に変わつて関東管領になつたが古河公方はまだ操れてない。

古河公方、足利藤氏を実力で操っているのは北条氏康である。

関東国人衆は最初は景虎に従うかもしれないが正式な古河公方を擁する氏康が頑強に抵抗する場合は戦況が長引き混乱する可能性が充分にあつた。

それを実乃は恐れたのである。直江や宇佐美ら重臣も同様の心配をしていた。

景虎は父為景の上杉氏に対する守護殺しと関東管領殺しの汚名を削ぎたい一新で関東管領と上杉相続に固執しているように感じたのである。あと景虎が権威を魔法の呪文のように感じているのではないかと思つたのである。

このような権威は実力が伴わないとすぐに効力を失うと老人たちはわかつていたのであつた。



老人たちは他の越後国人衆も同様に勘違いしているように感じたのである。

実乃は上の件を含めてどう答えたら良いか迷ったが

「良い考えかと思えます・・・しかし現状はなかなか安々と行かないかと・・・」

少し本音を言ってみた。

当の景虎は満月をぼんやり眺めながら涼しい顔で実乃の忠言に対して「そうかな・・・」

とつかみ所ない返事をしていたが。

実乃は話題を戻すことにした。

景虎のところに来たのは月の件以外に明日の件を話そうと思ったからである。

「ところで明日みなが少し評定の時間が欲しいと言っているのですがお時間いただけますかな？」

「評定？何のために？」

景虎が逆に聞いた。

「作戦を提案したとのことで・・・」

「作戦・・・？」

景虎が思わず聞き返してしまった。

実乃はうなずいた。

「・・・わかった・・・明日時間をとろう」

景虎は答えた。どのような作戦か検討もつかなかったが。

実乃は礼を言くと下の宴会場に下がって行った。

翌日の評定での議題は意外な話であった。

景虎の出陣時のいでたちである。

関東国人衆たちを確実に味方につけるために男装して出陣することと千坂景親に影武者をやってもらう案であった。男装時は景虎が千

坂である。

信頼できそうな武将のみに本来の景虎で対応しようとしたのである。関東を平定したらいずれわかるような事ではないかと景虎は不満気に言ったが信玄の言葉ではないが味方の関東国人衆らに侮られないためにやむを得ないであろうと・・景虎も渋々応じることにした。景虎は男装の件は了承していたが千坂の影武者は都での前田慶次のときのように話がややこしくなりそうだったので嫌だったのである。特に前回の関東管領の祝賀式の時、関東からの来客には男装であったが景虎本人が対応した。

今回は千坂が対応したら事実を知っている者は混乱するであろうと・  
・それで景虎は渋ったのであった。

ただ家臣団に言わせれば景虎はどんなに男装させても幸か不幸かそれらしく見えないのであった。騎馬武者にすると失礼な言い方だが見た目が弱々しかった。姫若子そのものであった。だから千坂に頼むのであると。今回は他国の足軽も大量に来るので女性と悟られるのは好ましくないと判断したのである。

景虎は不満そうな顔していたが今回は渋々受け入れた。

「ところで・・少し相談があるのだが・・一部内密にお願いしたいのだが・・」

景虎が突然言い出した。

みな顔をお互い見合わせた。

「まず・・関東平定の折だが・・」

実乃が思わず珍しく口を挟んだ。

「北条は強大です・・お氣が早いのでは・・」

昨晚同様に諭したつもりであったが

「・・それについてだが・・都から関白殿に下ってもらおうかと考えている・・」

みな思わず

「え!？」

と驚きの声を上げた。

「関白つて・・・近衛前嗣殿のことを・・・？」

宇佐美定満も思わず仰天していた。

景虎はうなずいた。

関白が下向してくるなど前代未聞であった。そのような約束自体が信じられなかった。

「関白に来てもらいこちらでも別の公方を立てたい・・・」

みな口を開けていた。

景虎は戦上手でもあるが実は外交の方が優れていた。

これは信玄や氏康も率直に景虎の優れた能力として認めていた。

「そして新しい古河公方と関白と私で関東をpushさえない・・・これで関東国人衆も従ってくれるであろうと思うのだが」

実乃も宇佐美も正直この案には驚いた。

実乃は昨日の景虎の言っていることがようやくわかった。

が返答にも困った。確かにこれ以上の権威を揃えるのは難しいが素直に従うかどうかは別問題である。

さらに・・・

「鶴ヶ丘八幡宮で上杉継承と再度関東管領就任の儀式もやりたい・・・」

「

とも言った。

みな返答に窮してしまった。黙り込んでしまった。

「どうであろうか・・・」

景虎が再度みなに聞いてきた。

「良い案でしょうが・・・最後はやはり実力次第ですな・・・」

宇佐美は苦しそくに答えた。

「北条に勝てば万全でしょうが・・・」

実乃も続いた。

二人とも権威だけでは難しいだろうと言いたかったのだが景虎は黙っていた。

事実現在の古河公方の藤氏は氏康と一緒に行動しているという。

実は藤氏は氏康の娘の生んだ子で血縁関係があつたのである。

「武田はどうします？」

本庄繁長が聞いてきた。北条と武田両面作戦は出来ないと言いたかつたようであつた。

景虎は黙っていたが

「和睦してはどうだろう・・・」

と顔色変えずに言った。

みな再度仰天していた。

「いくらなんでも無理であろう・・・どうやって落とし所をみつけるんじゃ・・・」

中条が言った。

「犀川以南は武田領として認める・・・」

景虎は言った。

みな黙つてしまった。

「村上殿はどうされます？」

色部勝長が聞いた。

「越後内で客将として活躍してもらつ・・・それで納得してもらおう・・・」

景虎は静かに言った。

「しかしあの信玄が和睦するか・・・信濃国を全部よこせつて言うに違いあるまい・・・」

北条高広が不安げに言った。

「口約束だけであろうよ・・・危険ですな・・・」

齊藤朝信も信用していなかった。

「人質を交換して確実にやるか・・・」

長尾藤景も続く。

「ここで話しても始まらぬ・・・やるなら信玄と直接交渉せねば・・・」  
長尾政景が言った。

「意見がなければ・・・私が直接信玄と話をしたいが・・・どうだろう

か？」

景虎が再度言った。

家臣団は再度驚いたが同意した。景虎に全て任せることにした。

景虎は勘助の提案のことは結局話せなかった。特に決めてである高坂弾正昌信の件はやはり切り出せなかった。

少し気恥ずかしさがあったのである。

ただこの交渉は景虎は自信があった、またなんとしても成功させたかった。

ただ家臣団は方は実はあまり期待していなかった。

むしろ別の懸念を持っていた。

信玄に騙されて不意打ちされるのではないかと思ったのである。

信玄はあざといので交渉する振りをして軍を送ってくるのではないかと思ったのである。

景虎は家臣団の心配はお構い無しに早速信玄宛に親書を密かに送った。

## 伊勢姫

景虎は厩橋城での新年の祝う酒の席で越後衆に囲まれていた。新しい年を新しい地、関東で迎え華々しい年明けになるはずであったが景虎は不機嫌だった。

不機嫌でそのうえ不満であった。

年明け早々北条氏康が景虎に対して大規模な戦の準備をしているとの情報が入ってきたからである。

関東管領だけではなく幕府に対しても従うつもりは無いと言わんばかりの対応であった。

新年の挨拶の酒の席で景虎はぶちまけてしまった。

「どうして幕府の言うことが素直に聞けないんだろっ・・・」

酒を少しやけ気味にぐいっと飲むと口を少し尖らせながらため息混じりに言った。

足利將軍家や関東管領の言うことを聞かない氏康の事を言ったのであった。

「実は北条じゃないからでござるな・・・」

酒で少し赤い顔になった宇佐美定満が言った。

「伊勢とかが本名らしいですぞ・・・」

本庄実乃も続いた。

氏康は北条を名乗っているが彼の祖父の北条早雲は実はどこの馬の骨か分からないとの評判であった。出身地も伊豆とも伊勢とも備中とも言われよく分かっておらず、都の幕府に仕えた後それを見限つてか出奔し今川に嫁いだ妹の縁で今川に仕えたとも言われ、名前も若い頃は伊勢新九郎とか名乗っていたという。

確かなのは下克上の世の流れに乗って一代で大名まで登り詰めたのであった。

宇佐美の言う北条ではないとは鎌倉時代の執権の北条氏とは血縁関係が無いと言うことである。そのために彼らを後北条と言うことも

ある。

「伊勢氏が・・・因縁があるなあ・・・」

景虎はぼやいてしまった。

他の者は景虎が何を言っているのか分からなかったが新兵衛や実乃はすぐにわかって彼らも思わずくすりと笑ってしまった。

景虎初陣の時、栃尾城に攻めてきた伊勢三郎を思い出してしまったのである。

もっとも最近になって伊勢三郎の方は、伊勢が偽名で本名は為景時代から不仲な三条長尾氏の関係者の長尾俊景ではないかとの噂の方が絶えなかったが。三条長尾氏、三条城は現在には彼らの重臣の山吉氏によって運営され下野したような形になっており同じ長尾一族でも景虎たちに不満があったのは事実であった。

「早雲も堀越公方を滅ぼしていますからな・・・幕府に反抗的なのは彼らの血筋でしょう・・・」

宇佐美は続けた。

堀越公方とは室町幕府が古河公方、関東管領の上杉氏と政治的にもめた際一時的に存在した公方である。

京都から派遣されてきた室町幕府の人間が鎌倉の古河公方に対抗する組織として作ったが鎌倉に入らず仕方なく伊豆の堀越に作ったので堀越公方と言う。

実際関東国人衆からの支持はほとんど受けられなかった。

今川氏に仕えていた時、彼は後継ぎ問題で内紛を起こし弱体化し、関東の指示を得られなかった堀越公方を滅ぼしその堀声公方があった伊豆を拠点に相模も平定し後の北条氏の基礎を作るのである。

「一度逆らってしまったのでなんとも思わないんでしょうな・・・」  
長尾政景も続けた。

「・・・だから自分にも逆らうのか」

景虎も苦笑いしてしまった。

政景も苦笑いしながらなずいた。

「早雲ではありませんが・・・最後は実力でしょうな・・・」

実乃が静かに言った。

景虎は本音では武力衝突は避けたかった。

「実力か・・・」

景虎は思わず黙ってしまった。

「まあ　ワシらにお任せあれ・・・！」

北条高広、中条藤資たちは少し酔いが回ったのか上機嫌になっていた。

「これこれ・・・あまり調子に乗るではないぞ・・・」

宇佐美が呆れ気味に言った。

「後北条の早雲が西国の備中出身ならこつちにも安芸毛利と血の分けた北条キタシヨウがいるからもう！大丈夫じゃ！」  
中条が騒いだ。

北条高広は鎌倉時代の源頼朝の重鎮、大江広元の四男、季光を祖とし越後に行ったのが北条、安芸に行ったのが毛利で家紋は同じである。

「おう！同じ漢字でも魚鱗（後北条旗）ではなく一文字に三ツ星

毛利の印じゃ！」

北条が太い腕をまくって見せた。

「それにしても前から聞きたかつたんじゃがなんであんなに印が小さいんじゃ・・・」

色部勝長が聞いてきた。

北条の旗の家紋の印は毛利と同じだが隅の方にちょこつと小さく記載されている妙な物であった。

「・・・一応な・・・毛利に遠慮しとるんじゃ・・・」

北条がぼそつと意外な一言を言った。

「おぬしにも遠慮があるとは・・・」

斉藤朝信が冷やかした。一同大笑いであった。

「それにしても関東は広くていいわ！是非だな！」

北条は終始ご機嫌であった。みな大盛り上がりであった。



景虎は彼らの盛り上がりを笑いながら少し呆れ気味に見ていたが、本当は彼らが盛り上がった意味が良く分かっていなかった。

彼らは北条を打ち破った暁には暗に恩賞で関東を分けて欲しいと言いたかったのであった。息子たちを連れてきているのはその意味もあつた。息子たちに分けて欲しかったのである。

だが景虎は土地など興味がなかったのであつた。本当に意味が分からなかったのである。

一方宇佐美や実乃は彼らと違った見方をしていた。

何度も言うが北条がそう簡単に折れるとは思っていなかったのである。長期戦になると考えていたのであつた。

越後衆が初陣の子息を連れてきてぬるい戦になると考えていたのに対して激戦になる可能性を懸念していたのである。

1月も中旬にもなるとはつきりした情報が入ってきた。

北条が軍を北進させこちらに進撃してきたとの連絡が入ったのである。

景虎の予想よりも早い動きであつた。

老人衆たちの懸念は残念ながら当たってしまった。

「脅してありませんよな・・・」

宇佐美が静かに言った。

景虎も暗い顔でうなずいた。

景虎は北条と戦うため関東の諸将に味方になるよう催促し味方するとの連絡を取り付けていたが氏康がその前に先手を打ってきたのであつた。景虎の元に関東の諸将が馳せ参じる前に牽制の行動を起こしたのである。

景虎に味方すれば氏康が成敗すると行動で表してきたのである。

景虎は越後軍に出陣を急がせ関東の諸将にも再度味方し厩橋城まで集結するよう催促をかけた。

景虎は越後軍の準備が出来るとすぐに南下を開始した。この氏康北

進の知らせを聞いて関東の諸将が動揺していると聞いたからである。それを鎮めるための行動でもあった。

冬の関東平野は越後と違い雪こそなかったが北風が厳しい。

毎度のことだが景虎は冷え性がどうかかわらないが寒いのが苦手であった。

いつものように顔に愛用の純白の越後上布をぐるぐると巻き僧兵の行人包みのようないでたちであった。もっともこの格好は防寒以外にも景虎の本性が分かりにくいという面でも意外に効果を発揮し景虎が女とばれるのをいやがる越後兵の間では評判がよかったが。

景虎は今回は男装の麗人千坂役である。

千坂本人は麗人ではなく武勇の男の表現が似合うが景虎役である。

最も景虎は戦局をどうするかそのことで頭がいっぱいであったが。

北条軍の情勢は逐一景虎に入ってきた。

大將は氏康ではなく長男の氏政、兵力は3万5千と予想外に大軍であった。

これを聞いて関東諸將の軍の到着を待つて兵力を整えてからぶつかった方が良いとの提案が出て景虎も一度は了承したがそれを許さぬ状況が差し迫っていた。

北条軍は佐野昌綱の唐沢山城（栃木県佐野市）を既に包囲して攻撃しているとの情報が入ってきたのであった。

唐沢山城は北条にとつても景虎にとつても関東の重要な拠点であった。

昌綱が7千の兵を率いて必死に防衛しているとのことであったが相手が大軍だけあって相当に苦戦しているとの情報が入っていた。

越後軍内でも

「3万5千の軍に8千では無理です・・・」

と景虎以外の家臣はみな今回残念だが彼を見捨てて数が揃ってから

再度唐沢山城を奪い返して北条と決戦に備えるべきと主張した。これも戦国の掟であると。

が景虎は既に決めていた。

そのまま唐沢山城への進軍を命じたのである。

「8千で3万5千を相手する無謀過ぎる・・・」

と、みな反対したが景虎は真面目な顔で言った。

「昌綱殿が関東管領のために命をかけて戦っている・・・放ってはおけない・・・」

これは半分事実であった。

昌綱が関東管領のためではなく存続の危機のお家のために戦っていたのであるがここで景虎が軍を出さなかったら関東国人衆の離反は必死であった。行かざる得ないのも事実であった。

「何か策があるのか・・・」

みな不安げに景虎に聞いたが

「氏康も8千の精鋭で8万の大軍を破っている。越後兵でその半分以下の3万5千の軍を破るなどたやすいであろう・・・」

景虎が厳しい顔で言った。本心で言っているかのそうでないのかわからなかったのでみな黙ってしまったが。

唐沢山城に到着すると既に城の周りは北条軍にびっしりと囲まれていた。

遠目に見ても落城寸前であった。

越後軍はすぐに唐沢山城を取り囲む北条軍の西側に布陣したが北条軍は越後軍には目もくれない感じであった。

景虎は黙って遠目の落城寸前の唐沢山城を眺めていた。

景虎も正直迷っていた。情勢はそれほど悪かった。

「これは・・・持たんな・・・」

宇佐美がつぶやいた。

持たないとは無理に越後軍が押せば越後軍を無視して北条軍が一気に唐沢山城に総攻撃をかける可能性があり逆にそれでは落城すると

いう意味である。

「北条に打撃を与えることは出来ませんが佐野殿も持ちませんぞ・・・」  
実乃も正直に言った。

「わが軍にも相当な覚悟が要ります」

政景も言った。

「確かに・・・今無理押しすれば唐沢山城は落城し、昌綱殿は落命するであろう。助けに来たのに殺してしまったと景虎は後の世の笑いものになるだろう・・・」

景虎も言った。状況を悟ったのである。

「昌綱殿には降伏させて我々もすぐに撤退しましょう・・・」

宇佐美が言った。

景虎は黙っていたが

「少し考えたい・・・」

と言った。

「・・・北条は我々をおびき寄せるために佐野殿をわざと生かしている可能性もあります。長期布陣は危険なのをご承知を・・・」

政景も言った。その可能性もあった。景虎はうなずいた。

氏政の元にも越後軍が到着して唐沢山城の西側に布陣したとの情報  
がもたらされた。

越後兵の数は8千と思ったよりも少数であった。

今のところ動きがないとのことであった。

「越後軍はあまり気にするな・・・引き続き佐野攻めを続ける・・・夜襲だけは気をつけるよ・・・」

氏政は命令を出した。

今回の最大の目的は唐沢山城を落城させ昌綱を討つことであった。  
北条に逆らえばこうなるとの関東の諸将に対する見せしめである。  
越後軍と戦う必要はなかった。

氏政にも事情があった。唐沢山城はなんとしてでも落とすしかなかった。  
隠居しながらもいつまでも口を出し続ける父氏康にも良い所を見せ

たかった。

氏政は名前ではないが政治は長けていた。文化教養もたしなみ貴族的な雰囲気があった。その分正直戦は苦手であった。今回大軍で来たのはそのためである。

戦はこの後も武勇に優れた北条氏照、氏邦ら弟たちに任せることが多く本人が陣頭で指揮をとることはあまりなかった。

景虎は陣中で引き続き迷っていた。毘沙門天の前で悩んでいた。無理押しすれば逆に北条を煽って冒険を危険にさらしかねない。しかしここで逃げ帰ったら北条の思う壺であった。関東諸将はみな北条を恐れていつせいに北条になびく可能性があった。そうなることまでの計画は水の泡であった。関東管領の威厳も失墜する。景虎は決意した。

翌日越後軍は大騒ぎであった。

景虎はなんと甲冑もつけず黒い木綿の道服のみを着、白綾の鉢巻を付け、烏帽子の中に髪を束ねた妙な格好をして、普段の淡い茶色の愛馬放生月毛と違う真っ黒な黒馬に金覆輪の鞍を置いて十文字槍を携えて出陣の準備をしていた。

景虎の周囲には千坂 新兵衛 弥太郎 秋山源蔵 戸倉与八郎 ら精鋭10騎足らずが甲冑を着込み準備を終えて待機していた。

家臣一同は仰天していた。何を突然するのか・

景虎は懐にいつもしまっているあの毘沙門天に武運を祈った後、枡いっぱい酒を静かに飲んで黒馬にまたがると少数の取り巻きと陣を出発しようとしていた。

「お、お待ちください・・！」

騒ぎを聞きつけ実乃、宇佐美、政景が飛んできた。宇佐美が慌てて景虎に声をかけた。

「何という格好で・・何をされるおつもりで・・」  
実乃が啞然と景虎を見つめた。

「気概を示したまで・・・これから出陣する・・・」

景虎は静かに答えた。

気概とは世を捨てるぐらいの覚悟があるということと言いたかったのであるが。

「無謀すぎます！おやめくたされ！」

冷静な政景が珍しく青ざめて声を荒げた。

「昌綱殿を助けるためにはこれしか方法がない・・・運を天に任せ敵中突破して唐沢山城に入り、中の味方の士気を上げることこそが大事故と・・・景虎はまだ昌綱殿・・・いや関東を見捨てていないと・・・」  
景虎は冷静に言った。

「あなたが倒れたら・・・すべて終わりなんですよ・・・！」

実乃も声を震わせながら言った。

景虎は黙って顔色ひとつ変えなかった。

無表情に唐沢山城を見つめていた。人の話を聞いているのかどうかも分からなかったが。

「新兵衛殿も・・・千坂殿までも・・・何をやっておられるか・・・！」

慌てて駆けつけてきた本庄繁長が新兵衛 千坂に八つ当たりした。

「阿虎様のご命令に従ったまで・・・」

千坂 新兵衛は顔色ひとつ変えずに言った。

「それを止めるのもおぬしたちの役だろうが・・・！」

藤景も続いた。二人は黙ったままであった。

「本軍は待機・・・戦が始まったら出陣するよう・・・」

景虎はみな怒りを遮るかのように静かに言った。

「本当におやめくたさい！危険すぎます！」

実乃が再度大声を出した。

「・・・私は毘沙門天の使いだ・・・死にはしない・・・」

景虎は静かに言った。

みな一同啞然としていた。

「・・・無礼をお許しを！姫たちを行かせるな！止める！」  
政景が足軽に命令を出した。

命令が行き渡る前に

「出陣！」

景虎が大声をだすと10騎の騎馬は本陣を飛び出して行った。越後兵たちは呆然とそれを見送っていた。

景虎達の姿が見えなくなると宇佐美が大声で指示を出した

「全軍！出動準備！いつでも動かせるように！」

「合図あるまで動くな！絶対にな！」

実乃も命令を続けた。

「また・・・飲酒運転か？」

騒ぎを聞きつけ遅れてやって来た北条は呆れていたが。

「おてんば姫も大変じゃのう・・・まあしかし北条の反応も楽しみじやな・・・」

色部も続いた。

斉藤も苦笑いをしていた。

大丈夫であろうと言わんばかりの態度であった。

「阿虎様のことだ・・・なんか奇策でもあるんじゃないかって・・・」

中条もあまり気にしていないようだった。

「酔いが冷めたら怖くなって帰ってくるって！」

北条も笑い飛ばしていた。

「悠長なことを・・・何があったらどうするんじゃない・・・！」

政景は彼らを戒めたが本心では何かあるんだろうと気もしなくはなかった。

しかし相手は初めて戦う北条である。しかも3万5千の大軍である。万が一を考えるのも留守役の仕事であった。

「何かあったら・・・直接氏政本陣を叩く・・・三途の川へ道連れじゃ・・・」

政景が独り言を言った。

「勝手に動くなと言われておるじゃろう・・・」

宇佐美が政景に一言申したが

「・・・まあ・・・今回はおぬしに賛成するわ・・・」

宇佐美も続けた。政景もうなずいた。

「それにしても・・・まったく・・・たまらんな・・・」  
藤景が思わずつぶやいた。

「お手並み拝見だな・・・」  
繁長も呆れながらも様子を見守るしかなかった。

越後軍本陣を出発した景虎一行は唐沢山城の南に向かっていった。北条軍の周囲を回るように移動した。

「それにしてもすごい数じゃのう・・・」  
弥太郎が思わず感嘆の声をあげた。唐沢山城の周囲ぐるりと全て北条軍だらけであった。

そのせいか逆に景虎たちは気づかれなかった。厳密には北条軍の中にも景虎たちに気づく者もいたがまさか越後軍とは思われなかったのである。妙な格好の集団とは思っていたようだが・・・しかも少数であったゆえにおかげで彼らが気に留めている様子はなかった。景虎たちは難なく城の南側の大手門に至る道に出た。

大手門までは一直線である。途中で氏政の本陣の近くの横を通る。当然北条兵もたくさんいる。

景虎は少し様子を見ていた。何か考えていた。

みなの様子を見ると少し緊張しているようであった。

みなも景虎が早く酔い覚めしてくれることを内心祈っていたが。

「どうします・・・？」

千坂が冷静に聞いてきた。

「ハイハイと通してくれるかな・・・？」

与八郎はいつもの例の口調で言った。

「ワシらはいつでも覚悟は出来ていますがな・・・越後の事、姫の事を思っている人たちが居る事を忘れないでくださいな・・・」

新兵衛も冷静に言った。暗に無謀なことするなと言ったのであったが。



「越後の事を片時も忘れたことなどない……みんなの事だつて忘れたことなど一度もない……みなのが好きだからな……私を大事にしてくれるし……自分の家は大事だからな……越後あつての私だ……」

景虎は冷静に言った。

「分かつておられるのであれば結構で……」

新兵衛は冷静に言った。

「私に任せて欲しい……私が先頭に行く」

景虎は烏帽子を脱ぐと中の束ねていた髪をはらりとほどいて髪を垂らし、鉢巻をほどき、十文字槍や太刀を他の者にあずけて丸腰になると馬をゆつくり走らせ始めた。

黒い道服がやけに目立ち尼のようであつた。

「行くぞ……続け……」

新兵衛が命令を出した。みな景虎に続いた。

北条軍の警備の兵士が陣地に何か接近してくるのに気が付いた。

「なんじゃ……?」

警備の兵士は目を凝らして接近して来る物を見た。

騎馬武者の一団のようであつた。

ただ先頭の武者らしき者は甲冑もつけず黒い木綿の道服のみを着、黒馬に金覆輪の鞍を置いていた。髪を垂らして一見女のようにであつた。

「尼さんか? いや……姫様か?」

北条軍の警備の兵士が不思議そうに声を出した。

「女騎めまみたいだが……違うか?」

別の兵士も声を出した。

「いや……先頭の奴は丸腰だ……」

事実先頭の景虎は丸腰であつた。

隊長格の男が声を荒げた。

「ばか者が……味方かどうか聞いているんだよ……」

旗を見て

「越後兵のようですが・・・女のようです・・・」

警備の兵士は答えた。

隊長格の男は

「えちごへい？おんなあ？」

と思わずすつとんきような声を出してしまった。

隊長格の男は小次郎といった。

小次郎もゆつくり接近してくる騎馬を見た。数は10騎のみである。10騎で3万5千の大軍に挑むはずなど考えられなかった。

しかも越後軍の布陣している西側からではなく南から来た。

「おかしいな・・・越後軍の旗だが南から来たし・・・10騎で挑んでくるとも考えられん・・・なんだろう・・・？」

小次郎も悩んでしまった。

「この辺の武将は越後側に付いている者が多いので危険を避けるために越後軍旗を掲げているんじゃないですか？」

警備の兵士が言った。

確かに一理あった。危険を避けるために味方が偽装して来ることも考えられた。

しかしなんで女が危険を犯してわざわざ戦場まで来たのか分からなかった。

「・・・氏政殿のお気に入りの姫が戦勝祝いに来たんじゃないですか？」

一人の兵士がいやらしい顔でそれらしいことを言った。

「お前・・・冗談でもそんなこと言うたらいかんぞ・・・」

小次郎は警備の兵士をたしなめた。

氏政は真面目でそのような俗なことはしないと聞いたかったのであった。

だいたい氏政は既に結婚して正室がいた。黄梅院である。武田 今川との同盟で信玄夫婦から人質で来た正室であったが・・・しかし彼も思わずなぜか納得してしまった。

「しかし・・・そうかもしれんな・・・」

唐沢山城が落城寸前だったからである。

(しかし・・・姫様が来るとは・・・そんなことあるかいな・・・?)

いろいろ考えているうちに、やがて景虎たちが彼らの前に到着した。

「寒い中・・・警備ご苦労様です・・・」

景虎は小次郎に挨拶した。

男は少し驚いた。声をかけてきたのがやはり女であったからである。

「失礼ですが・・・いずこの方で・・・なんの御用で・・・?」

小次郎が景虎に聞いた。

先頭にいた女性は戦場であるにもかかわらず甲冑もつけていなかった。黒い木綿の道服のみを着、髪を垂らし、黒馬に金覆輪の鞍を置いた妙ないでたちで尼にも見えた。

「越後に落とされた平井城の千葉采女のところの伊勢姫と申します・  
・氏政様に所領復活のお願いと今回の戦の戦勝祝いのご挨拶に参りました・・・」

景虎は答えた。

「・・・伊勢姫様?」

小次郎は再度景虎に尋ねた。

景虎はうなずいた。

平井城は知っていた。北条方だったが越後軍に占領された城であるが、その千葉采女や伊勢姫など初めて聞く名前であった。

「姫様自ら危険を承知でおいでとは・・・」

小次郎は怪訝そうな顔したが逆に景虎はにこりと微笑んで返した。

小次郎は見つめられて思わず窮してしまった。

(いかんいかん・・・惑わされては・・・)

小次郎は軽く下を向きながら咳払いをした。

そして景虎一行を再度くまなく見てみた。

姫様と屈強そうな護衛の男たちと不釣り合いな集団であった。

そして小次郎は冷静になると再度思わず怪訝な顔をしてしまった。

景虎の格好である。

「失礼ですが・・・なんで道服なんですかね？」

戦勝祝いなのに道服では怪しいので念のため聞いてみた。

「この格好であれば尼さんみたいで安全じゃろう・・・」

新兵衛が言った。景虎もうなずいた。

「それに唐沢山城が落城しそうとのことと・・・唐沢山城に籠り辞世の句を読まれる皆様にせめてもの情けで念仏でも唱えてあげようかと思ひまして・・・」

景虎は涼しげに彼を見つめながら答えた。

「・・・さようでございますか・・・」

小次郎は関心しながら答えた。仏門に厚い姫様と思つたのであつた。それにしても景虎があまりに堂々と平然としているので小次郎も信用し始めていた。

「ところで・・・なんで越後軍旗なんじゃ？」

近くに居た別の兵士が念押しするように聞いてきた。

「見りゃあ分かるだろう・・・」

弥太郎が何言つてるんだと言わんばかりに答えた。

「上野国はすでに越後側・・・国を出る時に越後側の兵に襲われたくないからのう」

源蔵が答えた。

「ごもつともですな・・・」

小次郎はようやく納得した。

「氏政様にすぐに連絡します。しばしお待ちを・・・」

小次郎は了解した。

「ところで・・・お願いがあるのですが・・・」

景虎が小次郎に聞いた。

「何か？」

「唐沢山城の大手門の近くまで言って早速念仏を唱えたいのですが・・・」

景虎が毘沙門天を懐から取り出して言った。

「どうぞどうぞ・唐沢山城から撃たれないよう接近しすぎないようにして下さいね」

「ありがとうございます」

こうして景虎一行はなんなく北条軍の真っ只中に入ったのであった。唐沢山城の大手門の前まで近づくと中に居た佐野軍の城兵は越後軍旗を持った騎馬10騎が向かってくるのに気が付いた。

景虎は髪を素早く束ねると再度烏帽子を被って男装になった。

以前景虎に関東管領の祝辞式で会った佐野の使いの者が景虎を見て慌てて昌綱に報告した。景虎が敵の真っ只中駆けつけて来てくれたと。

景虎は城門についてしばらくして

「千坂・頼む・」

千坂はうなずくと

「長尾景虎、いざ見参！」

城門の前で大声をあげた。

しばらくして城門が開くと景虎一行はゆうゆうと唐沢山城の中に入っていた。

北条軍は何が起こったのかさっぱりわからず啞然とこの様子を見送っていた。

## 唐沢山城

「ふうっ・・・」

唐沢山城に入つて景虎は思わず安堵の声を出してしまった。

「やれやれ・・・なんとかなつたみたいだ・・・」

弥太郎や戸倉与八郎たちも景虎と同じようにふうつと安堵のため息をついていた。

彼らを見て景虎も思わずくすりと一人で苦笑いしてしまった。もつとも酒が入っているとはいえ自分の無謀ぶりにも半分呆れていたが。

「ご苦労であつた・・・」

景虎は迷惑をかけたとみなに礼を言った。

しかし安堵している暇はなかつた。

「これからが肝心ですが・・・どうします?」

秋山源蔵が景虎に聞いてきた。

どうやって北条軍を追い払うかである。相変わらずこちらが不利には違いなかつた。

「うん・・・少し考えよう・・・」

景虎は静かに答えた。

そのとき突然であつた。

「おお! 関東管領殿! お待ちしておりましたぞ!」

大きな声とともに赤い派手な古風な甲冑に身を包んだ貴族趣味風の男が千坂景親の元に息を切らしながら走つて駆け寄つてきた。

千坂の元に駆け寄つてきたのはおそらく彼を景虎と早とちりしたからである。

男は景虎と同じくらい若い男であつた。

目につつすらと涙を浮かべ感極まっているようであつた。千坂は少し引いていたが・・・

「唐沢山城城主の佐野昌綱でございます!」  
と勢い良く自己紹介すると

「我ら佐野一族は関東管領景虎様に忠節誓います！」  
と大声でひれ伏せ地べたに頭をこすりつけた。  
唐沢山城城主の佐野昌綱である。年は景虎より一つだけ上である。  
千坂も慣れたものですね、すぐに状況を把握すると景虎らしく振舞っていた。

景虎役の千坂は本気なのか楽しくやっていたのか分からなかったがとにかくよく合っていた。

昌綱を慌てて追いかけるように少し遅れてやって来た佐野家の武将たちも昌綱に続いて地べたに頭をこすりつけた。ただその中にいた山上氏秀だけはこの様子を当惑した顔で見ている。山上が当惑していたのは山上は景虎の関東管領の就任の挨拶の時に越後まで来ており男装の景虎に一度会っていたからである。道服の景虎を見て当惑していたのである。しかもそのときの景虎と今回の景虎は別人になつてしまっている。別人どころか別性にもなつていた。

当然であるが佐野昌綱は何も知らずに慌てて来たため千坂と景虎を勝手に勘違いしてしまったのであった。

しかも昌綱は感極まつており今更勘違いしていると言える雰囲気ではなかった。

ただこれは景虎にとっては好都合であった。千坂が景虎役をやってくれることで取り急ぎ鶴岡八幡宮での関東管領就任式での大衆の面前に姿を表す時までには千坂の景虎役で通すことができたからである。しかしこのような大事な情報を間違つて通してしまえば山上の立場にもかかわる。彼はしばらくどうしようとおどおどしていたが意を決するとそうつと昌綱に近づき、今挨拶しているのは景虎ではなく別人と言おうとした時であった。

「昌綱殿・・・この景虎とともに関東から魚鱗の衆を追い払おうぞ！」と景虎役の千坂が表情ひとつ変えずに答えたので

(えっ・・・???)

と驚きの顔を出しながらも何が何だかわからないと言った顔で彼は

下がったのであった。

山上もすぐに頭を地面にこすり付けた。

しばらくして昌綱は顔を上げると

「ところで・・・」

昌綱が千坂の景虎に声をかけた。

「差し支えなければ・・・あちらの姫様・・・失礼　女大将殿はいずこのお方で・・・」

と聞いてきた。

「姫様・・・女大将・・・？」

千坂は思わず聞き直してしまった。そして景虎を見た。千坂は景虎を見てぎよつとした。そして目で景虎に必死になにか訴えていた。

景虎もようやく千坂の何か言いたげな視線に気が付いた。

そしてその千坂の視線の先をたどってみた。そして

(・・・！しまった！)

景虎は到着して安堵のあまり烏帽子を脱いで髪をほどいてしまったのであった。女装に戻っていたのであった。

千坂も窮していた。景虎が油断して女装に戻っていたからである。

景虎は少し考えたあと少し齒切れが悪く

「平井城の千葉采女の伊勢姫と申します・・・病弱な父の代わりに景虎様のお供をした次第で・・・」

と苦しい言い訳をした。

「伊勢姫様が道服の格好で北条軍を欺いてくれたので今回うまく入れたのじゃ・・・」

金津新兵衛が助け船を出してくれた。

「さようでございますか・・・いやはや・・・姫様の機知のお蔭とは・・・姫様のおかげで我々は助けて頂いたようなもの・・・これはもしかや佐野家と千葉家のなんかの縁かもしれないな・・・景虎様に従い北条と闘う者同士頑張りましょう・・・関東が景虎様の元、平穩になつたら千葉様の元にお礼や今後のご挨拶に参らねばいけません！がははは・・・」



昌綱は感心しながら豪快に笑った。

景虎はにこにここと当惑しながら愛想笑いをしていたが。

「次の作戦指示まで待機しております！山上！景虎様一行を本丸へご案内せい！私は警護の兵に景虎様がいらっしやったことを伝え兵の士気を上げてまいります！失礼！」

昌綱は山上に景虎の世話役を命じると下がっていった。

「・・・お気に入られたようで・・・」

弥太郎がにやにやしながら景虎に声をかけた。

「・・・あまりにやにやして言っている状況ではないと思うが・・・  
珍しく千坂が弥太郎に突っ込んだ。

「少しまずいのでは・・・対応どうします・・・？本当のこと昌綱殿に言っただほうが良いのでは？」

源蔵も景虎に聞いてきた。

「・・・考える・・・」

景虎は困りながら答えた。

景虎一行が昌綱の対応をどうしようかひそひそ話をしているそばに  
山上が千坂に近づくと

「景虎様・・・本丸へご案内いたします・・・」  
と近寄ってきた。

山上は景虎役の千坂に声をかけた後ちらりちらりと何か納得行かない顔で伊勢姫役の景虎を見ていたが・・・

しかし佐野軍は敵陣真っ只中やって来た景虎一行に大いに勇気付けられた。戦局は景虎優位に動き始めるのであった。

一方北条軍もこの件で大騒ぎであった。

景虎一行を安々と中に入れてしまったことに関してである。

見張りの番だった小次郎たちは氏政ら軍の首脳の前に呼び出されていた。小次郎は今回の件の責任を取っての厳罰も覚悟していた。

しかし氏政の対応は意外なものであった。

あまりにも意外、というか単純な方法に引っかけたため怒る気が起こらなかったのであった。

また景虎たちが唐沢山城に入城したことを彼は好都合にとらえていた。

佐野昌綱と一緒に一網打尽で景虎を討ち取れると喜んだのである。

たった10騎で落城寸前の城に入っていくら味方を鼓吹したところで何が出来ようかとタカをくぐったのであった。

そのため小次郎は特にお咎めもなかった。むしろ氏政から褒められた程であった。

このような甘い判断にしたのはひとえに氏政の判断でもあった。

事を荒げ大きくして味方を動揺させるのは得策ではないと氏政が判断したのである。

小次郎を部隊に戻すと

「そんなことより・飯だ！飯！」

氏政は父氏康のように豪放に振舞ってみせて食事の支度を命じた。

「それにしても長尾景虎とは妙な人物ですな・」

松田憲秀が呆れ気味に言った。松田氏は北条早雲時代から北条氏の重臣である。憲秀は今回は氏政の副官として随伴していたが実は氏政の監視も兼ねていた。氏康の命令である。

氏政は先ほどの判断では無いが政治家としては優秀だが武人としては正直疑問符が父氏康からもつけられていた。

氏政自身もそれを大いに気にしており今回大軍を率い必勝体制で乗り込んできたのもそのためであった。

氏康も氏政が景虎と戦うことに不安を感じてはいたがそのために憲秀ら重臣をつけてきたのであった。これであれば大丈夫であろうと氏政はどかりと腰を下ろすとさっさと食事の準備始めた。

「ワシに手柄をくれる気であろうか・それにしても姫君を連れて包囲されている唐沢山城に自ら入るとは・長尾景虎は本当に戦上手か？」

氏政はご飯に何度か味噌汁をかけながら憲秀に冗談っぽく言った。ご飯に味噌汁を細かく何度もかけるのは氏政の癖であり趣味である。ちなみに氏康は氏政のこの癖を大いに気にしていた。氏康が言うには何で一度で済ませられないのかと・・武将であれば一度でそのくらの量の目測ぐらい立てると言いたかったのであった。

（飯へ汁かけは一度で済ますようにと氏康様も・・）

と憲秀は危うく少し物言いしそうになったが今回は黙っておいた。氏政と陣内で口論しても仕方がないからである。

憲秀は話を切り替えた。

「・・武田信玄公は随分景虎を褒めているらしいですが・・」

氏政は黙って汁飯をすすっていた。

信玄は氏政の婦人、黄梅院の父親だが正直苦手であった。なんか自分を小馬鹿にするような態度が苦手であった。

「むしろ・・同伴していたと言う姫が本物かもしれませんな・・」

清水康英は思わず本音を言った。清水も早雲時代からの重臣の一族で氏政と年が近く武人として氏政に仕えて行く男である。

景虎が女らしいとの噂話は北条でも話題になっていた。ただ誰もそれを信じてはいなかった。

女武将が武田信玄とまともに戦い関東管領の地位を得るなど信じられなかったからである。またもしそれが事実であっても軍の士気が下がるのでこの件は北条軍でも内緒であった。

「・・まあ・・良いわ・・」

氏政は話を打ち切った。

「早いとこ唐沢山城を落として祝杯を挙げたいものだな・・昌綱、景虎を一網打尽にして小田原への手土産じゃ・・全軍に総攻撃の準備させておけよ・・」

氏政は勝利しか確信していなかったのである。

「ところでさっきの件ですが氏康様への報告はどうされます・・？」  
憲秀が聞いてきた。氏政の顔が一瞬曇った。

(・・・報告することもなかるうに・・・)

と言おうと思つたが父氏康からのお目付け役の憲秀の前ではさすがに言えなかつた。

政治に長けた氏政は文化人でこのような言い訳はお手のものであつた。

「・・・景虎の勢いは鬼神も顔を背ける勇猛ぶりで兵士たちはなす術を知らず、夜叉羅刹とは是なるべしと恐れて手を出せなかつた・・・

とでも言つておけ・・・」

と報告しておくことにした。

氏政は汁かけ飯を一気に流し込んだ。

しかしこの適当な報告は後に現実になるとは氏政も憲秀たちも夢にも思つて居なかつた。

唐沢山城内は城内まで押しかけてきた北条軍と激しい交戦があつたようでも本丸近くの西城や三の丸まで近くまで侵入されたようでの付近は既に焼け落ちていたが唐沢山城の険しい地形のおかげで何とか佐野軍がなんとか城の外まで追いつ返し持ちこたえている様子であつた。佐野軍は良く我慢していたがもう余裕が残っている感じではなかつた。

その日の夕方 他の者が体を休めている間に景虎は越後軍宛への命令書を一気に書くこと佐野軍の伝令係に越後軍留守役の長尾政景にすぐに届けるように依頼した。

唐沢山城を北条軍は包囲してはいたが門等で入り口など要所中心でそれ以外は所々空きがあつた。佐野軍の伝令は地の利に詳しくその間を練つて越後軍に伝令を届けるなどなんら問題なかつた。

佐野兵は伝令書を受け取ると日が落ちると同時に闇夜にまぎれて越後軍駐屯地に走つていった。

「どうするんです？」

千坂が景虎に聞いてきた。

「明日のお楽しみ・・・今日は体を休めよう・・・」

と景虎は涼しい顔で言う。と静かに夕飯を食べ始めた。みな一瞬顔を見合わせた。が黙って食事を喉に通した。

翌朝佐野軍も北条軍も大騒ぎであった。

唐沢山城の西側に陣取っていた越後軍が突然姿を消したからである。

佐野軍は昌綱自ら景虎の元に飛び込んできて青い顔で報告した。

越後軍が逃げてしまったと思っただけであった。

しかし景虎役の千坂は落ち着き払っていた。

「大丈夫・・・昌綱殿・・・ちよつと食事に言っているだけでじゃ・・・すぐに戻ってくる」

と昌綱にとつては意味不明な回答をした。

「食事・・・でございますか??」

昌綱は啞然としていた。

伊勢姫も他の者を落ち着き払っていた。

昌綱は何がなんだか良くわからなかったが

「・・・さ・・・さようでございますか・・・失礼いたしました・・・」  
となんとも言えない表情をしていたが。

北条軍も大騒ぎであった。越後軍が忽然と姿を消したからである。

氏政にもすぐに報告がすぐに入った。

「どこに行った・・・?諦めて逃げたか・・・?まさかな・・・」

憲秀は怪訝そうな顔をした。後大急ぎで忍びの風魔の部隊に情報収集を命じた。

「越後兵がいなくなったら好都合だ・・・唐沢山城にすぐに総攻撃をかける!」

氏政はすぐに総攻撃命令を出そうとしたが

「お待ちください!妙です・・・畏かもしれません・・・慎重に!」

と憲秀の意見で命令を引つ込めた。

日も明るくなつてくるといろいろな情報が北条軍本陣にもたらされてきた。

どうも越後兵が唐沢山城内に密かに入つたよう所で所々佐野軍の旗に混じつて越後軍の旗も風になびいているとの情報が入つてきた。

「・・・偽装じゃ・・・！引つかかるか・・・そんなんに！」

清水はすぐにぺつとつばを吐きながら言った。唐沢山城は出入り口らしい出入り口はすべて包囲している。少数の兵はともかく大軍が夜中に密かに秘密の入り口があるうとそこから城内に入るのは絶対無理と言つたのである。

憲秀も同意した。少数の兵士が入つて旗だけ立て、兵士がいるように見せかけていると考えたのであろうと。物理的にも佐野軍と越後軍全軍と1万5千の兵の収容は無理と考えたのであつた。

では越後軍がどこに行つたかであるが彼らも越後軍が逃げたとは絶対考えていなかった。何か企んでいるに違いないと考えた。

「考えていても仕方ない・・・風魔の報告待ちじゃ・・・兵を落ち着かせろ！飯だ　飯！」

氏政が声を出してみなを落ち着かせようとした。

そのとき憲秀の頭に嫌なものがよぎつた。

（飯・・・まさか・・・）

氏政は相変わらず味噌汁を細かく何度もかけながら飯を食べていた。憲秀は黙つて飯を黙々と食べていた。その時であつた。風魔の者が大慌てで飛び込んできた。

羽生城が越後軍に襲撃されているとの情報が入つてきたのである。

羽生城だけではなく館林城　忍城　本庄城も襲われていることであつた。唐沢山城の南側の手薄な北条側の城を片つ端から襲つているとのことであつた。

「・・・クソ・・・補給を断ち切る気か・・・」

憲秀は薄々感じてはいたが不安は的中した。3万5千の大軍だと食

料の消耗は想像以上である。今回の食料は後方の本庄城などに置いてそこを駐屯基地として使っていた。そこを奪われたら食料不足でたちまち不利になる。

憲秀は決意した。

「殿！ご命令を！」

氏政もようやく悟った。長期になれば逆にこちらが不利である。

一気に汁飯を流し込むと

「攻め立てる！出撃！」

総攻撃の命令を下した。

「越後軍が帰って来るまでが勝負だ・・・」

氏政が独り言を言った。

「昌綱と景虎の首を取ったものには恩賞は好きなだけくれてやる！落とせ！」

氏政の掛け声と同時に北条軍は唐沢山城に四方八歩から襲い掛かってきた。

その日の昼であった。

「た・・・大変です！」

佐野昌綱が再度慌てて景虎の元に駆け寄ってきた。

「ほ　北条軍が・・・押し寄せてきました！」

昌綱の情報通り大手門と裏門から北条軍が押し寄せてきた。

しかし景虎役の千坂や伊勢姫役の景虎は落ち着いたものであった。

「心配無用・・・」

景虎役の千坂は目を閉じながら茶を飲みながら言った。

「今までの戦いで佐野軍は充分にこの城を守ってきました・・・大丈夫です・・・」

伊勢姫も茶を飲みながら静かに言った。

しかし今回の北条軍は気迫が違うように感じた。食料不足になるので必死であった。

「すぐに越後軍も来ます・・・ご安心を」

伊勢姫は静かに言った。

「兵が不安がつています・・・お声だけでも・・・」

昌綱は再度千坂の景虎に懇願した。

景虎役の千坂はうなずくとすぐに前線に向かうと言った。昌綱も少し安心すると慌てて指揮に前線に戻っていった。

「予想よりも早く動いてきましたな・・・」

千坂が言った。景虎もうなずいた。

「氏政殿もなかなかやるじゃないか！」

弥太郎が冷やかに混じりで声をあげた。

景虎は山上に酒を密かに持ってきてもらいそれを一気に飲むと唐沢山城の従女から借りたちようど良い大きさの単衣と甲冑を着込むとすぐに前線に出た。

大手門はすでに突破され三の丸は破られようとしており二の丸 本丸中心で佐野軍は必死に抵抗していた。

裏側も北城は落とされ金の丸まで後退していた。北条軍は全力で押しつけていた。

新兵衛 千坂たちも大急ぎで準備していた。

「千坂殿・・・早うせいよ・・・本物に先を越されるぞ！」

与八郎が千坂をからかった。

「急いでおるつて！・・・よし！できた！」

千坂も甲冑を着終わるとすぐに二の丸に出た。

佐野軍は少し動揺していた。北条軍の気迫にである。北条軍も後方が襲われ挟まれたら危険なのは充分に認知していたので必死であった。

景虎役の千坂は落ち着き払い堂々と張り切って景虎として号令を飛ばそうとしたその時であった。

どよめきと同時に

「ひるむな！」

高い大きな声が突如割って入ってきた。



なんと伊勢姫役の景虎が馬にまたがり太刀を振り上げて

「我は毘沙門天の化身！勝利は我らにあり！恐れるな！」  
大声で叫んだ。

振り上げた太刀がざらりと陽光を浴びて光った。このようなときの景虎は非常に格好が良く兵を奮い立たせるのは得意であったが今回は少し反応が違った。

（また・・酔っぱらい運転か・・）  
と新兵衛らは少し呆れていた・・

景虎役の干坂も大事な出番の出鼻をくじかれ啞然としていた・・

「・・お姫様が・・何ちゆうことを・・」  
と佐野兵もあつけにとられ仰天していたが今回は思わぬ助け舟が出た。

「われらの城を守るために来てくれた伊勢姫様までも奮戦されておるのじゃ！者ども恐れるな！」

昌綱が助け舟を出してくれたのであった。

景虎役の干坂も気を取り直し黙って威厳ある雰囲気ですぐに一言

「・・魚鱗どもを相模湾に追い返せ！」

と大声を出した。

「うおおお！」

何はともあれ佐野軍は再度士気を上げること成功したのであった。飲酒運転の景虎本人は空気を読まずにお構いなしであったが・・

北条軍首脳は戦況を見守っていたが

「少し・・手こずっているな・・」

氏政が少し苛立ち始めた。

「兵力はこちらが上だ！ひるむな！押しまくれ！」

憲秀は激を飛ばした。

「・・裏門の部隊で手の空いている者は越後軍の牽制に向かわせませるか？」

清水が聞いてきた。

唐沢山城の進路が狭く大軍であつても手の空いているものが多くそれが余計に城攻めを難

行させていた。越後軍がこちらに来た場合の牽制を提案したのであつた。

「・・・いや・・・城攻めに集中させる・・・」

氏政は命令した。

清水は軍事は多少自信があつた。提案が思わず断られたので不服そうであつたが従つた。

氏政は名前ではないが政治は自身があつた。ただ軍事は正直苦手であつた。

昨日も思つたが弟や叔父を連れてくればよかつたと内心後悔し始めていた。

武勇に優れた弟の北条氏照、氏邦や叔父の綱成である。

憲秀も同じことを考えていた。

唐沢山城攻めは相変わらず難行していた。

どうしても最後の本丸が落とせなかつた。唐沢山城の山上の狭い地形で大軍が生かせず、また戦にあまり慣れていない北条軍部隊のせいもあつた。

そのときであつた。警備の者から南方から部隊が接近しているとの情報が入つた。

「なに！？・・・もう・・・来たのか！？」

氏政は思わず声を出してしまった。

（ホレ・・・言わんことない・・・）

清水は内心呆れていた。

「本陣を安全な所に移動させましょう・・・」

清水が提案したが氏政は断つた。

兵士が動揺するからである。確かにそうであるが清水が一番恐れられたのは佐野軍と越後軍にこのままでは挟まれることを恐れたのであつた。越後軍に本陣が狙われたら総崩れである。越後兵は数が少ない

が一騎当たりの強さは戦慣れしているので自軍より優位なのは清水もわかっていた。しかもはやどうしようもないのも事実であった。越後兵が来たら全力で本陣を守り唐沢山城が落ちるまで持ちこたえるだけである。

## 言い草

南方から越後軍の部隊が近づいてくるのが唐沢山城からも確認できた。

「越後兵のお食事が終わったようじゃな！」

佐野昌綱が嬉しそうに大声を上げると佐野兵は盛り上がった。

北条軍も大慌てである。

「裏門の部隊！手の空いている奴は本陣に戻せ！守りを固める！」

清水康英は命令を下した。

「笠原殿は本陣の守備に！遠山様には引き続き唐沢山城攻めに集中してもらえ！本陣は固定！死守せよ！」

清水と同じく伊豆出身で裏門攻め手の笠原綱信は本陣に戻し守りを厚くし氏康の重臣で主に本隊を率いる遠山綱景には引き続き唐沢山城大手門を必死に攻め立ててもらい何とか突破を図った。

慌てふためく北条氏政や松田憲秀の許可などお構いなしである。

（戦場は政治家ではなく軍人が来るところ・・・）

清水の氏政や憲秀に対する率直な感想である。

「それにしても・・・分が悪いか・・・」

清水は思わず独り言を漏らした。

北条軍は平地に展開、立てこもる佐野軍は見晴らしの良い山上、平地では戦場の状況が判り難く数の上では優位ではあったが指揮の上では不利であった。

越後軍は北条軍の南側に陣取り隊を整え始めていた。

唐沢山城内では大激戦になっていた。

三の丸は落とされ二の丸と本丸周辺まで北条兵は迫っていた。完全に佐野側が押されていた。裏門も金の丸を落とされ長門丸まで迫られていた。

「あと一息！一息じゃ！」

北条軍の攻め手の武将遠山綱景が雄叫びを上げた。

「引くな！持ちこたえよ！」

佐野昌綱が必死に味方を奮い立たせ守っていた。兵士だけではなく佐野城内の使用人や姫君まで甲冑を着て動員されていた。

「よく引き付けてから・・・撃て！」

景虎も必死である。伊勢姫役の景虎が命令を出した。

昨晚密かに越後軍から少数持ち込まれた最新鋭の鉄砲部隊が轟音とともに北条軍に火を噴いていたがこれが思いのほか効果をあげていた。

景虎が信玄との旭山城での戦いをきっかけで本格導入を始めた鉄砲隊である。北条軍は鉄砲を知らない者が多かったのでその威力以上に音や煙、火薬の匂いで動揺して前線の部隊を混乱させていた。

佐野軍も弓矢だけではなく城内の瓦や石、木材など何でも北条軍に投げつけ必死に抵抗していた。

北条軍の南に展開した越後軍は展開を終えると北条軍に向かって進軍を開始した。

ほどなくして北条軍と越後軍との戦闘が始まった。北条軍首脳にも即座に情報がもたらされた。

「裏門の部隊を本陣の護衛に回せ！」

遅まきながら氏政が命令を出した。

「やっております！」

清水が即答した。

「大手門の部隊も回せ！」

憲秀も命令した。

「だめです！こっちが挟まれます！」

清水が断った。

「・・・もう挟まれておるだろうに！遠山殿に伝言せい！」

憲秀は苛立ちながら命令した。

「水の流れと同じで上から佐野軍に攻められたら終わりです！焦らず冷静に！」

清水が不機嫌そうに反論した。  
憲秀も黙ってしまった。

越後軍は北条軍の本陣目指して押し寄せてきた。北条軍の半分近くが唐沢山城の攻略に回っているがそれでも1万5千以上が本陣の護衛で固めていた。数の上ではまだまだ有利であった。しかし北条軍の動揺は激しかった。なかなか落とせない唐沢山城攻めからくる焦りからと補給を断たれる恐怖、騎馬を前面に出してきた黒ずくめの越後軍の雰囲気飲まれ始めたのである。

越後軍は既に午前中に北条側の城攻めを終え士気も充分に上がっていた。

「魚鱗の陣で迎え撃て！早く隊列整えよ！」  
清水が実質的に北条軍の指揮を取り始めた。本陣を底に三角の形状である。

しかしいやな情報が次々と清水の耳に入り始めていた。

越後軍の別働隊が唐沢山城西側にも現れ裏門から本陣援護へ大手門側へ移動中の笠原隊と交戦を始め押し始めているとの情報であった。  
「鶴翼の陣で本陣に誘い込んで挟み込め！」

北条氏が命令した。本陣を底にV字に展開して本陣に突っ込んできた越後軍を挟んで撃破する方針であるが本陣が強固でなければ単に本陣を危険にさらすだけであった。

「できません！」  
清水が再度即答した。

（あなたは父上氏康殿と違って武勇の人ではございませぬ！）  
と清水は危うく本音を言いそうになったのを必死に抑えた。

「敵は手強いです！氏政様を危険にさらさせませぬ！」  
清水の一言に氏政は黙ってしまった。

「笠原殿には裏門に戻って唐沢山城の北城から引き続き攻め込ませろ！絶対に引くな！」

清水は伝言役に命令した。

もはや遠山の部隊に一刻も早く本丸を落としてもらうしかなかった。

今回北条軍は越後軍の3倍、佐野軍と合わせても倍の部隊を集めてきた。唐沢山城内に部隊を回しているとは言えこっちの方が兵力は圧倒的に上である。勝てるはずであった。

しかし氏政本陣目指して牛のようにぐいぐい迫ってくる越後軍に対して北条軍が押され始めた。

「・・・何をしている・・・すっかり守らんか・・・！」

氏政も焦りの色を出し始めた。

「向こうの槍（春日槍）の方が長いようで歩兵を中心に苦戦しているようです・・・」

北条兵が報告を上げてきた。

「数で押さんか！まったく！」

憲秀は不機嫌であった。しかし一向に旗色はよくなるらない。唐沢山本丸の攻略も遅々として進んでいなかった。裏門に回した部隊が越後軍の別働隊に襲われ戻しができなくなり本陣周辺が確かに手薄になっていった。情勢が明らかに越後軍有利になりだした。氏政の元にも越後兵雄叫びが時折聞こえるようになってきた。氏政も正直不安を思い始めた。

「・・・本陣なんとか持たせろ・・・城内の兵は何をやっている！」

清水までも焦りを押し殺すように言った。

本丸南側の遠山隊は必死に押していたが佐野軍の必死の抵抗や景虎の鉄砲隊の煙で半分混乱状態であった。しかも狭いところに多くの兵士が集まりすぎていた。本陣が襲撃されているとの情報も帰れなくなるとの不安から余計に混乱に輪をかけていた。

ここで北条軍の動揺が思わぬ間違いを生んだ。清水が絶対に引くなと命令していたが命令が行き渡らずに裏門から侵入した北条軍は攻

略がままならぬ上に氏政本陣や援護に向かった笠原軍が襲撃されていると聞き浮き足だち後退を始めたのであった。

兵士を広く展開していたため統制がとれなくなっていたのである。しかも越後軍が本陣を集中攻撃していたので指揮が行き渡らなくなっていた。

裏門からの北条軍が後退を始めたのを見て佐野軍は勢い付いた。大手門側の遠山の部隊も動揺が入っていた。しかし遠山は清水の意図がわかっていた。

「無理に戦わなくても良い・・・！とにかく二の丸から絶対引くな！ここに踏みとどまれ！」  
命令を切り替えた。

佐野城内もめまぐるしく動いていた。唐沢山城の上からは戦況が手に取るようにわかった。

北条軍は唐沢山城の大手門周辺を本陣にしてそれを軸に魚鱗の陣で陣形を取っている。越後軍も押しているが数が多いだけあってさすがに手間取っているようであった。

景虎は北条軍の圧力が弱まっていることにすぐに悟った。北条軍の攻め手が防衛体制に切り替えたことを。

景虎は千坂を呼ぶとひそひそと命令を伝えた。千坂はうんうんとうなずくと昌綱を呼んで指示を出した。

城門を開いて外に出て二の丸の敵部隊を突破して一気に大手門へ駆け下り北条軍背後に襲い掛かると。

昌綱は仰天した。

「兵が疲れております・・・今すぐはとても無理かと・・・」  
昌綱は弁解した。しかしすぐに伊勢姫が口を挟んだ。

「佐野軍の働き素晴らしく確かにみな疲れているとは思いますがそれは敵も同じ・・・しかも敵は本陣の背中を大手門に向けています・・・水は高いところから低いところに流れます・・・今佐野軍が水のように



に流れ落ちれば北条軍本陣の背中を突くのはたやすいでしょう・・・」  
「なるほど・・・」

昌綱は思わず感嘆の声を出してしまった。

「分かりました・・・すぐに精鋭を編成します！お待ちを！」

昌綱は大急ぎで部隊の編成に飛び出していった。

「それにしても・・・女子と酒の勢いはすごいな・・・」

千坂までが思わず景虎の判断に感嘆し思わぬ声を出してしまったとき思わず伊勢姫に睨まれてしまい千坂は慌てて咳払いをしてみましたが・・・

清水は裏門の笠原隊が裏門を放棄して本陣救援に向かっているとの情報を聞いた。

氏政や憲秀は喜んでいたが清水は苦い顔で報告を聞いていた。遠山隊まで同じ行動を取ったら終りであると。

ここで清水も少し言葉の間違いを犯してしまった。

伝言役の兵士に

「遠山殿はまだか？」

と聞いてしまったのである。

清水は

「攻略はまだか？」

と聞いたのであったが伝言役の兵士は

「まだ救援に來ないのか？」

と解釈したのであった。

遠山にもすぐに伝言が伝えられた。

「・・・救援に來いたと・・・!?」

遠山も思わず声を上げてしまった。そんなに分が悪いとは思えなかった。

しかし救援依頼は断れない。

「うぬぬ・・・」

遠山は迷ったが決断した。半分の部隊が唐沢山城を降り本陣救援に

向かった。

この動きは景虎にもすぐに伝えられた。大手門からの攻め手の半数が山を降り氏政本陣の救援に向かったと。裏門の部隊は完全に撤退したのも確認した。景虎はすぐに命令を出した。

全軍一気に北条軍本陣目指して襲撃せよと。

千坂はすぐに昌綱に命令を出した。昌綱もすぐに状況を理解し勝利を確信したのか全軍に出撃命令を出した。

一方清水は仰天していた。裏部隊の笠原隊だけではなく大手門攻略の遠山隊までもが救援に来たことである。

状況はそれほど不利ではなかった。越後軍は押しはいたが数の差で攻めあぐんでいた。

清水は思わず声を上げてしまった。

「何しにきた！？わかっておるのか？」

伝言役の兵士は戸惑っていた。

まだか・・・というのでまだ救援に来ないのかと解釈したと戸惑いながら言った。

(しまった・・・)

清水は自分の言葉の手違いに後悔した。しかし後の祭りであった。

「康英・・・部隊が厚くなって守りやすい・・・良いではないか・・・」  
氏政の一言が余計にむなしく響いた。

氏が政が防御が硬くなったと喜んでいる間清水はいろいろ考えていた。そして思い切って氏政に提案してみた。

越後軍を一度後退させ、隙が出来たら部隊を関宿城に後退させて隊列を整え直したいと提案した。

しかし氏政や憲秀の答えは素っ気無い物であった。

向こうが攻めあぐんでいるのに後退する必要は無かるうと言ったのである。

清水は本陣が佐野軍の真ん前で無防備な現状の位置を変えたいと言いたかったのであったがまた選んだ言葉が悪かった。彼の気持ちは伝わらなかった。清水は政治家相手に話をする難しさを痛感した。

本陣で悶着が続く間 唐沢山城山頂は再度戦闘に入っていた。城の中から撃つて出てきた佐野軍と遠山隊の戦闘が始まっていたのである。

遠山隊は既に唐沢山城を攻略できなかったことによる疲れと部隊の半分が本陣の救援に回って兵力が半減していたためじりじりと後退を始めていた。

遠山は伝令役の兵士に大急ぎで命令した。

佐野軍が本陣目指して動き出した・・・退去されよと・・・

本陣で本陣の場所をどこに移動するかの説得が遅々と清水から氏政、憲秀に行われているとき、遠山隊からの伝令兵が慌てて飛び込んできた。

佐野軍が本陣目指して籠城を解き進撃開始・・・本陣退避されたし・・・と

「なにい！！」

清水は血の気が引くのが自分でもわかった。

「すぐに氏政様、憲秀様だけでも退去を！」

清水は大慌てで大声で命令を出した。

その時であった。唐沢山城側から大きな声がしたと思うと城から飛び出してきた佐野軍が遠山隊を撃破して北条軍本陣に突進して来るのが目でも確認できた。

氏政、憲秀もようやく事態の深刻さを悟ったがもはや手遅れで勝負はあった。北条軍は背中の本陣を突かれてあっけなく潰走した。

北条軍はこの戦いで千人以上が討ち取られる大打撃を受けたのであった。

関宿城まで命からがら退散した氏政や憲秀ら北条軍首脳は一度は関宿城で抵抗するそぶりを見せるが関東の諸将を味方につけることができずに結局小田原に後退することになった。関宿城の古河公方の足利義氏も彼らを追うように千葉胤富とともに関宿城を放棄して結局小田原まで撤退していった。

空き家になった関宿城には築田晴助が入城した。築田は景虎陣営の武将として関東で活躍することになる。

足利義氏は氏康の娘の嫁ぎ先であり、また氏康が北条家による関東支配の正統性の口実にしていた人物である。景虎も彼を捕らえることができなかったのは少し後悔していた。

小田原への帰り道、馬の背中に揺られながら氏政は肩をがっくりと落としていた。

女大将と噂される景虎に負けたこと以上に大軍を率いながら敗退した自分の軍才の無さにある。ただ今後は戦は弟や部下に任せようとも強く思った。

憲秀も同様であった。今後は戦の現場に口を挟むのはやめようと考えていた。今回自分は氏康から氏政のお目付けを命じられていたが実はお目付けをされていたのは氏政ではなく自分ではなかったのではないかとの思いもあり余計にしよげていた。

清水も遠山も同様である。大軍で負けたショックを隠し切れなかった。

清水や遠山はむしろ越後軍の強さを評価しており北条の夢の今後の関東制覇の大障害を懸念していた。

暗い雰囲気の中

「ところで・・・氏康様にはどう報告を・・・」  
憲秀は氏政に聞いた。

「前も言っただろう・・・」  
氏政は疲れきった声で言った。

「・・・景虎の勢いは鬼神も顔を背ける勇猛ぶりで兵士たちはなす術

を知らず、夜叉羅刹とは是なるべしと恐れて手を出せなかった・  
でいいだろう・・・」

一方唐沢山城でも別の騒ぎが起きていた。

北条軍を追い払い一安心したのもつかの間、佐野昌綱が平井城の千葉采女へ伊勢姫の紹介を求めてきたという。

できれば側室、もしくは客将として伊勢姫を迎え入れたいと切望しているとのことであった。

昌綱は景虎役の千坂に頼み込んで来たと言う。あまりの意外な内容に景虎も思わず肩の力が抜けてしまったが。

「・・・どうします？本当のことを言った方が良いのでは？」

さすがに千坂もこれ以上の演技はまずいであろうと言いたげであった。

景虎もいつまでも隠し通せるとは思っていなかったが、北条打破、もしくは鎌倉で予定している関東管領の就任式までは自分の本性の件はどうしても伏せて起きたかった。

「・・・男性に興味の無い方だと言っておいて・・・」  
と千坂には命令しておいた。

「側室の件はともかく・・・それでは客将に欲しいの言い草になりませぬ・・・」

新兵衛が横槍を入れた。新兵衛も千坂と同じ事を考えていた。

「困ったな・・・許婚いいなすけがいるとでも言うておいて・・・」

「・・・誰と・・・？」

「・・・任せる・・・」

「・・・え・・・？」

(・・・まったく・・・阿虎様は戦以外はちよつと適当なところがあるからのう・・・いつも面倒なことになる・・・)

千坂は少し呆れ気味な顔をしていたが仕方が無い。

景虎は戦は緻密な天才的な攻略が得意だが私生活や言動は結構適当な点多かった。

今回の件もそれである。

「ところで・・・」

千坂が真剣な顔で言ってきた。

「・・・？」

景虎が不思議そうな顔をする

「私の存在・・・どうなります？」

千坂が影武者になってしまい彼の存在がなくなったことが彼は少し不服であった。

「春日山城の秘蔵の番人つてことで頼む・・・」

景虎は申し訳なさそうに答えた。心なしか千坂は少ししょんぼりしているようであった。

千坂は昌綱に返答に行くとして出て行った。

景虎はすべてが一段落してふうつと安堵のため息をついた。

「ところで・・・」

金津新兵衛が小声で聞いてきた。久々に新兵衛と二人きりになった。

「いやな話で恐縮ですが・・・伊勢姫ではありませんが・・・婿の件はどうされるので・・・？」

景虎は少し黙った後

「婿が欲しい気もあるが・・・今は義景を後継に考えている・・・もし婿が来たら越後が乱れてしまうであろう・・・」

義景は長尾政景の長男である。政景は姉の仙桃院の夫である。ただ政景が家臣団では実力はともかく人気の面では優れないのは景虎も認識していたが今はそれしか考えられなかった。

しかし新兵衛の返答は多少予想していたとはいえ思いの他厳しいものであった。

「仙桃院様の夫の政景殿の長男だから安泰とも限りませぬ・・・まだ時間はありますので・・・ご考慮を・・・」

景虎は黙って目を閉じた。

新兵衛は景虎にとっては育ての親で実の父為景以上の存在である。

思い切つて本音を言つてみた。

「鎌倉將軍のように・・・越後に縁の無い都から迎えいれればみな納得するだろうか・・・」

鎌倉時代の源実朝が実子がいなかったため藤原家から養子を迎え入れたことを言いたげであつたが新兵衛はすぐに景虎の都への憧れの病がまた始まつたかと思つたが今回は特に何も言わないことにした。都からか関白が下る件もふと思ひ出したが正直うまくいくとは思つていなかったがこれも伏せた。

「良いかと思ひます・・・雛人形にしておけば・・・」

新兵衛も本音を言つた。

「・・・雛人形か・・・」

景虎は独り言を言つた後しばらく黙つていた。

## 悩み

甲斐の府内の躑躅ヶ崎館の武田信玄の下に景虎からの親書が密かに届いていた。

平坂名書きの配慮の効いた丁寧な文章であった。

返答が遅れたことの詫びから始まり前回の勘助殿からのご要望了承いたしました・・至急お話ししましょう・・と書かれていた。

信玄は景虎の親書を読み終わるともうひとつの親書にも目を通した。北条氏康からの親書であった。

景虎が大軍を集めて小田原を目指しており至急信濃か上野に進入して背後から越後を脅かして越後軍を後退させて欲しいとの依頼文であった。

信玄も既に景虎が3万5千の北条氏政率いる北条軍を半分の1万5千の佐野との合同軍で唐沢山城で撃退し小田原に追いついた情報は知っていた。

信玄の娘の黄梅院の夫の氏政は一応義理の息子であるが政略結婚で義理の息子になっただけと信玄は氏政に対してはそれ以上の感情を持ち合わせてはいなかった。

感情があるとしたら大事に育てられたお坊ちゃま程度にしか思っていないがさすがに義理の息子とはいえ今回の無様な敗戦はいくらなんでも信玄も少しげんなりした。

(氏政の奴・・だらしない・・)

これが正直な気持ちであった。信玄は思わずぶすつと顔をしかめてしまった。

「唐沢山城の件ですか・・？」

信玄龍臣の弟の武田信繁が信玄の浮かない顔を見て察してきた。

「・・ふむ・・」

信玄は普段の表情に戻りうなずいた。

「・・さすが景虎ですな・・」



山本勘助は正直に言った。

信玄は軽くうなずき少し黙った後

「娘の氏政に対する気持ちが変わるかな？」

冗談っぽく言った。

「・・・それは無いでしょう・・・氏政殿は優しいのが取り柄ですから・

」

高坂弾正昌信が返した。

「・・・黄梅院様をご懐妊のようで・・・氏康殿は今回の敗戦どころではなく生まれてくるお孫さんのためにと小田原城に大規模な籠城作戦を指示しているとか・・・」

信繁が少し呆れ気味に言った。

黄梅院は氏政に大変気に入られ既に子室に恵まれていたが今年2人目を産む予定とのことであった。

氏康は氏政の今回の失態はお構いなしに産まれてくる孫に小田原城をしつかり渡すために必死に守りを固めていると言う。

「・・・孫のためか・・・ふうむ・・・」

信玄も気持ちはよくわかったが少々呆れ気味に言った。

「景虎が・・・ようやく和睦に応じるようだか・・・」

信玄は景虎の手紙に目をやると口を開いた。

「しかし同盟相手の氏康殿の救援依頼も断れますまい・・・」

信繁が言った。

駿河の今川 甲斐の武田 相模の北条の同盟関係はしつかり機能していた。

甲駿相三国同盟である。

お互いの子息を婚姻させて行われた結束の固いものである。

信玄の娘の黄梅院が氏康の息子氏政に、氏康の娘が今川義元の息子氏真に、今川義元の娘が自分の長男義信にそれぞれ嫁いでいた。

「・・・しかし景虎殿からの和睦も無視できませんぬ・・・」

高坂も信玄の気持ちを代弁するように言った。信玄が軽くうなずいた。

「困ったのう・・・」

信玄はため息をついた。

「板挟みじゃな・・・もてる男はつらいわ・・・」

信玄はわざとらしくにやけ、頭を掻きながら悪い冗談を言った。

「今川は救援に行くのだろうかのう・・・」

信玄は独り言のように言った。

駿河は今川義元が前年に桶狭間で尾張の織田信長の奇襲を受け戦死した後、息子の今川氏真が後を継いでいた。しかし義元に比べると氏真は精彩に欠いていた。義元の死後今川家に元々は従属していた三河の松平元康の独立を許し、その元康は尾張の織田信長と手を組み三河を巡り今川と争いになっておりそれほど余裕がないと聞いていた。この松平元康は後に江戸幕府を開くあの徳川家康である。

ただ氏康もそんな氏真にまで救援依頼を出していると言い氏康が相慌てているのも事実であった。氏真も義理堅く軍を派遣する段取りだと言う。

駿河は義元亡き後氏真が一応後を継いでいたが実権は氏真の祖母の寿桂尼が国政を仕切っていると噂されていた。寿桂尼は氏真の祖母、義元の母にあたるが実は義元以上に権力を持っているのではとの噂も以前よりしきりであった。義元の駿河の大名になった経緯も複雑で彼は元々跡取りではなく無用な跡目争いを避けるために寺で出されて僧になっていたのだが今川家の後継者争いの時に義元の実母である寿桂尼の強力な後押しを受けて還俗して力づくで今川を受け継いだという。義元を押し立てた寿桂尼は女戦国大名と密かに呼ばれていた。

信玄も彼女には借りがあった。信玄の妻である三条の方の縁談の斡旋をしたのは実は彼女であった。なぜ今川義元の母が信玄の妻の斡旋してくれたのか言うと言義元の妻、定恵院は信玄の実姉であった。彼女は天文19年（1550年）に既に亡くなっていたが先ほども話したように義元と姉の間に生まれた娘の嶺松院が今は息子の義信の元に嫁いでいた。

そのような縁で駿府には信玄が追放した父信虎も身を寄せていた。血縁関係上ではお互いに離れられないような深い関係になっていたのである。

「それにしても・・甲斐の上 越後は景虎・・下の駿河は 寿桂尼か・・手ごわい女子衆に挟まれておるわ・・」  
信玄は苦笑いしてしまった。

信玄は景虎の関東管領就任を歓迎していなかった。源氏の系統で家柄の高い武田より家柄の低い平氏の長尾が自分より高い官位を得るのが不愉快だったのである。関東管領の統治国に甲斐が含まれているのも不愉快であった。しかしそれは表向きの理由で本音は景虎が関東管領に就任したことによって甲斐や信濃の土豪に動揺が見られた点の方を懸念していた。

特に外様ではあったが優秀な真田幸隆までもが関東管領就任祝いの挨拶に行きたいと申請があったときは正直驚いた。

この時は信玄は許可するつもりはなかったが勘助や弾正が今景虎の機嫌を損ねることで景虎との和睦交渉の障害になってはならない、また逆に許可しないことによって甲斐領土内での関東管領の地位を上げかねない、幸隆の自由にさせるべきと主張したので渋々であったが許可したのであった。

表向きは信玄は関東管領の地位など興味も関心が無いように振舞ったのである。

信玄は景虎に関東管領として大きな顔をされるのも嫌であったがその一方実力は認めざるを得なかった。今まで景虎率いる越後軍とは川中島で三度戦い信玄が言うには姫様への手加減と自分の気持ちもあって本気になったことはなかったが、それにしても景虎の自分に対して一歩も引かない態度と今回唐沢山城で北条氏政の大軍を破ったことで景虎の実力を認めざるをえなかった。

信玄は以前より斉藤道三亡き後の美濃に行くと言っていたが実は本音は少し変わりつつあった。

義元亡き後の駿河が気になりだしたのであった。

松平元康も三河の次に遠江、駿河を狙っている噂され急に黙っていられなくなったのであった。

美濃は都に近く国土も肥えている。美濃全土を治めるのは無理としても玄関先の濃尾平野の東端の遠山城くらい押さえておきたかった。信玄が美濃に興味を持ったのは斉藤道三が息子の斉藤義龍に討たれたと聞いたからである。大名の変わり目は国捕りの絶好の機会と捉えたのであった。

しかし道三の跡を継いだ斉藤義龍が予想以上に優秀な武将で今川義元をあつさり葬った織田信長でさえ手を焼いており何度も追い返されていた。信玄も一筋縄ではいかないと気が付いたのである。

それで急に駿河に気が向いたのであった。しかし駿河に入れば今川と北条との同盟が破綻する可能性があった。

甲駿相三国同盟、息子義信と義元の娘の婚姻、姉の件、父の件、氏政に嫁いだ娘の黄梅院の件など先ほどの話の繰り返しになるが障害だらけであった。

さすがの信玄もこの件は表立って口には出来なかった。

もし口にした場合家臣団の動揺は景虎の関東管領就任以上が予想された。

特に息子の義信は人質夫婦とはいえ今川から嫁いだ義元の娘嶺松院とは仲が良かったし義信の後見人である飯富虎昌は信玄の重臣、いや父信虎時代からの武田家の重臣中の重臣で武田四天王の一人と称される勇猛な武将である。下手をすると甲斐が分裂しかねなかった。そのため信玄もいつ話を切り出したら良いかも自分でもわからなかった。それほど微妙な問題であった。

ただ信玄は松平元康に取られるくらいならなんとしても駿河が欲し

かった。もちろん甲斐のためで。そして目指すは・・・まだ夢の夢であつたが西進して都であつた。

景虎は関東管領にしか興味がないと聞いていたのでそれを満足させれば自分の邪魔はしてこないのではと思つたのである。

ただ万が一にも北条が景虎に下るとその勢いで景虎が気分を変えて関東管領名目に甲斐に来る可能性もなきにあらずであつた。

小田原から甲斐は奥多摩や小仏峠を通つてすぐである。

その場合は即ち和睦である。景虎が今川や徳川、織田と組まないようにすることが必須であつた。

ただ信玄の本音は北条を滅ぶほど弱体化させずに景虎の基盤も現状のままが彼の希望であつた。

景虎をとるか北条をとるかではなく両天秤かけたかつたのであつた。

「はてはて・・・どうするかかう・・・」

信玄はあれこれ考え頭を悩ましていた。

いろいろ悩んだがまずは同盟を優先し北条を援護することにした。

もちろん小田原が落ちないという前提である。

小田原が持つたら氏康の要望通り川中島にちよっかいを出すことにした。

氏康は景虎を挟み撃ちするために上野への侵入を希望していたが上野は最後の関東への重要な出入りである。景虎を本気にさせたくないかつたし西上野の箕輪城にはうるさい長野業盛もいた。信玄は景虎と本気で争うつもりはなかつたので越後軍をおびき出して北条に恩を売る程度にしたかつたのである。

唐沢山城から越後軍陣地に戻つた景虎は皆をねぎらつた。

「あんまり無茶はしないでくださいね・・・」

長尾政景らを中心とした留守役の家臣団は少々辟易していたが・・・佐野昌綱をねぎらつた後、景虎ら越後軍は一行は関東の拠点の厩橋城に戻つた。

だが唐沢山城の戦いの勝利は大きかった。唐沢山城での勝利で関東の諸将の気持ちが一気に景虎側になびいたのであった。

元々上杉憲政の家臣でその後氏康に従っていた智将二人がまず景虎に味方することになった。

武蔵野国松山城と岩槻城主、大田資正ともう一人の古河公方、足利藤氏の祖父にあたり今回氏政らが放棄した関宿城をそつなく乗っ取った築田晴助である。

この二人の工作のおかげで武蔵国からはさらに忍城城主の成田長泰も景虎に付くことを伝えてきた。

北関東からも北条に敵対する常陸国の佐竹義昭、小田氏治、下野国の宇都宮広綱、小山秀綱、那須資胤、房総からも下総国の結城晴朝、上総国の里見義弘が参上することを伝えてきた。

唐沢山城の勝利で小田原攻めの十分な兵力を集めるのに成功したのであった。

景虎も越後随一の自慢の猛将、柿崎景家、宇佐美定満と肩を並べる春日山の智将で留守役直江景綱を呼び寄せ万全と体制をとった。春日山城の警備が手薄になるが和睦の返答を出した以上信玄もおそらく動かないであろうと判断したのである。

景虎に呼び出され早速厩橋城に到着した直江と柿崎はなぜか訝えない顔をしていた。

そしてその到着次第の第一声は意外な言葉だった。

唐沢山城の勝利祝いではなく

「近衛殿をいつから春日山の番人にされたので・・・」  
であった。

「何？まだ春日山にいたのか？」

中条藤資が驚きの声をあげた。景虎も驚いた。

実は前年永禄3年（1560年）の春に日本海航路を使って近衛前嗣が越後に来ていた。

何かをしに来たのではなく表向きは景虎が建立した越後宝幢寺の建立式典に来たのである。この寺の建立式典の主賓は前上洛時に女人禁制の高野山に行ったとき白拍子の格好をして無理矢理入れてもらい世話になった高野山の高僧、清廉をお願いし越後まで来てもらっていたのだが前嗣がどこでその噂を聞きつけたのか清廉と一緒に来てしまったのである。

もちろん景虎も前嗣の下向の件は前回上洛時に了承はしていたが正親町天皇の即位式が終わってからと決めていたので即位式の前に着たのははつきり言って予定外であった。

景虎も朝廷との関係を重視していたので即位式をほっぽりだしてまで越後に来た前嗣の熱意や気持ちに感謝しつつも対応に苦慮していた。

苦々しい顔をしている三好長慶や足利義輝の顔を思い浮かべてしまったのである。

もちろん朝廷や幕府を怒らせて関東管領の就任の件が取り消しになるのも怖かったのである。

しかもこの年は春先まで景虎に味方する椎名康胤に頼まれて神保長職討伐に越中に、夏には打倒北条のためにすぐに厩橋城に出発する予定で前嗣どころではなかった。

景虎も前嗣に正親町天皇の即位式には出席してそれから関東下向を何とかお願いし、前嗣も了承したように見えたので景虎も安心して厩橋城に出陣して行ったのであるが前嗣は結局都に戻らず春日山にそのまま居座っていたとのことであった。

前嗣の正親町天皇の即位式の欠席の件は清廉や京都留守役の神余親綱が朝廷や幕府へ理由付けをしてくれたように特にお咎めが無く景虎はそれが何よりも一安心であったが。

ただ再度清廉には再度世話になってしまったが。

直江も柿崎も前嗣が春日山城にしばらくやつかいになるかもしれないとは聞いていたがこれほど長期になるとは予想していなかった。

景虎も然りである。またおそらく直江や柿崎と公家の文化が合わな

かったのであろう、それで辟易しているようであった。

「春日山城を出るときもまるを連れて行け連れて行けと……まったく公家様のお守りはとてもできませぬわ……」

柿崎もほとほと呆れ気味であった。

「ご苦労だった……とりあえず北条が一段落ついでから関東に出てきてもらおう……」

景虎もため息をつきながら言った。

「……何度も言っておりますが北条は手強いですぞ……そう安々と……」

思わず宇佐美が口うるさく口を挟んだが

「……わかっている……」

景虎はすぐに遮った。

「しかし本気で下向するつもりだったとは……驚いたな……」  
色部勝長が感心していた。

「即位氏が面倒だったので遊山気分で都に帰らなかったんじゃないのか……」

長尾藤景はうがった見方をしていた。

「……フン……足手まといは御免だな……」

本庄繁長も公家に何が出来るかと言わんばかりに言った。

「……二人とも関白様に無礼な事を言つてはならぬ……権威は大事だ……それで戦が収まることだつてある……」

珍しく景虎が藤景と繁長をとがめた。

「……そううまく行くかな？」

繁長がまだ不満そうに言った。

「……そのためにわざわざ都に行ったのだ……何としてもうまくやる……」

景虎も厳しい顔で返した。

本庄実乃 直江景綱 宇佐美定満は景虎の権威を前面に押し出してやるやり方に黙ってはいたが内心は今の時代では通用しないとは思っていた。若手の間でも長尾藤景や本庄繁長のように景虎の古典的



な権威主義な点は不満に思う者もいたがしかし実力が最後である。景虎の酔っ払い運転癖や情緒的で感情丸出しの判断にはみな辟易していたが戦の時の神懸りのな作戦能力はみな景虎の実力として認められていたので付き従っていたのである。

ただ越後の実情は表向きは団結していたが実態は緩やかな領主間連合に過ぎず景虎が直接支配している地域は少なかつた。支配地域だけで見ると景虎も小領主であつた。それでも景虎の財政が豊かだつたのは日本海交易や青芋の独占、偶然越後にたくさんあつた金山銀山の莫大な純利のおかげであつた。

しかしこれは逆の不幸を生み景虎は領土には関心を示さなかつたのであつた。これは後の越後の諸問題にも繋がっていく事になつた。

春になり景虎の元には予定通り関東諸將が軍勢を率い続々と集まつてきた。

実に予想以上に10万近い大軍が集まつたのである。有名武将意外に見ず知らずの土豪たちもたくさん来ていた。

今回は景虎の影武者の千坂が最初に対応した。今までの景虎役の経験が物を言い彼の景虎役の演技は手馴れたものである。景虎は今回は千坂役になつた。千坂が自分がないと不満気味だつたのと指揮が必須であるからである。髪を烏帽子内に束ね常に千坂の後方隠れるように入り目立たぬようにした。相変わらず男装の麗人なので余計に疑われるのがいやであつたからでもある。

佐野昌綱は今回は唐沢山城での戦いからの復興で参戦しなかつたが景虎にとっては逆に好都合であつた。

ただ情報に鋭い太田 築田 成田は影武者の千坂を勘繰っており成田にいたつては千坂役の景虎に近づきじろじろ彼（女）を見つめて景虎を困らせていたが。

厩橋城に集まつた大軍に

「それにしてはすごい数じゃのう・・・」

中条藤資が思わず驚きの声をあげた。

城に入りきらない兵士が周囲に溢れている。

「一気に北条を落とせるな！」

北条高広も満足げだった。

「おぬし代わりに小田原をもらったらどうか？」

中条が冗談を言った

「小田原城主はホウジョウウからキタジョウウに領主変更か！漢字は同じ！書類の手間が省ける！悪くない！」

北条もまんざらではなかった。

「なにを阿呆な話しとるんじゃ・・・」

宇佐美が口を挟んできた。

「なんじゃ・・・否定的じゃのう・・・宇佐爺は北条を買いすぎじゃないのか・・・？」

北条が口を尖らせた。

「小田原城は手強いらしいぞ・・・すごい城らしい・・・簡単にはいかんじやろう・・・」

宇佐美が軒猿からの情報を正直に伝えた。

長尾藤景も心配そうであった。

「奴ら見てみるよ・・・兵士か？あれが・・・」

心配そうに集まっている兵士を指差した。

越後軍とは違い装備や武装はばらばらで丸腰の農民と区別が付かない者もたくさん混じっていた。

「これは面倒だな・・・」

斉藤朝信も暗い顔をしていた。

彼らは統制が取れないことを危惧していたのである。越後軍の強さは統制であった。

景虎の命令に迅速に動くところが強さの秘訣であった。

それが出来なければ越後軍もただの鈍い大軍となんら変わりがなかった。

統制の取れない鈍い大軍が意外な脆さを持っているのは桶狭間で織

田信長が今川義元討ちとつた時に証明している。

景虎も不安そうに集まった兵士を眺めていた。聞けば10万近くも集まったという。

関東管領の名の下に予想外の大軍が集まって荘厳であつたがこのよ  
うな大軍は景虎も誰も扱つたことがなかつた。正直言つて不安であ  
つた。

しかも越後軍だけでなく他国との合同軍であつた。何もかも初めて  
づくしであつた。

「狼藉は禁止せよ・・・」

早速命令を出した。関東管領軍は正規軍である。正規軍が狼藉など  
してたら賊軍である北条軍と逆になってしまう。命令は厳守するよ  
うに伝えた。守れなければ厳罰に処すと伝えた。

しかし景虎の不安は早速的中した。

兵力が大き過ぎて補給に大きな弱点を抱えていた。前年より厩橋城  
に食料など大量の補給物資を搬入していたが集まった兵士の数が予  
想以上で不足は目に見えていた。

しかも実は関東は前年より飢饉に襲われ著しく食料が不足しており  
徴収も芳しくなかつた。この食料不足時にまず北条軍の唐沢山城合  
戦に始まり今回の小田原城攻防戦で大軍が動くことによる農村部か  
ら食料の強制徴収で関東の農民が悲鳴をあげていた。

関東管領軍内部でも未曾有の大軍で統制が取れないと最前線の将校  
の斉藤、北条、繁長や資景からも悲鳴が入ってきた。

待機していればしているほど食料ばかり無意味に消耗され、士気は  
乱れていく。

結局大急ぎで無理を承知で小田原に向けて景虎は10万の大軍を出  
発させた。

しかし関東管領軍の兵士たちの狼藉は甚だしいものであつた。景虎

は狼藉を認めてなかつたが統制が取れない軍隊では無理であつた。今回の参加者には個人的な北条への私怨や単なる稼ぎの場所として参加している者も多かつたのであつた。北条領土内での激しい狼藉のおかげで越後軍 および関東管領軍は完全に北条領内の農民や地元土豪の反発を買つてしまった。

このツケは景虎にも後に大きい形でまわつてくることになる。

一方氏康は兵力差が大きく、野戦では不利と悟り早々に相模の小田原城や玉縄城、武蔵の滝山城や河越城などへ部隊を籠城させていた。本来であれば一つずつ順番に籠城している城をつぶして行くのが王道であるが食料不足や統制の問題もあり今回は小田原城の氏康との直接勝負で一気に決着をつける作戦にした。

景虎率いる越後軍 関東管領軍は北条軍の支城の玉縄城 滝山城 川越城を通り過ぎ本拠地小田原城に真っ直ぐ向かつたのである

## 小田原城包囲

景虎率いる関東管領軍は途中足利藤氏と上杉憲政に古河城を任せた後、そのまま一気に相模国に入り酒匂側を渡り3月10日前後に小田原城に順次到着、包囲を始めた。

小田原城は堀や固い城壁に囲まれた大要塞であった。これほど大規模な城とは景虎も正直予想外であった。

包囲も終わり攻撃体制を整えていたが、ここで包囲したままぴくりとも関東管領軍は動かなくなってしまった。

佐竹義昭と宇都宮広綱が不満そうな顔でもぐもぐと昼飯の握飯を食べていた。

佐竹は景虎より一つ下だが筋金入りの反北条の最先鋒で、宇都宮広綱は佐竹の娘を妻に持つまだ若干15歳の若者である。

佐竹は前日、宇都宮を連れて景虎本陣に押しかけていた。理由はいつまでじつと小田原城の外壁を眺めるのかと作戦をせかすためである。

しかし景虎の参謀の宇佐美定満は部隊の配置や小田原城の構造の調査をしているので待てとただめるだけで動く兆しすら見せなかった。なぜか景虎や景虎の配下の武将もどこかに出かけているようで景虎の本陣はがらがらであった。

「武勇の誉れの越後軍にしてはのんびりとしてるな・・・」

佐竹は握り飯を食う口を止めると少し不満げに言った。

「箱根で温泉にでも入っているのではないでしょうか・・・」

宇都宮が冗談を言った。

佐竹も思わず苦笑いしてしまった。

「越後にも温泉はたくさんあるそうだぞ・・・越後衆はよほどの温泉

好きなんだろうな・・・」

佐竹も15歳の若者に冗談を返しておいた。

ただ確かに景虎の本陣ばかりでなく越後軍はなぜかゆったりとした空気が流れていた。なぜかみな休憩日と言わんばかりにくつろいでいたのである。

佐竹も宇都宮も理由はわからなかった。景虎の本性や10日前後頃に毎月起こる例の件をよく知らなかったからである。

「彼女・・・おっと失礼・・・彼の噂は・・・聞いたことあるかな・・・？」  
どこで佐竹と宇都宮の会話を聞いていたのか成田長泰がそっと近づき佐竹に言った。成田は宇佐美同様老人にしてはしゃきつとしていたが宇佐美と違いどことなく怪しくていけずな雰囲気を漂わせていた。

「千坂殿の・・・噂？」

佐竹は怪訝そうな顔をした。成田は怪しい笑顔でうなずいた。

「千坂殿に今度会ったら・・・良い香り・・・良い趣味のお香を使っておられると言ってあげると喜ぶと思うがのう・・・いや・・・怒られるかな・・・どうだろうかのう・・・フフフ・・・」

成田は怪しく笑った。

「・・・」

佐竹は黙っていた。

「佐竹殿はあまりご興味がないようで・・・用事があるので・・・では失礼・・・フフフ・・・」

成田は怪しく笑うと老人らしくない軽々とした足取りでさっと立ち去っていた。

千坂景親は関東諸将の間ではちょっとした噂になっていた。佐竹も噂は知っていた。

千坂はいつも景虎の傍に隠れるようにおり姿をあまり表に出さず猛者揃いの越後軍でもなんか色白なひ弱な女々しい独特の雰囲気を持った武将であった。

実は本物の景虎はこっちではないかとの噂がしきりであった。出所

ははつきりしなかったが景虎は実は女であるらしいとの噂が立っていたのである。

唐沢山城でも伊勢姫という誰も聞いたことない姫が北条陣中を突破し入城し、立て籠もる佐野昌綱および佐野軍を奮い立たせ助けたという。

今回は伊勢姫は来ていないがその代わりに唐沢山城では参加しなかった千坂景親という景虎親衛隊との武将が来ておりこの千坂の風貌が女々しいとの評判であった。

佐竹も噂は少し気になっていたがあまり気にしないようにしていた。景虎は二度も上洛している都好きの貴族かぶれで衆道の気がありその好色の相手であるうと思いきやあまり気にしないようにしていた。諸将はともかく兵士までこのような噂話に聞き耳を立てるのは軍の規律に良くないと考えたからであった。

「佐竹殿・・・どうされた？」

佐竹の難しい顔を見て太田資正が声をかけてきた。資正は今回関東の武将では真つ先に景虎の元に駆けつけた男である。40前の温厚そうな武将であった。

資正は祖父の太田道灌に負けず劣らずの名将と名高く一度は北条氏康に敗れ討ち取られそうになったが氏康も資正の器量を知っており殺すのは惜しいと思ひ部下として取り立てて、北条軍の司令官として佐竹の領土の常陸の侵攻を任されていたのである。

つい昨年まで敵だった男であるが今は景虎陣営として一緒に戦っている。

そんな理由で資正には佐竹も若干複雑な感情を持っていた。

「・・・景虎殿は慎重ですな・・・」  
わざと佐竹は無愛想に言った。

「小田原城は硬い城じゃ・・・やむをえんだろう・・・」  
資正は佐竹の複雑な感情など気にもせず普段の口調でうなずきながら言った。

佐竹は資正の友好的な態度に少し面食らったが。

「それにしても越後の諸将は小田原城まで来たついでに箱根の名湯巡りにでも行っておられるのかな？」

佐竹はいやな聞き方をしてみた。

資正は今回他国衆ではあるが築田晴助、あの成田老人とともに作戦部門の幹部であった。

何か事情を知っているかと思つたのであつた。

資正は少し黙つた後答えた。

「・・・千坂殿が病気で寝込んでいるらしい・・・その回復待ちじゃ・・・」

佐竹は資正が景虎の噂を知っているかどうかは知らなかつたが少しいやな聞き方をしてみた。

「お気に入りの寵臣の部下が心配で動けない・・・それで作戦をためらっているのではあるまいでしょうな・・・」

佐竹は聞いた。

資正はなぜかちらりと佐竹を見た後首を大きく横に振つた。

「違うな・・・慎重に慎重を期しているだけだ・・・まあこちらも代案を用意してある・・・」

聞けば資正らを中心とする少数精鋭の部隊で本丸近くの蓮池門に突撃し小田原城本丸隣の二の丸までを一気に落とし小田原城本丸に直接圧力をかける作戦を提案すると言つた。二の丸まで落とせばさすがの氏康も根負けするであろうとの判断であつた。

少々強引な作戦であつたが

「・・・面白そうですね・・・差し支えなければ参加したいな・・・良ろしいか？」

資正には複雑な感情もあつたが彼は智将として名高い男である。佐竹は少しこの作戦に興味を持った。ただ今まで敵だつた資正がどう返事するかは読めなかつたが。

資正はしばらく黙つた後

「常陸では少しワシはそなたに迷惑をかけたからな・・・かまわん・・・ただ後ろからワシを討たないと誓つてほしいな・・・」



と少し苦笑いしながら言った。

佐竹も思わず笑ってしまった。

「今はお互い味方でありましょう。北条が先だ。あなたは・  
その次かな。」

佐竹も資正の本性がわかったような気がして安心して冗談で返した。  
資正もハハハと笑った。

佐竹と資正はこの後も関東における反北条の最先鋒として共に行動  
するようになるのである。

資正と佐竹は景虎の本陣に行くと言った。景虎は不在であった。

聞けば千坂の見舞いに行っていると言う。

（余程お気に入りなのか。それとも噂どおりあっちが本物なのか。  
）

佐竹は少し考えたが武将が噂話に聞き耳を立てるなど女々しいと思  
い考えるのはやめた。

あの成田老人も何か策を持ってきているのかわからなかったが居た。  
留守は柿崎という熊のような大男と本庄繁長、長尾藤景という若武  
者が守っていた。

3人とも見た感じは無口で冗談が通じそうな雰囲気ではなく成田老  
人もそれを察したのか珍しく黙ってはてはてと景虎たちの帰りを待  
っていたが。

ただ景虎たちはまもなく戻ってくるともいう。

そのころ千坂役の本物の景虎は毎月10日前後に起こる例の腹痛に  
襲われていた。小田原到着しだい箱根の温泉旅館で養生していた。

宇佐美定満 直江景綱 長尾政景ら重臣と千坂 金津新兵衛が養生  
先の温泉旅館まで出向いて小田原城をどう攻略するか相談していた  
が結論が出なかった。小田原城の規模が予想以上であったからであ  
る。長期戦も覚悟していたが関東諸将から何か提案があればそれも  
選択肢に入れいろいろ試すことにした。

佐竹、資正、宇都宮、成田たちが待つているとしばらくすると予定通り景虎役の千坂や宇佐美、直江、政景、新兵衛ら越後軍の首脳が本陣に戻ってきた。

「千坂殿の病状は大丈夫ですかな・・・？」

資正が聞いてみた。

「2、3日中にも本陣に戻れる・・・」

新兵衛が答えた。

「家臣を寵愛・・・おっと失礼・・・大事にするのは武士の誉れですな・・・ふふふ・・・」

成田老人が含みがあるように言った。

普段は無表情な景虎役の千坂が珍しくぎろりと成田老人を一瞬睨んだ。

資正が成田老人と千坂の間に割って入るように入ってきた。

「もし差し支えなければ・・・提案ですが・・・」

成田老人も千坂も視線を資正に回した。

「蓮池門に一度奇襲をかけて北条の反応を見たいのですが・・・」

本丸に一番近い蓮池門を突けば北条の本心がわかるであろうとの意見であった。

実は景虎は北条が降伏して解決するのを期待していた。この後鎌倉で関東管領就任式も控えていたので出来れば穏便に済ませたかったのである。信玄の返事がまだ無いのでうかつに戦力を消耗することも出来なかった。

「やってみよう・・・許可する・・・」

景虎役の千坂は許可を出した。

翌日には早速作戦は実行され資正、佐竹、宇都宮隊が蓮池門に攻撃を仕掛けてみたが北条軍は城内から散発的に反撃するだけで出てくる気配を見せなかった。

予想外に戦闘意欲を見せなかったのである。攻め手の資正、佐竹、宇都宮たちが拍子抜けするほどであった。作戦は結局出直しになっ

たのであった。

15日頃になってようやく本物の景虎が陣に顔を出した。ただまだ体調不調であったが無理を押しして本陣に戻った。箱根にいつまでも休憩しいてれば越後兵の士気に関わるからである。

さっそく越後軍幹部と資正、築田、成田と小田原城攻めの打ち合わせが行われたがここで柿崎景家から思わぬ提案があった。

今の課題は北条軍をいかに城外に出すことであった。そこで前代未聞の作戦であったが景虎が蓮池門前で食事を取って北条方を挑発しようとのことであった。

大将が本丸近くで弁当を食べば我慢できずに氏康も飛び出してくるであろうと。

もちろん景虎本人がするのは危ないので柿崎が景虎に変装してやりたいとのことであった。

「面白いのでは・・・」  
越後の諸将も乗り気であった。  
しかし

「・・・お待ちくださいな・・・北条の兵士は唐沢山城の戦で景虎殿の顔を知っているのであるう・・・すぐにはれるだろう・・・」

築田が言った。

「・・・確かに顔もそうだが・・・体系も違いすぎるな・・・」

他の者も柿崎を見て同意した。柿崎は熊のような大男である。

「じゃあ・・・誰がやるか・・・」

そのような危険な真似は戦国武将と言え誰もあまり進んでやりたくない。しかし

「・・・俺がやるうか・・・」

本庄繁長が声を上げた。

「甲冑を二重にかぶって50m前後の距離であれば鉄砲の直撃も平気なはずじゃ・・・おぬしなら大丈夫じゃろう」

宇佐美も同意した。

「しかし・・・」

誰かが不服そうな声をあげた。なんか野太い声ばかりの中での澄んだひ弱な声であった。

千坂役の景虎本人が反対したのである。

千坂役の時の景虎は声質で本性がばれるのを防ぐため基本的には一言もしゃべらないようにみなに言われていたのだが今回の作戦は景虎が不服のようで取り決めもお構いなしに挟んで来たのである。

資正、築田、成田は偽千坂の声質を聞いて少し反応したがその後はそ知らぬ顔、越後衆は渋い顔をしていたが・・・

景虎は繁長を大いに買っていた。繁長は迷惑がっていたが景虎は子飼の武将と認識して将来を期待していた。ここで万が一にも死なせるわけにはいかなかった。それで反対の声をあげたのであった。

繁長は迷惑そうな顔を露骨にしていたが本物の景虎はお構いなしである。

「繁長なら大丈夫です・・・ご心配なく」

直江も言った。繁長は武勇の男で腕が立ち鉄砲の弾など斬り落としそうな雰囲気を持っていた。背格好も千坂にも近く適任であった。

繁長本人も自信あげだった。

本物の景虎はまだ不服そうであった。

千坂役の本物の景虎が口を少し尖らせ不服そうな顔をしていたのを見て

「・・・それであれば・・・千坂様が代わりにされますか・・・？無理でしょう？」

成田老人が意地悪く言った。本物の景虎は思わずむっとして言ってしまった。

「私はびしゃ・・・ではなくて・・・鉄砲の弾など当たりませぬ・・・！・・・なら・・・私がやりましょう！」

危うく景虎のいつもの有名な決まり文句、われは毘沙門天の使いと言いつうになつたが慌てて抑えたが思わずムキになって言ってしまった。

宇佐美や直江、政景が一瞬びくりと密かに反応した。

しかし思わぬ助け舟が出た。

「・・・無理じゃ・・・おやめくたされ。失礼な言い方で恐縮だが・・・背格好が違いすぎる・・・千坂殿ではばれるであろう・・・」  
資正が言った。

「伊勢姫様の変わりならなら大丈夫じゃろうが・・・確かに越後にとつても危険すぎるかのう・・・フフフ・・・」

成田老人はあごひげをさすりながらうれしそうに言った。

本物の景虎はすべて見透かされているような気がして急にしゅんとなつてしまった。

実際彼らには見透かされていたのだが・・・

しかしここで思わぬ展開になつてしまったのである。

「影武者など要らぬは・・・それくらいワシ自らやるわ・・・」

景虎役の千坂が突然言い出したのである。みな仰天であつた。

当然みな猛反対である。千坂だつて景虎の寵臣でしかも越後守護上杉憲実からの重臣の名門一族でもある。しかも今は景虎の影武者という大事な役目もある。何かあつたら一大事である。が今回千坂も頑として譲らなかつた。

成田老人も少し口が過ぎたかなと少し気まづくなつていた。

「ワシは毘沙門天の使いじゃ・・・この程度で死にはせぬわ・・・」

千坂が景虎のいつもの台詞を言った。

千坂の苛立ちから来た行為であつた。

（まったく・・・関東の地侍ごときの狸じじいが千坂家の名前を馬鹿にしおつて・・・）

成田老人を睨み付けながらいらいらしていた。

結局 影武者景虎自らの強引なごり押しで小田原城への挑発作戦は行われることになつたのである。

本物の景虎は予想外の展開で困つてそわそわしていたが・・・

作戦は翌日早速実行された。千坂は越後軍の陣で越後の将兵に囲ま

れながら着替えていた。甲冑を内側にもう一枚着込んだ。

「どうじゃ・・気分は？」

弥太郎が冷やかしてきた。

「・・くそ・・重いわ・・」

千坂が正直に答えた。

「これだけ着込んでいれば確かに槍でも何でも貫通せんだらうな」  
直江が笑いながら言った。

「それにしても・・成田殿にあんなにムキにならなくてもよからうに・・ああいう性格なんじゃ・・あやつは・・」

宇佐美が呆れ気味に言った。

「まったく・・かんしゃくなど起こさなければ俺が代わりにやって今頃陣内で左うちわだったらうに・・」

普段の冷静な千坂と違いかんしゃく持ちの千坂に繁長も呆れ気味だった。

「黙っておれば千坂家の名がすたるわ！」

千坂はまだ少し気が立っているようで正直に答えた。

「しかし・・姫の件はばれてますな・・隠し通すのも難しいかと・・」

政景が冷静に言った。

景虎も認めざるを得なかった。

「・・鎌倉までは・・何としても隠し通したい・・」

景虎は小さめの声で言った。

「よし・・できた！行くか！弁当は？これが！」

千坂は準備が終わり弁当を持って出ようとした。

「・・そうだ！千坂・・これ持って行けば大丈夫だ！」

景虎は景虎が普段懐に持ち歩いている木彫りの毘沙門天を手渡した。

「私の寵臣の千坂にご加護を・・」

景虎は祈りを毘沙門天にささげると千坂に毘沙門天を手渡した。

「ご心配無用！ちゃんと戻ります！毘沙門天様はちゃんとお返しします！」

千坂は毘沙門天を受け取ると懐にしまい力強く言った。

「戻ってあのじいさんに一泡吹かせてやりたいですしな！では楽しく弁当食ってきます！」

千坂は勢い良く勇んで出て行った。

「気をつけて・・・」

千坂の最後の一言が気になったが今は千坂の無事が最優先である。

北条軍は大騒ぎであった。景虎が単身で蓮池門の近くに出てきたからである。

北条氏康にもすぐに情報が届けられた。

しかもなんと弁当を堂々と食い始めたと言う。

「小賢しい真似を・・・しかし誘いに乗ってはならぬ！絶対外に出るな！絶対だ！」

氏康は厳命した。

千坂は景虎から預かった毘沙門天を傍に置くと弁当を広げゆうゆうと食べはじめた。

千坂は最初は少し緊張してはいたが景色を見て

「風流じゃ・・・」

思わず声をあげた。

小田原城の蓮池門の近くには名前通り小さな池があった。その早咲きの満開の桜の散る花がはらはらと舞い池面をピンク色に覆い確かに風流であった。

千坂は気分が良くなったのかかなりゆっくり任務のことをしばし忘れて桜を見ながら弁当を食べていた。

北条軍が黙りきっているので千坂は調子に乗ったのか

「・・・味噌汁はどこじゃ・・・味噌汁は・・・」

北条氏政の飯に何度も汁をかける癖の仕草をはじめた。

関東管領軍は爆笑であったが小田原方は複雑な反応であった。

「おのれ・・・あやつ・・・！」  
小田原城内で様子を見ていた氏政はひとり思わずかつとなつたが氏康は氏政の肩をぼんと叩いて落ち着かせた。  
だが実は北条の家臣たちも偽景虎のあまりの名演技に密かに必死に笑いをこらえていた。

結局何事も起こらず千坂は弁当を全部食べきってしまった。  
しかし一杯目の食後のお茶を飲んでいるときに事件は起きた。

北条の狙撃兵が北条軍では貴重な鉄砲を撃ち込んできたのである。  
関東管領軍では緊張が走った。が 次の瞬間越後軍では再度大笑い  
が起きた。

弾は肩の甲冑に当たつたようだったが距離がありすぎて力なく弾き  
飛ばされていった。

千坂は弾の当たつたところを蚊を叩くしぐさをして越後兵を大笑い  
させたのであつた。

それをみていた関東諸將の築田は

「いやはや・・・ははは・・・千坂殿はまったく役者じやのう・・・」

「ワシらも最初はもろにひっかかってしまったからのう・・・おっと  
言い過ぎた・・・ははは・・・」

と資正と笑い転げていた。

横で二人の会話を密かに聞いていた景虎は内心

(やはり・・・ばれていたか・・・)

と少し複雑な顔でがっかりしていたが・・・

小田原城内から二発目も発射されたがこれも当たらなかつた。

千坂は弾はどこだどこだと探し回るしぐさをしてまた関東管領軍陣  
営の笑いを誘っていたが。

「やめんか！」

小田原城内では氏康自ら飛んできて狙撃をやめさせた。

「我慢じゃ！手出しするな！乗せられるな！」



氏康は再度敵命した。

氏康は小田原城内から茶を飲む景虎役の千坂を睨みつけた。

「影武者ごときに・・・この氏康が引つかかるか・・・」

氏康は千坂を睨みながらこぶしを握り締めた。

「お転婆姫が調子に乗りおって・・・」

そしてつぶやいた。

「関東の主は・・・この北条氏康じゃ・・・氏康の力・・・たっぷり思い知らせてくれる・・・！」

結局千坂はお茶を2杯か3杯悠々と飲み1時間近く小田原城蓮池門の花見を堪能した。

そして関東管領軍陣地にゆうゆうと引き上げてきた。

景虎も千坂が無事帰ってきてほっとした。

挑発しておびき出す作戦は結局成功しなかったが偽景虎の武勇伝は歴史に残ることになった。

その後も関東管領軍は城下を放火するなどして仕掛けてみたが北条軍は頑なに小田原城に籠ったまま出てこなかった。

しかし物事は順調に進んでいなかった。

まず補給の問題は深刻を極めていた。聞けば補給部隊が途中で北条側の農民や土豪に襲われて到着が滞っており、また食料が遅れるや否や軍を抜け出すものが後を絶たなかったのである。寄せ集めの10万の大軍の食料の消耗は予想以上であった。

北条領土内でも食料の徴収を行ったが飢饉の影響でどこにも食料は無く部隊同士で食料の奪い合いが起きたり農村からも悲鳴に近い助けを求める嘆願書が届き景虎も徳政令を出したほどであった。

また攻めないで抜けてきた川越城や玉縄城の北条軍部隊も小田原攻めで空き家になっている関東諸將の城に攻め入るそぶりを見せ関東の諸將から不安の声が上がり始めていた。

景虎はそれでも総攻撃をするかどうかは迷っていた。

城内には氏康の義理の息子になるが前の古河公方の足利義氏がいた。既に景虎は小田原城到着前に古河城に足利藤氏と上杉憲政を入城させ、実質的に新しい古河公方を擁立して名乗らせていたがそれでも前の古河公方に関東管領自ら危害を加えるのは気分のいいものではなかった。

小田原城の堅牢さ以外にも中に籠城している人数が実は良く解らない点も難点であった。

おそらく小田原城の規模から城下町や周辺の農村部からも相当の人数が一緒に籠っているのは間違いなかったがもし無理押しした場合彼らの犠牲は間違いなかった。

関東管領が城攻略で住民や兵士を大量殺戮などしたら今まで自分が信玄の志賀城での過酷な処分を非難してきたのが本末転倒になってしまう。

また自分の栃尾城攻防のときではないが追い込まれた兵士が恐ろしい力を発揮するのは十分に承知していた。

可能であればやはり穏便に済ませたかったのである。

関東管領軍にも弱点はあった。戦力として使える部隊は自分の越後軍や関東諸将の直接の部隊のみで後は寄せ集めの軍勢で丸腰の者も多く戦力としては期待できなかった。

もちろん犠牲を無視して無理に押せば落とせなくもなかったが信玄との交渉がはつきりしない今、兵力を消耗できなかった。

氏康が引き籠もり景虎が悩んでいる間も補給の問題や士気低下は続き越後兵や関東諸将の士気をがた落ちさせていた。

佐竹や大田は関東管領軍内に北条に内通する者が出ているとの情報も入っているので戦わないのであれば一旦兵を引くよう要請した。そのころには信玄も兵を集めているという噂も兵士の間にも流れていた。

結局1ヶ月後景虎は小田原城の包囲を解くことにした。  
一旦鎌倉に兵を引き、一部の将兵には補給物資が持たないのでそのまま帰国してもらったのである。

撤退に際して若手の藤景や繁長は総攻撃を主張し撤退に強硬に反対した。

彼らの言い分は小田原城が落ちそうになれば引き籠もる川越城や玉縄城等の支城の部隊も救援に慌てて出てくるだろうし信玄ももしかしたら氏康救援に出てくるかもしれない。

そうなれば北条と武田を一網打尽で屈服させられると主張したのである。

このような大軍を集める機会は二度とないので多少の犠牲は覚悟の上でやるべきとの藤景や繁長は主張したのであった。

景虎も彼らの意見は理解できたがもう少し様子を見ることにしたのである。

鎌倉で上杉継承と関東管領就任の儀式を行い、さらには近衛前嗣が関東に下向すれば氏康の 気が変わるのではないかと期待したのである。

特に閑白である前嗣が下向して関東に入れば反逆扱いされたくない北条も従う気になるだろうと考えたのである。

藤景や繁長は権威にこだわる景虎の話を少し呆れながら不服そうな表情で聞いていたが渋々従ったのである。

## 鎌倉

結局景虎は1ヶ月弱小田原を包囲したことですべて良しとしてそのまま小田原城の包囲を解き、3月末には景虎ら越後軍一行は鎌倉に入った。

鎌倉の鶴岡八幡宮で関東管領就任と上杉継承の儀式を行うためである。

景虎は実は小田原城包囲前に鎌倉に立ち寄っていた。

鶴岡八幡宮に北条に対する戦勝祈願の願文を奉納するためである。結果から言うと願文の通りにはならなかったが景虎も北条との決着は近衛前嗣の南向時まで時間がかかるものと考えていたので気長に構えたのである。

このとき景虎が奉納したと言われる願文は千葉県妙本寺に伝えられており、解釈内容は諸説あるが平たく言うと神功皇后は三韓平定時に住吉大社と諏訪大社に詣でたところ忽化男形・たちまち男性化・し三韓平定に成功した・・・と解釈できるくだりの一文が見受けられるという。

長尾景虎が男性の場合三韓を北条に当てはめその平定を祈願するのは理解できるが忽化男形の意味は不明になる。女性であればその意味は理解が出来るかと思う。自分も神功皇后のように男性化・・・と

鎌倉は小さな町であったが鎌倉將軍時代からの古刹が多く景虎好みの町であった。

しかし鎌倉は北条の本拠地相模国の町であり北条の息がかかった町である。

北条側の城、玉縄城は鎌倉の目と鼻の先である。

今回の関東管領就任と上杉継承の儀式は敵中で行われるので警備は

嚴重に行われることになった。軒猿の部隊をも密かに市民に紛れ込ませておいた。万が一にはあるが北条の忍者、風魔対策であった。

景虎は鶴岡八幡宮に着くと密かにしんみりとしていた。

かつて長尾家はここで鎌倉3代目將軍実朝を暗殺した実朝の弟公暁を殺し、主君上杉氏に付き添い越後まで流れに流れ、父為景の代には守護と関東管領殺しの汚名を着た。

その長尾の名前を捨て自らが主君上杉になる時が来たのである。

感慨というよりも正直複雑な気持ちもあつたがその利点の大きさを優先させたのである

景虎は上杉姓になることで自分、および家の格を上げ、越後の支配強化をも狙ったのである。

以前も述べたが揚北衆が常に景虎に全面的に従い切れない感情を持っているのは景虎の関東管領就任式の諸国衆に対する太刀贈呈の式典の時にもあつたが、揚北衆は長尾氏が自分たちと同じ坂東（関東）八平氏と同等と考えていたからである。今回上杉になったことで家柄は彼らよりも上になり、また同じような感情を持っている関東の諸将に対しても同等ではなくそれ以上の家柄になり今後は上に立つ者として振舞っていくと暗に主張したのである。

信玄や氏康に対しても同じである。家の格式では決して引けを取らないこと明確に現したのである。

永禄4年（1561年）閏3月16日（現在の3月31日）、鎌倉の鶴岡八幡宮で関東管領就任と上杉継承の儀式は厳かに行われた。今回諸将や大衆、兵士の前では引き続き千坂景親が影武者の景虎役をやり景虎が千坂景親として振舞った。

景虎はもちろん本当は自分が直接やりたかったのだが護衛から北条の動きが読めず敵中であり、小田原攻めが不完全に終わった以上、暗殺など不測の事態に備え今まで通り影武者千坂を押し立てて行う

ことにしたのである。

もちろん景虎自身にも女大将と分かった時の関東諸將の読めない反応や人々の噂が景虎の意図と反する方に向かつて行くことも怖かったのであるが。

影武者景虎によって関東管領及び上杉継承の儀式は肅々と行われた。景虎はこれ以降、上杉憲政から一字を偏諱へんきして景虎から政虎に改名したのである。

式が終わると関東の諸將が政虎にお祝いの挨拶に寄ってきた。もちろん実際に対応するのは政虎役の干坂であるが。

しかしここでちょっとした事件が起きたのである。

例の成田長泰老人が挨拶にやって来た時であった。

成田老人は馬から下りずに馬上の上から挨拶をしようとしたのである。

今回彼は息子の氏長と長忠を連れてきていた。

彼らも政虎役の干坂の前で馬から降りる素振りをしなかった。

今まで他の者は全て馬から降りていたが嫌味三昧な成田老人である、また何か妙なことを言うてくるのであるうと本物の政虎は気にしないことにしたが・・

しかし政虎役の干坂が成田老人に珍しく厳しい口調で突っ掛かったのである。

「なぜ馬を降りぬ？」

政虎はいやな予感がした。小田原城で干坂がこの老人に一泡吹かせてやると言っていたのをふと思いだしたからである。

「我々は上杉家と同じ藤原氏の家系・・馬上の挨拶は源義家様の時以来でござる・・必要ござろうか・・それに・・」

成田老人は悪びれることなく不適な笑みを浮かべて言った。

源義家は平安時代中期の源氏の武将で源氏の基礎を造った源氏の棟梁でもある。

成田老人が言うには成田氏は今までも馬上の礼が常である、許された家柄である・・と言いたかったのであった。

政虎は干坂が不愉快になった理由は分かったが彼らが今までも源義家の代からそのようにしているのであれば仕方が無いと思って素直に黙って成り行きを見ていたが成田老人がすべてを言い終わらないうちに干坂が大声を上げてきたのである。

「そなたは山内上杉家に仕えておったのであるう？義家公ではあるまい？山内上杉家にもそのようにして振舞っておったのか？今が何時代がわかっておるか？大体今までそうであったからとこれからもそうすると言ひ張るのか？千葉常胤の事をしっておるか？そなた？え？」

普段は無表情で感情をあまり顔に出さない干坂が感情丸出しで怒り出したので政虎が少し引いてしまったほどであった。

一緒に居た本庄実乃や金津新兵衛も少し驚いていた。

成田老人は

（こつちが全部を言い終わらんうち・・何を急に怒り出したんじゃ・・）

と露骨に迷惑そうな顔をしていたが息子の氏長は空気を察したようでは一っとした顔が見る見る青ざめると慌てて彼だけ馬を降り地べたにひれ伏せた。長忠はどうしたらよいかおどおどしていたがすぐに兄の後追おうように彼もひれ伏せた。

千葉常胤とは鎌倉時代の初代將軍源頼朝が平家打倒の軍を上げた頃からの古参の武将であったが彼も成田老人と同じように馬上の礼にこだわり馬から下りる習慣がなかったので頼朝の怒りを買ひ成敗（暗殺）されたと伝えられている。

氏長 長忠兄弟はその話を知っているので青くなって飛び降りたのである。

太田資正 築田晴助も何か只ならぬ雰囲気に気が付いたようで慌てて飛んできた。

成田老人は息子二人を苦々しい顔で見ながら本音を言った。

「・・・政虎様の前では馬から下りるつもりだったのじゃがのう・・・」  
成田長泰は困った顔で干坂役の政虎に突然話しかけてきた。

政虎は思わず下を向いて目をそらしてしまったが。

しかし成田老人の行動は完全に裏目に出ってしまった。

「ワシの話を聞いているのか？貴様！」

干坂が再度大声を張り上げた扇子を振り上げ成田老人をはたこうとした。

「父上！降りてください！」

息子の氏長 長忠が慌てて青ざめた表情のまま成田長泰を馬から無理矢理引きずりおろした。

資正と晴助も慌てて

「政虎様！成田殿はそのようなおつもりではなかったので・・・！お、落ち着きくだされ！」

政虎役の干坂に大慌てで弁解した。

成田老人は氏長に無理やり引きずりおろされたので本人も落馬するように尻餅して烏帽子も脱げてしまった。

「いてて・・・」

成田老人は尻をさすっていた。

政虎も慌てて

「干坂！・・・もういいであろう！」

政虎も思わず干坂の裾を引っ張ってしまった。

「・・・」

成田老人以外の氏長 長忠 や太田 晴助はわざと聞こえていない振りをした。成田老人だけ少しに一瞬にやりとしたように見えた。政虎は思わず本当の姿で言ってしまった。

（・・・しまった！）



「えっ・・・と 殿・・・お気を静めて下さい・・・」  
政虎は慌てて女々しい小さい声で千坂役を続けたが男ではない声質のせいで逆効果であった。

ただ全てを知るみなは聞いていない素振りのままであったが・

しかし成田老人は表情を豹変させた。露骨に不愉快そうな顔をして千坂を睨み付けた。

政虎役の千坂も相変わらず険しい表情で睨み返していた。

異変に気づき観客らもざわめきだした。ただ観客らの遠方で事がおきていたので何を言っているのかまでは聞こえなかったようである。

「何事か・・・？」

と事の様子を遠巻きに見守っていた。

しかししばらくして

「・・・失礼いたしました・・・」

成田老人がようやく政虎役の千坂に侘びをいれた。

これではようやく収まったのであった。

ただ成田は影武者の政虎に先に詫びを入れた後も本物の政虎にも侘びを入れると言う相変わらず振りであったが。

千坂も政虎もそんな癖のある成田老人に黙ったままであった。

こうして関東管領の就任式と上杉家の継承は一悶着あったもの無事に終わったのである。

景虎はこの日より長尾景虎から上杉政虎になった。

母虎御前の実家で政虎初陣時代から功がある栖吉長尾の長尾景信も上杉を名乗り上杉景信になった。

表沙汰にはならなかったがもうひとつ悶着があった。長尾政景の件であった。

実は長尾政景も今までの実績を認めて政虎は上杉姓に変更することを知っていたが領土問題などで本来より不仲な本庄実乃や上杉景

信の反対で実現しなかったのである。家臣団でも彼が政虎と同じ家柄になり自分たちのより上に立つことに抵抗が感じられた。

そのため政景の上杉姓変更は見送られたのである。

越後国内は表向きと違い内情は相変わらず緩やかな連合体の域を出ていなかったのである。

政景はこの件を予想していたのか特に何も言わなかったが逆に政虎は姉の仙桃院の少し不満げそうな顔を急に思い浮かべ一人気が沈んでいたのである。

その日の夜政虎は千坂景親 宇佐美定満 直江景綱 長尾政景 本庄実乃 金津新兵衛ら重臣と話をしていた。

自分の本当の姿の件である。

当初の予定通り関東管領 上杉継承までは何とか自分の本性を隠し通せたが予定外だったのは北条の件が解決しなかったことである。

そこで信用ができ今後一緒に作戦行動をとることが多いと考えられる武将のみに全てを話すことにしたのである。

まず関東方面の鍵を握るであろう二人、太田資正 築田晴助が呼ばれこの二人にはすべてを話した。

しかし二人の反応は政虎も薄々感じていた通りではあったが全て見通されていた。二人によると関東諸将の間でも政虎の本性の件はこの頃には既に周知の事実になっているとのことであった。あの成田老人、成田長泰が馬上から降りなかったのも影武者の前では降りないとの意思表示であった。今回は千坂の影武者が裏目に出たのであった。

ただこれが微妙な問題であるのは政虎や越後の諸将だけでなく関東諸将も充分に認識していた。

佐竹義昭や宇都宮広綱と言った諸将は正直戸惑っているとのことであった。心変わりではなく戸惑いである。

佐竹や宇都宮たちは表向きは食料不足や北条方に内通している者が

いるとの理由で小田原城の包囲を解くように主張し勝手に部隊を撤収させようとしたが本音では政虎の本性に対する事実と戸惑いであった。

この件は色々議論されたが結局結論は出ずにこの件は結局再度先送りされることになったのである。

その場の事情や状況に応じて個別に別個に対応していくこととしたのである。

ちなみに兵士や一般人の間でも政虎の噂は流れていたが彼らの段階ではまだそれほど噂は広まっていなかった。

越後の領主で関東管領が女性などありえない・・・との理由からである。

ただこの後にこれ以外の諸般もあるが政虎は関東諸將の行動にこの後も振り回され悩まされるのは紛れも無い事実である。

一方氏康は結局挨拶に来なかった。

政虎には従わないと明確に意思表示してきたのである。

長尾藤景や本庄繁長は政虎に直訴してきた。

至急再度部隊を小田原城に展開して総攻撃を主張したが政虎は彼らの意見を受け入れなかった。

関東の拠点の古河城まで戻りここを拠点にして今後を考えると回答したのである。

越後に下向している関白近衛前嗣に機会を見て古河城に入城してもらいもう一度北条の返事を待ってそれから対応を練ることにしたのである。

武田が兵士を集めているとの情報も密かに軒猿からもたらされており政虎の不安の種にもなっていた。

藤景や繁長はそれでも譲らなかった。彼らに同調する者を引き連れ

て再度政虎に直訴しに押しかけて来たのである。北条の返事など待たなくて今日の行動でもうはつきりしている。再考をと彼らは強く主張したのであった。それでも政虎も譲らなかつた。関白が来れば彼らの態度も変わるといふ理由で政虎が再度強く拒否したので彼らも文句を言いながらもようやく引き下がったが後味の悪い一面になつたのであつた。

政虎が気になつたのは藤景や繁長だけでなく一部の揚北衆や上野国に国人衆が彼らに同調していることも気がかりであつた。

藤景や繁長の武勇は政虎も充分に認めていた。彼らは若く勇敢なので彼らと常に一緒に行動していた若手の国人衆、特に揚北衆や上野国の前線の兵士に人気があつた。

繁長はまだ20歳そこそこであつたが揚北衆の序列は中条藤資に続き2位で色部勝長よりも表向きは上である。これはもちろん政虎の配慮もあるが彼の實力由縁でもある。

藤景も繁長より少し年上であるが政虎の母方の栖吉長尾の一族で武勇に優れ前線の兵士から人気があつた。

ただこの両者はもうひとつ共通点があつた。

政虎に対して素直でない点である。

繁長は政虎との初対面するときから一悶着あつた。言葉遣いだつて乱雑そのものである。

政虎はあまり気にしていなかつたが本庄実乃を筆頭に直江、宇佐美ら政虎の老人衆実は内心繁長の振る舞いを歓迎していなかつた。

藤景にも複雑な事情があつた。表向きは栖吉長尾の一族であるが実は三條長尾の血筋も強く受けていた。

三條長尾は政虎の父為景の時代にいざこざがあり三條長尾の本来の居城の三條城から三條長尾一族は追い出され、三條長尾の重臣の山吉氏が題目で入っていた。

追い出された三條長尾は没落し三條周辺で細々と暮らしていたがそ

のため本心では為景一門景虎や、栖吉長尾に反感を持っていると言われていた。黒田秀忠の乱の時も実は三条長尾が影で糸を引いているという噂は絶えなかった。特に春日山城や栃尾城を襲った名も無い土豪、伊勢三郎は土豪にしては戦い慣れしており、兵力も半端ではなかった。伊勢三郎は実は偽名で本当は三条長尾の平六俊景か誰かではないかと常々ひそかに言われていたのであった。黒田の黒滝城と藤景の下田城は三条長尾の勢力基盤のすぐ側でもあった。もちろんその時の当事者が生き残っていないので確認しようがないのではあるが。

ただ政虎も藤景の実力を認めざるを得なかった。本来の居城の三条城の山吉よりも藤景の方が兵士の動員力は長けてた。三条城を追い出されたとはいえ地元での実力は充分に健在でその実力も越後では上位であった。それゆえ政虎の老人衆たちの警戒心も緩むことはなかった。特に本庄実乃は自城の栃尾城を襲われた経緯もあり彼を警戒していた。

事実、藤景の居城の下田城は栖吉城からは離れた三条長尾や揚北衆の領土の近くであった。

この鎌倉での記念すべき日は政虎にとって越後の不安定さを改めて感じた一日になったのである。

## 機嫌取り

武蔵松山城の城主、上田朝直には政虎の情報が逐次もたらされていた。

朝直にとって小田原城が落ちなかったのは一安心であった。しかしその一安心も束の間、鎌倉で上杉家継承と関東管領就任の儀式を終えた政虎が厩橋城か越後へ戻るため軍を北進させているという気掛かりな情報もたらされていた。

素直にまっすぐ帰還するのか川越城を目標にしているのかは解らないとの事であった。

朝直は松山城内でひとり悩んでいた。

朝直は実は政虎の関東出兵時、関東管領、政虎側に付く旨を伝えていたが小田原攻めには参加しなかった。

理由は氏康に対する変わらぬ忠誠心と太田資正に対する複雑な感情であった。

朝直は資正と共にかつては扇谷上杉家に仕えていた。朝直は太田氏宗家を継ぐためにこの松山城を資正に譲ってもらい城主になったのである。しかし扇谷上杉家が氏康に滅ぼされると朝直と資正は共に氏康に仕えるようになったのだがその頃から資正とは微妙な溝が出来上がりつつあった。

朝直は氏康に従順に従ったため独自の領土経営を認められるほどまで氏康の信任を得たのだが対する資正は氏康もそれほど従順ではないと判断したのか古河公方、足利義氏の家臣として処遇していた。

そのため今回の政虎の関東出兵に際して資正は明確に政虎側の武将となったのだが氏康に恩義を感じる自分は本心ではその気はさらさらなかったのである。

そのため資正に対するかつての仲間、今の敵としての複雑な感情がしこりとなっていたのである。

資正の実力は氏康も認めていたように当たりの良い見た目に反して

食わせ者で油断なら無い相手であった。資正との長い付き合いから朝直がそのことを一番良く知っているつもりであった。

今回の政虎の小田原攻めに朝直が軍を派遣しなかったのは表向きは政虎率いる関東管領軍が無視して通り過ぎた北条軍の支城の玉縄城 滝山城のうちの特に川越城に対する牽制のためであった。もちろん実は本音では氏康に対する気持ちを変えていなかったのであるがしかし政虎の小田原城包囲中も北条軍の支城の玉縄城 滝山城 川越城に対して牽制行動を取らずひたすらに松山城に立て籠もっていたため自分が政虎の猜疑心を招いていたのは薄々感じつつあった。

朝直が特に気を揉んでいたのは政虎に悟られることなく氏康に伝えることであった。

既に政虎、氏康双方からからの催促の手紙が朝直の元に届いていた。氏康は政虎が厩橋城か越後に戻る途中に反撃することを密かに企てていた。

川越城の部隊で政虎軍を足止めし政虎が通り過ぎて行った八王子方面の玉縄城 鎌倉の滝山城と小田原本城から追撃の部隊を出して足止めを続ける川越城の部隊と挟撃することを考えたのである。

松山城の朝直の任務は政虎をつまぐ川越城に誘導して足止めし、本隊到着後政虎軍を一気に攻撃する手はずであった。

そのための命令書であった。表向き政虎側の朝直をつまぐ使い政虎を欺き打撃を与える作戦であった。

その一方政虎からも小田原城包囲の参加もせず玉縄城 滝山城 川越城への牽制行動もろくに起こさなかったことに対する抗議の手紙が届いていた。

そのために直ぐに行動を起こすよう催促の手紙であった。

要は政虎軍の撤退時に邪魔になりそうな川越城を牽制するように命

令したのである。

朝直は氏康には了解の手紙を送り政虎にも川越城に兵を出すこと約束した。

しかし朝直自身も今回はあまり自信がなかった。

「うまくいくかのう・・・」

朝直は頭を悩ませていた。

氏康に味方する腹積もりが政虎にばれては元も子もない。

その頃鎌倉を出発した政虎一行は古河城に向かっていた。

関東管領、政虎側の擁立している足利藤氏が正式な古河公方でありその護衛のためとここを関東の名目上の拠点とするためである。

政虎は自分の厩橋城、古河公方足利藤氏の古河城、築田晴助の関宿城、太田資正の岩槻城、上田朝直の松山城で氏康に対する包囲網と押さえを固めるつもりであった。

その頃朝直には政虎たちが北条軍の支城の玉縄城 滝山城 川越城は無視して古河城に向かっているとの情報がすぐにもたらされていた。

あまり自信がなかったがやるしかなかった。

「・・・氏康様に何としてもここでいい所を見せておかねばな・・・」  
朝直は一人つぶやいた。

朝直は兵士たちには自分は関東管領軍側で北条側の川越城に牽制に向かう旨を伝えたが朝直の心の中は北条である。政虎側に悟られないように味方の兵士まで騙す必要があった。

どのようにして政虎軍を川越城に向かわせるかあれこれと策を考えていた。

その一方信頼の置ける伝令の兵士には密かに北条軍の玉縄城 滝山



城 川越城や小田原城にすぐに援軍と出兵の依頼を出し、本軍は川越城攻略と牽制のために出発させたのである。朝直は全軍になるべくゆっくり進むように命令した。

もちろん気をつけねばならないのは自分はいくまでも関東管領軍側と常に演じなければならぬことである。

政虎が来るまで関東管領軍の味方の振りを演じ川越城前に陣取り、北条軍本隊が来たらすぐに北条側に乗り換えるだけである。

しかし朝直の表情は実はあまり冴えなかった。

先ほどではないがやはりあまり自信がなかったからである。

朝直の自信がないのは政虎の武田信玄との戦いぶり、唐沢山城での件などを良く知っていたからである。

唐沢山城の伊勢姫の件は朝直も聞いていた。

伊勢姫は政虎その人との噂であった。

関東では無敵の北条軍に土をつけたのが女大将などの噂は正直信じ難い話ではあったが朝直は冷静に判断していた。

相手が男手であろうと女手であろうと厄介な相手には間違いなかったからである。

しかも今度は自分がその相手をしなければいけない。

「・・・姫武将との噂で・・・」

一人寡黙に目を閉じ考えを巡らす朝直に息子の長則が声をかけてきた。

「油断はならぬぞ・・・」

朝直は息子を戒めた。

「越後には昔、坂額御前と言う女騎がいた・・・何が出てきても不思議ではない・・・」

朝直は用心深く言った。

朝直率いる松山城の部隊は川越城に向かっていった。

しかし松山城を出てすぐ

「全軍停止」

朝直は突然進軍を停止させた。

「まだ全然進んでいやせんでえ・・・」

兵士から驚きの声が出た。事実松山城を出てまだすぐ、松山城と川越城の中間付近の越辺川をも越えていなかったからである。

「関東管領様からの指示待ちじゃ・・・気楽にせい・・・」

朝直は悠長な振りをした。

「・・・だつたらお城におればよいのに・・・」

兵士たちが不満を言ったが

「外に出て行動していることを示すことに今回の作戦の意義がある・

」

と本音を言っておいた。

「・・・まあゆつくりくつろげ・・・」

朝直は兵士をなだめておいた。

朝直は3日かかってようやく川越城目前まで来た。

本来なら1日で充分に移動できるが進軍が遅れたのは

「越辺川の水量が多くて渡河に難儀している・・・」

とのことにしたからである。

政虎にも連絡しておいた。越辺川は特に増水などしておらず簡単に渡れる川であるが。

もちろん政虎と氏康からの返答を待ったための時間稼ぎである。

また政虎には川越城の守備は薄いので共同で攻撃作戦を行いたい、至急援軍をとおびき寄せるための伝言も付け加えておいた。

朝直は政虎に対する行動は出来る限りすべてやった。

後は政虎と氏康の主賓の動きを待つだけである。

味方の川越城の前に陣取った翌日、早くも氏康より先に政虎側より

援軍を向けるとの連絡が来た。

遅れて氏康からも軍を向かわせるとの連絡が入ってきた。全ては朝直の段取り通りで物事がうまく進んでいるように見えた。

政虎からの連絡によると政虎の部隊は自分たちが越辺川の増水で渡河に苦労したのと同様、荒川の増水で渡河に手間取っておりそちらに行くのに少し遅れるかもしれないがいずれにせよそちらに軍を向けるとの内容であった。

「妙だな・越辺川は増水などしておらんかったが・荒川は雪解け水で増水しておるのかな？まあ、良いわ・・」

朝直は思わず独り言を言った。

「既に荒川を渡っていたとはさすがに素早いすな・・」  
長則も相槌を打った。

荒川を渡り古河か関宿方面にすでに出ていると思ったのである。

しかし最初の報告では政虎側は荒川を渡っていないはずであった。

朝直も妙だとは思ったが

「・・まあ 良いわ・・ワシらは後は主寶の到着をひたすら辛抱強く待つだけじゃ・・休んでおけ・・」

と自分に言い聞かせた。

政虎軍の到着時機と氏康本隊の到着時機が近ければ自分の本心が政虎にばれる可能性も少なく好都合であった。

物事は老将、朝直の目録通りに動いていた。

(・・やれやれ・・なんとかなりそうだ・・)

朝直は思わず安堵の溜息をもらした。

(・・しかし・・うまく行き過ぎているような気もするが・・)

朝直の思わぬ本音が出た。

(・・いや 深く考えるのはやめよう・・今回はうまくいった・・うまく・・)

朝直は漠然とした不安を拭い去るよう自分に言い聞かせた。

やれることはやった。後は川越城の前でひたすら両主寶を待つだけである。

その日の夜朝直は久々に熟睡できた。気持ちの良い朝を迎えるはずであった。

「・・・と・・・殿！大変でございます！」

翌朝朝直は伝令兵士に叩き起こされた。

「・・・朝から騒がしい・・・？何じゃ？関東管領殿たちが荒川に流されたでもしたのか・・・？」

下らない冗談を言ってみた。

しかし伝令兵士の報告を聞いて朝直は今度は自分が思わず腰を抜かしてしまった。

自分の居城の松山城が政虎側に占領されてしまったのだと言う。

政虎軍は反転して川越城に向かったのではなく自分の松山城に向かったのであった。

先導はあの太田資正であった。

朝直のいやな予感是不幸にも当たってしまったのである。

兵士のいない松山城はあっけなく落城した。

政虎は実はまだ荒川を渡っていなかった。

軍が大河を渡るときは一番危険であった。しかも今回は敵である北条に背中を向けた状態でもある。

北条側を欺くために政虎が一芝居うったのであった。

荒川を渡らず荒川沿いを政虎軍は素早く北上して背後からあっさり松山城を攻略したのである。

時間がかかると伝えたのも上田軍が政虎側の動きに気づいて松山城に戻るのを防ぐためであった。

実は政虎は朝直が小田原城包囲に参戦しなかった時点で決断していた。

政虎は関東での作戦の鍵を握るのは太田資正と築田晴助と認識していた。

彼らをどうしても引き留めておく必要があつた。

太田資正には彼が以前より希望していた松山城の返還、築田晴助には足利藤氏を古河公方に据えることによつて彼らの歓喜を引こつと考へていたのである。

松山城は先ほどの話のように元々は太田一族の城で足利藤氏は実は晴助の姉の子、甥に当たる人物である。

越後衆のあの二人の事もあつた。長尾藤景と本庄繁長である。

今回の小田原遠征での二人のたまつた不満抜きのためでもあつた。

こつして松山城を失い氏康の怒りを思わぬ形で買つてしまつた上田朝直だがこの後は秩父に飛ばされ北条氏康の信用を再度買うのこの後苦労したと言ふ。

## 権威

政虎側の手に渡った武蔵松山城だがここは元来太田資正の城であった。新しい城主には資正の推薦する上杉憲勝になってもらい、政虎一行は関東の拠点の古河城に引き上げることにした。

古河城への帰路の途中休憩と資正からの気配りで資正の居城の武蔵岩槻城に立ち寄っていくことになった。

見た目は普通の城だが中は少し変わった城であった。

犬がたくさん飼われているのである。

資正は大の犬好きとことで常に10匹以上飼っているのだと言う。人の趣味なので政虎は黙っていたが正直少し意外で驚いた。資正が犬好きのようには見えなかったのもあるが資正のその可愛がりようである。いくら犬好きでも10匹以上常に飼っていることに驚いたのである。

ただ噂では領民や資正軍の兵士も呆れているとの話であった。

しかし資正本人は全く気にも留めていなかった。

資正はむしろ下手な兵士よりよっぽど役に立つと自信満々であった。

「こいつが何の役に立つんかのう・・・？」

弥太郎は一匹を捕まえ尾っぽを振り回している犬の頭を撫で回しながらつぶやいていたが。

犬は何食わぬ顔で頭を撫で回されて上機嫌であったが。

政虎も一匹の頭を撫でながら別のことを考えていた。

北条の件が解決しなかった今政虎の心配事は武田信玄であった。

小田原城包囲時から信玄が兵を集めていると聞いていたが信玄と氏康は同盟関係である。

気分は良くはなかったが仕方ないと割り切っていた。

しかし信玄が和睦の話政虎に求めていたこともあって自分も一応

気遣いして甲斐には今回軍を向けなかったしその気配も取らなかった。しかし政虎はもし信玄からの和睦の話がなければ小田原を後回しにしても本気で叩こうとも考えていたが信玄が山本勘助や真田幸隆をよこしてまで和睦、戦う意志の無いことを示し、さらに軍を實際に集め北条側に派遣はしたが300人足らずの極少数の兵しか北条救援に送らなかったので政虎は信玄を信じて信玄に対する行動をやめたのであった。

しかしそれでも信玄の動きはやはり不安ではあった。信玄からの正式な返書もまだ来ていなかった。この件は家臣団からも槍玉に上がっていた。

しかし信玄も事情は同じであった。

信玄の下には氏康からの使者、板部岡江雪斎が訪れていた。表向きは援軍を送ってもらったことによる謝意であったが氏康の信玄に対する抗議の色合いの方が強かった。

今回信玄は援軍を送ったがわずかに300程度しか兵を送らなかった。また氏康が希望していた川中島か上野から越後を牽制する件も実行しなかった。板岡部が信玄の元を訪れたのも氏康からの強い不満だった。

信玄の言い訳はこうであった。

小田原城は天下一の堅牢な城である・・・そう簡単に落ちはしないと・それに比べると甲斐の躑躅ヶ崎館は小さな平城でもし下手に関東連合軍を刺激してこっちに向かわれてはひとたまりも無い・・・解つて欲しい・・・と弁解した。

氏康の願いは今からでも遅くはないので上記の件の即、確実な実行であった。氏康はなんとしても相模 武蔵の奪回を希望していた。そのためにどうしても越後軍を上野か川中島におびき出して関東の兵力を空けて欲しいとのことであった。信玄は内心渋々であったが了承した。

氏康からの使者が帰った後、山本勘助が聞いてきた。

「景虎との和睦の件はどうされるのですか？」

「景虎殿と和睦せねば美濃へ安心して出れませぬ・・・」

高坂弾正昌信も不満げに言った。

「約束は約束・・・同盟は同盟・・・仕方あるまい・・・」

信玄は言った。

「しかし・・・兵は出すと言ったが戦うと言った記憶はない・・・」

信玄はにやりと笑いながら言った。

「・・・それと関東管領の上杉憲政から一文字偏諱して今は政虎であるろう・・・長尾政虎 政虎様と呼ばねばならんぞ・・・」

信玄は嬉しそうに言った。

「・・・上杉になられたのでは・・・？」

弾正昌信が思わず言ってしまった。

「源氏の正當な血を継ぐ武田と違って成り上がりのしかも平家の長尾が藤原摂関家の血を継ぐ上杉になるなんて・・・氣に入らんからな・・・政虎はワシにとってはいつまでも長尾政虎だ・・・」

信玄が冗談風に言った。

「それに・・・源氏の血筋と言えば・・・あの佐竹もいたな・・・佐竹は成り上がりの北条が大嫌いだからな・・・長尾とは手は組まなくても上杉となら喜んで手を組むであろう・・・氏康もこれから厄介になるだろうよ・・・」

信玄が遠くを見ながら言った。

「だから北条は結局ワシらと組まざるを得ないな・・・北条がワシらと仲違いする時は最後の最後・・・長尾と組むときであろうな・・・」  
信玄はどこか遠くを見たままであった。

「兄上・・・駿河がいますぞ・・・」

弟の繁信がすぐに横槍を入れたが

「駿河か・・・今川の若いのはもうあまりアテにできんだろう・・・駿府にいた父上もそう言っておったろうに・・・誰が駿河の支配者に相応しいかと・・・」



信玄が悪戯つ子のように言ったが繁信や勘助、弾正昌信には冗談には聞こえず彼らは思わず黙ってしまった。

信玄の父、信虎は甲斐を追い出されてはいたが信玄も面倒は見続けていた。そのこともあって信虎も駿府の娘や孫の所に行ったりと悠々と振舞っていた。その信虎が以前ちよつとした事件をおこしていた。

駿河の今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に撃たれた後、義元の息子の氏真が後を継いだがそのとき信虎が信玄に宛てた手紙の内容が露見してしまい騒動になったのである。手紙の内容は氏真は器量不足である・駿河は甲斐が納めるべきという内容の手紙で、怒った氏真によって信虎は駿府を追い出され、駿河と甲斐の関係は少しギクシャクしたものになったのである。

甲斐側が侘びを入れてその場は納まったが信玄は実はこの件で最後まで謝るのに難色を示したのでみなこの件で信玄の本音を悟ったのである。

しかしこれは非常に複雑な問題であった。

信玄の息子の義信と飯富虎昌は親今川の最先鋒であった。

義信は今川義元、今川家の娘婿で、飯富は義信の後見人でもあった。飯富は武勇においても武田四天王の一人と言う猛暑である。

更には二人とも義理堅い性格であった。

信玄の今川に対する態度に義信、飯富は不満を持っていると噂されていた。

この件は些細のようであったが実は甲斐の家臣団が分裂する危険な可能性をも充分にはらんでいたのである。

繁信と勘助、弾正昌信はそのことを恐れて黙ってしまったのである。

「ところで・政虎ですが・氏康殿の望み通り川中島か西上野に軍を送ったら政虎の気分を変えてしまいかもしれませぬ・」  
勘助が話を変えるように言った。

「確かに西上野はまずい・越後軍の関東の出入り口だ、それこそ今までの工作が台無しになってしまふ・政虎を本気にさせて見合いが破談してしまうな・それに箕輪城にはうるさい長野業盛がいる・川中島なら大丈夫じゃろう・にらめっこにお互い慣れた場所だからな・ただ何度も言うのが戦うとは言っておらん・落とす所はそこじゃな・」

信玄も言った。

「ではどうやってこっちの意志を示します？」

弾正昌信が聞いてきた。

「・わが軍・いや、わしの動きなら政虎はきつちり読めるであらう・大丈夫であらう・」

信玄は茶目つ気たつぷりに言った。

繁信、勘助、弾正昌信は顔を互いに見合わせた。

「手紙もすぐに送る・」

信玄は付け加えるように言った。

「加藤段蔵からの報告によると鎌倉や小田原では影武者で通したようです・」

勘助は言った。

「・苦労しているな・さすが麗しき姫様だな・人気者は大変じゃな・」

信玄は少し嫌味に言った。

「まあ・ワシの興味は甲斐の国を広げることじゃからな・和睦がうまく言ったら遅くなったが関東管領就任祝いの茶を長尾政虎様と楽しんで良いかな・都では随分女々しい歌を義輝公や公家の前で平然と詠んだようだし・弾正も来るか？」

信玄は嬉しそうに弾正昌信に声をかけた。

「・は・はあ・」

弾正昌信も少し困った顔で答えた。

「ところで・さっきの駿河の件は・」冗談で・」

勘助が真面目な顔で聞いてきた。

信玄はしばらく黙っていたが

「今は政虎のことを考えよう・・・」  
話をすり替えた。

越後軍は太田資正の武蔵岩槻城を出発して築田晴助の居城の関宿城に向かっていた。

晴助の城 関宿城は江戸川沿いに建つ経済的にも北関東の防衛上も重要な城であったので

視察と氏康への意思を表すために立ち寄ったのである。

既に鎌倉で関東管領軍は解散して常総の佐竹義昭や安房の里見義弘は領国に帰って行き、越後軍本体と築田晴助、宇都宮国綱ら上野、下野国人主体の身軽な部隊になっていた。

ところで弥太郎が盛んに自分の直垂の匂いを嗅いでいた。

「どうした？」

秋山源蔵が弥太郎に聞いてきた。

「・・・なんか直垂が・・・犬臭くなったというか・・・うぬぬ・・・」

弥太郎がらしくなく神経質に答えた。

「おぬし犬好きだるうに」

戸倉与八郎が横槍を入れた。

「そうだが・・・いくらなんでも数が多すぎたわ・・・」

弥太郎が直垂に鼻をあてくんくん匂いを嗅いでいた。

「おぬしが犬みたいじゃ・・・」

金津新兵衛が冗談を言った。

「・・・ちえっ」

弥太郎が口を尖らすと笑いが起きた。

「お香を貸そうか・・・？」

政虎が聞いた。政虎も確かに言われてみれば気のせいかもしれないがそんな気もした。

「・・・いや・・・阿虎様のお香じゃ犬じゃなく成田老人みたいのが寄つて来そうなんで・・・大丈夫っす・・・」

弥太郎が冗談交じりに答えた。政虎以外は大笑いである。

(まったく・・・越後衆は口が悪い・・・)

政虎は少し口を尖らせながらも呆れていたが・・・

「それにしても・・・犬を何に使っているんじゃないか・・・資正殿は？」

本庄実乃が真面目に聞いてきた。

「なんでも伝令に使うらしいぞ・・・信じ難いが・・・」

宇佐美定満も半信半疑で言った。

「犬に伝令なんかできるんか・・・ワンしか言わんじやないか・・・」

源蔵も不思議そうな顔で妙な取り回しで答えた。

しかしこの話は事実でこの犬のおかげで北条氏康は後の松山城攻略で思わずでこずることになるのである。

資正の飼っている犬たちは松山城が攻められると首にくくりつけられた竹筒の伝令文を持って援軍を呼びに岩槻城まで走り回るため松山城を何度攻めてもどこからとなくすぐに救援軍が現れ邪魔をされ氏康は苦戦を強いられたのである。

北条の忍びの風魔もまさか犬が伝令と思わず情報はすべて筒抜けだったと言う。

資正の犬たちは日本初の軍用犬と呼ばれている。

越後軍一行は関宿城にようやく到着した。

「ワシの城に似ておるのう」

宇佐美が思わず声をあげた。

江戸川の蛇行地点に建つ城で宇佐美の琵琶島城にそっくりであった。川は当時も交通の要衝である。その通行時税と守りを固めるためと一石二鳥であった。

「越後が恋しくなつたかな・・・？」

色部勝長が珍しく宇佐美を冷やかした。

「まさか・・・ワシが恋しいのは若い頃だけじゃ・・・」

宇佐美もうまい返しをした。一同大笑いである。

しかし政虎も少し真剣に考えていた。

当時の兵士は半分農民である。兵士の間から田んぼが心配なので越後に戻りたいとの不満の声が上がっていると政虎の耳にも入っていた。1年の遠征で疲れもあった。

そのため政虎も一度越後に戻ることを検討していた。

関東の留守役を資正とここ関宿城主の晴助に任せようかと考えていた。

晴助の甥にあたる新しい古河公方、足利藤氏にはすでに古河城に入ってもらっていた。

藤氏には既に新しい古河公方に就任してもらっており体裁や権威上は関東管領主体に十分に成り立っていた。

しかし関宿城に入った政虎に思わぬ連絡が入ったのである。

あの近衛前嗣が越山し、厩橋城に向かっているとのことであった。

「公家様らしいわ・・少しは状況見て行動してほしいわ・・」

と本庄繁長や長尾藤景色らは呆れていたが

「まあ 公家様らしからぬ行動力は褒めても良いがな・・」

と直江や宇佐美らは前嗣の立場と公家らしからぬ行為に少し驚きも含めて褒めていた。

前嗣は政虎の鎌倉での関東管領就任式の噂を聞き、公家の行事好きで我慢できなくなり春日山城を飛び出してきたのである。

ただ政虎はこれを逆に好機と捉えたのであった。

関白でもある前嗣が関東に下ってくれば氏康もうかつに軍を動かさない。

政虎は元々計画していたことであつたが少し予定外に早く進んでしまっただけで後は行動に移すだけである。

政虎は前嗣を出迎えるために大急ぎで厩橋城に向かった。

厩橋城に付くと前嗣も武士と同じ直垂に甲冑を着込み出発の用意をしていた。

ただ彼の従者は公家の格好のままであつたが・

「お似合いです。氏康も関白様の下向に腰を抜かしていることですよ……」

政虎は前嗣に礼をした後声をかけた。

「政虎殿はさすがに着慣れてますな・私は慣れないもので・」  
前嗣が甲冑の重さに顔を少ししかめながら言った。

政虎は笑顔で返した。

「すぐに慣れます・」  
そして

「早く関東を平定して義輝様の権威を再度関東より建て直し西に向けねばなりません・」

政虎は真剣な顔で言った。

「……うむ、関東が平定されたら私も都に戻り今度は日本全土が將軍家のもと静かに納まるようにせねばならぬ・関東が納まれば私の替わりの者をすぐに政虎殿の元にする。そのためにも政虎殿の力、是非貸してくれ」

前嗣も真剣に返した。

「はっ！」

政虎も力強く答えた。

この一連の流れを黙って聞いていたのが弥太郎 戸倉与八郎 秋山源藏である。

弥太郎は後で思わず源藏に言ってしまった。

「……しかし阿虎様って古典主義って言うか・権威好きなどあるよな……」

弥太郎が少し呆れ気味に言うと思わぬ返事が返ってきた。

「……見返りがあるからだろう……」

源蔵が答えた。

「・・・見返りい??」

弥太郎が思わず大きい声をあげてしまった。

「しっ! 声がでかい!」

与八郎が思わず注意してしまった。

源蔵が静かに言った。

「関東が平定されれば関白様は都に戻らねばならん・・・新しい関白様の代理の関東常駐の貴族が来るだろうよ・・・その方は阿虎様の正式な御相手になるだろうよ・・・都の貴族が好きな阿虎様にとっても足利將軍家、朝廷にとっても良いことだらけだ・・・阿虎様も俄然力が入るだろうよ・・・」

「へえくなるほど・・・しかし北条相手にそう易々と行くかな?」

弥太郎が珍しく嫌味っぽく言った。

「・・・だからワシらがおるんだだろうよ・・・」

どこで話を聞いていたのか金津新兵衛が割って入ってきた。

「おわっ! 驚かさんでくださいよ・・・」

弥太郎が今度は思わず引いてしまった。

ところで厩橋城には驚いたことに信玄からの返書も来ていた。

( 関東に専念できる・・・ )

と政虎は内心小躍りした。

内容は和睦の交渉の段取りの件で近く使者を送るので話を詰めたいとのことであった。

あとはこれを信じるかどうか、家臣たちが受け入れるかどうかであるが意外にここ最後に最大の難関のような気が政虎もした。

前嗣が政虎と一緒に古河城に入ったとの情報はすぐに氏康にも伝えられた。

関白がわざわざ関東に下向してくるなど当時は常識では考えられないほど衝撃であった。

氏康 氏政親子も正直に驚いていた。驚き以上に戸惑いを持っていた。

前嗣も

「自分が古河城にいる限りは安全であろう・・・」  
と公家らしくなく堂々としていた。

もし氏康が古河城を攻めて前嗣に傷を付けたら本物の朝敵になってしまう。

氏康も完全に動けなくなってしまった。

おかげで関東はしばしの間、嵐の前の静かな日々が訪れるのである。



## 疑心

政虎は近衛前嗣に古河城を任せた後、越後に戻って行った。

北条氏康は前嗣のおかげで動けずだんまりを決め込み関東は静かな夏を迎えていた。

政虎もたまった仕事の片付けに大忙しである。

しかし信玄の動きは家臣団はやはり不安であった。

兵を集めているとの情報が入ってきたからである。

政虎は信玄からの手紙もあり信用しようとしていたが家臣団は信玄を信用していなかった。

家臣団が信玄を信用しないのは3度目の川中島で今川義元の和睦仲介や將軍足利義輝の和睦の御内書を破つてまでも川中島に侵入してきた経緯があるからである。

また局地的な小戦ではあったがこの年の春に越後と信濃の国境にある割ヶ嶽城が武田軍の原虎胤に襲われるという事件が起きていた。

信玄の意図があったのかどうかは解らなかったが城は武田軍に破却されたものの越後軍の猛抵抗にあい原虎胤本人も重症を負ったという。

政虎は信玄から和睦の手紙を受け取った前後であり和睦を優先させたかったのもあり、この件は見て見ぬ振りをしていた。しかし越後衆の信玄に対する不信は逆に増幅していた。

信玄は政虎と違い自国の繁栄と領民の幸せの為に終生領土拡張の戦いを続けたがそれは謀略との戦いでもあった。信玄の欠点はこの謀略にこだわり約束を反故にすることをためらわなかったので周辺国にあまり信用されず後を継いだ勝頼が苦勞することになる。

信玄も関東に留まると思った政虎が越後に戻ったことには正直驚い

ていた。越後にはしばらく戻らないと思いそのためにながざわが橋に手紙を送ったのである。

割ヶ嶽城の件が影響しているのかと信玄も心配したが表向きはそれが原因ではなく長期の留守の後始末で帰ったと伝えられ信玄も安心であった。

割ヶ嶽城の攻撃は信玄の氏康に対する態度の表しとして行って作戦であった。政虎のいない守りの弱そうな信濃周辺の局地的な城をわざと狙って行った作戦であったが越後軍の思わぬ猛抵抗にあい原虎胤本人が重症を負いこの後の川中島戦に出れなくなり甲斐衆にも戦死者を出すなど信玄にとってもうまみの無い作戦であった。

また関白の近衛前嗣が春日山から関東に下向したことに信玄は驚いたが同時に半分呆れてもいた。

政虎の権威を盾に氏康に対抗しようとする姿勢に感心しまた逆に権威にこだわる姿勢に呆れたのである。

ただ前嗣の関東下向で氏康が動けない今は信玄にとっても絶好の交渉の機会でもあった。

政虎が春日山に戻っていることも好都合であった。割ヶ嶽城の騒ぎの件の侘びも兼ねて信玄は自ら密かに政虎と直接会ってまでも話を進めようとしていたが加藤段蔵や忍の透破から北条の風魔がどうやら甲斐まで来て信玄に対する不信からか情報収集をしていると報告が入り、替わりに急遽山本勘助を前回政虎に会った時と同じように甲斐の御用商人の三河道安になりすましてもらい春日山に向かい政虎と交渉しよう命じたのである。

氏康が自分に対して疑心を抱いておりもし自分が越後と交渉しているとばれたら自分の表向きは美濃、密かな目標の駿河行きの雲行きが怪しくなる。ことは秘密裏に慎重にかつ迅速に行われることが要求されたのである。

政虎の元に甲斐の御用商人三河道安が塩の買い付けに府内の町を訪れており、是非政虎と面会したいとの申し付けがあったのは政虎が春日山城に帰城してすぐであった。

政虎は重臣を集めすぐに三河道安と面会することにした。

道安、山本勘助は相変わらずであった。

醜い古傷だらけの外見に不敵な態度とそこから染み出す彼の長年の経験が物言わずとも物を言っていた。

「関東管領様、誠に麗しゅうござ様子で・・・」

道安はこの前と同じ口調で挨拶をした。

政虎もにこりと笑って返した。

「信玄様からのほんのお気持ちで・・・」

道安から信玄からの手土産と言っ絵巻物やらが渡された。

「片手で手土産・・・片手で軍を集めているそうではないか・・・」

宇佐美定満が厳しい口調で切り込んだ。

「・・・とんでもございませぬ・・・西へ・・・美濃向かう為の軍でございます・・・」

道安は率直に答えた。

「それで我々と手を結びたいと言うのだな・・・」

直江景綱が言った。

道安は大きく黙ってうなずいた。

「しかし美濃の斉藤義龍は手強いだろう・・・あの織田信長殿も苦戦しているようだが・・・」

政虎が静かに言った。

「・・・政虎様に比べればこの上なく楽な相手でございます・・・」  
道安は真顔で答えた。

「・・・相変わらず人を惑わすのがうまいな・・・」

政虎は笑いながら答えたが

「本気で言っております、道安としてではなく・・・」

勘助は本気で言っていた。

勘助は政虎の戦上手は十分に評価していた。

「・・・ありがとう・・・」

政虎は礼を言っておいた。

勘助、道安も頭を深々と下げた。

「しかし・・・どうやって信じると言っつのかな？」

宇佐美定満が老練な聞き方をした。

道安からの答えは意外であった。

「こちらから人質を送ります・・・そちらからはいりません・・・どうでしょう？」

道安は顔色を変えずに言った。

「随分条件が良いな・・・」

本庄実乃が思わず言った。

「人質は誰かな？それにもよるぞ・・・」

宇佐美は相変わらずだった。

道安は意外な人物を出した。

「・・・高坂弾正昌信を出そうと思うが・・・」

政虎は思わず咳き込みそうになった。初めての信玄との戦いでひと悶着あったあの男である。

しかしすぐに反応が出た。

「武田の一族ではないではないか・・・」

直江景綱が不満そうに言った。

「・・・弾正昌信は信玄公の寵臣中の寵臣ですぞ・・・それに・・・政虎様も・・・」

道安もおそらくわざとであろうがそれ以上は言わなかった。

政虎は気恥ずかしさかから思わず下を向いてしまった。

しかし意外な一言が入ったのである。

「気に入らんな・・・」

金津新兵衛であった、

「気に入らないとは・・・？」

道安も驚きの混じった声で言った。

「こつちはこつちで動いている・・・貴殿も関白様が関東にわざわざ下向していること知らんわけではあるまいに・・・」

新兵衛は厳しい口調で言った。

「関白様は無理としても・・・関白様推薦の方であれば関東管領である政虎様と共に関東を治めるのは相応しい事であろう・・・甲斐と和睦を結ぶのであればそれ相応しい 武田の一族であるのが相応では無いかな・・・」

道安だけでなく政虎や他の越後衆も思わず黙ってしまった。

政虎は普段は無口な新兵衛の横槍と言う正直思わぬ展開で黙ってしまった。道安も然りである。

「・・・おっしゃること何より・・・。しかしこの先行き読めぬ乱世の世、先を見越して手駒は多い方が何よりでありましょう・・・決して悪い話でないと思えますが・・・」

道安は落ち着いて返した。

「信玄様ではありませんが・・・政虎様から言えば正室 側室 と言つて良いのかわかりませんが・・・多いに越したことございませぬ・・・」

道安は続けた。

「そういう意味で言ったのでは無い・・・」

新兵衛は厳しい口調で言った。

「人の心に入り込み惑わすようなやり方が気に入らんとやっているまでだ・・・弾正昌信は阿虎様が声を掛けた男であろう・・・繰り返すことになるが本気で和睦を結ぶのなら武田の一族を送るかそれが無理ならそれ以上の立場か待遇が本筋であろう・・・」

今度は道安が黙ってしまった。

しばらくして

「気を悪くなされなさいでございませぬ。信玄様からのご好意のつもりだったのだが・・・」

道安も言葉を選びながら慎重に言った。

「新兵衛・・・この件はこの場で決めるつもりはない・・・落ち着いて・勘助・・・失礼、道安殿も」

逆に政虎が思わず止めに入ってしまった。

しかし今度は政虎が少し新兵衛に睨まれたような気がして今度は言うのをやめた。

道安も気配を感じ政虎に配慮してそれ以上言うのをやめた。

「他には？」

長尾政景が話を切り替えるように無感情に聞いた。

「犀川以北善光寺周辺の越後への譲渡も認めましょう・・・」

道安は言った。

政虎は思わぬ好条件に思わずふむむとうなずいた。

越後の家臣団も思わぬ好条件に顔を見合わせた。

「海津城とか言ったか？あの城はどうなる？」

宇佐美が聞いてきた。

道安 勘助が昨年作った城で川中島の犀川以南に鎮座し越後の脅威になっていたが

「海津城は野沢方面の北信濃の拠点に必要・・・譲れませぬ・・・」

道安は答えた。

和睦が成立すれば無意味な城である。政虎はそう思い黙って聞いていた。

「その代わり・・・」

道安は続けた。

「秋に同盟者からの頼みの関係で川中島に兵を出すがお互い睨み合うだけ終わらせましょう・・・」

道安は静かに言った。

「割ヶ嶽城の件はその絡みもあり、ご理解頂けます様・・・」  
道安は深々と頭を下げた。

「氏康殿か・・・」

政虎も独り言のように言った。

「人質や善光寺の件は秋以降か？」

直江が道安に確認するように聞いた。道安はうなずいた。

一通り話が終わった後

「本日の話は有意義であった・・・信玄殿にも宜しく言ってくれ・・・  
返事は追ってすぐに出す・・・」

政虎は答えた。

もっか問題は人質の件だけである。自分で家臣団を説得するしかない。

道安は両家のために良い返事を期待していると言って帰って行った。  
ただ道安 勘助は人質の件で少し揉めたことを少し気にしながらも  
新兵衛が気に入らなかった理由が解らなくもなかったのも事実であった。

が 武田一族からの人質要求には正直驚かされていた。しかしすぐにそれが本気ではなく人質以上の質を要求しているのかとも考えた。それであれば対応は容易であると楽観した。

道安 勘助が帰った後春日山城では評定がすぐに行われた。

政虎は薄々感じてはいたが新兵衛に人質としてなぜ弾正昌信では気に入らなかつたのか一応聞いてみた。

しかし予想通りの返答で政虎が今度は窮してしまった。

弾正昌信が来るのは構わないが単なる人質としてではなく婿としてよこすように要求したかつたのであった。武田一族では無いが信玄からの正式な婿入れであれば和睦の効力は固い。単なる人質では意

味が無いといったのである。

直江や宇佐美 本庄実乃まで同じ意見であった。

彼らは信玄とはここで終わりにして関東に集中すべきと言いたかったのである。

政虎は本音では弾正昌信の件は歓迎であったが関白近衛前嗣との話もあつたので単なる人質の方が都合が良かったのも本音ではあつた。しかし前にも言ったが越後の老重臣たちは氏康との戦いが長く険しい物になることを覚悟していたのである。

そのために甲斐への憂いを完全に無くすため弾正昌信がただの人質ではなくそれ以上の物になるよう求めたのである。

川中島に秋に信玄が出兵する件も不安材料であつた。

蔵田五郎左衛門からは昨年からの長期の出兵で今年は財政的にかなり厳しいとの指摘がなされていた。

蔵田五郎左衛門は元々青苧を扱う越後の御用商人であつたが財務を担当していた大熊朝秀が越後を出て行った後は政虎の信任を得て、商人をやりながらも彼が越後の財政をも管理するようになっていた。政虎も長期の関東出兵で財政面以上に昨年より働き尽くしの諸将や兵士からの不満も予想されたため本音では兵士を動かしたくなかつたが信玄からの和睦の条件である以上仕方がなかつた。

氏康に対する信玄の姿勢もあり、また信玄の気持ちの見極めもあるので出兵するしかなかつたのである。

最も今回の提案にも懸案はあつた。犀川以北の善光寺周辺のみが越後領で野沢は対象に入っておらずこの縁引きが曖昧で将来の禍根になる可能性と野沢方面から関東北部、及び西上野方面に抜けられる可能性の不安もあつたのである。

政虎はなるべく信玄を信用しようとしたが信玄が本当にどこまで約



束を守るかは正直不安があった。しかし結局はすべて了承して受け入れることにしたのである。

信玄へ了承の返信を送ると後は段取り通り動くだけである。

こうして各自の様々な疑心を抱きながら忙しい1561年 永禄4年の夏は足早に駆け抜けようとしていた。

## 客将

秋になり信玄との約束通り政虎率いる越後軍は川中島への出兵の準備に追われていた。

みな黙々と複雑な顔で作業をしていたが

「こんな馬鹿げた戦があるとはな・・・」

本庄繁長は沈黙を破ると露骨に不満をあらわに言った。

「本気で殺し合うよりは良いだろうよ・・・手前も弾むらしいぞ・・・」  
同じ揚北衆の色部勝長が落ち着いた風に声をかけた。

「油断はならんぞ・・・信玄の奴ワシらを油断させておびき寄せて一網打尽にしようと考えているかもしれないぞ・・・」  
同じく揚北衆筆頭格の中条藤資が戒めた。

「ま そうなれば繁長の希望通り本気の戦いが出来るだろうがな」  
長尾藤景が嫌味っぽく言った。

「随分楽しそうじゃな・・・」

宇佐美定満が割って入って来た。

「川中島までまた行って信玄とにらめっこしたら本当に何事も無くまた越後に帰ってこれるんでしょうな？」

繁長は宇佐美にうがった風に聞いた。

宇佐美はこっくりとうなずいた。

「・・・戦わなくても恩賞出るんでしょうな・・・」

藤景も続いた。

宇佐美は引き続き黙ってうなずいた。

「・・・しかし 油断はするな・・・あの信玄だからな・・・」

宇佐美は慎重に険しい顔で言った。

この宇佐美の一言が全てを語っていた。

政虎も春日山城の毘沙門堂に籠って祈りを捧げていた。

普段は戦勝祈願だが今回は何も起こらないことを祈った。

信玄とは既に4度目の戦いになるが今回は今までと事情が全て違った。

お膳立てのある戦いである。このような戦いは初めてであった。もちろん政虎だけでなく越後衆も同じであるが。

政虎は信玄を信用しようとしていたがやはり何か引っかかるものを感じずにもいらなかった。

そのような心の迷いを取り除くために毘沙門堂に籠ったのである。

9月に入り予定通り春日山城を出発した越後軍一行は1万3000の大軍で川中島に向かった。

しかし実働部隊は8000程度で残りは荷駄隊で食料や酒を今回は多く持ってきていた。

今回の信玄との和睦の件は越後の将校達には伝えられていたが一般兵には伝えられなかった。

無用な混乱と士気の低下を防ぐためである。

荷駄が多いのは兵士のためであった。兵士は農民出身者が多く9月の刈り入れ時の忙しいときに徴兵されることに不満の声が上がっていた。機嫌取りのためであった。

兵士に対しても今回は色々事情が違っていた。

兵士は普段は食料や褒章の現地調達、田畑の狼狽行為は黙認されていたが今回は信玄との和睦の件があるので実質信玄の支配下に入ってしまった。川中島で些細なことから信玄との問題が起こるのを防ぐため狼狽行為は厳しく禁じた。そのため兵士の機嫌取りのため荷駄を大量に同伴させたのである。

政虎にとっては関東遠征から始まった戦続きの中で経済的な負担が大きかった時での更なる負担で財政担当の蔵田五郎左衛門らから悲鳴が上がっていたが後々のことを考えれば安いものと考えての判断であった。

ただ今回の行軍は兵士の間でも様々な憶測を呼んでいた。

普通の越後軍にしては荷駄が異常に多く川中島での狼藉行為の厳禁が命令され、将校たちの緊張感が少ないことなどから勘の良い者は何か裏約束があるのでとひそひそと話していた。

春日山から川中島までは100キロ程度と甲斐よりも距離が近いこともあるが越後軍は甲斐軍よりも先に川中島に到着した。そして善光寺から離れた北部の西条山周辺に布陣し政虎は西条山にある若槻山城に入った。甲斐軍はゆっくり北上中で現在は上田周辺に留まっているという。

政虎が善光寺から離れた若槻山城を選んだのは無用な衝突を防ぐためであった。

甲斐軍の守備隊は昨年出来たばかりの海津城に籠っていた。海津城には城兵が少数の500しかいないのもあったが約束通り動く気配を見せず、淡々とのろしを上げ、越後軍が到着したことを甲斐方面の支城に伝令していた。

海津城は今回の交渉では越後への返却の対象外だが信玄が本陣として使用すると前以って密かに政虎には知らされていた。海津城は現在の松代城で山本勘助が設計し甲斐軍の川中島における重要な拠点にこの後なっていくことになる。

海津城は勘助の設計した城であったが城主はあの高坂弾正昌信が任されていた。

政虎は信玄のやり方に恣意的な物を感じ良い気分ではなかったが今回は和睦の件のみを最優先に考えそれ以上考えるのはやめた。

政虎は若槻山城から遠く川中島や海津城を見ていた。

信玄が本当に大人しく約束を守るかそればかりを考えていた。

そんな中、信濃国人衆が政虎の本陣に押しかけて来たのである。

越後衆の将校には信玄との和睦の件を伝えていたが信濃衆には将校

を含めて今回の件は伏せられていた。

彼らの反発と離反を抑えるためである。信玄との和睦など夢にも思わぬ信濃国人衆は直ぐにでも更に南進し善光寺のすぐ傍の葛山城を拠点にそのまま兵力の少ない海津城への攻撃を主張したのであった。

政虎、越後衆、信濃衆は今までも何度も川中島で戦ってきた。特に3度目の川中島の戦いでは信玄に今川義元や將軍足利義輝からの和睦条件を反故にされてからは、政虎や越後衆は信玄への不信感を募らせていたが政虎や越後軍と甲斐軍は常に小規模な小競り合いで終始し大規模に衝突したことは無く、実は信玄には約束を守らない、何度でも来るしつこい人間以上の感情はそれほど持つていなかったのである。しかし実は一番被害を受けていたのは信濃衆で政虎が川中島に介入するようになる以前、村上義清時代からの話ではあるが政虎と信玄の今までの3度に渡る川中島の戦い以外にも地域的な局地戦を何度も戦い、特に3度目の川中島の戦い直後、武田軍が葛山城の攻撃した時は政虎が関東方面に手一杯だったこともあり援軍を送れず信濃衆に犠牲を強い、特に信濃国人の落合一族は全滅の憂き目に合い追い詰められた婦女子が葛山城の谷に投身すると言う悲惨な事件もあり、そのため信濃衆には信玄への強い憎しみがあつたのである。

政虎も彼らの心情は十分に理解できたが信玄との和睦がある以上こちらから仕掛けることは出来なかった。信濃衆には信玄が来るまで迂闊に動かないことを厳命し不満気な彼らをあれこれなため部隊に戻した。

そして長尾政景の部隊には信濃衆の監視を行うようにも命令した。

「まずは味方から欺かないといけないのか・・・」  
政虎は命令を下しながらいやな気分になった。

若槻山城に入つて3日目、信玄率いる甲斐軍も川中島南方に入ったとの情報がもたらされた。甲斐軍は川中島に到着次第北国街道を北進し途中の川中島西方の茶臼山に展開していると言う。

「海津城に入らないのか？」

政虎は思わずつぶやいた。

「我々を警戒しているんでしょうな・・・」

宇佐美定満は言った。

「我々を信用していないのか？」

政虎は不満気に言った。

政虎は今回信玄に配慮して善光寺から北方の若槻山城に籠っていた。戦意が無いことを間接的に表したのである。

本気で戦うのなら善光寺のすぐ傍の葛生城か旭山城を拠点にして海津城を攻撃している。

「まあ・・・信玄が茶臼山に籠ってくれるんだつたら都合は良い・・・」

お互いの間は充分だからな・・・ぶつかることもあるまい・・・」

直江景綱は言った。

「それにしても・・・予想外に大軍で来たな・・・」

政景が冷静に言った。

信玄は実に2万と言う大軍を連れてきていた。

政虎もただのにらみ合いにしては兵力が大き過ぎるので内心不安を覚えていた。

「美濃を制圧するにはあのくらいはいるだろうよ・・・」

宇佐美がみな不安を打ち消すように言った。

「軍を動かさないように・・・」

政虎は冷静に命令した。

まともにぶつかれる数ではなかった。本当に動いたら危険と思ったのである。

その後 軒猿の部隊から思わぬ情報がもたらされた。

北条の風魔が来ているようで甲斐と越後両軍の動きをしきりに探っ

ているという。

「信玄の奴 氏康からも信用されておらんようだな・・・」  
直江がつぶやいた。

「まずいであろう・・・北条に茶番とばれたら」  
宇佐美は言った。

「信玄は特にな・・・美濃どころか氏康にも目を向けねばならん・・・  
予定が狂うであろうに・・・」  
直江も相槌を打った。

「・・・もし 氏康と信玄が仲違いし 氏康も和睦を求めてきたらどう  
うします？」

政景が妙なことを聞いてきた。

「それはないじゃろう・・・」

政虎が答える前に宇佐美が横槍をいれた。

「・・・しかし 越後には好都合かもな・・・」

直江は冷静に言った。

「信玄と組んで北条を叩く手もあるかもしれん・・・」

直江は言った。

「ま、今は何も考えず様子を見よう・・・」

政虎が一番冷静であった。

信玄の透破も北条の風魔が動き回っているとの情報がもたらされた。

「ちっ・・・氏康め・・・」

信玄が珍しく不愉快そうに舌打ちをした。

「少しはらしく振舞いますか・・・」

山本勘助は言った。

信玄も黙ってうなずいた。

甲斐軍が茶臼山を引き払い海津城に向かい始めたとの情報が越後側  
にもすぐにもたらされた。犀川の南方の道を東に川中島を横断する

ように海津城目指して移動しているという。

政虎は相変わらず動かさず信玄の様子をじっと見ていた。やがて海津城に信玄ら甲斐軍本隊が入り残りは海津城後方の山城、鞍骨城や尼巖城、天城山城に順次籠りだした。

ただ2万という大軍のため入りきれない部隊が海津城の周囲陣を展開していると言う。

政虎は全く軍を動かさず様子をじっと見守っていた。

「さすがに律儀だな・・・」

政虎の姿勢に信玄も感心していた。

「しかしあまりに動かないのはちよつとな・・・氏康に読まれるのは不愉快じゃな・・・」

信玄はしばらく黙っていたが

「少数で良い・・・替佐城に向かえ・・・」  
命令を下した。

替佐城は越後側の飯山城の目の前で信濃、川中島のはるか北端で政虎にとつては越後防衛の最終防衛線に近いところであつた。飯山城と春日山城は斑尾山を越えると実は至近距離である。

「お待ちください！危険です！」

弾正昌信が反対の声をあげた。

「兄上！おやめください！政虎の気変わりを起こすかもしれないぞ！」

繁信も反対した。

「解つておる・・・しかし氏康の風魔が見ている・・・何も無いでは済まされぬ・・・」

信玄も危険を充分に承知していたが厳しい顔で言った。

「越後軍が西条山を降りてきたり飯山城の部隊をこちらに向かわせたらすぐに海津城に戻せばよい・・・戦つた振り・・・戦おうとした振りが大事なんじゃ・・・」



信玄は続けた。

結局信玄の命令通り少数の2000程度の部隊が替佐城に向かった。

政虎の元にもこの情報がすぐに入った。

政虎も冷静な振りをしていたが内心気が気ではなかった。

しかし信濃衆の我慢が先に切れて飯山城城主の高梨政頼や村上義清が本陣に押しかけてきたのである。

高梨と義清は替佐城に軍がこもられる前に移動中にすぐに攻撃を仕掛けるように政虎に懇願した。

信濃衆は川中島で政虎と信玄が戦い始める以前より信玄と戦い続け疲弊し、葛山城の戦いや今年の越後と信濃の国境にある割ヶ嶽城が武田軍の原虎胤に襲われる事件もあり信玄への不信感は極限まで達していた。

高梨は常に信玄と最前線で老体に鞭打って戦い続けたものの相手の悪さもあって苦戦を強いられ特に1557年（弘治3年）第三次川中島合戦直後の信玄が將軍足利義輝や今川義元の和睦を破って川中島に侵入してきたときは雪のおかげで政虎の援軍を受けられなかったこともあり中野城を奪われ残された最後の飯山城で抵抗を続けていた。そのため彼の危機感は相当なものであった。義清も信玄に二度も痛い目に合わせながらも信玄の謀略にはまり、居城の葛尾城を奪われ、今は政虎を頼って今日に至っているのであった。信玄のしたたかさを充分に承知していたので政虎の今回の作戦に不安を感じ懇願に来たのであった。

ただ高梨や義清も負い目は感じていた。

政虎は今回信玄との和睦の件は信濃衆には無用な混乱を避けるため伝えていなかった。

伝えなかった理由は今回の和睦の条件に高梨の希望する中野城、義清の希望する葛尾城が入っておらずまた越後衆にも彼らのおかげで

越後が信玄との無用な戦いに巻き込まれているとの声が上がっており越後衆と信濃衆の間にも微妙なずれが生じつつあったからでもある。

高梨も義清も政虎が以前より信玄との和睦の交渉に入っているとの噂は聞いていた。

本人から聞いたのではなく信濃出身の軒猿から彼ら情報が密かにもたらされていたのである。

政虎が関東に専念したので川中島はもう終わりにしたいという政虎の情勢は高梨も義清も充分に察してはいたがそれでも信玄が素直に下がってくれるとは彼らの長い経験から考えられない、考え難かったのである。

高梨も義清も政虎からすればはるか年配の人物である。政虎は言い回しに注意しながらも落ち着き払った冷静な振りに終始し、二人を前日の信濃国人衆をなだたように接して再度陣に戻した。

ただもちろん彼らの危機感や気持ちは政虎も十分に承知はしていた。しかし今の政虎に出来るのは信玄の動きを見守ることだけであった。しかし政虎にも不安が無いわけでは決してなかった。

政虎は高梨には引き続き飯山城の守りを固めてもらい、歴戦の猛者の義清は若槻山城を降りて西条山のふもとの最前線の部隊の柿崎景家隊と合流してもらいしばらく待機してもらうことにしたのである。

ただ甲斐軍の北進の動きで越後兵の中でも動揺が見られ始めていた。動揺していたのは実は信濃衆を密かに監視していた長尾政景率いる越後軍主力とも言える上田衆であった。

政景は落ち着き無表情に冷静な振りをしていたが上田衆は明らかに動揺していた。

上田衆が動揺したのは甲斐軍が飯山城そのものを無視して千曲川を北進して十日町を通り越後中郡に侵入してくることであった。自国領土奥深くに入り込まれてしまう可能性を恐れたのである。

十日町周辺は上田長尾の勢力圏で政景の居城坂戸城から山一つ隔てた町である。

上田衆だけでなく危機にさらされるかもしれない越後中郡の豪族も不安そうな顔をしていた。

政虎はそれでも今回は我慢強く動かなかつた。

そのような神経質な時間が過ぎていた時であつた。

あの二人が本陣に飛び込んできたのである。

本庄繁長と長尾藤景であつた。

「いつまで休んでおられる！」

繁長が声を荒げた。

「今回は戦わない・・・そう言ったはずだ・・・」

政虎も普段と違いいつもに増して厳しい声で言った。

「甲斐猿が約束を守るとは思えません！」

藤景も容赦なく返した。

「挑発に乗ってはならぬ・・・今回は戦わない・・・さつきも言った通りだ・・・！」

政虎も少し苛立ったように言った。

「信玄の色仕掛けに乗るようではな・・・国を守れんな・・・」

繁長の強烈な一言は政虎の感情を害するに充分であつた。

普段なら思わず癩癩を起こしかねないところであつたが、しかし政虎も今回は我慢した。

黙つて聞いていない振りをした。

藤景が苛立ちながらまくしたてた。

「甲斐猿に飯山城を抜けて千曲川沿いに越後本国に入られたら手の施しようがなくなりますぞ！すぐに飯山城の部隊と本隊で連中を挟撃するよう・・・」

「動くな！」

藤景が言い終わらないうちに政虎が遮つた。

「向こうが動いているのにこっちがだんまりでは伝わらんでしょう

が！こつちも動いて意志をはっきりさせるべきでしょうが！味方が萎えるわ！」

藤景も大声で返してきた。政虎が少し押されたほどであった。しかし政虎にも本音があった。

甲斐軍との戦力差が予想外に大きいのでぶつかるのは避けたかったのである。

「・・・和睦の話は何度も説明したはずだ・・・風魔が見ているので信玄も動いている振りをしているだけだ・・・誘いに乗ってはならない・・・」

政虎は落ち着いて藤景に答えた。

しかし藤景、繁長は今回は容赦がなかった。

「甲斐猿に好き勝手に動かれてもだんまりとはな・・・今日は姫様が動けない日ではあるまい？」

繁長が遠慮なく言った。

「・・・もう一度言ってみる・・・！」

政虎もさすがに我慢できずに思わず肩を震わせ厳しい顔で繁長を睨み付けた。

しかし

「・・・こんな馬鹿げたことに付き合っておれぬ・・・俺達は国に帰らせてもらう・・・」

藤景、繁長は予想外の事を言い出したのである。軍を引き揚げると言い出したのである。

政虎は怒りと驚きの表情を抑えながら

「・・・買っていたのに・・・残念だよ・・・」  
冷静に言った。

「自惚れも程々にせい・・・」

直江から藤景、繁長に厳しい声が飛んだ。

「若造どもが調子に乗りおって・・・」

宇佐美も珍しく厳しい口調で入ってきた。

しかし収まらない藤景、繁長は更に予想外な一言を続けたのである

「ご老輩と姫君が何をおっしゃる・・・俺達だけではないぞ・・・揚北の他の若いのも俺たちと同じ意見だ・・・あんたらにはついていけない・・・じゃあ遠慮無く俺らは帰らしてもらおうか・・・」

「何っ・・・」

直江と宇佐美の驚きにも似た小さな声と口調が止まったのは政虎にもわかった。

政虎も予想外の展開と少し自分の顔色が青ざめていくのがわかった。これ以上兵力が減ればいざとなったら本当に戦えなくなるからである。

「揚北の責任者は誰かわかっておるだろうな・・・勝手に行動するのは許さんぞ・・・」

中条資藤が口を開いた。

「俺は2番目だが・・・問題あるうか・・・俺が代わりに責任者になっても構わんが？」

繁長は不適に返した。

「貴様！」

中条が70近い老人と思えぬ勢いで刀の鞘に手を当てた。繁長もゆっくり手を鞘にかけようとした。

その時であった。

「やめぬか！」

誰かが大声で割って入って来た。

迫力のある威厳のある声であった。

「今はお互い陣中で争っている場合ではなかるうが！」

声の主は金津新兵衛であった。

みな一瞬思わず黙ってしまった。

宇佐美や直江も我に帰ったようであった。自分の立場をわきまえずに言った言葉にばつが悪そうな顔をしていた。

藤景も繁長も一瞬ひるんだようであった。

しばらくの沈黙の後、繁長が声を絞り出した。

「奥羽との国境に近い遠国の俺らに兵を出せと毎回気軽に命令するのがな・・領土も増えないのに・・クソ・・」

繁長の本音が思わず出た。

揚北衆でも繁長らは越後北端部で春日山城への移動も一苦勞であった。

「・・揚北を筆頭に（越後）下郡（新潟県北端部）の衆はみな不満気ですぞ・」

繁長を代弁するように藤景が続けた。

「だから・・俺たち揚北衆は戦わないのであれば今回は兵を引かせてもらいたい・・」

政虎は越後の現実に引き戻されたのに気が付いた。

越後は自分が統一したように振舞っていたがそれは表向きで越後は相変わらずゆるやかな領主連合の枠組みを超えたわけでは決まらなかった。政虎が関東管領にこだわったのは少しでも越後守護の権威を強固にするためにこだわったのだが実際はやはりそれ以上の支配を強めるわけではなかったのである。

政虎はあくまでも兵を出してもらおうよう頼む立場なのである。頼まなければならぬのである。

政虎も藤景、繁長の實力は認めていた。

関東戦線で常に活躍し彼らも年若いので同年代の若い兵士や土豪からも人気があり将来を期待されていた。

しかし若さゆえの粗暴で気性が荒いのが彼らの長所でもあり短所でもあった。

政虎も藤景や繁長の性格は頭では充分分かっていても今日の二人との口論にも近いやり取りで少し冷静さと反発心と怒りの感情がごちゃ混ぜになっており普段の政虎であれば冷静に答えるはずであった

が売り言葉に買い言葉にはないが思わず政虎も言ってしまった。

「・・・そんなに帰りたければ・・・帰ればよい・・・」

「お お待ちくださいなれ・・・！彼らがいなければ戦だけでなく今後の越後の国内にも重大な支障が出ますぞ！ご再考を！」

このやり取りを黙って聞いていた色部勝長が挟んできた。

勝長自身も揚北衆の一人ではあったが政虎が初陣を飾った栃尾城の攻防戦後から帰参した古参の武将であった。それ以上に彼が心を痛めていたのが実は繁長を政虎に紹介したのは彼だったからである。

今回の騒動に気を揉みなんとか事態を収めたい一心で発した一言であった。政虎も色部の意図はすぐわかったが

「構わぬ・・・畑が心配なのであるう・・・勝手に帰れば良い・・・」

政虎も色々な感情から意固地になっており言ってしまった。

本来なら二人に頭を下げてでも引き留まってもらうべきであったが自尊心がそれを許さなかった。

藤景と繁長が不満そうに政虎を一瞬睨み付けたあと陣を出て行くこととしたその時であった。

「待てい・・・」

新兵衛が普段とは違う厳しい表情で春日槍を一本持つて二人の前に立ちはだかつたのである。そして険しい顔で藤景 繁長をにらみつけた。

藤景も繁長にも明らかに緊張が走っていた。

10秒程度の短い時間であったが長く感じる緊張の沈黙の時間が流れた。

彼らが思わずそっと刀の鞘に手をやろうとしたその時であった。

新兵衛は槍を横に置くと

「・・・頼む・・・帰らないでくれ・・・今までの不届けはすべてワシにある・・・」

今 おぬしらがいなくなれば負けてしまふ・・・いや越後がまた分裂してしまふ・・・なんとか協力してくれ・・・頼む・・・」  
と言うと突然土下座したのである。

一同はしばらくあっけに取られていたが

「・・・客将のあなた様がそのような・・・お、おやめくだされ・・・」

藤景が我に返り慌てて新兵衛を立ち上げようとしたが新兵衛は亀のように動かなかった。

他の者も新兵衛の予想外の行動に動揺していた。  
もちろん政虎もである。

新兵衛の越後軍内の立場は客将と言う立場であった。

実は政虎が幼少の頃の乳母は新兵衛の妻であり、新兵衛も政虎の養父ということで新兵衛の実質的な地位は家臣団でも最上位であった。また養父以上に実は家柄も清和源氏平賀氏流れを組む長尾家以上の名門で政虎も新兵衛を客将と公言していたほどであった。

新兵衛はこのような立場でありながらも普段は口数が少なく政治に口を挟むことはほとんどなくいつも政虎の後ろで黙って座っていることが多かった。

もつとも彼が政治に口を挟まなかったのは政治に興味が無いのも事実であったが。

ただ無口な普段とは裏腹に新兵衛の歴戦の武者としての独特の雰囲気や余計に彼に威厳を与え武将としても別格の存在感を醸し出しているのも事実であった。

その彼が土下座しているのであるから越後衆の驚きと動揺が収まらなかった。

しかし政虎が真つ先に声をあげた。新兵衛の土下座など見たくなかったからである。

「新兵衛・・・何をやっている・・・やめろ！」

しかし次の新兵衛の一言で政虎は頭を叩かれたような気がした。



新兵衛は顔を上げるときつと政虎を睨み付け

「阿虎！いい加減にしなさい！」

と叱り上げた。

「……………」

政虎はめつたに新兵衛に怒られた記憶はなかったがその数少ない記憶が蘇り何も言えなかった。

新兵衛は続けた。

「頼む・・・力を貸してくれ・・・ワシが今回の件は責任をとる・・・」

「・・・そのような言い草はやめてください・・・わかりました・・・兵は引きませね・・・お顔を上げなされ・・・」

繁長もようやく我に振り返り引き下がってくれた。

政虎は新兵衛が立ち上がる前に立ち上がって誰とも目を合わせずどこと無く悔しげな複雑な表情でうつむき気味に陣外に出て行ってしまった。

新兵衛の土下座など見たくなかった以上に自分の不甲斐なさや感情をどこにぶつけたら良いのかわからなかったからである。

## 川中島前夜（前書き）

当作品は第4次川中島の戦いは甲陽軍鑑説ではなく遭遇説を採用しております。ご了承ください。

## 川中島前夜

翌日陣内では普段のように評定が始まった。

昨日の出来事が嘘のように今まで通り何事も無かったように集合していた。

昨日の出来事など無かったかのような無表情にみな座っていた。

しばらくして政虎が黙って入ってきた。

昨日と違い普段通りの表情で落ち着いていたが少し気分が落ち込んでいるようであった。

政虎は少し考えた後、静かに口を開いた。

「・・・藤景と繁長は私の前に出てもらえないだろうか・・・」

昨日までの政虎らしくない言い回しであった。

皆一瞬驚いたような顔をしてお互いを見合わせた。

長尾藤景、本庄繁長は無表情に政虎の前に出たが目線は下に向けたままであった。

「・・・昨日の件はすまなかった・・・反省している・・・申し訳ない・・・」

政虎が切り出した。

「・・・私も気がついたら32になった・・・体はほとんど年をとるのに心がついていかない・・・正直苦しい・・・みなにも嫌な思いをさせていると思うが・・・許してほしい・・・」

政虎は神妙に話し出した。皆の前で本音で話すなど久しぶりだった。昨晩はゆっくりいろいろ考えた。

ここ数年は強がってばかりで越後の現実を忘れていたような気がした。

政虎は越後の守護大名ではあるが、強権的な支配者ではなく、現実には緩やかな領主連合に過ぎず、それをより強固な関係にするため長尾を捨て、上杉になり、更には関東管領までになったのだがそれはあくまでも権威的なもので越後国内における政虎の実態はあまり変

わっていないと言う現実である。

「今回の作戦は練り直す・少し軍を動かして信玄に意思表示をしよう・何か希望があれば思うように述べてほしい・・・」  
政虎は今回は久々に皆の意見を聞いてみようと思った。

越後衆の希望は簡単で明確であった。

政虎の心労も頂点に達していたが兵士も将校もそれは同じであった。それを少しでも和らげるために信玄への明確な意思表示と采配を見せて味方を落ち着かせる必要があった。

信玄への意思表示は戦うつもりが無いのであれば自主的、もしくはこちらから多少ごり押ししても海津城、さらには甲斐へ後退させることであった。

政虎の采配を見せなければ越後衆はついてこない。政虎の本当の魅力でもある優れた采配を振舞い越後衆を安心させることを要求したのである。

政虎は了承した。

替佐城に甲斐軍が入るのを確認すると政虎は部隊の移動を命じた。南方の善光寺近くの葛山城に本陣は移動、本隊も善光寺近くの横山城に移動させて荷駄隊も善光寺の裏側の旭山城と大峰山城に固定した。

信玄にも越後軍の動きはすぐに伝えられた。

信玄にとっては予想外の動きであった。飯山城にばかり軍を向けると思っていたら南進して来たからである。

「飯山城を放り出す気か・・・？」

内藤昌豊が驚きの声をあげた。

「いや・・・こつちが北に行くなら・・・あつちは南に行くつもりじゃろっ・・・警告じゃろっ・・・」

山本勘助はすぐに察したようであった。

「それにしても善光寺を盾に使うとはな・・・」

山県昌景が呆れ気味に言ったが

「犀川を掘代わりに使うんでしょう・・・」

真田幸隆が慎重に言った。

「もしかしたら犀川を渡って北国街道をpushさえようとしているのかもしれない・・・面倒だな・・・補給に支障がでる・・・」

信繁も冷静に読んでいた。

「政虎が約束を守らず我々の邪魔をしたら・・・飯山城を一気に叩きますかな・・・？・・・思ったより向こうの兵力は少ないようですがな・・・」

飯富虎昌が信玄に冗談とも本気とも取れない発言をしたが信玄は大きく首を左右に振って拒否した。

「それにしても・・・全く・・・政虎らしいわ・・・」

信玄は感心しながらも面倒そうにぼそつとつぶやいた。

政虎は直江景綱を中心とする荷駄隊を善光寺周辺に固定したまま更に南進の準備の命令を下した。荷駄隊を固定したのはあまり戦力にならない部隊を危険にさらさないためである。またもしものときは善光寺を盾に、更には流れの早い犀川を堀のように使えるので防御にも適していた。

政虎の信玄に対する牽制の動きにもかかわらず替佐城に甲斐軍はへばりついたままであった。

すると越後軍は再度動きを見せた。

今度は信玄が腰を抜かす番になった。

信玄の元に驚くべき情報がもたらされた。

海津城の南の斎場山の尾根伝いの妻女山に越後軍が少数布陣している

と言つ。

いつの間にか犀川を渡り北国街道を南進して川中島のはるか南方まで進み、甲斐軍の横山城や広田砦のすぐ傍を難なく通りそのまま妻女山に入ったと言つ。

信玄は可能な限り北進してみても黙っている政虎の反応を見てみようと思つたら今度は政虎が川中島の最南端部まで軍を送つて来たのである。

「北国街道沿いの横田城や広田砦、斎場山峰伝いの天城城の部隊は何をしてたか・・・」

信玄は舌を巻きながらも自軍の失態に呆れ気味に言つた。

越後軍は信玄や甲斐軍の気づかぬ間に北国街道を一気に南下し信玄の背後に廻つたのである。

「・・・さすが政虎ですな・・・」

甲斐軍でも勘助は一人感心していたが。

政虎は闇夜に紛れて少数の100人程度の部隊を派遣しひとまず妻女山に陣を作り様子を見たのである。地の利に詳しい信濃衆や軒猿を中心とした部隊でここを拠点に海津城の偵察も兼ねていた。

信玄はそれでも相変わらず飯山城の前の替佐城から部隊を引かなかつた。

信玄も少し意地になつたのである。

しかし信玄にさらに嫌な情報が入ってきた。

妻女山の部隊は単なる囷と信玄は考えていたのだが追加で部隊が続々と増強され妻女山に入りきらない部隊が隣の斎場山にまでも布陣を始めているとの情報が入りだしたのである。

横田城や広田砦の守備隊からも昼間から堂々と越後兵が北国街道を北から南にせわしく移動しておりどうしたらよいかとの連絡がしき

りに海津城の本陣に入り始めていた。齋場山および妻女山にはもはや囀の部隊ではなく一つの大部隊とも言える規模の兵力が集まりつつあった。

信玄にとつては妻女山周辺は海津城の背中中で更には甲斐への帰路途中にもあたり、越後軍に布陣されるのは退路を絶たれるようで気分の良い物ではなく大きな圧迫にもなりつつあった。

信玄は信繁や勘助を呼んだ。二人の意見を聞くためである。

信玄は政虎を一応信用していた。

理由は北国街道沿いにあり越後軍に邪魔な横田城や広田砦を襲うそぶりを全く見せなかったからである。

ただ越後軍があまりにもせわしく兵を動かすので政虎が本当に約束を守るかどうかについて信玄も少し不安を感じたのである。

信繁や勘助も政虎が色々動いてはいるが信玄の考えと同じで横田城や広田砦を襲うそぶりを見せないことから戦う気が無いのではと判断をしていた。

政虎が単に信玄の北進に抗議する意味で正反対の南進で対抗しようとしているのではないかと考えていたのである。

そのため二人は解決策として替佐城から部隊を引くことを主張したのである。

甲斐軍が替佐城から撤退すれば越後軍も妻女山から再度犀川以北の善光寺方面に戻るはずと考えたのである。

信玄も信繁や勘助が同じ意見だったので安堵したが今度は別の問題が頭をもたげていた。

政虎と戦おうとした素振りを北条氏康に見せることである。

既に川中島に来て一週間が経とうとしていたが

「ワシらも向こうもつらいだろうが・・・もう少しだけ粘ろう・・・あと1週間だけじゃ・・・素振りが大事じゃ・・・越後軍には絶対にちよっかい出すなよ・・・」

信玄は信繁や勘助だけではなく自分にも言い聞かせるように言った。

政虎は今までの沈黙が嘘のように次から次へと信玄に対して手を打ってきた。

替佐城の守備隊から信玄の元に飯山城に上田長尾や三条長尾の部隊が入り兵力を増強しているとの情報が入ってきた。越後軍に対抗するため兵力の補充を求める連絡が入ってきたのである。

横田城からも村上義清ら信濃衆の部隊が南進して齋場山方面に向かい更に妻女山の目の前を流れる千曲川には渡しがあつたがどうも越後軍が齋場山への物資の補給を円滑に行うために橋を架けているようだとの連絡も入ってきていた。

横田城の部隊からも越後軍に好き勝手にやらせないために兵力の補充を促す声が信玄の元に届いていた。

海津城の部隊からも背後の齋場山に甲斐軍が苦手な村上義清ら信濃衆が入ったことに不安の声が出ていた。

甲斐兵の不満や不安が増す中で、それとは裏腹に信玄は一人落ち着き払い、感心しながら独り言を漏らした。

「さすが政虎じゃ・・・ワシに圧力をかけるとはな・・・」

「それにしても・・・確かにたいした奴ですが・・・しかし・・・」

信玄の独り言を聞いた息子の義信が何かを続けようとしたが

「・・・振り回すつもりが振り回されるワシらは心底面白くありませんな・・・全く・・・」

飯富が正直に不満そうな義信の本音を代弁した。そして

「・・・政虎は兵力を北の替佐城と南の齋場山に大きく振り分けてます・・・本陣の葛山城は荷駄隊ばかりでろくな戦力がいないと思われませんが・・・兵力を分散し主力のいない手薄な本陣を一気に叩くのも悪くはなかるうかと・・・」

飯富が静かに言った。

「・・・今回は美濃攻めが本当の目標じゃ・・・予定外の戦は許さん・・・」



「信玄が厳しい口調で言った。」

「美濃の斉藤も同じくらい面倒ですぞ。・・斉藤と政虎が組んだらもつと面倒ですぞ。・・挟まれて身動きが取れなくなってしまうすな。」

飯富が珍しく少し声を荒げたが信玄は目をつぶり聞いていない振りをした。

「父上は政虎を買い被り過ぎでは。・・早めに手を打たないと。・・」  
義信が不満そうに言った。

「買い被ってはおらぬが過小評価も良くないぞ。・・義信」  
信玄が諭すように言った。

義信は不満そうな顔で口を閉じた。

10日ほどたったある日、横田城から再度信玄の元に情報が入ってきた。

相変わらず越後の荷駄隊は北国街道を南に北にとせわしく齋場山と善光寺の間を往復していたが普段より大量の荷駄と将校らしき人物複数が齋場山に向かったとの連絡が入ってきた。

忍の透破からの報告からもどうやら政虎自らが猛将柿崎景家をはじめとする重臣、親衛隊兵を連れて齋場山の新しい陣地に入った模様との連絡であった。

妻女山の麓には千曲川を渡るための仮の橋も完成し、おそらく越後の軍師宇佐美定満が作ったのであろうか越後兵は宇佐美橋と呼んでいると言った。

さらには時々誰かが陣中で琵琶を静かに奏でているとの報告も入ってきた。

「敵中で琵琶を奏でるとは。・・おなごの考えそうなおつた。・・」  
飯富が不愉快そうに言った。

「兵士から不満が出ていますぞ・・・補給も北国街道が使えないので地蔵峠経由で入れていますが量が満足に入りませんからな・・・」  
義信も不満を言った。

甲斐軍は補給は本道の北国街道を普段は使っていたが妻女山に越後軍に籠られてからは妻女山近くを通る北国街道は通れなくなり海津城の後方の峠道で裏道とも言える地蔵峠を使っていた。

ただ峠道で狭く険しいので輸送力が不足していた。

北国街道が使用可能な時でも甲斐からの補給路が長いいため補給が遅れる傾向があったが今回道が悪い地蔵峠経由になったため補給の遅れが決定的になり兵士の不満を買っていた。

しかし信玄の一言は意外であった。

「いや・・・陣中で琵琶か・・・風流じゃな・・・」

飯富と義信は信玄の思わぬ一言にがくつと拍子抜けし顔をお互いに見合わせた。

悠々とした信玄に副将格の内藤昌豊が声をかけた。

「ただ・・・もうそろそろ良いのでは・・・」

信玄はちらりと内藤を見た。内藤も続けた。

「・・・ここへ来てもう2週間経ちます・・・我らの標的は別にあります・・・そろそろ一旦甲斐へ帰るのも悪くはないでしょう・・・氏康殿へ様子見せも充分でしょう・・・」

信玄も目を閉じしばらく黙った後

「・・・そうじゃな・・・もう頃合だろう・・・」

そして命令を下した。

「・・・替佐城の部隊は海津城に戻せ。」

斎場山の越後軍陣中で政虎は静かに琵琶を奏でていた。

本庄繁長が静かに足早に入ってきて来て政虎の傍らに普段のように粗暴にどかりと腰掛けた。

政虎が一曲弾き終わると

「余裕ですな・・・」

繁長が声をかけてきた。

「信玄にはこちらの気持ちは伝えた・・・これで皆も安心であろう・・・」

政虎は答えた。

「信玄が本当に撤兵するまでは安心できませぬ・・・」

繁長はぶっきらぼうに答えた。

「確かに油断はまだならない・・・その志でよし・・・」

政虎は繁長に返答をするとまた静かに琵琶を弾き始めた。

しばらくすると別の若武者が陣地に入ってきた。甘粕長重である。

甘粕は政虎が期待をかけ今回連れてきた若手の一人で妻女山布陣の部隊を任されていた。

政虎は琵琶を引く手を止めると甘粕が報告を上げてきた。

「替佐城の部隊が海津城に後退を始めたようです・・・」

報告を聞いて繁長はちらりと政虎を見たが政虎は特に表情を変えることなく

「う」苦勞・・・」

と一言言つと再度静かに琵琶を弾き始めた。

その日の夜、夕食時、越後軍陣中ではなぜか盛大な食事が振るわれていた。

政虎は普段の食事は酒と少量の飯、一品程度の料理と質素なものが多かったが出陣前は普段とは別人のように豪勢でしっかりと量を食べるので取り巻きもそれで政虎が出陣するのかどうか判断出来るほどであった。

そのためまさか信玄と戦うのではと・・・一同一瞬緊張が走ったが良く見ると豪勢なのは重臣向けの食事だけで政虎の物は普段通り質素

な物であった。

一同席に座るのを確認すると政虎は声をかけた。

「今日はゆつくりしよう．．．宴の用意を．．．」

「敵中真つ只中ですぞ．．．」

藤景が思わず声を出したが

「．．．向こうも同じ事をやっているであろう．．．」

政虎はにこりと笑うと藤景に返した。

「．．．？」

不思議と不満が混じった表情を見せる藤景にお構い無しに政虎は続けた。

「甲斐軍が替佐城から撤退したようだ．．．めでたいことだ．．．我々もいったん葛山城まで後退しよう．．．今日はその祝いである．．．無礼講で良い．．．気楽に．．．」

「お待ちを！信玄が海津城を出るまでは油断なりませんぞ！」

繁長が物言いをしたが

「その心配は無用．．．今日は甲斐軍もゆつくり休んでいる．．．」  
政虎は海津城を指差した。

「炊煙の量を見るが良い．．．昨日に比べても多い．．．甲斐軍は補給に苦しんでいるはずだが今日は盛大に振舞っているのを見ると近く撤退するに間違いはない．．．」

「フツ．．．葛山城の丸腰の直江殿の荷駄隊を襲うために兵を腹一杯にしているだけかもしれませんぞ．．．」

藤景が少し嫌味っぽく言うと

「．．．もしそうならば．．．直ぐにでも齋場山の全軍で八幡平まで下つて直江隊と挟み込めば済む話であろう．．．犀川を甲斐軍もそうやすやすと渡れないはず．．．我々に背中を見せる危険を信玄が冒すとは思えない．．．もしそうなったら最もそなたらの希望通りの本気の戦いになるだろうが．．．」

政虎も少し意地悪く返した。

「信玄もそこまで危険な作戦を取るほど愚かではないわい．．．」

宇佐美が諭すように言った。  
藤景も繁長もようやく鞆を納めた。

しばらくの沈黙の後

「いやあくさすが越後の将校は歴戦の強者揃いじゃのう。こりゃいい勉強になるわい！越後に生まれてよかったよかった。」

誰かが妙な言い回しで大声を上げた。

水原親憲である。彼も今回政虎の期待の若手として連れてきたのであるがそれ以外にも彼は越後軍では有名人であった。

武勇に優れ茶や歌を好む風流人ではるが見た目が少々不男で行動も面白い男と評判であった。

酒宴の時も妙な格好をしたり、行軍中も大声で下人と世間話を平然とするなど越後軍でも話題の男であった。

政虎や一同は一瞬あつけに取られたが失礼ながら彼の顔を見て思わず政虎はくすりと笑ってしまった。

他の者も同様であった。大声で笑いが出て場の空気が和んだ。

この水原親憲だが外見に反して彼はこの後も越後軍で大活躍し、景勝の代も忠実に仕え、後年の北の関ヶ原の戦いとも言うべき長谷堂城の戦いではあの前田慶次と共に猛追してくる最上義光を追い払うべく殿を勤め、大阪冬の陣でも鴨野の戦いで活躍し徳川秀忠に感状を賜わったのだが謙信時代の戦に比べるとまるで子供の石合戦のようだと云ったと伝えられている。

場が和むのを確認すると

「ま、そうであればひとまず酒だ酒！乾杯じゃ！」

中条藤資が70の老人と思えぬ勢いで大声を出した。

「余計なお世話だろうが体にも気を付けた方が良くぞ。陣中の宴の最中に酒で死んだら後世の笑い草になるぞ・・・」

北条高広が呆れ気味に言う

「阿虎様にもちやんと言つとけよ！」

中条が意地悪く高広に返した。

「・・・阿虎様の酒がもつと回ってからな・・・」

高広がぼそつと小声で言うと同再度大笑いが起きた。

「いや〜うれしいな やつとこさ越後へ帰れるわ」

一般の兵も大喜びであった。彼らにも酒が振舞われその日の晩は賑やかな夜になっていた。

甲斐軍でも替佐城の部隊が海津城に戻ると信玄自ら労いの言葉をかけ、将校や兵士達に今回の目標は達成されたので近く一度甲斐に撤退する旨を伝えた。

そして信玄は皆の労をねぎらうべく酒を振る舞い宴会を開かせた。

「齋場山も賑やかなようすな・・・」

勘助が齋場山方面に目をやると静かに言った。

透破の報告では越後兵も近く撤退するよう派手に飲み食いしていると云う。

「あまり騒ぐと寝ている連中が目覚ますぞと越後衆に伝えてやれ  
！」

馬場春信が冗談を言った。

齋場山はその名前どおり実は古墳や墓が多い土地であった。

「さいじょうやま（西条山 齋場山 妻女山）と同じような名前の山を何箇所も梯子して話をややこしくしておつて・・・」

諸角虎定も苦笑いしながら言った。

「いや、連中も実は何山に籠ったのか覚えていないに違いない」

普段は冗談を言わない真田幸隆までも悪乗りをしてきた。

甲斐の将兵も大笑いであった。

緊張の糸が切れたのか酒のせいか安堵からか甲斐軍陣内も空気が和んでいた。

「ま、これからが本番じゃがな・・・」

信玄は独り言のように言っていると、ふうつと溜息をつくると何事も起きなかつたことに安堵しているようであった。

そして今後の交渉に備え色々考えを張り巡らしているようであった。

「兄上・・・ひとまずは乾杯ですな・・・」

信繁が信玄に酒を注いだ。

「信繁、今日は普段通り無礼講でよい」

信玄が言つと

「（信玄の息子の）義信殿や（後見人の）飯富殿が見ているからな・

・粗相があつては後々まずいんで・・・今日は遠慮しましょう・・・」

信繁が茶目つ気たつぷりに言つた。

信玄も思わず大笑いしてしまった。

そのころ、越後軍、甲斐軍が共にくつろいでいるときに一頭の早馬が海津城に向かって信濃国を北上していた。

美濃での重大な事件の第一報を伝えるために早馬は疾走していたのである。

## 濃霧の遭遇（前書き）

当作品は第4次川中島の戦いは甲陽軍鑑説ではなく遭遇説を採用しております。ご了承ください。



## 濃霧の遭遇

夜半8時頃であろうか、越後軍と甲斐軍双方とも撤退を決めて宴を楽しんでいる最中、一頭の早馬が海津城目指して月明かりに照らされた夜の川中島を疾走して行った。

早馬は間もなく海津城に入ろうとしていた。

「御免！松尾城からの伝令！至急！」

騎馬に乗った伝令兵は城門の守衛に信玄に通すように大声を出した。早馬ははるばる美濃との国境近くの伊那の信濃松尾城から走ってきたのである。

門番はすぐに信玄に伝令兵を通した。

海津城では既に宴もたけなわで信玄や甲斐の将校たちもほろ酔い気分になっていたが松尾城からの伝令と聞いてみならず酔いが冷め、事を察したようど緊張が陣地に走った。

信玄は伝令兵の手紙を受け取ると自ら目を通した。

「・・・あの噂は本当だったようじゃ・・・」

信玄は手紙に目を通しながらつぶいた。

美濃の斉藤義龍の噂である。

実はこの年の永禄4年（1561年）5月に義龍が急死したとの噂が流れていた。

信玄と同じく美濃を狙っていた織田信長がそれを聞き、すぐに美濃に攻め入ったものの、斉藤軍に追い返されていたため噂が真実かどうか確認が取れない状況が続いていたのであった。

しかし信長が再度9月に入り美濃に攻め入ると、斉藤方から織田方に寝返った武將の情報からも義龍の急死が事実であることが分かつ

たと言つ。

後継者の斉藤龍興がまだ若干13歳の若者と言つこともあり、この機会を逃すなとばかりに信長は大軍を率いて美濃に攻め入り、近く織田軍と斉藤軍の大規模な戦が行われる模様との報告であった。

「信長ごとき若造に美濃を取られるわけにはいかな．．．」

武田信繁が思わず口走った。

信玄もうなずいた。

「既に戦は始まっているしい．．情勢まではわからんが．．」

信玄は一通り読み終わると信繁に伝令文を渡した。

「第一戦が始まっているのであれば好都合ですな．．」

山県昌景は言った。

「消耗しているところにこちらの軍隊をぶつけてやれば取れますな．

」

山本勘助も続いた。

勘助の言う取れるとは斉藤軍が勝っても織田軍が勝っても消耗している両軍は武田にとって敵ではないと言つ意味である。

特に美濃の玄関口に当たる岩村城は信玄が美濃攻略への足場の城として興味を持っていた。

「ぐずぐずしておれませんな．．すぐに出陣を．．」

馬場信春が声をかけると信玄は軽くうなずいた。

そして

「宴はやめ！勝利の美酒は美濃での戦の後に取っておけ！全軍に出兵準備！」

号令を下した。

「はっ！」

甲斐の将兵達は慌てて自軍の部隊に戻り出兵の準備に早速とりかかった。

越後軍の本陣のある齋場山では甲斐軍の慌ただしさなど知らずに撤退を祝う宴会は続いていた。

しかしこの日の政虎は宴の最中に早々と体調不良を理由に奥に引っ込んでしまった。

食事量も少なかったのもそのためである。

政虎は毎月10日頃に襲われる腹痛にこの日も悩まされていた。奥で政虎が静かに休んでいると

「大丈夫ですか？」

金津新兵衛や宇佐美定満らが心配そうに様子を伺いに来た。

「・・・うん・・・大丈夫だ・・・いつものことだ・・・」

政虎は気分が悪そうに答えた。

齋場山の本陣は屋外なので板の上に畳のひいた仮の簡単な寢床があったがゆつくり休める物ではなかった。

「善光寺の荷駄隊の近くの旅籠に引き上げますか？」

本庄実乃も心配してやってきて声をかけた。

「・・・うん・・・」

政虎は力なく答えた。

今回川中島ではいろいろあったこともあり、その疲れもあって今回は政虎もかなり疲労しているようであった。

「夜半に乗じて親衛隊兵を守りにつけて密かに善光寺に戻りましょう・・・」

実乃が政虎に提案した。

「・・・いや 待てよ・・・」

宇佐美が挟んできた。

「ここにおいても仕方が無い。全軍一気に引き上げて最後に信玄の鼻を明かしてやるうじやないか・・・明日の朝 気がついたら齋場山はもぬけの殻だった・・・って面白いじゃろう」

宇佐美が悪戯っぽく言った。

「・・・みんな酒飲んでるのに・・・移動が大変じゃろうって・・・」  
何時の間にか来た中条藤資が半分酔いながら不満そうに言った。

「北国街道は広いので移動は問題ないでしょうが・・・ただ夜半は暗い大軍の進軍は難しいでしょうが・・・明日の早朝などどうでしょう・・・」

一緒に入って来た村上義清が提案してきた。

「どうされますか？」

実乃が政虎に聞いてきた。

「今回は・・・みなに甘えさせてもらおう・・・」

政虎は今日の気分の悪さが余程なのか素直に答えた。

こうして越後軍の撤退は急ではあったが翌朝早朝に決定した。

一方甲斐軍でも軍議が行われていた。

美濃への進軍と海津城からの撤退方法であった。

高坂弾正、馬場信春、飯富虎昌、真田幸隆らが狭い地蔵峠で經由で上田城方面に撤退、甲斐本国からの荷駄補給部隊と合流後彼らを引き連れて伊那から美濃に南下。

また信玄率いる、信繁、勘助、山県昌景、諸角虎定ら本隊は川中島を西に横断して茶臼山傍の犀川沿いの西街道から深志城（松本城）方面に抜けて東山道（中山道）を美濃へ南下することになった。

川中島を西に横断する道は北国街道のような本道ではなく地元民の使う生活道路で整備されておらず幅も広くないので地元出身の地理に明るい兵士が呼び集められた。

彼らによると移動はそれほど問題ないがこの時期は川中島は早朝は濃い霧が発生しやすく進行速度に支障が出る事が予想されるので昼間以降の進軍を進めたが

「濃霧に紛れて茶臼山方面に我が軍が抜けて行って海津城が空っぽだったら翌朝政虎も腰を抜かすだろう・・・」

信玄が嬉しそうに言った。

「北国街道との交差点では越後の荷駄隊が昼間は動いている。接触の危険を避けるため連中が動かない早朝、夜半の移動の方が都合が良いでしょう・・・」

信玄、勘助ら意向もあつて結局甲斐軍も翌朝早朝の出兵が決定したのであつた。

夜も明けようとしていた頃、斎場山の越後軍本陣は撤退準備が整い移動を始めていた。

兵士は前の晩の宴で飲みすぎて酒で千鳥足の者もいたが越後に帰れる嬉しさの方がみな先立っているようだった。

「みな静かにな・・・甲斐の連中を最後に驚かすんだからな・・・」

静かに進むように兵には命令が出された。

先発の柿崎景家、村上義清らの部隊は千曲川にかかる宇佐美橋を渡り、川中島の霧の中に消えて行ったが思わぬ連絡が入った。

濃霧のおかげで進軍がかなり遅れているとの連絡であつた。

しかしそれほど急ぎではなかつたので構わず進軍を続けさせた。

越後軍は順番に隊列を組んで斎場山を降りていった。

朝4時頃ようやく政虎たちの順番が回つてきた。

それにしてもすごい霧であつた。何も見えないと言う表現がぴつたりであつた。

「行けますかな？」

新兵衛が政虎の体調を気遣つて声をかけてきた。

政虎はうなずいた。今日は昨日より幾分調子が良かった。

「籠にしますか？」

千坂景親までも気遣つて聞いてきた。

馬で大丈夫、心配無用と政虎は答えた。

政虎はみんなに氣遣ってもらっていることを嬉しくも思いながらも、どんな時も常に定期的に毎月10日前後にやってくるこの腹痛には辟易もしていた。

政虎は体調不良のため顔色が少し悪かったのでみんなをあまり心配させないため、普段は肩に巻いている愛用の純白の越後上布を御高おし祖頭巾そずきんのように顔に巻いた。

御高祖頭巾とはこの当時の女性の防寒着として流行っていたが当然普通の女性の物はもっと派手な柄のものを使用している。

政虎は真夏の日差し厳しい時、寒い時や体調が悪いときはこのように純白の越後上布を頭巾のように使用していたが実は越後兵の中ではこの格好は僧兵の行人包みのようなとあまり評判が良くなかった。そのため政虎も普段はなるべく肩に巻くようにしていたが体調の悪いときはこのように使っていたので何時頃から政虎の体調も越後上布の巻き方で越後兵は判別するようになっていた。

部隊も既に半分近くが出發して行き、ようやく政虎たちの出發が来た。政虎たちも親衛隊と一緒に齋場山を出發した。

濃い霧のせいで進軍がやはり遅れており時間は既に午前5時頃であるろうか、うっすらと夜も明けてきた。

「信玄の奴、朝になったらもぬけの殻の齋場山を見て腰を抜かすぞ。」  
「」

弥太郎が嬉しそうに言った。

政虎も思わずくすりと笑ってしまった。信玄の口を開けて啞然とする顔を想像してしまったからである。

早ければ午前6時前に善光寺前の犀川の手前に着くという。

一方海津城でも午前4時半頃既に高坂弾正昌信を先頭に甲斐軍別働隊の地蔵峠からの撤退が始まっていた。

別働隊の見送りに信玄 勘助らが来ていた。

勘助が珍しく冗談を飛ばした。

「間違つても斎場山を突付くなよ・・・」

弾正昌信も思わず笑ってしまった。

「啄木鳥が木の中の餌の虫をおびき出すために木を叩くようにすかな・・・？」

弾正昌信も返した。

「いや 餌の虫じゃなくて大虎が出て来て噛み返されるぞ・・・」

信玄までが悪乗りしていた。

「それは勘弁願いたいです・・・」

弾正昌信も笑いながら再度返した。

「では美濃で再開じゃな・・・」

信玄も別働隊を見送りながら嬉しそうに言った。

茶臼山経由の信玄本隊も別働隊のすぐ後に武田信繁、諸角虎定らの隊を先陣に海津城を出発し始めていた。

ただ、海津城周辺、及び川中島周辺に発生した霧のせいで各部隊は移動に少し時間がかかっているとの知らせも信玄の元にももたらされた。

「予定より少し遅れておるか・・・まあ この霧ならしかたあるまい・・・」

信玄も予想以上の濃い霧に驚いていたが自分の出発の順番が来ると信繁や諸角の後を追うように大急ぎで勘助と共に茶臼山に向けて海津城を出発して行った。

政虎一行は北国街道を善光寺に向けて北上していた。

9月初めではあったが既に初秋の涼しい朝であった。少し寒いくらいである。

「それにしてもすごい霧だ・・・前が全然見えんわ・・・」

弥太郎も驚いていた。

秋山源蔵が悪い冗談を言い出した。

「丑五ツ時・・・いまは一番お化けが出やすい時間でござるな・・・」  
気のせい何か何か叫び声が一瞬遠くから聞こえたような気がした。

「・・・げ 源蔵・・・やめないか・・・」

政虎は意外とこのような話が苦手であった。

じつは齋場山に長期間布陣するのは気が進まず早く善光寺に帰りたかったのもそのためである。

齋場山はその名前の通り、墓地や齋場などそのような物に関連する施設が多いのでその名前が付いていた。

「この辺は古戦場がうじゃうじゃですからなあ・・・首のない武者が行進していることもあると地元農夫が言っていましたぞ・・・」

戸倉与八郎はこう言うときは本当に遠慮がない。

「・・・や・・・やめないか・・・」

政虎が少し怖がっていた。

「ははは・・・阿虎様は昔からこのような話苦手ですからな・・・」  
新兵衛が笑っていた。

「それにしても源蔵殿・・・」

千坂が無表情に源蔵に言った。

「お化けが一番出易いのは丑三ツ時であるうが・・・」  
みな千坂の生真面目な鋭い指摘に思わず笑いそうになってしまった。

しかし弥太郎が急に止まった。

「おい・・・今本当に声がしなかったか・・・」

弥太郎が真剣な表情で言った。

「や・・・弥太郎・・・やめてくれ 本当に・・・」

政虎もなんか本当に何か声が聞こえたような錯覚を覚えた。

「がははは・・・すみません・・・」

弥太郎が急に表情を緩めると普段通り豪快に笑った。

「・・・まったく・・・もう・・・」

政虎は思わず少し膨れてしまった。



一行は再度濃霧の中をのんびりと北上していった。  
ただ弥太郎は実は半分本気で政虎の聞いた声も空耳ではなかったの  
である。

30分ほど進んだ頃であろうか、相変わらず雲の中を歩いているよ  
うだったが周りはかなり明るくなってきた。霧のせいで隊列の前方  
が相変わらず見えなかったがとにかくゆっくり進んでいるようでは  
あったがやはり少し時間がかかっているようであった。時々どこか  
から叫び声や怒号が聞こえてきた。

「出たか・・・うらめしや・・・」

戸倉が悪い冗談を再度言い始めた。

「・・・与八郎・・・!」

政虎は少しむっとしてしまった。

前方の部隊から怒号が聞こえてきていた。喧嘩をしているようであ  
った。

「・・・朝から喧嘩か・・・こんな霧のなかで元気な連中だ・・・まった  
く」

源蔵も呆れていた。

「静かに進軍するように言ったのに・・・昨晚の酒がまずかったかな  
? やめさせるように・・・」

政虎も苦々しい顔で命令をだした。

しかし次の瞬間彼らは目を疑った。霧の向こうに赤備えの武者が一  
瞬見えたような気がしたのである。

「・・・静かに!」

弥太郎が思わず声を出した。

「・・・今見たか・・・? 本物か・・・?」

戸倉の声は緊張していた。

赤備えは甲斐軍の武者である。なんで甲斐軍がいるのかわからなか

ったがそれはみなも同じで何が起きているのか分からなかった。むしろ武田の武者の御霊を見たのかと真剣に考えていた。

しかし見えないが近くで驚きと絶叫の声が同時に起こると刀か槍のぶつかる鈍い金属音が聞こえてきた。

どうも何箇所かで何か太刀打ちらしきことが発生しているようであった。

さっきの前方の部隊の怒号も喧嘩というよりもっと殺気立った声で、刀のぶつかり合う鋭い音も間もなく聞こえてきた。

この音は政虎の周囲で散発的に起こり、驚きや怒号にも似た声が姿は見えないが霧の中から聞こえてきていた。

「・・・ま・・・まさか・・・」

政虎が思わず声を漏らした。

いつもの指揮官の政虎の声ではなかった。半泣きの政虎の声であった。

みなようやく尋常ならぬ事態が起きていることに気がついた。

霧が風でゆっくり流れ出していた。ようやく全てがさらけ出されようとしていた。

政虎や越後軍一同は言葉を失った。これは一瞬夢であろうかとみんな思っていた。

越後軍と甲斐軍がなぜか鉢合わせをしていた。

北国街道を北に善光寺に向かう越後軍と川中島を西に茶白山目指して向かう甲斐軍が既に交差していた。

交差部分では既に太刀打ちが始まっていた。それを遠巻きの越後兵や甲斐兵がみな唾然と見ていた。

「や・・・やられた・・・」

政虎が力なく言った。

「信玄に謀られた・・・待ち伏せされた・・・」

親衛隊兵や付近にいた越後兵も青ざめた固まった顔で政虎を見た。政虎の顔も青ざめて涙目で震えていた。

「・・・越後に帰れない・・・」

この言葉でみな我に帰ったようだった。

政虎は突然大声を出した。刀を抜き北に向けると

「・・・全軍・・・と・・・突破せよ！」

我に帰った越後軍は甲斐軍にばらばらの状態で個別で猛然と襲い掛かった。統制が取れず半混乱状態であった。

越後兵は待ち伏せさたとみな思い死に物狂いであった。甲斐軍を突破しないと国に帰れないと言つ恐怖心が彼らを駆り立てていた。

甲斐軍も固まっていた。なぜ越後軍がいるのかと。

甲斐軍も同じ考えであった。なぜか動きが読まれ待ち伏せされたと思っていたのである。

しかし甲斐軍にとって運が悪かったのは越後軍との交差点近くに甲斐軍の最高幹部が居たことである。幹部は山本勘助ともう一人、あの人物であった。

勘助も待ち伏せされた思い啞然としていた。しかし彼はすぐに我に帰ると付近の部隊に命令した。

地蔵峠の部隊にすぐに連絡して至急援軍に来るように、茶臼山に到着したであろう信繁、諸角隊の呼び戻しと矢継ぎ早に指示を飛ばしていた。そして悲壮感を少し漂わせながら険しい表情で地蔵峠の部隊が来るまで玉砕覚悟で勘助のすぐ後ろの部隊を死守せよと命令を下した。

勘助のすぐ後ろの部隊はなんと信玄本隊であった。勘助のすぐ後ろにいたのである。

勘助は信玄を死守するために必死であった。甲斐軍は霧の中を移動中で陣形が全く整っていなかったうえ、越後軍の予期せぬ急襲を受けて大混乱になっていた。

信玄本人も腰を抜かしていた。越後軍の待ち伏せなど全くの予想外であった。

霧で現在地も良く解らない上に越後軍が先に一足早く襲い掛かってきたため海津城への後退も困難になっていた。

信玄もすぐに腹を決めた。

「陣を開け！旗を上げ！味方に知らせい！信玄ここにありと！逃げも隠れもせぬと！」

大慌てで陣を開かせると床机椅子の上に信玄はどっしりと腰をかけて構えた。

（クソ・・・政虎め・・・霧に紛れての待ち伏せなどこしやくな・・・）  
しかし落ちついた風な素振りを見せながらも信玄は内心は歯ぎしりを立てていた。

川中島は既に修羅場になっていた。先に茶臼山まで到達していた信繁隊、諸角隊も大急ぎで信玄本陣目指して引き返し八幡平北方で越後軍ともろにぶつかっていた。

越後軍8000に対して甲斐軍も本隊は8000と互角であったが甲斐軍は不意を突かれた上に先行攻撃されたこともあり、なすすべもなく各隊撃破され始めていた。

諸角虎定も老体に鞭を打って奮戦し、ようやく信玄本陣前まで辿り着いたが、揚北衆の猛者、新発田長敦の部隊とそのまま大乱戦になり、奮戦むなしく彼は討ち取られた。

信繁隊も生き残った諸角隊を盾に使いながら猛然と越後兵を蹴散らしながら信玄本陣まで戻って来ていた。

信繁も信玄の本陣前まで辿り着くと本陣の盾として立ち塞がり必死に越後軍の猛攻に耐えていたが部隊の全滅は既に時間の問題であった。

政虎も必死で戦うというか逃げまわっていた。政虎も今まで何度も戦場に行っている。戦場は見慣れていたはずであった。

しかし今日の川中島は地獄であった。部隊同士の整然とした戦いではなく一対一の殺し合いであった。政虎を見つけると甲斐軍の兵士は恐ろしい形相で分別無く襲い掛かって来た。

政虎も正直これほどの恐ろしさを今まで感じたことはなかった。普段は酒で紛らわしていたこともあったが、通常の戦でもここまでの異常な接近戦や深追いはないからである。兵士も将校もみな勇敢に戦うが自分の命を投げ出してまでの危険な作戦は原則取らない。

今日は越後軍も甲斐軍も統制が取れず見境無く獲物を目指して攻撃を仕掛けていた。

今日は体調が悪いせいもあって普段は肩に巻いていた愛用の純白の越後上布を行人包みように顔に巻いていたこともあり余計に目立ち、次々に逆に敵を呼び寄せていた。

実は政虎たちも思いの他中央付近の乱戦地帯にいた。信玄本陣の目と鼻の先であった。

信玄の本陣周辺は不幸にも越後軍と甲斐軍の交差点の近くであった。

そのため次から次へと信玄の本陣の守備応援に甲斐軍が集まり、また信玄の首を狙って越後軍が餓えた猛獣のように次々と本陣に押し寄せていた。

越後軍はばらばらに攻撃していたが勢いで押しているようで甲斐軍

の本陣に徐々に接近しているようであった。甲斐軍も死に物狂いで防戦していた。

やがて政虎の視界にも武田の本陣が飛び込んできた。

信玄寵愛の弟の信繁の姿が見えてきた。噂通り勇猛に必死で戦っていたが甲斐軍の守備兵は数が少なくなり劣勢は明らかであった。

そしてついに力尽きたのか武田万歳か何かの彼の声が聞こえると政虎の目の前で彼は村上隊に討ち取られ姿を消した。

政虎はこの恐ろしい光景を啞然と見ていた。

信玄も本陣内で固まっていた。

部隊は壊滅寸前、もはやこれまでかと覚悟をしていた。

お気に入りのお小姓一人だけ残して他は全て越後軍との戦闘に回していた。

小姓を残していたのは万が一の時の最後の介錯人である。

武田の本陣前で最後まで激しく抵抗していたのはあの山本勘助であった。

馬を降り槍を振り回していた。

政虎もあの老人にどこにこのような力が眠っているのであろうと敵ながら天晴れであった。

一方勘助も政虎がこの作戦を立案したのだらうと思っていた。勘助は政虎を恐るべし敵であると敵ながら高く買っていた。勘助も今回の作戦を政虎の不意打ちと思っていたのである。

柿崎隊の猛攻を必死に防いでいた彼も

「ワシの勤もここまでか・・・」

と一人つぶやくとついに柿崎隊の騎馬兵の間に隠れ真相を知らずに姿を消して行った。

目指すは本陣のみであった。

「行けえ！」

「あと少しだ！」

聞き覚えのある声がしてきた。

本庄繁長 長尾藤景 北条高時 斉藤朝信たちが信玄本陣目指して  
猛攻撃をしかけていた。

越後軍優勢との報告も政虎にも届けられた。

信玄の本陣まであと少しとその時であった。

突然であった。越後軍の右横、東方面から何かすごい圧力を感じる  
と政虎の右横の越後兵が次々と赤備えの部隊に飲まれ始めた。甲斐  
軍の新手、1万2千の地蔵峠の部隊が八幡平に到着したのであった。

越後軍は動揺していた。本隊と思って全力で襲撃していたのにもつ  
と強大な別働隊が来たからである。甲斐軍は政虎を見つけると猛然  
と襲い掛かってきた。

越後兵が慌てて政虎の前に守備に立ちはだかるが兵は既に疲れきつ  
ており次々と討たれていった。

「何をしてる！早く逃げろ！」

繁長が政虎に向かって絶叫した。

「早く後退を！早く！」

親衛隊も防ぎきれないようで悲鳴とも絶叫ともつかない声をあげて  
いた。

形勢が完全に逆転していた。

政虎も必死で後退しようとしていたが双方の部隊の混乱でもみくち  
やにされ動けなくなっていた。後退しようにも現在地すらわからな  
くなっていたがとりあえず北に向かってひたすら越後軍は後退を始  
めた。

しかし次の瞬間政虎は我に帰った。越後軍と甲斐軍がもみくちやに  
動いているうちに信玄の本陣が偶然ではるが完全にがら空きになっ

たのである。

（あそこに信玄がいる・・・おのれ・・・）

政虎は急に怒りの感情が湧いてきた。

政虎は愛馬の放生月毛ほうじょうつきげにムチ打つと器用に敵兵の間をすいすいと縫いながら全力で本陣に向けて走らせた。

（信玄にここまでやられた・・・許せぬ・・・）

政虎は怒りで頭が真っ白になっていた。何時の間に猛然と信玄本陣目掛けて走っていた。

政虎を見つけた武田の騎馬兵が慌てて切りかかるが剣の腕は駄目だが騎馬の腕ならば政虎も負けない。

「来るな！」

太刀打ちしてもらえるとと思った武田の騎馬武者をひよいと器用に避けるとは騎馬武者は勢い余って空振りをして落馬してしまった。

本陣守備の少数の鉄砲兵も待ち構えていたが政虎の怒りの感情が初めて恐怖を上回った。

「邪魔するな！」

名刀小豆長光を抜き渾身の力で振り下ろすとそのまま鉄砲を一刀両断して鉄砲兵は腰を抜かして座りこんでいた。

政虎はそのまま本陣を囲む布の武田菱に放生月毛を鼻から一気に突っ込ませた。

「痛っ！」

本陣の布が倒れ中に飛び込むと同時に誰かの声がして何かが放生月毛の足にぶつかった。

勢い余って人を跳ねたようだった。



慌てて急停止すると信玄が痛そうに凡床から転げ落ち腰をさすっていた。

放生月毛がぶつかつたのは信玄本人だった。

「このー！」

政虎は大声を出しながら小豆長光を信玄に振り下ろした。

間一髪信玄は避けた。

「クソ！阿虎め！」

しかし肩を切られたようでも苦痛に顔をゆがめていた。

政虎は半泣きで大声を上げながら再度刀を振り下ろしまくしたてた。

「女だからと馬鹿にして！私がろくに動けないときを狙って待ち伏せして！汚いんだよ！」

肩をかばいながら信玄も返した。

「待ち伏せだど？貴様らだろ！待ち伏せしてたのは！」

信玄は意外な答えを返したが政虎は構わず返した。

「お前は大嫌いだ！人の留守の間に泥棒猫のようにこそこそ来て他人の土地を取って嬉しそうな顔をして！大嫌いだ！」

信玄は肩を切られたせいか太刀が抜けないようであったがそれでも団扇で難なく政虎の太刀を受けていた。

「そのの何が悪い！」

信玄もすぐに返した。

そして続けた。

「甲斐のみなを喜ばせるために土地を取るのだ！取った土地をみなに分け与えみなを喜ばせる！その顔を見たいから戦ってるんじゃない！甲斐のためにやってるんじゃない！何が悪いんじゃない！」

信玄の本気の言葉だった。政虎は逆に少しうろたえてしまった。

信玄は続けた。

「貴様のように座って商人からの貢ぎ金でのほほんと戦を喜んで出来るほど甲斐は豊かじゃないんじゃない！みなを腹一杯食わすために他国を取り続けなければならんじゃない！貴様にワシの気持ちなどわか

つてたまるか！」

政虎は衝撃を受けた。信玄の本音の言葉が重過ぎて言い返せなかったのである。

が自分も本音が飛び出してきた。

「私だつて戦は大嫌いだ！お城でのんびりしたいんだよ！お前や氏康みたいなのがこのこ来るから戦つてんるだよ・ふざけるな・・！」

しかし今日の信玄は容赦がなかった。

「戦で勝つても土地を取らない分け与えない貴様こそどうかしてるわ！領主失格じゃ！」

政虎も今まで誰にも言ったことが無い本音をぶちまけた。

「人助けをして何が悪いんだよ！見返りが無くてもいいじゃなか！あたしはそれが良いことだと思っからやっつてんだよ！」

信玄も一瞬戸惑つたようだがすぐに返した。

「阿呆が！・そんな女々しい理屈を持ち込んで大名面するな！」

「・言つたな！」

「だいたいなんじゃそのへっぴり腰は・そんなんじゃ何時までもワシを倒せんぞ！もつと腰をいれんか！」

信玄の気迫が何時の間にか政虎の気持ちを上回っていた。

何時の間にか政虎は逆に完全に信玄に押されていた。疲れと体調不調と何回も刀を振り下ろしているせいもあったが太刀を持つ腕に力が入らず放生月毛に乗つたまま信玄の気迫に押されるまま後退しただした。

それにしても信玄の本音は政虎には衝撃過ぎた。また頭が真っ白になつていた。

「御館様！」

しばらくすると聞き覚えのある大声がしたと同時に赤備えの騎馬武者数騎が信玄の援護に乱入して来た。

（しまった！）

政虎はようやく我に帰った。

信玄とのやとりに夢中になっていてすっかり周りのことを忘れていた。

信玄本陣の応援に來た甲斐軍の別働隊の騎馬隊にあつという間に逆に囲まれてしまった。

（辞世の句を考えておけばよかった・・・）

政虎は覚悟をすると妙な後悔をした。

「姫様・・・！」

政虎は声の主に驚いた。

高坂弾正昌信であつた。目が合うと弾正昌信も驚いていたが何か決心したようで太刀を抜いてこちらに向かつてきた。

政虎は以前、人間は死ぬ寸前は走馬灯のように一生の思い出がよみがえると聞いていたがなぜかそれは起こらなかった。

弾正昌信に切られるなら本望だろうと言い聞かせ覚悟して目をつぶろうとしたその時であつた。

「ほれ！」

弾正昌信は政虎に近づくと彼女に切りかかることなく放生月毛のお尻を軽く太刀ではたいた。

放生月毛は驚いてものすごい勢いで政虎の手綱を無視して本陣から走り出した。

政虎は慌ててしがみついた。

甲斐軍の騎馬武者たちは呆然と狂つたように走り去る放生月毛にしがみつくと政虎を見送っていた。

「ご無事で！」

政虎を送り出すと弾正は馬を降り信玄の前に膝まずいた。

しかしすぐに弾正の喉元に鍵十字の槍が2本すぐにかざされた。

信玄の命令あればいつでも弾正昌信の首を取れるようである。

信玄は今まで弾正昌信が見たことのない恐ろしい鬼のような形相を

していた。

「昌信・・・！貴様・・・自分が何をやったかわかっておるのか・・・！」  
信玄は弾正昌信が今まで聞いたことも無い恐ろしい声でうなった。

弾正昌信は正直に答えた。

「・・・甲斐のため 殿のため もちろん昌信のため・・・！」

弾正昌信は正直に答えた。

信玄は下を向いてうつむいて言った。

「クツ・・・確かに・・・確かに以前はそう言ったかもしれん・・・しれないが・・・しかしな・・・今日という今日は奴は絶対許せん・・・！今まで甘い顔しすぎたわ・・・！」

そして鬼の形相で

「本当の戦を教えてやるわ・・・！！・・・車懸りの陣！奴等をすりつぶせ！甲斐の勇者よ行け！」

信玄が命令した。

甲斐軍の騎馬武者が政虎を追いかけ始めた。

「昌信！貴様はワシとここにおれ！奴の最期を見とけ！」

政虎はようやく越後軍親衛隊に戻り合流した。しかし恐ろしい展開が待っていた。

周りを甲斐軍の騎馬隊に完全に包囲されていた。

突然甲斐軍の騎馬隊が政虎たちを囲み終わると左回りに一斉に走りだした。

蟻地獄に引き込むように回りだし、距離をあっという間に詰めると甲斐軍の騎馬の渦に越後軍は次々に飲まれ始めた。

政虎が命令した。

「馬を走らせ！並走！足並み合わせ！」

一緒に走れば太刀打ちも可能である。

続いて命令した。

「旗上げ！」

「敵が来る！」

繁長が出来ないといわんばかりに声をあげた。

「味方も来る！」

政虎は旗をいつせいにあげさせた。

毘の旗 日の丸 龍の旗を高々と上げて振らせた。

甲斐軍は越後軍を蟻地獄に引きずり込むように周囲を周りながらどんどん距離を縮めてきた。

政虎の周りにはもはや少数の部隊しか残っていないかった。

「足を止めるな！」

政虎が絶叫した。ここで死ねないと必死であった。

「う 馬が・馬が動かない・ぐあ・」

越後側は馬も人も疲労が頂点に達していた。足が動かない越後兵は次々と飲まれていく。

繁長 高広 千坂 新兵衛 弥太郎 源蔵 与八郎などもはや顔見知りばかりしか残っていないかった。

政虎の部隊は絶滅寸前だったが彼らの驚異的な底力で甲斐軍が驚くほど政虎たちはまだ持ちこたえていた。

その時甲斐軍の取り囲みの馬の速度が急に落ち始めた。

越後軍の援軍が政虎の龍の旗を見て次々にやって来て周囲を囲む甲斐軍の足を止め始めたのである。

「こつちじゃ！早く！」

中条藤資や色部勝長の部隊が外から甲斐軍に体当たりして囲みをこじ開けようとしていた。

「連中を止める！止めればいい！」

長尾政景や宇佐美定満らもようやく合流して必死に甲斐軍の足を止めようとしていた。

「どけえ！どけえ！」

猛将村上義清や柿崎景家もようやく到着してぶつかり出すとすると甲斐軍も動転したのか囲みの動きは止まった。

しかし甲斐軍も引かなかった。

「押せ！踏み潰せ！」

飯富の恐ろしい声が響き渡ると甲斐軍も猛然と最後の攻撃をかけた。

「姫を引つ張り出せ！早くしろ！」

いつもは冷静な政景がめずらしく絶叫していた。

再度大混乱になっていた。

馬場が叫んだ。

「他は無視しろ！行人包みだけ狙え！」

みな政虎掛けて次々と押しかけてくる。政虎は必死で逃げようとしていたが囲まれて動けない。

内藤が叫んだ。

「もう一度車懸りだ！取り囲め！逃がすな！殺れ！」

越後軍が手こずっている間に再度甲斐軍は数の力に任せて囲み始めた。

その時であった。鉄砲の大音響が響いた。

甲斐軍の再度囲もうと展開していた外部隊がばたと打ち倒された。

「は、離れる、間を取れ！外部隊！」

山県昌景が慌て指示を出していた。

直江景綱の荷駄隊が乱戦に気づいて犀川を渡り南下して虎の子の鉄砲を甲斐軍に浴びせてきたのであった。

越後軍の荷駄隊と荷駄護衛隊は退役したような老兵や兵力偽装の女騎が多いがそれらも甲斐軍を恐れずに突っ込んだのでさらに甲斐軍は動転して囲みが再度ほどけた。

様子を鬼のような表情で黙って見ていた信玄であったがそのとき信玄の本陣のすぐ側でも戦闘が起きはじめた。

「・・・どうした！何事じゃ・・・！」

信玄が思わず驚きの声をあげた。

越後軍の殿の甘粕景持隊がようやく到着し手薄な信玄本陣に突如襲

い掛かってきたのである。

政虎たちから甲斐軍を引き離すためである。

「ぶ、部隊を本陣護衛に戻せ！早く！」

本陣が襲われていることに気が付いた馬場が慌てて指示を出す

「何をやってるか！大物がそこにおるであろうが！早く殺れ！」

飯富は政虎を狙えと絶叫していた。

甲斐軍も大混乱だった。

政虎たちは必死で脱出しようとしていたが飯富隊の猛攻撃を受けていた。

応援に来た越後軍の竹俣清綱、加地春綱、新発田長敦の揚北衆が必死に防戦していたが再度甲斐軍優勢になり政虎の脱出が困難になるうとしていたその時であった。

そのとき誰かが政虎に近づき

「失礼！」

と言うと政虎が巻いていた越後上布をはらりとほどくと自分で巻きなおして信玄本陣に向けて猛然と走り出した。政虎や周りの者は唖然としたが見たことのある越後武者であった。

甲斐軍の馬場隊は影武者の政虎を見て慌てて追いかけた。

本物の政虎たちの退路が完全に開いたのである。

甲斐軍の一人の将兵が影武者と気づいたが

「そいつは偽者だ！本物はこっ……」

と言い終わらないうちに村上義清の槍に押し倒された。

「退却！逃げ！早く！」

中条が叫んだ。

「全軍退却！」

色部が命令した。

全員大急ぎで八幡平をあとにした。

この様子を終始見ていた信玄は

「な・何をやっておるんじゃ・おのれい・」

声にならない声を出していた。

そして念の入った声で最終命令をだした。

「深追いはするな・戦鬪終了させい・」

弾正昌信は複雑な表情で後退する政虎を見送った。

放生月毛の背中から政虎は後ろを振り返った。

戦場は流れるように遠ざかっていった。

政虎の影武者は信玄の本陣前で奮戦していたが甲斐軍に囲まれると彼が背中に刺していた毘沙門天の旗が倒れ彼の姿は間もなく見えなくなつた。

「旗が・倒れていく・ここまで育てた越後軍が・」

政虎は言葉が出なかった。

その日も夕方になりようやく長くたった一日は終わろうとしていた。

「く・く・く・」

信玄は兵士の目もはばからずおえつを漏らしていた。

「お・おのれ・奴め・ここまでやってくれるとは・」

彼の前には弟 信繁 勘助 諸角ら武田軍の高級将校の遺骸が並べられていた。

遺骸には武田菱の軍旗がかけられていた。

「信繁 すまん・若い貴様を先に死なせてしまふなど・勘助も・諸角も・すまん・甲斐の勇者たちよ・今回はワシの慢心じや・本当にすまん・くくく・」

信玄は力なく崩れていた。

信玄の本陣の前には無数の遺体が片付けられることなく無念そうに



いくつも転がっていた。

政虎も善光寺の直江の荷駄隊の本陣に戻っていた。

陣内に集まっているみなに対して政虎はねぎらいの言葉をかけた。

「みな今日の素晴らしい戦いに感謝感激している。信玄も二度と我らと戦おうと思わないであろう。本当にご苦労であった。越後に帰ってゆっくり休もう・・・」

しかしみなの顔は憔悴仕切っていた。重臣で戦死者が出なかったのは奇跡であった。

間もなく仮の戦果報告が入った。

政虎はそれを聞いて言葉を失った。

越後軍の戦死者 数千 負傷者 数千

甲斐軍の戦死者 数千 負傷者 数千

味方も敵も被害は甚大

越後側将校 荒川長実 志田義時が戦死

甲斐軍は武田信繁親子 山本勘助 諸角定虎が討ち死にした模様。

越後軍の大勝利と。

政虎は声が出なかった。激しい戦とは思ったが信じられなかった。

勝ち負けなどどうでもよかった。越後軍は壊滅状態だった。

今まで10年以上かけて育ててきた越後軍が今日1日で壊滅したのである。

信玄にも大打撃を与えたがもはや信玄との和睦などありえない戦果であった。

寵愛の弟の信繁や勘助、老臣諸角を失い信玄は鬼のように怒り狂っているであろうと。

それを自分の軍がやってしまったのだ・・・

自然と涙が溢れ止まらなかったが気丈に振舞った。

「ごご苦勞であつた・・・すばらしい戦果だ・・・感動した・・・今日はゆつくり休め・・・」  
みな力なくうなだれたままぞろぞろと陣を出ようとしたその時であつた。

「お許しください！」

突然誰かが政虎の前に出てきて土下座してきた。

村上義清と高梨政頼であつた。

「不甲斐無い甥のワシのおかげでおぬしを巻き込んでここまで苦しめてしもつた・・・許してくれい・・・」

高梨政頼が土下座しながら年老いた声を絞り上げ声を震わせていた。

「姫様の大事な軍を壊してしまつたことお許しください！」

村上義清も土下座しながら男泣きしていた。

政虎は泣いていたが笑顔で返した。

「何をおっしゃいます。気にしないでください。信玄との戦いは避けられませんでした。今日のみなの奮戦のおかげで奴はもう我々に向かつて来る事は二度とないでしょう。頭をあげてください。」  
しかし

「おぬしのその優しさが余計に身にしみるんじゃ・・・」

高梨の言葉に政虎は逆に何も返せなかつた。

政虎はそのまま陣の外に出た。

そして日が暮れた今日の激戦の地、八幡平を眺めた。

毘沙門天を懐から出して拝もうとしたが今日はなぜか心が落ち着かなかつた。

日はすっかり暮れていたが死んでいった両軍の数千近い兵士の無念が漂い地平線が明るくなっているように感じた。

政虎はぼーっとそれを眺めていた。

誰かが横に立っていた。

本庄繁長である。今日の命の恩人である。

政虎が気になって来てくれたのであった。

政虎に声をかけようとしたが政虎が魂が抜けたように戦場を見ていたので繁長は声をかけられなかったが。

やがて政虎の方から繁長に話しかけてきた。

「す・す・すごい光景だな・」

「・・滅多に見れないだろうな・・こんな・」

繁長は何も言えなかった。自分だってこんな風景は初めて見る。

「・・地獄とはこんな世界かな・」

「・・気をしつかり・」

「・・信玄・・怒り狂っているだろうな・」

繁長は何も言えなかった。

この第4次川中島の戦いで政虎の名は日本中に響くようになるのである。恐るべき軍神と。

## 無情

政虎は春日山城に帰っても休む暇が無かった。

様々な問題が山積みであったがひとつひとつ解決するしか方法はなかった。

ただ取り急ぎ政虎は真つ先に今回の川中島で戦いの勝利宣言をした。越後国内の引き締めと不満の眼を逸らすためである。

しかし信玄も同じ事をしていた。

京都の清水寺までわざわざ勝利宣言の手紙を送っていたのである。

そのため織田信長にいたっては双方に同じような内容の戦勝祝いの手紙を送っていた。

政虎の勝利宣言に答えるように古河城の近衛前久から川中島の戦勝祝いの手紙が政虎に届けられた。

政虎に合わせた平仮名書きの文章で、政虎自らの太刀打ちや甲斐軍の将校や兵士を多数討ち取ったことに対する賞賛が書かれていた。

政虎のいつもの体調不調を気遣う内容も書かれていた。

政虎は前久の気遣いを嬉しく思い、笑顔が一瞬出たが次の文面で再度沈んでしまった。

手紙の最後には北条軍の動きが不穏で関東の諸将が不安を感じており政虎に再度関東出兵を暗に促すよう記されていたのである。

政虎は複雑な感情でその手紙を読んでいた。

政虎も前久への返信の手紙に、これより大急ぎで再度関東に行きます・・と書こうとしたが、筆が思わず止まってしまった。

関東に出るなら雪で三國峠が越えられなく冬前に大急ぎで関東に出なければならぬ。

既に10月に差し掛かり本格的に雪が降り始める11月までに一ヶ月を切っていた。

しかし今回の川中島での戦いでは信玄ももちろんだが政虎も打撃が大きく、特に兵士の消耗は手痛い問題であった。せつかく今まで苦労して築き上げてきた政虎自慢の越後軍がたった1日の戦いで大損害を受けたからである。事実、半数近くの兵士が死傷し軍は半分崩壊状態で戦えるような状況でなかった。

もちろんそれは政虎だけではなく越後の諸将も状況は同じであった。政虎の元には各諸將の配下の兵士の損害状況の報告が続々と上がって来ていた。

彼らの配下の名も無い雑兵の犠牲も膨大だったのである。無理に徴兵をかければ農村での生産性や将来の越後の人口に大きく響く可能性が高かった。

もし今回の戦いで救いがあるとしたら越後軍では重臣達に奇跡的に犠牲者が出なかった点である。

ただそれでも将来を期待する若手での犠牲はやはりあった。政虎は今回、特に活躍した配下の武將に対して感状を出した。そして感状を書いている最中、ある武者達の名前を書いたとき政虎は思わず筆が止まった。

一人は政虎の越後上布を使い、影武者役をしてくれた男である。彼は荒川長実と言い武勇の誉れ高い武將であった。政虎も以前、越後が静かだった頃一緒に晩酌をしたことがありそれをふと思い出していた。

なお長実は後に越後二十五将にも数えられ、また春日山の林泉寺の謙信の墓標の裏に影武者役らしく彼の墓標もひっそりと静かに今でも立っている。

そしてもう一人は志駄義時である。彼も若干22歳の若手で将来を期待される人物であったが政虎がむしろ心が痛んだのは彼にはまだ

2歳の生まれただばかりの幼子が残されたことであつた。

しかしこのような事例はおそらく数え切れないほどあることは容易に想像がついた。それが余計に心に押し掛かつたのである。

この義時の幼子は元服後、義秀と名乗り、景勝の重臣として後に活躍するのである。

なお政虎の書いたこれらの感状は後に血染めの礼状と呼ばれ荒川長実や志駄義時意外に重臣の中条藤資、色部勝長らを含めて7通が贈られたと言われ、そのうち4通が今も現存している。

その日の夜、政虎は直江景綱、宇佐美定満、本庄実乃ら重臣と財政奉行の蔵田五郎左衛門と春日山城内で積もり積もつた問題をどのように打破するか話し合いをした。

まず一番の難題は消耗した兵力の補充とそれに絡む恩賞であつた。

諸将らの雑兵の消耗も手痛い物であつたが彼らの一族や郎党、近親者の犠牲も甚大であつた。

彼らがこぞつて政虎に被害状況の報告をしたのはそれに対する見返りを欲したからである。

政虎もこれに対しての返答は恩賞という形で絶対に払わなければならぬのは重々承知していたが昨年以來の戦続きで疲れ切つた兵士と同じく、越後の財政もかなり疲弊していた。政虎もこの件は充分に予想していたがこの恩賞の件は五郎左衛門から政虎にとっては予想外の良い返答が帰つてきたのである。

それは日本各地の状況と密接に絡んでいた。

まず畿内は政虎が上洛した頃より不穏な雰囲気はあつたが、前年度より三好長慶と反三好勢力の緊張が高まり、両陣営ともに大兵力を集めて睨み合いを続けているとのことであつた。

中部でも信玄が興味を持つていた美濃を巡つて織田信長と斉藤義龍が激しく争っている真つ最中であつた。

中国地方でも、出雲を中心とする8力国を納める大大名の尼子晴久

が死去したことにより、安芸を中心に勢力を広げていた毛利元就と  
尼子晴久の後継者の尼子義久との戦いが激しさを増すなど、まさに  
日本中いたるところ戦続きであった。

しかしそのおかげで軍事物資の鉄や衣類、食料などの需要が逼迫し  
堺や京都の商人は大忙しでそれにつられるように越後の商人や海運  
業者も堺や京都にそれらを運ぶのに繁盛しでそこから入る冥加金（  
税金）がかなり期待でき、来年度の越後の財政は予想以上に好転し  
そうだとのことであった。

そのために今回は諸将らには滞りなく恩賞を支払い、彼らを満足さ  
せるともにだめ、越後国内に何の憂いなく安心して関東に出  
陣することが出来たのである。

政虎は恩賞を出せることには安堵したが日本中で戦いが起こること  
で越後が潤うことには複雑な感情を抱いていたが現実を優先させて  
見ない振りをした。

信玄との和睦の件はもはや絶望的であろうとの見解でみな一致した。  
信玄とのつなぎ役であった山本勘助、信玄が最も重視していた弟の  
信繁を討ってしまったために完全に行き詰ってしまったのである。

勘助も信繁も切れ者のいやな敵ではあったが甲斐での越後との和睦  
推進の理解者であった彼らを失ったことは後々政虎にも信玄にも大  
きな傷を残していく。

もちろん政虎も武人としての好敵手を失ったとも思い二人の死を惜  
しんだ。

ただ信玄、及び甲斐軍にも今回大打撃を与えたため信玄もそう易々  
と軍を動かせまいとのことでひとまずは関東の北条との対応に集中  
することにしたのである。

なお越後の老臣たちが関東に目を付けているのはもうひとつ理由が

あつた。表向きは反抗的な氏康への締め付けと関東管領の名目はもちろんだが、一番重要なのは物資の確保と兵士の人的補充であつた。そして越後諸将や兵士達の不満抜きである。

政虎側か氏康側かの線引きのはつきりしない上野国や武蔵国北部は実は豊かな国土で人口も多く、氏康がかねてから目を付けていたのはそのためである。

政虎は単に関東管領の責務意外に興味は持ってなかつたが、越後の重臣や諸将の関東へ関心は、先祖からの関東への回帰以上のそこに魅力を感じていたのである。

こうして政虎は大急ぎで恩賞の手続きをさせると終わらぬうちではあつたが動員できるだけの戦力を集めて大急ぎで春日山城を出発した。

川中島での傷が癒えた状態ではなかつたが政虎は越後軍を率いて1月には三国峠を越えて慌ただしく厩橋城に入ったのである。

一方氏康も軍を率いて上野国方面に北進しているとのことで厩橋城は長野賢忠、箕輪城の長野業正の親族に預けた後、氏康を迎え撃つべく政虎は厩橋城をすぐに出発した。

しかしここで驚くべく情報が届けられたのである。

信玄が氏康の動きに合わせるかのように西上野に侵入してきたとの情報が入ってきたのである。

あれほどの打撃を受けながらもやってくる信玄の凶太さに驚きながらも西上野の守りを箕輪城の長野業正、業盛親子に当たらせて、武蔵松山城の太田資正も城に籠って守りを固めさせ、氏康の攻撃に備えるように命令した。

それにしても氏康や信玄の予想以上の素早い軍の動きに政虎は正直驚きと同時に苛立ちも隠せなかつた。



越後軍が弱体化している頃合を狙って攻めてくる氏康や信玄の狡猾さと無情さなのである。

今回は初めての両面作戦であったが川中島での傷が充分に癒えていない今の戦力の不足は明らかであった。

越後兵の主力は川中島での傷がまだ治っていない兵士や 荷駄隊から転向した老兵や戦に不慣れな新しい新兵、実は数不足のごまかしのために女兵士も少数混じっていた。

宇佐美や直江らを大将に本軍は武蔵松山城の救援に向かわせ、西上野に侵入した信玄率いる甲斐軍には政虎自ら率いる直属の親衛隊を展開させるため一旦厩橋城にて様子を見ることにした。

西上野では箕輪城付近で長野業正と信玄が睨み合いに入ると同時に武蔵松山城では氏康が 太田資正の武蔵松山城を攻撃しているとの情報が入った。

松山城救援には先に救援の越後軍を差し向けており政虎は戦況報告を厩橋城でじっくりと待ち、不利な方の救援に出る段取りを組んでいたが予想外の情報が政虎にもたらされた。

甲斐軍は箕輪城を通り過ぎて長野氏の支城の倉賀野城に向かったとの情報が入ったのである。

政虎は倉賀野城救援のためにすぐに親衛隊と共に厩橋城を出発した。直属の部隊の数は少数ではあったが川中島の激戦を潜り抜けてきた猛者揃いで政虎も一撃を加える自信はあった。正直半分玉砕しても良いというやけの気分もあったが。

倉賀野城で甲斐軍と越後軍守備隊倉賀野氏との小競り合いが始まった頃、政虎は南下して甲斐軍に奇襲をかけるべく怖さを紛らわす酒を飲みながらあれこれ策を考えていた。

しかし倉賀野城に到着すると小競り合いは既に終わっており甲斐軍は撤退している真つ最中であつた。

「追いかけますかい？」

弥太郎が聞いてきた。

「畏かもしれませんな・・・」

秋山源蔵も少し慎重だつた。

政虎もあまりの引き際の良さに少し拍子抜けしながらも少し安堵していた。

兵力差は圧倒的に信玄有利だつたからである。

「甲斐軍も新兵が多くてうまく統制がとれていないのかもしれないな・・・」

政虎も思わずつぶやいた。

しかし政虎が一安心している間、南の武蔵松山城の救援部隊からの伝令が大慌てで飛んできた。

越後軍の救援部隊は武蔵松山城に入る直前の生野山の近くで松山城攻略を後回しにして倉賀野城に向かおうと北進してきた北条軍と接触してそのまま交戦してしまつたのである。

予定外の交戦で混乱状態も重なり、戦力数や不慣れな新兵が多い越後軍は終始苦戦を強いられ結局、武蔵松山城に入城することが出来ず、越後軍は一旦、厩橋城に後退することになつたのである。

しかし実は北条軍も予想外に苦戦となり、倉賀野城への進軍を諦めて結局松山城も落とすには至らず小田原に引き上げていつたのである。

信玄が甲斐に後退したのも氏康率いる北条軍が来ず援軍が期待できない上、共同歩調を取れなかったからである。

もっとも信玄も本音ではもう政虎の越後軍には甲斐軍を真正面からぶつけるのはこりこりというのも事実ではあった。

しかし政虎は生野山での北条軍と戦いで更に戦力を消耗し、状況は更に悪化していくことになった。

この生野山の戦いは政虎にとっても人生初めての敗戦と言つ苦い思い出になる。

## 心変わり(前書き)

・訂正のお知らせ  
・若干時代背景にずれがありましたので  
第50話は少し内容を変更いたしました。

## 心変わり

北条氏康自ら率いる北条軍は重い足取りで拠点の小田原城へ向かっていた。先ほどの生野山の戦いでうるさい越後軍から勝利を得たのは北条軍にとつて大きな収穫だった。しかし本来の目的の武蔵松山城の奪取や北条側の同盟軍で武田信玄率いる甲斐軍との共同作戦の倉賀野城急襲作戦を果たせなかつたばかりか自軍よりも少数の越後軍相手に思わぬ苦戦を強いられ北条軍の受けた被害も予想以上であった。

氏康の長男の氏政もまたも少数相手の越後軍相手の苦戦に肩を落としていた。前回の佐野昌綱の唐沢山城攻めの時と違い今回は一応の勝利でその鬱憤は晴らしたが予想以上に兵力を消耗したことで素直に喜べる勝利ではなかつた。

氏政は一応勝つたものの、また氏康にお灸を据えられるであろうと思ひ、勝軍の武将とは思えぬ暗い表情だったのである。彼の重臣の松田憲秀も同じことを考えているようで二人とも馬の背中に揺られながら暗い表情であつた。

「どうした・・・冴えない顔して・・・」  
しよげる二人を見兼ねたのか氏康が氏政と松田に声をかけた。

「もつと喜んで良いであろうが・・・唐沢山城の借りも返せたであらうに・・・」  
氏康がにこやかに続けた。

「は、はあ・・・」  
氏政は氏康の対応が予想外で一瞬驚いたようであつたがすぐにまた暗い表情に戻り力無く返事した。

「・・・確かに唐沢山城の借りは返せましたが・・・我が軍が再度手痛

い打撃を受けたことで氏政様も・・・」  
氏政の代返をするように松田が返答した。

「・・・うむ・・・確かに今回の戦でまたも兵を多く失ったのは誠に残念だ・・・しかしあの政虎から一勝あげたのであるから素直に喜ぼうではないか。みんなもつと誇りを持って。ははは・・・」

氏康自ら皆を奮い立たせるように言った。もちろん半分慰めも含まれている。

そして越辺川を越えた辺りで

「・・・もつとすぐ 河越城か・・・」

氏康は独り言のように言った。河越城は氏康にとって思い出の城である。

かつて氏康は若かりし頃、10倍の8万の大軍を擁する関東管領山内上杉家の上杉憲政、扇谷上杉家の上杉朝定、古河公方の足利晴氏の三者連合軍をわずか8千の自軍で打ち破った事がある。天文15年（1546年）に起こった世で言う河越夜合戦である。

氏康がまだ31歳の若武者の頃である。

この戦での大勝利により氏康の名は世間に広まり、南関東の覇者として北条一族はその後、君臨していくことになるのである。

一方敗れた山内上杉家の上杉憲政は越後に逃亡し、上杉朝定は討死し扇谷上杉家は滅亡。

足利晴氏も氏康によって隠居させられ古河公方の地位は氏康の娘婿、足利義氏が継承して氏康は実力、権威とも関東の他の武将達よりも一歩秀でた存在になっていくのである。

氏康が少数の軍で大軍を破ったように政虎も少数の軍で大軍破ることとは何ら不思議ではない。それは政虎の器量の問題だからである。もちろん少数の軍に破られる方の大軍の大将は面白くはないが。

しかし氏康が一番面白くなかったのは、越後に逃亡したあの山内上杉家の上杉憲政が頼った長尾景虎が上杉姓、及び関東管領を継ぎ、

上杉政虎として突然自分が苦勞して拵げてきた関東に現れて邪魔をする挙句に、自分を賊扱いして古河公方まで勝手に挿げ替えて好き勝手に始めたことであつた。

腹立たしい相手ではあるが、今回初めて直接戦つてみて、今まで戦つた他の武将達とは違い一筋縄で行かない相手であるのは明白であつた。

武田信玄も一目置いていけるといふ噂に偽りはなかつたのである。

氏康も今回生野山で越後軍に勝利したとはいえ素直には喜んでいなかった。

更には政虎は姫大将らしいとの噂はこの頃には北条軍にも広まり始めていた。

もちろん氏康ら北条軍首脳はそれが噂ではなく真相であることは知つてはいたが彼らもそれに関して口を噤んでいたのである。

姫大将相手に苦戦などと言う噂は気分の良い物ではないからである。しかし政虎のたち（性質）が悪いのは姫大将なのに軍の実力が想像以上な点であり厄介であつた。

信玄もそのような悪評を恐れてか実は政虎と真正面からあまり戦わないと北条軍首脳部でも密かに噂されていた。

川中島の戦いも単なる事故との噂も流れていたのである。

それでも今回初めて戦つてみて越後軍が相当面倒な相手であることは氏康も充分に認識した。今回政虎は生野山にはいなかった模様との風魔の報告も入っていたが面倒な相手であることは明白になつたのである。

あれこれ色々考えているうちに氏康もいつの間にかはだんだん複雑な気分になつていったのである。

「少し立ち寄つて休憩していくか・・・」

氏康は考え事を断ち切るかのように軍に河越城に向かうように命令

した。

兵士も疲れていたようで少し安堵しているようであった。

「それにしても・・・」

氏康はまた独り言のように言った。

「奴との戦いは長くなりそうだな・・・」

後ろを振り返ると遠く山頂に雪を擁き始めた三国峠を眺めながらつぶやいた。

そのころ厩橋城の政虎は頭を抱えていた。

この年の暮れ、12月に西上野で長く武田信玄の関東侵入を防いできた箕輪城主の長野業正が死去したのである。政虎は業正を高く買っていたが彼の死によって上野野は元来の領主の上杉家時代旧来からの実力者がいなくなつたことになり、上野国の家臣団をまとめる人間がいなくなり国内が不安定化する恐れがでてきたのである。川中島、生野山と激戦の連戦で越後軍の兵力を消耗しすぎたのも頭痛の種であった。軍の再建は待つたなしで次再度戦になつたらもう支えきれない状況まで追い込まれていたのである。

そこで政虎は上野国は直属国のように扱ふことにしたのである。

厩橋城の城代は本来は業正の親族で上杉家元来の重臣の長野賢忠であったが、彼の病弱と高齢を理由に政虎自ら直接指揮を取り、賢忠は政虎の直属の武将として配下に入つてもらつたのである。ただこれは表向きの処遇で実質的に隠居してもらい、主な上野の国人衆も関東管領軍名目に政虎の配下の越後軍に編入することにしたのである。

松本景繁や由良成繁、桐生助綱、足利長尾氏の長尾当長などがこの越後軍に編入されこの後の関東管領軍の関東覇権を目指す越後軍の関東方面の軍を支えていくのである。

なお業正の息子の業盛はまだ若年であったが父の業正と同じく猛将と名高かつたため引き続き箕輪城の城代に据えた。



この上野国の国人の実質的な編入で上野国の安定化、越後兵の不足兵力の補充が出来て政虎、越後軍はようやく一応は一息つくことができたのである。

なお政虎は良くも悪くも領土欲がない人間であった。今回上野国が直属国のようになったのは兵力補充のための単なる成り行きからである。そのためこの後の関東での戦いは政虎が言うには予想外、信玄が言うには予想通りの展開になっていくのである。

また政虎は將軍義輝にも手紙を送った。自分の將軍への忠誠心と関東管領としての川中島や関東での戦いの正当性を容認してもらったためである。大儀名分と権威を大事にする政虎らしい動きではあったが色々あって不満の芽が出かねない上野国や越後国内の引き締めもかねていた。

義輝からの返事はすぐに戻り、この年の12月から義輝から一文字<sup>んき</sup>偏諱して政虎はこれ以降、輝虎と名乗るようになるのである。しかし偏諱しても結論からいうと状況に残念ながら転機は訪れなかったのである。

一方、小田原に戻った氏康も着々と反撃の機会を練っていた。ただ氏康も越後から突然やってきた輝虎が面倒な相手なのは認めざるを得なかったが何時までも自分を足利將軍家、関東管領に齒向かう賊軍扱いするのに関してには氏康も黙っているわけにはいかなかった。そこで氏康が目をつけたのは古河城に籠る近衛前久と足利藤氏であった。

関白である前久を脅して朝廷を動かして輝虎の関東管領の職を解くか足利藤氏を追い出して正式な古河公方を自分の娘婿の足利義氏に添えて関東管領の威光を無力化しようとしたのである。

ただこれも難しい点があった。前久を間違って討ってしまえば本当に賊軍扱いされてしまう。

そこで氏康は軍を古河城に向かわせる素振りだけを見せ古河城に無言の圧力を掛けたのである。

しかし輝虎の方が一足先に動いた。

永禄5年（1562年）2月に古河城にいた前久達を一足先にひそかに厩橋城まで戻してそのまま春日山城まで後退させたのである。

氏康もこの政虎の素早い動きには感心しきりであったが輝虎に対する手立ては緩めなかった。

逆に前久達が立ち去ったことにより更に積極的に軍を動かし古河城に圧力を掛け続けたのである。前久に危害を加えれば問題になるが、藤氏は自分に終始齒向かう関宿城の輝虎側の築田晴助の甥であるので討ち取って義氏に挿げ替えるのは氏康には好都合なのである。

最も氏康も輝虎及び越後軍の実力は認めていた。悪戯に戦い無用に兵力を消耗することは避けた。

ただ前久達が去ったことにより古河城の北条側首脳内での優先順位が下がったのも事実であった。氏康の関心事は次第に再度武蔵国の完全支配と北条側の河越城と小田原城の間で氏康に刃向かう太田資正の武蔵松山城や岩槻城、忍城の成田氏泰、唐沢山城の佐野昌綱に関心が移って行くのである。

一方氏康の動きを先読みするかのように春日山城に戻った前久達であったが実は裏があり、表向きは前久のお供の公家衆達が都に帰りたいたいと懇願したため古河城から後退した事になっていた。

しかし輝虎の関東の北条軍、甲斐の武田軍との両面作戦が立ち行かなくなったのを見て失望した前久が都に戻ることを決め古河城から勝手に撤退したのが真相であった。

前久は自分が思い描いていた朝廷や足利將軍家の権威による関東制覇の夢が単なる夢であることを認識させられたのである。

前久が密かに言うには本当の戦の実情がようやく解り、自分の行為

が若気の至りであったと思うようになったのである。

輝虎も前久の失望と不満は充分認識していたが、戦は一戦二戦で決着が付くものでなく時間がかかるもの、ご理解を と前久を必死に説得して何とか春日山城に留まってもらっていたのである。

年が明け、暖かくなったら再度前久達に厩橋城か古河城に同伴してもらえるよう懇願し、前久も輝虎があまり見たことない、少し複雑な表情で一応は同意してくれたのである。

一方輝虎はこの年は関東に備えるためと上野国の状況を見守るため春日山城に戻らず厩橋城で年を明かした。

本庄繁長や長尾藤景らは彼らが都に帰りたいたいと言い出したことに関しては予想通りの結末と気に留めていなかったが輝虎はまだ前久達の政治的権威の有効性は十分に認識していた。前久達が古河城にいたことによつて事実氏康ら北条側にも躊躇が見られたからである。

輝虎は信玄や氏康に対する新たな策をあれこれと練っていた。朝廷や将軍家に対する機嫌取りも考えていた。

永禄5年（1562年）の春になり、ようやく三国峠の雪が溶けて峠越えが出来るようになったが前久達は結局春日山城を出ずに三国峠を越えてこなかった。前久は輝虎にはもう少し暖かくなったら関東に出発しますと輝虎に連絡はしてきたので輝虎も待つことにしたのである。

しかし前久達が関東に戻らなかった代償は早速形になって現れたのである。

厩橋城の輝虎の元には思わぬ報告が届けられたのである。

唐沢山城の佐野昌綱、忍城の成田氏泰、上野国の小豪族で実は政虎も良く知らない相手ではあったが館林城の赤井氏が輝虎に対して反旗を翻したのである。

輝虎は長泰に関しては以前小田原城包囲戦や鎌倉での関東管領就任式で影武者役の輝虎を演じた千坂景親と長泰が一悶着起こしていたので何と無く解らなくもなかったが分らないのは佐野昌綱の心変わりであった。

佐野昌綱の唐沢山城は自分が命懸けで助けたと認識していた。

輝虎もその時は伊勢姫役ではあったが唐沢山城の援軍の時の昌綱との一悶着を思い出し、昌綱も自分に好意を抱いているであろうとも思っていた。

それがこの存分である。

報告を聞きながら家臣団の中条藤資や宇佐美定満らは長泰はともかく昌綱を恩知らずな奴と息巻いていたが輝虎本人は別の見方をしていた。

北条軍では自分の噂が広まりつつあることは聞いていた。

そのため、昌綱がそろそろ自分の本性のことに気が付いてもおかしくはない頃であった。

自分に対する好意が真相を知り、反発心になったのだろうかとあれこれ考えていたのである。

何はともあれ輝虎は越後軍をさっそく動かし、館林城を占領し、城主赤井照景を追い出すと照景のおいの長尾当長を領主にして館林城を取り戻すことに成功したのである。

越後軍はすぐに南下して唐沢山城に到着後、布陣を開始するが本格的な戦闘には至らず夏前には越後軍は慌しく再度越後に戻って行ってしまったのである。

実は関東に出たばかりではあったが北陸地方で越後の隣国、越中から騒ぎの知らせが飛び込んできたのである。

この頃越中では輝虎側の椎名康胤と地元の豪族出身の神保長織が以前より争い、永禄2年（1559年）にも輝虎は一度康胤の要請を

受けて出兵し長織を追い返しているが7月に入り再度長織が軍を動かし康胤を攻撃しているとの情報が入り康胤救援のために急遽越後に戻り、長織を追い払うことになったのである。

康胤側は長織軍の猛攻撃を受けて居城の松倉城まで攻め込まれ落城寸前であったが越後軍が到着すると形成は逆転し長織軍を追い払うことに成功したのである。

しかし能登の守護の畠山家が介入し講和を進めたため、長織に止めを刺すことができず長織も領土や居城は安堵されたため不安の残る幕切れになったのである。

しかし輝虎も守護である畠山家や長織に対してもこれ以上圧力をかけるのが難しいのも事実であった。

なぜなら彼らの後ろには武田信玄の影がちらついていたからである。春日山城の安全上康胤を見殺しに出来ないので救援依頼があれば輝虎は直ぐにでもいつでも駆けつける体制は取っていたが関東に注力したい輝虎は本音ではこれ以上越中で力を割きたくないという現実があつたのである。

こうして政輝が関東と越中でどたばたしている間にも世間の情勢は更に流動的になっていった。

8月に入ると更に衝撃的な情報が入って来たのである。

輝虎たちが越中に留まっている間に前久達は結局春日山城の留守城代の直江景綱の静止を振り切つて春日山城を出て都に帰つてしまったのである。

この情報を聞いた輝虎はいつもの癩癩を起こした時と同じく、肩を震わせながら激怒した。

前久が自分と血印を交わしてまで関東に下向してきたのにそれを簡単に反故して都に帰ってしまったことに腹の虫が収まらなかったのである。

しかししばらくして輝虎の怒りはすぐに収まった。

公家や都に対して輝虎が持つ憧れとそれに対して相反する不甲斐なさの感情と、前久に対する自分の思い込んでいた感情や期待など複雑なものが色々絡み合い頭と感情がごちゃごちゃになり自然と落ち着いてしまったのである。

そして最後に何か大事なものを諦めたように寂しく言った。

「都の公家と田舎武士の子との付き合いには・・・所詮無理があったということだな・・・」

金津新兵衛も随分と珍しくこの日は肩をがっくりと落としていた。本庄実乃や宇佐美定満は黙ってこの様子を見ているしかなかった。

前久からの手紙には

「諸般あつてここ（春日山）に留まっているのが難しくなりました・

」

と書かれていたと言う。

前久の日記にも

「・・・輝虎が怒っているようですが迷惑です・・・」

と輝虎に対する前久の複雑な感情も含まれた一文が残されていると言う。

なぜ前久が突然都に帰ったのかの真相は不明だが前久と輝虎はこの後二度と寄りに戻すことは無かった。

前久はこの後あの織田信長を頼っていくのである。

尚、前久の人生も世の流れ揉まれる様にこの後も色々あり、彼は後に放浪関白と呼ばれるようになる。

前久の心変わりに落ち込んでいた輝虎であつたが実はこれは単なる序盤に過ぎなかった。

前久が都に戻つてしばらくして気を取り直し、春日山城へ戻り、氏康への次の一手を考えていた輝虎にまた思わぬ情報が届けられたのである。

1ヶ月も経っていなかったが越中の神保長織がまた反旗を翻したのである。

輝虎は深い溜息をつく

「わからない・・・」

下に目をやりながらつぶやいた。

「関白様も昌綱も長秦も長織も・・・なんでそう簡単に心変わりするのか・・・」

がつくりと肩を落としながら輝虎は続けた。

もう一度深い溜息をつくとまだ昼だったが輝虎は酒を持ってこせると少し飲んで気を紛らわそうとした。そして

「男と女の違いだろうか・・・」

輝虎は独り言を続けた。

家臣団は聞いていない振りをした。

しばらくして

「神保の奴・・・今度こそ成敗してくれましょう」

宇佐美が厳しい口調で言った。

輝虎も無言でうなずいた。が、やはり越中の裏で糸を引いていると言われる信玄の顔が急に思い浮かび、少し慎重にやらねばいけないことは心の片隅にしまっておいた。

「昌綱の奴も・・・少し懲らしめてやらねばなりません・・・」

本庄実乃が言った。

しかし輝虎のそれに対する答えは意外だった。

「いや・・・昌綱にはなんで気が変わったのか本音を聞きたい・・・」

輝虎は今回の事件を感傷的に捉えていたがこれは昌綱のような関東の小勢力の武将にとっては生きるか死ぬかの死活問題であった。

輝虎にとってこの意味を理解するのに少し時間がかかることになる。実は今回の件をきっかけに更に長く厳しい戦いが今始まるうとして

いたのである。



## 癩の虫

永禄5年（1562年）9月、越中では7月に続き再度神保長織が椎名康胤に猛攻撃をかけ、康胤は重臣を多数失い居城の松倉城まで追い込まれていた。

輝虎は9月に椎名康胤救援のため再度越中に出兵するとあつという間に神保軍を追い払い降伏させた。輝虎も今回は長織を厳罰に処すことも考えたがやはり前回同様、能登畠山家が再度介入し、また長織が武田信玄に援軍を求める動きを見せたため、輝虎も深追いすることはやめたのである。

しかしその代わり富山城を含む神通川以東の支配権を放棄させ、居城の射水の増山城のみに治領に留めさせたのである。

ただ輝虎の長織に対する甘い処遇は越後国内からも不満の声があがったが輝虎にも言い分はあった。

神保家にとって実は長尾家、ひいては輝虎の父、為景は怨恨の対象であった。当然その子供である自分もそうである。

長織の父、慶宗は永正17年（1520年）、為景と戦い敗れて自刃したと言われている。実はこれには伏線があつて慶宗は為景の父、能景と当初は一緒に猛威を振るっていた一向一揆への共同戦線をはっていたがどこかで足並みが狂つて能景は一向一揆との戦闘中に討ち死にし、これを為景は慶宗が裏切つて見殺にしたためと憤慨し両家は因縁の仲になつていたのである。ただ実力では引けを取らない慶宗は更に能登畠山家から独立し、越中を完全に支配しようとしたが畠山家からの要請で出兵した為景の攻撃を受け敗北、逃走中に自刃したと言われている。

神保一族からすれば長尾家やそれに従う椎名一族は神保家の夢である越中の覇者になる夢の常に邪魔をする目の上のたんこぶであった。輝虎も長織の反乱は腹立たしかったがそのような理由から厳罰を持つことはなかつたのである。

怨恨が怨恨を生むことで泥沼になることを恐れ、またやはり信玄の影を強く感じていたからである。

この頃輝虎は安房の里見義堯、義弘親子としきりに連絡を取っていた。

氏康に対する包囲網を戦だけでなく謀略なども絡めて形成しようとなれこれか考えていたのである。

何はともあれ越中をようやく鎮めて一息ついた後、氏康対策をじっくり練りたいところであったがこの年の暮れに今度は関東から北条氏康が先手を打つように太田資正の武蔵松山城を攻撃しているとの情報が飛び込んできた。

実は氏康は昨年も松山城を襲撃していたが松山城と岩槻城を守る太田資正に巧みに追い返されていた。

北条軍が松山城に攻め入っても必ず援軍が現れ邪魔をするのである。北条軍は資正側の忍びの者は必ず漏らさず討ち取っていたつもりであったがそれでも常に北条軍の動きは筒抜けになっていたのである。実は資正は愛犬家であったが犬を飼い慣らし、伝令犬として使用していたのである。

この伝令犬は日本初の軍用犬と言われており、北条側の忍者の風魔の網すら掻い潜っていたのである。

このため氏康もようやく意を決し、信玄にも依頼をかけて大軍で一気に攻め落とす戦法に切り替えたのである。

氏康が12月を狙ったのは越後が雪に覆われ輝虎本人や越後軍が動けない頃を見計らったの作戦であった。輝虎や越後兵がいなければ楽に落とせると思ったのである。

信玄2万5千、氏康3万、合計5万5千の大軍が松山城に向かったのである。

資正はすぐに状況を確認すると輝虎に援軍要請し、自らも松山城救

援に出発した。里見氏からも8千の部隊が救援に向かうとの連絡が来たのである。

松山城を守るのは上杉憲勝であった。あまり有名な武将ではないうえ、城の守備兵も少数であったので氏康も5万5千の大軍で一気に落とそうかと画策したが堅牢な城の守りとおそらく資正が効率良く配備した鉄砲隊のおかげで予想以上に北条側は手こずることになる。資正の部隊や氏康が苦手な里見の軍勢も松山城近くに布陣して遠巻きに眺めながらもひっそりと息を殺して隙を伺っているように氏康には見えた。

「・・・やりおる・・・」

氏康は苦々しい顔をした。

「力押ししますか・・・？」

氏政が氏康に聞いてきた。

「いや・・・良い・・・」

氏康は静かに答えた。

北条側は前回の生野山での戦いで越後軍に勝ったものの予想以上に戦力を消耗した。そのため少ない犠牲で落としたいというのが氏康の本音であった。

「越後兵が来る前・・・雪が溶けるまでに落とせばよい・・・じっくり考えよう・・・」

その頃信玄の陣地には氏康からの使者が来ていた。

甲斐の金山の工夫を貸して欲しいとの氏康からの依頼であった。坑道を掘って直接松山城の中に入る奇想天外な作戦であった。

信玄は使者の要望を聞くと笑顔で快く了解した。

しかし氏康の使者が帰ると不満を露呈した。

「まったく・・・人使いが荒い・・・」

信玄は昨年も氏康の要求で生野山の合戦時に出兵して、倉賀野城を攻めたが肝心の氏康が生野山で越後軍と遭遇して乱戦になってしまい、倉賀野城攻めに来なかつたためそのまま撤退、そして年が明けて今回またの救援である。

「2万5千も兵士を連れてきているのに更には金山の工夫も連れて来いとは・・・」

信玄は冗談交じりであつたが不満は本音であつた。

「西上野は武田がもらつても良いそうです・・・」

真田幸隆が静かに答えた。

信玄は目をつぶつた後

「長野業正は去年の暮れ死んだそうだな・・・」

静かにつぶやいた。

真田幸隆は黙つてうなずいた。

「なら・・・頂戴するか・・・」

信玄は厳しい口調で言った。

「息子の業盛がいますが・・・」

内藤昌豊が言った。

「因縁の越後の虎姫様も黙つて見逃してくれませんかでしょうな・・・」

飯富虎昌も渋い顔で言った。

信玄は弟信繁と山本勘助、諸角定虎を討ち取られた去年の川中島の件を思い出したのか不愉快そうな顔で軽く舌打ちした後つぶやいた。

「チツ・・・阿虎の奴・・・全くよくやるわ・・・」

信玄の独り言を遮るように義信が入つてきた。

「工夫の件はどうします？」

「連れて来よう・・・氏康様もご満悦だろうよ・・・」

信玄は許可を出した。

「それにしても・・・」

信玄はつぶやいた。

「相手が阿虎じゃなければこんな城ひとひねりなんじゃが・・・本当に面倒な相手じゃ・・・」

信玄のぼやきは続いた。

「工夫で城が落ちるなら安いもんですな・・・」

山縣昌景が言ったが信玄の言葉は意外であった。

「氏康がああも慎重とはな・・・何か嫌な物を感じてるんだろっよ・・・  
そうっまっくいくかな？」

氏康は信玄から借りた甲斐から金鉾の工夫が到着すると、早速吉見百穴に紛らわせるように横穴を掘らせて城内への侵入を試みるが松山城の井戸の水源が邪魔でそれ以上掘り進めなくなり、結局坑道作戦は失敗した。

氏康と信玄がこうして松山城攻略に手をこまねいている間に驚くべく情報がもたらされてきた。

「何いつ！」

報告を聞いて氏康も思わず驚きの大声を上げてしまった。

いつもは冷静な氏康も今回は驚きで危うく腰を抜かしそうになった。

信玄も食事の真っ最中であつたが報告を聞いて驚きのあまり危うく握り飯を嘔き出しそうになった。

なんと越後軍は雪に埋もれた三国峠を越えて厩橋城に入りそのまま南下していると言う情報がもたらされたのである。

真冬の三国峠は数メートルの深雪に覆われてとても軍隊が通れる場所ではない。

しかし輝虎は除雪して道を作りながら峠を越えてきたのだという。

報告を聞いて北条、武田の家臣団は驚きのあまり口をあぐりと開けていた。

「まともでは無いわ・・・」

飯富虎昌の言葉がすべてを代弁していた。

輝虎は松山城からの救援の依頼を受けると三国峠の越後寄りの坂戸城の長尾政景の上田衆を総動員して除雪し道を確保し三国峠を越えてきたのである。厩橋城まで出れば雪はないので川さえ注意すれば松山城まで直ぐである。

この情報を聞いて北条や武田の兵士達が動揺を始めたのである。数に上では圧倒的優位ではあるが真冬の峠を除雪しながら越えてくるなど越後軍はともまともな相手には北条や武田の兵士達も見えなかったのである。

しかも北条軍は生野山で、武田軍も川中島で越後兵と戦い彼らの事を良く知っていた。越後兵の今回の気狂い染みた行為で余計に彼らの恐ろしさが増したのである。

ここでようやく氏康は決意した。

武力による開城ではなく交渉による開城に切り替えたのである。

氏康は上杉憲勝に無血開城と引き換えに氏康の家臣としての取立てを約束したのである。また輝虎が来ている情報が入らないよう情報を隔絶して救援の望みが無いこともしきりに強調した。松山城は甲斐の工夫達が坑道を掘ったおかげで侵入には失敗したが城の水源が絶たれて戦意を喪失していた。また輝虎が救援に三国峠を越えているなど夢にも思っていない憲勝は結局、松山城を開城したのである。

越後軍は松山城のすぐ傍、北本まで既に進軍していた。しかし松山城開城の知らせを聞き、そのまま太田資正の岩槻城に一旦撤退したのである。

里見勢も一旦安房に撤退したため、松山城は氏康の知略で再び北条側の手に取り戻されたのである。

岩槻城に入った輝虎と資正は早速今後の話し合いをした。しかし輝虎の資正に対する開口一番は資正も予想はしていたが手厳しい物であった。

「資正殿！」

輝虎は厳しい大きな声で資正に畳み掛けた。

資正も輝虎と既に何年かの付き合いはあるが今日の輝虎の厳しい表情は初めて見た。

肩と握り締めた手を少し震わせ怒りが頂点に達しているようであった。

資正もすぐに事情を悟り頭を地べたにこすりつけないばかりに平伏するしかなかった。

「憲勝殿は資正殿の紹介で城主になられたのに……まともに戦わず開城するなど……あまりに不甲斐無いではありませんか……！」

輝虎は厳しい口調で畳み掛けた。

「も……申し訳ありません……同じ上杉の血を引く憲勝殿が松山城の城主にふさわしいと思ひ、推挙したのですが……この結果……申し訳ありません……」

資正はひたすら侘びを入れるしかなかった。憲勝を推したのは確かに自分であり結果から言うとな自分の不手際でもある。

最悪の場合は切腹も覚悟はしていたが資正も北条を倒すまで死ぬ気はなかった。

このような状況ではあったが輝虎に対する切り返しをあれこれ考えていた。

資正にも少し輝虎に対する甘さはあった。輝虎は女性で謀反の罰則に甘い所との評判がありそれを期待していたのである。

しかし次の瞬間資正は心底驚くことになる。

資正の隣に幼い稚児が連れてこられたのである。一瞬誰か判らなかつたがすぐに憲勝の幼子とわかつた。この幼子は人質として厩橋城で預けられていたのである。

「氏康は上杉憲政様が最後に落ち延びた時に、捕らえた憲政様の幼子を斬り捨てたそうだ……なら私もそれを命じなければならまい……」

！」

輝虎は厳しい口調で言った。

資正は輝虎の顔を見れなかった。怖いからではなく必死に頭の中で案を巡らせていたのである。

誰かが抜刀するいやな音が聞こえた。

資正は輝虎の本気度を見抜くとすぐに畳み掛けた。

「お待ちください！」

資正は顔上げて慌てて前に出ると

「松山城を憎き氏康に奪われてこの資正、姫様のお気持ちは充分察しております！しかし憲勝殿が氏康に降りたとは言え、同じ上杉の血を引く者同士、その幼子を斬り捨てるなどお家の名前に傷が付きますぞ！ご再考を！」

資正は一気に考えていた案を吐き出すようにまくしたてた。

憲勝の幼子はただぶるぶると震えるばかりである。

「この資正にもう一度機会をくださいませ！必ずやご期待に込えて見せます！」

資正は祖父太田道灌に劣らぬ智恵者と有名であった。

氏康も資正を買っており以前資正を捕らえた時は殺さず部下として迎え入れた程である。輝虎もしっかりである。資正を関東局面の重要人物と認識して高く買っていた。

資正の智恵者らしい答弁に輝虎もようやく少し気が落ち着いた。

「では・・・どうする・・・？」

輝虎は資正に聞いてみた。

「松山城の近くに我々を裏切り北条に寝返った者の城があります。

そこを叩いて越後の恐ろしさを奴らに叩き込んでやりましょう。」

輝虎は黙ってうなずくと

「出兵準備を！直ぐ！」

再度号令を出した。

一方松山城に入った氏康だが輝虎達が岩槻城に入るのを確認すると



信玄はさつさと甲斐に帰国、氏康も守備隊を1万ほど上田朝直に任せて越後軍との衝突を避けるようにさつさと小田原に撤退していた。

松山城の守備を命じられた朝直は以前の松山城の城主である。前回は輝虎の攻略に引っかけかり松山城をあつさり奪取される大失態を演じ氏康の怒りを買い、本領の秩父に飛ばされていたが今回、前回の汚名の返上する絶好の機会が廻ってきたのである。前回のお返しと言わんばかりに玉砕してでも松山城を死守する気持ちで氏康から松山城を譲り受けた朝定であったが本心は氏康にすべて読まれているようでこれまた前回同様心のどこかではずれくじを引いたようにも密かに思っていた。

氏康からの命令でもあるが朝定は味方に何があっても絶対に城を出ずに籠城に徹するよう厳命した。前回の轍を踏まないためである。やがて風魔の報告から越後軍が岩槻城を出てこちらに進撃を始めたとの情報もたらされた。

城を守る朝定達は緊張した赴きで越後軍を待ち受けていた。

井戸の水源の修理が済んでいなかったのが不安であったがそうこうしている間に、越後軍が目視できるところまで来た。

しかししばらくして越後軍の方から幼子が何かを持って松山城の大手門の前にやってきたのである。

幼子が持ってきたのは輝虎からの手紙であった。

朝定は手紙を受け取ると目を通した。

手紙の内容は

「・・・松山城の救援に来ましたが既に開城してしまい氏康殿 信玄殿とは一戦も交えることが出来ずに申し訳なく思っています。せつかなので（裏切った）成田氏泰殿の弟君が守られる騎西城を挨拶がてらに攻撃します。もしこれにご不満があるのであれば騎西城で一戦交えましょう。」

と書かれていた。ちなみに手紙を持ってきたこの幼子はその憲勝の

幼子であった。

しかし朝定は氏康の命令を厳守した。

騎西城の救援には行かずひたすら松山城に籠るのである。

そのため憲勝の幼子も松山城内に入るとは許されずそのまま城外に放り出されたままになっってしまうのである。

やがて越後軍は松山城の守備隊が動かないのを確認するとそのまま松山城の前を通り過ぎて騎西城の方に向かっていった。そして松山城の前には二度と現れることはなかった。

3日後朝定の元に再度風魔からの報告が届けられた。

騎西城は越後軍の猛攻撃を受けて婦女子を含む多大な犠牲者を出し、太田資正の仲介で騎西城城主で成田氏泰の弟の小田家時は降伏。騎西城落城の知らせを受けた忍城の成田氏泰も降伏したという。氏泰は責任をとって隠居し息子の氏長が新たに忍城城主になり氏長がそのまま成田家の家督を継いだと言う。

この騎西城の件が利いたのか成田氏長は父と違いその後の越相同盟で北条側に編入されるまでは上杉側として大人しく仕えるのである。

今回いろいろあった太田資正も後に輝虎のことをこのように語っている。

「輝虎は十のうち八つは大賢人で、猛勇、無欲、清潔、大器量、廉直で隠さず、明敏、下には慈悲、忠諫をよく聞き入れ、乱世に得難い名将である。しかし残り二つは大悪人で、怒りにまかせて事をなすのは非道である・・・」

後に輝虎に仕えるあの直江兼続も同じようなことを言っておりまた輝虎自身も奉納した願文に

「・・・短気を治してくれたら健気に生きます・・・」  
と書き残しており本人も気にしていたようである。

なお、騎西は今では静かな町であるがこの時の惨状が余程であった  
のであろう、越後の者と結婚してはならないと言つ言い伝えが今で  
も残っているという。

## 海道被官

北条氏康の元には武蔵松山城の上田朝定からの文章による報告書が届けられていた。

氏康は朝定が松山城を守り抜いた事に安堵し穏やかな表情であった。しかし朝定の報告書と一緒に添えられていた輝虎からの手紙を見ると再度顔色が曇り始めた。

氏康は報告書と手紙を北条氏政達に手渡すと軽く溜息をつくどゆっくり目を閉じて茶を飲み始めた。

氏政や松田憲秀は一通り目を通すと彼らも松山城が持ち堪えたことに安堵した。

そして報告書を皆に廻した。

「決戦状を送り付けて来るとは勇ましい姫様ですな・・・」

北条幻庵が報告書を見ながら老人らしい穏やかな口調で言った。

「我々に松山城を取られたこと、余程腹が立つたんでしょうな・・・」

氏政も嬉しそうに言った。

「しかしおかげで騎西城は地獄になったそうで・・・」

氏康の三男の北条氏照が苦々しい顔で言った。

「成田一族も輝虎側に下ったそうです・・・」

清水康英も厳しい顔で答えた。

「・・・うむ・・・」

氏康も普段の厳しい顔に戻った。

「朝定には松山城下を良く治めるように伝えよ・・・騎西城から落ち延びてきた者も丁重に扱おうにな・・・」

氏康の目線は政治家らしく次を見据えていたのである。

「それにしても騎西城を血祭りに上げるとは関東管領のやることではないな・・・誰が関東管領・・・いや関東の覇者に相応しいかは今回の件ではつきりしたでしょう・・・父上・・・」

氏政が嬉しそうに言った。

氏康も一瞬頬が緩んだが

「・・・いやいや・・・氏政・・・油断は禁物だ・・・お前ら兄弟力を合わせて偉大な祖父様、早雲様以来の栄光のこの地を守るように・・・」  
氏康がたしなめるように息子達、氏政、氏照、氏邦に言った。

「・・・ところで・・・小次郎殿・・・このような恐ろしい関東管領殿が姫大将との事ですが・・・見間違いではございませんでしょうか・・・？」

四男の氏邦が冗談交じりで忍びの当主の風魔小太郎に聞いてきた。  
軽い笑いが周囲に漏れた。

「いやいや・・・小太郎のこの目に間違いはございませぬ・・・」

小太郎もわざと目をかっと思開いておどけて見せた。

一同大笑いである。

氏康も思わず笑ってしまった。

「・・・まあ・・・松山城を取り返せて一安心じゃな・・・あとは姫様がどう動くかだが・・・様子見じゃな・・・楽しみじゃな・・・」

氏康は次の行動に関しては何も言わなかったが既に頭の中では次の一手をあれこれ画策していたのである。

一方輝虎は騎西城を落とし、成田氏泰、小田家時兄弟らを屈服させた後、関東の拠点の厩橋城に戻ることにした。

しかし輝虎の表情は冴えなかった。

「元気がありませんな・・・」

本庄繁長が遠慮なく聞いてきた。

「いや・・・別に・・・」

輝虎も無感情に答えた。

「松山城はまたの機会にとっておきましょう・・・」

輝虎の心中を察したのか本庄実乃が助け船を出したが

「・・・いや・・・その件ではない・・・」

輝虎の答えは意外であった。

「・・・騎西城では・・・やりすぎたかなと思って・・・」

松山城の腹いせに攻撃をかけた騎西城であったが輝虎の予想に反して兵士がほとんどおらず、立て籠っていた住民の方に多大な犠牲を強いてしまったからである。

「しかし兵士は喜んでますぞ・・・」

長尾藤景が冷静に言った。

「・・・」

輝虎は黙ってしまった。輝虎は自分が関東管領軍の建前、表向きは狼狽を認めていなかった。

しかし川中島で武田軍との戦闘で多くの古参の越後出身の兵士を失い、現在越後軍を支えているのは上野国や関東で金で集めた兵士達いや、ごろつきであった。

訓練や統率、輝虎の考え方などは浸透しておらず、勝てば好き放題にやっていた。

好き放題やるために必死で戦っている空気さえあった。

今回の騎西城でも彼らは略奪、強姦、殺人など好き放題にやっていた。

そのため古参の越後兵の戸倉与八郎や秋山源蔵は彼らを毛嫌いし、弥太郎にいたっては珍しく輝虎に彼らの横暴について直接抗議に来たほどであった。

輝虎もそんな彼らが正直苦手で罪悪感も感じていたが関東管領の為と思い見て見ぬ振りをしてきたのである。

しかし、そのような荒くれ者の集団であったが今の輝虎には必須の人間達でもあった。

「兵士のために戦うのも大将の責務です・・・」

本庄実乃も諭すように言った。

輝虎も信玄の一言を思い出した。

兵士を喜ばすために戦う・・・捕らえた相手を奴隷市場に高額で流そうと自軍の兵士が喜べばそれで良いのである。輝虎は嫌悪感を覚えたが現実の状況は全てであった。

「わかった・・・」  
渋々であったがそう答えるしかなかった。

厩橋城に戻った輝虎であったが宇佐美定満から面会の時間が欲しいとの申し付けがあった。

宇佐美はもう御年75の老人であったが体に鞭打ってまだ奉公していた。

しかしそんな彼にも個人的な事件があったのである。

宇佐美は以前より輝虎の軍師的な立場にいたが川中島の戦いでは不慮の衝突ではあったが多大な損害を出し、彼も密かに気に留めていた。更には昨年実は長男の定勝を病気で失くしておりひどく落ち込んでいた。

特に定勝は宇佐美晩年の子であったのでその落ち込みぶりは噂になつていた。

宇佐美からは隠居の願いが出されたのである。

輝虎は一通り話を聞いた後。

「あいわかった・・・定勝の件で大変とは思いますが・・・」

宇佐美は黙つたままであった。

「最後にお願したいことがある・・・越後国内で兵士を育成し越後軍を再建したいのだが・・・最後の奉公と思つて請けて頂けないだろうか・・・」

宇佐美はしばらく黙っていたが

「わかりました・・・では最後の奉公をさせて頂きましょう・・・」

静かに了承した。

「うむ、宜しく頼む・・・直江景綱もつける・・・」

輝虎はにこりと笑つと宇佐美もにこりと笑つて返した。

しかしやはり顔には長年の疲れが見えたように輝虎も感じた。

宇佐美は越後国内に戻つて行った。

この年、永禄6年（1563年）輝虎にとつても残念な出来事が起

こった。

輝虎の師匠でもある林泉寺の天室光育が93歳で大往生したのである。

輝虎もこの時は一時的に春日山城に戻り葬儀に参加した。

輝虎も春日山城での休憩や兵士の育成をしたかったが関東の状況からそれは難しかった。

そこで戦力に不足が出る可能性もあったが猛将柿崎景家を越後に残すことにしたのである。柿崎を選んだ理由は実は柿崎も天室光育と非常に親しい関係で彼の領土内には柿崎が天室光育に頼んで建立した楞嚴寺と言う寺まであった。

そのため柿崎も今回葬儀に参加するため関東から輝虎と一緒に戻っていた。

柿崎を選んだ理由はもう一つあった。

先ほどの宇佐美の件と絡むが越後軍再建の為に猛将と名高い彼と宇佐美、直江の3人を中心にして手早く再建しようとしたのである。信濃川中島からの信玄の脅威もまだ消えた訳ではなくその守備と言う重要任務もあった。

なお、天室光育だが楞嚴寺に彼は埋葬され実は柿崎も後にこの寺に埋葬され今もこの二人の墓は楞嚴寺内で静かに仲良く並んでいる。

一方輝虎は休む間もなく関東に戻り次の作戦準備に追われていた。

永禄6年(1563年)秋には反旗を翻した唐沢山城の佐野昌綱、更には下野国の小山秀綱、秀綱の弟の結城晴朝を屈服させるべく厩橋城を出発した。

「昌綱ですが・・屈服させたらどうします?」

千坂が珍しく尋ねてきた。

北条氏政に攻め込まれたとき千坂が影武者で対応した件である。

「その件だが・・千坂がまた私を演じてくれないか?」

輝虎は正直に言った。



輝虎は前回昌綱に会った時、彼から出た輝虎演じた伊勢姫の側室へ、もしくは客将へ要求の件など、彼の押しの強さを思い出していた。「もう茶番は無理だろうな・・忍城の成田氏泰からすべて聞いているだろうな・・それで今回奴も気が変わったんだらうよ・・」本庄繁長が言った。

「成田の狸親父め・・あやつ、やはり鎌倉で成敗しておくべきだったわ・・」

千坂が冗談とも本音とのわからない返しをした。

「ま・・北条側にも風魔がいますので・・姫様のことは連中もそろそろ気づく頃でしょうな・・」

本庄実乃も言った。

「屈服させたら一度会って本当の事を言った方が良いでしょう・・」長尾藤景も言った。

輝虎も少し黙ってしまった。

「今度は婿入りさせてくれって言うかもよ！唐沢山城も手に入って阿虎様も相手が見つかって一石二鳥だな！」

突然弥太郎が入ってきた。

輝虎は思わず少しむっとして口を尖らせてしまった。

「・・弥太郎・・言い過ぎじゃ・・」

すかさず金津新兵衛が横槍を入れた。

「でへへ・・冗談冗談・・スンマセン・・」

弥太郎もちよつと言い過ぎたとおどけていた。

「じゃあ・・唐沢山城では役者なワシがやらせてもらうかのう！」

千坂が調子良く言った。

「おぬし・・阿虎様役実は気に入っているだろう・・」

斉藤朝信が呆れ気味に言った。

空気を読んでか読まずにか千坂は首を勢い良く縦に振って上機嫌であつた。

「しかし 何時までもこのままで済むとは思えないがな・・」繁長が諭すように言った。

しかし輝虎は正直に答えた。

「そうだが・私・昌綱みたいなのは苦手だ・」

輝虎のあまりの率直な答えに輝虎以外一同大笑いでみなそれ以上の話をするのはやめた。

輝虎はそんな面白い話をしたつもりはなかったので予想外の反応にまた一人膨れ面であったが・

越後軍は唐沢山城まで押し寄せると降伏勧告を出した。

昌綱は唐沢山城まで越後軍が接近するのを確認するとあっさり降伏し影武者の景親が昌綱から派遣されて来た使者に対応した。

使者は山上道牛であった。

山上は輝虎が春日山で関東管領に就任した時、昌綱の使者として春日山城に挨拶に来ており輝虎の本性の件は知っていた。

山上は今回も不思議そうな顔をしていたがこれに輝虎たちも気がつき、結局色々考えた末に山上には本当のことを今回初めて話し、今後の忠節も引き続きお願いしたのであったがこの後、佐野昌綱との関係は予期せぬ展開になっていくのである。

輝虎たち越後軍は更に関東を東に下野国まで進み、小山城の小山秀綱を降伏させ、弟の結城晴朝の籠る結城城も降伏させた。小山秀綱、結城晴朝も関東北部の小大名で輝虎が来るとろくに抵抗せずあっさり降伏したのである。

輝虎は内心彼らを不甲斐無いとも思っていたが上杉、北条と言う大勢力に挟まれた小領主の生き残る術に過ぎず、秀綱、晴朝兄弟はこの後も北条が来れば北条側、上杉が来れば上杉側と猫の目のようにころころと味方になったり敵になったりを繰り返すのである。

輝虎は友好関係にある常陸の佐竹義昭との国境近くまで来たので佐竹に北条対策の話と挨拶にでも行くかとおれこれ考え留まっていた時、今度は厩橋城から思わぬ救援依頼が来たのである。厩橋城で

留守を守っていた長野賢忠から西上野から侵入してきた武田軍と南から武田軍の援護に来た北条軍に攻め込まれ厩橋城を放棄して倉賀野城に後退したと言う。更に和田城（高崎城）の和田業繁も武田方に下ったと言う報告だった。

「長野殿は（箕輪城の長野）業正殿の一族か！本当にだらしない！」  
ここでまた輝虎は癩癩を起こしてしまった。

輝虎も以前から癩癩持ちの気配があつたがこの頃はなんか 年甲斐も無く余計に悪化しているような気が自分でもしていた。自分の癩癩持ちの性格は嫌だったがこれは相変わらず治ることはなかった。

輝虎は大慌てで上野国まで後退すると厩橋城攻撃準備に入ったが信玄もさる者で輝虎が厩橋城に到着する前にさつさと厩橋城を引き払い甲斐に帰って行ってしまった。

輝虎は信玄の行動に拍子抜けしながらも癩癩も収まり、関東の重要拠点の厩橋城を取り返した事に安堵していたが信玄に意図的に振り回されていることには辟易していた。兵士達も短期間で東へ西へと振り回されみなへとへとであった。

厩橋城内に戻った越後軍一行は早くも次の出陣に備えて準備に追われていた。

そんな中、この日は本庄繁長と長尾藤景ら若手同士が厩橋城の奥で珍しく不満げに酒を飲み交わしていた。

「全く・・何を考えているのやら・・」

藤景は遠慮なく言った。

「厩橋城を放り出して逃げ出した長野賢忠を追放するのは当然だが奴の一族は一切お咎め無しだとよ・・」

藤景はお猪口を握り締めるどぐいと酒を流し込んだ。

この時代は連座で一族連帯が常であるが輝虎は違つた。本人は罰することはあつても厳罰はせずに一族連座も滅多に行わなかつた。

繁長は空になつた藤景のお猪口に酒を注ぎ足すと黙って聞いていた。  
「更には信玄に付いた和田業繁も嫁さんが長野業正の娘さんで箕輪

城を守る兄の長野業盛を助けるため渋々武田方に付いたと詫びを入れてきたからこつちも表向きはお咎め無しだとよ・・・」

藤景は更にくいともう一杯飲み干した。

繁長は相変わらず黙ったまま酒を藤景のお猪口に注ぎ足した。

「極めつけは厩橋城の城代に北条高広殿をつけるときたまんだ・・・」

藤景は酔いと呆れ顔が混じった顔で言った。

「・・・うむ・・・」

繁長も目を閉じうなずいた。

北条高広は以前輝虎に反旗を翻したことがある。武勇に優れた猛将との評が高かったがそのような経歴から越後国内でも今回の厩橋城の城代の人選には懸念の声が漏れていた。

「阿虎様は何を考えているか俺にはさっぱり解らんわ・・・」

藤景は酔いがかかなり廻っているようであった。

「同じ長尾のおぬしが忠告してみたらどうだ・・・」

繁長が藤景に提案して見た。

藤景は苦笑いしながら首を横に振った。そして逆に

「同族の俺が上杉を名乗れないのは栃尾の爺さんがうるさいからな・・・」

・同姓のおぬしこそ 栃尾の爺様に阿虎様にあまり吹き込むなど言ってくれんか？」

藤景も冗談で返してきた。

繁長も思わず苦笑いしてしまった。

「栃尾の本庄実乃と俺は名前は同じだが無関係だ・・・でも確かに老中達にはしつかりしてほしいな・・・」

繁長も不満を飲み込むようにぐいと飲み干した。

「・・・佐野の噂・・・聞いたか？」

藤景が繁長に聞いてきた。

繁長も不満そうな顔でうなずいた。

なんと佐野昌綱が再度北条側に下ってしまったのである。

昌綱が下るのを見てか常陸の小田氏治も歩調を合わせるかのように反旗を翻したと言う。

下野国の小山秀綱と結城晴朝も再度不穏な動きを見せていた。

「年明け早々また兵を出させてよ・・・」

藤景は不満そうであった。

「越後に久しく帰っていないのにな・・・」

繁長も懐かしそうに言った。

「子供が心配だな・・・子供達の将来が・・・特におぬしは子沢山だからな・・・」

藤景が冷やかすように言った。

「軍資金は出してくれるようだが・・・子供達の将来はそれとは別だからな・・・」

繁長は一瞬子供を思い出したのか笑顔を見せたが直ぐ元の険しい顔に戻ってしまった。

「関東も結構だが・・・越後も問題山積みだな！土地が欲しいもんだな！」

藤景は不満を飲み込みようにくいと酒をまた飲み干した。

「・・・うむ・・・」

繁長も険しい表情のまま飲み干した。

輝虎はこの年も厩橋城で年を明かしていた。越後に戻らなかったのは次の作戦準備を早急に行うためである。

実は永禄7年（1564年）正月早々であったが下総国の国府台で輝虎の同盟者である安房の里見義堯、義弘親子が北条氏康と戦っていた。里見親子が勝てばその勢いで再度北条攻撃を予定していたが、里見親子は氏康に大敗北を喫し、上総国が北条の手に落ちる事態になっていたのである。世に言う第2次国府台合戦である。

輝虎は急遽後方からの北条牽制と里見親子の支援、またこれに驚き再度反旗を翻した唐沢山城の佐野昌綱、常陸の小田氏治を屈服させ、更には下野国の小山秀綱、秀綱の弟の結城晴朝を恫喝すべく厩橋城を急いで出発したのである。

越後軍は常陸の小田氏治の小田城まで攻め込みこれをあつさりと落  
とし2月には再度反旗を翻した佐野昌綱の唐沢山城に向かった。  
行軍の最中

「阿虎様が以前危険を承知で助けてやったのに恩知らずな男だよな。  
昌綱殿はよ。ちえっ」

弥太郎が吐き捨てるように言った。

「それにしても・・・やはり関白様は偉大だな・・・関白様がいなくな  
ったらみな豹変だ・・・」

輝虎も軽く溜息をつきながらしみじみと言った。

本庄繁長や長尾藤景は政虎の相変わらぬの権威信奉に少し呆れてい  
たが

「違うんじゃないですか・・・単に氏康が怖いんでしょう・・・」

斉藤朝信が珍しく横槍を入れた。

「そんなに怖いのか・・・特に見た目か？」

実は輝虎は氏康を見たことがなく今更ながら風貌を含めてどのよう  
な男か想像したこともなかった。関東の諸将がころころ立場を変え  
るのを見ると余程見た目が恐ろしい男かと勝手に想像してしまった  
のである。

太田資正が笑いながら言った。

「いや、意外と色白で細身な老人です。戦上手ではありませんがどち  
らかと言えば政治家ですな・・・」

「子沢山で子供達を養子にいろんな所に嫁がせて勢力を広めるのを  
術としていますな・・・戦わずに勢力を広めるのが好きなようです」

築田晴助も続いた。

「ふうん・・・」

輝虎も少し感心してしまった。

「息子の氏政殿が正式な後継者ですが他の弟たちもなかなか豪傑が  
多いとの事です」

本庄実乃が言った。

「しかし・・・そんなに兄弟が多いと・・・喧嘩が絶えないような気がするが・・・」

輝虎は亡き兄の晴景や姉の仙桃院の事を思い出していた。

兄や姉は本質的には嫌いではないが兄と姉とは後継者争いのおきにひと悶着あつたのでそれを思い出したのである。

「それをうまく押さえ込んでるのが氏康殿ですな・・・氏政殿も武勇は優れないと評判ですが統治は父親譲りで評判が良いそうです・・・氏政殿の不足は武勇に優れた弟達が補っているのでしょうか・・・」  
金津新兵衛が言った。

「なるほど・・・厄介な相手だな・・・」

輝虎は思わず本音が出てしまった。

「ところでもうすぐ唐沢山城ですが・・・」

千坂景親が声をかけてきた。

「使者を出して降伏勧告を・・・」

越後軍から使者が馬に飛び乗って唐沢山城に向かって行った。

しかしこの時は誰も予想外の展開になるとは夢にも思わなかったのである。

しばらくして 唐沢山城から使者が伝令文を持って戻ってきた。

輝虎はその内容を読んで思わず仰天してしまった。

他の関東諸将のように自分が来ればあっさり降伏するかと思つたのだが伝令文には唐沢山城を手に入れたければ人質として伊勢姫を差し出すようにと書かれていたのである。

輝虎は啞然としていたが他の者の反応は違つた。

「いい度胸じゃないか！ 気に入つたぜ！ 佐野の殿様よ！」

北条高広が太い腕をまくつた。

「一泡吹かせてやるかのう！」

老人の中条藤資も息巻いていた。

「気持ち分かるが固い城だぞ・・・易々とは落ちんぞ・・・」

長尾藤景が咎めるように言ったが。

「おぬしら好きなんじやる？手強い相手か？え？」

中条が遠慮なく言った。

「どうします？」

本庄実乃が輝虎に聞いてきた。

唐沢山城は堅牢な城である。しかしここは北関東の交通の要衝でそのまま放っておくわけにも行かなかった。

輝虎も渋々であったが攻略の命令を出した。

越後軍は唐沢山城の大手門まで近づくと唐沢山城の地形を利用して夜影に乗じて山の林の中から侵入し背後から大手門を襲います入り口を確保した。そのまま一気に押し入ろうとしたがやはり前回の北条戦同様、本丸で激しい抵抗に遭ったため本丸傍の避来石山と鏡石周辺を占領しそこから火矢や鉄砲、投石などでじわじわと本丸に攻撃をかけることにしたのである。蔵屋敷を押さえることによつて兵糧も奪い越後兵の土産を持たせ、彼らを奮い立たせることにも成功した。

北城も本庄繁長、長尾藤景の部隊が攻略に成功するとこちらからも投石や火矢を浴びせて後は固い本丸をじわじわと時間をかけて攻め落とすのみである。

「それにしても・・・」

火矢や石が次々と打ち込まれる唐沢山城を見ながら輝虎はつぶやいた。

「以前一緒に戦った相手を攻めるのはあまり良い気分ではないな・・・」

昌綱は腹立たしい個人的には苦手な相手ではあるが特にそれ以上の感情は持っていないかった。

むしろ一緒に戦った昌綱の正室や側室、従者、子供達や兵士が自分が攻めているとはいえ気の毒に思えたのである。

唐沢山城は火矢や石が次々と打ち込まれ消火作業で追われ必死に防



戦していたが落城は時間の問題だった。

「降伏勧告の必要はなさそうだな・・・」

北条高広が嬉しそうに言った。

「あゝあ また騎西城の地獄図の再現か 俺は参加遠慮願いますぜ！」

弥太郎がぶつきらばうに言った。

「兵士の鬱憤晴らしの良い鴨じゃな・・・可哀想じゃが」

中条も冷徹に言った。

「明後日くらいには城も火に覆われて連中も城外に出てくるでしょう・・・そのときは総攻撃許可を・・・昌綱の処遇は功として成り行き任せで宜しくて？」

長尾政景も冷徹だった。

「う・・・うん・・・」

輝虎は断りたかったが越後兵の現状を思い出し断れずに歯切れの悪い返事をした。

その日の夜、輝虎は唐沢山城の避来石山の越後軍本陣から下山する準備をしていた。

唐沢山城の落城が近くなり略奪、手柄取りの地獄図を見たくなかったので先に下山して厩橋城に戻ることにしたのである。

攻撃指令官に長尾政景を任命して城の後任は色部勝長か中条藤資を予定していた。

その時輝虎の元に早馬がやってきた。

常陸の佐竹義昭や下野の宇都宮広綱からの手紙で昌綱に対する助命懇願書であった。

輝虎は直ぐに攻撃を停止させ昌綱に佐竹と宇都宮からの手紙の内容を伝える使者を送った。

昌綱もここに来てようやく降伏したのである。

翌日、輝虎の陣地に昌綱が家臣を連れて侘びにやって来た。

朝方まで本丸の消化作業に追われていたようで、みなすすで顔は真っ黒で石が当たったのか血の滲んだ布だらけの者もいた。

今回、輝虎は前回と違い伊勢姫ではなく、本物の輝虎本人として振舞うことにした。

しかし昌綱の一言にまた輝虎は一杯食わされることになるのである。昌綱は輝虎の前までやってくると深々と頭を下げた後こう言ったのである。

「伊勢姫様に一度ならずとも二度も助けて頂き昌綱感謝感激の極みでございます・・・」

輝虎は思わず肩の力がぐつと抜けそうになったが

「たわけたことを・・・佐竹殿や宇都宮殿からの願いで助けてやっただけじゃ・・・次はないぞ・・・」

影武者輝虎役が得意な千坂が直ぐに返しを出した。

ただ影武者輝虎として言っているのか千坂として言っているのかは輝虎も良く解らなかったが威厳は充分であった。

「伊勢姫様と輝虎様にはこの昌綱、一生忠節を誓います・・・」

昌綱は地べたに頭をくつつけたまま言った。

輝虎は黙ったままこっくりとうなずいた。

「ところで・・・昌綱殿よ・・・」

千坂が再度声をかけた。

「おぬしもワシらの本当のこと知っておるだろうに・・・いつまでも茶番で通す気じゃ？」

千坂は輝虎の影武者の件を知っているだろうと言ったのである。

しかし昌綱の返事は意外であった。

「昌綱にとって伊勢姫様も輝虎様も同じ雲の上の人でございます・・・」

昌綱の思わぬうまい返答に輝虎と千坂は思わずお互い顔を見合わせた。

そしてそれ以上言うのをやめた。

「わかった・・・もう良い・・・下がれ・・・」

影武者輝虎の干坂は昌綱を下げさせた。

昌綱が去った後

「とんだ食わせ者じゃな・・・」

色部勝長が苦笑いしていた。

「油断ならんな まったく・・・」

中条も警戒していた。

「また裏切るぞ あやつ・・・」

北条が露骨に言った。

「おぬしが言つと実感湧くなあ・・・」

斉藤朝信の迷返答に一同大笑いで一人北条だけ口を尖らせていたがこの北条の懸念は後に現実になるのである。

## 御禁制

永禄七年（1564年）7月、輝虎は久々に春日山城に戻っていた。そんな中、輝虎の元に奉行の上野家成から妙な報告が入った。

長尾政景と宇佐美定満が政景の居城の坂戸城近くの野尻池で舟遊びをするというのである。

輝虎も内心少し驚いた。宇佐美と政景は家臣、領土、自分の件を含めて色々問題があり決して良好な仲と言える関係ではなかったからである。

上野家成が直接輝虎に報告したのも、以前上野と下平吉長との領土争いの時、話が大きくこじれて下平には上杉を出奔した大熊朝秀や政景が付き、上野には本庄実乃や宇佐美が付いて大論争をしたが、これに輝虎が愛想を尽かして家出する大騒動を起こしていたので上野自ら心配になって輝虎に報告したのであった。

ただ政景と宇佐美は最近、特に川中島以降はお互いに正面切って争うようなことはなく、二人の関係は以前ほど刺々しい物ではなく落ち着いた関係のように見えたのも事実であった。

宇佐美は輝虎の越後統一の頃から仕え、年の功らしく様々な助言を常に輝虎に与えてくれ、また政景も一時は反旗を翻したがその後は姉の夫という立場もあり、輝虎が家出をしたときの収束作業や越後軍内でも常に次位の軍役の負担を律儀にこなしてくれていた。

輝虎も二人を頼りにしていたのでそのような事実は半分忘れていたのである。

むしろ宇佐美と政景に何か会って話をする共通点があるとしたら二人とも最近長男が早世してしまったことであった。

特に宇佐美は長男の定勝が晩年の子であったため、ひどく落ち込み

隠居願いを輝虎に申し出たほどであった。政景も表向きはあまり表情に出さなかったが長男の義景が病死したことについては輝虎も母虎御前から姉の仙桃院と政景夫婦がひどく落ち込んでいるとの手紙を密かにもらっていた。

輝虎も甥っ子である義景が病死したことについては気に留めていたが政景の家臣団内の微妙な立場も相まって表立って動けなかったのである。

輝虎はしばらく考えた後、上野には何も心配することはないと伝え、また二人に湖上の船上でゆっくり酒でも飲んでくつろぐようと酒を持って行かせることにしたのである。

輝虎が今最も気になっていたのはまたもや武田信玄であった。輝虎が唐沢山城を落とすのを見計らうように再度軍を西上野から侵入させて倉賀野城や金山城を包囲しては切り上げるなど盛んに牽制行為を行っていた。また再度川中島に信玄が軍を動かそうとしているとの情報が軒猿から入っており、本音ではそれどころではなかったのである。

しかしそのまま何事もなく終わるであろうはずの単なる舟遊びが予想外の騒動を起こすのである。

翌日早々から春日山に早馬が飛んで来た。

どうも二人の乗った小船が転覆したらしいという驚くべき情報が入ってきたのである。

そしてしらばくして別の早馬が再度飛び込んできて、二人とも溺死したと言う驚くべき内容を報告してきたのであった。

春日山城内は重い雰囲気にもまれていた。

越後の重鎮二人が原因はわからないが転覆事故で急死したためであ

る。

しかも当事者二人や乗船していた関係者が死亡したため、原因等詳細も一切不明であった。

情報は錯綜し政景の肩には傷があったとの報告までもあり輝虎は対応に苦慮していた。

春日山の城下でもこの噂で持ち切りで様々な憶測が流れ出していた。単なる事故説や、宇佐美の独断による上田長尾への捨て身の牽制、政景の宇佐見への長年の恨みによる手討ちが相打ちになってしまった、拳句の果てには輝虎が宇佐美を使って仕組んだなど様々な噂が流れはじめていた。

春日山城内でも動揺が収まらず様々な噂が流れていたがその頃輝虎が最も恐れていた情報が飛び込んできた。

政景の居城の坂戸城は大騒ぎで上田衆が続々と城に集まり宇佐美の琵琶島城に攻め込まんとばかりの勢いとのことであった。また宇佐美の居城の琵琶島城も動員できるだけの兵を集め他の城に救援の依頼を出しているとのことであった。

琵琶島城からの救援要請を受けてか栃尾城の本庄実乃も兵を動かし、また栖吉の上杉景信も兵を動員しているとの情報が輝虎の元に寄せられてきたのである。揚北衆も混乱しているとの情報が入ってきていた。

輝虎の最も恐れた内乱の兆しである。しかも以前からの因縁の対決で一度火が着いたら収集が着かないのは間違いなかった。

まず輝虎は各諸將に冷静に判断するよう文章で達しを出し、個人的な軍事行動は厳しく禁ずるとの達しを出した。

しかし輝虎は越後の領主であつても越後国内の領主達の緩やかな連合体の頂点に立つに過ぎず彼らを強制的に止められるような単独の戦力を持ち合わせているわけではなかった。

特に上田長尾は若き輝虎が越後の守護になったばかりの頃から常に反輝虎の先鋒であった。しかし反輝虎の態度はその実力に裏打ちされたもので事実若き日の輝虎が越後の守護になって上田長尾を屈服させて越後を統一するのに7年の月日がかかっている。また上田長尾の動員兵力は越後軍の主力と言っても他言ではなく越後軍の軍役の常に上位を負担していたのは上田長尾であった。

しかもその軍事的な実力以外にも輝虎の姉の夫と言う他の家臣達とは違う親族としての大きな地位を持っていた。

これが他の家臣たちの反感を買い、また政景の他の家臣たちに対する不満にもなっていた。

以前にも述べたが上田長尾が栖吉長尾と違って上杉を名乗れなかったのはそのような複雑な背景からである。

政景の実力と微妙な立場が事態を複雑にしていたのである。

輝虎が政景の長男義景が病死したときの親族らしからぬ態度も輝虎がそれを気にしていたからである。

そんな緊張状態が続く中、坂戸城を上田長尾の一部の部隊が発発し西に向かっていると云う情報が入ってきた。

同じような時期に琵琶島城からも輝虎に救援の依頼が入って来た。

輝虎や留守役でたまたま春日山城に居た直江景綱は上田長尾の部隊がまさか琵琶島城に向かっているのかと緊張したが上田長尾から連絡が入り春日山城に仙桃院と次男の喜平次が今回の件で向かっているだけで琵琶島城には向かっていないとの連絡が来た。

兵力を連れて行きているのはあくまでも護衛のためであるとのことであった。

部隊は上田長尾家老、栗林雅頼が率いていた。

春日山城に到着次第早速3人は景虎の前に通された。

夏にしては天気は曇りで涼しげな日であったが遠くで雷が時々なる

不気味な天気の日であった。  
輝虎は久しぶりに姉と甥っ子に会った。

喜平次は既に10歳になっていた。

「・・・大きくなったね・・・喜平次・・・」

輝虎はにこりと笑うと優しく声をかけた。

「・・・」

しかし喜平次は以前会ったときのような無垢な笑顔は今回は全く見せず下を向いて険しい表情をしていた。

「今回の件は非常に残念です・・・姉上と喜平次の・・・心中察し余り  
ます・・・」

輝虎は姉たちを労った。

「お気遣いありがとうございます・・・」

仙桃院達は深々とお礼をした。

輝虎はなんか姉の態度が他人事のように感じて少し怖かった。

しかし次に喜平次の放った言葉に輝虎は衝撃を覚えたのであった。

「くやしいです・・・父のあだは、かならずや・・・はらします！」

喜平次は10歳の子供の口調ではあったが内容は年相応とは思えない言葉で、またその態度も今まで輝虎が見たことが無い険しい雰囲気と視線で輝虎を睨みつけたていたのであった。

遠くで届く雷鳴が余計にその子供離れした雰囲気と輪をかけていた。輝虎は自分が疑われている様な気がして思わず少し悲しい顔になってしまった。

「今回はただの事故だ・・・喜平次・・・仇討ちなど必要はない・・・」  
金津新兵衛が諭すように言った。

新兵衛を遮るように上田家老の栗林が冷静に威厳のある口調で言った。



「・・・上田長尾は確かに以前は敵対し宇佐美殿　いや輝虎様の譜代の衆とは色々ありましたか・・・今まで忠節を尽くしてきたつもりでございました・・・しかしまだ不足で譜代の衆がそれを不満に思われているのであれば、今回の件でその忠節の穴埋めが出来るのであれば政景公は謀反人として宇佐美殿に討たれたこと喜んで受け入れるでしょう・・・」

「何を言うか・・・」

輝虎は栗林の思わぬ予想外の、しかし猜疑的で含みのある返答に声を詰まらせてしまった。

「越後の安定のため上田の領土は返上します・・・憂いなく関東管領の夢のために集中してください・・・」

仙桃院の予想外の言葉に輝虎は声を失った。

「・・・そのような重大な取り決めをあせらずに決めることは無い・・・上田の代々の大事な領土であろう・・・」

直江が咎めるように言った。

「姉上・・・お気持ちは充分察しておりますが・・・どうぞ御冷静に・・・」

輝虎も声をかけた。

「仙桃院様は御冷静でございます・・・仙桃院様は今回の自分達の騒ぎの件で輝虎様が苦勞して統一された越後がまた分裂することを心苦しく思つての決断でございます・・・」

栗林が直ぐに入ってきた。

「それでも私は足りないと考えている次第・・・喜平次を人質として置いていきましょう・・・」

仙桃院は続けて優しいがどこと無く無感情な口調で畳み掛けてきた。輝虎はまた返答に窮してしまった。

直江もさすがに黙り込んでしまった。

「姉上・・・おやめください・・・喜平次は私にとつても可愛い甥っ子ですし姉上の大事なご子息・・・人質など要りませぬ・・・」

輝虎も色々考えながら返したがその次に止めの一言が入ったのである。

「喜平次を・おば上様の・こどもにさせてください!」

喜平次が大きな子供の甲高い声で言った。

しかし10歳子供が考えて言う言葉ではなかった。

輝虎も直江も正直完全に手玉にとられてしまい返す言葉が見つからずただおろおろと戸惑うばかりであった。

今回の件は間接的に後継者の件と絡む重要な問題であったため、元来回答が難しい件ではあったが、輝虎も直江も正面切っては反対は出来なかった。

輝虎の後継者問題は以前から密かに言われていた問題であったがやはり微妙な問題で正面切って話が出来る問題ではなかったからである。

輝虎の後継者は順番で言えば次位は姉、もしくはその夫の政景であったが政景の微妙な立場から実現不能な問題であった。

しかし政景が亡き今、しかも上田長尾が形式上は領土を自主返納して断絶し、輝虎の養子縁組と言う形を取ればそれほど形式上は問題はなかった。

順番で言えば姉の子である喜平次が一番近い人間なのも事実であった。

しかし複雑な越後の内部事情由縁に家臣の了承は一旦必要と輝虎も考えていた。

そのため即答は避けたのであったが

「私からも是が非でも・宜しく願います・」

返答に窮する輝虎を見計らうかのように仙桃院が再度深々と頭を下げた。

「上田衆は輝虎様に政景公以上に更なる忠節に励みまする・」  
栗林も再度深々と頭を下げた。

「越後の上杉家のため、ちゅうせつをちかいます！」  
喜平次も子供の甲高い声で続いた。

輝虎や直江は仙桃院達のやり方に正直皆脱帽していた。  
誰が発案したのか判らなかつたが正直恐ろしさも感じていた。

元来不仲でうるさい栃尾の本庄実乃や栖吉の上杉景信、宇佐美の一族が本城に張り付いて動けない間隙を付いて政治力で実力行使をかけてきたからである。

結局、この後、喜平次は輝虎は養子になることが正式に確定した。  
については上田長尾を形式上の断絶とし上田長尾、上田衆は輝虎の直属の部隊に組み込むことで合意したのである。

ただ上田長尾は形式上は消滅したが坂戸城に喜平次、仙桃院達は基盤を残しその後も領主として喜平次が成人して春日山城に移るまで景勝の重要な基盤として残されることになる。

尚、この事件は上杉の歴史では単なる事故ということになっている。  
ただ宇佐美家はこの後、跡継ぎの勝行が幼かつたこともあり輝虎の元で活躍する機会はなく没落し景勝の会津、米沢転封にも従うことなく歴史から姿を消していく。

また上田長尾も政景の死によって形式上は途絶えたことになっているが、輝虎亡き後、上杉本流を後継者を巡る争いはあつたが、上杉を継承したのは上田長尾の子、喜平次、後の景勝である。

## 時の流れ

永禄七年（1564年）8月、長尾政景と宇佐美定満の溺死事件の影響が覚めやらぬ中、輝虎の元に信玄に関するいやな報告が入っていた。

甲斐軍が春先より信濃方面に別働隊を展開させ、越後側の信濃国境の各地の支城にちよっかいを出し、各地で小競り合いが起き、特に越後側の野尻湖湖畔の野尻城は武田側に奪われるという事態までもが起きていた。

また、武田の本隊も甲斐本国を出勤して、川中島方面に向かう素振りを見せており輝虎も対応を迫られていた。

実はこの年の4月、唐沢山城の攻略から越後に戻り、政景と宇佐美の溺死事件が起こる直前に越後北部で国境を接する陸奥南部の芦名盛氏が信玄にそそのかされて越後北部の揚北に侵入して来たのだが揚北衆を中心とした部隊に追い返されていた。

信玄の攻略の手が北陸方面だけではなく東北方面からも廻っていることに警戒していた矢先に信玄が再度信濃に進軍してきたので、いつもの信玄の得意の謀略と輝虎はそれほど驚かなかったが、むしろ自分や春日山城が政景と宇佐美の事故の件で動揺している頃を見計らって、ずかずか押し入ってくる信玄のやり方の方に輝虎は腹が立った。

しかし輝虎も姑息なやり方と口では信玄を批判しながらもその計算高さは素直に認めざるを得なかった。

更には飛騨国からも輝虎に出兵、救援の依頼が入っていた。

飛騨は元々国司の姉小路氏が治めていたが姉小路氏の勢力が衰えると、飛騨の支配を巡り有力国人同士の三木氏と江馬氏が争いを始めたのである。

特に今回は北飛驒の領有を巡って三木良頼と江馬時盛が激しく争っていた。

輝虎は本音では飛驒には興味はなかったが飛驒は越後の西隣の越中と国境を接し、またその越中も輝虎寄りの椎名康胤と信玄に通じていると噂される神保長職が争い不安定な状態が続いていた。

関東の北条、信濃の武田と強敵を抱える輝虎にとつて越中と飛驒両国の不安定化は避けたいと言う事情もあった。

三木良頼は飛驒の主権を握るために輝虎を頼り、逆に江馬時盛は信玄を頼ったのである。

良頼は更には飛驒の国司としての正当性を得るため姉小路氏の継承も望んでいた。

良頼はその為に輝虎への従順と輝虎と友好関係の織田信長への従順も申し出たのであった。

越中、飛驒の安定化を望む輝虎もこれに同意し、また飛驒の南方の美濃で斉藤龍興と争っていた信長も賛成したため、その頃信長と親しくしていたあの近衛前久が朝廷に働きかけたこともあって話は順調に進み、三木良頼はこの後、姉小路氏を名乗っていくのである。

一方、時盛は信玄に働きかけて力づくでも良頼を排斥しようとして信玄に合わせるかのように信濃に出兵してきたので結局双方の肩を持つ、輝虎と信玄が代理で出兵してまた川中島で争うことになってしまったのである。

このような経緯から結局再度川中島に急遽出向くことになったのだがこの時、輝虎は自分の決意を新たにするために戦勝祈願の願文を春日山城の看経所と弥彦神社に奉納している。

たけ田はるのふあくきやうの事・・・(武田信玄悪行之事)

と始まるこの信玄打倒を願う有名な願文は今でも米沢の上杉神社の

宝物館、稽照殿で輝虎の美しい達筆を見ることが出来る。

この願文自体は美しい平仮名交じりの達筆の方に目が行ってしまうが内容は輝虎自身の正当性と信玄の悪行を挙げた物で輝虎の性格を垣間見ることが出来る文章でもある。

大まかに訳したものであるが

・輝虎は関東管領であるので関東に出兵して戦っているのです・  
川中島でも多くの家臣を討ち死にさせてしまいました、自分は信玄に領土を奪われた信濃の国人衆から頼まれて出兵しているのであって非道ではありません・  
・信玄は今川義元からの調停の約束をも破り、実の親をも追放した悪い人間です・  
等書いてあると言つ。

しかしさすがに五度目の川中島への出兵には多くの越後衆も不満気であつた。

また家臣団も口では言わなかったが川中島での信玄との軍事的な戦いでは決定的に負けたことはなかったが戦略的には輝虎の性格の故もあるが既に善光寺を含む川中島の大部分が信玄の手に落ち、川中島の越後側の勢力は高梨一族の守る川中島最北端の飯山城のみの僅かしかも残つておらずこの戦いの戦略的な勝敗は決定的であつた。

輝虎の耳にも越後国内の不満の声は届いていたが飛驒の件以外にも行かざるを得ないのも事実であつた。

川中島から春日山では100キロ弱と目と鼻の先なのである。

信玄を越後に入れないうちにはここで迎え撃つしかないという現実であつた。

ただ決意を新たにした願文とは裏腹に本音ではこの後の関東での戦いに備えて前回のような全面衝突は避けたいのも事実であつた。

輝虎とて前回の川中島の戦いは偶然の産物と言え、武田軍に打撃は与えたもののこちらの打撃も大きく、再度武田軍の強さを認識させられたからである。

再度味方部隊が大打撃を受けるようなことは是非とも避けたかったのである。

8月初めに春日山城を出発すると直ぐに輝虎は別働隊を河田長親に任せて野尻城に派遣、野尻城を奪い返して3日後には川中島に入り善光寺側の横山城に布陣した。

ただ川中島に越後軍が到着しても海津城や周囲の武田側の支城は越後軍一行が到着しても城に引き籠もりだんまりを決め込んでいた。それを見計らうと輝虎は今回は川中島での刈り取りを珍しく許可したのである。

川中島での刈り取りは川中島を既に実行支配している武田側を刺激するには充分であつたが味方の越後兵の鬱憤を晴らすことも大事だつたからである。

もちろん武田側の反応を探る旨もあつた。

武田側が飛驒の代理戦争ではなく、前回の恨みを晴らすべく本気で来たのであれば目の前で刈り取りをすれば顔色を変えて軍を動かしてくると思つたのである。

しかしそれでも武田側は相変わらず城に籠つたまま出てくる素振りを見せなかつた。

武田側が信玄本隊を待っているのか戦う気がないのか輝虎も解らなかつたが越後側も信玄が来るまで待つことにしたのである。

ただ輝虎は刈り取りこそは行つたが武田側への意思表示はした。

本来越後側の野尻城は奪い返したものの、他の武田側の支城は攻撃しなかつたのである。

こちらから仕掛けるつもりは無いことを暗に示したのである。越後兵も前回の激しい戦いの記憶と、関東と越後を何度も往復して疲労しておりそれほど今回は士気が上がっていないと言う事実ももちろんあったが。

8月下旬になつてようやく信玄本隊も川中島に到着したが海津城に入らず、海津城から離れた川中島最南端部の千曲川西側近くの塩崎城に布陣した。

信玄の布陣を確認すると越後軍も犀川を渡り、北国海道を南方に移動し川中島中央の北国街道沿いの小田切館周辺に布陣して4キロほど間をとつて武田軍と向き合うように再度布陣した。

しかし武田軍本隊も塩崎城に布陣後は城内から動くことは無く閉じこもつたままであつた。海津城や他の城も同様であつた。

「・・・またまた睨み合いか・・・」

本庄繁長が陣内で背伸びをしながら面倒そうに言った。

「・・・まあ・・・前回の二の舞は御免だがな・・・」

川中島の記憶がまだ生々しいだけあつて長尾藤景も今回は慎重だつた。

「こちらからは決して仕掛けないように・・・」

輝虎も念押しした。

今回は特に誰も異義を唱えなかつた。

越後衆も武田の強さは認識していたし、また争うのに辟易していたからである。

そして9月10日頃

「失礼・・・」

と言って輝虎は親衛隊の警護だけを引き連れて善光寺の宿坊に出かけていった。



毎月10日前後に輝虎が体調を崩すのは越後軍ではこの頃には当然のことであった。

誰も驚きもしなければ当然のように見送っていった。双方の動きが無い陣中は完全に気が抜けていた。

一方善光寺の宿坊で毎月10日前後に来る腹痛のために休んでいた輝虎に思わぬ報告が入ってきた。

輝虎に来客が来ていると言う。

輝虎は川中島での陣中での来客など心当たりがなかったが来客者の名前を聞いて驚いた。

海津城城代の高坂弾正昌信本人だと言う。

親衛隊の責任者で輝虎の警護に当たっていた千坂景親は輝虎が武田側の高坂に会うことに難色を示していたが輝虎は高坂に会うことにした。

懐かしさもあつたが信玄が寵臣の高坂を自分の下に送ってくるなど何か理由があるに違いないと判断したからである。

面会場所は善光寺近くの庭園が美しい宿坊の小さな茶室が選ばれた。

高坂から個別で話しがしたいとの申し出もあつたのでそれも了承した。

警護担当者の千坂が珍しく不安そうな表情をしていたので

「高坂弾正昌信はそのような男ではない・・・心配無用・・・」

と輝虎は逆に千坂に氣遣った。

約束の日時になると輝虎は茶を用意して待っていた。

しばらくして見覚えのある武者が僧侶に連れられて通された。

高坂弾正昌信本人が几帳面にほぼ約束の時間通りにやって来たのである。

第4次川中島、信玄の本陣で会った以来であった。

高坂は既に37歳になっていた。

初めて会ったときから12年の時が流れ凜々しい若者から立派な若武者になつていた。

今でも信玄のお気に入りとあつて年以上に若く才気があつた。

一方輝虎も気が付いたらもう35歳になつていた。

初めて高坂と会つた時は23歳の麗しき姫様であつたが今は類には少し年季が入り、目元も以前よりわずかにであるが年相応の優しさが滲んできていた。

もはや姫様と言われる年は当に過ぎていたがまだ御館様とは言われるのに抵抗があつた。

実は未だに心が実年齢に追いついてなかつた。

高坂は輝虎の前に通されると、静かに座り深々と頭を下げた。

「姫様もご機嫌麗しいようで何よりです・・・」

高坂が静かに少し笑いなから言つた。

「ありがとう・・・でも もう姫様はやめた・・・ 輝虎殿とでも呼んでおくれ・・・」

輝虎は自嘲気味ににこりと笑つた。

高坂もにこりと笑つた。

「初めて会つたあの日が昨日のように思い出されますな・・・」

「うん・・・懐かしいな・・・若かつたな・・・」

輝虎は本当にそう思つた。

「甲斐の衆はみんな口を開けていましたぞ・・・本当に姫様が大将だつて・・・」

高坂が笑つた。輝虎も思い出した。驚いて口を啞然と開けている甲斐兵を思わず思い出し少しくすりと笑つてしまつた。

「あの時はみなの前で焦らせてすまなかつた・・・」

輝虎がにこりと笑いなから言つた。

「今後は私の方こそお言葉には気を付けましょう・・・」

高坂も思い出したように冗談を言いなから笑つた。

「ところで・・・この前は・・・」

輝虎が言い難そうに言った。

「・・・ありがとう・・・おかげで命拾いした・・・」

第4次川中島で信玄本陣で高坂に助けてもらった件である。

なんで助けてくれたのか聞きたかったが年甲斐もなく恥ずかしかったので聞けなかった。

高坂は何も言わずに笑っていた。

「信玄公・・・お怒りであつたらうに・・・弾正が無事でよかつた・・・わたしのせいで何かあつたらと思うと・・・」

高坂が輝虎が言い終わらないうちに

「ははは・・・信玄公だつて分かつております・・・あなたが毘沙門天の化身でそう安々と倒れないのを・・・」

輝虎も思わず苦笑いしてしまった。

「でもあの時は本当に覚悟した・・・でも弾正に切られるのなら本望だなとも思つたが・・・」

思わず本音が出てしまったが高坂も本音で返してきた。

「姫君・・・失礼　輝虎様を切るなど私には恐れ多くて出来ませぬ・・・

ははは・・・」

「そうか・・・ありがとう・・・」

輝虎も本音で語っていた。

しばらくして少し真面目な顔をして高坂が言った。

「勘助公から聞いてらっしゃるかと思ひますが・・・覚えてらっしゃるでしょうか・・・」

輝虎は黙つてうなずいた。

勘助が話を持ちかけていた和睦の件である。

「信玄公は今でもあなたに対するお気持ちを変えておりません・・・輝虎は内心少し驚いたが表情を変えずに黙つて聞いていた。

「少し・・・時間を使い過ぎました・・・我々は・・・」

輝虎もうなずいた。

気がつけば12年も経っていた。

「もう一度・我々と手を組むこと考えて頂けませんか・」

高坂は少し腰を上げると輝虎のすぐ側まで近づいてきた。

予想外の提案に輝虎は内心驚いたが顔には出さないようにした。

信玄の最も信頼した弟の信繁や軍師の勘助、諸角定虎ら重臣を討たれて信玄は怒り狂っているだろうと思いきその様な話は二度と出ないであろうと思つたからである。

関東に集中したい輝虎にとつて願つても無い提案であつた。

しかし素直に返事も出来なかつた。

甲斐と越後の兵士に多大な犠牲を払つておきながら、今更和睦など気持ち的に素直に受け入れ難かつたからである。

武田側にももちろん多数の犠牲者がたが越後側も荒川長実や志駄義時など有能な武将を失つており、彼らの残された遺族の心情を察すると今更易々と気安く応じることは難かつた。

美濃の件も気障りではあつた。

信玄が輝虎との和睦に再度傾いているにはやはり信玄が美濃にまだ未練があるからであろうと輝虎も直ぐに悟つた。今回飛騨の江馬氏の助けに応じたのもおそらく飛騨から美濃に圧力をかける意図も多少はあつたはずであつた。

しかし織田信長とは直接会つたことはなかつたが自分と同じく危険を冒して都まで上洛し將軍や天皇に謁見した今の時代珍しい忠義な人間と輝虎は信長の事を思つていた。

同じ忠義な人間として信長とは良い関係を保ちたいとも考えていたのである。

輝虎はなるべく顔に出さないように努めていたが考え込んでいるうちにやはり顔に出してしまったのである。

輝虎が悩んでいるのを見抜いた高坂は輝虎のすぐ傍まで来て手をとろうとした。

「・・・や・・・やめてくれ・・・弾正・・・」

輝虎は思わず女々しい声を出してしまった。

「・・・そ・・・そういうのは・・・良くないと思う・・・良くないと・・・」  
輝虎は弱々しく言った。

輝虎は昔から俗な言い方だが美男子好きであった。でも誰とでもそのように扱うあまり本当に自分が心を許したいと思う人間にも素直に言えない所があった。35歳になってもそれは変わらなかった。自分でも大人気ないと思っていたが逆に趣向の問題でもあったので一生治らないとも諦めてもいた。今回もそれが出てしまったただけの話である。

「・・・輝虎様・・・無礼かもしれませんが・・・本気であるからこのような振る舞い・・・お許しくだされ・・・」

弾正は真剣に言っていた。その気持ちは輝虎にも良くわかった。

「・・・信玄公のご好意はありがたく頂戴したい・・・でも私は馬鹿だか受け入れられない・・・」

輝虎は正直に言った。

高坂は黙っていた。

「・・・死んで行った者たちに示しがつかない・・・私の采配間違いで・・・霧の中で偶然に衝突して兵士を死なせてしまった・・・今更出来ない・・・」

輝虎は暗い表情で言った。

しかし高坂は武人らしい厳しい回答を返したのである。

「・・・それは信玄公だつて同じことですぞ・・・人間である以上誰もが間違いは犯すもの・・・真の領主は味方の屍を踏み越えてその上に立つもの・・・国のためです・・・残念ながら兵士である以上戦場で一生を終えるのは仕方がないこと・・・あなた様が悩まれることではございませぬぞ・・・今回の件は単に不幸な偶然ですぞ・・・」

厳しい一言であった。  
輝虎も頭では分かっていたが受け入れられなかった。

「この戦のこと・・・記憶から消したいぐらいだ・・・」  
輝虎は言った。

「信玄公も同じでございます・・・弟 繁信公 勘助公 諸角公を死なせ・・・甲斐にとつても恥ずべく戦と・・・」

輝虎はしばらく黙っていた。信玄もやはり相当に傷ついていたのであると。

高坂も思い出したのかしばらく黙ってしまった。

「この戦を上杉の公の記録に残さないのは構わない・・・」  
しばらくして沈黙を破るように輝虎は答えた。

「我々も武田の記録に残さないのは構わないでしょう・・・」  
高坂も同意した。

「・・・我らと手を組まれる件は・・・どうでしょうか・・・」  
しばらくして高坂がまた聞いてきた。

輝虎はしばらく黙っていたが答えた。

「弾正・・・許してくれ・・・やはり出来ない・・・私は信玄公ほど立派な領主ではない・・・」

高坂は黙って聞いていたが静かに口を開いた。

「以前よりお聞きになられているかと思いますが信玄公は味方には優しい方です・・・が向かってくる相手には容赦いたしません・・・輝虎様がもし信玄公にまだ向かってらっしゃるのであれば信玄公は本当に今度は容赦いたしませんでしょう・・・お願いですから私を苦しませるようなことはおやめになられて今後は気軽にいつでもお話できるような両国の関係に持つていってもらえませんか・・・」  
輝虎は何も言えなかった。

「良い返事を待っております・・・輝虎様からの良い返事が頂戴できるまで我々は軍を布陣させます・・・今日返事をされなくても結構です・・・待っております・・・」

高坂は真剣な眼差しで言った。

そして輝虎の手をそつと握った。  
輝虎は黙っているしかなかった。

しかし輝虎は最後に小さな声で言った。

「・・・少し時間が欲しい・・・考えたい・・・もし考えが変わらなかつたら・・・私は越後に帰る・・・」

高坂は黙ってうなずいた。

両軍はその後60日近く何事もなく布陣していた。

今回は本当に戦らしい戦はなかったが両軍とも今回は何故か長期布陣にも関わらず不平がでなかった。

両軍の中でも何らかの話し合いがもたれていると噂になっていた。

60日間近く布陣している間、輝虎は散々悩んだ。

今回は直江景綱や本庄実乃、金津新兵衛など重臣にもわざと相談しなかった。

今回は自分で決めてみようという理由はよくわからなかったがそう思ったからである。

10月1日 輝虎は決心した。

一人馬に乗って越後軍の陣を出ると信玄の陣が見えるところまで行った。

そしてじつと風林火山の旗がなびく信玄のいる本陣を眺めていた。

北条との戦いに備え信玄との和睦はしたかったがやはり譲れなかった。

死んで行った兵士に申し訳が立たないと思ったからである。

またこの頃になると輝虎には信玄に対する別の感情が湧いていた。

好色で残虐で厚顔な信玄ではなく、部下思いで国のためなら鬼になり、なりふり構わず戦わずに謀略を張り巡らせてまで上手に国を取る自分より優れた信玄にである。

信玄を超えたい、負けたくないという気持ちはどこかから出てきていた。

信玄と今後も自分が信玄を超えるかひれ伏せるかまで戦いたいと思っ  
て出していた。

だから悩んだ末の判断であつたが和睦は受け入れないことにしたのである。

輝虎が色々考えながらじつと信玄の本陣を眺めていると信玄の陣地から誰かが出てきた。

赤い総髪獅子噛前歯の兜の武者ともう一人・信玄と高坂だつた。遠くだつたので表情は伺い知れなかつたが間違ひなかつた。

お互いにしばらく向き合つていた。

(どんな表情をしているのだろう・・・)

妙な感慨と思ひ出にふけりながら実に一時間向き合つていたように輝虎は感じた。

輝虎は信玄と高坂を目に焼き付けたあと自分の判断が正しかつたかどうかまた少し悩んだが、再度意を決すると、ようやく騎馬を反転させ信玄と高坂に背中を見せながら越後軍の本陣に戻つていった。そして本陣に戻ると輝虎は命令した。

「越後へ・・・帰ろう・・・」

こうして越後軍は越後に引き上げていった。

信玄たちも越後軍を見送ると何事も無かつたように甲斐に引き返していった。

第5次川中島の戦い、塩崎の戦いはこうして終わった。

この戦いの終了と同時に12年にも及んだ川中島の戦いはようやく終止符を打ち、両者がこの地で直接対決することはこの後2度となかつた。

しかし輝虎と信玄との戦いは形を変えながらもこの後も続き、上杉



家と武田家の関係は色々あったこの後、2代目景勝の代まで続くのである。

ただ輝虎のこの時の判断は信玄の脅威と越後国内の不満と言う形で両方皮肉にも温存されることになりこの後起こる色々なことに繋がって行くのである。

この年、越後に戻った輝虎の元に都からの知らせが届いていた。

あの三好長慶が病死したとの情報であった。まだ42歳の若さであった。

長慶の可愛がっていた弟たちの安宅冬康や十河一存が相次いで亡くなり、また特に前年に息子の義興が22歳の若さで急死してからは、長慶自身が心身に異常をきたし、あの松永久秀に実権を奪われて傀儡になっているとの噂は輝虎も聞いていた。

輝虎は都での長慶親子の事を思い出しながらあの松永久秀老人の事も思い出していた。

長慶が輝虎に久秀を紹介してくれた時の

「この老人は油断ならない・・・」

との言葉を思い出していたのである。

自分でそれに気づいていながらも巻き込まれて去っていった長慶に戦国の世の恐ろしさを今更ながら輝虎も感じていた。

しかし戦国初期の天下人と言われた実力者の長慶の死は新たな時代と戦乱の幕開けに過ぎず、この後畿内や都はあの織田信長を中心とした次の権力者たちの火種に巻き込まれ、この後輝虎も少なからず巻きこまれて行くのである。

## 茶番

春日山城に戻つて来た輝虎であつたが川中島での感傷や昔の思い出に浸る間もなく直ぐに現実に取り戻された。

関東では輝虎の留守を見計らつたかのように北条氏康が積極的に動き出し、その圧力に屈した佐野昌綱がまたもや反旗を翻したのである。

春日山城にも直ぐにその報は届けられた。

「またか！」

中条藤資が呆れ気味に声をあげた。

「予想通りだろうつて・・・」

本庄繁長は表情変えずに言った。

「今回は捕らえたら嚴罰に処しますか？」

本庄実乃が輝虎が何と答えるか判つていたが一応聞いてきた。

輝虎は実乃の予想通り首を横に振つた。

「奴のことだ・・・阿虎様が関東に出てきたらすぐにまた手の平を返して擦り寄つて来るつて！」

北条高広が侮蔑気味に声を荒げながら言った。

高広に合わせるように輝虎もうなずいた。

「・・・しかし我々が関東で動けばまた信玄が信濃方面でちよっかいを出してくるんじゃないですか？」

長尾藤景が不満気に言った。

輝虎は無言でしばらく間をおいた後またうなずいた。

「これでは埒らちが明きませんな・・・」

本庄繁長も不満そうに言った。

「佐野を攻めるのなら今回は奴を斬り捨てよう。そして越後衆の誰かに唐沢山城を直接治めさせれば関東の睨みにもなり、氏康や関東の日和見の連中も大人しくなると思つんじゃないか？どうじゃ？」

高広が大声を上げてきた。

「確かに唐沢山城を押さえれば岩槻城の太田資正殿や関宿城の築田晴助殿への援護にもなる。我々と友好的な常陸の佐竹義昭殿や安房の里見実堯殿とも連携が取り易いので氏康対策に都合が良いですな・  
・西上野の信玄も抑えやすくなりますな・」  
直江景綱も同意した。

「関東は広い・・上野、武蔵だけでも少し手に入れば恩の字だな・」

藤景が独り言のように言った。

繁長や高広もうんうんと大きく首を縦に振ってうなずいていた。  
暗に恩賞の土地の事を言っていたのだが輝虎は聞いてか聞かずか黙っていた。

佐野昌綱の唐沢山城は関東の中央にあり交通の要所で戦略的にも今後の戦局を左右する重要拠点であった。唐沢山城は関東の中央辺りにあり東西南北に移動がしやすく見晴らしも良い地形的にも恵まれた山城であった。

特に南関東、西上野へ移動が楽なのは氏康、信玄への大きな牽制になった。

輝虎もそれは十分に理解しているつもりであった。

「しかし 今度は春日山城の守りが薄くならないか・・」

輝虎が逆に聞いてきた。

「春日山城に連中が来たら西上野から川中島にこの大熊が押し入りましょう！」

普段は無口な柿崎景家が太い声で言った。

「唐沢山城を押さえれば厩橋城との連携で西上野を狙う信玄に対する牽制にもなるか・・」

輝虎は独り言のように言った。

輝虎は大きくうなずいた後

「唐沢山城攻略を！関東へ！」  
直ぐに出陣命令を出した。

越後軍は川中島から戻ったばかりであったが直ぐに春日山城を出陣して、三国峠が雪に埋もれる前に素早く越えて、厩橋城で小休憩したあと、そのままの勢いで佐野昌綱の唐沢山城に押しかけたのである。

唐沢山城に向かう越後の諸将はみな心なしか上機嫌に見えた。

「・・・オイ　なんか今日はお偉いさんみんな珍しく機嫌が良いな・・・」

戸倉与八郎が弥太郎に声をかけた。

関東と越後の往復に辟易の声が最近は多く聞かれ不満を露にする者も見受けられたが今日はみな本当に機嫌がよかった。

「佐野の領土をどうするかでみな心躍ってるんじゃないよ・・・」

弥太郎があくびをしながら興味なさげに答えた。

「佐野殿はどうするんじゃない・・・」

与八郎は少し予想はついたが一応聞いてみた。

「南無阿弥陀仏」

弥太郎はおどけて答えた。

「北条は動いておらんのか？」

秋山源蔵が警戒しながら言った。

「今回は動いていないらしい・・・」

弥太郎は無関心に言った。

「北条が動かないとはな・・・諦めたかな？」

与八郎がおどけて言った。

「まさか・・・何か企んでるんだらうよ・・・」

弥太郎が相変わらず興味なさそうに答えた。

「そうじゃろつか・・・」

源蔵と与八郎は顔を見合わせた。

「まあ　三国峠越えも飽きてきたから唐沢山城を拠点に関東をぼく

つと見下ろすのも悪くは無かるうよ・・・俺もいい年だし・・・」  
弥太郎が相変わらずやる気がなさそうに肩をとんとんと叩きながら  
答えた。

「・・・まあ・・・確かにたまには一息つきたいわな・・・」  
源蔵 与八郎 弥太郎は珍しく話が噛み合った。

唐沢山城に越後軍が近づくと予想通り昌綱の使者が輝虎の元にやっ  
てきた。

昌綱の重臣、山上道牛であった。

道牛は影武者の輝虎 千坂景親の前に出ると

「この度は・・・ご機嫌麗しゅうようで何よりでございます・・・」  
形式ばった挨拶をしてきた。

そしてみな予想通りの返答をしてきたのである。

「・・・我が主君昌綱は輝虎様に忠節を誓う次第であります・・・」  
輝虎は黙って聞いていた。

なお以前からの昌綱対策ではあるが輝虎の影武者役だった千坂が相  
変わらず輝虎として対応していた。その方が威厳があり、また食わ  
せ者の昌綱対策もあつて家臣も同意していた。

もちろん千坂が輝虎の時は本物の輝虎は伊勢姫である。

もちろん真相はおそらく見破られていたがそれは承知であつた。

茶番好きには茶番で合わせるのである。

「ところで・・・」

輝虎役の千坂が威厳たつぷりに言った。

「・・・仏の顔は何度までじゃったかな・・・山上殿よ・・・」

千坂が聞いてきた。

道牛は影武者千坂の質問に答えられなかった。

「・・・仏の顔も三度までだったように記憶しているが・・・違ったか・・・」

千坂が睨みを効かせながら言った。

「・・・私は慈悲深いので何度もお許し頂けるかと・・・私は毎日念仏を欠かさず唱えております・・・」

道牛も返してきた。

「毘沙門天はそんなに甘くはないぞ・・・今回三度目の翻意は許されるものではない・・・唐沢山城の城代はこちらで今後は決める・・・命が惜しかったら城を退去せよ・・・戦って犬死にするのであれば籠つても構わんが・・・」

千坂は遠まわしにはなく率直に結論から言った。

道牛は額を地べたにこすりつけんばかりに付けると

「・・・お怒りのご心情、ごもつとも・・・しかし我らのような雀のよ  
うな小大名が生き残るための術の末の動きなのはご理解頂きたく・・・  
心底は輝虎様に忠節を誓っております・・・」

必死にしかしおそらく本音の弁解をし

「もう一度・・・もう一度だけ機会をくださいませ・・・」

ひたすら必死に侘びを入れていた。

輝虎も千坂も黙って聞いていたが

「それならば・・・昌綱殿本人に一度来てもらおうか・・・」

千坂が弁解だけでも聞こうと言った。

「ありがたきお言葉！明日 殿と早速参りまする！」

山上は礼を言うのと大急ぎで唐沢山城に引き上げて行った。

山上が帰って行った後、本庄繁長、長尾藤景が輝虎の元にやってきた。

「明日 奴がもし来たら・・・斬りましょう・・・」

輝虎は黙って聞いていたが首を縦に振れなかった。

「・・・まあ 昌綱もそこまで阿呆とは思えんがな・・・」

中条藤資が二人を遮るように言った。

さすがに佐野も空気を読んで観念、どこかへ立ち去るであろうと思つたのである。

しかし翌日、予想に反して昌綱本人が輝虎の陣中に本当に愚直にや  
つてきたのである。

しかも切腹用の白い着物までを着ていた。

「・・・覚悟が出来ておるとは潔い・・・」

と北条らは素直に関心していたが

「・・・ちよつと待て・・・あの 取り巻きはなんじゃ・・・」

斉藤朝信が直ぐに昌綱一行の異変に気が付いた。

取り巻きの子供や女中もみな同じ白い着物を着ていたのである。

「また 何か企んでおるな・・・」

藤資が苦い顔で言った。

「やれやれ・・・また一本食わされそうじゃな・・・」

色部勝長も結果を読んだように言った。

昌綱の取り巻きは妻たちやその子供たちであった。

輝虎の本陣に入った昌綱は到着次第開口一番

「関東管領様のお怒り察しまして本日一族郎党連れてお詫びに参り

ました・・・」

情けを請うような言い草の声をあげた。

「なかなか潔いな・・・しかしその格好はなんじゃ・・・」

影武者千坂が厳しい口調で言った。

「はい、私共の覚悟を示したまでのこと・・・城を捨てるくらいなら

城と共に運命を共にいたします・・・」

昌綱は悲壮感を漂わせながら言った。

伊勢姫の輝虎は黙ってしまった。

「・・・で・・・どうする？」

千坂は表情を変えずに続けた。

「はい、私が今から子供達と妻を順番に斬り捨てて行きます。そして最後に私を介錯して頂ければと思います。唐沢山城を去るくらいなら唐沢山城を拝みながらこの世を去った方が我が一族のためかと・・・」

・関東管領様と伊勢姫様には我ら佐野一族の侘びと最期をしかと見とどけて頂ければと・・・」

千坂は表情を変えずに聞いていた。  
そして

「昌綱殿の心意気・・・しかと分かった・・・」

と言ったあと遠慮なく続けた。

「しかし・・・誰がそなたを介錯するんじゃ・・・？ワシらはそこまで要求していないぞ・・・そんなつもりもない・・・」

千坂は殺すつもりは無いのでさっさと出て行けと言いたかったのであつたが

しばらく間をおいた後

「いえ・・・佐野家の命の恩人の伊勢姫様に介錯して頂ければ至極幸いです・・・」

と昌綱が突然輝虎を介錯人に指名してきたのである。

伊勢姫役の輝虎は素顔でぎよつとした驚いた表情を出した後ぶいっ  
と他の方向を向いて昌綱に目を合わせず聞いていない振りをした。

「伊勢姫に介錯しろなど無茶を言うな・・・」

千坂も少し呆れ気味に言った。

「だいたいそなた・・・太刀が無いではないか・・・」

中条藤資が横槍を入れた。

昌綱は今日は輝虎に会うので帯刀を許されていなかったのである。

「あ！　そ・・・そうですが・・・」

昌綱は苦しい返事をした後

「伊勢姫様の天下に名高い名刀、姫鶴一文字をお借りできれば・・・  
と何となくなき苦し紛れに答えた。

「今日は残念ながら小豆長光だが・・・」

伊勢姫は素で答えた。

「・・・！　あ、小豆長光でも良いです！」

昌綱も直ぐに適当につなぐように返した。

「・・・断る・・・」



輝虎は素で嫌そうな顔で答えた。

「だいたい私はなで斬りなど興味ないしそんな刀の使い方は間違っている・・そんな命令を出したこともない・・」

伊勢姫役の輝虎は不服そうに言った。

「あ・・！いや・・！我らの気持ちを現すために・・その・・お詫びの気持ちでございます・・！」

昌綱も少し慌てながら答えた。

「そんな気持ちなど要らない・・」

伊勢姫は率直に答えた。

「そ・・そんなことおっしゃらずに・・」

昌綱はしどろもどろになったが

「奥方やご子を巻き込むなど感心しない・・」

輝虎は遠慮なく言った。

「そ・・そうかもしれません・・それが関東武士の心意気！・・で・・あります・・」

昌綱も弁解したが

「でも昌綱殿は氏康が来たら直ぐに態度が変わるではないか・・不満だ・・」

伊勢姫は容赦がなかった。真剣に厳しく昌綱を咎めていた。

「だ・・だから 我々が命をかけてお詫びに・・その・・」

昌綱は苦し紛れに続けた。

「昌綱殿・・もう良いわ・・」

輝虎役の千坂も呆れ気味に言った。

昌綱のあまりの茶番と言うか猿芝居に呆れ果てていたのである。

藤景や藤資ら越後の重臣も白けていた。

輝虎同様、千坂達も北条が来ただけで直ぐに態度を変える昌綱が本気でそのような事を行うとは思えなかったからである。

しかし小さな心配もしていた。

千坂や他の越後衆が心配していたのはこのような猿芝居に引っかか

つてしまう人間が一人越後側に居ることであつた。

千坂は輝虎をちらりと横目で見た。

千坂の不安は的中した。輝虎は生真面目な顔で昌綱の話を聞いていたのである。

(・・・参つたな・・・)

千坂は思わず小声を漏らしてしまった。

そしてしばらく黙つた後

「わかつた・・・しかし唐沢山城の城主は昨日言つた通りこちらで新たに決める。そなたらをそれ以上こちらで罰するつもりはない。ただし城は出て行つてもらふ。どこかに行くのか腹を切るのかは知らんが勝手にしろ・・・ただし腹を切るなら陣中を汚してもらつては困る。他で勝手にやれ」

千坂が昌綱を突き放すように返したが

「お待ちください！」

一人の幼子が大声を上げた。

「童も武士の子！ここでお城を拝みながらとら様の前でおなかを切らせてください！」

まだ6歳にも満たない童であつた。

「関東管領様、私からも願ひします。唐沢山城のおかげでここまで生き残つてきました。ここでお別れであればお城を拝みながら関東管領様にしかと見届けていただきながら死なせてください」

昌綱の奥方までもが言つてきた。

突然場が再び騒がしくなりつつあつた。

そして奥方は騒ぎの中突然 自害用の脇差を抜いたのである。

「・・・これ！関東管領様の前で脇差を抜くな！」

昌綱が奥方を止めた。奥方は慌てて脇差を鞘に戻した。

「お願いします！ここで関東管領様に見届けられながら死なせてくださいませ。・・・あと介錯もお願いいたしまする！」

昌綱が再度急に悲壮感の漂う声を上げた。

ある一人を除いてみんな越後衆は白け切っていた。

あまりの茶番と芝居上手にである。

「・・・ここでは許さぬ・・・やるなら他でやれ・・・！」  
千坂が断ると今度は

「関東管領様。ここに毒薬があります。これであればここを汚しません。これを飲まして頂きます。」

先ほどの昌綱の奥方が懐から何か小瓶を取り出した。

「では 私から失礼いたします。御免・・・」

奥方が小瓶を開けて飲もうとしたが

「・・・待て！ここでは許さぬ！」

千坂が直ぐに止めさせた。

「関東管領様！我らの最期をしかと見届けてくださいませ！」

昌綱が再度声をあげた。

「他でやれ！何度も言わすな！」

さすがの千坂も少し苛立ち始めていた。

他の越後衆も白け切っていた。

「わかった・・・もうよい・・・」

この騒ぎを断ち切るかのように静かな落ち着いた口調が発せられた。  
みないっせいに伊勢姫に注目した。

そして

「・・・佐野家の気持ち しかと解った・・・」

と言つと

「・・・今まで通りで良い・・・」

と突然方針を輝虎は変えてしまったのである。

「なんと・・・！」

今度は越後衆が驚きの声を思わず漏らしてしまった。

「まことでございますか！ありがたき幸せ！」

昌綱は逆にさっきまでの悲しげな声とはうって変わって大声を上げ

て素直に喜んだ。

「伊勢姫様！ありがとうございます！」

奥方たちもいつせいに喜びの声をあげた。

「うっ．．．うっ．．．」

さっきの童などは本意かどうかはわからなかったが嬉し泣きをして  
いた。

この騒動を見ていた越後衆は

「いやはや．．よく仕込んでおるわ．．」

色部勝長などは妙な関心をしていたがその様な反応は少数派で

「三途の川も阿虎様次第かい！まいったな！」

高広も小声で怒りながら呆れ気味に吐き捨て

「下らん猿芝居にひっかかるとは．．」

藤景も呆れ果てていた。

しかし佐野一族の喜びを遮る様に

「ところで昌綱殿よ．．」

輝虎役の千坂が昌綱に声をかけた。

「次はこのような軽はずみな行為は許さんぞ．．」

厳しい口調で昌綱に言った。

「ハイ！もちろんでございます！」

昌綱は軽い口調で嬉しげに言った。

「では．．保証人を何人が連れて帰るか．．」

千坂は人質を取ると言い出したのである。

「え．．．！」

昌綱も少し言葉をにこらせてしまった。

しかし

「私が輝虎様と越後に下ります。越後から佐野家と唐沢山城の関東  
管領様の忠節を見届けて参ります．．これも何かのご縁！」

別の若い姫君が堂々と返したのである。

「私たちも輝虎様にお供いたします！」  
彼女の女中も素早く返してきた。

伊勢姫役の輝虎は彼女たちに感心したのか思わず軽く笑顔が出てしまった。

逆に千坂や越後衆は相変わらず厳しい顔のまま様子を見ていた。

昌綱はなぜか大人しくなっていた。

しかし

「・・・待て・・・」

突然本庄繁長が割って入って来た。

繁長は武勇の男である。若手だが武者として威厳や迫力があつた。

繁長の一言で佐野一族は急に緊張から静かになってしまった。

「男手の方が役に立つ・・・さっきの童が気に入ったな・・・」

とさっきの童を指名したのである。

千坂も軽くうなずいた。

伊勢姫の輝虎は少し予想外できよんとしていた。

「小僧・・・」

繁長は童に言った。

「名前は？」

「・・・エ・・・えと・・・」

童は辺りを一瞬見た。違う女中をちらりと見たのである。

佐野一族に明らかに緊張が走っていた。

「虎房丸とらふまゐるでございます！私がこの子の母です！」

童の傍の先ほどの奥方が慌てて入ってきた。

しかし子供は正直である。

童は思わず驚きの表情を出してしまっていた。

繁長の鋭い視線が奥方に刺さっていた。

うそを見破った時の目である。

奥方も必死の顔であつた。

「奥方・・・少しお静かにして頂きたく・・・」

繁長が冷徹に言った。奥方も繁長の迫力に黙るしかなかった。

「小僧・・・名前は・・・？」

繁長が再度童に聞いた。

「え・・・エト・・・と・・・とらふじまるです！」

童も必死に答えた。

しかし子供はやはり正直であった。

「・・・本名を知りたいものだな・・・奥方様・・・とらふさ・・・いや、とらふじまる様・・・昌綱殿・・・」

繁長が問い詰めるように言った。

「お侍様・・・この子は虎房丸と申します・・・虎房丸と・・・」

奥方が声を振り絞るように下を向きながら言った。

「う・・・うっ・・・う・・・」

怖くなってきたのか先ほどの童が本当に泣き始めてしまった。

昌綱の顔は明らかに青ざめていた。

「もう・・・良い・・・」

本物の輝虎の伊勢姫が再度挟んできた。

「・・・大事な人質が本物かどうかは 調べる必要がありますな・・・！」

繁長が厳しい口調で輝虎に返した。

「佐野の殿様の前で至極無礼承知で言わせてもらっが・・・偽者を掴まされて心変わりされたらたまらんからな！」

北条高広も入ってきた。

しかし

「本物かどうかは構わぬ・・・お家の為のその気持ち・・・買おうではないか・・・」

輝虎が落ち着いた口調で言った。

「・・・しかし・・・！」

繁長が不満を言おうとしたが

「ところで・・・虎房丸・・・？」

輝虎が繁長を遮るように優しく童に声をかけた。

「越後に世話をしてくれる女中さんと一緒に帰ろうか・・・？」

輝虎は言った。

童は涙を拭きながらうなずいた。

すると先ほど童が向いた方から

「・・・恐れ入りますが・・・私もお供をさせてください・・・」

別の女中が越後行きに名乗りを上げたのである。

心なしかこの童と雰囲気が似ており童も一瞬笑顔を見せたように見えた。

童の傍の奥方も何かほっと安心したように見えた。

「・・・昌綱殿・・・」

輝虎は昌綱に声をかけた。

「・・・この者達を昌綱殿の忠節の形見として越後に連れて帰ります  
が宜しいですね？」

伊勢姫役の輝虎が昌綱に聞いた。

「は・・・はっ！異聞ありません！」

昌綱も再度嬉しそうに了承した。

「お待ちを！」

突然長尾藤景が声をあげた。

「このような時に物言いはしたくないが、阿虎様、ご再考を！千坂  
殿ではないが仏の顔も三度までですぞ！」

藤景も厳しい態度で臨むように言ったのである。

「そうですね・・・確かに・・・昌綱殿の茶番は何度も見たくありません  
んな・・・」

本庄実乃も同意した。

越後諸将の間で意見の違いからくる緊張が走りつつあった。

しかし

「そうか？ワシは楽しませてもらったぞ。ならワシがここで昌綱殿  
の相手をしてようか？」

色部勝長が場を読んで入ってきたのである。

そして自ら唐沢山城への駐屯を申し出てきたのである。

「ありがたき幸せ！越後の猛将に居て頂けるとは！」

昌綱も直ぐに同意した。

「色部が居てくれれば心強い・・・頼む・・・」

輝虎もこれに同意した。

この予想外の展開にさすがの繁長、藤景、高広たちも振り上げた拳を下すしかなかったのである。

こうして昌綱は虎房丸を人質として差し出すことと色部勝長に唐沢山城に駐屯させることで今回は許されたのである。

「・・・それにしても女子供の涙にひっかかるとは・・・」

繁長も陣の外に出ると溜まっていた何かを吐き捨てるように言った。

「・・・とにかく甘い・・・甘いわ・・・全く・・・」

藤景も不満を露にしていた。

「茶番を見るだけならまだしも このままじゃあこっちが茶番を

演じるかもしれんぞ・・・」

高広も溜息交じりで言った。

一部の越後衆は目論見が外れて拍子抜けし同時に再度不満が鬱積されていったのである。

輝虎は唐沢山城を攻略後、一旦越後に戻っていたが初冬の11月に突然岩槻城の太田資正が春日山城まで遠路はるばるやってきたのである。

資正はひどく肩を落としていた。

居城の岩槻城がなんと北条方に奪われるという事態が起きたのである。

しかも奪ったのは意外にも資正の長男の氏資であった。



氏資はいつの間にか氏康と好よしみを通じ、資正が宇都宮に所要で外出していたわずかな隙を狙って岩槻城を奪い取ったのだと言う。

氏康は難なく岩槻城を手に入れ、資正は輝虎を頼りに越後に下ってきたのである。

「息子に騙されて追い出されるとは・・・情け無い・・・」

資正は越後方はもちろん北条方でも名将と名高い男であつたがさすがに今回は息子に裏切られ居城を奪われたことは堪えたらしくひどく落ち込んでいた。

「資正殿・・・雪が溶けたら岩槻城の奪取に関東に一緒に行きましょう・・・それまでは越後でゆつくりされてください・・・」

輝虎は資正を慰めた。

「ありがたきお言葉・・・しかし息子をこんな親不孝に育ててしまつたとは我ながら情け無い・・・捕らえた折には首を刎ねて輝虎様の前で親不孝者の顔を拝ませましょう・・・」

資正は少しくずりながら言った。

「お気持ちは察しますが・・・親子の縁は大事に・・・御冷静に・・・」  
輝虎がとがめた

「いや・・・戦国の世の掟・・・親子でも敵は敵　心を鬼にせねばならぬときもありますよ・・・」

資正が自分に言い聞かせるように言った。

「しかし　武田親子の茶番をまさかワシが演じる羽目になるとは・・・情け無い・・・」

資正は溜息をつくときと差し出された熱燭を一気に飲んで鼻をすすつた。輝虎は太田資正を見ながら信玄が若い頃実の父親を追い出し国を奪つたと言う話を思い出していた。

実の親子でもこのような関係になつてしまうものだろうか色々考えてみたが実子のいない自分にはわからないような気もした。

この年も色々あつたがその次の年は更なる様々な出来事が輝虎に立ち塞がるのである。

## 乱世

輝虎の周りはいよいよ騒がしくなっていた。

春日山城での評定では今後の方針が話し合われたが輝虎と越後衆の話は噛み合っていなかった。

飛騨国では第5次川中島の戦い、塩崎の戦いの前哨戦となっていた輝虎寄りの姉小路（三木）良頼と信玄寄りの江馬時盛の争いは結局収まらず、輝虎が唐沢山城で佐野昌綱の茶番の相手をしている隙に信玄は飯富昌景を飛騨に派遣し、良頼を屈服させたのである。

良頼は時盛に領土の一部を割譲させられた上、信玄の配下に組み込まれてしまい、飛騨は名目上は信玄の支配下に入ったのである。

良頼は辛くも信玄から一族追放などの厳罰はなんとか免れ、存続することはできたが信玄の越中北陸方面への道を開き、越後は越中方面からも信玄の干渉を許すことになった。

北陸の越中には以前より常に輝虎に反抗的で信玄を頼るころるさい神保長織が健在で輝虎は越中方面も気かけねばならなくなったのである。

関東と信濃方面で手一杯の現状に対して新たに北陸方面までも対応するのは負担が大きく越後衆の不満と心配の種になっていた。

ただ

「関東、信濃、北陸の三方面は同時に相手が出来ない・・・」  
との越後衆からの申し出も

「春日山城留守役の河田長親や山本寺一族が今までも良く守っており大丈夫・・・」

と輝虎は表向き気にしていない素振りをしていた。

北陸方面の神保対策は現状の戦力で維持し、飛騨、更にはその奥の加賀の本願寺の動きは朝倉との連携で対応しようとしたのである。

一方昌綱の人質とし連れ帰った虎房丸たちも越後衆の不満の種であった。

本庄繁長の指摘通り、やはり彼らが佐野一族ではなかったのである。佐野家とは関係の無い人間を人質として連れ帰ってしまった訳であったが輝虎は澄ましたものであった。

「色部勝長が佐野昌綱を監視しているし、こちらでも妙案を用意しているので大丈夫・・・」  
とこちらも気にも留めていない振りをしたのである。

関東は唐沢山城城代佐野昌綱の監視の色部勝長と厩橋城の北条高広、箕輪城の長野業盛、上野国人衆の連携で対応し、今後は関宿城の築田晴助と常陸の佐竹義昭たちとまずは太田資正の岩槻城を奪回し、その勢いで安房の里見義堯を救援し、最後に再度武蔵松山城を攻略するという凶案を考えていたのである。

輝虎が一番実は気になっていたのはやはり武田信玄であった。

が、信玄も西に目が向き、氏康への遠慮もあるので関東には来ないであろうと予想したのである。

ただ信玄の西上野への動きが本気なのか氏康の誘いに応じての牽制なのかは正直掴みかねていた。

西上野に信玄が興味を持つのは川中島を守るためである。川中島の防衛のため西上野の支城を治め、越後を牽制するのは理解できたが西上野全土までもし信玄が掌握すると、同盟相手とはいえ関東の覇者を願う氏康がそれを認めるとも思えなかったのである。

しかし武田軍の動きは奇妙であった。

箕輪城の支城が襲われ奪われたのは事実であったが、箕輪城には来ず、厩橋城と唐沢山城の中間にある倉賀野城付近まで攻め入ったりしていたが、輝虎が来ると戦わずに引き上げるなど妙な動きをして

いたのである。牽制にも見えたが単なる牽制にしては手が込んでいた。美濃方面へ軍を展開している様子も少なく甲斐に武田の本隊は張り付いたままであった。第5次川中島の戦い以後は今まで間に入っていた山本勘助が討ち死にしたこともあり、武田との交渉は完全に途絶え、武田の動向がすっかり読めなくなっていた。

信玄の件であれこれ悩んでいるうちに、年が明けて永禄8年（1565年）3月、今度は築田晴助の関宿城が氏康率いる北条軍の攻撃を受けた。第一次関宿合戦である。

永禄7年（1564年）太田資正の長男の氏資と密かに好を通じて戦わずに堅城の岩槻城を難なく手に入れ、その勢いで氏康は関東の水運の要である関宿城を奪い、武蔵国全土を手に入れ、関東の支配を磐石にしようと計画したのである。情報を聞きつけた輝虎も慌てて越後軍を率いて関東に入り、常陸の佐竹義昭と共同で救援軍を送ったのだが、上杉軍と佐竹軍が関宿城近くまで押し寄せると、氏康は何食わぬ顔で戦うことなくそのまま北条軍を小田原に撤退させていったのである。

輝虎は安堵とともに自分が信玄と氏康に振り回されていることに一種の不愉快さとなす術がない、行き詰まり感をも密かに感じていた。

関宿城からの帰り道

「全く・・・氏康のジジイ・・・少し大人しくしてるかと思っただけに口くさることせん！」

戸倉与八郎が不満げに言った。

「・・・言っただとおりだろう・・・妙なことばかり考えておるって・・・弥太郎がそれみると言わんばかりに言った。そして

「氏康の次に動くのは信玄かな・・・？」

弥太郎が続いて読むように言った。

「信玄の興味は美濃だろ？どうせまたワシらを西へ東へ走らせて疲れさせるための牽制だろう・・・」

秋山源蔵が面倒そうに言った。

「わからんな・・・本気かもしれん・・・」

弥太郎がまじめな顔で言った。

「関東の覇者を夢見る氏康だって信玄が北関東に来るのは快くないはずだが・・・」

与八郎も心配そうな顔で言った。

「うむ・・・しかし・・・もし信玄が氏康など無視して上野を押さえたら関東にいる俺達が越後へ帰るのが難しくなる・・・袋の鼠だな・・・」  
弥太郎が目を閉じ真剣な顔で言った。

「武田の本隊も甲斐に張り付いて西へ行く兆しが無いらしい・・・」  
源蔵も不安げに言った。

「もし上野だけじゃなく北関東が信玄に取られたらどうすんだ？」  
与八郎が聞いてきた。

「・・・氏康と手を組むのも手かもな・・・」

弥太郎が小さな声で言った。

「まさか・・・」

源蔵と与八郎はそれ以上何も言わなかった。

そしてそのような関東の不穏な空気の中、戦国の世を決定付けるような事件が起きたのである。

5月になると都の越後屋敷から驚くべき情報がいって来たのである。

三好長慶が前年に病死したのを見計らったように、あの松永久秀によって足利義輝が暗殺されたのである。世に言う永禄の変である。松永軍に攻め込まれた義輝は趣味で収集していた自慢の愛刀を自分の周りに何本も刺して向かってくる兵士と次々と太刀打ちを行い、

刃こぼれしたら取っ替えて戦い続けたが、最後は力尽き、討ち取られたという。

長男の輝若丸も若干13歳であったが討ち死にし、母親の慶寿院も燃え盛る花の御所の火の海に自ら飛び込んで果てるという凄まじさであった。

義輝の妻の絶姫は関白近衛前久の妹だったので辛うじて助命されたという。

「上様・・・慶寿院様・・・」

輝虎は静かに目を閉じた。

輝虎は戦国の世の恐ろしさを改めて知ったのである。

「あの老人・・・長慶殿が言った通りの男だったとは・・・」

あの老人とは輝虎が都に上洛したときに会ったあの松永久秀老人のことである。

三好長慶の

「この老人は油断がならない・・・」

という言葉を出していた。

ただの好色ないやらしい老人ではなく將軍暗殺をもためらわないとんでもない悪人であると輝虎は思ったのである。

「都に上つたら・・・真つ先に私が首をはねてやる・・・」

このような言い草をあまり普段はしない輝虎であるが今回は余程腹に据えたのかこのような言葉を出してしまった。

輝虎は上洛したときの義輝や慶寿院との楽しかった一時を思い出していた。

松永久秀老人の名は輝虎の記憶にこの後まで残されることになる。

畿内の混乱した事態を受け河内守護の畠山氏からも輝虎に対して上洛依頼が飛び込んできていた。

輝虎も再度の上洛を心に誓ってはいたが自分の周りも敵だらけでそれどころではなかったのである。

それを証明するかのような大事件が6月に再び輝虎を襲うのである。將軍義輝の死の衝撃が収まらぬうちに、厩橋城の南方の交通の要衝の倉賀野城が突然武田軍に襲われたのである。

まともな戦力が無かった倉賀野城はあっけなく落城、上野の国人の動揺も激しいものであった。輝虎にとつて大きな衝撃であった。

信玄が西上野、倉賀野城まで本気で来たのは輝虎の大きな誤算であった。

氏康に遠慮して来ないと考えていたからである。

しかし倉賀野城が落とされた代償は大きく関東に出る際、最短の三国街道が使えず、上野国北側の山沿いの細い街道を遠回りせざるをえず、また箕輪城の長野業盛が孤立してしまったのである。

更には輝虎の衝撃が冷めやらぬうちに8月になると今度は常陸の佐竹義昭が病死したとの情報が飛び込んできた。そしてその隙に小田氏治が輝虎に反旗を翻し佐竹領だった小田城を奪い返す事態までも起きていた。

「他人の不幸の際に兵を上げるなど大将の片隅にもおけぬ！」

と輝虎は激怒して小田氏治征討を早々に決めたのである。

義昭の後は、16歳の義重が継ぐことになったが、この隙を伺う氏康対策も兼ねて先手を打ち、関東へ出て早々と小田城を奪い返し、常陸方面を落ち着かせたかったのだが倉賀野城が落城したばかりで動き難いのも事実であった。

そんな矢先甲斐から思わぬ情報が入ったのである。

信玄の重臣の飯富虎昌が9月に謀反の疑いで切腹し、信玄の長男の義信も連座で幽閉させられたのだと言う。飯富は義信の後見人でもあり、今川義元の娘を妻に持つ義信は親今川派で信玄の義元の後継者の氏真に対する対応に関して不仲になっているとの情報が軒猿か

らももたらされていた。

この情報を聞いた輝虎は

「自分の息子にもそのような疑いをかけるのか・・・」

と率直に驚きの感情で軒猿の報告を聞いていたが、直ぐに信玄が父親を追い出した件と、昨年の太田資正親子の事件を思い出し、再度気が沈んだのである。

もちろん信玄義信親子に何があつたのかは輝虎にも知るすべがなかつたがこの事件のおかげで甲斐国内は動きが混乱しているとのことで輝虎もこの隙に佐竹氏への救援と小田城の奪回の為に北関東に出兵することに決めたのである。

今回喜平次も始めて初陣を飾ることになった。

こうして年が明けて永禄9年（1566年）2月、輝虎は春日山城を出陣した。

今回、長尾時宗も同伴させた。時宗は既に実は昨年の佐野攻めから参加していたが彼の弟でもあり、そして新しい越後の後継者の喜平次に対する家臣としての忠節を見せたいとの願いもあつて同伴させることにしたのである。

喜平次にとつて時宗は腹違いの兄で、父政景の側室の子であつたが喜平次が輝虎の正式な養子となつた折にも時宗は坂戸城に居続けた。  
いた。

実は上田衆が彼を密かに担ぎ出したのである。

上田衆の中にも春日山城に乗っ取られたくないという勢力が存在しそのため時宗は担ぎ出されていたのである。

輝虎や本庄実乃、直江景綱らもそのような動きは薄々感じていたが上田衆の不満を押さえ込むより多少見逃してもその活躍の方を期待したのである。

喜平次は後の景勝である。



元来より父親政景譲りの少し無口で無表情な子供であったが、そのせいか若干低めの背丈と鋭い目線と相まって不思議な威厳を感じる少年であった。

ただ政景と宇佐美定満の溺死事故以来無口になったとも密かに言われ輝虎や実母の仙桃院、祖母の虎御前も気にはしていた。

今回喜平次は初陣であったが堂々としたもので顔色一つ変えていなかった。

上田衆は

「・・・喜平次様は誠に上田衆の誇りじゃ・・・」  
と素直に喜び、仙桃院も我が子、虎御前も我が孫、輝虎も甥で養子のその様な姿に一安心していた。

しかし

「伯母上・・・」

喜平次が輝虎に申し出をしたのである。

「何か・・・？」

輝虎は甥っ子の晴れ舞台ににこやかに答えた。

「今回の小田城攻めには反対しませんが・・・小田城に攻め込む前に行くところがあるかと思えます・・・」

喜平次は14歳と思えないしっかりした口調で言った。

「・・・行く所・・・？」

輝虎は不思議そうな顔をしてしまった。

喜平次はうなずくと

「倉賀野城を先に攻め落とすべきかと思えます・・・」  
はつきりした口調で言った。

ずばり確信だったので輝虎も黙ってしまった。

「信玄の奴・・・飯富虎昌と息子の義信の件で浮き足立っていると聞きます・・・今が絶好の機会かと・・・」

喜平次の言っていることは的を得ていた。

喜平次に越後の諸將の期待に満ちた熱い視線が注がれていた。

「・・・喜平次の言っていること・・・よくわかる・・・」  
輝虎は返答した。

「しかし・・・今回 小田氏治を成敗するのは 我々の同盟者の佐竹義昭殿が亡くなった隙に兵を挙げて城を奪うという姑息な仕打ちを成敗するためである・・・信玄が親子や家臣との不仲でもめている隙に攻め込むのは大将らしくはないと思うが・・・」

輝虎が諭す様に言った。

喜平次は少し黙っていたが

「伯母上のおっしゃることとも・・・しかし信玄を叩いて上野から追い出す絶好の好機かと・・・孤軍奮闘する長野業盛を助けたいのです・・・」

喜平次は遠慮なく続けた。

越後諸將の中にも喜平次の意見にうんうんと首を密かに縦に振っている者が少し輝虎の目線にも入った。

輝虎はしばらく黙った後

「・・・喜平次の言うとおり・・・しかし 信玄は手強い・・・私も本当は倉賀野城から奴を追い出したい・・・が、そう易々と勝たせてくれる相手ではない・・・」

輝虎は本音を語った。

喜平次は少し黙ってしまった。

「・・・それに初陣は元来安全な戦から始めるもの・・・小田は丁度よい相手であろう・・・小田の後・・・勢いに乗って倉賀野城に行くのは賛成だ・・・戦には機というものがある・・・」

輝虎の本音と小田城の後、倉賀野攻めも良いとの輝虎の意見を聞いて喜平次も引き下がったのである。

関東に向かう途中、喜平次の馬の傍に長尾時宗が近づいてきた。

「阿虎様にあのように率直に言えるのはさすがですなあ・・・」  
時宗は感心して言った。

喜平次と時宗は腹違いの兄弟であったが、実は歳は一つしか違わず  
武勇者の彼と喜平次は馬が合った。喜平次の実母の仙桃院は実は  
時宗をあまり快く思っていないが喜平次にとっては、自分が輝  
虎の後継者になった場合の上田衆の統治者として喜平次は時宗を重  
要な人間として見ていたので密かに傍に置いていたのである。

「俺が心配なのは信玄を放っておいたら厩橋城を越えて坂戸城まで  
来られるのが嫌だから先手を打ちたかったただけだ・・・」  
と喜平次は正直に答えた。

「武田とは一度戦ってみたいですね・・・」

時宗は武勇者らしく目を輝かせながら言った。

「犬死にしない程度にな・・・」

喜平次も珍しく笑って返した。

「伯母上は川中島で信玄に切りつけた上、信玄の弟の信繁や信玄の  
軍師の山本勘助を討ち取り屍の山を築く大乱闘を演じたらしいから  
な・・・」

喜平次はまた冷静な顔に戻り言った。

「親父も川中島では地獄を見たらしい・・・信玄との腐れ縁もさつさ  
と終わりにしたいもんだな・・・」

喜平次は言った。

そして小さな声で

「川中島・・・関東管領・・・俺だっけいつかは・・・」

つぶやくように言った。

時宗もうんうんと大きくうなずいていた。

「・・・阿虎様にあのような言い分・・・さすがでございますな・・・」  
誰かが喜平次の傍に寄ってきた。

30過ぎの若武者であった。

「村上城の本庄繁長でございます・・・」

「噂は聞いています・・・」

喜平次は率直に答えた。

「今後もお近づきになりたく・・・」

繁長らしくない言い回しだった。

「あなたのことは伯母上から良く聞いている・・・こちらこそ宜しく頼む・・・」

喜平次は率直に言った。

「ありがたきお言葉・・・」

繁長は普段の繁長らしくなく丁重に言った。

繁長も喜平次の素性の良さに直ぐに気がついたのである。

「繁長・・・普段の口調でよい・・・気遣いは伯母上にだけで良い・・・」

喜平次の鋭い指摘に繁長も思わず苦笑いしてしまった。

しかも14歳の子の指摘にである。

「喜平次様・・・私の阿虎様に対しての振る舞い・・・よく他の者に咎められます・・・しかし私は阿虎様のやり方に不満はありますが憎しみを持ったことはありません・・・やり方を少し変えて欲しいだけなのです・・・喜平次様・・・あなたは・・・」

「・・・それ以上はもう良い　良く分かった・・・」

喜平次が繁長を止めた。

「阿虎様の理想は良い理想です・・・しかし優しげな理想が私は少し苦手なだけです・・・もう少し現実を・・・」

繁長はおそらく本音を言った。

「・・・俺も実は伯母上のあの優しげな態度が一番苦手なんだ・・・」  
喜平次も本音で返した。繁長も思わず笑ってしまった。

喜平次と本庄繁長の関係はこれ以降も長く続くことになる。

## 小田城（前書き）

　本日おかげさまで書き始めてからほぼ1年で10万PVのアクセス頂きました。ありがとうございます。これを励みに最終話まで書き上げますので御愛読頂いている皆様にはもう少しお付き合いをお願いいたします。

## 小田城

永禄9年（1566年）2月、越後軍は遠路はるばる常陸国までやって来た。

平将門がかって大暴れした、だだっ広い坂東の地を横断し、小田氏治の籠る小田城攻略に向けて輝虎は軍を着々と進めていた。

先陣の長尾藤景隊から小田軍が城から出てきて、越後軍を迎撃すべき野戦体制に入っているとの連絡が直ぐに輝虎にももたらされた。

「いい度胸だ！」

北条高広が手ぐすねを引いていた。

「少し鬱憤が溜まっておったからのう！派手にやらせてもらおうか！」

中条藤資も80手前の老人と思えぬ威勢の良い声を出した。

「敵の数は確認中！」

藤景の伝令兵が矢継ぎ早に情報をもたらす。

「喜平次は私の傍に居るように・・・時宗も・・・」

喜平次は黙ってうなずいた。時宗は前線に出たいのか少し不満そうな表情を出した。

「繁長・・・喜平次と時宗の警護を・・・」

輝虎は本庄繁長に喜平次たちの警護を命じた。

「敵の数、陣容は？」

輝虎が伝令兵に尋ねた。

「数は我が軍と同等の1万程度！ただ隊列を組むのに手こずっている模様です！陣容にはなってますせん！」

伝令兵の報告を聞くと輝虎は直ぐに命令を出した。

愛刀の姫鶴一文字を抜くと

「全軍突撃！敵は浮き足立っている！手柄を立てよ！」

大声で命令を出した。

先陣の藤景隊が真っ先に小田軍に襲い掛かった。

小田軍は地方の豪族にしてはなかなかの数を揃えていたが寄せ集めの兵士に過ぎず流石に戦い慣れた越後兵の敵ではなかった。

藤景隊の攻撃で小田軍は体制が整わないうちにばらばらになり、更には側面から回り込んできた北条高広、中条藤資の部隊にも攻撃を受け、体制を立て直す間もなくずるずると後退を始めた。

輝虎は状況を確認すると

「繁長・・喜平次、時宗の護衛任せる・・」

と一言言つと

「本隊突撃！我は毘沙門天の使い！怖れるな！」

全軍一気に小田軍への突撃を命じた。

側面、正面に動けない小田軍は真正面からの輝虎本隊の圧力にあっけなく総崩れになり小田城に向けて潰走し始めた。

野戦はあっけなく勝負がついた。

「楽な相手でしたな・・」

繁長が涼しげに言った。

輝虎の傍で輝虎の指揮をじっと無表情に見ていた初陣の喜平次もゆっくりうなずいた。

「こんな相手ばかりではない・・」

輝虎は戒めたが

「しかし・・初陣には良い戦だったかな・・」

輝虎はにこりと笑った。

小田軍は小田城に戻ると慌てて籠城の体制に入った。

しかし小田城は元々平地の防御の弱い城の上、また輝虎が攻め入る以前より何度か局地的な小競り合いの戦に巻き込まれ修理も不十分のぼろぼろの状態であった。

籠城戦の準備が不十分な小田城は越後軍に押し込まれるとあっけなく城内に越後兵の侵入を許し、氏治がどこかへ落ち延びていくと小田軍はあっさり降伏、開城したのである。

越後軍の勝利の雄叫びの中

「・・・喜平次様、初陣おめでとうございます・・・」

繁長が喜平次に声をかけてきた。

しかし喜平次は嬉しそうな表情をするまでも無く無表情なまま軽くうなずいただけであった。

喜平次は相変わらず表情を変えることなく冷静な落ち着いた表情で初陣とは思えなかった。

繁長は喜平次の堂々とした態度に関心仕切りであった。

初陣では恐怖と緊張で冷静に入られるのは通常は困難な者の方が多いのだが喜平次は恐ろしい程堂々と平然としており輝虎もそのような喜平次に関心仕切りであった。

「怖くなかったか・・・大丈夫か？」

逆に輝虎が声をかけた。

「・・・いや・・・別に・・・」

しかし喜平次は嬉しそうな表情をするまでも無く無表情なままであった。

「・・・私は昔は良く酒を飲んで怖さを紛らわしていたけど・・・」

輝虎が苦笑いしながら言った。

「・・・お気遣いありがとうございます・・・平気です・・・」

喜平次は表情を変えることなく言った。

「・・・さすが政景様の御息じゃ・・・」

上田長尾家の家老、栗田雅頼も目に少しうつすら涙を浮かべながら感慨深そうに言った。

しかし次の喜平次の一言は以外だった。

「・・・違う・・・爺・・・」

喜平次は言った。

そして無数に横渡る小田兵の遺骸や越後兵に捕らえられた捕虜を見ながら

「・・・弱い軍がいかにも惨めで儚いものか・・・死んで身包み剥がされ・・・」



・生きて物のように扱われ・・・俺も伯母上のような強い軍を作りたい・・・そう思ったただけだ・・・」

喜平次は無情感を少し漂わせながら言った。

輝虎や栗林も思わず黙ってしまった。

「・・・喜平次様・・・戦の後の方がもつと世知辛い世ですぞ・・・」

先陣の部隊長で今回大手柄を立てた長尾藤景がいつの間にか傍におり、喜平次に静かに言った。

喜平次は藤景の言っている意味がよくわからず少し不思議そうな顔をしてしまったがその理由はこの後すぐに理解できた。

輝虎も黙っているしかなかった。

小田側はかなりの犠牲者を出す完敗であったが生け捕りにされた者もかなりの数に上っていた。小田城落城の噂を聞きつけ、捕虜になった兵士の家族が連れ戻しに駆け付け、また怪しい商人たちまでもいつの間にかわらわらと集まり小田城の周囲は混沌というか騒然としていた。

小田城の中では何かの競売せうが始まったよう威勢の良い声が輝虎の元にも聞こえてきたが輝虎は聞いていない振りをした。

喜平次は事情をまだつかめていないようで少し不思議そうな顔をしていたがしばらくして

「・・・失礼しやす・・・！」

親衛隊のベテランの弥太郎が地元民と思しき一人の老人と女性を数名連れてやってきたのである。

「地元の筑波つくはの村長むらぢですわ・・・阿虎様に直談判したいと言うんで連れてまいりました！」

弥太郎は怒った口調で不愉快そうに言った。

「・・・弥太郎殿・・・勝手に下人を連れてくる癖は良くないですな・・・」

親衛隊長の千坂景親が弥太郎を咎めるように言ったが直ぐに輝虎が

千坂を止めた。

輝虎は弥太郎の言いたいことは直ぐに察した。

弥太郎や古参の越後兵は第4次川中島合戦以降、新参でやってきた金銭で雇われた兵士達とは折り合いが悪かった。特に以前の騎西城を攻め落としたときも彼らの乱暴狼藉は凄まじく、このような行為を嫌う弥太郎ら古参の越後兵と危うく喧嘩から同士討ちを起こす寸前まで仲違いが深刻化していたのである。

そのため輝虎は以後は乱暴狼藉は禁止したが奪った物資や捕虜の売買は暗に認めていた。

輝虎も信玄がこのような行為に熱をあげていると言う話を聞き、真似したくないとの思いからこのような行為には内心は賛同はしていなかった。

しかし兵士の不満抜きという面での重要性は充分認識していた。

輝虎があれこれ考えているうちに

「このたびはご面会ありがとうございます。」

70過ぎの老人の村長は曲がった腰のまま輝虎の前に出ると

「ワシらの息子や女子衆の夫や子供が競売せうにかけられております・・・

ワシらは関東管領様に忠節を誓います・・・どうぞ・・・善処を・・・お助け願います・・・」

深々と頭を下げた。

「関東管領様！お助けくださいませ！」

付き添いに来た女子衆も声を出して半泣きで頼んできた。

輝虎は黙ってしまった。喜平次は事情をようやく掴み、鋭い目線を村長たちと時折輝虎にも向けていた。

しばらくすると

「失礼！」

どこぞかの部隊の小官が突然やってきた。

「上官達が誰の許可得て売買していると怒っているので押印頂きたく！」

金で雇われた外様の小官はぶつきらばうに声を上げると輝虎に今回の人身売買の許可を正式に求めてきたのである。

「誰が文句を言っている？」

輝虎が聞いた。

「御館様の親衛隊の重鎮の秋山源蔵殿と戸倉与八郎殿です！」

小官は相変わらずぶつきらばうに嫌味っぽく答えた。

輝虎は弥太郎をちらりと見た。弥太郎も相変わらず不愉快そうであった。

輝虎はしばらく黙った後

「・・・わかった・・・」

と一言言つと捕虜の売買の許可証に押印を押したのである。

しかし横に何か一筆書き加えた。

小官は嬉しそうな顔をして許可証を受け取ると横目で弥太郎や村長たちを見くびつたような目で見ながら部屋を出て行った。

村長は

「そんな・・・関東管領様・・・殺生な・・・」

と声にならない声を出し

「関東管領様・・・」

女子衆も悲しみの声をあげた。

「阿虎様！お待ちを！ご再考を！」

珍しく弥太郎が輝虎に食つて掛かつてきた。

しかし輝虎の答えは意外であつた。

「心配無用・・・家族は返す・・・弥太郎も落ち着いて・・・」

涼しい顔で返したのである。

「・・・??？」

弥太郎や村長や女子衆は思わず不思議な顔をしてしまった。

しばらくして外が騒然となり、競売せりが止まったようであつた。そしてしばらくすると先程の小官が慌てて血相を変えて舞い戻つてきた

のである。彼の付き添いも数名やってきた。

「御館様！この一筆はあんまりでございます！」

彼は大声で抗議した。

「私はそなたの願い通り捕虜の売買は禁止していないぞ・・・」

輝虎は涼しげに答えた。

「確かに・・・！しかしこれでは商売になりません！ご再考を！」

小官は一筆を指差しながら言った。

輝虎の付け加えた一筆には捕虜の価格の上限が決められていたのである。

上限額は当時の兵士の日当程度の金額しか許可しなかったのである。

当然上限が日当程度なので捕虜の家族も容易に家族を取り戻せた。

村長や女子衆の表情が見る見る和らいだ。

しかし小官や商人たちは収まらず、小官が連れて来た怪しい商人も

「関東管領様！これでは越後兵の頑張りが報われません！むしろも

わざわざここまで越後兵の皆様を盛り上げるために来たのに・・・」

必死に抗議したが

「私は奴隷商人を呼んだ記憶はないが・・・城内へ入る許可も出して

いないぞ・・・」

輝虎はさらりと返した。

「・・・しかし・・・！」

まごつく商人に

「・・・捕虜を解放した兵士には私から褒美を取らせる・・・それで良

いであるう・・・？」

他にそなたたちが何かすることがあるかな？」

輝虎は畳み掛けたのである。

小官はしばらく黙っていたが

「・・・わかりやした・・・」

と言うと渋々納得して部隊に戻り

「・・・むしろ今回のご縁がなかったようで・・・退散させていただきますわ・・・」

商人たちも諦めて小田城を去っていったのである。

「関東管領様！ありがとうございます！」

こうして村長たち地元の衆は捕虜になった家族を取り戻すことができたのである。

しかし輝虎も軍の補強は怠らなかった。

千坂に命じて屈強そうな男は越後兵として再度金で雇用したのである。

輝虎の心は次の作戦に向いていたのである。

喜平次も輝虎のこの采配を顔には出さなかったが感心して見ていたのである。

しかし輝虎のこの情緒感丸出しの采配にはやはりどこか引つかかるのも否めずこの輝虎に対する喜平次の感情の解決は、喜平次成人後更に先の話になる。

一方兵士達も今回の件でひそひそと噂話をしていた。

「・・・輝虎様はどうしていつもこうなんだろ・・・」

「捕虜を高額で売った信玄の真似はしたくないらしい・・・」

「少し浮き世な方だからな・・・」

「ま・・・贅沢も言っておれんか・・・褒美金はもらえたことだし」

「・・・ところでこの金、何処から湧いてるんだ・・・？」

「日本海の貨物運送船からの税金と青芋っていう衣料品の材料の売上税からだろ？」

「何でも日本中戦だらけなんで物資不足で儲かって仕方ないらしい・・・」

「そつえば輝虎様の普段着てる物って明や舶来からの高級な物が多いらしいからな・・・」

「金があるから領土に興味がないのか・・・」

「・・・しかし部下のお偉いさんはそうもいかんだろうよ・・・」

「・・・お偉いさんの表情がいつも冴えないのはそのせいか・・・」

「ところで・・・この後は何処に行くんだ？」

「上総方面の北条側の城を落とす気らしい・・・」

「ま！また一稼ぎしようかのう！」

今回の戦いは色々あったがそれでも大勝利に終わり、兵士達や越後衆にとっては精神的にも物質的にも良い戦であった。

そのとき誰も、この後の戦で予想外の展開になるなど夢にも思わず、勝利に気を良くしていたのである。

## 油断大敵

小田氏治から奪い返した小田城を佐竹義重への手土産にして、北関東の小山氏、宇都宮氏の輝虎陣営への恭順を再度確認し、北関東の不穏な空気を払拭すると、輝虎は兵力を補充し1万5千の大兵力で勢いに乗り、安房の里見義堯、義弘親子を脅かし続ける北条氏康側の上総国の臼井城に軍を進めた。

臼井城を落とし、その勢いで一気に倉賀野城に押し入ろうと考えたのである。

今回の関東遠征は常陸国、上総国を北条氏康の圧力から開放し、北関東東北方面の結城、小山、宇都宮氏を輝虎側に落ち着かせ、更には上総国の臼井城をも落とし、安房の里見親子を援護、勢力を回復させ、逆に氏康を越後、常陸、安房の三方向から取り囲み、氏康を動けないようにして、信玄に奪われた倉賀野城を奪い更には西上野から信玄を追い払おうとする大作戦の一環であった。押されている上野国、武蔵国の状況を一気に逆転し、今後、信玄、氏康と憂いなく戦うための重要な遠征であった。

臼井城を守るのは原胤貞と言う地元の輝虎や越後衆があまり知らない武将であった。

ただ用心深い男のようで臼井入道浄三と言う都出身の軍師を今回雇っていると言う情報が偵察に出た軒猿からもたらされた。

入道は三好三人衆に仕えていた男だという。

三好三人衆、三好長免、政康、友通は三好長慶の一族で長慶存命中は大人しく長慶に従っていたが長慶の死後は松永久秀と組み、事もあろうに久秀の指示とはいえ、將軍義輝を襲い、殺害する昨年の永祿の変に携わっていた。

しかし、三好三人衆はその後久秀と仲違いし、久秀と争うようになり、臼井入道浄三は彼らに愛想を尽かして都を出て原胤貞に雇われ

るようになったのだという。

三好三人衆の名前を聞いて輝虎はあの憎らしい松永久秀老人を思い出していた。

「絶好の好機・・・」

輝虎は静かに険しい顔で言った。

他の者は輝虎が何を言っているのか一瞬理解できなつたが直ぐに察した。

「上様に手をかけた久秀や三好三人衆の軍師なら、首を取って上様の墓前に供えれば上様も喜ばれるであらう・・・」

輝虎は厳しい口調で言った。

義輝を殺した三好三人衆の軍師なら良い仇討ちになり、関東管領としての責務や都での越後の評判上げにつながり、義輝の後継者は実はまだ決まっていなかったが、再度関東管領の任務をも承り、引き続き関東攻略を行おうとしたのである。

家臣団も小田城を奪い返したことによる安堵感から

「・・・安房の里見親子と我らで北条を押し切れれば関東はだいぶ楽になりますな・・・」

と今回の作戦には賛成であった。

永禄7年（1564年）正月の第二次国府台の戦いで里見義堯、義弘親子は氏康に大敗し消沈していたが今回は越後軍の小田城の大勝利の知らせを聞き、再度盛り返し、その梅雨払いと輝虎の案に乗り越後軍に援軍を出す連絡をも輝虎に届けていた。

輝虎の懸念は氏康であった。

里見親子の動きを見て氏康も小田原から出るそぶりを見せていると言ふ。

「氏康が来るまでが勝負・・・」

輝虎は決意を表すように臼井城の方角の空を見ながら言った。

「今度こそ関東を・・・！」

輝虎は独り言を静かに言った。



3月に臼井城近くに越後軍は到着すると輝虎は臼井城から少し離れた場所に簡易な城風の砦を作った。

表向きは春の気変わりな天気に見えるためであったが、予想外に早く到着したため毎月10日前後に訪れる体調不調の時と重なったため体を少し休めるためである。

北条軍が臼井城に援護に来た場合背後を突かれ、補給や退路が絶たれる可能性もあったので長期戦をするつもりは無かったが、長期布陣する振りをして相手の戦意を削ぐ振りもあった。

直ぐには攻めて来ないであろうと臼井城兵を油断させるためでもあった。

この砦の名前は王子台砦と言われているが、わずか一日で出来たため後に謙信一夜城と呼ばれるようになる。

臼井城の守備兵はある日、目の前に簡易な砦が出来ていたので驚き、また長期戦になるのではと少し気落ちしていたが、逆に気長にのんびり構えることにしたのである。

が、そのような兵士達を一喝する男が臼井城内に一人いた。

「・・・何をのんびりしておる！越後兵はすぐ来るぞ！」

臼井入道浄三は大声を上げていた。

「何でえ・・・目の前に連中は砦を作ってまっせ！」

臼井城の城兵は不満そうに言った。

「ワシら油断させるためじゃ！それに輝虎が砦を構えるなどワシらを強敵として認めている証！存分に戦おうではないか！」

臼井城兵士は都から来たと言うこの怪しい僧の法衣のような衣装の上に派手な甲冑をまとった坊主頭の初老の年齢不詳の軍師の発言をいぶかしい顔で聞いていた。

が、臼井城の城兵は本音では越後兵が押し寄せて来たら降伏しようと考えていた。

小田城の惨状の話が彼らにも伝わっていたからである。

臼井城の守備兵の数もわずかに2000足らずと劣勢は明確で、小

田城の件と言い、越後兵の強さは承知していたからである。臼井城自体も背後は印旛沼で前面は堀を巡らした攻め難い城ではあったが難攻不落とは程遠い城であった。当時の兵士とて命は惜しいので負けが確実な戦では余程無理をしないのが常識であった。

輝虎を含めた越後衆も今回の攻略は楽な戦と見ていた。事実、越後軍側の上野国人の長尾当長も

「すぐに落ちるであろう・・・」  
と言った内容の手紙を残している。

入道に対して不満そうな顔をする臼井城の兵士を見ながら  
「ところでおぬしたち・・・」  
入道は急に静かな口調で声をかけた。

「輝虎はワシやおぬしたちを許すつもりはないぞ・・・」  
怪しい笑顔を浮かべながら入道は言った。  
城兵は怪訝そうな顔をした。

「何でですか？」  
彼らは思わず声をあげた。  
入道はにやりと笑うと

「ワシは都であるの松永久秀や三好三人衆と足利將軍家を襲った。ワシは久秀の命令どおりにやっただけじゃがおかげでワシは都を追われお尋ね者じゃ。輝虎は將軍義輝と親密だったんで義輝を討ったワシらのクビを狙っている。ワシに加担したおぬしらも同罪じゃ。覚悟せい！」

怪しさをむんむん醸し出しながら黄色い歯を見せながら不敵に笑っていた。

「・・・そんなあ・・・」  
兵士は思わず声を出した。

「生き残りたければ・・・まずは勝つことじゃ！氏康様も来る！暴れ

姫を追い払うんじゃ！」

入道は大声で発奮するよう命じたが

「都から来た疫病神じゃ・・・ええ迷惑じゃ・・・」  
と兵士達は逆に入道を迷惑に捉えていた。

一週間ほどしてようやく臼井城の城兵に越後軍が動き出しこちらに向かっているとの情報が入って来た。

先陣は太田資正、本庄繁長の二人であった。

「城外で討つてでるぞい！」

入道は声をあげた。

それを聞いた臼井城の兵士の小隊長、信之助は

「冗談でしょう！本庄繁長は越後でも猛将として名高い男ですぞ！  
太田資正だって氏康様も一目置いてる奴でしょうが！籠城が普通です！」

と思わず反論した。

「阿呆！」

入道は関西弁で怒鳴った。

馬鹿といわれるのに慣れている関東衆も阿呆には抵抗があった。

（阿呆はそつちだろうが！）

と信之助は思わず反論しそうになったが

「向こうもまさか我々が出てくるとは思うまい！出て迎え撃てば向  
こうも驚いて引くはずじゃ！」

と何とも最もらしく入道は言った。

不満そうな信之助や城兵に対して城主の原は小声で言った。

「入道の言う通りにしろ・・・」

「知りませんよ！」

信之助達は半分やけになりながら入道と一緒に城外に出陣した。

繁長と資正の部隊は臼井城の周囲に到着すると臼井城を包囲し、部隊の展開準備をしていた。

ところがその最中に城門が開き、臼井城の兵士がなだれをうって出てきて、襲い掛かってきたのである。

「太田資正の墓も用意しろ！」

入道は大声で太田資正に聞こえるように言った。

ここは資正のおじにあたる太田資忠戦死の地である。資忠の墓が事実、すぐ傍にあった。

資正は少しムツとした。

「將軍殺しの都落ちの男など討ち取ってしまえ！」

資正も反論した。

「ありがたき褒め言葉！」

入道も歡喜の声を上げると自ら指揮を取り臼井城の城外で越後軍と臼井城兵とが交戦状態に入ったのである。

越後軍は数では優位であったが地形の状況が解らず、また臼井城兵は信之助を初め、地元の地の利に詳しい者が多く、ちょこまか動き回られて劣勢であった。

しかも足場が悪くぼつぼつと雨が降る悪天候であった。

更には夕刻には雨が本格的に降り始め足場が更に悪くなって来たため越後軍は一度本陣に撤退していった。

越後軍が一旦引いたことに臼井城主の原胤貞や城兵、今回指揮を取った信之助はほつと安堵し、和睦の機会を含めた次の一手を考えていたが、それとは逆に入道は越後軍を追い払ったことに一人興奮し喜び勇み、臼井城兵を不安にさせていた。

また輝虎も越後軍が悪天候のためとは言え撤退したことに少し不満を覚えていた。

しかし翌日、雨が上がり、日が昇り地面が乾いてくると越後軍は再度臼井城に押し寄せてきたのである。

臼井城兵の不安は的中したが入道は一人喜び勇んでいた。

臼井城は越後側の激しい攻撃で外側の城郭を破壊され、第一郭まで

追い込まれていた。

が、最後の最後、臼井城守備側の必死の抵抗で越後軍も思わぬ苦戦を強いられていた。

「手こずっているようだな・・・」

輝虎は少し慚然とした表情で言った。

「申し訳ありません・・・今しばしお時間を・・・」

新発田重家が自嘲気味に言った。

「氏康が軍を差し向けているらしい・・・里見軍も援軍到着が遅れているようだが・・・大事になる前に早急に決めたい・・・」

輝虎は少し悩んだが將軍殺しの男の軍師相手に引く戦いは出来なかった。

「兵力は圧倒的にこちらが上である！総攻撃！」

思い切って命令を出したが

「お待ちください！臼井城の防御はまだ固いままです！徐々に壊しながらにしないと味方の損害が大きくなります！ご再考を！」

長尾藤景が反対の意見を出したが

「上様殺しの都落ちの軍師ごときの城を恐れるに足らず！こっちの方が兵力は上！攻撃！」

輝虎は藤景の物言いを押し切り力攻めを命じたのである。

臼井城も必死であった。

城主の原や信之助を始めとする兵士は皆、前日の作戦で越後側を本気にさせてしまったことに少し後悔していたが

「もうちよいじゃ・・・もうちよい・・・！何とかもたせうい！」

そんな味方の心中を全く察せず、入道は大声とも奇声とも言わん声をあげ張り切っていた。

「みんな頑張れ！北条軍が来てくれるぞ！」

信之助も覚悟を決めたのか味方の兵士を必死に励ましながら、部下には入道の命令通りの指示を伝えていた。

妙な命令で臼井城の壁に壊しやすいうように切れ目を入れ、傍に木槌

を置き、入道の命令が出たら入道の真似をしるとの命令であった。信之助や臼井城の城兵は入道が何を考えているのか解らなかったが、皆、入道の事など興味がなかったし、城主の原も入道の指示に従えと命令したので機械的に従っていただけであった。

越後軍も今回は難儀していた。

臼井城の予想外の抵抗と思ったより攻め難い地形に手をこまねいていたのである。

負傷者や犠牲者の報告ばかりが増え、輝虎も珍しく少し苛立っていた。

そんな停滞状況の中

「後方から北条軍！」

見張りが血相を変えて飛び込んできたのである。

「！！！」

輝虎は驚きで思わず顔が引きつってしまった。

予想外に早く北条軍が来たのである。

しかしこの報告は実は間違いで氏康本隊ではなく、臼井城の近くの大和田砦にいた松田康郷がやってきたのである。

見張りが北条軍本隊と勘違いし臼井城と挟まれたと思い慌ててしまったのである。

しかし輝虎は直ぐに冷静さを取り戻し

「こちらのほうが数は多い！落ち着け！臼井城に集中せよ！」

臼井城攻略に相変わらず本隊は集中させ

「（臼井城攻撃の交代部隊の）繁長、中条は北条軍の牽制に！高広、藤景、新発田、資正隊は引き続き臼井城攻略を！」

輝虎はすぐに命令を出した。

越後兵の多くはなんとか臼井城の最後の一枚の城壁まで辿り着き、乗り越え城内に入ろうとしていた。もう一押しであった。

臼井城はもう限界であったが越後軍後方で援軍と思われる北条軍と小競り合いが起きているのを確認すると歓喜の声をあげ、最後の底

力の粘りを見せていた。

「南無阿弥陀仏！」

入道も喜びながら一言念仏を唱えると

「良く今まで持った！みなようがんばった！反撃や！」

入道が木槌を思いつきり壁に叩きつけると壁は轟音とともに崩れ外にいた越後兵に倒れ掛かっていった。

入道の真似をして臼井城の兵士は城壁を次々と木槌で叩くと城壁は轟音と共に崩れ落ち、城壁に取り付いていた越後兵は次々と下敷きになっていった。下敷きになるのを免れた者は城壁の破片と一緒に堀の下に破片ごと崩れ落ちていった。

入道の考案した奇策であった。

思わぬ奇策に越後兵の多くが巻き込まれ負傷し前線は完全に崩れてしまった。

「・・・何！」

輝虎もあまりの奇策に思わず声を裏返してしまった。

負傷者続出の為、越後軍は臼井城の攻略どころか、ずるずると後退を始めた。数ではまだ決して劣っていないが奇策に驚きみな浮き足立ってしまったのである。

援軍の松田康郷の部隊も本庄繁長、中条資隊と互角以上の大奮戦をしていた。

しかし

「負傷兵は後退させよ・・・見よ！臼井城は丸腰だ！押し込むぞ！」

輝虎は状況を判断し命令を出す

「本隊突撃準備！」

自ら先頭に出て臼井城に押し入ろうとしたが、その矢先

「大将はどこぞ！」

輝虎の近くで大声が上がると輝虎のすぐ傍で親衛隊と大乱戦が突然始まったのである。

「信玄の部隊だ！」

親衛隊の誰かが驚きの大声を上げた。

赤い甲冑を着込んだ武者が鬼神のように大暴れし、輝虎の親衛隊に襲い掛かってきたので赤揃え、信玄の部隊と越後側が勘違いしたのである。

もちろん北条軍に信玄の部隊など居るはずなどないのだが、武田軍を髣髴させる赤い武者の部隊が輝虎目掛けて繁長、中条隊を突破して押しかけて来たのである。

「赤鬼松田康郷見参！ 輝虎いざ勝負！」

大将の松田康郷自ら驚くことに大立ち回りをし、越後軍の親衛隊と乱戦になっていた。

輝虎も一瞬信玄の部隊と勘違いし、驚きで思わずあっけに取られてしまったが

「下郎！俺が相手だ！」

長尾時宗が立ちほだかろうとし

「上田衆！魚鱗を追い散らかせ！」

普段は静かで冷静な喜平次が血相を変えて輝虎に代わって大声で檄を飛ばし、輝虎はようやく我に帰ったのである。

しかし本隊の騒ぎに驚いた臼井城攻撃隊の長尾藤景、北条高広、新発田重家、太田資正らが慌てて本隊援護に戻ったため臼井城側との形成は完全に逆転していた。

しかも臼井城の兵士も城から出てきて越後軍に攻め込んできたため越後軍は松田軍と完全に挟まれ、狭い場所に越後軍の大軍や負傷者も集まっていたため大混乱に陥っていた。

「王子台砦まで・・・こ・・・後退・・・！」

輝虎は慌てて命令を出した。

越後軍がずるずると後退を始めると

「ようし！追え！追いまくれ！」

入道は興奮気味に命令を出した。臼井城の城兵はみな外に出て越後兵に襲い掛かっていた。

「押せ！押しまくれ！」

松田康郷も味方に檄を飛ばした。



入道、松田軍は後退する越後兵に猛攻撃を加え、越後軍は堪らず王子台砦をも放棄し、上総国の外に退散していったのである。越後軍は最後は北条高広、新発田重家が殿しんがりを務めて何とか抑えてようやく退散する散々の戦であった。

里見軍も援軍を向かわせていたが、越後軍敗退の知らせを聞いて居城の久留里城に後退して行った。

越後軍は築田晴介の関宿城まで一旦後退したのである

関宿城への撤退途中、越後側はみなうなだれていた。

一度、北条軍と生野山の合戦での敗戦経験はあったが輝虎自身が指揮しての敗退は初めてだったからである。

しかも喜平次たちの前での屈辱的な敗戦であった。

死傷者は数千人に昇り親衛隊の弥太郎や時宗も今回は深手を負っていた。

「二人とも・・・大丈夫か・・・？」

輝虎は思わず声をかけてしまった。

「・・・がはは・・・こんな傷　大したことありませんで・・・イタタ・・・」

弥太郎が傷口を押さえる布に包まれながら豪快に言った。

「阿虎様の前で無様な姿・・・すみません・・・」

時宗も傷口を抑えながら言った。

「・・・いや・・・生きてて何より・・・」

不幸中の幸いは喜平次や自分が無傷で済んだくらいである。

しかし尾を引く敗戦であることは輝虎も容易に想像がついた。

「それにしても・・・私としたことが・・・油断した・・・慢心だ・・・」  
輝虎も肩を落とした。

「上様を殺した軍師相手に・・・目がくらんだ・・・」  
そして

「・・・こんな時もある・・・」

喜平次に力なく言った。

臼井城の戦いは北条軍の勝利に終わった。

臼井城を守った入道の軍功は評価されたが、越後兵を深追いしすぎたため北条側の被害も実は甚大であった。

臼井城は守ったものの、ほとんど全壊状態で、臼井城の兵士も信之助を筆頭に多数が失われた。

そのため氏康ら北条軍首脳は入道を評価しながらも直接の指揮は今は取らせないことにした。

味方の被害も大きすぎて入道の戦法をどうかしていると思ったのである。

この戦いの結末は後に色々な意味で輝虎にとっても氏康にとっても里見親子にとっても大きな転換点になるのである。

## 混沌

越後軍が白井城攻略戦で大敗したとの知らせを聞き、唐沢山城の佐野昌綱監視のために駐留していた色部勝長や春日山城の留守役の金津新兵衛、河田長親らが慌てて輝虎の元に駆けつけ、彼らの護衛で輝虎たち越後軍一行はようやく関東の本拠地の厩橋城まで後退した。

多数の死傷者を出し緊急に越後軍の建て直しが計られたが、関東での北条陣営の勢力拡大、上杉陣営の勢力後退により日和見で移り気な関東諸将の態度の変化で兵力の補充も難航が予想された。兵力の不足は今後の越後軍の作戦に重大な支障が出るのは明白で上杉陣営の更なる後退を予感させていた。

輝虎は越後国内での不安や不満感を抑え、兵力を補充するために一旦4月に越後に帰国した。

そして5月頃に輝虎は神社に祈願文を奉納しているがその内容は分国、越後、上野、下野、安房と拠点の佐野城、沼田城、厩橋城の無事を祈願するものであった。

輝虎も関東前線がもはや危機的状況であることを認めざるを得なかったのである。

しかし輝虎の白井城での敗戦で、輝虎の悪い予感通り、関東の諸将は再度北条氏康になびき始めたのである。

そのため輝虎は北条、武田連合に対して劣勢な形勢の逆転と、白井城での敗戦の影響を断ち切るため、厩橋城の南方で、信玄に内応する高崎城（和田城）の和田業繁を攻めることにしたのである。

輝虎は新たに越後国内や金でかき集めた兵力を引き連れて、夏に再度関東に舞い戻り、高崎城攻略のため越後軍を南進させたのである。

ただ臼井城での敗戦の影響は大きく、兵力の補充は充分ではなく高崎城を落とすには明らかに劣勢な戦力であった。そのため輝虎は密かに使者を高崎城の業繁に送り、越後側に内通するよう催促をし、硬軟両方での作戦を展開したのである。

永禄9年（1566年）8月、越後軍は高崎城に到着すると周囲をぐるりと包囲した。

しかし兵力数では高崎城を落とすには十分な戦力ではなく、それを見透かしたように業繁も内通の件に関する返答はよこさず、高崎城に籠ったままであった。

越後兵の中でも度重なる戦や夏の農繁期にまで駆り出されての戦に不満の声が再度あがっていた。

普段は輝虎に口うるさい、重鎮たちも今回は妙に口が静かだった。

普段は必ず物言いをしてくる本庄繁長や長尾藤景、厩橋城主の北条高広などは特に気味悪いほど静かであった。

輝虎も彼らの自分に対する若干呆れ気味の感情には感じていたが、輝虎も領主として、関東管領の意地、もしくは異性や若年者の意地などがあり、なかなか譲れない面もあり余計に話を難しくしていたのである。

輝虎もそのような理由で表向きは強気に振舞っていたが、内心やはりそのような様々な状況から気が沈み、その心の表情は実は冴えなかったのである。

しかしここで予想外の展開になったのである。

信玄が2万の大軍を率いて西上野に向かっているとの情報が急遽入ってきたのである。

越後軍は7千程度しか兵力がおらず、兵力数では真正面から2万の大軍と向き合える状況ではなかった。しかも今回は新兵が多く、輝虎直属の親衛隊も臼井城で負傷で戦力数が少なく、兵や諸将の間でも動揺が見られた。

しかし輝虎は表向きは冷静沈着であった。

「信玄とは今までも川中島では常々不利な状況で戦っている・・・恐れるに足らず・・・！」

輝虎の一言で越後陣営は表向きは再度落ち着きを取り戻したのである。

輝虎は今回は年齢の関係などで、最近では春日山城の留守役が多くなっていた金津新兵衛を呼んでいた。

新兵衛は輝虎の育ての親とも言える人物で公式には越後国内では高い身分ではなかったが、客将と言う特殊な地位にあり、輝虎が絶大な信頼を寄せていた男である。

初陣の栃尾城で命をかけて輝虎を守ったのも彼である。

ただ逆に言えば今回は輝虎も実は密かに相当な不安を感じていたのである。

自分を落ち着かせ、いざという時は自分を叱咤してくれる存在が必要であった。

そのために新兵衛を呼んだのである。

親衛隊の顔ぶれも今までと違った。

半分以上が入れ替わり新規入った若年兵も多く、今までの百戦錬磨とは少し雰囲気は違っていた。

特にあの弥太郎は傷が思ったよりも深く、親衛隊には戻ってこなかったのである。

輝虎の時折見せる不安そうな顔を見てか

「ワシらがまだ居ます・・・お忘れなく・・・」

栃尾城の戦いからのベテランの秋山源蔵と戸倉与八郎が笑いながら声をかけ

「栃尾城の戦に比べれば楽なもの・・・気落ちは無用ですぞ・・・」

新兵衛の一言に輝虎も思わずうなずき、自分を奮い立たせようとしたのである。

輝虎は信玄とどう戦うかに案を巡らせていた。

高崎城周辺は利根川沿いの平地で陣を張って守るのにはあまり適した地形ではなかった。

そのため一度厩橋城まで後退して、そこで籠城戦に持ち込むことも考えていた。

信玄がどれほど本気なのかも正直解らなかった。今までの牽制のようにやって来ては、輝虎が高崎城の包囲を解いた後、甲斐に戻る可能性もあったからである。

輝虎が高崎城の前であれこれ考えているうちに箕輪城からの早馬が慌てて飛んできたのは高崎城に来て一ヶ月、信玄も間もなく西上野に入ろうとする頃であった。

輝虎は信玄の同行を伝える伝令程度の早馬にしか考えていなかったが、その知らせは輝虎を驚愕させ、落胆させるには十分な知らせであった。

永禄9年（1566年）9月、甲斐軍は輝虎の予想に反して高崎城には来ず、長野業正の箕輪城にまっすぐ押し寄せたのである。不意を突かれ2万の大軍に少数の箕輪城の守備隊は瞬く間に壊滅し、箕輪城主の若干19歳の業正は自刃して果てたと言う。

輝虎はこの報告を啞然と聞いていた。そしてその後がっくりと肩を落とした。

若い業正を見殺しにしてしまったことと、自分の判断の過ちについてであった。

「信玄にまたもやられた・・・」

輝虎は一人つぶやくように正直に言った。

輝虎は信玄や氏康との戦いでは決定的に負けたつもりはなかった。

しかしいつの間にか信玄、氏康に対して押されており、自分が押しやられていた。

今までの川中島での戦いと同じでの戦略上では年の功なのか自分が

甘いのか輝虎も正直良く解らなかったがいつも敗退の形になっていた。

今回も同じである。

信玄とは関東では直接的に戦った記憶はあまりなかったが気がついたら西上野を取られていた。

氏康もしかりである。

氏康とは実際に戦い、負けもあったが、城から自ら逃げ出すような決定的な負け戦は無かった輝虎は認識していた。

が、気がついたら武蔵国をいつの間にか奪い返され、自分は上野国まで追い返されているという現状である。

理由は良く解らないが自分の関東管領の野望は見事打ち砕かれ、かつての上杉（憲政）氏本流のように自分も上野国の北端まで追い詰められようとしていると言う現状だけが事実であった。

しかし、理由は何であれ、形上は業正を見殺してしまった輝虎に対して、関東の風向きは急激に、そして決定的に変わるようになったのである。

信玄が西上野を完全に占領し、氏康が上野国に侵入しようとする、関東国人や上野国人衆の気持ちは輝虎から急速に離れていったのである。

9月末にはまずその先陣を切るかのように、金山城城主、由良成繁が輝虎に反旗を翻し、氏康、信玄側についたのである。

さらにはこの年の暮れには永禄5年（1562年）安房と古河を移動中に氏康に捕らえられ、行方不明になっていた、足利藤氏が死んだとの情報がどこからと流れてきた。

死因は病死とも氏康に殺されたとも言われはつきりしなかったが、足利藤氏は輝虎が関東管領就任時の古河公方になり、また、輝虎陣営の関宿城の築田晴助の甥にあたる人物であり、足利藤氏の死によって輝虎の関東の運営は大義名分上も、大打撃を受けて完全に行き詰まりを見せたのである。

越後衆の不満も積もりに積もり越後国内にも不穏な空気が流れだしていた。

藤氏が死に、関東管領としての地位が完全に崩落すると今まで越後領主でもあるが関東管領でもある輝虎に我慢強く付き従っていた越後衆からも強い不満が聞かれるようになったのである。

越後衆にとっては領土が増えなかったばかりか、信玄、氏康に対する二面作戦も完全に破綻し、関東攻略どころか関東からの撤退目前まで越後側の勢力は信玄、氏康陣営に押され、さらには本拠地の越後国内の春日山城近くにも最近、甲斐の騎馬武者が姿を時折姿を見せるなど信濃方面から信玄が越後本国に侵入するかもしれないという危機も現実味を帯び始めていた。

輝虎もこの時の心象を

「心細いので春日山城に帰りたい・・・」  
と正直に日記に書いている。

ところが永禄9年（1566年）12月、予想外の事件がまたも起こるのである。

厩橋城を任せていた北条高時が景虎に対して謀反を起こしたのである。しかも2度目の謀反であった。

高広は氏康の誘いに乗ったのである。

輝虎は関東の拠点とも言えるこの重要な拠点を戦わずあっさりと失ってしまったのである。



輝虎は高広を

「高広の行いは天下の魔行・・・！」と表向き激怒し高広を非難したが、心の中では北条、武田との最前線の一番厳しい厩橋城の護衛など重い仕事ばかりさせて、彼の不満が高まっていることは充分に承知していた。

また、彼は一度謀反の前科があつたので重臣の間でも密かに彼に厩橋城を任せるのは危険との声も輝虎の元に寄せられていた。それも輝虎は承知していたが、逆に高広もそのような空気を感じていたのか越後国内から国外に鞍替えになったことに不満を持っているとも言われ、輝虎を悩ませていた。

ただ輝虎も越後衆も彼の实力は認めていた。そのため彼が氏康陣営に寝返つたことは更に戦局が厳しくなることを暗示していたのである。

それでも輝虎陣営はわずかに残る大田資正、築田晴助ら関東国人衆、上野国人衆、常陸の佐竹義重、安房の里見義堯、義弘親子の踏ん張りでなんとか関東に踏みとどまっていた。

輝虎も関東の拠点をさらに越後寄りの沼田城に移し再度最後の気力を振りしぼり、厩橋城を奪還して、関東再南進の準備を進めようとしたが、その最中に高広の呼応するようにまたもや佐野昌綱が輝虎に反旗を翻したのである。

永禄10年（1567年）1月に輝虎は厩橋城に行く振りをして氏康に対する牽制を兼ねて唐沢山城に攻め入ったが昌綱が降伏勧告に応じず攻略できず、再度3月に隙を見て一気に唐沢山城に押しかけ、昌綱を降伏させたのである。

ただ輝虎の昌綱へのお咎めは無く寛大な処分であつた。昌綱は降伏

したとの理由でそのまま唐沢山城の城主のまままで居続けたのである。その理由は上野国や関東国人衆の気を引くためである。少しでも輝虎陣営に味方を引き込むためである。

ところが唐沢山城が輝虎陣営に戻って安心したのもつかの間、同じ3月に再度信玄が動き、武田領の西上野を任されていた真田幸隆により輝虎側の上野白井城が落城して沼田城、渋川城まで信玄の脅威が迫り、信州方面からだけではなく三国峠からの越後侵入の危機が現実的に迫ったのである。

三国峠は輝虎が関東へ冬でも動けるように整備した当時としては幅の広い軍が通るために設計された道路で現在の国道17号線にあたる。

ここを通れば越後は直ぐである。

輝虎は急遽、白井城の奪還の為の作戦を行うが、動きの読めない佐野昌綱の唐沢山城を牽制するため、輝虎は唐沢山城の守備に揚北衆の五十地野氏を今回初めて任命したが、彼らが任務が重すぎると逃げ出す珍事が起き、結局色部勝長が唐沢山城に再度入城し、守りを固めることになったのである。

もはや輝虎、関東管領の権威は地に落ち切っていた。

輝虎もこの頃は相当気が滅入っていたがそれでも執念で永禄10年（1567年）4月に白井城を奪い返すとそのままの勢いで厩橋城に押し入り奪回したのである。

輝虎は今回武田の真田軍やかつての越後側の猛将、北条高広軍との大激戦も覚悟していたが真田勢も高広も半分放棄するように撤退していったのでそれほど激戦にはならなかったのである。

ただ彼らの引き際も潔いのに輝虎は猜疑心を持って見ていた。  
輝虎だけでなく

「信玄の奴・・何かまた妙なことで企んでいるに違いないわ・・」  
と 中条藤資は警戒していた。

「・・阿虎様と戦うのはさすがに高広もどこか引けたんでしよう・・」

齊藤朝信も静かに言った。

「しかし 信玄だけでなく氏康も来なかったのは妙だ・・」

輝虎は率直に言った。

他の者もうなずいた。

「軒猿にもつと様子を探らせましょう・・それからでも遅くはいで  
しょう・・」

喜平次が冷静に言った。

厩橋城をなんとか取り返した輝虎であったが、恐らく再度厩橋城の  
攻略に来るであろう、信玄、氏康連合軍に備えて輝虎は厩橋城の守  
りを固めたのである。

しかし意外なことに信玄も氏康もこの後、厩橋城に輝虎を追い詰め  
た勢いで押しかけて来ることはなかった。

輝虎を襲った予期せぬ混沌がこの後、今度は信玄や氏康をも襲い、  
関東の混乱に輪をかけるのである。

## 獅子心中 前編

厩橋城は緊張に包まれていた。

北条氏康と武田信玄の連合軍による襲来の危機の可能性が現実に取りつつあったからである。

北条軍と武田軍の連合軍が本気で来れば5万以上の大軍で押し寄せてくる可能性が十分に考えられた。越後側の動員はせいぜい良くても1万程度で兵力差の不利は否めなかった。

野戦では勝負にならないので厩橋城に頑なに籠るしか方法はなかったのである。

輝虎は軒猿の情報網を駆使して常に北条や武田の動きを神経質に監視していた。

強敵の北条や武田相手に兵力で劣る自分達が勝てるなど決して輝虎も思っていないが、今までも兵力差で劣る相手が奇策で大軍を破る戦は良くある話で輝虎も 戦は水物 と自分に言い聞かせて奮い立たせていたのである。

しかしやはり不安は隠せず時々若い頃のように少し酒を呑んで気を紛らわしていた。

輝虎は元来深酒はしない人間だったので酔いつぶれるようなことは無かったが、そのような輝虎の行為に越後兵も今回ばかりは不安を隠せず、越後が破れた場合、自分達はどうなるのかと、余計な話をひそひそとしていた。

輝虎の元にはまず北条軍の動きが引つ切り無しにもたらされていた。氏康は関東での勝利を確信したのかこちらに来る素振りを見せていなかった。むしろ安房、房総半島の上総国、下総国に氏康の目が行っていた。理由は安房の里見義堯、義弘親子である。里見親子は関

東には野心は無かったが安房の統一は一族の悲願であった。そのため安房までちよっかいを出してくる北条は里見親子にとっては目の上のたんこぶであった。

氏康にとつても里見親子は厄介な存在であった。自分に素直に従ってくれれば良い物の、源氏の氏族としての誇りが高い里見親子からすれば、どここの馬の骨とも知れない北条家には心底従つつもりもなく、逆に隙あらばと、安房から海賊衆を使つて江戸前（東京湾）を渡り、北条の地盤の相模国の三浦半島に乗り込んで狼藉を働いたりと北条に対する敵意を露にしていた。

更には里見親子は輝虎とも正式な同盟関係にあり、北条家は形式状北の越後と南の安房に挟まれていた。そのため、臼井城の戦いでまず北の越後の輝虎の勢力が後退したのを見計らつて、南北挟撃の憂いを無くすため氏康は南の里見親子の討伐を決めたのである。常陸の佐竹義重も当時は北条へ帰順の意思を示していたため里見親子を打倒後、最後は輝虎を完全に越後に追い出して、関東を北条の物にするという氏康、北条一族の悲願が込められていた。

永禄10年（1567年）8月、氏康はついに里見親子打倒のため安房に出兵したのである。

普段は慎重な氏康が今回急いで里見攻略に動いたのは輝虎が勢いを取り戻す前に、輝虎の関東での同盟者の里見親子の息の根を止め、輝虎に関東を諦めさせることが表向きの理由であった。

しかし実はもうひとつあった隠れた理由があった。まだ表ざたにはなつておらず、輝虎にも気づかれていなかったが、氏康と武田信玄との関係に少し漣が立っていたのである。

氏康が動き出したことにより厩橋城の輝虎の元にも里見親子から救

援の依頼が入っていた。

里見氏にとつては存亡をかけた一大決戦であった。

里見親子の使者に対して輝虎も

「あいわかった・手立ては総て取る・義堯殿 義弘殿と我らで氏康を追い払いましょうぞ・・！」

とにこやかな表情で表向きは全面的に協力する旨を伝えたのである。里見親子の使者はそれを聞くと安堵と満面の笑みで引き上げていった。

しかし越後軍にはそのような兵力の余裕は無く、また兵を送つても途中で立ち塞がる西上野の信玄に挟まれて、自分達が止めを刺される可能性もあり動けず、事の成り行きを見守るしか手段が残されていなかったのである。

あと輝虎に何か出来ることがあるとすれば、神仏に里見親子の勝利を祈願することである。

輝虎は援軍を送りたかったが結局送れなかったのである。

安房の状況は臼井城のある上総北部、西部はすでに北条領であった。上総東部も里見氏の重臣の正木時忠を服従させていた。北条側の目的は里見親子のまず、息子の義弘の居城の佐貫城を奪い上総全土をまず制圧しその後南下し下総の義堯の居城の久留里城を落とす事を考えていた。

佐貫城は里見側も北条への最前線として守りを固めに固めた城であった。里見親子の息子の義弘自ら城の守りについていた。

氏康も攻略に本腰を入れるため氏康の長男の氏政自ら指揮を取り、佐貫城からわずか1里先の三船山に砦を作り、佐貫城攻略に万全の体制を整えようとしていた。

氏政は今回3万と言う大軍を擁していた。守備側の佐貫城の義弘は8千程度と劣勢は明白であった。

それでも氏康は慎重に慎重を期していた。

輝虎との唐沢山城での戦いを思い出していたのである。

氏康には越後軍が厩橋城から動く気配はないとの報告が忍の風魔から入っていたが、里見軍は輝虎が援軍を準備していると思っており、佐貫城の兵の士気は高いとの報告も入っていた。

そのため氏政にも先に手を出すことは厳禁した。

双方の城からの睨み合いで作戦は長期の様相を見せていたが、そこでそれを見た氏康は義弘本隊を氏政の部隊で足止めしている間、自分の部隊と臼井城で功績があつた原胤貞、氏政の弟の氏照の別働隊で里見親子の父、義堯の居城、久留里城を先に密かに急襲して、久留里城救援に慌てて出てくるであろう佐貫城の部隊を三船山の氏政の部隊と合同で挟み撃ちにして、里見親子に引導を渡す案を密かに実行に移したのである。

氏康は原胤貞、氏照と別働隊を編成すると氏政の本隊と別れて、市原付近の小櫃川沿いに密かに内陸の久留里城を目指したのである。

氏康は今までの里見氏との腐れ縁を断ち切るべく必勝体制を誓っていた。

不安点は臼井城の戦いで原の部隊が思いの他消耗しており、戦い方を誤れば久留里城の部隊にも苦戦が予想され逆に自分達が危機に陥る可能性があることであつた。

それでも氏康は自分の武運を信じていた。

川越城の戦いを思い出していたのである。

久留里城に向かう騎乗の馬で

「里見親子との腐れ縁はこれで終わりにしたいものだな・・・」

氏康は正直に言った。

「・・・それにしても あの何とか入道とやら・・・原殿の兵力をわずたにしゃがつて・・・」

氏照が父の気持ち代弁するように言った。

「・・・申し訳ありません・・・あの男はその後、出て行ってしまつて・・・」

原が首を少し縮めながら申し訳なさそうに言った。

臼井城で指揮を取った軍師、臼井入道浄三はその後、原の元を去り何処かへ立ち去つたと言つた。

「いや・・・良い・・・」

氏康は静かに言った。

「あの男のおかげで勝つたのは事実だからな・・・臼井城を守つたのは大きい・・・少し犠牲が大き過ぎたが・・・」

氏康は目をつぶりながら言った。

「里見の次は・・・越後の大虎を追い出して！・・・いよいよ関東は我らのものですね・・・！父上！」

氏照が氏康に嬉しそうな顔で言った。

しかし氏康の表情は曇つたままであった。

そしてしばらく間を置いてから

「・・・う・・・うむ・・・そうだな・・・」

何か引つかかるような物があるように氏康は静かに言ったのである。氏照も原もそれが何を意味するのかはその時は解らなかつたが、二人は密かに思わず顔を見合わせてしまった。

8月も終わろうとしている頃、厩橋城に安房の報告の早馬がやつてきた。

輝虎もこの半年は緊張気味に過ごしていたので少し疲れていたがこの報告を聞いてそれもすべて吹き飛んだ。

「本当か！そうか！よかつた！」

輝虎は年甲斐も無く大喜びしてしまつたのである。

輝虎の大声を聞いて他の者も続々と集まつて来て、使者の報告を聞



いて驚愕したのである。

三船山での氏政と佐貫城の義弘の睨み合いを打破するため、氏康の別働隊が密かに久留里城に向かったのだが、氏康が不在の情報に義弘は素早く掴み、その隙を見て、義弘ら里見軍が佐貫城を出陣して三船山の氏政に襲い掛かったのだと言う。

氏康も里見軍の士気を落とすため風魔を使つて永禄7年（1564年）の第二次国府台の戦いの再現をする気か（里見軍は北条軍に大敗）、輝虎は怖気づいて来ないぞ、などの噂を里見軍陣中に使つて流すなど工作をしていたが里見軍は輝虎の援軍を来ると信じていたのか効果はなかったと言う。

北条氏政軍3万、里見義弘軍8千と兵力差は圧倒的であり、誰が見ても北条軍優勢であったが、里見軍は地形を巧みに利用し北条軍を奔走し、里見氏重臣の正木憲時の部隊が障子谷と言う足場の悪い深田に北条の大軍を誘い込むと、足場が悪い狭い場所に大軍が密集したため北条軍は動きが取れなくなり、そこを里見軍に徹底的に叩かれて2千5百人の死傷者を出す大敗北を北条軍は喫したとのことであつた。

その報告を聞いた氏康も慌てて久留里城攻略を放棄して軍の立ち直りに氏政と合流しようとしたが今度は里見氏の庇護を受けていた安房の海賊衆が江戸前（東京湾）上で北条軍本隊の援護に向かつていた北条水軍と交戦になり、こちらでも北条側は敗北、水陸両方からの襲撃を恐れて氏康は全軍を居城の相模の小田原城に引き上げさせたのだと言う。

北条軍は大将格の岩槻城主、太田氏資までもが敗走する北条軍の殿しんがりを努めて戦死するなど散々な戦で、これにより安房の勢力は完全に

塗り替えられ、上総全土を含め安房全土が里見氏の所領になったのである。

里見軍の勝利で越後側は沸き返り、また氏康に恭順の姿勢を示していた常陸の佐竹義重も再度、輝虎陣営、反北条に回った。

何はともあれ輝虎側の関東での勢力は何とか保つことが出来たのである。

越後衆が沸き立つ間、一人密かに沈んでいたのは太田資正であった。憎き氏康が敗れたのは良かったが、氏康側についていた長男の太田氏資が北条軍の殿をしんがり務めて討ち死にした事を聞き

「・・・あの親不孝の大馬鹿者が・・・わしが討ち取ってやろうと思っただのに・・・」

資正は誰にも聞こえぬよう、うつむきながら小さな声で言った。

## 獅子心中 後編

小田原城に戻った北条氏康は普段と変わらぬ落ち着いた素振りを見せていた。

三船山での里見義堯、義弘親子との敗北で北条側の将校は皆、意気消沈していた。

今日は今回の戦の慰労を兼ねて簡単な茶会でも開こうと氏康が提案した会であったが今回指揮を取った息子の氏政や副官の松田憲秀はかなり気落ちしているらしく、少し心の整理の時間が欲しいとの事で今回は参加して来なかった。

氏政や松田が落ち込むのには無理はなかった。

北条側3万 里見軍8千と圧倒的有利な筈であったが里見軍の素早い動きに大軍が対応できず足を絡めた攻撃で狭く足場の悪い深田に追い込まれて身動きが取れなくなり徹底的に叩かれた点である。

少数の越後、佐野昌綱連合軍に敗れた唐沢山城の戦いの再現になってしまい、氏政、憲秀の二人の落ち込みは相当なものであった。

事実、今回の里見親子との一戦の敗北が北条側に与えた影響は大きく、北条側になびく筈だった関東の諸勢力が再度どつちつかずの状態になってしまったのである。

また再度、おそらく勢力を回復させて関東に舞い戻ってくるであろう輝虎に対しての先制の軍事行動が今回の敗戦で南の里見親子から相模本国の防衛の為に取れなくなったのも痛手であった。

ただ氏康は気落ちする氏政や憲秀、将校には気にしないように労いの言葉をかけた。氏康は原因は別のところにもあるし今後の展開が大きく変わることを見事に予見していたからである。

今回の茶会には氏政の弟の氏照、氏邦、重臣の板岡部江雪斎や大道

寺政繁、清水康英、北条家の重鎮で御意見番の北条幻庵らが参加していた。

冒頭

「里見を少し甘く見すぎました・・・」

氏照が正直に言った。

「別働隊のワシの動きを読むとは、なかなかやるな・・・」

氏康も他人行儀のように言った。

「援護の三浦水軍衆が持てば・・・すぐに再度編成を整えて里見に引導を渡せたのですが・・・」

伊豆の水軍をまとめる清水康英が苦々しい顔で続いた。

氏康もうなずいた。

「ワシは今回の戦いは負けたと思っていない・・・3万の軍の内の一割の消耗ならまだまだ戦える。しかし兵糧や補充物資の運搬の三浦水軍を叩かれたのが痛かった・・・」

氏康は今回の敗因を語り始めた。

「阿虎（輝虎）が小田原に10万の大軍で押しかけて来た時も兵糧が持たなくて撤退したようなものだ・・・もし今回三浦水軍が里見水軍を押さえておれば戦況は変わったであろう・・・3万の大軍は力強いが飯も良く食べるからな・・・」

氏康は少し苦笑いしながら言った。

他の者もうんうんとうなずいた。

「・・・決定的な負けではない・・・だから気にするな・・・氏政や憲秀にも伝えておいてくれ・・・」

氏康は穏やかな口調で言った。

「ところで・・・」

氏康は続けた。

「三浦水軍だが・・・やはり少し強化する必要があると思っただけ・・・今回相談じゃが・・・」

里見の安房の水軍衆は手強い・・・そこで紀州の安宅一族という水軍

衆を雇って造船技術を学ばせて水軍を強化したいのだが・・・」  
氏康は里見対策は水軍が鍵になると考えたのである。

「良い考えで！」

氏照や氏邦、康英らは直ぐに反応した。他の者もうんうんとうなずいていた。

「・・・意見はないか？・・・では決まりだな・・・」

氏康はにこりと笑うと茶をすすった。

「それにしてもはるばる紀州からは・・・」

板岡部が感心すると

「臼井城のあの何とか入道も都から来たんだ・・・大したことあるまい・・・」

氏照が率直に言った。

「・・・信玄公は海に興味があるようで・・・ならば海のある越後は信玄公に見てもらいたい関東にこれ以上興味を持たせないようにする手立てもありますね・・・」

氏邦も続いた。

「二人が争ってくれれば我らには好都合・・・関東は我らのもの・・・」  
大道寺が少し目の奥を光らせるように言った。

「・・・うむ・・・そうだな・・・そうだ・・・」

氏康は少し詰まりながら言った。

「阿虎様にも御関心があるんじゃないやろ？信玄公は？今は違うか？」  
幻庵が冗談気味に言った。

一同思わず笑いが出た。

「・・・ところで・・・信玄公だが・・・」

氏康が珍しく少し口ごもりながら言った。

何かを言いたげだったが、しかししばらく間を置いてから

「・・・いや・・・なんでもない・・・」

氏康はそれ以上話をするのはやめたのである。

茶会の後、氏康は幻庵と話をしていた。

氏康の尊敬する祖父、北条早雲から仕え、北条氏の知恵袋のような老人である。

「それにしても里見親子には一本取られた・・・」

氏康は正直に言った。

「・・・奴ら臼井城の戦法を逆手に真似るとは・・・里見義弘とやら侮れんのう・・・」

幻庵も静かに言い

「・・・佐竹や関東衆もまた日和見じゃのう・・・」

と続けた。しかし

「相談とはこの件ではなく甲斐の話かと思ったんじゃが・・・直ぐに幻庵は話を切り替えた。」

「風魔小太郎から色々聞いておつてのう・・・」

幻庵は静かに言った。風魔小太郎は北条家の忍びの棟梁である。

氏康はうなずくと

「ならば話は早い・・・信玄が駿河の件で話を持ちかけてきた・・・信玄の奴、義元公の後を継いだ氏真殿では駿河は心もたないと言って来おつた・・・」

氏康が不愉快そうにまくし立てた。

「駿河は武田と北条で統治しないかと・・・ずけずけと良く言つわ・・・」

幻庵は黙って聞いていた。

氏康は一息おいた後

「我ら北条は駿河の今川氏親様（義元の父）の後ろ盾があつたからこそ・・・氏親様のおかげで早雲の爺様は伊豆、相模に我らの基盤を作ってくださつた・・・信玄は我らの同盟を単なる息子と娘による手形程度にしか考えていないようだが今川と北条は違ふ・・・我らは義兄弟だ・・・絶対に切れない関係だ・・・わしはそう思っている。どうだろつ？」

氏康は一気に話した。

幻庵も大きくなずいた。

「信虎（信玄の父）の代から奴は関東にも野心を向けておった・今は西上野で我慢しているが油断ならん・信玄は父親を平気で追放する奴じゃ・我らもいつ同じ目に会うか・」

幻庵も厳しい口調で言った。

「しかし・里見と佐竹、阿虎・更には奴とも戦うことは絶対に出来ん・四面楚歌じゃ・」

幻庵は続けた。

「一つ・どこかを切り崩す必要があるな・」

氏康は苦渋の顔で言った。

「・信玄の奴・尾張の織田信長とも好<sup>よ</sup>を通じているようだな・」

氏康は苦々しい顔で言った。

「三河の松平元康にも声をかけておるそうじゃな・三河の松平と尾張の織田は同盟を結んでおる・」

幻庵も厳しい表情で続けた。

「我らが動かないのであれば・三河の松平と組んでまでもと云うことだろう・」

氏康も厳しい表情のままであった。

かつて、信玄は信濃の隣国の美濃を密かに狙い信長とは決して友好的ではなかった。

甲斐は 北の輝虎、南の今川、東の北条、西の織田と囲まれ、新たに領土を増やすには友好関係では無い北か西しか行く方向が残されていなかったのだが、北の輝虎の強さは信玄が重々承知することであり、西の信長も永禄9年（1566年）、信玄が息子の義信達の件や甲斐国内や関東でたごたしている間に齊藤氏を追い出し、美濃を占領して、今川義元を桶狭間で討ち取った勢いそのままでは北伊勢にも進撃し、中部で名を馳せていた。信玄もそのため手強い相手と戦うより一番脆い相手に標的を換え、

それが今川氏真であったのである。

しかし 武田、今川、北条の三国同盟、甲相駿三国同盟は今でもしつかり機能していた。

しかし北条と今川の深い関係と違って、武田と今川、北条の関係は子息子女の婚姻関係による保証が主体であった。

今川義元の娘、嶺松院が信玄の息子、義信に嫁ぎ、信玄の娘、黄梅院が氏康の息子、氏政に嫁ぎ、氏康の娘、早川殿が義元の息子の氏真に嫁ぐことにより、義元は北の信玄と東の氏康に憂い無く西の三河や尾張に注力出来、信玄は南の義元や東の氏康を気にせず、北の信濃や越後を伺うことが出来、氏康も西の信玄や義元に遠慮せず、関東を我が物に出来る、お互いに恩恵の多い同盟のはずであった。

予想外は義元が桶狭間で織田信長に討たれたのと、越後の輝虎が強敵で信玄の越後進出を諦めさせ、更には輝虎の関東乱入が氏康の関東制覇の夢を妨げた点である。

内陸国の甲斐の信玄は以前より海の出口を求めて越後を目指していたが輝虎に散々妨げられたあげく、海の出口を他に求めざるを得なくなつた点であった。

義元の死は海の出口を求める信玄にとっては必須でもあった。

氏康も信玄には以前から密かに警戒はしていた。

特に信玄の長男の義信が永禄8年（1565年）に謀反の疑いで幽閉され、義信の後見人の飯富虎昌が切腹した件は氏康も問題視していた。

この時すでに義信は、今川から嫁いで来た妻子と離縁させられ別居させられていたと言つ。

また、義信や飯富が信玄に対して翻意を出したのも、駿河への侵攻を考えていた信玄に義信が反発したためとの情報も氏康は密かに掴んでいた。



氏康はこの頃は輝虎と関東を巡って忙殺されていたが、いざ信玄とは相容れない関係になるのはある程度は予想できる段階まで入っていたのである。

甲相駿三国同盟は義元の死の時点で脆くなっていたが、今回信玄が氏康に駿河の分割統治の話を持ちかけてきたことにより、甲相駿三国同盟は決定的な最終局面を迎えようとしていたのである。

「で・・・信玄には何と返答を・・・？」

幻庵は氏康に聞いた。

「・・・三国共同で織田、松平を追い返そうぞ・・・と言おうと思っておる・・・」

氏康は言った。

「・・・信玄が構わず駿河に入ったら・・・？」

幻庵も少し緊張気味に再度氏康に尋ねた。

「・・・氏真に援軍を送る・・・信玄など恐れるに足らず・・・！」

氏康は険しい口調で言った。

幻庵も大きくうなずいた。

「自分で言うのも何だが・・・信玄が甲斐の虎だか龍だか何だが知らんが・・・相模の獅子と言われるこのワシをなめてもらっては困るな・・・」

氏康は険しい顔で言った。

「それでこそ氏康殿じゃ・・・」

幻庵も大きく再度うなずいた。

「ところで・・・何処を切り崩すかじゃが・・・」

幻庵は話を変えるように言った。

「里見は無理だろう・・・勢いに乗っている・・・」

氏康は目をつむりながら言った。

「佐竹は・・・？」

幻庵が聞いた。

「南常陸の小田氏治を盾代わりに引き込んでいるが・・佐竹へのくさびくらいにはなるか・・まあ気変わりな連中でありアテにはならんだろう・・北関東の地方の諸大名の小さい土地争いに巻き込まれるのも今は御免被りたい・・」

氏康は正直に言った。

「では・・最後に残ったのは北の阿虎様か・・」

幻庵が難しい顔で言った。

氏康も少し間をおいてからうなずいた。

「・・奴とは色々あったが・・奴は義理固いと風魔の報告も入っておる・・上野の信玄を押さえるためにも必要だろう・・奴の実力も侮れん・・」

氏康も険しい顔のまま言った。

「条件さえ合えばやむなしじゃろう・・」

幻庵も目を閉じながら言った。

氏康は大きく黙ってうなずいた。

「そうと決まれば・・後は小田原城の中を一つにまとめるだけか・・」

氏康は大きく溜息をついた。

氏康の悩みは氏康の反応だった。

特に氏政の妻の問題であった。氏政の妻は信玄の娘、黄梅院であった。

しかし氏政の生母は今川氏真の祖父で今川氏親の娘で今川氏との関係もおろそかに出来ないのは事実であった。

氏康は氏政の今回の里見氏との戦いで敗北も大目に見ていたのは、氏政の戦での不甲斐なさは少し気になっていたが、氏政が弟たちをうまく取りまとめ、国をまとめる能力は高く評価していた。氏政は少しおつちよこちよいであるが、心優しい面があり、その優しさは甘さになって若干戦では仇になっていたが国内統治では良い方向で

動いていた。そのため、信玄の娘を妻に持つ氏政本人は口にはあまり出さなかったが甲相駿三国同盟の破綻での妻との離縁には強い難色を示していたと言う。

二人は甲相駿三国同盟の政略結婚で結ばれたのだが仲睦まじい夫婦で、氏康もそれは承知しており孫達の悲しむ顔は見たくなかったがいざとなればそれは戦国武将としての決断であった。

北条氏と武田氏の関係に暗雲が垂れ込め始めている頃も、輝虎は相変わらず越後軍の再建に追われていた。里見親子が氏康を敗つてくれたおかげで北条軍の脅威は大分薄れたが信玄率いる武田軍は相変わらず脅威であった。

特に厩橋城の南に居座る西上野の倉賀野城の真田昌綱は厄介な存在であった。

また厩橋城だけではなく春日山城の近くまで川中島から密かに甲斐の騎馬武者が脅しに侵入してくる事件も頻発していた。

ただ理由は解らなかったが、そのような挑発行為を繰り返しながらも武田軍の本隊は相変わらず甲斐に張り付いたままであった。

輝虎には好都合であったが軒猿からも氏康と信玄の間で何かあったらしいとの噂もこの頃には輝虎にもたらされていた。

原因は氏康の里見氏遠征時に信玄が兵を出さなかった事とも、信玄が西上野に進出したことによる関東制覇を夢見る氏康と信玄の対立とも言われていたが輝虎側にははっきりした情報はまだもたらされていなかった。

ただ氏康と信玄が仲違いしても二人とは今後も相容れない関係には違いなかったので輝虎は構わず軍の再建に力を入れ続けたのである。輝虎の興味は越後を守り、隙あらば再度関東に進出し、関東管領の責務を果たすことであった。

そんなおり、永禄10年（1567年）10月、軒猿より輝虎の元にも思わぬ情報が届けられたのである。

10月に信玄の長男の武田義信が死去したのである。

義信は永禄8年（1565年）謀反の疑いがあるとして甲府東光寺に幽閉され、その責任を取らされて信玄の重臣の飯富虎昌が切腹していた。

義信の死因は信玄に幽閉させられたことによる自害とも伝えられた。輝虎は報告を聞くと思わず深い溜息が出てしまった。

「・・・自分の息子をそこまで平然と追い込めるのか・・・」

輝虎は信玄の恐ろしさを改めて認識したと同時に再度若い頃に抱いていた信玄に対する嫌悪感が湧き上がってきた。

信玄は更にはその義信の妻、嶺松院と娘までも彼女らの実家の駿河の今川家に送り返したと言う。

「・・・息子の妻や可愛い孫まで送り返すとは・・・まったく・・・」  
輝虎は嫌な気分では話を聞いていた。

「しかし妙ですな・・・」

輝虎の感傷を破るように直江景綱が言った。

「同盟相手の今川の娘を送り返すとは・・・大事な人質だろうに・・・解せませんな・・・」

景綱が顎鬚をさすりながら不思議そうな裏を読むように言った。

「・・・武田と今川の間でも何かがあったのは間違いありません・・・」

「  
本庄実乃も続いた。」

「話の最中恐縮ですが・・・」

軒猿がかしこまった風に入ってきた。

「甲斐の透破、北条の風魔ら忍びの衆も盛んに動いているのですが・・・  
連中は妙な事に我らには関心なしで・・・」

輝虎は黙って聞いていた。

「北条の風魔は棟梁の小太郎から我らとは争うつもりが無いと言っており・・・」

「甲斐の透破も高坂弾正昌信の配下かどうかとかの加藤段蔵とか言  
つていましたが・・越後には手を出すなと・・」  
懐かしい名前が出てきた。

「まだ生きとつたんか・・油断ならん奴じゃ・・」  
景綱が渋い顔で言った。

輝虎は直江の顔を見て思わず少し笑ってしまったがすぐに元の表情  
に戻した。

「また我らと組もうとか言い出すんじゃないだろうな・・」  
本庄実乃も怪訝そうに言った。

「今更一緒に北条を討とうだと？冗談だろ」  
中条藤資が憮然と言った。

輝虎は高坂弾正の名前が出たとき少し心が惹かれるもの一瞬感じたが  
「長野業盛を殺して西上野を奪って良く言う・・」  
と冷静に切り返した。

「まさか北条も一緒に武田を挟もうとか思っているんじゃない・・」  
色部勝長も不満そうに言ったが

「私を関東管領として認めるまでは無しだ・・北条も飲めないであ  
ろう・・」

輝虎は冷静に返した。

「ま、とりあえず信玄も氏康も厩橋城に来ないのは充分に解った・・」  
輝虎は少し安堵の表情を浮かべて言った。

「信玄と氏康の間で何かあって両者が争ってくれば好都合には違  
いないですな・・」

景綱は冷静に言った。

「ならばこの隙に倉賀野城を奪い返しましょう・・！」  
喜平次が珍しく気色ばんだが

「もう少し待とう・・信玄と氏康が仲違いして軍を消耗してからで  
も遅くはない・・機会を待つのも大事だ・・」  
輝虎がたしなめるように言った。

「ところで・・駿河の今川氏真殿からさっきの件にからんで甲斐への塩止めの協力依頼が来ていますが・・」

本庄実乃が言った。

「・・義元殿には川中島の件で世話になったが・・」

義元はかつて第3次川中島で信玄と輝虎の停戦交渉にあたったことがある。

輝虎もどうしようかと一瞬思ったが

「蔵田五郎左衛門ら府内の商人が塩止めに反対しているようで・・」  
齊藤朝信が言った。

朝信は武人としても輝虎に信頼されていたが実は政務の方が得意で春日山城下の府内の統治は彼のお手の物である。

「越後は商人の国・・彼らには背を向けられない。が・・約束を平然と反故にする信玄に対する氏真殿の怒りも最も・・別離させられた氏真殿の妹君や姫君の気持ちも解らなくも無い・・」

輝虎が続けた。

「それに関して蔵田五郎左衛門からお話したいとのことと・・」  
朝信が一言言つと

「わかった・・話を聞く・・」

五郎左衛門が輝虎の前に通されて肥えた体を丸めながら久々に輝虎の前に姿を現した。

「お久しぶりでございます・・阿虎様の越後のため商いに精を出しております・・」

五郎左衛門は大分髪が白くなっていたが丸々と肥えたままで、眼鏡の奥は鋭いままであった。

「ご苦労・・いつも世話になる・・楽にどうぞ・・」  
輝虎も以前のようににこりと笑って返した。

「駿河からの塩止めの依頼の件ですが・・大事な同盟をたやすく破る氏真様の信玄に対する怒り・・ごもつともでございます・・」  
五郎左衛門は流麗に話し始めた。

輝虎はうなずきながら黙って聞いていた。

「・・駿河と越後・・もしかしたら相模の商人と一緒に組んで悪い信玄に対して塩止めをすれば効果は大きいでしょう・・しかし信玄の奴・・織田と手を結ぼうとしています・・塩は結局尾張から入るでしょう・・」

「・・うん・・」

輝虎もうなずいた。

「阿虎様と友好関係にもある尾張の商人が潤うのは決して悪くはございませぬ・・しかし・・ワシら越後の商人は阿虎様のため・・越後のために商いをする事に喜びと誇りを持っております・・関東管領の夢はまだ終わっておりませぬ・・夢の為にも元手は大事・・今回の件・・今までのお付き合いもあり、我ら越後の商人との良き関係、良き計らいを是非ともお願いいたしまする・・」

五郎左衛門は深々と頭を下げた。

輝虎と五郎左衛門との付き合いは輝虎が越後の領主になった頃からの付き合いで長い。五郎左衛門も形の上ではただ商人であったが輝虎の御用商人として都や府内で越後国内の政務に関わり、また堺や都でも越後の商人を束ね、越後の豪商としてとして輝虎の大資金源の「青芋」や衣類、日本海開運から運ばれてくる様々な物資を扱い、威勢を奮っていた。朝廷や中央政権とも越後京都留守役の神余親綱とともに関わることも最近は多くなっており輝虎の信頼も厚かった。彼の意向は彼のためにも越後のためにも輝虎も無視は出来なかった。

輝虎は少し黙った後

「信玄の行為は許せた物ではない・・しかし・・氏真殿の気持ちもよくわかる・・しかし信玄に不満あれば氏真殿は信玄と戦って決めるべきことである。」

今回の塩止めで苦しい思いをするのは信玄でも誰でもなく甲斐の領民である・・。

よって・・塩止めなど無意味であろう・・参加するつもりはない・・

今まで通り自由に商いをすれば宜しい・・・」

輝虎は正直に言った。

「ありがたきお言葉・・・ワシらは引き続き阿虎様・・・越後のために精を出せます・・・」

五郎左衛門は嬉しそうに言った。

「・・・信玄と氏康が争えば必要な物資はたくさん必要・・・それを我等が手配すれば武田や北条は疲弊し我等越後が潤います・・・」

五郎左衛門の傍にいた若者が突然声を出した。

「これこれ・・・阿虎様やご家老様の前で・・・全く・・・」

発言したのは五郎左衛門の息子の2代目の若者であった。

「せがれが　しゃしゃり出てお恥ずかしい限り・・・」

五郎左衛門が少し顔を赤らめたが

「いやいや・・・親子2代でこれからも頼みます・・・」

輝虎が気にしないよう言った。

「ところで都からの風邪の噂だと・・・信玄の四男の勝頼殿に信長公の親族の者が嫁いでいるようで・・・」

景綱が意外そうな顔で言った。

勝頼は信玄の四男である。実は輝虎や越後衆も勝頼の事はあまり良く知らなかった。

「勝頼殿は信玄が滅ぼした諏訪頼重の娘が生んだ子と聞かすが・・・」

本庄実乃も続いた。

「信玄らしい・・・全く・・・」

少し輝虎が侮蔑気味に入った。

「でも、なかなか勇猛な武将のようですよ・・・」

色部勝長が言った。

「・・・それにしても武田の中でも色々あって大変じゃな・・・」

中条藤資も呆れ気味に言った。

事実で、勝頼の名前には武田家当主に付く信の字は含まれていない。勝頼の難しい立場の現れである。



「しかし・・・信長公も信長公だな・・・」

輝虎は少し笑いながら言った。

「自分の娘ではなく・・・養女を送るとは・・・」

信長と信玄の同盟など興味が無いような素振りで言った。

「信玄との関係は長続きせん・・・と 読んでるんでしょいな・・・信長公も」

本庄実乃も普段通り冷静に言った。

「油断ならん奴じゃな・・・信長公も」

景綱も少し苦笑いしながら言った。

「まだまだ・・・この先色々 ありそうだな・・・」

輝虎も少し様子見と言わんばかりに笑いながら言った。

しかし輝虎も越後衆も自分達が信濃や関東、信玄や氏康に気を取られている間、中央の動きが予想以上に激しくなりつつあることは薄々感じつつあった。

しかし追い風が吹き始めているようにも若干感じていた。

このように輝虎にとって自分の状況は徐々に良い風に行っているように思われたが最後にまた輝虎にとって、また予想外の展開が起きているのである。

## 急転直下

関東の諸将も北条氏康と武田信玄の関係が微妙になりつつあるのを掴んでいたようで、この年の11月、唐沢山城の佐野昌綱が再度北条側に一旦離反するが再度直ぐに輝虎陣営に戻るなど混乱の動きが出始めていた。

小田氏治も佐竹についたり氏康についたり忙しい動きを見せていた。

一方信玄の長男、義信が自害し、今川義元から送られていた妻子が駿河に送り返されたとの知らせは小田原の氏康にも直ぐに届けられていた。今まで大人しくしていた武田軍の中でもついに動きが見られるようになり、小田原城でも信玄から氏康の息子、氏政に嫁いで来た黄梅院の処遇についての話し合いがもたれ、甲相駿三国同盟は最終局面を迎えていた。

また、信玄と尾張の織田信長の関係も既に信玄の四男で後継者と噂される勝頼の元に信長の姪の遠山婦人が嫁いでいたが、長男（後の信勝）を生んだ時に難産で病死してしまい、替わりの信長の長男、奇妙丸（後の信忠）に信玄の娘で六女の松姫を嫁がせる話し合いが急遽もたれて、それが余計に氏康や今川氏真の不興を買っていた。

そのような武田、北条、今川の緊張に輝虎はようやく一息入れられると安堵していたが、氏康、信玄の争いの先行きや、関東の状況が読めない上、実は蔵田五郎左衛門ら越後商人から都との往路の安全と、自分達越後商人の裏には輝虎が付いていることを暗示するため、小うるさい越後の西側の隣国で、信玄の手先の越中の椎名氏や越前、加賀の一向宗を牽制することにしたのである。輝虎からしても兵力の回復も不十分な現状、一旦関東への出兵は止めて国力を回復させ、氏康、信玄の消耗を待つのも遅くはないと判断したのである。

輝虎は久々に越中に兵を送り、北陸方面の信玄の影響力を排除し、春日山城の西側を憂い無くすることにしたのである。

永禄11年（1568年）3月、輝虎は信玄を後盾とする越中の椎名康胤を攻めるため、富山城に向けて軍を進めた。

輝虎自身は氏康への手助けの気持ちなどさらさら無かったが、信玄に対する相容れない感情と言う面では氏康とは共感出来る物もあったが、今までの氏康との争いを考えると越後衆には口外はし難い話ではあった。

それでも信玄のじわじわ来る雰囲気よりも氏康のやり方のほうが輝虎には幾分理解し易い面はあり、輝虎も今後の件に関しては、心中でどうするかは密かに考えを始めていたのである。

しかし、それを読んだように越中戦線は今まで何度も撃破している康胤相手の楽な戦いではなかったが、今回は恐らく信玄の仲介で動いたのである。一向衆までもが康胤側に付いたため、予想外の大軍相手の思わぬ苦戦を輝虎は強いられたのである。

「全く・・・信玄の奴・・・」

輝虎は最近控え気味であったが酒を馬の上で少し口に含みながら不満げであった。

馬の上は見晴らしも良いが風通し良い。春先とは言え、まだ三月の越後や越中の日本海側の風は輝虎愛用の純白の越後上布で出来た御高祖頭巾だけでは防寒が難しいので酒で冷たい体を少し温めるのである。

輝虎が使用した馬上杯は金色の中塗りに蒼い輝きを放つ洒落た中国製の高級品で今でも米

沢の上杉神社の稽照殿でその淡い輝きを見ることが出来る。

「よりによって一向宗まで動かすとは・・・」

輝虎は無然と言った。

「信玄の正室の三条夫人の弟は誰かな・・・」

中条藤資が老練な言い回しをした。

「・・・そうであった・・・」

輝虎は黙ってしまった。

一向宗の総本山、顕如の実の姉は信玄の正室、三条夫人である。

一向衆は信玄と組んでいると言っても他言ではなかった。

「朝倉と組んで一向宗を挟みましょうか・・・」

本庄実乃が聞いてきた。

朝倉家も加賀の一向宗に悩まされ続け、他方日本海貿易の都側の荷揚げ港のとして越

後とは父為景の代から親しい家柄であった。

「しかし・・・義景殿はあまり冴えん人なんじゃろう・・・」

藤資がまた遠慮なく言ってきた。

直江景綱が思わず口に指を当て、それ以上は言わないようにとの仕事をした。

朝倉家の武勇は朝倉宗澄の代にさかのぼり、宗澄は30万と言う恐ろしい大軍で押し寄せ

てきた一向宗をたった一万の軍勢で打ち破り、朝倉氏の黄金時代を築いた人物である。

それに比べると義景は少し凡庸で、足利義輝の跡を継いだ義昭も最近は織田信長を頼りにし

ているという噂が都の越後屋敷の神余景綱からも報告が上がってきていた。

「まあ・・・越前も今は畿内のごたごたで大変だろうから・・・あまり当てにはしないで一向宗

や越中くらいワシらで何とかしようでないか・・・」  
直江景綱が話しを終わらせようと言った。

「それにしても仏の世界も大変じゃ・・・一向宗に真言宗に分かれて、おろおろ・・・」

色部勝長が少しおどけて言った。

「関東の諸大名と同じか・・・佐野昌綱殿の青い顔を思い出してもう

たわ・・・」

斉藤朝信も苦笑いしていた。

輝虎も苦笑いしながらも複雑な気持ちで話を聞いていた。

輝虎は真言宗の信者ではあったが（毘沙門天ももちろん信奉していたが）実は春日山城近く

の浄興寺は親鸞聖人が開いた寺で、元来は信州の川中島にあったのだが、川中島の戦いで焼

失後、輝虎の誘いで越後に移転してきたのである。親鸞聖人は浄土真宗、一向宗の開祖である。  
る。

越中では一向宗と戦い、他方、越後では彼らを保護したのである。もちろん、寺社勢力も戦国の世で生き残るための術でもあったが。

輝虎は毘沙門天を信奉していたが宗派としては真言宗である。これは実の母親の虎御前が

真言宗を熱心に信仰していたからである。

ふと輝虎は母のことを思い出した。

「・・・母上の病状も心配だな・・・」

輝虎はつぶやくように言った。

虎御前は年明けから体調が芳しくなく、床に伏せがちであった。

「・・・新兵衛も・・・元気になってくれると助かるな・・・」

金津新兵衛も既に70近い老人になりで最近は衰えがめつきり自立つようになり、戦場に赴

くことは少なくなり、春日山城での留守が多くなっていた。

「春日山に帰ったら越中での勝利祝いの傍ら今度新兵衛に元気の秘訣でも教えてやろうか

のうー！」

藤資が80近い老人とは思えぬ元気のよさで大声を上げた。

「ほどほどにせいよ・・・ええ年なんじゃから おぬしだって・・・ま

「たく・・・」

勝長が少し呆れ気味に言うと同笑いが起きた。

「ところで・・・」

輝虎が話を遮る様にぼそりと言った。

「本庄繁長や長尾藤景たちが今回参戦遅れているが、厳しい戦いになりそうなので早めに援

軍を出すよう催促を頼む・・・」

「了解！すぐに来させますわ！」

藤資が年甲斐も無く元気に胸板を叩いて輝虎に返答した。

越中に入った越後軍であったが一向宗の予想通りの大軍の前に行く手を阻まれたが越後軍

もそれに応じるように慎重に動いていた。

繁長や藤景らが到着してから万全の体制を整えて攻撃するためである。

「それにして・・・遅いな・・・」

陣中で輝虎は少ししびれを切らしていた。

「まあ・・・揚北から越中までは結構な距離がありますからな・・・」

本庄実乃が物静かに言った。

「そうであったな・・・うん・・・」

輝虎もうなずいた。

その時であった。

「遅れているのは遠いからだけではないですぞ！御免！」

中条藤資が陣中の外から大声で突然割り込んでくると息子の景資と共に入ってきた。

二人とも珍しく緊張した面持ちであった。

景資が

「阿虎様に是非これを！」

一枚の手紙を差し出したのである。

「・・・？」

輝虎は手紙を受け取ると不思議そうな顔で目を通した。

輝虎は手紙を読んでいる内に顔がだんだん蒼冷めていった。

座っていたが腰が抜けそうになっていた。

蒼冷めたまま手紙を他の者に廻した。

他の者も手紙を読むとみるみる皆、顔が強ばっていったのである。

「これは一大事・・・！すぐに全軍を春日山城に撤退させますぞ！」

直江景綱が越後軍を春日山城に撤退させることを輝虎の返答を待たずに決定した。

「・・・全く・・・調子に乗りおつて若造が・・・！」

藤資も年甲斐も無く鼻息を荒げていた。

輝虎は蒼冷めたままであった。

「この手紙を受け取って行動を起こす者が他にいるかもしれせん！すぐに家

臣団を集めて御確認を！」

本庄実乃も手早く動いた。

「あまり露骨に動くなよ！椎名や一向衆に感づかれて撤退時の後ろを突かれたくないからな！」

柿崎景家が猛将らしく言った。

手紙の内容は本庄繁長から輝虎に反旗を翻し信玄と組もうと言った内容であった。

輝虎はあまりの衝撃で他の者たちの慌てたやり取りを聞いていたのか定かではなかった。

しかし

「繁長め・・・」

輝虎は目に少し涙を溜めながら言った。

「信用していたのに・・・よりによって信玄なんかの馬鹿げた誘いに

乗ってしまふなんて・・・」

輝虎は悔しそうな面構えで言った。

「私を馬鹿にして・・・思い知らせてやる・・・！」

輝虎は普段は物静かだが一度火が入ると妙な怖さがあった。

今回も久々にその怒りが爆発したのである。

越後軍の動きは早かった。

越後軍はその日のうちに康胤や一向宗に気付かれないように密かに春日山城に撤退していた。

った。

輝虎は撤退の途中の馬の上でもずーっと酒を飲んでいた。

この怒りの感情の吐き出し口を酒に向けたのである。

春日山城に到着する寸前、輝虎のもとにその行き場の無い感情に追いつきをかけるような衝

撃で嫌な報告がもたらされた。

越中に向かう準備のために春日山城にいた長尾藤景が密かに春日山城を抜け出そうとした

ため城内で守備兵と乱闘になりそのまま討たれてしまったという。

藤景がなぜ抜け出そうとしたのかは、はっきりしなかったが居城の高城城（下田城）に無断

で戻ろうとしたため、城の守備兵が繁長に内通したと判断し、追いかけたところ斬り合いに

なり、そのまま討たれてしまったとの報告がもたらされたのである。

輝虎は藤景が討たれたとの報告をを聞くと怒りを通り越し、衝撃でがっくりと肩を落とした。

今までと違い、うつて変わって落ち込んだ表情に代わった。

藤景は繁長同様、関東戦線や川中島で活躍し、輝虎が信用していた男であった。



また同じ長尾一族でもあった。

その藤景までもが自分に反旗を翻したことに衝撃を受け、深く落ち込み、また彼を討つてし

まったこと、同族討ちを自分が行ってしまったことに対し、そのように仕向けた信玄に対す

る深い嫌悪感とそれに乘せられてしまった自分にも未熟さを覚えたのであった。

輝虎を更に苦悩させたのは輝虎が、繁長や藤景たちに持っていた微妙な感情に対する彼らの

予期せぬ返答なども輝虎を苦しめたのである。

一旦春日山城に撤退した輝虎であったが、まずは再度越後国内の引き締めから入った。

その後の調査でも越後国内で本庄繁長に同調したのは藤景だけだったようで他の揚北衆は結局誰も繁長の誘いに乗らなかった。

これは繁長にとっては大誤算であった。

ただ、越後の隣国の出羽国の大宝寺義増が繁長に付いたので、出羽から信玄からの援護が入る可能性があり謀反の長期化は充分に予想された。

そこでまず、輝虎は栃尾城の本庄実乃や栖吉城の上杉景信の部隊で反抗の狼煙をあげた長尾藤景の残党を鎮圧し、藤景の高城城（下田城）を棄却した。

藤景の遺族達は輝虎の意向で討たれることは無かったが、城を追われ、近くの奥深い山郷に逃れていった。

残った繁長であったが繁長は輝虎だけでなく、他の越後衆も認める猛将である。真正面からぶつかるのは難しいことは輝虎や越後衆自身が一番わかっていた。そのため繁長に対しては慎重な作戦を取ることにしたのである。

まず輝虎は出羽国の大道寺に兵を送りこれをすぐに降伏させ、繁長

への補給を絶ち孤立させた。

繁長も信玄へ兵を動かすように盛んに催促をかけていたが、信玄の本来の目標は既に駿河にあり、厩橋城からの援軍も結局繁長に送られることは無く、補給物資が細々と送られただけであった。

繁長もこの頃にはようやく自分が迂闊にも信玄の口車に乗ってしまったことを今更ながら後悔していたがもはや、自分が言い出しの手前引くには引けない状況にもなりつつあった。

輝虎もようやく繁長に対する反撃体制を整えつつあったが永禄11年（1568年）5月、母親の虎御前が死去したため思わず動けなくなつたのである。

更には繁長にとってはようやくであったが信玄が輝虎が母親の葬儀で動けない隙を縫って7月には川中島最北端の越後側の城、飯山城に信玄が突然軍を送り込んできたが、越後軍の飯山城の守備隊の善戦で甲斐軍を追い払うことに成功したが形を変えながらも信玄と輝虎の争いはまだ続いていたのである。

飯山城から甲斐軍を追い払ったことによりようやく繁長打倒の兵を繁長の本拠地の村上城に進軍させたが予想通り輝虎側の軍勢は戦上手の繁長軍相手に苦戦を強いられる展開になつたのである。

繁長軍は夜襲や少数の兵による奇襲攻撃を輝虎側に向け、輝虎側を翻弄したのである。

それでも兵力に勝る輝虎がなんとか優勢を保ち、秋口にはようやく繁長の居城の村上城を包囲するところまで追い込んだのである。

村上城の包囲まで持ち込んだ輝虎陣営であったが油断はできなかつた。兵力が劣る繁長側と言え、激しい抵抗が予想され、無理をすれば味方の犠牲も馬鹿にならなかつた。輝虎は持久戦覚悟でじっくり構えることにしたのである。

## 天下騒乱

本庄繁長の立て籠もる村上城を囲む輝虎の陣地に都からの情報もたらされたのはこの頃である。

永禄11年（1568年）10月にあの織田信長が足利義昭を引き連れて上洛したのであった。

義昭の後見人の信長は事実上、天下人として名乗りを上げたのである。

輝虎自身に関する知らせも都から一緒に入ってきた。

義昭から引き続き関東管領としての職務を全うするようにとのことであった。

気になる知らせがもう一つ、あの近衛前久が永禄の変で義輝の妻で前久の妹の件で良からぬ嫌疑をかけられ、関白の地位を追われ都を追い出されたとのことであった。

前久の妹だけが助かり、また前久自身が三好三人衆に寛大だったので義昭の怒りを買い、そのまま関白の地位や都を追われることになったのである。

輝虎は報告を聞くと

「・・・今まで通り、関東管領として職務を全う出来るとは至極光栄・」

久々ににこやかな表情を一瞬見せたが

「・・・前久殿とは色々あったが・・・」

前久のことになると少し口をつぐんでしまった。

「・・・都は大変だな・・・もう戻れないが・・・昔が懐かしいな・・・」  
輝虎はしみじみと言った。

「・・・ところで・・・」

輝虎は今回報告してきた越後屋敷、京都留守役の神余景綱の使者に

聞いた。

「信長殿の軍は強いのか？」

使者は大きく首を縦に振ってうなずいた。

信長の軍事力の前に、義輝を討った三好三人衆は三好家の本拠地の四国阿波に落ち延び、三好長慶の後を継いだ三好義継（長慶の弟の十河一存の息子で長慶の養子）は信長に降伏したと言う。

少し意外だったのはあの松永久秀も降伏、信長に許されたという。

「ふうん・・織田信長公はなかなか心が広いな・・」

輝虎は思わず感嘆した。

「將軍殺しの男とは言え・・降伏したから助けたのだからな・・」

輝虎はあのいやらしい危険な松永老人を思い出していた。

「足利家を盛り立てる同士としてお祝いでも贈ろうと思うが・・」

輝虎は重臣らに相談してみた。

「良い考えで・・しかし信玄も信長殿に接近しているので気をつけた方が良いのでは・・」

本庄実乃が普段通り冷静に言った。

「信長公は義昭様のため上洛されたまで・・関東管領職を認めてもらったお礼に義昭様の後盾の信長公と友好関係を結ぶのも大事であるう・・信玄と信長公との仲の牽制にもなるかと思うが・・」

輝虎の関東管領の職務にまだこだわることに関しては直江景綱らも危うく少し口を出しそうになったが慌てて引っ込めた。

「解りました。京都留守役の神余に上洛祝いを届けるよう通達いたします・・」

千坂景親が手続きを直ぐにとり、信長は鷹狩が好きとのことで越後の鷹が急遽、都に送られたのである。信長と輝虎の関係はこの後しばらくは良い関係が続くのである。

しばらくして

「上洛か・・」

輝虎は独り言のように言った。

輝虎は若い頃は都が好きで、もちろん所要もあつたが、二度も行ったことがある。

今でも都が好きで上洛したいと言う気持ちがあつたが当時とは都も自分の環境もかなり変わってしまった。

また上洛の意味自体も変わりつつあつた。

自分が昔上洛したような旧態的な物ではなく、天下に力を誇示するためである。

「それにしても・・・」

輝虎は目をと閉じると

「信玄のおかげで関東どころか越後国内のごたごたに振り回されるとは・・・繁長も繁長だ・・・」

輝虎は大きく溜息をついた。

輝虎はしばらく間を置いて

「ところで・・・」

話を切り替えるように言った。

「私はあまり天下とかには興味はないが・・・義昭様への挨拶や信長公に会いに行くのそれほど悪くはないかと思うが・・・」

輝虎は少し上洛の件を気軽に言ってみた。

「昔とは上洛の意味が変わっております・・・信長殿は恐らく足利義昭様を担いでらおられるので信用に値するかと思いますがもう少し様子見をされたほうが・・・」

景綱は言葉を選ぶように言った。

「信長公の印鑑は天下布武と彫つてあるようで・・・」  
実乃も少し警戒感を持ちながら言った。

輝虎は黙ってしまった。

自分は天下には本当に興味はなかつた。興味は関東管領の職務を全うすることである。

ただ信長の印鑑の件は少し気にはなつた。

天下布武の意味が將軍中心なのか信長中心なのかはこの頃はまだ誰

も知る由もなかった。

既に下克上の世らしく、松永久秀のように將軍暗殺をいとわぬ者がごろごろと出ている世の中で、何が起きてもおかしくはなかった。天下布武の意味もいずればはつきりしてくる問題には違いなかったが、その場合の対応についてはあまり考えないようにしたのである。今は悪いことはあまり考えず、繁長の乱の鎮圧に集中するためである。

ただ、そえでもやはり信長の久秀に対する寛大な処置は輝虎も口外しなかったが正直少し心外ではあった。

久秀の危険さは信長も充分認識しているであろうし、義輝も兄殺しの人物を放っておくはずも無いと輝虎も思ったからである。

もちろん、実は久秀の処遇を巡って実は信長と義昭の間に、密かにこの頃すでに微妙な軋轢が生まれ始めていることなど輝虎が知る由もなかったが。

確かに久秀の実力は畿内で高く評価されていた。

下克上から成り上がり下克上に呑まれた三好長慶も久秀を重宝していたほどである。

しかし長慶が下克上に呑みこまれていったのには久秀が裏で糸を引いているとの噂ももっぱらであった。

そのような危険人物を傍らに置き、將軍を立て、また、自らは天下布武なる印鑑を使うなど輝虎にとって信長は少々理解し難い点があったが、この時は信長は心が広いのであろうと、それで片付けるとのしたのである。

「都かあ・・・」

輝虎は色々考えているうちに無意識で言った。

それを聞き逃さずと輝虎の色々な考えを遮るように

「まあ、都に行くにしろまずは信玄をどうにかせぬといけませんな・  
・ワシと信玄の目の黒い内は諦めなされ！」

中条藤資が生真面目な顔をしながら冗談交じりで入ってきた。  
輝虎も思わず苦笑いしてしまった。

「信玄か・・・」

輝虎は一言言うつと

「繁長には信玄と組んだことをすっかり後悔してもらわないとな・  
・」  
厳しい表情で村上城を睨んだ。

11月になると輝虎は本格的に村上城に対する攻撃を開始した。  
石火矢を多数運用してじわじわ攻めだしたのである。

一方輝虎が繁長の謀反に追われている頃、既に畿内の状況も信長上  
洛で騒がしくなっていたように東国も信玄、氏康、氏真の甲相駿三  
国同盟崩壊による混沌の状況は同じで輝虎の元には乱の長期化によ  
る巻き添えを恐れて奥羽の蘆名盛氏や伊達輝宗が仲介に入って和睦  
を勧めるような動きを頻繁に見せるようになっていた。

輝虎も繁長の實力は充分に買っており、今回は厳罰に処すとは言っ  
ていたが、殺すには惜しいことも充分に承知していた。

もちろん繁長の言い分も耳には入っていた。

輝虎の領土を取らない方針に対する反感である。

繁長も越後では子沢山であったが子供に与える領土の件でこの頃にな  
ると輝虎の元にもこの手の相談は密かに入っていたのである。

もちろんこれは繁長だけの問題ではなく輝虎もいずれどこでは何ら  
かの方針を決める必要がある大問題ではあった。

また、繁長の實力由縁であろうが、繁長の本心は輝虎に命令される

立場と言うよりは対等な関係のにしたいような感情があり、信玄と組むというよりは単に独立してみせると言った気概のほうが近いものがあつた。

信玄の謀略が原因で繁長が信玄の誘いに乗ってしまったとは言え、いずれ誰かが起こす必然的な物のような気も輝虎自身も持っていた。越後衆は扱い難いと言うのは輝虎が一番良く解っていることである。

関東や氏康側の動きも急になっていた。北条側の輝虎陣営への動きは明白で北条側から仕掛けるような動きは全くなり方を潜めていた。氏康の視線は完全に駿河と安房に釘付けになっており、関東方面では輝虎と提携する動きすら見せており、それを元に輝虎の元を去つた北条高広や由良成繁が、信玄の西上野に対抗するためと関東の混乱を恐れて輝虎と接触しようとする動きを盛んに見せていた。

輝虎側も万全ではなかった。この年は予定外なことが続いていたが、暮れにはあれほど元気だった今回の繁長攻略の責任者で揚北衆筆頭の中条藤資が年には勝てず急死してしまつたのである。そのため繁長の乱の鎮圧は更に時間がかかるのである。

輝虎が自分の都合に追われて村上城の包囲を長期化させ、繁長が氏康と信玄のごたごたに巻き込まれている間にも、村上城の物資がどんどん困窮していき繁長のあせりをあざ笑つかのように、ついに北条と武田の蜜月も遂に終焉の時が来て、信玄は永禄11年（1568年）12月に駿河に侵攻したのである。

繁長も自分は信玄に捨て駒にされ援護が受けられないことを今更ながらようやく悟り、繁長自らも輝虎と講和を強く望むようになり、奥羽の蘆名盛氏や伊達輝宗に頼んで盛んに和睦の機会を求めていた。



輝虎も本音では越後国内の騒乱は終わりにしたかった。信玄と氏康が争いだすなど行き詰まった関東戦線の建て直しと、その後を決める絶好の機会と考えていたのである。

中条藤資の揚北衆の筆頭格の後任はこちらも輝虎の栃尾城初陣以来の重鎮の色部勝長が任命され、引き続き繁長の乱の鎮圧にあたった。輝虎も一旦春日山に後退し、信玄や氏康の件に対応することにしたのである。

ところがここで再度予想外の事態が起こったのである。

年が明けて永禄12年（1569年）2月、村上城から出てきた繁長側の部隊が色部勝長の陣に奇襲をかけて、勝長に重症を負わせる事件を起こしたのである。

村上城攻略の最高責任者を襲われたことにより、輝虎は繁長が和睦を願いながらも交戦を仕掛けてきたことに、顔に泥を塗られたと思い激怒し、和睦方針を変更し、村上城に総攻撃を仕掛けることにしたのである。この事件の知らせは奥羽の蘆名盛氏や伊達輝宗にも直ぐに伝えられた。

輝虎たち春日山側の首脳が勝長の陣を訪れた時には勝長は症状が悪化し苦痛に顔を歪めていた。

「いやはや・・・ワシも繁長の奇襲部隊に手傷を負うとは・・・老いぼれになったわ・・・」

勝長は傷口を押さえながら言った。

「あまりしゃべるな・・・ゆっくりせい・・・」

直江景綱が気を遣いながら言った。

「いやいや・・・なんのその・・・阿虎様には息子たちが引き続き忠節を誓いますので今後ともお引き立てを・・・ててて・・・」

勝長の長男の顕長と次男の長真は

「父上！仇は必ず果たします！」

が心強く言った。

しかし勝長の答えは予想外の物であった。

「いや・・・その件はもうよい・・・繁長を阿虎様の元に連れてきたのはこのワシじゃ・・・奴は扱いづらいが越後のために今後も働いてくれましようぞ・・・奴の処置は寛大に願います・・・あと・・・奴は阿虎様に本気で逆らっているのではなく土地の件を言いたんでしような・・・ワシもそうだが子供達に土地をどう分けるかは越後衆にとって大きな問題になっている・・・今までのやり方を改めてほしいのです・・・てて・・・今回は繁長が噛み付いてきたがいずれ別の者が起こすに違いない件・・・是非阿虎様には善処を・・・てて・・・」

勝長は傷口を押さえながら今まで抑えて言えなかったことを一気に喋った。

「よくわかった・・・それ以上は言わなくても良い・・・安心されるよう・・・」

輝虎は一言言つとそれを聞き勝長は安堵の表情を浮かべた。

「顕長、長真、繁長の件はわかったな・・・越後・・・阿虎様のため己の私情は挟むなよ・・・」

勝長は顕長と長真兄弟に念押しするかのように言った。

顕長と長真は予想外の答えに不満そうな顔をしながら黙つてうなずいた。

「阿虎様の一言を聞いて安心しましたわ・・・少し休ませてもらいますわ・・・」

勝長はそう言つと静かに再度床に伏せた。

「早く傷の手当てをして再度以前のように頼む・・・そなたの忠節あてにしている・・・」

輝虎も一言言つと勝長はうんうんとうなずきながら静かに目を閉じた。

輝虎が自分の本陣に戻って間もなく、勝長が息を引き取ったとの連絡が直ぐに届けられたのである。

「繁長の大ばか者めが！」

輝虎は報告を聞くや否や癩癩を起こして勝長との約束など忘れてすぐに軍を村上城攻めに回したのである。

しかし繁長軍の予想通りの激しい抵抗でこの日の攻略は結局うまくいかず、輝虎側は再度軍勢を整えて攻撃するための準備に入ったのである。

そのような絶妙な時に、奥羽の蘆名盛氏や伊達輝宗の使いが慌ててやってきたのである。

気の収まらない輝虎は最初は使者とは会うつもりも無かったが、使者側の必死の依頼と、蘆名や伊達の面子もあるので渋々話だけは聞くことにしたのである。

使者は色部勝長の件は偶発的な不幸な事件であったと丁寧に詫言を入れた後、繁長が長男頭長を人質とし輝虎に差し出すのと、繁長と組んで輝虎に楯突き、先に鎮圧された出羽庄内の大宝寺義増の越後側の支配を蘆名盛氏や伊達輝宗が認めると表明したので急に気が治まってきたのである。

繁長の人質には興味がなかったが出羽庄内地方の越後の支配を認める件は良い条件であった。輝虎自身は領土には興味が無かったが気が落ちつくとも勝長の話をふと思いついたのである。

今回の本庄繁長の件は許し難かったが繁長は殺すのには惜しい男であるのは事実であった。

繁長への許しを願う声は勝長だけでなく、千坂景親や喜平次からも上がり、このとき輝虎は使者への即答はしなかったが結局は許すことにしたのである。

しかし長尾藤景は厳罰に処した関係上、帰参は認めても自分の元には来させないことにしたのである。

一週間程して、輝虎はようやく使者に条件を呑み、繁長の越後への降伏帰参を認めたのである。

間もなく使者と一緒に繁長が人質の長男顕長を連れて輝虎の元に詫びにやって来たのである。

輝虎は使者を労い、蘆名盛氏や伊達輝宗へ今後の友好関係を願い、また色部勝長の息子の顕長、長真兄弟、中条藤資の息子の景資を揚北衆の筆頭として今後は引き立てることを表明した。

そして繁長には帰参は許すが繁長の官職の空きが無いの理由に春日山城にはもう来る必要がない旨をはっきりと伝えたのである。

繁長は表情一つ変えず、今までとは違い随分かしこまっていたが、「わかりました・・越後への帰参を許して頂いただけでも至極光栄・また・もし官職が空きましたらいつでもこの繁長に声をかけてくださいませ・・」

と一言寂しそうに言うと、村上城に戻って行ったのである。繁長と輝虎はその後顔を交わせることはなかった。

こうして永禄12年（1569年）3月、ようやく本庄繁長の乱は平定された。

繁長はこの件が響き輝虎時代は終始冷遇され、彼が再度活躍するのは輝虎、謙信が急逝後、喜平次、後の景勝の代である。

繁長は景勝の越後の後継者争いの時の御館の乱の時も終始景勝を支え、更には北の関ヶ原と言われる長谷堂城の戦いの時も、伏戦の福島城攻防戦で東軍、徳川家康方の伊達政宗と戦い、伊達側を撃退し、上杉側が加担した西軍の敗戦後の処理の時の上杉家取り潰しの最大の危機も千坂景親と繁長は徳川家康と巧みに交渉し、謙信時代の穴埋めをするかのような活躍を見せ、上杉家の危機を救った功労者になるのである。



## 越相同盟

本庄繁長の件が鎮圧されようやく輝虎も一息つきたいところであったが関東の平穩はこの頃既に破られ、新たな騒乱の火ぶたが切つて落とされたばかりであった。

繁長の乱が鎮圧される直前の前年、永禄11年（1568年）12月には武田信玄が大軍を率いてかつての同盟者の今川氏真の駿河に侵攻したため甲相駿三国同盟は完全に破綻し、北条氏康も駿河の今川家の救援のため、急遽出兵することになり、甲斐の武田家と相模の北条家は敵対関係になったのである。

今川義元の実母、寿桂尼が没落する今川家を何とか食い止めていたが寿桂尼が同年死去すると信玄は絶好の機会とばかりに同盟を踏みにじり進軍させたのである。

この件で氏康の息子、氏政に嫁いできていた信玄の娘の黄梅院は別離させられ甲斐に送り返され、北条からも輝虎の元に和睦交渉の依頼が正式に持ち込まれ輝虎も休む間もなくその対応に追われることになったのである。

駿河に侵攻した武田軍はあっという間に今川軍を打ち破り今川の本拠地の駿府まで怒涛の勢いで進撃し一気に占領したのである。氏真は妻子達の籠すら用意できず徒歩で掛川城まで後退する惨めなありさまであったが、信玄の駿河侵攻と同時に西からも信玄と手を組んでいた織田信長の盟友の徳川家康軍も侵攻を開始したため、掛川城もこの年の暮れには徳川軍に包囲され、今川家は滅亡の瀬戸際に立たされたのである。

氏康も氏真救援のために氏政率いる大部隊が武田の1万8千の倍以上の4万5千の大軍で伊豆から駿河に侵入するが、今川軍の予想以上の早い敗退と、氏政も武田軍の兵力が少ないとはいえ、強敵であ

ることは認識していたのでお互い駿河内で睨み合いに終始し、前線は膠着状態に陥ったのである。

このような緊迫した事態、輝虎も繁長の件でのどたばたはあったが、繁長の件の解決の目処が立ち、北条側から盛んに越後と相模の和睦、しいては同盟の要望が入り、輝虎もその条件を引き出すべく色々案を考えていたのである。

北条側は実は永禄9年（1566年）頃から氏政の弟の氏照、氏邦が密かに動き輝虎との妥協点を探り続け、輝虎から北条側に寝返った由良成繁、北条高広等を使い準備をしていた。

永禄9年は輝虎が臼井城の合戦で大敗を喫し、更には北条高広らが離反して関東からの前面撤退どころか武田軍、北条軍に越後本国へも侵入されかねない越後にとって一番危険な時期であった。

信玄はともかく氏康がそのような輝虎の危機という絶好の機会に動かなかつたのはこの頃から氏康の信玄に対する信頼が信玄の息子の義信を幽閉し今川から来た妻子と離別させていた件で崩れており、万が一の保障のために輝虎をわざと残していたのである。

輝虎への気遣いを見せるように、北条軍は以前より築田晴助の関宿城にも何度か攻撃をかけていたが決して力づくで無理押しする事は無く緩い包囲に終始し、表向きは輝虎、越後軍を買っているので慎重に動いていることになっていたが、氏康はもっと先の起こるであろう今日の事態を予想して動いていたのである。

実はこの年も北条軍が関宿城まで再度押し寄せていたが、氏康が輝虎を交渉の席に早く付かせるために仕組んだ物で、輝虎が交渉に応じることを表明すると包囲軍は計算したようにさっさと小田原へ引き上げていったのである。

輝虎も氏康との和睦には表向きは賛成ではない素振りをしていたが内心は歓迎していた。

氏康からの和睦条件は輝虎から見ても北条側の大幅譲渡の内容で

武田氏に対して越後軍と北条軍との共同、同時作戦進行、上野、武蔵国の岩槻城他数城を上杉側に譲渡する、氏政の子を養子として送る、足利義氏を古河公方にする、輝虎を関東管領として承認する・

と言った内容で

特に上野、武蔵国の岩槻城他数城の上杉側譲渡、養子縁組、北条側の輝虎を関東管領として承認することは輝虎には魅力的な条件であった。

武田氏への共同作戦もそれほど問題ではなかったが古河公方を足利義氏にする件は悶着が予想された。

古河公方は今は関宿城の築田晴助の甥の足利藤氏が形式上は勤めていたが藤氏は北条側に捕らえられて以来、行方不明扱いになっていたがおそらく北条側に殺された可能性が高く、それが逆に築田晴助の徹底した反北条の源になっていた。足利義氏は氏康の妹を母に持ち、妻を氏康の娘に迎えており、事実上北条氏の一族であった。晴助の激しい反発が十分に予想できた。

輝虎も築田晴助や関宿城が関東の統治における重要な人物であることは認識していた。

ただ藤氏がこの世におそらくいない以上、そこに固執して全体的な話がこじれるのは歓迎できなかつた。



関東での状況は輝虎が認めるように北条側が終始優勢でこのような和睦が無ければ関東からの前面撤退も避けられない事態まで越後側が追い込まれているのも事実であった。

北条が輝虎を関東管領として認める点も大きかった。

北条側は本音では関東管領の地位など重視していなかったが、体裁にこだわる輝虎にとっては北条が自分を関東管領として認め、形式上は下に入ることは十分に歓迎できる条件であった。

そのため晴助の件は今回後々別の対策を考えて北条側と条約を結ぶ方にしたのである。

家臣の中でも今までとの北条との因縁の経緯から和睦に反対の意見もあったが、度重なる関東出兵に多くの越後諸将が疲弊していたため、今回の和睦に賛成の意見も多く、直江景綱や本庄実乃ら重臣も輝虎の関東への固執がこれによって解決されるのであれば容易いものと賛成に回ったため、輝虎も表向きは彼らの意見を尊重するという形を取り、また輝虎自身も現実的な判断から外交での実利獲得によって関東方面の決着を図ることにしたのである。

交渉は決して順調ではなかったが、まず北条側が輝虎を関東管領として正式に認め、輝虎側も足利義氏を古河公方として正式に認めた。武蔵国の輝虎側への譲渡も詳細は後々詰めると言っ前提つきであったが岩槻城他、幾つかを譲渡することで決着はついた。

領土変更に伴い、成田氏が北条側に鞍替えになり、逆に今回の同盟の立役者のあの北条高広、由良成繁たちが輝虎側へ帰参することになったのである。

武田軍に対する北条軍と今後共同で歩調を合わせて作戦を練ることについても輝虎側が同意した。

養子交換、人質の交換は少しもめて当初氏政の息子の誰かを送る予定であったが、まだ幼子が多く、氏康からも幼子を送るのは忍びないとの申し出があり、輝虎もそれを受け入れ、別の人物を追って養

子として送ることになったのである。

輝虎側からも実子のいない輝虎側が誰を送るかでもめたが柿崎景家夫婦から大昔の黒田秀忠の乱の時の恩返しと（柿崎景家の妻は黒田秀忠の娘）景家夫婦の息子、晴家が送られることになったのである。里見氏と北条氏との和睦も輝虎が受け持ち、上総国、下総国、安房国の3カ国は里見領とすることも北条側が認めることになった。

このように輝虎と北条の同盟交渉は大詰めを迎えていたが、それを牽制するように永禄12年（1569年）5月、駿河内で睨み合いを続けていた武田軍と北条軍が、武田軍の奇襲攻撃により一時均衡が破られるが、北条軍が善戦し武田軍は敗退、信玄も兵力差と甲斐からの物資の補給不足で不利を悟り、武田軍本隊は一旦甲斐へ撤退したのである。

武田軍が甲斐へ撤退した翌月、6月にこうして輝虎と北条の同盟は正式に結ばれた。

越相同盟と歴史上は呼ばれている。

しかしこの同盟は輝虎や氏康が思ったようにうまく機能せず、まず越後側では関東諸將の離反が逆に相次いだのである。

輝虎にとってこれは大誤算でまず、太田資正、築田晴助らが輝虎とは今後は行動を一緒にしないと離反してしまったのである。

輝虎はこの二人が関東での重要人物と見ていたので二人の離反は今後の行動に支障が残るものであった。

輝虎は晴助の離反は古河公方、藤氏の件である程度覚悟はしていたが、そこを資正に頼んで説得してもらおうと考えていたので資正の離反は正直予想外であった。

別れの挨拶に来た資正に輝虎も岩槻城の返還だけでなく、まだ北条と交渉中ではあったが、武蔵松山城も返還交渉をしていることを材料に慰留に努め、更には交渉が不調の場合は越後への客将としての招待と城の譲渡をも持ち出したが、結局資正は首を縦に振らず、今

までお世話になりましたと言うと輝虎の元を去っていったのである。

更には安房の里見義堯、義弘親子も輝虎側から離反し、信玄と逆に同盟を結ぶと言う事態になり（甲房同盟）、関東北部の支配を狙う常陸の佐竹義重までもが輝虎から正式に離反してしまったのである。

輝虎は関東諸将の予想外の行動に肩をがっくりと落としていた。

「・・・関東管領とは難しい職務だな・・・」

輝虎は深い溜息をついた。

「関東管領が難しいのではなく関東国人衆が気難しいのですな・・・本庄実乃が言った。

「・・・私が北条と結べば関東が静かになると思ったのだが・・・前と全く変わらないか逆にもつと騒がしくなってしまうた・・・」

輝虎は複雑な顔で言った。

「太田資正殿のため 岩槻城や武蔵松山城まで用意したのに・・・ふうつと輝虎は溜息をついた。

「里見親子のためにも氏康殿に上総、下総、安房3カ国の安堵をも認めさせたのに・・・」

輝虎は少し不満げであった。

「ひとつはつきりしましたな・・・関東衆はとにかく北条を認めないと言うことです・・・」

直江景綱は静かに言った。

「しかし誰一人まともに北条と戦えないではないか・・・おかしすぎる・・・」

輝虎は相変わらず不満げであった。

「違いますな・・・北条との対等の関係は関東衆は受け入れ難いのでしよう・・・北条が下に入れば良いのでしょうか・・・」

景綱は慎重に言った。

「みんな勝手すぎる・・・それが一番難しいのに・・・」

輝虎は再度深い溜息をついた。

「我々から離れた里見親子や佐竹殿は信玄と組むようです・・・」  
本庄実乃が言った。

「・・・」

輝虎は黙っていた。

「太田資正殿も佐竹殿に身を寄せているとか・・・」

色部勝長の後を継いだ色部顕長が言った

「信玄の奴を何とかしなければ 將軍様へのご挨拶へもおちおち行  
けませぬ・・・」

中条藤資の後を継いだ景資も続いた。

「最後の隣の信玄の息のかかった連中を静かにさせましょう・・・」  
顕景、最近元服し改名した喜平次が静かに鋭い視線で言った。

家臣団もうんうんとうなずいていた。

輝虎も軽くうなずくと

「・・・私も 関東は少し疲れた・・・関東の男は扱いづらいしな・・・」  
輝虎も少し冗談を言ってみてみた。

一同軽い笑いが出たが実はこの一言でみな本音ではほっとしていた。  
関東への遠征からようやく開放されるからである。

「ところで・・・わしらも元々は関東出身ですぞ！」

柿崎景家が言うと

「いや わしらはりっぱな扱い易い忍耐強い越後衆じゃ！」

斉藤朝信が横槍を入れると一同笑いが起こった。

「・・・越後の隣国、越中は 能登 加賀は豊かで広いですぞ・・・都  
も近くなる・・・」

普段は無口な金津新兵衛が何か含みがあるように言った。

新兵衛もすっかり年老い、もはや客将というよりは大老と言った雰  
囲気の方が似合うようになっていた。

「・・・では・・・越中方面を静かにさせようか・・・」

輝虎はこうして今後の方針を決めたのである。

「ところで・・・」

朝信が言った。

「駿河の件ですが・・・掛川城に立て籠もっていた今川氏真殿は徳川家康殿に降伏したそうです・・・」

「駿府は徳川軍が抑えたとか・・・」  
顯長も続いた。

「今川が滅んだのか・・・はかないな・・・」

輝虎は目を閉じて言った。

「氏真殿は氏政殿の所に身を寄せているようです・・・」

景資が言った。

「信玄は家康殿が駿府を占領したことに怒っているそうです・・・」  
実乃が言う

「・・・裏切ったり手を組んだり攻めたり取ったり好き勝手な連中だなあ まったく・・・」

輝虎は呆れ顔で言った。

輝虎はしばらく間をおいた後

「関東が静かになったら、將軍様への御挨拶と・・・信長公にもお会いしたいと考えていたのだが・・・まだまだ先の話になりそうだな・・・」

「  
寂しそうに言った。

一方 駿河から一度撤退した信玄であったが同年永禄12年（1569年）6月にはすぐに部隊を整え駿河に再度二度目の侵攻を仕掛けてきたのである。

北条軍も氏政の大軍が再度駿河に入り伊豆で両軍睨み合いを始めるのである

一方輝虎も北条への援護と武田への牽制をかねて、8月に春日山城を出発し、武田信玄の誘いに乗り、反旗を翻した椎名康胤を討伐す

るため越中に入ったが武田信玄の扇動した一向宗が康胤側に参加したため、大軍相手に思わぬ苦戦を強いられるのである。

それでも何とか前年永禄11年（1568年）秋には本庄繁長の乱の以前に進出した神通川手前の富山城まで一気に進軍させ康胤を追い詰めたのである。

しかし北条氏康と氏政親子から依頼が入っていた、武田軍の牽制のために信州への進出を8月までしてほしいとの約束は越中攻略に予想以上に時間がかかり守られることはなかった。

輝虎が北条と8月に信州に侵入すると約束していたのに信州に行かず越中に行ったのは信州川中島に高坂昌信が駐留しているのもあったが、北条に対してこちらの不満を表すためにわざと目的地を変更したのである。

今回の越相同盟の交渉は北条側は氏康が主に行っていたが当初約束していた武蔵国の岩槻城の輝虎側への返還も滞り、また武蔵松山城が今回輝虎への返却交渉に入っていなかったことに対して輝虎が不満を表し催促するためでもあった。

養子の件もなかなか北条側が行動に移せず、輝虎側でも武將の離反などがあつたが、噂では北条側も混乱は同じで小田原城内の意見が全くまとまっていけないと言うのが現状であつた。

ところがそのような輝虎、北条の合わない歩調や混乱を見越してか10月に入ると信玄がなんと小田原城に向けて直接攻撃をかけるという予想外の事態が起きたのである。

氏康から急遽救援の依頼が輝虎の元にも届けられ、輝虎も今回は急いで救援の兵を出す準備をしたが、いかんせん越中富山から小田原までは遠すぎ、輝虎は出発はしたものの、全く間に合わなかったのである。

小田原城まで進出し素早く包囲した信玄であつたがさすがに輝虎が10年以上前に10万の大軍で包囲しても攻め切れなかつた堅牢な城だけあつて、信玄も早々と攻略を諦めて3日程で包囲を解き小田原城下を放火しただけで撤退していったと言う。

しかし北条側も直ぐに反撃に入り甲斐に撤退する途中の武田軍に北条氏照、氏邦軍が追撃戦を仕掛け、北条軍は敗れはしたものの武田軍に打撃を与えることには成功し、武田側は荷駄を放り出して甲斐本国に大慌てで引き上げて行つたという(三増峠の戦いと言う)。

氏康からの一連の報告の手紙には、もし上杉軍が来ていれば戦況は大きく変わったであろうに・・・と不満が書かれており、輝虎も言いたいことは色々あつたが、

「越中出兵は表裏ではない(信玄の扇動する越中攻めは北条にとつても利得がある)」

と、今回の遅れの件には詫びを入れ、誓紙をしたためて春日山城に戻り、そのまま北条軍と共同で歩調を合わせるようにする為に輝虎ら越後軍の主力は11月には上野国沼田城に入つたのである。

しかし信玄の動きは予想以上に素早く、10月中旬に武田軍は小田原から戻つたばかりであつたが、そのまま再度、三度目の駿河侵攻作戦を開始して、駿府まで進出したのである。

そのため氏政も慌てて駿河に再度兵を出したため、輝虎、越後軍と北条軍が共同歩調、共同作戦をとる事はこの年はなかつたのである。

年が明けて永禄13年(1570年)正月には今度は輝虎の独断ではあつたが、信玄を牽制するため信玄と通じていた唐沢山城の佐野昌綱を攻めた。

実は氏康から再度武田領西上野を先行して攻めて欲しいとの依頼があつたのだが、輝虎の判断では先に厩橋城の南方からの憂いを無く

す為、唐沢山城を先に攻めたのである。

昌綱はこの頃再度主を変えて、信玄と組んでいたが、西上野の信玄牽制に来ていたとばかり思っていた輝虎が自分の城に突然現れたので昌綱は仰天していたが、いつも通り、昌綱は輝虎に必死に侘びを入れ、再度許されたのである。

輝虎は下野の唐沢山城を黙らせ、また、北条がまだ実行していない約束を履行してから西上野の信玄領に押し入ろうと考えての行動であったが氏康や氏政からも逆に輝虎はあまり約束通り動いてくれないとの印象を植え付け、双方の不信は次第に募って行くのであった。

ただ氏康、氏政親子も輝虎との噛み合わない感じを憂慮したのか、お互いのしこりを除去するため前年、永禄12年（1569年）12月の暮れには輝虎に歳暮を贈り、この時期でのお互いの不信の種を摘むような努力は続けていた。

輝虎も歳暮を受け取るとお返しと手紙を送り、武田領西上野に侵入する前に越後内の家臣団を納得させるため、北条側に再度約束の履行を丁重に求め、北条側もようやくまず岩槻城の輝虎側への譲渡を認め、誓詞をもって応じ、また養子の件も3月になってようやく決定し、氏康の七男の北条三郎が輝虎の元に送られることになったのである。三郎と輝虎はこの後4月に沼田城にて初めて面会することになる。

しかし輝虎の唐沢山城攻撃をあざ笑うかのように信玄は1月には駿河の北条方の要衝、深沢城に対しても攻撃を開始した。

北条軍も再度輝虎に救援を依頼し、輝虎もすぐに三国峠越えの準備に入ったが年明けの永禄13年（1570年）2月には北条側の深沢城は結局開城し、駿河は完全に信玄の支配化に組み込まれてしま



ったのである。

輝虎にとって今回の同盟は足並みがそろわず、結局信玄の駿河侵攻を防げなかった面では収穫はなかったが、武蔵国、上野国の一部を取り戻せ、北条と養子縁組が出来たのは収穫であった。

一方北条にとっては大きな不満の残る同盟であった。結局駿河を信玄に奪われ、輝虎に武蔵や上野の一部を譲り渡したことである。

ただ北条側首脳でも今後の方針はまだはっきり決めることが出来なかった。

氏康の体調が芳しくなく、回復したり悪化したりを繰り返していたのである。

そのため輝虎と北条の関係は駿河が信玄の物になった後もしばらく継続するのである。

## 不識庵謙信

1570年、元号が永禄から元龜に改元された。

改元の理由は戦乱での災異のためとのことであったが戦乱はいっこうに収まる気配はなく、

関東は北条と武田の同盟崩壊による騒乱、畿内は織田信長の台頭などでますます混迷化していた。

元龜元年（1570年）4月、川越城付近を輝虎の養子（人質）になった北条氏康の7男の北条三郎を送り届けた氏康の一行がゆっくりと小田原城に向かって南に進んでいた。

一行は輝虎に対する感想を正直に述べていた。

「いやはや 驚きましたな・・・」

三郎の義理の父でもあった北条幻庵が正直に言った。

氏康は昨年以來体調は芳しくなかったが、三郎の実の父としての務め、輝虎との関係の今後の見極めや、輝虎を實際一度見てみたいという興味心もあり、体に鞭打って出てきたのである。

「噂どおりだったとはな・・・全く・・・」

氏康も正直に言った。

「しかし義理堅そうな温和な方でした・・・これで安心して信玄と戦えるでしょう・・・」

北条の外交官とも言われる板岡部江雪斎は事がうまく運んだことに安堵しているようであった。

「うむ・・・」

氏康も低い声で言った。

しかし氏政の顔も同時に思い出していた。

今回氏政は甲相駿三国同盟の崩壊にともない、信玄の娘で妻の黄梅

院と離縁させられる辛い思いをしていたからである。しかも妻、黄梅院はその後昨年、甲斐で病死してしまったとの情報が入り、氏政だけでなく、氏政の息子たちにも辛い思いをさせていた。だからといって氏康は信玄の行いを許すつもりはなかった。

しかし結局この頃には駿河は信玄に取られ、氏康も次の一手をどうするか悩んでいたのである。自分の体調も芳しくなく、既に56歳になった氏康も次の世代を考えての行動も意識せざるを得なかった。

氏康の考え事を断ち切るように

「お年ですが・・・人身だそうで・・・（男性に）不自由するようには見えませんでしたか・・・」

護衛についてきていた清水康英が意外な感じと少し含みのある言い方をした。

他の者もうなずいていた。

「毘沙門天を信奉されているためお一人とか・・・信仰深い方のように・・・」

板岡部が小声で言った。

「・・・それは言い訳だろう・・・」

氏康が見抜くように言った。

「・・・越後国のための苦肉の策だろう・・・夫を迎え入れれば権力を巡って越後国内が混乱する・・・辛いだろうが・・・良い判断だ・・・信頼に値する人物だ・・・」

氏康は輝虎を率直に褒めた。

「氏政様は今回の同盟は終始反対でしたが・・・」

板岡部が少し遠慮気味に心配そうに言った。

「駿河の件は仕方ない・・・信玄は強い・・・」

氏康は言った。

「・・・だから輝虎殿と組んで北側から信玄を牽制するのじゃろう・・・」

幻庵が氏康に続くように言った。

「・・・戦上手にはとても見えませんでした。が・・・」  
康英はまた正直に言った。

「我々もそうだが信玄も手痛い目にあってる・・・人は見た目では  
ないぞ・・・」

氏康が諭すように言った。  
そして

「信玄が気に入ったのもわかった・・・若い頃はさぞかし麗しき姫  
様だったろう・・・」

氏康が冗談を言った。

「今でもワシはあちらさえよろしければ充分大丈夫ですぞ・・・ふお  
ふおふお・・・」

幻庵が老練な言い回しをした。

一同思わず笑ってしまった。

「氏政様は以前唐沢山城で女子おなごである輝虎様に負けたのがよほど悔  
しかったようで・・・今回もそれでしこりがあるようです・・・」  
板岡部がまた率直に言った。

「氏政には荷が少し重かったか・・・輝虎はただの女子ではない・・・  
気にするな・・・」

氏康は気にしないよう伝えるよう言った。

「そうじゃ・・・アレは只者ではないぞ・・・出奔したり酒飲んだり都  
に勝手に行ったりとおぬしらでもかなり手を焼くぞ・・・あれは・・・」  
幻庵が冗談交じりで言うと同再度笑いが起こった。

「・・・小さい声で・・・晴家殿に聞かれてまた小田原城に大軍で来ら  
れたら困るだろう・・・」

越後側から人質として小田原城に行く柿崎景家の息子の晴家の乗っ  
た輿の方を見ながら氏康までも悪い冗談を言っていた。

「しかし、全くたいしたものだ・・・」

氏康はしばらく間を置くと再度感心するように言った。

「氏康様の体調をもしきりに気にされておりましたからな・・・」  
康英も感心しきりだった。

氏康の体調が優れない情報を輝虎が素早く掴んでいたのには少し驚いたが

「気遣いが出来る方なんだろう・・・情報網もすごいのもよく解ったが・・・」

氏康も輝虎の軒猿の情報網に驚きながらも、輝虎の自分に対する体の気遣いには素直にうなずいた。

氏康に対する気遣いはそれだけではなく

「輝虎様が三郎をいたく気に入ってくれて、自分の名前を譲ってくれるとはな・・・北条と上杉の関係も安泰だろう・・・」

氏康は顎鬚をさそりながら満足そうに言った。

三郎は事実、輝虎にたいそう気に入られて、輝虎の昔の名前、景虎を譲られ、この後は上杉景虎と名乗るようになる。

「・・・姫君の手配までもして頂けるとは・・・輝虎様のこの同盟に対する期待の現れですな・・・」

幻庵もにこやかに言った。

三郎、景虎はこの後、輝虎の姉、仙桃院と長尾政景の娘、清円院と結婚することになる。

清円院は顕景、後の景勝の妹でもある。

「氏政も輝虎殿に対しては複雑な物があるとは思いますが・・・この義理堅さは当家の若い者たちにも是非学ばせたいものだ・・・」

氏康も真面目な顔で言った。

「まあ・・・関東衆の求めに応じて生真面目にあまりに関東に乱入されるんで、正直しんどかったです・・・」

思わず康英が本音を言ったが板岡部が慌てて口に指をやり、それ以上言わないように言った。

「・・・それに比べると信玄の奴は・・・全く・・・仕方が無い奴じゃ・・・」

「

幻庵が呆れ気味に言った。  
氏康も大きくうなずいた。

駿河を落とした信玄は、輝虎と北条の同盟を試すように、この後元龜元年（1570年）10月には越後側の厩橋城や沼田城に攻撃を仕掛けてきた。しかし厩橋城時代のあの北条高広が善戦し、武田軍を追い払い、また、ようやくではあったが越後軍と北条軍も連携した作戦が取れるようになり、上野に上杉軍、武蔵多摩に北条軍が展開し、西上野の武田軍を牽制しようとしたため、それを見てか信玄も深入りせず、軍を引き上げたのである。

しかし駿河を手に入れた信玄は、早速密かに新たな次の目標のための作戦を練っていた。

実は再度北条に接近しようとしていたのである。

信玄は氏康の体調が芳しく無いことを知り、北条が動き難い時を狙ってきたのである。

氏康の元にも信玄の使者が密かに訪れていたのである。

氏康は昨年より体調が芳しくなく、鎌倉で病気の平癒祈願の大般若経典の真読などまで行っていたが、病状は回復したり悪化したりを繰り返し、生死の境をさ迷う程悪化した時期もあった。

そのため輝虎や信玄との今後の関係をどうするかは自分が最後にやるべく仕事とも認識していた。

氏康は今日、体調不調を押してまで輝虎に面会したのは今後の方針を決めるため、直接輝虎に会って判断しようとしたのである。

氏康は今日輝虎に会って、輝虎の実力は十分に解った。ただ駿河を取って気が収まったのか、何食わぬ顔で再度接近してくる信玄も信用できなかったが、信玄の実力も今回の駿河侵攻の件で認めざるを得なかった。

そこで氏康は思い切ったある方針を密かに決めたのである。

一方、輝虎が北条氏康、氏政親子と武田信玄の駿河を巡る争いに巻き込まれている頃、越後の重臣、金津新兵衛も年のせいかな体調を崩すことが多くなっていた。

金津新兵衛は輝虎幼少の頃から輝虎の後見人、世話人として虎千代、景虎時代から活躍し、若年時代の輝虎を常に支え続けてきた。

そのため春日山城内でも客将と言う普通の武将より格上の特別な地位にあり、輝虎も新兵衛に対しては絶対の信頼を持ち常に心を開いて接していた。

輝虎にとつても実の父為景以上に世話になり、輝虎も新兵衛に対しては実の父親のような親近感があり、他人の話はあまり耳に入らなくても新兵衛の話はよく耳に入っていた。

しかし新兵衛も既に高齢に達し、以前のように戦場に出ることもなくなり、春日山城の留守役などが多くなり、最近では体調を崩して床に伏せることも多くなっていた。

輝虎も新兵衛の体調が悪いのは以前から気になっていた。

そんな折、遂に輝虎の元に新兵衛が倒れたとの嫌な連絡が飛び込んできたのである。

輝虎は慌てて駆けつけると新兵衛は静かに床に横になっていた。

「大丈夫か？新兵衛・・・？」

輝虎が声をかけると新兵衛はうつすらと目を開けにこりと笑った。

「今までも散々世話をかけたが・・・まだこれからも世話になろうと思っているのに・・・早く元気になっておくれ・・・」

輝虎が静かに言った。

新兵衛はにこりと静かに笑ったままであった。

「母上も・・・（中条）藤資も・・・（色部）勝長も・・・（長尾）政景も・・・（宇佐美）定満も・・・私を支えてくれた人が・・・みんな去っ

てしまった・寂しいではないか・」

新兵衛は笑ったままであった。口元が少し動こうとしていた。

「・・・私の子供を見るまで倒れられないと以前言っていたではないか・」

輝虎は自嘲気味に言った。

「・・・いや・今やあなたにはたくさん子供がおります・」

新兵衛は輝虎が今まで聞いたことのないかすれた弱々しい声で話始めた。

「・・・」

輝虎は黙ってしまった。

「貴方を支えた藤資や勝長や越後衆の息子達が・貴方を母のように慕っている・彼らの欲している物は貴方だつて解っているはず・親としての責務を果たすこと・貴方の嫌なことかもしれないが・それも親の務め・」

「・・・」

「・・・貴方にその順番が回つて来ただけですな・今の貴方なら容易いことではござらんか・なあに・この世は別れと出会いがあるもの・そんな悲しい顔をされますな・ごほっ・」

「もう良い・新兵衛・わかつた・」

輝虎はにこりと笑うと

「心配しなくて良い・わかつた・約束は守る・だから早く良くなつておくれ・」

輝虎が言つと新兵衛は安心したようにまた笑顔を見せると静かに目を閉じた。

「私に・その順番が来たのか・」

輝虎は独り言のように言った。

「もうそんなに・時間が経っていたのか・」

輝虎は弱々しくなつた新兵衛を見ながら一人つぶやいた。

春日山城の戻つた輝虎の元に金津新兵衛が静かに息を引き取つたと



の連絡が入ったのはその日の夜であった。

輝虎は領主としての意地から表向きは悲しみを押し殺して平然を装っていたが、実の父親のように慕っていた新兵衛が死んだことに對して本当は大泣きしたかった。

しかし新兵衛の言葉を思い出しそれを何とか抑えたのである。

輝虎は春日山城の毘沙門堂に籠っていた。

新兵衛や勝長、去って行った人たちの言葉を思い出していたのである。

大昔、中条藤資やもしかしたら本庄繁長や長尾藤景、北条高広も同じ事を言っていたかも知れないと自分に問い質していた。

信玄ともその件で川中島で口論になったかもしれないと色々思い出していた。

自分も気が付いたらもう人生の半分以上を過ぎて41歳になっていたのである。

むしろ人生も後半に差し掛かっていた。しかし自分はあまり変わった感じはなかったのである。自分が気付いていないだけかもしれないかったが今日まではあつという間であった。

ただ自分を助けて育ててくれた人たちが時の流れに逆らえず次々と去っていく現実を受け入れざるを得なかった。去っていった人達には残された者がおり、彼らも自分に引き続き忠節を誓ってくれていた。でも彼らに對して返答を自分がしてきたかを問い質していたのである。

輝虎は林泉寺の宗謙僧侶との以前話した時の会話も思い出し、色々と考えていた。

宗謙との話とは古代の中国の梁の武帝と印度の禅僧達磨との会話の件である。

武帝は達磨に自分が寺をたくさん作り仏を手厚くもてなし、自分も修行に励んでいるがこれに対して何か公徳があるかと尋ねたところ  
「無公徳むくんとく」

と達磨は答えた。

公徳など無い。心の中に公徳などを期待して仏を信奉しているようでは駄目だということである。

武帝は一瞬気が立ったが恥ずかしい質問でもあったかと直ぐにこれを受け入れ、再度気を取り直し達磨に質問を試してみた。

聖諦第一義しよつたいたいいちぎ、仏の究極の教えとは何かと訪ねてみたところ

「廓然無聖かくねんむしよう」

と達磨は平然と答えた。

仏の究極の教えなどは存在せず、からりと開けた空のような何も無い世界だと言う。

聖と言えば梵に対する聖であつて聖諦第一義、仏の究極の教えとやらを追及すること自体が梵であるということである。聖と梵の比較のように善悪損得自体にこだわっているようでは駄目だと言うのである。

武帝は自分が今まで正しいと思つての行いを否定されたような気がし、また、国主としても納得が出来ず、最後に

では私が話している貴方は何者か？最高の聖者ではないのか？と尋ねたところ

「不識ふしき」

と達磨は再度平然と答えたという。

不識とはわからない、答えようがないと言うことである。

仏の究極の教えなど存在せず、聖諦第一義を追求することが梵だと言っているのに、あなたは最高の聖者ではないのかという質問をされても答えようが無い。廓然無聖にならないということ達磨は言いたかったのである。

武帝は達磨を結局理解できず、また達磨も武帝とは縁が無かった思い武帝の元を去つたと言う。

この世のあらゆる物は実体があるようでない捉えられない物・自分の損得善悪の比較論に捉われているようではいけない・固執するのはよくない・。

「こだわらないことだろうか・」

輝虎は達磨と武帝の会話の意味をこのように解釈することにしたのである。

今は自分の出来ることを行い、現状を受け入れ、自分は国を治め、皆が欲するものがあれば与えるのみである。

輝虎は今まで土地に興味がなく、またそれを奪うことは悪であると考えていたので、他国と戦になっても領土は奪いとることはなかった。

しかしそれは自分の勝手な善悪論で、自分を慕ってくれていた人はそれを欲しがり、堪えられない者は去っていったのである。彼らが去っていったのはひとえに自分の善悪にこだわり続けて、彼らに答えられなかった自分にも原因はある。

自分の基準だけで判断するのではなく、たとえ自分が興味なくても皆が欲すればそれを与え、自分の基準に固執しないことにしたのである。深く考えず自然な物事の流れに任せてみることにしたのである。

もちろん謙信も自分はただの人間であり、それを完全にこなすことなど出来ないとも思ったが可能な限りやることにしたのである。

輝虎は12月には宗謙から一字を賜り、法号謙信と名乗るようになるのである。

「心に物なきは心広く体やすらかになり・か・」

この時、謙信は今後の新しい方針を心に決めたのである。  
この最初の一言は後に上杉謙信公家訓16か条の一句としても後の世に伝えられていく。

この年の暮れもう一人謙信の元を静かに去った者がいた。

養子の顕景が側近として頼りにしていた長尾時宗がまだ若年であったが急な病でこの世を去った。

顕景はかなり落ち込んでいたが、母親の仙桃院が顕景の実家の上田の坂戸城で聡明と評判の樋口兼豊の息子の与六を連れてきて、時宗の代わりとして春日山城に顕景の小姓として仕官させることを願っていたのである。

与六はまだ10歳にも満たない少年であったが噂通り聡明な子で、謙信も顕景も彼自身と彼の才気を大いに気に入り、与六少年は成人後も顕景、後の景勝に誠心誠意仕え、上杉家の重臣として活躍していくのである。

与六少年は後で言うあの直江兼嗣である。

## 第二次甲相同盟

一方元龜2年（1571年）2月になると謙信の元に手紙と太刀が届けられた。

送り主は三河の徳川家康であった。尾張の織田信長の同盟主である。聞けば家康と武田信玄は駿河を巡って仲違いし、家康は謙信に背後から信玄を脅して欲しいため好を通じたいとばかりに機嫌取りにこの太刀を送り届けて来たという。

謙信は家康のことは良く知らなかったが家康の盟友、信長にはいろいろな意味で関心があった。

そのため家康との友好関係は悪い話ではなかった。

なお、家康と信玄が仲違いし、謙信に助けを求めてきたのは駿府の支配権を巡り家康と信玄の話し合いが付かず、また信玄が大井川以西は徳川領との約束を破り、徳川領に侵攻してきたからであった。

謙信は話を聞きながら信玄の節操の無さに飽きれながらも、信玄がわざとやったのではないかとの疑念も心の中で持っていた。

謙信も信玄との腐れ縁の付き合いも長い。

信玄を直接見たのは遙か以前の川中島の頃であるが、この年になると信玄の行動原理がなんとなくわかるような気がしてきたのである。ただ信玄は自国の拡張のための節度は無くても、意外な一面もあり、信玄が甲相駿三国同盟を破り駿河に侵攻したとき、駿河の今川氏真から甲斐への塩止めの依頼があったが、謙信は表向きは塩止めしても困るのは甲斐の領民で（潤うのは尾張商人で越後商人の利益にならない）信玄に対する塩止めなどは何の意味も持たないとこれを断っていたが、その後信玄から謙信に塩止めをしなかったことに対するお礼として、福岡一文字の銘刀「弘口」が送り届けられたのである。

また、信玄とはこれまでも川中島や関東など、散々もめてきたが、

それにも関わらず信玄は自分の悪口は言わず、妙な事に自分を褒めるような発言を度々していた。

謙信は家康から送られてきた太刀を見ながら信玄のことを思い出していた。

「信玄はわからぬ男だ・・・」

謙信は一人つぶやいた。

「領土拡張のためには何でもやるのに時々妙な気遣いを見せる・・・」  
謙信は家康からの手紙を読みながらつぶやいた。

しかししばらく考えた後

「いや・・・信玄のことだ・・・なにか下心があるのだろう・・・」

謙信は自分も何か年相応になったのかなと思わず苦笑いしてしまっ  
た。

謙信は山本勘助の言葉を思い出した。

信玄は従う者には優しいが歯向かうものに容赦せぬ・・・と。

信玄本人から川中島合戦で聞いた

部下を喜ばすために戦う・・・喜ばせるために領土を取る・・・その  
何が悪い・・・

当時の謙信にとっては衝撃的な言葉をも思い出していた。

信玄の理屈からすれば信玄の理屈に真っ向から逆らってくる自分は  
信玄にとって一番の大問題に違いないのであろうが、それにしても  
信玄の自分に対する対応は少し寛大と謙信も少し感じるほどであっ  
た。

信玄に関しては軒猿からの情報でも再度自分と和睦を結ぼうと画策  
しているとの情報が入っていた。

おそらく駿河に集中するため、自分、越後や北条の憂いをなくそう  
としているのであろうと謙信も思っていたが、そのために北条と

武田の関係にも変化の兆しがあるとの情報も入っていた。

しかし、もし、信玄と北条が同盟して、既に謙信と同盟関係にある北条に間に入ってもらっても、信玄と同盟を組むつもりは謙信は無かった。

信玄の言う理屈はわかってもらい方に問題があると謙信は思い、また謙信が興味がある信長の盟友の家康から頼まれた以上断れなかったからである。家康は初めて今回謙信に手紙を送ってきたが謙信は家康に対して丁寧な文章で返信を出している。

「・・・家康公からお手紙頂戴して嬉しく思います。今後も信玄と戦う同士として仲良くやりましょう・・・」

畿内の情報も雲行きが怪しくなっていた。

織田信長は將軍足利義昭を伴って高々と上洛していたが義昭を飾り雛のように扱い、殿中御掟なる掟状を勝手に発令し義昭に認めさせ、義昭の行動を制限したため信長と義昭の仲は険悪化していると報告が入っていたのである。

越後商人からも堺の商人たちが信長に三好三人衆や一向宗本願寺に加担したことに對する懲罰と自分への従属を示すために2万貫という大金を要求され、渋々支払わされたなど話が入っていた。

越前の朝倉氏も信長の上洛命令を無視するため信長に攻撃されようとしているという。

人々も信長の天下布武の意味をようやく悟ったのである。

謙信も最初は信長に好意を抱いていたが今や三好三人衆以上の横暴ぶり、以前と比べると正直少し幻滅もしていた。

ただ信長が本願寺勢力に苦しめられている点では自分も共感するところがあり、また戦で

信長の弟達に戦死者が続出していると言う話も聞いていたので同情すべき点があった。しかしそれでも信長の領土拡張欲、彼の掲げる

天下布武のためにそれらの犠牲をもちとわれない点はある意味凄まじいと謙信も思い、自分とは正反対の人間なのかとも思うようにもなっていた。

一方義昭もめげずに信長に監視されながらも密かに様々な調略を張り巡らし、信長包囲網を形成、越前の朝倉や近江の浅井久政、長政親子、三好三人衆や中国山陰の雄、毛利元就、そして信玄までもこれに加わると言う。

謙信も将軍に従う者として参加したい気持ちはあったが信玄とは絶対に組みたくなかったし、信長のやり方にも問題はあるとも思ったが理解できる点もあり今回は特に行動を起こさず包囲網には参加しなかったのである。

もちろん目先の信玄をなんとかせねば何も出来ないとの現実もあったが信長に歩調を合わせ、信玄とは組まないことにしたのである。

10月になると謙信の判断で、反北条の佐竹義重に攻撃されていた小田氏治の小田城の救援に向かい、佐竹軍を追い払うと再度上野に戻り、武田軍と対峙することになった。

関東布陣中の謙信に厩橋城城主北条高広からの報告が入ったのはこの頃である。

実は高広が越後側に戻った時、彼は引き続き厩橋城の城代を勤めていたのだがこれには越後国内からも危惧する声が多かった。

彼は二度謙信から離反した経緯があったため、別の者に厩橋城は任せて高広は越後国内の本来の居城の北条城に戻すべきとの意見が多かったのである。

ただ輝虎は高広の実力は買っていた。今回も信玄の軍勢を軽く追い払っている。

高広の重要性は実力以上に北条と組んでいたのもあるが、上野や下野国、関東の事情に明るい件である。



そのため引き続き厩橋城の城代を任せていたのである。  
そんな高広から今回面会を求めてきたのである。

「お久しぶりでございます．．．！お元気そうで．．．！」

高広は太い声で年甲斐も無く大声で挨拶してきた。

「うむ．．．武田の撃退の件はさすが．．．厩橋城を任せた甲斐が私もあった．．．氏康殿も喜んでおられるであろう．．．」  
謙信も笑いながら返した。

「今回お話したいのはその北条の件で．．．」

高広が正直に言ってきた。

「．．．」

謙信は黙ってしまった。

「氏康殿が重い病気にかかっております．．．小田原の晴家殿からの報告によると武田の使者が見舞いに来ているようで．．．」

氏康が昨年より体調が優れず、年が明けてからも病に倒れ、危篤状態であるとの噂は謙信も聞いていた。

それに乗じてか武田の使者が小田原城に出入りしているとの情報は謙信も掴んでいた。

「．．．信玄は本当に律儀だな．．．」

謙信は心にも無いことを言ってみた。

「．．．後を継ぐと言われる氏政殿は駿河の件は武田に不問にするという噂が経っております．．．」

実は高広は氏政に再度、北条側に付く様、声をかけられていたのだが彼も今回は乗るつもりはなかったのである。

そのため知っていることを全て謙信に話すことにしたのである。

今までの迷惑料を返す腹積もりもあった。謙信もそんな高広を充分見抜いていた。

謙信は顔色変えずに

「．．．また組むのか．．．武田と北条は．．．」

と言った。

高広は首を大きく縦に振った。

「・・・しかし 私はせつかく頂いたものを返すつもりはないが・・・謙信が越相同盟で獲得した武蔵や上野の諸城は返還の意志が無いことを伝えると

「・・・当然です・・・せつかくもらった物など返す必要など全くありません」

高広も返した。

「・・・そなたはどうする？」

謙信は嫌な質問をわざとしてみた。

「・・・私は阿虎様の所におります。漢字が同じでも読み方が違う。当然ですな。

(北条高広はキタジヨウと読む)」

謙信は思わず笑ってしまった。

「(北条から養子、人質で来ている上杉)景虎殿も、もしそうなくても小田原には帰らないと言っております・・・」  
息子の景広も続いた。

「構わない・・・私は歓迎している・・・ただし柿崎晴家は帰してもらいたい・・・」

謙信は少し無茶を言ってみた。

「お任せあれ・・・高広が後のことはやってみせましょう・・・」

高広は北条氏政と交渉することを快諾したのである。

氏康が死去したと言う情報が届けられたのは間もなくであった。

元龜2年10月21日(1571年)、相模の獅子と呼ばれ関東に北条氏の基盤を築き、信玄、謙信をも苦しめた名将は57年の生涯を閉じたのである。

景虎や越後の使者が葬儀に向かい哀悼の意を表し、また小田原城下の住民も彼の死を嘆き悲しんだという。

謙信が気になったのは後を継いだ氏政の動きである。  
高広の情報通りであれば信玄と組むと言う話であった。

北条側は葬儀の場ではそのようなことは無いと言い、景虎も安堵して越後に戻って来たのだが高広の情報どおり、12月になると甲斐と相模は再度同盟した。甲相同盟の復活である。

ただ意外なことに越相同盟の終了とともに柿崎晴家は春日山城に戻ったが景虎本人が小田原への帰還を拒否したのもあったが、氏政からも景虎の小田原への返還要求もなかったのである。

「さすが氏政殿・・・」

謙信は氏政を率直に褒めた。

氏政は戦はあまり得意ではなかったが名前どおり政治力は父、氏康譲りで優秀と評判であった。

氏政は景虎の重要性を一番わかっていたのである。

また氏康と謙信の意向も充分汲み取ったのである。

謙信との関係は表向きにかく実質的には中立的な方向で行くことにしたのである。景虎はそのための楔である。

氏政の関心は父氏康の代から散々悩まされてきた安房、常陸方面の平定で関東全土に野心が無いわけではなかったが、謙信の物になった上野や武蔵の岩槻城は作戦の対象外にしたのである。

謙信の実力もあつたが、父氏康のように同盟が破綻してももつとその先の将来のことを見据えて動いていたのである。

将来のお互いの妥協点のために景虎はわざと越後に残したのである。信玄は今回はまた擦り寄ってきたがいつまた離れるとも限らず氏政も信用していなかった。

一方景虎は顕景の妹を妻にめとり、彼女もすでに妊娠していた。北条の一族ではあるが上杉の一族として景虎は重要な立場になりつつ

あつたのである。

越後国内では触れてはいけない話になっていたが謙信の後継者の件は再度ささやかれ、顕景か景虎かはまだはつきりせず、景虎にも可能性が残されている以上、氏政もそれを見越して動いていたのである。

なお越相同盟終了後の扱いの難しい交渉を無事解決した北条高広も謙信の信頼を取り戻し、引き続き厩橋城で信玄の監視、北条との微妙な駆け引きに当たることになる。

## 越中大乱

一方話は少し遡るが謙信は越中には永禄12年（1569年）に信玄の誘いに乗って反旗を翻した椎名康胤や一向宗の鎮圧のために侵攻していたが、北条側の要請で関東に出兵した関係から一旦兵を引き上げたため、再度康胤や一向宗が力を盛り返し、謙信側の富山城を奪われる事態が起きていた。

謙信も北条氏との越相同盟の作業にかかりつきであったため、越中は後回しになっていたが越相同盟が一区切りつくと謙信は元亀2年（1571年）2月になってようやく再度越中に出兵したが同年10月に再度信玄が西上野に兵を出したため再度撤退し、それに乘じてまたも康胤や一向宗が息を吹き返すたちごっこが続いていたのである。

少しややこしいが謙信と越中の関係は、最初は謙信は康胤の求めに応じて永禄2年（1559年）初めて越中に出兵し、神保長織を屈服させていた。

そして少し間が開くが、飛騨国の件や越中守護、畠山氏内の内紛などがあつた後、永禄12年（1569年）逆に康胤が信玄の誘いに乗って謙信に反旗を翻すと今度は長織からの救援要請を受けて越中に出兵し、康胤や一向宗と戦うのである。

康胤を助け、脅した長織を屈服させておきながら、今度は長織を助けるために康胤に攻め入るのである。

ところが元亀元年（1571年）頃には康胤だけでなく、謙信に助けを求めていた神保長織、長城親子までが信玄の誘いにのり、康胤や一向宗に同調するようになり、三者は越中内で連合軍を組んで謙信に逆らうようになるのである。

しかし謙信もすぐに越中征伐とは行かず、元龜元年（1571年）12月に甲相同盟が再度復活し再度信玄と北条氏康の後を継いだ氏政とが結ぶようになる。謙信は再度、武田、北条とは敵対関係になり、関東にも眼を配る必要が出て、越中征伐はさらに遅れるようになるのである。

元龜2年（1572年）3月、謙信や越後軍本隊は関東に出て信玄や氏政の部隊と対峙し、越中には分隊5千が残り、越中の反乱軍、康胤、神保親子、一向宗の三者連合軍と対峙する苦しい局面に立たされることになる。

越後は越相同盟破綻、甲相同盟復活で早速関東と越中の二方面で対峙するという厳しい局面を迎えるのである。

越中方面の分隊長には謙信が若い頃、永禄2年（1569年）都からの帰りに近江で仕官し、その後越中方面や関東戦線で活躍した謙信お気に入り、奉行、河田長親が任命され戦っていたが、康胤、神保親子、一向宗の三者連合の3万の大軍相手に苦戦し敗戦を重ね、上杉側最後の牙城、新庄城に立て籠もり、必死に防戦していたのである。

一方関東に出た謙信ら上杉軍主力も、信玄がこの頃すでに駿河以西に目を向けていたのと、氏政も諸般あり、謙信とは本気で戦うつもりはなかった。睨み合いに終始し、武田軍、北条軍も間もなく自国に引き上げたので、謙信も大急ぎで越中に引き返し、新庄城の河田長親の分隊の救援に向かったのである。

8月にようやく謙信の本隊が新庄城に到着したが越後側は謙信本隊を合わせても1万5千と三者連合軍の半分の兵力で不利を認めなかった。

謙信も不利は承知であったが、隙を見て素早く新庄城に入城すると、包囲する二者連合軍も1万5千の戦力に籠城されては手が出せず、戦線は膠着状態に陥るのである。

新庄城に立て籠もっていた長親は謙信が入城すると丁寧に迎えると同時に越中での敗戦を素直に詫びた。

しかし謙信の返答は意外なものであった。

「よくぞ、あの大軍を半年間押さえ切った・・・ご苦労であった・・・」  
謙信はにこやかな笑顔で長親に返した。

「食料や武器弾薬は大量に持ち込んでいる・・・向こうも3万の大軍で食料もままなら無いであろう・・・じっくり今回は待とう・・・私も小田原でそうだったが大軍の包囲は意外と大変なものだ・・・ゆっくりやろう・・・」

謙信は扇子を開いて静かに扇ぎなら落ち着いて言った。

「それにしても長親は良い城に立て籠もっている・・・大したものだ」

謙信は終始上機嫌であった。

「・・・？ありがたき・・・お言葉・・・？」

長親は叱責されるかと思っていたが謙信の上機嫌に驚きながらもその理由がわからなかった。

この城を選んだのは他の城に比べて越後に近いのと越中内の上杉側最後の砦でここしか残されていなかったからである。最後の砦であるが浮き城と呼ばれる富山城に比べれば特別なところなど何も無く、東を常願寺川、西に荒川、北陸道に面する交通の要衝にあるが周囲は土塁と堀を巡らせた程度の普通の平城である。

「兵士が関東からの長距離の移動で疲れている・・・籠城兵も本隊が来たので少し休むが良い・・・来週くらいに軍議を開いて今後をゆっ

くり考えよう・・・」

謙信は相変わらず落ち着いていた。

謙信が言っていた軍議は結局一週間後どころか三週間近く後になつてようやく行われた。

これには謙信が若い頃から悩まされている毎月10日前後にやつてくる腹痛をやり過ぎすのもあったが本当に今回は謙信も度重なる長距離移動に疲れていたのか3万の大軍に包囲されながらもゆっくりにくつろいでいたのである。

逆に城内の他の者があまりにのんびりしていたので少し焦りを覚えるほどであった。

ようやく召集された軍議でも謙信は相変わらず落ち着き払っていた。

「今回の戦は顕景（景勝）を大将に・・・私は手伝わせてもらおう・・・」

謙信が開口一番意外な事を言った。

周囲は思わず驚きの声を出しそうになった。

もちろん顕景本人でもある。

「この一ヶ月間、三者連合軍の様子を見させてもらったが・・・たいした事無さそうだ・・・我らの勝利に違い無いであろう・・・」

謙信は涼しげに言った。

「まことに恐れ入りますが・・・いくら無敵の上杉軍とはいえ、三万の大軍を破るのは容易くございませぬ・・・何か妙策でも・・・？」

顕景、上田長尾の重臣の栗林政頼が顕景の傍から思わず声をあげてしまった。政頼は顕景を危険にさらしたくないので言ったのである。謙信はにこりと笑うと

「越中は広くて良い土地である・・・ここを皆が手に入れることが出来れば俄然今まで以上の力が出せるであろう・・・」

一同少し小さななどよめきが起こった。



勝てばここ、越中を分け与えると言つのである。

「康胤や神保親子は越中の騒乱の元である・・・我ら上杉がここを治めるのに相応しい・・・」

謙信は今までとは全く違つた策を出したのである。

「伯母上・・・大将の名誉はありますが・・・しかし・・・どのようにして・・・？」

顕景はどよめき、色めき立つ一堂に冷静さを取り戻すよう、現状の話に戻そうとすると

「・・・ふふふ・・・私と顕景は共に行動しよう・・・指示は私が出すので顕景は兵に睨みを利かせているだけで大丈夫・・・」

謙信は少し冗談気味に言つた。

顕景はまだ若年であつたが、無口で視線が厳しいせいもか全体的な雰囲気には威厳があり、密かに兵士には恐れられていた。特に無駄口にはうるさく突然落ちる顕景の雷は兵士だけでなく他の越後衆にも恐れられていた。

顕景もその点を指摘され思わず少し苦笑いしてしまつた。

「ようつし！顕景様の部隊には俺の隊を参加させてください！阿虎様がいれば俺の無駄口も顕景様はちよつとばかりは大目に見てくれますよね！」

水原親憲が大声で口を挟んできた。親憲は本人も変わった衣装や振る舞いを好み、普段から兵卒と大声で話すなどして変わった行いが目立つ男で、顕景も少し苦々しく見ていたが彼の武勇は越後内でも有名で、謙信も川中島の戦いの頃から親憲の武勇を充分認めており、また勝ち戦では合戦中は逆に無口で苦しい時は声を出し味方を大声で激励するなどいろいろうるさい男ではあつたが武勇の誉れ高い男であつた。

「確かに阿虎様の傍であれば水原様も大声を出しても顕景様に怒られないので一番安全ですね！」

若い与六が遠慮なく顕景の傍から首を出し割り込んできた。

「何を小生意気な！おぬしも今回は連れて行くわ！」

親憲が冗談めいて言う

「そうだな．．与六もそろそろ戦に行った方が良いな．．今回は一緒に来い．．」

逆に顕景は真顔で与六に今回戦に出るように行ってきたのである。思わぬやぶ蛇に

「．．え！わ．．私もですか？」

与六は今回はかなりの激戦になりそうだったので思わぬ展開でしどろもどろしていたが

「初陣は安全な戦に行う物だと思っていたのであろう？大丈夫。今回の戦は安全な戦だ。」

謙信は与六の心中を読むように言った。

「は．．はあ．．」

与六は困惑仕切った返答を思わずしてしまったが

「しつかりした返事をするように．．」

顕景の一言で

「は！．．ハイ！」

与六は慌てて再度返事をしたのである。

「与六！安心せい！予備のふんどしは俺の部隊が持っていてやるからな！腰だけは抜かすなよ！」

親憲が笑いながら言うと同大笑いになった。

「そんなの要りませんよ！」

与六は一人膨れていたが。

「まあ 初めての戦は怖いものだからな．．慎重にな．．」

顕景が与六に生真面目に助言し最後を締めたのである。

新庄城を包囲して一ヶ月、焦りは越後側よりも康胤、神保親子、一向宗の三者連合軍の方が実は強かった。

連合軍は数は多かったものの寄せ集めの農民兵が殆どで特に、食料などの物資は組織だつて持つておらず、包囲の長期化での特に食料の困窮で軍の士気は著しく低下していた。

ところがある雨の日、包囲軍の一角が新庄城から突然出てきた越後軍に攻撃されたのである。

しかし多勢に無勢、連合軍は直ぐに体制を整えると越後軍に対して反撃を開始した。

越後軍の奇襲部隊は、反乱軍が体制を整えるのを見るとすぐに再度城内に撤退した。

「飛んで火に入るなんとやら・追え！一気に攻め立てる！」

神保長織はすぐに後退する越後軍を追撃しそのまま越後兵が出てきた城門から押し入ろうとしたのである。

その時であった。

連合軍の後方で突然戦闘が始まったのである。

「何事じゃ？仲間割れか？肝心なときに！」

長織は思わず味方の不甲斐なさに声を荒げてしまった。

しかし寄せ集めの訓練不足の兵力ではやむをえない面でもあった。

「喧嘩をやめさせい！全く！せつかくの好機に・・・！」

長織は伝令兵に命じた。しかしいっこうに喧嘩は収まる雰囲気ではない。

「上杉の城兵に見られたら笑い者だぞ・・・全く・・・」

長織の息子の長城も呆れ気味にことの成り行きを見ていた。

「ワシが行って喧嘩を収めて来るか・・・」

長織が馬に乗って後方に下がろうとしたがそのとき後方からの伝令兵が慌てて飛んできたのである。

「大変です！後方の部隊が上杉軍の攻撃を受けて大混乱です！謙信自ら出ているようです！」

伝令兵は慌ててまくし立てた。

神保親子は仰天である。

いつの間にやら謙信自ら率いる上杉軍の別働隊が城外に出て展開し、連合軍は背後を取られて攻撃されていたのである。

さっきの攻撃部隊は謙信らの部隊の目を逸らす為の囷の部隊だったのである。

連合軍は不覚にも見事これにひっかかってしまったのである。

しかし

「落ち着け！兵力はこちらが上じゃ！隊列整え広く展開して囲い込め！」

長織すぐに指示を出した。

「それが・・・！新庄城の周囲の田んぼが雨で泥沼になってぬかるんで足を取られて兵力を展開できず・・・身動きが取れないところを叩かれて味方は大混乱です！」

伝令兵は背後の戦闘の音が近づいて来るのを気にしながらまくしたてた。

「クソ・・・謙信め・・・！雨で足場が取られること見抜いて・・・」

長織は歯ぎしりを立てた。

謙信が長親に対して本庄城は（守るに）良い城だと言ったのはこの点であった。

城の周囲は深い田んぼが広がり雨でも降ろうものなら泥沼と化し足場を取られてまともに動けない。動けない狭い一点に集まった部分を集中攻撃し連合軍を大混乱状態に陥れたのである。

もちろん長親はそこまで考慮はしていなかったが。

長織はすぐに

「後退させる！ここで足場が悪い！南西の尻垂坂まで後退させる！

そこで隊列整え！」

全軍に後退命令を出したのである。

三者連合軍はこうして新庄城の包囲を解き、大慌てで尻垂坂まで後退したのである。

後退していく連合軍を見て新庄城兵は包囲から開放されて沸きあがっていたが謙信の采配はこれで終わりではなかった。

本番はこれからであった。

「全軍出陣！総攻撃！」

謙信は指示を飛ばすとすぐに新庄城の城兵をも出陣させてそのまま一気に尻垂坂に再度集結していた連合軍に襲い掛かったのである。再度部隊を整えている最中の上、まさか自分達の半分の戦力の謙信が城を出て襲い掛かって来るとも夢にも思っていなかった連合軍は仰天し、再度大混乱に陥った。連合軍は必死に防戦するも野戦に慣れており、個別の兵力では最強と噂される上杉軍にはなすべくなく終始圧倒され、ここで壊滅的な打撃を受けることになるのである。生き残った部隊も富山城まで慌てて逃げ帰って立て籠もったが既に兵力は1万以下まで激減しており、食料不足や士気の激減で10月にはそのまま上杉軍に富山城も落とされ、こうして連合軍は多大な犠牲を出して敗北したのである。

こうして越中の勢力図は大きく塗り替えられ、信玄に通じていた飛騨国の江馬輝盛も謙信に恐れをなし降伏したのである。

また神保長織もこの前後に歴史書から記述は消えている。

北陸越中戦線はこの後、謙信優位に展開していくのである。

## 西上作戦

謙信は越中の大半をほぼ平定したものの安心はしていなかった。

椎名康胤は謙信に恐れをなし、再度降伏を願い出てきたが今回は謙信は許さなかった。

康胤は武田信玄の操り人形で康胤が信玄の意向次第で動く限りは康胤との約束など何の意味も持たないからである。

一向宗も謙信が去れば直ぐにまた反旗を翻す輩やからいであり油断できず、神保長織は行方不明になったが子の長城は追い詰められているといえまだ健在であった。

富山城を修復した後、謙信は河田長親や顕景に富山城や越中は任せ、一旦春日山城に帰還することにした。

顕景たちには奪い取った領土の分配をも指示した。

富山城に残った顕景たちは土地の分配や恩賞の作業に明け暮れていた。

謙信は今まで領土を奪うようなことは無い稀有な武将であったが今回からは方針を換え、配下の將校たちに奪った領土を分け与えることにしたのである。

作業の最中

「どうだった・・・与六・・・」

顕景は手を少し休めて与六に初めての戦について聞いてみた。

「ふんどしは間にあったんか？」

水原親憲が嫌味っぽく聞いてきた。

「・・・間に合いましたよ！」

与六は膨れながら言った。

しかし

「あまりの凄惨さに・・・必死でした・・・」

与六は正直に答えた。

「うむ・・・」

顕景も今回は黙ってしまった。

「・・・あいつらは特別だ！気にすんな！」

親憲も珍しく与六を庇う様に返した。

今回の越中戦は大激戦で一向宗は生きるが地獄 死ぬは極楽とひたすら突き進んでくるが皆、農民兵で戦慣れしていないので数では勝つていても個人の力では戦慣れした上杉兵との比較にはならなかった。

一向宗は次々と討ち取られ犠牲者の山を築き上げ、辺りの川は犠牲者の血で染まったといわれている。

もちろん一向宗、連合軍の無謀な戦い方で謙信側の犠牲も大きく謙信も両軍の犠牲者を弔うために御堂を後にこの地に建てている。

「ところで・・・」

栗林政頼が声を潜めるように言った。

「信玄が西に向かうようで・・・」

「だから越中がこんなに騒がしいんだろう・・・」

顕景は無表情に言った。

「信玄の操り人形の椎名康胤や神保親子のおかげでいい迷惑じゃ・・・」

「親憲もふうつと溜息をついた。

「ここは信玄と阿虎様の代理戦争ですな・・・」

長親も言った。

「ところで謙信様も春日山城に戻ったのは川中島の海津城の高坂弾正昌信が攻めてくるかもしれないからとか・・・」

「信玄は阿虎様を認めているから直接対決は無いだろう・・・」

長親は言った。

「それ以外にも色々あったよな．．．阿虎様と信玄と．．．あと高坂弾正昌信とやらとも．．．」

親憲が含みのあるように言ったがそれ以上は言わなかった。与六だけよくわからずきよとんととしていた。

「ま、こんな血生臭いのはいい加減終わりにしたいもんだ．．．」

顕景は言うのと、しばらく間を置き

「．．．手持ちの戦力で勝手に康胤や長城を攻め落としたら伯母上は怒るだろうか？」

顕景が政頼に珍しく相談してみた。

「怒らないとは思いますが．．．無駄とは思ってるんでしょうな．．．政頼は言った。

「一向宗はそそのかされると勝手に蜂起するからか．．．」

顕景も再度目を閉じた。

政頼もうなずいた。

「謙信様も策は講じているようで．．．」

上条政繁が小さな声で言った。

上条政繁は能登の守護、畠山義次の次男で能登が政情不安の為、幼い頃から謙信の元へ人質として出されていたが、聡明であったため謙信に気に入られ、養子として取り立てられ、上杉一族の上条の名を告ぐようになった男である。

「．．．尾張の織田信長と組むようです．．．」

政繁は小さい背丈と同じように小声で言った。

「織田信長か．．．」

顕景は茶をすすった。

都に入った信長は足利義昭を傀儡に天下人のように振るまっていた。その横暴さは三好三人衆や松永久秀以上であった。それでも信長と謙信には共敵がいた。お互いに一向宗に苦しめられ、手を焼いていた。信玄も二人にとっては共通の敵であった。



信長に対して複雑な思いはあったが、共に組む利点はまだあった。そしてそんな折であったが、その信玄がなぜか突然、この年 元龜3年（1572年）10月、西に軍を進めはじめたのである。噂だと信玄の目標は都だと言う。

なぜ信玄が突然上洛を目指して西上作戦を開始したのかは謙信も正直よくわからなかった。

信玄の奥方の都出身の三条婦人が元龜元年（1570年）死去し、彼女の帰京したいとの望みを汲んだのか義理の弟の顕如の依頼か比叡山焼き討ちに対する信玄の信長に対する反感かその理由はわからなかったが、とにかく信玄は突然都を目指し進撃を始めたのである。

武田本国、甲斐の南の武田領駿河の西には織田信長の盟友徳川家康領の遠江国と三河国、そして織田信長の尾張国、美濃国がある。

信玄は3万の大軍で甲斐を出発すると遠江国、三河国に侵入し、徳川家康の支城を次々と落として破竹の勢いで進撃を開始したのである。

信玄の猛攻撃の前に家康軍はなすすべが無く、敗退を重ね、家康の同盟者の信長もこの頃は朝倉義景、浅井長政と近江で戦いを繰り広げ、家康を助けたくても余裕が無かったのである。

謙信はこの頃には本音では信長に対する感情は冷め切っていた。謙信が北条と武田の再同盟の件で振り回されていた頃、信長も浅井久政、長政親子、朝倉義景と敵対していたが、浅井朝倉寄りの比叡山延暦寺を焼き討ちし僧侶達を虐殺する世に言う比叡山焼き討ちを元龜2年（1571年）9月に行っていたからである。

しかし、そんな信長であっても今はお互いに必要な時期であった。

越中で勝利したとはいえ、一向宗がいつ再度蜂起するかわからなかったし、こちらでも長期の遠征で兵力を休める必要があった。

信長も本音では謙信を警戒していた。しかしこの頃信長も石山本願寺、浅井朝倉勢力との戦いが続いており、信玄に対抗するためには謙信と組むしか無かったのである。

信長は謙信に対してひたすら下手に出て、自分の長男の信忠を人質に出すことまでも提案していた。

謙信にとっても信長にとっても苦渋の決断であったが11月には信長と同盟し、信玄を逆に包囲するようになるのである。（濃越同盟という）

一方甲斐でも越中の謙信の件は話題になっていた。

遠江の陣中で信玄は越中の報告を聞いていた。

「・・・謙信は越中を占領するようです。神保や椎名が助けを求めています・・・」

越中からの伝令兵が報告を読み上げていた。

「あの謙信がどういう気変わりか・・・」

馬場信房が驚きにも似た声をあげた。

「気にすることもあるまい・・・」

信玄は気にも留めて無い素振りをしていたが武田家の家臣団は今まで領土に興味を示していなかった謙信が急に領土拡張政策に走り出したことに一抹の不安を覚えていた。

「海津城の高坂弾正からも再度謙信と・・・」

内藤昌豊が全てを言い終わらないうちに

「・・・わかっている・・・もう一度和睦を結べという件だろう・・・」  
信玄が遮るように言った。

信玄も本音では越後からの憂いをなくすために謙信と和睦しようと考えてはいたが不調に終わっていた。

そのため越後方面の脅威が今回の西上作戦でも残り、武田の家臣団は謙信に川中島から侵入され、謙信が同盟している信長と挟撃され

るのを恐れたのである。

しかし信玄は冷静であった。

「なんで冬のこの時期を選んだかわかるじやろう．．．越中に奴はいる．．．雪で山越えは出来ん．．．絶好の好機だろっが．．．」

信玄が先読みするように言った。

しかし家臣団の動揺は収まらなかった。

甲斐の家臣団や信玄の予想以上に早く謙信が越中の神保、椎名、一向宗の3万の三者連合軍を撃破してしまったからである。

「確かに謙信は今雪で大人しくしていますが雪が溶ければ何をするか．．．越中のこの惨敗ぶりでは今後越中の戦力だけで謙信の勢いを止めるのは難しいかと．．．」

保科正俊も不安げに言った。

「北条氏政殿も腰が引けているようでアテにはならないし．．．」

小山田信茂も続いた。

「今の謙信の勢いでは川中島から侵入されたら以前のように抑えられるかどうかも．．．」

穴山信君も正直に不安げに言った。

家臣団の中からも弱気の声が漏れていた。

「ふむ．．．」

信玄は一言言うつと

「まあ 確かに予想外に早く越中の連中が阿虎に叩きのめされたのは事実だわな．．．ごほ．．．」

信玄は咳き込みながら言った。

「．．．もつともワシも越中の康胤や長城、一向宗に阿虎に勝てなど期待しておらん．．． 少し暴れて足止めするだけで充分じゃ．．． 奴らは充分にやった．．．」

信玄は相変わらず落ちついた素振りで言った。

「ところでおぬしら いつから阿虎を謙信などと呼ぶようになった．．．?」

信玄は少し不満げな振りをして言った。

「阿虎はワシにとつていつまでも阿虎じゃ・謙信でもなんでもない・」

信玄は涼しげに言った。

「しかし・さすがじゃ・ワシもそろそろ 阿虎と呼ぶのはやめようかのう・もう少し早くワシの言うことを聞いておれば関東管領なんかよりもっと上を目指せたかもしれないな・本当に惜しいな・ゴホッ」

信玄は咳き込みながら珍しく謙信をみんなの前で褒めた。

信玄は口ではあまり言わなかったが信玄は実は以前から謙信を評価していた。

自分を恐れず立ち向かってくる姿勢と、その頑固なまでの義理堅さ、女だてらに戦上手な点、そして今までの失敗から学び、方向転換し、方針を改め領土拡張策に謙信が走り出したからである。

謙信の方針転換はもちろん自分と再度ぶつかる可能性も充分あったが信玄は自分の優れない体調や甲斐、武田家の将来のことをこの頃色々考えていた。

謙信との和睦も単純な西上作戦に備えただけの物ではなく、もっと別のものであった。

信玄は謙信を評価すると同時に、自分の家臣団の優秀さにも絶対の自信はあったがそれでも謙信と真つ向に戦えるのは自分以外にないと考えていたのである。

もし自分がいなくなった時の謙信との関係を考える時が迫ってきていると考えたのである。

信玄はもし自分がいなくなったら、武田家は謙信と争そわさせないことを密かに腹に決めていた。

とにかく信玄の体調は芳しくなかった。

「それにしても・何としても 都に上りたいのう・」  
信玄はつぶやくように少し咳き込みながら言った。

信玄も元々決して体は丈夫では無かったが表向きの理由、風林火山の旗を都に立てるため夢の上洛を目指して邪魔をする信長、家康の攻略に西に向かうことにしたのである。

信玄の西上作戦、上洛作戦はあくまでも表向きの理由であった。

信玄はどうしても駿河、遠江だけでなく三河、尾張に進出する必要があった。信玄も都まで行けるとはとうてい考えていなかったのである。

信玄を西に向かわせる決断をさせたのは甲斐の国内の問題であった。甲斐の金山が枯渇し、今までの北条や駿河での合戦の経費や褒章の件、信長の脅威から武田一族を守るために最低でも三河、尾張まで勢力を拡げ信長を牽制し、信長の力を削る必要があったからである。甲斐は越後と違い流通や商人基盤が発達していなかった。国を閨わすには領土を増やすしか方法が無かったのである。

また勢いを日増しに増す信長と、もはや信玄も単独で戦えるとも思っていないかった。

東の北条と再度和睦を結び、北の謙信とも和睦を何とか結び、いずれこちらに向かってくるであろう信長との全面对決に備える必要があったのである。

信玄は西上作戦を発動させると山県昌景、秋山信友に部隊を分け与えて、どんどん部隊を三河、遠江の奥地に進撃させた。

東美濃の岩村城は信長の五男の坊丸（織田勝長）と叔母のおつやの方が守っていたが、秋山隊に包囲され、信長からの援軍も期待できなかったため、おつやの方は自ら信友の妻になるという奇策を行い、信長の五男、坊丸も信玄の養子（人質）として差し出すことで降伏、落城した。

北三河や北遠江の支城も山県隊に次々と攻略され、11月には家康の籠る浜松城の北の二俣城まで落とされて、家康は絶対絶命の危機を迎えていた。

信長も家康に援軍を送り、家康は浜松城に頑なに籠城していたが、武田軍も防御の固い浜松城を無理には攻略せず、12月になると武田軍は浜松城を素通りして三河に向かいだしたのである。

家康は大きな賭けに出るのである。

このまま連戦連敗では国人衆に示しがつかないし、信玄が今までの戦の経緯から油断して自分達に背中を向けているのであれば絶好の機会と考えたのである。

信玄の兵力は2万5千と強大であったが家康軍も織田軍の援軍を入れて1万1千あり、奇襲攻撃だけ行うのであれば十分な戦力であった。

家康は決断し、浜松城を密かに出撃し、武田軍の背後に迫ったのである。

しかしそれを察したかのように、武田軍は家康軍を待ち構えており、家康軍は奇襲どころか武田軍の真正面に出してしまったのである。家康軍は仰天するも時既に遅く、2時間の短い戦で家康軍は多数の武將を失い、本人も危うく討ち取られそうになる大敗北を喫したのである。

わずかな手下に守られて浜松城にほうぼうで逃げ帰った家康は恐怖のあまり思わず脱糞してしまったと伝えられている。

浜松城に逃げ延びた家康を討ち取ろうと山県隊がすぐに追いかけてきたが家康は空城計、城の城門を全て空けて、逆に敵を警戒させる戦術を取ったといわれ、山県隊は浜松城に何か仕掛けがあると用心し、そのまま撤退したため、家康は窮地を脱したと言う。

この戦いは後に年三方ヶ原の戦いと呼ばれ、家康の人生最大で唯一の敗戦と言われており、家康はこの時の自分の顔を書かせ、その後の自分の戒めに使ったと言う。この絵は顰像しかみぞうと言われ現存し、その時の家康の心中を察することが出来る。

一方、三河国、遠江国が大揺れの間、謙信も越中に留まり、今後の対策を練っていた。

年が空け、元龜4年（1573年）1月、謙信は越中の平穩化のため加賀の一向一揆と和睦しようとした。越中の一向宗を困いこもうとしたのである。

しかしすぐにまたもや信玄の扇動で越中国内の椎名康胤、神保長城、一向宗の三者連合軍が懲りずに再度蜂起するのだが、同じ事を繰り返すように謙信に再度鎮圧されるのである。

三方ヶ原の戦いで、家康に大打撃を与えた信玄も年が明けて正月にいよいよ三河に侵攻しようとしていたが、武田軍の動きはこの頃になると急になぜか遅々としており、一時期の凄まじさはなぜか影を潜めていた。

武田軍は2月に東三河の要衝の野田城をようやく落とすがそこでもまた動きが止まってしまふのである。

家康は相変わらず浜松城に閉じ込められていたが、信長軍は勢いを取り戻し、信玄に同調する近江の六角氏を討ち取るなど反攻を開始するのである。

謙信の元にも軒猿から信玄の情報が絶えず届けられていた。

謙信も信玄が進撃を遅らせているのは信長と組む自分を警戒して信玄が意図的に軍を遅らせいるのかとも思ったが、それにしても昨年の破竹の勢いがすっかり失せて、不自然は不自然であった。

ただ信長からはしきりに、雪溶けしたら信玄の牽制のため、信濃の川中島に攻め入って欲しいとの懇願が入っていた。ただ謙信は正直迷いもあった。

信玄も苦手であったが信長も素直に受け入れらなかったからである。川中島の海津城には高坂弾正昌信がいたのもあったが、弾正昌信が再度謙信に和睦を求めてくる動きも余計に謙信を惑わせていた。ただ信長との同盟は生きていたし信長のひたすら下手に出てくる巧みな交渉も無碍には出来なかった。

謙信が悩んでいるうちに越中は既に雪が溶け始め、春が訪れてようとしていた。

信玄が東三河でなぜか遅々としている間に既に4月になっていたのである。

そして4月になると武田軍は西に向かうどころか甲斐本国に向けて後退を始めたのである。

信長や家康は謙信を警戒して一時的であろうが撤退したと大喜びであった。

謙信だけは再度、信玄が何か妙策を使ってくるのではないかと素早い後退に逆に警戒したほである。

しかし信玄は実は不治の重い病気に犯されていたのである。

武田軍の動きが遅々とし進まなかったのは信玄の体調からであった。武田側は信玄の不調に遂に決意し、信玄の療養のために甲斐本国に撤退を開始したのである。

しかし結局信玄の病状はいつころによくならず、甲斐本国までまだ距離があったが信濃駒場で信玄はこれ以上動けなくなってしまったのである。

病床に伏せた信玄は全てを悟り甲斐の重臣たちを自分の枕下に呼び



寄せた。

信玄は床に横わたりながら真つ先に

「勝頼を・・・」

弱々しい声で言った。

勝頼と勝頼の息子の信勝が信玄の枕元に呼ばれた。

「勝頼・・・ワシが死んだら阿虎・・・いや謙信を頼れ・・・あいつは人に頼まれたら断れない奴だ・・・お前を必ずや助けてくれるはずだ・・・」

信玄は今まで誰も見たことが無かったような目つきで言った。

「昌信・・・お前は直ぐに謙信と和睦交渉をな・・・頼むぞ・・・」

信玄の病状悪化のため海津城から急遽呼ばれた高坂弾正昌信は目に涙を溜めながら大きくうなずいた。

「・・・ワシの死は3年間伏せる・・・諏訪湖にワシを沈めてくれ・・・信長には気をつけるよ・・・みんな頼んだぞ・・・」

信玄は最後の力を振り絞るように言った。

そしてそのまま静かに目を閉じ二度と目を開くことは無かったのである。

こうして4月12日、謙信と死闘を繰り広げ、氏康と激しく対峙し、信長、家康を恐怖に陥れた信玄は死去した。享年53歳であった。

## 霸王信長

元龜4年（1573年）4月末、春日山城の謙信の元に軒猿から思わぬ知らせが届けられた。

「信玄公が死去されたようです・・・」

「え・・・！」

謙信は驚きのあまり言葉が出なかった。

「本当か？」

直江景綱が変わって声を出した。

軒猿は大きくうなずいた。

甲斐に戻る途中、信濃の駒場で病死した言う。

甲斐軍が撤退したのも信玄の病状悪化からであった。

「信玄が死んだか・・・」

謙信は静かに言った。

信玄に何かあっても信玄に対して悲しい感情など湧くはずなど無いと謙信は自分でも思っていた。

が、いざ本当にいなくなると妙な寂しさを感じたのである。

20年以上前に初めて信玄に会い、第4次川中島での信玄とのやり取りを謙信は静かに思い出していた。

「散々私の邪魔ばかりして・・・本当に憎たらしい奴だったが・・・いざいなくなると寂しいものだ・・・」

謙信は本音を言った。

「どうします・・・？」

本庄実乃が冷静に聞いてきた。

「？」

謙信は実乃が何を言っているのか一瞬解らなかったが

「・・・川中島にすぐに攻め入って武田に一泡吹かせましょうか・・・？」

猛将らしく柿崎景家がすぐに理由を話した。

「良くないな・・・」

謙信はすぐに返した。

「それこそ私の嫌いな憎たらしい信玄の行動そのものではないか・・・私は憎たらしい信玄の真似などしたくない・・・」

謙信は笑いながら返した。

「後継者は？」

景綱が軒猿に聞いた。

「四男の勝頼公です！」

軒猿は明確に答えた。

「信玄が殺した諏訪頼重の娘の子か・・・」  
実乃が侮蔑的に言った。

「一応後継者ですが・・・本当の後継者は勝頼の長男、信勝公でしような・・・」

景綱が少し首を縮めながら言った。

これは事実で勝頼の名前に「信」の字が無いのは彼は「信勝」が成人するまでの後見人と言う意味である。勝頼は信玄の後継者であるが武田家の真の後継者は信勝なのである。

「まあ、少し様子を見よう・・・」

謙信は言った。

「・・・後を継いだ勝頼とてなかなかの猛将との噂だしな・・・」  
謙信は続けた。

「阿虎様の目の敵だった信玄が死んだので城下はお祭騒ぎですぞ・・・」

景家が言うのと謙信は目を静かに閉じた。

「・・・奴は本当に嫌な男だったが・・・学ぶべきことも多かつたな・・・」

謙信は正直に言った。

そして

「信玄が死んだからお祭騒ぎなど大人気ない・・・城下の民には喪に服して、音楽など控えるよう・・・礼節はわきまえるように伝えよ・・・」

謙信は千坂景親に命令して城下に3日間は静かに喪に服すよう伝えたのである。

「しかし・・・信玄も死に 氏康も死に・・・阿虎様の時代ですか・・・」

景家が半分本気であつたが冗談めいて言うつと

「いや・・・世の中はもつと厳しくなるだろう・・・」

謙信は少し暗い表情で言った。

そして 西の方向に目をやり

「あの男・・・どうでるか・・・」

一人つぶやいた。

実乃、景綱、景家ら重臣はすぐに意味を悟つた。

「ワシらがおります・・・若いのも育つております・・・ご心配なく・・・」

景綱が言うつと実乃もつなずき景家も大きな胸板をどんと叩いた。

謙信もにこりと笑つとうなずき再度 西の方を厳しい目で睨んだ。

4月に信玄が死去すると早速その影響は現れた。

まず謙信が散々悩まされてきた越中は信玄が死去したことにより、武田氏の扇動がなくなり 完全に平穩になり、今までの騒乱が嘘の

ように静かになったのである。

謙信は今更ながら信玄の影響力のすごさに驚かされたのである。

ただ越中には武田氏に通じていた椎名康胤や神保長城がまだ存在し、完全な平定にはいたっていないが、謙信も勝頼の実力がまだ未知数であり、康胤や長城も今更ながら侘びをいれてきたので、許すつもりはなかったが武田氏への配慮から彼らを残して様子を見ることにしたのである。越中の康胤、長城の勢力が完全にそがれるのはもう少し先である。

一方信玄の死を最も喜んだのは織田信長であった。信長にとって目障りな包囲網の最大の脅威が取り除かれたからである。

信玄が死んだことにより信長は完全に勢いを取り戻し、すぐに信玄を筆頭にして信長包囲網に対して猛反撃を開始するのである。

同じ頃、謙信も軒猿の一部を密かに尾張に向かわせた。

謙信は若い頃から情報を重視し、軒猿や越後商人、出羽三山の山伏などを使って密かに全国の情報を集めていたが、今回尾張に向かわせたのは信長の動向をもっと知るためである。

信長の軍隊、織田軍は当時は珍しい組織であった。謙信も川中島で戦いで兵力補充時に一部導入していたが、織田軍の足軽兵は自国の徴兵の農兵ではなく、殆どが金で雇った職業兵士で構成されていた。

その中に軒猿を紛れ込ませて畿内の今後の鍵になろう信長の情報や畿内の情報を知り、今後の対応を考えようとしたのである。

信長が職業軍人の軍を作ったのは、領国の農業生産は農民に任せて生産量を落とさず、また農民兵だと農繁期は軍を動かせないが、職業軍人であれば、いつでも時期を気にせず兵を出せるという大きな利点があった。

まず7月、信長は京都に進軍、信長のおかげで將軍になれたのに信長追討命令を出し、信長包囲網を構築した足利義昭を京都から追放した。

ここで室町幕府は形上は遂に滅んだのである。

謙信は義昭が都を追われ、室町幕府が滅んだとの報告を聞いて、義昭の兄、義輝が三好長慶の軍事力を背景に將軍になったのに、実権を取り戻したいばかりに長慶の包囲網を作り、長慶の勢力を削ぐことには成功したものの、長慶の腹心の松永久秀の台頭を許し、長慶の死後、暴走を始めた久秀に逆に義輝が殺された永禄の変を思い出していた。

義昭も信長の軍事力を背景に將軍職に就いたが実権を取り戻したかったために、信長包囲網を作り、逆にこれを破られて、將軍に対して甘かった長慶と違い信長は、義昭をさすがに殺しはしなかったものの、あっさりと追い出し、室町幕府を滅ぼしたのは義昭も予想外であったのかもしれない。

もっとも信長も義昭を京から追放したとはいえ、義昭の護衛には信長の重臣の羽柴秀吉が付き、義昭も畿内の堺や摂津河内に留まり、また京を追い出されたとはいえ、今でも征夷大將軍の地位は持つており、將軍には違いなかった。

信長にもまだ多少の遠慮があつたのかもしれない。もしかしたら義昭の利用価値をまだ充分認めていたのかもしれない。

謙信も8月になると行動を起こした。

信玄の死によつて越中は静かになつていたが隣国加賀はいまだに一向宗の力が強く、一時は和睦もしたが結局続かず、その影響を削ぐために越中加賀の朝日山城を攻撃したのである。

信長との同盟の関係もあつた。

信長が義昭を追い出したのは謙信も感心していなかったが、信長は一向宗や浅井氏朝倉氏とも戦っている最中で一向宗は共通の敵ではあつた。

一向宗の力を削ぐことは信長と謙信の共通の益であつたのである。そして謙信もまだ誰にも言っていなかったが3度目の上洛を密かに考えていたのである。

ただこれは真の実力者の信長の意見や都合など色々諸事情はあつたが謙信は古い人間である。

同盟者の信長が義昭を京から追い出したとはいえ、一応まだ官位上は將軍で、義昭も追放されたといえ、都のすぐ傍にあり、義昭を放つては置けない、信長に頼んでも義昭を都に戻してもらおうという気持ちはどこにあつたのである。

義昭が若い頃の謙信を都で寛大に迎えてくれた義輝のような人物かどうかは謙信も解らなかったが会いたい、挨拶に行かなければいけないという気持ちだけは残っていたのである。

そのためには信長の意向の前に、物理的に上洛の障害になる加賀の一向宗を排除する必要があつたが、あの信長も苦戦している相手だけあつて、謙信も苦勞させられるのである。

今回、一向宗は鉄砲を多く揃え頑強に抵抗し、さすがの謙信も攻めあぐんだのである。

「全く攻めにくい城だ・・・」

顕景はバンバンと鉄砲を乱射する朝日山城を恨めしく眺めていた。

「火矢をどんどん放ちましょう・・・」

与六が火矢を準備をしたが8月の気まぐれな変わりやすい雨に悩まされ、火矢はうまく火が点かず威力を發揮できないまま戦線は膠着していた。

「都には大筒なる巨大な火縄銃のようなものがあるそうで・・・手に入るでしょうか？」

越中、加賀方面の司令官の河田長親は謙信と色々と攻略を練っていた。

「うむ・・・まあ・・・少し様子を見よう・・・」

謙信も色々対策を練っていた。

その時であった。

「じれったいぜ！全く・・・！」

上杉方の一部の部隊が突然攻撃を開始したのである。少数の部隊であったが火縄銃の間を器用に縫って朝日山城に取り付こうとしたのである。

「何処の部隊だ？」

長親が驚いて見てみると14歳の与次と言う若者が部下を引き連れて飛び出していったのである。

与次は謙信直属の旗元で春日山城留守役、吉江景泰の次男である。

「馬鹿者が！連れ戻せ！」

謙信の命令の前に先に顕景の雷が炸裂した。

降り注ぐ鉄砲の弾の中を勝手に奮戦している与次の元に顕景が激怒しているとの伝令が伝えられると与次も慌てて上杉軍本陣に舞い戻ってきた。

与次も少し勝手な行動であったかと反省し、顕景に大目玉を食らうのは仕方ないかと、観念したが予想に反して与次は後方の陣中に監禁されることになってしまったのである。

あまりの厳しい罰に与次も謙信と顕景の前で涙ながらに抗議してきたのである。

「自分は顕景様、謙信様に可愛がられ、恩義を感じています！俺は確かに勝手でしたが・・・顕景様、謙信様の戦のために死ぬことなど恐れてません！名誉だとおもっています！それが・・・戦が出来ないように監禁だなんて・・・あんまりです！」



謙信は全く怒つておらず優しい口調で言った。

「与次・・そなたは名門吉江家の息子であるぞ・・そなたにはまだやってもらいたいことがたくさんある・・名の無い一向宗の鉄砲玉に当たつて倒れられたら私はそなたの両親に合わせる顔が無い・・頭景もそなたに期待している・・こんな所で終わつてはいけないぞ・」

謙信に率直にとがめられ、さすがの与次も返す言葉がなかったのである。

与次少年には謙信の戦略が込められていた。

実はこの年、揚北衆の実力者、中条藤景の後を継いだばかりの中条景資が42歳の働き盛りであったが不慮の病で急死していたのである。揚北衆の実力者の地位の空白は越後国内情勢に悪影響を与える可能性があつたので河田氏の誰かを繋ぎで入れた後、景資の幼い娘にこの与次を婿入れさせて中条家を継がせて、揚北衆の勢力の安定化を図つたのである。

与次は今回の騒ぎもそうであるが、勇敢な少年で頭景も彼には一目置いていたのである。

謙信は今回の騒ぎの件について与次の両親の吉江景資夫婦に事情を説明する手紙を残し、その手紙は現在も残つていると言う。

なお与次少年だがその後元服し、中条家を継ぎ、中条景泰と名乗るようになる。

謙信や頭景と越中を転戦し、謙信死後の頭景（景勝）と景虎の後継者を巡る御館の乱の時も頭景側について戦うが内戦が長引き、信長の配下の柴田勝家の北陸攻略軍の攻撃に備えるために魚津城に籠つて戦うが遂に落城し、祖父、宗信、父、景資、兄、寺島長資と共に自害して果てた。戦いに明け暮れた彼は結局中条城には一度も入ることはなかったと言う。

そして彼ら吉江一族3代が自害した前日、皮肉にもあの織田信長も本能寺で明智光秀の謀反に会い、既に横死していたのである。

朝日山城の攻略は結局不調であった。

また関東でも動きがあった。

北条氏康の後を継いだ氏政が北関東に兵を出す素振りを見せ始めたのである。

氏政は元龜3年（1572年）初めに、武田氏との再度の同盟（第二次甲相同盟）を結んだ後は安房の里見氏や常陸の佐竹氏に対する攻撃を強めていた。

里見氏や佐竹氏は越相同盟締結後は謙信の元を離れ、信玄と組むなどして北条と戦おうとしていたが、信玄が再度北条と組むと梯子を外される形になり、結局再度謙信に助けを求めてきたのである。

上野国でも動きがあり、一度謙信側についていた由良成繁が再度北条側につき、上野の謙信寄りの国人衆からも関東出兵の要請が相次ぎ、謙信も関東に再度兵を出すことにしたのである。

朝日山城の攻略はそのため一旦中止となった。

しかし謙信は実はこの頃密かにある案を練っていた。

一向宗との対応についてである。

以前にも述べたように越後国内では一向宗は保護されていた。越中も信玄亡き後は謙信の支配下に組み込まれおとなしくなっている。

この勢力をうまく使うことにしたのである。

朝日山城の攻略もそうであったが力づくだけの攻略ではなく他の手段も用いることにしたのである。

元龜4年（1573年）夏も終わろうとする頃、謙信は朝日山城の包囲を解き、一旦春日山城に戻り、関東出兵の準備や一向衆攻略の準備を万全に行うことにしたのである。

一方信長は勢いに乗ってこの年の8月には朝倉義景の居城、一乗谷に攻め込み朝倉氏を滅ぼし、9月には小谷城の浅井久政、長政親子らをも滅ぼしたのである。

信長の勢いは留まるところを知らず11月には三好三人衆も追い込まれ、三人衆は逃亡、三好長慶の後を継いだ義興も最後は自害し、長慶以来の三好一族は遂に信長と言う新しい権力者によって下克上され滅んでいったのである。

あの松永久秀も降伏したという。

久秀は貴重な茶器を信長に提供してようやく命だけは許されたと言う。

残るは一向宗の総本山、石山本願寺だけが最後の抵抗をしていた。

こうして信長は信玄の急死という幸運もあつたが実力で包囲網を打ち破つたのである。

この年は謙信にとって信長の底力を思い知らされた年であつた。

謙信にとって信長はますますいろんな意味でますます気になる存在になっていくのである。

そして翌年、元龜5年（1574年）3月、関東へ出兵寸前の謙信に信長から思わぬ物が届くのである。

## 信長公記

信長の使者を乗せた越後商人の日本海航路線が春日山城目指して日本海を北上していた。

この船には信長から謙信への使者が乗っていた。

使者は太田牛一である。

牛一は不満そうな顔で謙信のいる春日山城のあるであろう北の海を眺めていた。

なお陸路は加賀には一向宗がいるので通れないので航路なのである。牛一が不満だったのは慣れない航路で船旅からの不満ではなく、今回遣いの役を命じられたこと自体が不満であった。

「まったく・・・」

牛一は文句を垂れていた。

「ワシじゃなく右筆（文官）の松井友閑殿に行ってもらえばええのに・・・」

牛一は本名は又助という。

体が牛のように巨体で恰幅がいいのでこの名前が付いているのである。

本人は信長の若年の頃からの旗本で、実際弓の名人として斉藤道三との戦いでも武功をあげ、勇猛な男と評判でもあった。

勇猛な男であったが実直率直な性格で信長にも他の者のようにへつらうことなく、正直に物を申し、正直過ぎて周りを心配させるほどであった。

また文筆にも優れ、筆の立つ人物と織田家内でも評価され今回、本人の予想外に謙信への交渉役という大役に抜擢されたのである。

「・・・武井夕庵様がこのような任務は実直率直な牛一様が適任と推

薦されたそうで・・・」  
付き添いの侍が言った。

しかし本人は謙信には興味は無く、実直率直で腕が立つ男であったが、実は口は下手で、本人は交渉など面倒で厄介な仕事と思い、気が晴れなかったのである。

今回謙信と会うのは信長からの親書の手渡しと、信長の気持ちを表すための謙信への手土産を渡すことであった。

洛中洛外図屏風と源氏物語図屏風である。洛中洛外図屏風は後の上杉本洛中洛外図屏風と呼ばれ国宝に指定される貴重な物である。

「しかし・・・これ・・・義輝様の作らせていた遺品で信長様が邪魔だから謙信公にくれてこい、と言っていた物だろう・・・」

牛一がぼやき気味に言った。

「これで謙信公が喜ばれるのであれば安い物です・・・」  
付き添いの侍は言った。

洛中洛外図屏風は足利義輝が狩野永徳に書かせたものの、永禄の変で本人が死去後は忘れられていたが、足利義昭を京都から追放後、花の御所の倉から出てきたと言う。

「・・・謙信公に渡すため、謙信公も新たに書き足してようやく完成した素晴らしい作品であります・・・」  
侍は言った。

「・・・」  
牛一は黙って聞いていた。

「・・・これ以外に謙信公が愛読されてる源氏物語を描いた屏風図も用意しておりますので、信長様と謙信公の結びつきは更に手堅いものになるでありますよー！」

侍は嬉しそうに、しかし文面通りっぽく言った。

「・・・しかし・・・」

牛一は冷めた風に言った。

「源氏物語屏風つて・・・姫様に渡すものだろう・・・謙信公は女子おなこと  
言うが　もし嘘で天狗みたいな大男だったらワシはどうしたらいい  
んじゃ・・・」

源氏物語屏風は男性には普通渡さない。

男性に渡したらそれこそ外交問題で友好どころの騒ぎではない。

牛一もおそらく生きて尾張には帰れない。

「前田利益（慶次）様が若い頃堺や都で会われた時はなかなか麗しい  
姫様だったそうです・・・騎馬に跨り槍を持って酒を飲みながら何  
か揉め事を起した堺の商人の屋敷を焼き討ちして暴れていたそうです  
が・・・情報は間違いありません！大丈夫です！」

付き添いの侍は　牛一を元気付けるかのように言った。

「まあどっちにしろ・・・普通の姫様がすることとはとうてい思えん  
が・・・」

牛一ははあつと溜息をついた。

「ちなみに・・・洛中洛外図屏風に書き足した謙信公は僧服を着て輿  
に載っています・・・女子として書いていますが・・・」

侍は付け足すように小声で言った。

「女子扱いしといて（男か女か）更には確かめると・・・無茶苦茶だ  
・・・まったく・・・」

牛一はぼやき続けた。

「大丈夫です・・・」

侍は続けた。

「何が・・・？」

牛一は侍に尋ねた。

「牛様は実直率直なので・・・謙信公も牛様を気に入られるでしょう  
・・・」

侍は少し苦し紛れに言った。

「褒められているのか、けなされているのかわからんなあ・・・」

牛一は再度大きな溜息を漏らした。

牛一の溜息と正反対に船は順調に北進し、越後の春日山城の城下町、

府内に向かっていた。

牛一は府内の町をしばらく散策した後、春日山城に入った。

(・・・意外と栄えてるいな・・・)

牛一の府内の町に対する感想であった。

日本海航路貿易の一大中継地点で、越後の名産で謙信の資金源の青あ芋おそや様々な物資がここから都へ運ばれ、都からの荷物は信州、遠く甲斐方面までへも運ばれていると言う。

牛一は信長が謙信や越後商人が日本海航路を独占していることは面白くないと言っているのをふと思いついたその意味が解ったような気がした。

そのため、信長が朝倉の旧領土の越前か、琵琶湖近くに城と町を作り、越後衆に対抗しようとする策を練っていると聞いたこともあった。

(険しい山城だ・・・これは守りが固い・・・)

これも牛一の春日山城に対する率直な感想である。堅牢な巨大な山城で落とすのは大抵ではない。

牛一はそのまま洛中洛外屏風と源氏物語屏風を持って春日山城に入った。

源氏物語屏風は謙信が女子か男子か解らないので確認後渡そうかとも思ったが付き添いの侍の手違いで一緒に持ち込まれてしまった。

(まったく・・・ドジ踏みおって・・・)

牛一が侍を呆れながら睨みつけると侍は縮こまっていた。

「ま・・・良いわ・・・男だったら姫様に持ってきたとも言おう・・・」

牛一が小声で言う

「・・・独身のようで・・・」

侍も小声で返した。

「お気に入りくらい一人はおるだろう・・・本当にいないのであれば謙信公の母上か姉君へとも言うておこう・・・」

牛一はすぐに対応を練った。

牛一は春日山城内の広い客間に通された。

客間というか城内全体になぜか、かすかにお香が焚かれていた。

何処と無く女性が好みそうなお香の香りのような気が牛一はした。

「阿虎様とかいつていたか・・ふむ・・」

部屋の中にあつた屏風には虎の絵が描いてあつた。

「若い頃は景虎様と呼ばれ阿虎様と城下の者や越後衆は親しみを込めて謙信公を呼んでいるようで・・ちなみに謙信公の母上様も虎御前とか呼ばれたとか・・」

付き添いの侍が小声で言う

「わかつておるわい・・そんなこと・・」

牛一は一言で返した。

しかし

「阿虎様か・・確かにそうかもしれん・・」

牛一も思わず無意識で言った。

しばらくすると

「お待たせしました・・」

明らかに女子の声があると口ひげが豊かで眼光鋭いがっしりした護衛らしき男と僧服を着て行人包みの男子ではあれば中背というか若干小柄の人間が入ってきた。

男は重臣で親衛隊長で警備責任者の千坂景親と僧服の行人包みの人は謙信その人であつた。

牛一は少し緊張してしまった。

情報通りのようだったがまだ判別がつかないからである。

牛一は謙信と千坂に深々と頭を下げた。

「信長公はご活躍のようで・・」

謙信はやわらかい口調で言った。

「信長公は謙信様と一向宗に対して共に戦う者として、今後も好を



通じたく存じております・・・」

牛一は再度深々と頭を下げた。そして信長からの親書を渡した。

「私も異議はない・・・」

謙信も親書に軽く目を通すとすぐに同意した。

「しかし・・・」

謙信は挟むように言った。

「もう少しお手柔らかに出来ないものであろうか・・・」

謙信は意外な事を言ってきたのである。

「お手柔らかに・・・？」

牛一は謙信を見ながら思わず聞き返してしまった。

謙信はうなずいた。

牛一はついでに少し謙信の顔をじっくり見てみた。

声である程度察しはついていたが、謙信は年齢相応ではあるがやはり、女性のように噂どおり麗しいと言う表現が似合い、勇ましいと言う言葉は微塵にも見えなかった。

行人包みで良く見えなかったが肩まで髪はあり、出家した女性が良く行つ剃髪であった。

牛一は謙信の性については確信を持ったが、それ以上に謙信の予想外の言葉の方が気がかりであった。

「延暦寺や浅井、朝倉の件は聞いている・・・」

謙信は牛一の意に反して意外な事を言い出したのである。

「僧侶や寺院を焼き討ちし・・・浅井親子や朝倉義景殿の首を金色の薄濃はくたみにして杯を楽しむとは・・・ちよつと感心できない・・・」

謙信は普通の表情であったが厳しい口調で言ってきたのである。

付き添いの侍は明らかに予想外で動転していた。

しかしここは牛一の得意とするところであった。

得意というか牛一の実直率直さが発揮できるところであった。

「お言葉ですが・・・民の噂に信長様も苦しんでおられるのです・・・」

牛一は巨体を落ち着かせて言った。

「比叡山延暦寺を焼き、僧侶を殺したのは事実であります．．しかし、信長様が処断したのは、修行もせず、女遊びや武芸の訓練ばかりする悪僧だけであります．．修業もしない僧は僧ではありません．．事実、朝廷からも本件については何も言われておりませぬ．．修行もせずに軍事に明け暮れ、浅井、朝倉と組んで政治にも首を突っ込んでくるのが信長公は許せなかつたのです．．！」

「．．そこで悪僧が困っていた女子や児も一緒に断裁したのだな．．なるほど．．手厳しいな．．」

謙信も返した。

牛一はうなずいた。

「．．私も若い男子は好きだが．．信長公は若い女子とか興味が無いのかな．．？」

謙信は少し嫌な言い方をした。

「．．いや．．信長公は私と違って潔癖なのだな．．感心感心．．」  
謙信はにこりと笑って続けた。

牛一は謙信の予想外の返答に少し戸惑ったが、一呼吸置いて続けた。  
「修行もろくにせず、門徒衆を扇動し、戦をしかけるなど僧侶ではありません。そのような者たちが籠る寺は寺ではなく城です。比叡山は城です。戦で城を焼くのは悪くありません。比叡山を焼きましたがあくまで悪僧が住んでいた城しか焼いていません。一向宗に苦しめられている謙信様にもこの気持ち御理解頂けると存じます．．」

牛一は言った。

謙信も牛一の率直な言い答えに感心していたが

「．．そうであつたな．．確かに一向宗の籠る石山本願寺は寺といふより城であるそうだな．．しかし私は加賀では一向宗と対峙しているが越後では保護している．．彼らを使って交渉も重ねている．．そういうやり方は信長公は嫌いなのかな？」

牛一はまた少し言葉に困ってしまった。

謙信が武勇で策略を嫌うと聞いていたが、どうもそうではなく策略や交渉が巧みな人間のように見えたからである。

牛一は好を通じるためにわざわざ来たのに、なんで謙信がこのような時に信長を遠まわしに批判するような事を言い出したのか正直理解できなかったが、

「確かに懐柔する手もありますが・奴らは信用できませぬ。奴らは直ぐに蜂起しては我等を奔走し、そのために信長公は兄弟や重臣を多数亡くしております・・・」

牛一ははつきり言った。

「・・・確かに・奴らは鎮圧しても直ぐに蜂起する面倒な集団ではある・・・手厳しくもなるな・・・」

謙信も言った。

「しかし・・・あまり手厳しくやると私怨を生んで信長公もおちおち寝れなくならないかな・・・」

謙信は少し笑いながら落ち着いて言った。

「・・・そうですが・・・しかし・・・」

牛一が答えきれないうちに

「一向宗の件は了承した・・・お互いに奴らと対峙しよう・・・」  
謙信がすぐに返してきた。

「もし・・・私が一向宗をうまく丸め込めたら信長公へ差し出がましく無ければお手伝いさせてもらおう・・・」

謙信がにこやかに言った。

「ありがたきお言葉・・・信長公も喜ばれるでしょう・・・」  
牛一も少し安堵して言った。

しかし牛一の安堵もつかの間

「・・・ところ浅井、朝倉の薄濃はくだみの件は本当なのか？」

と謙信は信長の行った浅井久政、長政親子と朝倉義景の頭蓋骨を金

の薄濃にして杯を飲んだ事に関して突然言ってきたのである。しかし牛一は落ち着いて答えたのである。

「薄濃の件もとんでもありません。信長様は浅井長政様を高く買っており、何度も助命勧告をしたのですが……しかし理由は私もよくは存じませんが……朝倉様に恩義を感じていた長政様は信長様に応じず戦に挑み、敗れると潔く今回の謀反の責任を負って自害したと聞いております。信長様は長政様に嫁いだ妹のお市様を悲しませたくなかつたので必死に慰留したのですが長政様は結局最期まで応じて頂けませんでした……」

薄濃にしたのは信長様を散々苦しめた挙句、戦い、侍らしく自ら果てた、浅井様、朝倉様に対する信長様の敬意を表したためと聞いております……浅井、朝倉は勇猛で彼らとの戦いは死闘で我が方にも多大な犠牲者ができました……薄濃にしたのは彼らに敬意を払うためであります……信長様も薄濃を肴に杯を飲んだなどあらぬ噂に心を痛めております……」

謙信はこの男にはつきりした物の言い方に感心したが

「……なるほど……しかし長政殿の母上や長男は磔などにして嚴罰に処したそうだが……それでもそうなのかな……？」

謙信は引き続き聞いてきた。

「……10歳の男子や祖母はお家の遺恨と将来信長様に向かってくるかもしれないからです……ましてや勇猛な長政の息子です……危険ですのでやむをえません……しかし娘の三姉妹の茶々、初、江や奥方のお市様、赤子の寿福丸様はお助けしております」

牛一ははつきり返した。

「そうか……」

謙信は一言言うつと

「少し誤解があつたようだ……そなたのおかげで信長公のこと……よく分かつた……」

にこやかに返した。

しかし牛一が今度は一言言ってきたのである。

「ただ、信長様は裏切りが大嫌いです。裏切りには容赦しません。例え親族だろうが弟であろうとも許しません。義昭様は今回は將軍様なので命まで取りませんでした。三好三人衆は手厳しく処断、長政殿はお市様の件もあるので寛大でしたが、今回の反旗に積極的に動かれた父上の久政殿や朝倉義景殿にはおそらく手厳しく対応したかと思えます。」

牛一は浅井朝倉以外に信長の実弟、信行の件を言ったのである。信行も2度目の反旗のときに信長に殺されている。

これは謙信に対する牽制の意味も込められていた。信長は裏切りに対しては恐ろしく厳しい処罰を容赦なく行った。謙信にも容赦しないとのことである。これは今回の面会の隠された重要な目標でもあった。

「私もよく謀反に合うが・・・そこまで出来ない・・・さすが天下布武の印鑑を使うだけある・・・」

謙信は感心したように言った。

「私は信長殿と仲良くしたいのだが・・・でも信長殿は少し怖いな・・・優しくはないな・・・優しくない人は私は少し苦手だな・・・優しいのが嫌いなのかな・・・？」

牛一は謙信のまたも思わぬ展開に思わず返す言葉に困ってしまった。それを見てか謙信も話を戻し

「・・・まあ・・・私の嫌いないやらしい久秀も茶器のおかげで助かったのだな・・・なら私も良い茶器を用意しておこうかな・・・」

謙信は穏やかに言った。

牛一は謙信が真面目に言ったのか冗談か解らず少し複雑な顔をしてしまった。

そして

「そうだ・・・そなたに良く似た人物に昔会ったことがあるなあと思つたら・・・信玄のところに行った甲斐の山本勘助を思い出した・・・」  
謙信は懐かしそうに言った。

「甲斐の山本勘助・・・？」

牛一は勘助のことは知っていた。信玄の重臣で川中島で謙信に奇策を見抜かれて責任を取って討ち死にしたと都で噂を聞き、川中島の遭遇戦の真相を知らなかったのだ。

「は・・・はあ・・・ありがたき幸せ・・・？」

と複雑な顔で返してしまった。

牛一は謙信の一言に おぬしの考えなど見抜いているぞ と言わんばかりかと解釈したのでまた複雑な顔をしたのである。

牛一は言いたい事は一通り終わったので友好の証にある贈物を渡すことにした。

「ところで・・・信長公から謙信様へお渡ししたい物が・・・」

ポンポンと手を叩くと配下の物が洛中洛外図屏風と源氏物語屏風とを持ち込んできた。

「これは信長様の謙信様との末永い友好をお願いしたいと思ひ都から持ってきた物です・・・」

牛一は洛中洛外図屏風と源氏物語屏風と展開させた。

洛中洛外図屏風の説明を牛一は簡単に行った。

「ここにいるのは輿に乗ったお方は謙信様ですぞ・・・これは花の御所・・・義輝様ですな・・・こちらには内裏と帝・・・」

牛一は丁寧に説明した。

「・・・素晴らしい・・・」

謙信は率直に言った。

「信長公にはこのような傑作を頂いてお礼を是非申したい・・・」  
謙信は見とれながら言った。

「喜んで頂き真にありがたき幸せ・・・」

牛一もやつと安堵した。

「もう一度・・・都に行つて見たいものだな・・・でも上様はもういいか・・・」

謙信は屏風を見ながら義輝との昔を懐かしむように言った。

「もし都に上れるのであれば信長公にも御礼の挨拶をもちたいものだな・・・」

牛一は内心複雑な顔をしてしまった。謙信が義昭を追い出したことを暗に批判して言ったのかと思っただからである。もちろん謙信は義輝のことを言ったのであつてそのようなこと微塵にも思つてはいなかつた。

ただ牛一にとつて謙信が上洛を考えているなど全く予想外であつた。信長は義昭を追い出したのに謙信がそれをもし担ぎ出してきたら今までの苦勞が水の泡になるにはと恐れたのである。もっともこの辺は信長がどう考えているのか牛一にも解らなかつたので答えようもなかつた。

「そつだ・・・」

謙信は思ひだしたように言つと

「近衛前久殿にもよろしく伝えて欲しい・・・」

近衛前久は義昭が都から追放された後、入れ替わるように信長に接近していた。

「信長公の心遣い、本当に感謝する・・・是非 今後も仲良くやつて行きたい・・・」

謙信は牛一に再度謝意を表し礼を言った。

牛一は何はともあれ謙信との交渉がうまくいった事には安堵し、尾張へ帰国していったのである。

牛一は尾張に戻ると信長に全てを報告した。

信長は終始にこやかに上機嫌で報告を聞いていた。

信長が実は近衛前久や前田利益から謙信の本性の事は全て聞いていると言われたときは逆に牛一が信長様も人が悪いと少し膨れるほどであつた。

「それにしても・・・俺を怖い人間とは・・・言ってくれ・・・」  
信長は嬉しそうに言った。

「・・・優しさが足りんだと・・・全く・・・甘いことばかり並べて・・・  
笑わせてくれる・・・」

信長はにやにやと笑っていた。

「大した相手ではなさそうですね・・・」

重臣の明智光秀が嬉しそうに言った。

「・・・油断するな・・・!」

信長は一喝した。

「坊主と女子おんなこは何をしでかすか解らん・・・用心しろ・・・」

信長は慎重に言った。

「ところで・・・」

羽柴秀吉が顔を出した。

「いやあゝ そんな女々しい姫様なら是非お会いたいもんですわ」

秀吉が少しいやらしい顔で言った。

「謙信は俺より年上だぞ・・・お前は若いのしか興味がないんだろう・・・」

・対象外だろ」

信長が率直に秀吉に言った。

一同大笑いである。

「信様・・・そんな言い草あんまりですわ・・・」

秀吉が少し不満そうに言った。

「ところで・・・謙信公は上洛したいそうぞ・・・信長様と義昭公に御  
挨拶をしたいそうぞ・・・」

牛一は率直に報告した。

「上洛・・・?」

信長が急に険しい顔になった。

信長は少し黙っていたが

「・・・それは謙信が俺の配下になるといふことか?それなら構わん・・・」

「でも多分違うだろう?謙信が言う挨拶は本当にただの挨拶だろう?」



信長は正直に言った。

「義昭にも俺の言うことを聞くのであればいつでも都に帰っても良いと言つてある・・ま、俺の言うことを奴は聞きたくないらしいが・」

信長は不満そうに言った。

「・・謙信が上洛している間だけでも義昭殿を都に呼べば良いでしょう・・それで奴も気が済むでしょう・」

柴田勝家が言った。

「・・義昭公のことだ・・前みたいにまた信様への包囲網をこそこそ作るような面倒ごとを起しますぞ・・謙信公と会わずのはおいは反対ですわ・」

秀吉は少し心配そうに言った。

「・・ふむ・・ま、義昭ごときに何が出来るか・・フン・」

信長はキセルを吹かした。

「しかし本当にそれで謙信が配下になるのなら悪くはありませんな・」

光秀は言った。

「・・フン・・まさかな・」

信長は全然信用していない感じであった。

「しかし・・奴め なかなかの食わせ者だな・」

信長が言った。

「なぜに・」

秀吉が不思議そうな顔で言った。

「牛一にそこまで色々話をさせて俺の事を聞きだしているようだからな・・油断ならない女子だ・」

牛一の話聞きながらも信長は密かに確信していた。

謙信とはいずれ対決することになるかと。最も信長は謙信が女だろつと容赦はするつもりはなく、受けて立つ、もしくは討ち滅ぼし

てやろうかと考えていたのである。

一方、牛一はこの後信長の記録とも言える信長公記を書いているが謙信の事に関してはこの後の謙信と信長の関係の破綻と同時に彼の謙信に対する思い出が失せたのか、それともこの後に起こる謙信と信長との最初で最後の戦いでの手痛い体験が効いたのか彼の心境は不明だが一言、謙信の死去した時の記事のみで、越後の謙信が死んだ、と愛想も無く終わっている。

## 第六天魔王信長 前編

元龜5年（1574年）年4月、謙信は関東に兵を出した。

越相同盟破綻後も北条氏康の後を継いだ氏政はしばらく大人しく様子伺うようにしていたが、安房の里見氏や常陸の佐竹氏の勢力が弱体すると再度北関東に向かう素振りを見せたのである。

関東は再度混乱の真っ只中で安房の里見氏は義堯、義弘親子が何とか守っていたが劣勢は否めず、常陸の佐竹義重も南から北条の関東北進と北からは新たに勢力を伸ばしつつあった陸奥の蘆名氏との間に挟まれて、北と南での両面作戦を強いられ、関宿城の築田晴助も北条軍の攻撃を受け籠城戦を強いられ、袂を別つたはずの謙信に再度助けを求めていた。

謙信はそれらの要望に答えるために関東に兵を出し、まずは上野国に入ると再度謙信の元を離れ、氏政側についた由良繁成の居城、金山城や彼の支城に対して攻撃をかけたのである。

支城は次々と落城させたが、繁成本人が籠る金山城は守りが固くてさすがの謙信も力押しで落とすことは出来ず、謙信も味方の無駄な消耗を防ぐために包囲のみに終始した。

ただ謙信の攻撃に対して氏政の動きは緩慢であった。

実は謙信も今回は北条側に寝返った繁成の城を攻撃はしたが、繁成側も大半の支城は放棄し、金山城にのみ籠り、それほど戦う素振りを見せなかったのである。

繁成だけでなく氏政もそれは同じで繁成の援護のために兵を出してきたが、謙信と本気で戦うつもりは無く、北条軍も利根川を越えることは無く、逆に謙信もそれは同じで謙信も関宿城救援の為に利根川を越えることは無くお互い待ち構えるばかりであったのである。

二人が動かないのはの上杉景虎の存在からである。

氏政が越相同盟破綻後も景虎の帰還を求めなかったのも、謙信が本人の同意あつて追い返さなかったのもあつたが、越相同盟破綻後もどこか双方妥協できる点を探っていたためであつた。

氏政は結局そのまま利根川を越えることは無く、両軍は睨み合いに終始し、5月になると結局双方そのまま軍を引いて大きな戦も無く終わったのである。

しかし同年6月には安房の里見義堯が死去し、安房方面も北条優位に流れが変わりだすのである。

北関東の諸将からも再度謙信に助けを求める依頼が飛び込んでいた。

ただ謙信も迂闊には動けなかつた。

景虎の件もあつたが謙信も越中能登に集中したかつたのである。

物資を送るなどの援護はしたが兵を出すなどの積極的な対応はしなかつた。

気まぐれな関東国人衆に多少辟易していたのも事実あるが、謙信が北条と越相同盟を結んだ時に、謙信寄りの関東の国人衆は力を弱体化させられたため、謙信もそれを快く思わず、その部分を関東国人が改め本心を見せるまでは動かなかつたのである。

関宿城も昨年末以降北条軍に包囲される長期戦になつていた。

袂を別つたとはいえ謙信も築田晴助への救援の必要性は認め、佐竹義重に関宿城への共同軍の救援作戦を提案し、謙信も結局10月には再度関東に兵を出し、羽生城を拠点として陣を構えたが義重は謙信の北条との同盟、越相同盟以来、謙信を信用せず、越後との共同作戦に慎重だつたため義重は関宿城に救援を送らず、謙信も義重の行動を理由に関宿城の救援には結局向かわなかつたのである。

謙信は宇都宮広綱の妻で佐竹義昭の次女で義重の妹の南呂院に手紙

や支援物資を送っている。手紙を送ったのは義重の妹の南呂院に義重の方針を改めるよう政治工作をした物と思われるが、手紙の内容は「返々、そのくちてきのひうりにのられ候、たしかわたてにくびをしめへく候か、女き二御入候とも、御ふんへつ候へく候、またゑんころそて一かさね給、一しほゆわい入まいらせ候、以上、此たひよし重つもりちかひまいらせ候、たたいまはこうくわ井候、さりながら、いよゝうちかわるましきよし、けん信も同意におひまいらせ候、とにかく、よきやうにせいを御入もつともに思ひまいらせ候、めてたくかくし」

（かえすがえす佐竹義重と宇都宮広綱が敵、北条氏政の裏表の口車にのつてしまい、真綿で首をぎゅっと絞めらるような（私たちのよくな？）女き（女騎？女儀？）にも分別がつくような状況なっています。また小袖を送りましたがお氣にめしますかどうか。このたび佐竹義重が味方に付かなかったことには私も後悔していますがしかながら考えを改めているようですので私もそれに同意します、とにかく良い方向になればと思います。めでたく。かしこ。）

義重に再度自分に味方し、関宿城の救援を求めるものであったが、結局これは叶わず、関宿城は結局この後、義重の仲介もあり11月には落城、晴助も降伏、水海城に退き、謙信も北条側に使われるのを恐れて羽生城を破却し、越後に兵を引いたのである。

謙信はこれ以降、二度と関東の地を踏むことは無かったのである。

一方織田信長もこの頃激しく抵抗する伊勢の長島の一向宗と激戦を繰り広げていた。

謙信も一向宗には手を焼いていたが信長も同じで元亀元年（1570年）からこの地では絶えず戦火が交えられていたが天正2年（1574年）に浅井朝倉氏を滅ぼすとようやく全戦力を持って一向宗と戦えるようになり7万から8万という大軍勢で決戦に挑んだのである。

長島一向一揆との戦いは熾烈を極め、信長の弟たちや重臣が多数戦

死し、信長の逆鱗に触れた一向宗は城に立て籠もったまま焼かれて、2万人が犠牲になり9月にようやく一向一揆は鎮圧されたという。

「信長公は本当に魔王か・・・」

謙信はこの報告を驚きながら聞いていた。

反旗を翻したものを手討ちにするだけならまだしも、味方の犠牲をもかえりみず、戦うその姿勢に驚きを持って見るしかなかったのである。

年が明けて、天正3年（1575年）1月謙信は顕景に弾正の地位を譲り顕景はこれ以降景勝と名乗るようになる。

そのころ甲斐でも信玄の後を継いだ勝頼が父信玄の夢を継ぐべく再度西上作戦を展開し、信玄が落とせなかつた高天神山城を落として再度三河に迫っていた。

勝頼は信玄から謙信と組むよう遺言されていたが、勝頼の意地もあり、和睦交渉は進捗せず、また勝頼と信玄時代からの重臣の軋轢も納まらず、武田家は以前のような磐石さは失っていた。それでもまだ信玄時代の武勇に優れた重臣が数多く残り、武田家を支えていたのである。

勝頼は父信玄を越えたいとの強い志があり、そのためにも父信玄が病のために成し遂げられなかつた西上作戦をなんとか成功させ、求心力を得たいあせりの気持ちもあつた。

前回では織田、徳川連合軍が敗退を重ねたのもあり、勝頼には多少の勝算もあつた。

しかし、今回信長も家康も武田に反撃すべく準備をしつかり整えていたのである。

信玄の時の西上作戦時は信長は浅井朝倉や一向宗との戦いに明け暮れていたが今回は西の毛利や大阪石山本願寺との戦いはあつたが、前回とは明らかに情勢が変わっていた。

前回信玄の西上作戦時には謙信は同盟相手の信長から川中島から武田領への侵入を依頼されていたが今回は信長からの依頼は特になく、謙信も静観を決めていた。

信長からの依頼が無かったことに逆に謙信は信長の

「手助け無用」との強い意志の表れとも感じていた。

一方勝頼は謙信から川中島を守るため1万近い兵力を配備し、三河、遠江方面は2万程度と少ない戦力しか展開出来ず、勝頼の予想外に大戦力を擁してきた織田、徳川連合軍相手に思わぬ苦戦を強いられるのである。

6月の蒸し暑い日、織田、徳川連合軍は三河の地を甲斐に向けて北進していた。

勝頼率いる武田軍が三河を南下しておりそれを食い止めるべく迎え討つのである。

信長の部隊の足軽隊には謙信から密かに送り込まれていた軒猿が紛れ込んでいた。

織田軍の情勢を密かに探るためである。

彼らは多数の柵と重い火縄銃、鉄砲を持って黙々と歩いていた。

既に前哨戦と言える戦いは始っており、徳川方の長篠城は500の極めて少数の兵士がいなかったが多数の鉄砲を揃えて長篠城を囲む1万5千の武田軍相手に激しく抵抗、善戦していた。

今回の作戦は長篠城を救援するのが最大の目的で、武田軍が甲斐に戻れば終了のはずであった。

今回、織田、徳川連合軍は武田軍の倍以上の兵力を展開していたが、信玄時代に大敗を喫し、武田軍は強いとの思いや恐怖心が織田、徳川軍の兵士にあったため深い入りするつもりはなかったのである。

ようやく長篠城が近づくと

「全軍停止！」

信長の与力の金森長近が全部隊に停止命令を出した。長篠城は目前であったが武田軍1万5千に囲まれているため城内には入れず、少し離れた南の設楽原に布陣したのである。

「柵を展開させる！小川沿いに立てろ！土豪も積みめ！」

金森の命令で織田の足軽たちはときばきと訓練どおり柵を立てていった。

信長の本陣の周囲は三重の柵と土豪で囲まれ、簡易な城のようになっていた。

じつはこのような野戦築城は当時の日本では非常に珍しいものであった。

「奴ら騎馬で一直線に突っ込んでくる・・・この柵で足止めすればワシらでも勝てる！」

足軽は作業をしながらつぶやいた。

「こいつの威力を見せてやりますって！」

別の若い足軽も鉄砲を握り締めた。

今回信長は各武將に鉄砲の配分を決めて大量に実に三千丁近くも用意していた。

それでも武田の騎馬隊の恐ろしさは有名で織田、徳川軍の足軽は緊張した表情を緩めなかった。

「・・・こんだだけ兵力差があるんだ・・・勝てるって・・・」

密かに紛れ込んでいた越後の軒猿はおどけて言った。

事実、今回武田の1万5千に対して織田徳川連合軍は3万と倍近い戦力であった。

「お前・・・武田軍の強さを知らんのか・・・家康様は九死に一生だったんだぞ・・・」

足軽は作業を続けながら言った。



「用心にこしたことはねえ．．ま、いざだめになったら とんずらだが．．」

別の者が足軽らしい返答をした。

「上杉はどうだ？謙信もかって信玄と互角に戦ったそうじゃないか．．」

軒猿は少し個人的に興味のある質問を試みた。

「まあ．．強いらしいが．．今は一応味方だろ．．」

足軽は無関心に言った。

「今日、うまくいけば上杉と手切れになっても同じように料理してやれば大丈夫じゃ！もう織田に立ち向かえる輩なんかおらんわ．．」

別の中年の足軽が言った。

「しかし用心には違いない．．弾を詰めている間に騎馬は距離を縮めてくるからな．．」

足軽大将の男は慎重に言った。

事実、当時の鉄砲は射程が短いうえ、火をつけて弾を込め発射するまで時間がかかり、野戦ではその間に接近され倒されることが多く、籠城向きの武器で運用も気難しい一面があった。

「だから柵で時間を稼ぐんじゃ．．お前らちゃんと3人で行動せよ．．」

突然落ち着いた風情の中年の武将が横から入ってきた。鉄砲の名人と呼ばれ信長の重臣の滝川一益が視察のついでに突然口を挟んできたのである。

三人を三段に分けて順番を区切り、撃っている間に別の者は弾を込めて準備をし、発射を繰り返すのである。発射時間が三分の一になる三段撃ちと言う画期的な戦法であった。

「いやあ．．俺太刀打ち苦手だからな．．鉄砲は頼りになるぜ．．」  
若い足軽がしみじみと言った。

しかし

「鉄砲に頼るな！」

再度誰かの甲高い声が突然割って入ってきた。みんな仰天した。なんと信長自ら兵士を奮い立たせるべく陣を練り歩いていたのである。

「・・・武田の騎馬隊を甘く見るな！何騎かは必ず突破してくるはずだ・・・そこは太刀なり槍なりで討ち取れ！柵は馬の足止めと鉄砲は敵の混乱程度にと考える！」

信長は甲高い声で兵に檄を飛ばした。

「へ！へい！」

足軽たちはみな信長に平伏していた。

（信長公はなかなか武道派だな・・・）

軒猿の信長に対する率直な感想である。

信長はこの頃既に大名に違いなかったが日々武道の鍛錬を好み、既に40前半であったが肉体は研ぎ澄まされ鍛え上げられていた。

残虐で容赦ない男ではあるが、意外と生真面目で裏切りや謀略を嫌い、ある意味血生臭いが武将らしい男ではあった。

自分の世間評判を意外に気にし、また規律にもうるさく、悪行を働く足軽は味方だろうと自ら太刀を持って鉄槌を下すこともしばしばであった。

また自分の武勇や鍛えられた肉体に自信があったのか、危険な最前線で指揮を執ることもよくあった。

柵の設置が終わると間もなく、武田軍の主力、1万2千が少し設楽原の信長の本陣近くまで圧力をかけるように移動し、武田軍も織田、徳川連合軍に向かい合うように部隊を展開してきた。

織田、徳川連合は数では勝っていたがやはり最強と名高い武田軍を目の前で見て相当緊張していた。

長篠城は相変わらず3千の武田軍に包囲され、東側の巢鷲ヶ山にも数はわからないが武田軍が展開し、山上から織田、徳川連合軍を見降ろしていた。

数では織田、徳川連合軍勝っていたが、長篠城が完全に囲まれていたため気迫では若干押されていた。

## 第六天魔王信長 後編

武田軍と織田、徳川連合軍が睨み合いを始めて数日目のある夜、軒猿は突然、この晩作戦が展開されることを知らされた。

闇夜に应じて巢鷲ヶ山の武田軍を急襲して壊滅させ占拠、逆に設楽原の武田軍を長篠城、巢鷲ヶ山、そして設楽原の織田、徳川連合軍で包囲する作戦であった。家康の重臣の酒井忠次が提案した作戦で、実は数日前にこの作戦は提案されたのだが信長が却下し、中止になっていた作戦であった。

噂だと武田に情報が漏れるのを防ぐため一旦中止し、今回急遽実行することになったという。

この作戦は流れを一気に織田、徳川連合軍に引き寄せようという作戦であった。

徳川方の伊賀忍者の報告によると巢鷲ヶ山には武田軍が殆どおらず、逆に巢鷲ヶ山を織田、徳川連合軍で占拠すれば反対に武田軍を包囲することになり、普通に考えれば退路を押さえられるために武田軍は甲斐に大人しく撤退するであろうとの目論見であった。

巢鷲ヶ山の武田軍襲撃部隊は織田からは軒猿が属していた金森長近ら信長の直近の与力の部隊と徳川の重臣酒井忠次の部隊の合同軍3千が鉄砲隊500を引き連れてあたることになった。金森も酒井も戦慣れした兵が多く双方信長、家康の信頼が厚い武将だったので選ばれたのである。

夜半、金森、酒井隊は設楽原を密かに出発すると、豊川を渡り、船着山方面に密かに用意された回り道を使い巢鷲ヶ山の武田軍の砦の背後に密かに素早く回りこんだのである。巢鷲ヶ山の武田軍はまさか背後から襲われるなど思ってもおらず、あつという間に砦への織田、徳川連合軍の侵入を許し、巢鷲ヶ山にあった武田軍の砦はすべ

て兵力で勝る織田、徳川連合軍によって落とされた。通常戦法と違い、山の裾を一気に登って直ぐに攻撃をかけるという難しい作戦であったがこれを見事やりのけ、明け方には巢鷲ヶ山の武田軍を全て追い払い、この時の戦闘で武田側は高坂弾正昌信の長男の高澄や山本勘助の長男の勘蔵、今回上野から参加していた和田成繁、三枝守友などが戦死する大損害を受けるのである。

早朝になり、巢鷲ヶ山の武田軍が織田、徳川軍の別働隊の急襲を受け壊滅したという衝撃的な知らせを聞き、勝頼もすぐに決断を迫られた。

巢鷲ヶ山の武田軍が壊滅した時点でも甲斐へ戻るための北側は空いていたので武田軍はまだ甲斐に撤退することが出来たが、巢鷲ヶ山を攻撃した酒井隊が勢いに乗って北側まで侵入を開始したため、武田軍は逆に織田、徳川連合に囲まれて退路もままならない危険な状況に置かれていた。

勝頼は刻々と入ってくる戦況の状況を聞きながらどうするか迷っていた。

長篠城攻略を諦めて北側の少数の酒井隊を突破して甲斐に撤退するか、巢鷲ヶ山に部隊を回しているため、若干手薄になっている織田、徳川本隊をこの機会に一気に叩くか、先に昨晚奇襲を行った巢鷲ヶ山の部隊を叩くかである。

酒井隊を突破して甲斐に撤退するのは一番安全であったが、信長の前で後退することは父、信玄の思いに適わぬものであった。ここで後退してもいざれ再度、織田、徳川軍と対峙する必要がある、ここで戦わず逃げれば自分を見くびり、甲斐内で信長に内通する者が必ず現れ、逆に今後の戦いが不利になると勝頼は考えたのである。

巢鷲ヶ山の部隊を叩くのは下から山に登るといって極めて難しい作戦で、また武田軍の自慢の騎馬隊による突破、突撃力が充分に発揮で

きず苦しい作戦になることは必須であった。

残りは真正面の織田、徳川軍本隊を直接叩くことである。

数の上では武田軍の倍以上の戦力で新兵器鉄砲を数多く揃え、浅井朝倉氏を撃破してきた強敵であるが、鉄砲は威力はあったが運用が難しく当時の鉄砲は連射が出来ず、二発目の発射まで時間がかった。織田、徳川の連合軍の鉄砲隊は防御用の柵で守りを固めているが応急に作られた柵で決して頑丈な物には見えず騎馬隊で突破するのは容易く見えた。

しかも巢鷲ヶ山方面の部隊にも展開しているの倍以上の戦力差では無いとの報告も入っていた。

ここで信長を打ち破れば三河、尾張まで一気に進撃でき、信玄の達成できなかった偉業を達成でき、父を超え、武田の家名を世間に轟かし、自分をもみな信玄の後継者として伯が付くであろうと考えたのである。

しかもこの日は雨が降っていた。雨では鉄砲隊は使えない事が多く、威力も著しく低下する聞いており絶好の機会かと考えたのである。

勝頼はしばらく考えこんでいたが

「甲斐の兵士は最強である・・・」

勝頼はつぶやき、そして目をかっと開くと

「敵は巢鷲ヶ山の勝利で油断しているに違いない・・・本隊の兵力も少ないはずだ・・・しかも今は雨で鉄砲が使えんはずだ！突撃せよ！

全軍狙いは設楽原の織田、徳川本隊！遠江、三河はみな土地ぞ！」  
勝頼は命令を下したのである。

武田四天王と呼ばれる山県昌景、馬場信春、内藤昌豊ら信玄時代からの生え抜きの重臣らも実は本音ではどうしたらよいか迷っていた。忍者の不透の報告では確かに織田、徳川連合軍は鉄砲隊が自慢ではあったが信長自信は本陣でふんぞり帰っているような男ではなく、自らの危険も省みず前線に立つ武道派で織田軍は全体はともかく信長直近の旗本たちは腕利きが多く油断ならないと報告が入っていたからである。

しかし確かに今日のように雨が降っていけば信長自慢の鉄砲が使えず武田自慢の騎馬隊や一兵の戦力では最強と誉れ高い甲斐の兵士がその力を十分に発揮できる可能性は充分にあった。

兵力では武田軍は劣っていても質で勝てる可能性は充分にあったのである。

ここは武田軍も勝頼に賭けてみたのである。武田軍は全軍、設楽原に陣を構える織田、徳川本陣に攻撃を開始した。

織田軍の兵士の予想に反して武田軍は設楽原の織田、徳川本陣に突進してきた。

織田、徳川連合軍は柵の奥で皆迫り来る武田の騎馬隊に恐怖していた。

「・・・来やがったな・・・！」

信長は突撃してくる武田兵を睨みながら呟くと信長の命令よりも前に先に

「鉄砲隊！構えろ！点火！」

滝川一益が指示を出すと伝令兵が次々と声を出し、準備を指示した。

しかし両軍対峙し、作戦は始ったばかりであったが実は武田軍も同じ恐怖の感覚を持っていた。

彼らは鉄砲に恐怖したのではなく、天候に恐怖したのである。

「なんでここは晴れてるんだ!？」

馬場信春が驚きと焦りが混じったような声を思わず絞り出した。

武田の本陣を出たときは雨であった。雨であれば織田、徳川軍は鉄砲が使えないのでこちらにも勝機はあった。

しかし、本陣では雨が降っていたのに、設楽原に来ると雨が止んで、晴れていたのである。天気が良いければ鉄砲がその威力を発揮する。

逆に武田にとっては危機であった。

「本隊に知らせましょうか？」

馬場隊の兵士が不安そうに勝頼本隊に連絡を取ろうとしたが

「今更・・・無理じゃろ・・・！」

事実、武田軍は次々と全部隊、織田、徳川軍に向けて各部隊突撃しようとしていたのである。

「・・・雨がやんでいるではないか！」

しかし信春以外の他の武将も同じ驚きの声を各自上げていた。

この天候の悪戯は武田家にとっての不幸になるのである。

勝頼も本陣を出るときは雨が降っていたのに設楽原に来てみたら雨が止んでいたのに驚いた。しかし今更後退や作戦変更も難しかった。背中を見せて逃げれば、織田、徳川連合軍に追撃される可能性が高いからである。前に行くしか無いと勝頼は悟ったのである。

勝頼は覚悟を決めると

「ひるむな！」

勝頼が大声を出した。

「鉄砲は二発目まで時間がかかる！その隙に叩け！行くぞ！つっこめ！」

武田の騎馬隊は勝頼のその言葉を聞くと、猛然と織田、徳川連合軍に突撃を開始した。

巢鷲ヶ山の山上では既に戦闘が終わったため占領した武田の砦から軒猿は設楽原の戦いの様子をじつくりと見ることができた。

それは軒猿だけではなく、ここにいた人間全員にとって初めて見る恐るべき光景であった。

柵の向こうでどんどん距離を縮めてくる武田の騎馬隊に織田、徳川連合軍の兵士はみな恐怖に怯え、構えている鉄砲が震えているのもわかるほどであった。

騎馬隊が有効射程の100mと言う極めて近くまで入り馬の息の音



が聞こえる距離になったときようやく滝川一益の手が上がった。

「撃てー！！」

伝令兵の掛け声と同時に織田、徳川連合軍の最前列の千丁の鉄砲が大轟音とともに火を噴いた。

鉄砲の煙で一瞬辺りは真っ白になったが煙は晴れると次の瞬間、武田軍の最前列でこちらに突っ込んできた騎馬武者や足軽はみな倒れていたのである。

「信じられんわ・・・！」

鉄砲を撃った織田の足軽自身が思わず驚きの声をあげてしまった。

「ひるむな！今が好機！第二波！第二発まで時間がある！」

勝頼がすぐに再度突撃命令を出した。

「味方の屍を越えろ！好機じゃ！」

内藤昌豊もすぐに前線の部隊に再度突撃命令を出した。

倒れた武田の騎馬武者の向こうから新手が突撃をかけてきた。

織田軍は伝令は直ぐに命令を出した。

「第一列後退！第二列構え！」

最初に撃った兵士は皆最後尾に戻り弾を込める準備を始めた。第二列目の足軽が直ぐに構えて突撃してくる武田軍に狙いを定めた。

「撃てー！！」

伝令兵が大声を出すと再度織田の千丁の鉄砲が大音響と共に火を噴いてあたりを一瞬煙で真っ白にすると再度煙が晴れると前以上に武田兵の遺体が当たりに転がっていた。

「予想外に短い間隔じゃないか！新型の鉄砲か！？」

山県は思わず声を裏返して驚きの声をあげた。

信長はばたばたと倒れていく武田兵を見ながら甲高い声で笑っていた。

信長はこの時は圧倒的な勝利を確信したのである。

「銃をよこせ！」

信長自ら銃を持った。

「俺は第六天魔王なり・俺に逆らう者は・みなこうなるのよ！」  
信長は雄叫びを上げた。

武田軍は大混乱に陥っていたが、至近距離に双方あったため織田、徳川軍の動きがすぐにわかり、鉄砲隊が交代しながら銃を撃っていることを悟ると、すぐに対応すべく作戦をすぐに立てた。

「弓を用意しろ！鉄砲もだ！こつちにもあるだろうが！持ってこい！狙撃しろ！急げ！」

武田の知将、真田幸隆の後を継いだ信綱がすぐに状況を悟り対抗しえる奇策を行った。

「味方の援護の間に柵に取り付くぞ！馬は捨てて勝手に走らせる！前方の盾、囷だ！馬をどんどん走らせ！」

馬が鉄砲の音に怯えて言うことを聞かなくなり混乱を起こしていたので馬を諦め、人足で突撃するのである。馬は勝手に最前線を行かせた織田、徳川の鉄砲隊の気を逸らすための最後の死に行く任務を混乱しながら行うだけである。

武田軍は三波の捨て身の攻撃を行った後、直ぐに無人の騎馬を織田の柵に向かわせた。

馬は鉄砲の音で大混乱に陥り、訳も解らず柵まで突っ込んだり柵の周囲をぐるぐる回り、銃弾を受けて倒れていった。

織田の三段構えも計算上ではうまくいくはずであったが、足軽兵の緊張や武田軍の大混乱に陥り狂ったように訳も解らず走りまわる馬に気をとられて無駄玉を撃つようになり、また千丁の鉄砲の煙で見通しが悪くなっており、設楽原の状況が良く解らなくなっていた。

「ワシが行く！みなついて来い！」

信綱が前線に突撃した

「弓隊！鉄砲隊！狙え！奴らは煙と騎馬でこっちに気付いておらん！」

信綱の弟の昌輝も命令を出した。

弓兵や鉄砲隊は煙の範囲内で武田兵や馬の屍の影に低く隠れ反撃を開始した。

「ぐわあ！！」

「ぎゃっ！！」

織田、徳川軍の足軽兵が次々と煙の奥から放たれる武田軍の弓や銃撃を受けて声を上げながら倒れた。

無我夢中で鉄砲の弾の補充に専念していたので、まさか武田軍からの鉄砲や弓での反撃を予想しておらず最前列一重目の柵の部隊は大混乱になった。

それを確認すると

「お先に！ワシらを越えて行ってくださいませ！」

土屋昌次の部隊が再度捨て身の攻撃を行うと火を噴くことが出来た鉄砲の反撃をここでも受け、かなりの兵士が倒されたがそれでも昌次らの生き残った部隊が力づくで一氣に一重目に取り付き織田の鉄砲隊に武田軍は襲い掛かった。

「土屋隊の一部が一重目の柵に到達！」

真田兵が大声を上げた。

「ようし！援護続けろ！行くぞ！真田の名前を轟かしてくれろ！」

信綱は最前列の一重目の織田、徳川連合軍が混乱に陥っているのを確認すると突撃を緩行した。

土屋隊に続き勇猛と評判の真田隊も柵に取り付いた。

接近戦なったら武田軍も全く引けをとらない。

武田軍は柵に取り付くと鉄砲は得意でも太刀討ちは苦手な織田、徳

川連合軍を圧倒、一重目を突破して、二重目に向かおうとていた。織田、徳川連合軍の鉄砲隊も鉄砲を諦めて槍や刀の接近戦に切り替えたが完全に押され、二重目でもあちこち太刀打ちが始っていた。耐えられない部隊は三重目の柵に後退を始めようとしていた。

「いける！本隊に連絡！援軍を！我ら中央突破する！両翼もその隙に突破するよう！」

信綱は手ごたえを感じ、弟の昌輝に命じて直ぐに勝頼本隊の救援を求めた。

また息子の信興、信光兄弟に両翼、左翼の山県、右翼の内藤、馬場へ援護の依頼と戦法の伝授に向かわせた。

鶴翼の陣の形態で中央で時間を稼ぎ可能であれば突破、その間両翼の部隊で更に周囲を突破、少数で大軍を破る古今東西、有名な戦法であった。

「やるではないか！さすがよ！」

武田軍の予想外の手ごたえ、反撃に信長は怒りではなく喜びで半狂乱であった。

しかしここで信長は恐るべし命令を下したのである。

「三重目！撃て！」

信長の周囲の三重目の足軽鉄砲隊は仰天した。まだ前列二重目の柵で味方の足軽兵が押されてはいるが戦っており、こちらに完全には後退していなかった。

「お待ちください！まだ味方がいます！後退が終わるまでお待ちを！それかこちらから援軍を！」

佐久間信盛が慌てて信長に進言したが

「たわけえ！」

信長が魔王のような形相で言った。

「後退してくる連中を待っていたら武田の連中も調子に乗って来るであろうが！援軍を送って奴らを槍や刀で本当に追い払えるんか？」

！できんだらうが！奴らが来るのを待つて本隊まで全滅させるんか！貴様！」

信長は恐ろしい形相のまま信盛を怒鳴りつけた。

しかし信長の言っている事は真実であった。接近戦、太刀打ちでは明らかに織田、徳川軍は武田軍に押されていたのである。信盛は反論できず黙ってしまった。

「味方に構わず撃て！」

滝川一益が状況を確認し命令を下すと三重目の鉄砲隊が大轟音と共に火を噴いた。

「なっ！俺達は味方だろ才！」

織田、徳川連合軍の二重目で戦っていた足輕は予想外に味方、背後から撃たれてばた倒れていった。

「何！！味方も撃つんか！！気狂いか！！」

信長の予想外の行動に信綱も思わず声を裏返してしまった。

この信長の行動は武田にとっても予想外の結末を迎えることになる。中央の信綱の援護に向かっていた武田信廉や穴山信君の部隊は前線で再度織田、徳川の鉄砲隊が火を噴き始めたのを見て不利と勝手に悟り、信綱の救援を諦め、無断で後退を始めていたのである。

勝頼本隊は護衛が心持たないため前進できず中途半端に停止を余儀なくされ、中央で奮戦する真田隊の救援もおぼつかなくなっていた。信廉や信君が援護になかなか来ないので信綱も苛立っていたが彼らが勝手に後退したと聞き信綱は更に仰天した。

自分達が突破されれば、両翼の味方の部隊も逆に押し切られてしまう。

事実両翼の部隊はこちらもなんとか第一重の柵に取り付き、太刀打ちを始め、まさにこれからまわり込み反撃しようとしている最中であつた。

全てを悟つた信綱は

「引くな！絶対に引くな！両翼の部隊が崩すまで待て！」

大声で命令を出すと

「この柵で迎え撃つ！ワシらの得意の護衛戦じゃ！」

信綱らは織田、徳川連合軍から奪った柵を盾に激しく最後の抵抗をしていた。

「両翼が突破するまで・・持つてくれ！」

信綱は両翼の部隊が突破するの祈るように待つのみである。

武田軍が二重目の柵に取り付き必死に抵抗してたため、戦前が膠着を始めていたが、信廉や信君の部隊が後退を始め、勝頼の部隊が足止めされ取り残されていると信長は聞くと

「・・・よし・・・」

信長は機会を悟ったように先ほどの興奮が嘘のようになりを潜めて静かに言った。

「全軍前進！まずは武田の中央の部隊を踏み潰せ！」

織田、徳川連合軍は前進を開始したのである。信長自ら危険を翔りみず騎馬に跨り、欧州製の鉄砲の弾を弾くと言われる南蛮製の素材を使い、南蛮鎧を真似た特注の派手な銀色の甲冑を光せ、真っ赤なマントをたなびかせながら進撃を開始した。

信綱の部隊は著しく消耗し戦力が低下していた。信綱の中央の部隊は援護が受けられないためほぼ絶望的な状況になりつつあった。

織田側が造った第二重柵で必死に粘る信綱の前に織田、徳川連合軍の大軍が徐々に向かって来た。

「みんなよくやった！真田の兵士の武勇は後の世まで語り継がれるであろう！」

信綱は最後に味方を励ました。

しかし多勢に無勢、信綱らの真田隊は激しく抵抗するもついに織田、徳川連合軍に突破され信綱、弟の弟昌輝、息子の信興、信光兄弟は相次いで討ち死にし、部隊も壊滅。中央の真田隊の壊滅、突破により、両翼の山県隊、内藤、馬場隊も後退が難しくなり徐々に切り崩され始めて武田軍は総崩れになっていった。

「おのれ！よくも！」

左翼の山県は中央の土屋、真田隊の全滅を聞き、慌てて後退を始め、も途中で織田、徳川軍の鉄砲隊の掃射を受けて山県自身も狙撃を受けて討ち死に、右翼の内藤、馬場も大慌てで孤立する勝頼の本隊と合流すべく後退を開始した。

巢鷲ヶ山の部隊は戦いの様子を半ば啞然と見ていたが金森が我を取り戻したかのように

「よし！武田は後退するようだ！我が隊はこれより武田軍の退路に展開、迎えつつ本隊と挟み撃ちにして武田軍を殲滅する！行くぞ！」  
「長篠城の部隊も外に展開させる！武田兵を一人も甲斐に帰すな！」  
酒井忠次が命令を下した。

巢鷲ヶ山の部隊は山を降りると甲斐に後退すべく設楽原から撤退してきた武田軍と大乱戦になった。

勝頼本隊は信豊、信君らが勝手に先に退却し、味方部隊の損傷も激しく、中央隊が壊滅した後、両翼の部隊も壊滅、更には巢鷲ヶ山を奇襲した部隊に阻まれて撤退もままならない状況に追い込まれ、勝頼を守るため、内藤、馬場、原昌胤親子と名将が相次いで戦死、甲斐軍は初めてとも言える大敗北、大打撃を喫したのである。

武田軍は鉄砲による大混乱から崩れて実弾の餌食になり、なんとか得意の接近戦まで持ち込むも、味方の連携不足から崩れて壊滅状態で甲斐本国に撤退したのである。

武田側は1万5千というほぼ壊滅の状態で多数の武將を失ったことで、今後の戦にも多大な支障が出るようになるのである。

一方信長も武田軍に勝利したとは言えその表情は険しかった。

もう少し楽に勝てるかと思っただけ予想外に反撃を受けてこちらでも6千近い大損害をだしたからである。

「おのれ！オレにここまで楯突くとは！甲斐本国に行ったら残っている連中の首も片っ端から刎ねてやるわ！特に勝頼の首は京都で晒してやるわ！」

信長は甲高い声で怒りを露にしていた。

春日山城では帰還した織田、徳川軍に紛れ込んでいた軒猿からの武田軍が長篠で信長、鉄砲隊に完敗したその話に一同衝撃を受けていた。

北条にも今回の戦の様子は伝えられたようで、北条側もこれ以降信長には一目置いていくように氏政も信長と好を通じようと盛んに使者を送っているとの情報が入ってきていた。

長篠での武田軍壊滅的敗北の知らせを聞いて、越後の牽制のため海津城にいた高坂弾正昌信は着替えの甲冑を持って出迎え、引き上げてきた甲斐兵に惨めな敗戦の思いをさせないよう繕ったという。

高坂弾正はこの後、すぐに再度謙信に使者を送り、越後との同盟を再度画策すべく奔走するのである。



## 夢上洛

長篠の戦いの衝撃が冷めやらぬうちに、天正3年（1575年）6月、再度、太田牛一が信長からの使者として謙信の元にやって来た。そして今回もまた、信長から妙な贈り物が贈られてきたのである。南蛮の衣装でマントという物で、貴重な南蛮製の布を使い、暖を取るのに適しているという。謙信は若い頃から良く越後上布を肩や首の周りを囲んで防寒を兼ねて暖をとっていたがそれに比べても生地も厚く、暖を取るのに適したものであった。信長も愛用しているという。

信長はこのような高級な希少な南蛮品を謙信によこしたのは、信長は武田勝頼の件で謙信には介入して欲しくないとの意思表示であった。

謙信も信長が武田を滅ぼす気であることを内心確信していた。謙信も今まで信玄に散々煮え湯を飲まされてきた。謙信は決して信玄の行いを良くは思っていないが別には好意は無くても悪意や憎しみも無く、信玄の子供や家臣たちにも特段の感情は無く、武田を滅ぼそうなど考えたことなどなかった。

しかし信長は自分とは違い武田家を滅ぼそうとしていた。

信長からすれば武田を滅ぼせば当面の脅威はなくなると思っている行動であろうが、謙信は信長の気に入らない者は末代まで滅ぼさんというやり方に相容れない物を感じ、また謙信も信長の次の狙いは自分であるかもしれない点は薄々感じてはいた。

春日山城内の家臣団も実は今後の方針を巡って揺れていた。

春日山城内でも武田軍を壊滅させた信長の鉄砲隊に恐怖を覚える者も多く、このまま友好関係を保つべきとの意見もある一方、信長の真の野望、天下の統一は友好ではなく従属を求めており、それが出

来ない場合は一族根絶やしのみなので戦うべしとの意見も根強く、不毛な言い争いが続いていたのである。

謙信はそのような事情を隠し、牛一を丁寧にもてなすと、信長公の意向は解ったとだけ返事をして御礼を持たせて返した。

しかし、このころ信長より先に海津城の高坂弾正昌信からも勝頼への助けと和睦を求める親書が届き、またこの頃密かに大阪の石山本願寺からも同じような親書が謙信の元に届いていたのである。

謙信は信玄亡き後、武田からの和睦があればそれに応じることを密かに決めていた。

謙信は信玄は好きではなかったが信玄が好敵手であることは認めていたからである。

弾正昌信からの手紙も今までも何度も受け取っていたが、謙信も今回は彼の悲壮感と必死の懇願を文面からも十分に感じる事が出来、彼の武田家に対する忠義を買おうと言う名分で武田家を助ける方針を明確にしたのである。

一向宗も拠点の石山本願寺や加賀方面が信長の猛攻にさらされ危機に陥り、一向宗の本願寺第十一世の顕如は今までの態度とは違って変わって謙信に和睦を請ってきたのである。

謙信も本願寺や一向衆にも散々煮え湯を飲まされてきたが個人的な憎しみの感情はなく、上洛の邪魔さえしなければ争うつもりなどなかった。

ただ加賀の一向宗が謙信の配下に入る事は信長の勢力と直接接することになり、また信長とのあつれきを生む事は間違いなかった。

謙信も信長の日の出の勢いに、自分でも単独での太刀打ちは難しいかもしれないと本心では薄々感じていたが、勝頼、本願寺を和睦す

れば信長と共有する利益など全くなかった。信長からしても自分と同盟している理由などなかった。信長から見れば服従するかしないのどちらかだけである。

信長の鉄砲隊の凄まじさは謙信も認めるところであったが、信長のやり方を謙信も快く思っていなかったので、そろそろ信長との関係も手切れでも良いかと考えていたのである。

勝てるかどうか解らなかつたが信長に一泡吹かせたいのと上洛したいとの本心もあつた。

しかしこの年の暮れ、謙信の思いをよそに武田に関して謙信の元にもまた嫌な知らせが入ってきたのである。

12月に信長は武田側の秋山信友の守る岩村城を落城させたのだが、捕らえた信友と妻で信長の叔母にあたる、おつやの方を長良川で逆さ磔で処刑したと言う。

岩村城は本来は信長の城で信玄の西上作戦時には本来の城主がいたのだが、攻城戦の最中病死してしまつたのでその妻であるおつやの方が代わりに、女城主として防戦したのだが、当時は信長が浅井朝倉や一向宗との戦いに追われ救援を出せず、更には三河の徳川家康も信玄に惨敗して孤立無援になつていたため、城兵を助けるためと信友からの求婚依頼もあつたのだが、これを受け入れ、信長の五男の坊丸（信勝）を養子（人質）として信玄に差し出し降伏、その後は武田側の城になつていたのである。長篠の戦いで武田軍本隊が惨敗すると今度は逆に武田側の岩村城は再度孤立無援になり、信長の猛攻撃の前につきに降伏落城したのだが、おつやの方の行動、信長に無断で信玄に坊丸を人質として送つた事が信長の逆鱗に触れたのだという。

坊丸は長篠の戦いの後、勝頼が信長に対する服従心を現すために無事に信長の元に送り返されたがそれでも信長の怒りは解けることは

なかつたという。

礫台の上でおつやの方が最期に放った言葉は

「信長公・・・あなたの最期は・・・あつけないものでしょうよ・・・！」

であつたと言う。

これはその後現実になるのは周知の通りである。

信長の凄まじさはこれに留まらず、朝倉氏滅亡後、信長が占領した越前では信長が指名した守護桂田長俊が越前を統治していたが、昨年、反旗を起した一向衆が長俊を殺害して、越前を占拠する事件を起こしていた。信長は長島一向一揆を殲滅させた勢いで、8月には越前に侵入、蜂起した一向宗1万人以上を討伐したと言う。捕らえた一向宗の門徒は降伏を許されず釜茹でや礫、城ごと焼き殺すなど恐ろしい方法で皆殺しにされ鎮圧され、越前は織田の猛将柴田勝家が治めることになったという。

この頃には謙信は信長の凄まじさに完全に愛想をつかし、信長との同盟関係はまだ生きていたが、手切れも時間の問題とも思っていた。

関東では北条氏政の勢力が急拡大していた。

安房の里見義堯死去後、後を継いだ義弘も北条氏から姫を受け入れ和睦を結ぶ交渉を開始し、北条家長年の憂いであつた安房方面の憂いはついに終わろうとした。

常陸の佐竹や北関東の小山、宇都宮氏は南は北条氏、北は新たに力を付けて関東に南進しようとする陸奥の葦名氏に攻め込まれ再度謙信に助けを求めている。

ただ氏政は相変わらず謙信には配慮していた。北関東の上杉側には手を出さなかつたのである。謙信に言いがかりをつけさせないのも

あるが景虎のおかげでもある。

むしろ氏政もこの頃になると西から勢力が急拡大する織田、徳川が気にかかり、間に入って緩衝材になっている武田の勢力が急速に弱体化する中、謙信との関係も再度良い方に考慮する時期に来ていることを感じていた。

氏政は信長に好を通じようと様々な工作を密かに展開していた。

謙信も同じで急激に強大化する信長に目を配るため関東より中央に目を向けざるを得ない状況になりつつあったのである。

天正4年（1576年）正月、謙信の元に信長が近江の安土に巨大な城の建築を始めているとの情報が飛び込んできた。

噂によると安土の地は琵琶湖畔にあり、水運を活用した巨大な城下町を作り、商売を発展させようという信長の方針で表向き作られていたが、実はこの城の最大の目的は京都の防衛のための重要拠点として作られ、特に今は信長の最大の障害の謙信の上洛を阻止するため作られているというのがもっぱらの噂であった。これにより信長は謙信のいかなる形の上洛にも賛成していないことが明らかになり、また信長が謙信に対して持っていた対決姿勢が次第に露になっていくのである。

2月には高坂弾正昌信の努力が実り、謙信と勝頼は和睦した。

しかし同じ頃、武田の件で謙信が介入してきている点について信長が不満に思っているとの情報も謙信に意図的にもたらされて来たのである。

続いて5月には本願寺ともついに和睦、加賀の一向宗が謙信側に付くことになり、加賀の北部も事実上謙信の勢力下に入る事になり、これにより謙信の上洛への障害は完全になくなった。都を追われた足利義昭も備後の毛利輝元の元に身を寄せていたが謙信に信長包囲網に加わるよう打診し、謙信もこれを受け入れることにしたのであ

る。

上洛に反対する信長に対して謙信も信長と対決姿勢を決意する。

大阪でも石山本願寺の救援に來た毛利の水軍が7月に織田水軍の九鬼義隆を破ったとの情報が入り、謙信もこれを好機とみて加賀に再度進軍を開始したのである。

## 七尾城

天正4年（1576年9月）、武田氏、一向宗との和睦が成立すると謙信は越中、能登の自分に反抗的な勢力を一網打尽するため越中平定作戦を発動し越中に再度侵攻、越中で謙信を悩ませていた椎名康胤を討伐した。康胤は最後は降伏したが許されずに討ち取られたという。神保長城も居城を追われどこかに落ち延びていき遂に越中は謙信により完全に平定された。

上洛を目指す謙信は11月に能登にそのままの勢いで侵入、能登の諸城を怒涛の勢いで落とし、能登の守護、畠山氏が立て籠もる七尾城を包囲した。七尾城は北国街道の交通の要衝にあり、春日山城に負けず劣らずの険しい山城である。そしてこの七尾城の城主は意外にもまだ若干5歳の幼い春王丸であった。しかし5歳の子に何も出来るはずは無く、能登の実権は守護代の長続連、綱連親子に握られていた。

能登は本来守護の畠山氏が治めていた。能登畠山氏は元は足利将軍家一門の格式ある家柄で、7代目当主の義総の時代は繁栄を謳歌し、七尾の城下町は大いに栄え、都から貴族が転居してくるほどで小京都と呼ばれていたが、義総死後は家内の権力争いでの後は没落し、能登は政情が不安定になり永禄9年（1566年）には畠山義統が長連続らのクーデターに遭い、能登を追い出されて近江に落ち延びていた。その後継には義統の孫の義慶が守護になっていたが義慶も天正2年（1574年）2月に急死していた。その後は義慶の弟の義隆が後を継いでいたが、その義隆までも天正4年（1576年）に急死、守護職を義隆の遺児の春王丸が継いでいたのである。このような今までの守護代の不自然な急死には能登国内でも畠山一族は殺されたのではないかとの噂が常々流れていた。

険しい七尾城を眺める謙信の元に上条政繁が訪れていた。

「偉大な先祖の義総公が築いた七尾城がこれほどうつつとうしく思うとは思ってもありませんでした・・・」

政繁は言った。

「今は我が一族の末路を憂うばかりでございます・・・」

政繁は小さな体を怒りで震わせながら悔しそうな顔をしていた。

七尾城は畠山義総が築いた険しい山城であるが今は越後軍に取っては巨大な邪魔な壁である。

「能登は今までも色々騒がしかったようだが・・・確かにこれは良くない話だ・・・」

謙信も政繁に同意した。

上条政繁は本名を畠山義春と言い実は畠山氏の出身である。

畠山義統の次男で5歳の時に謙信に人質として送られたものの、謙信に可愛がられ謙信の養子となり、元服後は名門上条家を継ぎ、越後軍の武将として各地を転戦していたのである。

「七尾城を落としたあかつきには長一族には厳しい仕置きを・・・」

政繁は目をつるわせながら謙信に訴えた。

「承知している・・・」

謙信も答えた。

「誰がこの城の城主にふさわしいかも私は認識している・・・いまはこの堅い山城をどうやって落とすかを考えよう・・・」

謙信の言葉を聞くと政繁の顔はみるみる笑顔になり

「はっ！この政繁、必ずや阿虎様の期待にお答えします！」  
うって変わって元気良く答えたのである。

「長続連が一揆を起こすよう、国人衆を扇動しているらしいがこれを抑えて欲しい・・・」

謙信が言うと

「連中は必ず味方にします！お任せください！」



政繁は力強く言うと、勢い良く自軍に戻っていった。

長統連が国人衆や一向衆を扇動して一揆を起こそうと画策しているのは事実であった。しかし謙信も軒猿の情報からこれを掴んでおり、越後の一向衆や政繁の働きが功を奏したのか連続たちの画策は失敗におわるのである。

「阿虎様・・・」

七尾城を囲ってしばらく経ったある日、元服した与六少年、樋口兼続が謙信の元に駆け寄ってきた。

「上条政繁の今回の活躍見事です・・・」

兼続は少し間を置いた後

「政繁殿がこちらにつけば出世は思うままと言って能登の国人衆を寄せ集めておりますが・・・」

複雑な顔で言った。

しかしそれで一揆を抑えこんだのも事実であった。

「集まった能登国人衆が領土をもらえると集まり、勝手に弥五朗（

政繁の通称）軍と名乗っているそうで・・・」

「ふうむ・・・」

「政繁殿の功は認めますが恩賞は能登国人衆ばかりでなく平等に・・・私から恐れ多いながらも越後の衆の気持ちを代弁させて頂きました・・・」

謙信も兼続の予想外に強い口調に少し回答に窮してしまったが

「・・・わかった・・・みな気持ちしかと・・・」

謙信はにこりと笑うとそのように答え、兼続を安心させた。

謙信は兼続、そして景勝については武将としての素質の良さは充分に認めていたが二人とも若年の間に越後の長年の重臣と同じ権力を持つようになっていたため、自分も若い頃そうであったが、自分以上に強権的な面もあり、二人が一部の越後衆から不評を買っている

との噂は謙信の耳にも入っていた。

謙信は兼続が去った後

(どうしたら良いものか・・・)

と黙って色々考えていたが

「何か考え事ですか？」

と、誰かの声でふと我に帰ったのである。

「厩橋城キタジヨウの北条高広が参りました！」

高広は年甲斐も無く元気良く言った。

高広は息子の景広と一緒にであった。

高広は相変わらさず

「・・・お久しぶりでございます・・・！」

高広は普段通り豪放に言った。

「・・・ふむ・・・元気そうで何より・・・」

謙信も返した。

「・・・北条ホウシヨウは大人しくしているかな？」

謙信は高広の口調に合わせるよう冗談気味に言った。

「無論であります！このワシが厩橋城にいる限りはご安心を！」

高広はがはたと豪快に笑った。

「今後もよろしく頼む・・・氏政殿の動向だけでなく関東で何かあつたら何なり連絡するよう・・・」

謙信も続いた。

「で・・・今日の用だがそなたに日頃の礼をしたいと思って・・・」

「・・・礼？」

謙信は不思議そうな表情の高広を見ながら言った。

「そなたの息子の件だが・・・」

高広は息子の景広とお互い顔を合わせた。

「畠山義隆殿の未亡人を保護している・・・差し支えなければ・・・良い女子おなこなのでそなたの息子の景広に一度紹介したいと思ってな・・・」

謙信は正直に言った。

「これはこれは・・・！」

高広は上機嫌に言った。

「ありがたき幸せ！」

景広も嬉しそうに返した。

「関東の件はそなたを頼りにしている・・・そなたは越後の番人だからな」

謙信は高広を持ち上げた。

北条高広は謙信に二度も逆らった男である。それでも二度とも最後は許してもらっている。

これはある意味、謙信と越後衆の関係は表向きは従属関係であるが、謙信もそれを強圧的に押さえ込めるだけの力があつたわけではなく、微妙な関係であつたことの裏返しでもあつた。この問題は結局謙信の代では解決せず、この後の内乱を通して皮肉にも景勝、兼統の時代によろやく強化されていくのである。

さて七尾城攻略は北陸の要衝にあり、日本でも屈指の難攻不落の山城だけあつて、さすがの謙信も正攻法では落とせないと悟り、近くに石動山城を築き、長期戦に備えたが、また同時に平和的な交渉による解決をも模索し、降伏も勧告した。

一方、七尾城の中では激しい議論が続いていた。

信長に助けを求めようとした長親子と畠山氏重臣で謙信に付こうとした遊佐続光とが激しく争つたのである。

しかし結局長親子の意見が通り、謙信と対決することが鮮明になり、こうして能登の七尾城を巡る攻防は長期化するのである。

結局睨み合いは年明け後も続き、天正5年（1577年）3月にはこの頃、石動山城に直江景綱の娘、お舟が、夫の信綱と共に甲冑を来て参陣して来た。景綱がこの頃病氣にかかり、参戦出来なくなり

代わりに来たのだという。景綱は男子に恵まれず、娘のお舟の方に総社長尾家の信綱が嫁ぎ、直江家を相続していたが、お舟の方も直江家の娘と言う気負いから雑刀に甲冑を着込んで勇ましい格好で乗り込んできたのである。お舟の方は直江の名門の娘と言う気負いから勝気で負けず嫌いな20歳の快活な女子で、若い頃の若干大人しげな謙信と違ったが謙信も昔の自分を思い出してしまった。

ただ謙信はお舟の気持ちは充分買ったものの、景綱の看病を優先するようにと春日山城に帰すことにしたのである。

お舟が春日山城に戻ってしばらくして、謙信の元に残念な知らせが入った。

景綱は結局その後も病状回復せず、間もなく亡くなったのである。しかし、景綱の残した功績が大きかったのもあるが、それ以上にお舟も謙信に可愛がられ、この後も景勝時代も樋口（直江）兼続と共に活躍するのである。

春になると再度北条軍の動きが関東で見られるとの事で結局謙信は一旦七尾城の包囲を解き、春日山城に撤退することにした。

その間に再度能登の諸城は畠山氏側に寝返ったが、足利義昭や毛利輝元からの上洛を促す親書もあり、また、義昭も信長に対抗するため甲相越一和、謙信、甲斐の武田、相模の北条による停戦を求め、両者争いをやめて一旦休戦するという意味では効力を発揮し、北条側の動きが再度静まると、謙信は7月に再度能登に進軍、能登の諸城を再度奪還し、七尾城を再び包囲するのである。

七尾城でも謙信の動きを事前に察し、奪い返した能登の諸城を早々と放棄し、再度七尾城に引き籠もったのである。

七尾城には兵士だけでなく、畠山氏寄りの国人衆や一向宗、農民も無理矢理籠ったため1万5千の大人数が引き籠もり、さすがの謙信

も手が出せないはずであった。

そしてこのとき長統連は密かに息子の連龍を信長に送り、援軍を求めたのである。

連龍からの援軍要請に信長は密かに散々迷ったが遂に決心した。

七尾城救援のため大軍を送ることにしたのである。

これは謙信との完全な手切れを意味していた。

信長は家臣団の前で敵は謙信と明言し、謙信を討ち取った者は出世は思うままとまで約束したのである。

しかし、意外な事に今回信長は自らは出陣しないことになった。自分が出陣すると石山本願寺が何をしでかすか分からないというのが表向きの理由であった。

今回の七尾城救援軍は信長の家臣団でも精鋭とも言える、柴田勝家を総大将に羽柴秀吉、滝川一益、丹羽長秀、前田利家、佐々成政たちの3万と言う大軍を動員、七尾城救援に向かわせることにしたのである。

信長が七尾城救援に来るとの連絡は謙信にもすぐにもたらされた。しかも3万という越後軍の倍以上の大軍を動員し、武田軍を壊滅させた自慢の鉄砲隊を今回も大量に動員しているとの情報で、越後側はみな恐れをなしていた。

「早めに手を打たないと七尾城の守備隊と織田軍に挟み撃ちにされます・・・」

景勝が珍しく少し不安そうに言ったが、しかし謙信は一人落ち着き払っていた。

「七尾城から眺める景色はたいそう美しいそうだな・・・」  
謙信は嬉しそうに言った。

「・・・いざとなったら 私の首を差し出せば信長公も許してくれる

のではないかな・・・？」

謙信は冗談とも本気とも付かぬことを言った。

「阿虎様・・・ご冗談を・・・信長はそんな生優しい人間ではありませんせん・・・ここにいらっしゃるみんなの首をよこせと言うに決まっています！」

兼続が真顔で言った。

「女だろつと容赦しませんぞ・・・あやつは・・・叔母のおつやの方を何のためらいも無く磔にするくらいですから・・・」

本庄実乃も警戒心を露にしていた。

「・・・さすが 霸王だな・・・それは困ったな・・・では丁重に尾張に帰ってもらおうか・・・」

謙信はにこやかな表情のままであった。

一同謙信が何を考えているのか解らず、啞然としていた。

越後の虎(前書き)

2011/7/10 第3話「初陣」 第4話「老兵」若干修正し  
ました

## 越後の虎

柴田勝家の居城、越前北ノ庄城に一旦集結した織田軍の大部隊は編隊を整えた後、9月になると一路北陸路を北進し七尾城救援に向かった。

織田軍の戦力は3万と上杉軍の倍以上の戦力で、武田軍を打ち破った自慢の鉄砲隊も含まれてみな意気揚々と進軍するはずであった。しかし、いきなり総大将の柴田勝家と羽柴秀吉が戦法に関しての些細な件から口論になり、秀吉は軍を引き上げてしまったのである。

「全く・・・サルめ・・・調子に乗りおって・・・」

勝家は憮然としていた。

「信長様に連絡して厳しく処置してもらいましょう！」

勝家の重臣の佐久間盛昌は大声でまくし立てた。

「・・・まあ・・・良い・・・」

勝家は言った。

「サルの部隊が居なくいてもこの鬼柴田が謙信如き打ち破ってくれるわ・・・」

勝家は憮然とした表情のまま言った。

「手柄も我等の者・・・」

小声で勝家のおいの柴田勝豊も言った。

「しかし・・・女だからって油断するなよ・・・」

勝家は慎重に率直に言った。

「・・・今まで二度しか負けたことが無いらしい・・・何をしてくるか解らん・・・慎重に行くぞ・・・」

勝家は出陣前の宴の時の信長の顔を思い出していた。

信長は表向きは上機嫌の時の信長らしく

「・・・嫁に行き損ねた姫など恐れるに足らず・・・鉄砲隊で粉碎して



「くれよう！」

とみんなを笑わせておどけてみせて

「・・・いやあ〜ワシも一度謙信公を見てみたかったの〜首で我慢するかの〜」

とそれに対して調子に乗る秀吉を思い出していたが

「総大将は・・・柴田勝家！」

と信長が自分を指名してくれた時の秀吉の予想外で珍しく不服そうな顔も思い出し、今回の秀吉との口論の前哨をも思っていた。

宴の後、信長が密かに自分に声をかけ

「・・・勝家・・・姫大将とは言え・・・絶対に油断するなよ・・・！」

と、信長にしては珍しく少し緊張気味の険しい表情をも思いついていた。

「どう戦う？」

佐々成政が聞いてきた。

「七尾城に入る振りをして迎撃に来る連中を長篠のように迎え撃ちたいが・・・」

勝家は言ったが

「ま、一旦手前の松任城に籠って様子を見よう・・・向こうが諦めて引き上げてくれれば良い・・・」

北を見ながら言った。

「それが無難じゃろうな・・・謙信が引き上げればよしじゃ・・・七尾城の包囲を解けばよしじゃ・・・」

滝川一益も言った。彼らも謙信の恐ろしさは充分に警戒していたのである。

織田軍は加賀国に入り、手取川ようやくを渡り、松任城のすぐ傍まで来ていた。

七尾城までおよそ100kmとあと5日で到着する距離までやって

きた。

「ここで休むか・・・」

勝家は命令した。

大軍であるため橋の無い河川の渡るのは一苦勞である。橋はあるはずであったが、おそらく謙信の手下の者に足止めのために破壊されたのであろう。

本来は松任城まで行きたかったが日も暮れてきており、渡河で兵が疲労していたので陣を張って休むことにしたのである。

「明日は松任城に入る。今晚は最期の野営だ。」

勝家は疲れきっていた足軽たちに声をかけた。

「やつと松任城か」

足軽達は重い鉄砲の装備を降ろすと安堵して皆横になって各々休みだした。

「それにしてもさすが 七尾城・・・謙信を手こずらせるとはな・・・」  
勝家もごろりと座床に横になり体を休めた。

その日の晩、七尾城の偵察に行つた偵察部隊の兵士から予想外の連絡が来たのである。

七尾城に行つた偵察兵が戻つて来ていないと言う。

勝家は嫌な予感がしていた。

松任城に連絡を入れ、七尾城の情報を提供するよう要請した。

「まさか 七尾城が落城しているわけはなからう・・・」

勝家は独り言のように言った。

「なら好都合では・・・？あの堅い七尾城を力づくで落としているなら謙信はかなり消耗しているのでは・・・？」

佐々成政が言った。

「・・・うむ・・・それはそうだが・・・」

勝家らしくなく齒切れが悪く言った。

その日の深夜、偵察兵が慌てて勝家の元に転がり込んできた。勝家は報告を聞いて仰天した。

七尾城は既に落城した模様。松任城も上杉軍の手に落ちていると言う。

「松任城まで落ちた？そんな馬鹿な！」

勝家は思わず声を荒げてしまった。何が起きているのか勝家は理解できなかった。

七尾城内では信長派の長連続、綱連親子と謙信派の遊佐続光が今後の方針を巡り激しく争い、結局は長親子の意見が通り、信長に組むことになったがこの年、七尾城では疫病が流行し、多くの城兵が病死、更に城主の春王丸まで病死してしまい、城内は厭戦気分が蔓延していた。

謙信もしきりに降伏を勧告していたが長親子は信長の援軍を期待して抵抗を続けていたが、遊佐続光が謙信の誘いに乗り、遂に城内で反乱を起して長親子を含む長一族を殺害、こうして七尾城は開城していたのである。

謙信は信玄顔負けの謀略戦を展開したのであった。

七尾城を落とした謙信はすぐに南下し、織田軍の偵察兵を討ち、情報を遮断しながら南下、織田軍が七尾城落城を知らないうちに松任城を落としたのである。

「どうします？」

佐久間盛昌が不安そうに聞いてきた。

勝家はしばらく黙っていたが

「・・・ここで陣を作って迎え撃つか？」

成政が聞いてきた。

「背水の陣か・・・」

勝家は腕を組みながら頭を悩ませていた。

手取川を背に排水の陣を敷き、長篠の再現である。  
鉄砲隊で向かってくる上杉軍を必死に撃ちまくるのである。

その頃謙信は松任城の外にいた。

「兵は疲れているかな？」

謙信は声をかけてみた。

「七尾城では包囲している間ずっと休んでましたからな・・・大丈夫です！」

河田長親が力強く言った。

遠くで織田軍の篝火がぼつぼつと見えた。

謙信はうなずくと空を見た。

遠くで雷鳴が轟き雷光が夜雲を青白く照らし、湿度を大量に含んだ生温かい風が吹いていた。

「・・・好機・・・」

謙信はうなずいた。

「・・・好機?・・・」

景勝が思わずつぶやいた。

「すぐに出陣を！」

謙信が命令を出した。

「夜襲ですね？」

景勝の寵臣となった樋口兼続が嬉しそうに言った。

「・・・ただの夜襲では無いぞ・・・ふふふ」

謙信は言った。

勝家がどうするか迷っている間、遠くにあつた雷鳴がいつの間にかこちらまでやってきて激しい雨と雷が落ち始めた。

「天候にも歓迎されておらんな・・・」

滝川一益が冗談気に言った。

「ま・・・こんだけ派手に降れば向こうも動けんだろ・・・」

前田利家が空を見ながら言った。

「うむ・・・そうだが・・・うむ・・・」

勝家はまだ悩んでいた。

しかし大粒の雨を見ながら

「・・・撤退するか・・・」

方針を決めたのである。

「え？今から？」

利家は驚きの声をあげた。

勝家はうなずいた。

「いやな予感がする・・・」

正直に言った。

「確かに雨で鉄砲が使えん時に襲われたら終わりじゃ・・・」

一益が恨めしそくに雨を見ながら言った。

しかしその時、雷や雨音に混じって何か叫び声や刀の鈍い音が聞こえてきたような気がした。

「・・・まさか・・・」

勝家だけでなく、そこにいた一同みな血の気が引くような気がした。それは幻聴ではなく事実であった。

勝家の不安は的中した。

「大変です！上杉軍が！」

足軽兵が慌てて本陣に飛び込んできた。

「何！夜襲か！」

勝家は声を裏返してしまった。

いやな予感は的中したのである。

「全員起せ！隊列整え反撃せい！」

勝家が命令を飛ばすと

「鉄砲が雨で使えませぬ！」

足軽は泣き言を言った。

「鉄砲に頼るな！腰にぶら下げているのは飾りか！槍や太刀で反撃せい！」

勝家が足軽を怒鳴り飛ばした。

織田軍自慢の鉄砲隊は雨でろくに反撃ができず、また、足軽兵はまだ遙か遠方の七尾城に居ると思つた上杉軍の予想外の夜襲で大混乱に陥っていた。

勝家はすぐに武具を整えると自ら騎馬に飛び乗り前線に出た。

「ワシに続け！」

鬼柴田と言われる勝家だけあつてすぐに自らの危険を省みず前線に飛び出し、上杉兵を一人長槍で討ち取つた。しかし周囲は雨と夜半で暗くて見通しが利かず状態はさっぱり分からなかつたが、勝家の本陣近くまで上杉軍が接近しているということ味方は完全に劣勢であるのは明らかであつた。

「・・・こつちの方が戦力は上じゃ！隊列整え！ひるむな！」

勝家自ら大声で命令した。

「勝家様を中心に隊列を整え！」

利家も雨や雷鳴に逆らうよう大声を出した。

その時であつた。

「勝家様・・・あれを・・・」

勝家の傍にいた足軽兵の一人が真正面に立つ、不思議ないでたちの騎馬武者を指差した。

その声や指は少し震えていた。

雨が降り雷鳴が轟き雷光が闇夜を走る中、一騎の騎馬が雷光に照らし出された。

毘沙門天の旗を掲げ純白の行人包みと黒い僧装束に銀色の甲冑を着た少し小柄な武将が勝家の目の前に雷光に照らし出されていた。顔は見えなかったが勝家もそれが誰かすぐにわかった。

「ひるむな！」

その人物は高い声を出した。

明らかに男性では無い声であった。

その人物が振り上げた大太刀が青い雷光を浴びて怪しく光っていた。謙信が何と目の前にいたのである。

「我は毘沙門天の使い！鉄砲が使えない織田軍など恐れるに足らず！叩き潰せ！」

謙信は通る声で命令を飛ばした。

「こしゃくな・・・！」

勝家は思わず歯ぎしりをたてた。しかし足軽たちの反応は違った。

「・・・て 鉄砲が使えない・・・！」

雨で鉄砲が使えない足軽兵は恐怖におのき我先に後退を始めたのである。

「敵前で逃げる奴がおるか・・・！」

勝家は後退を始めた足軽たちを叱り飛ばしたが、士気ががた落ちで勝家も不利を悟らずには入れなかつた。

「やむをえん！全軍後退！小松城に入れ！籠城戦だ！」

勝家は命令した。

「逃げる！小松城だ！」

足軽兵は鉄砲を放り出すと我先に逃げ出した。

「敵が後退を！追撃許可を！」

謙信の元に景勝、兼続が飛んできて許可を求めた。

「川には入るな！敵命せよ！」

謙信は命令した。

「川・・・？」

兼続が不思議そうな顔をした。

「川岸まで追い立てれば良い・・・」

謙信は穏やかな表情で言った。

「はっ・・・！」

不思議そうな顔の兼続を横目に景勝はすぐに返答した。

織田軍の足軽兵は手取川の川岸に到達すると我先に川に飛び込んで対岸のはるか先にある小松城を目指した。

しかし雨で川は増水していて濁流と化していたのである。

「・・・おわあ！溺れる・・・！助けてくれ！」

川に飛び込んだ織田兵は次々と濁流に飲み込まれていった。

泳げないものはそのまま暗闇の河に次々と飲まれていったのである。

謙信が深追いを禁じたのは濁流に飲まれないためである。

戦いは夜明け前には決着が付き、夜が明けるとうつすらと太陽の光が指し、陽光に照らされた付近や手取川の中には織田兵の遺体や残した鉄砲、武具が散らばり、信長との最初の一戦は謙信の大勝利に終わった。

「・・・意外と大したことなかったな・・・」

謙信は言った。

「しかし・・・何と早い逃げ足・・・」

謙信は妙な警戒感を織田軍に感じた。

今までの敵とは違うと感じたのである。

「残存部隊は小松城に後退したようですが・・・」



近づいてきた兼続が言った。

謙信はしばらく黙った後

「深追いは危険だ・・それこそ鉄砲隊の餌食になる・・撤退する」  
全軍春日山城への後退を明言した。

手取川での大敗の報を聞いて岐阜城で信長は怒りを爆発させていた。しかしその矛先は勝家ではなく、混乱の原因を招いた秀吉に向けられていた。

秀吉は危うく信長に成敗されそうになったほどである。

信長大敗の噂は直ぐに広まった。

謙信が大軍を率いて上洛するという噂で京都はもちきりであった。

そしてその頃信長に反旗を翻した男がいた。

あの松永久秀が反旗を翻したのである。久秀は謙信の上洛を見越して動いたのかもしれない。

しかし謙信はこの年、軍を南下させることなく、春日山城に戻ってしまったのである。

信長の危機を救ったのはあの秀吉であった。すぐに無傷の自軍を征伐軍として派遣、信長の息子、信忠と共に久秀を攻撃、久秀は孤立無援となり居城の多聞山城を包囲され名茶器、平蜘蛛に火薬を詰め、自爆して果てたと言う。

久秀は謙信が救援に來なかつた事が理解できなかつたのかもしれない。しかし謙信は將軍義輝を殺した久秀を義昭のためとはいえ許すつもりもなく、一緒に作戦をとるつもりも無かつたのかもしれない。久秀が信長に反旗を翻し、返り討ちにあつたとの報告を謙信は表情を変えることなく聞いていた。

## 越後の虎（後書き）

今までのご愛読、お付き合いありがとうございます。ようやくです  
が次回が最終回になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3413i/>

---

越後の虎

2011年9月3日01時42分発行